吸血鬼(バンパイア)ハンター"D"読本
朝日ソノラマ編集部・編

吸血鬼(バンパイア)ハンター“D”読本
朝日ソノラマ編集部・編

吸血鬼(バンパイア)ハンター"D"読本

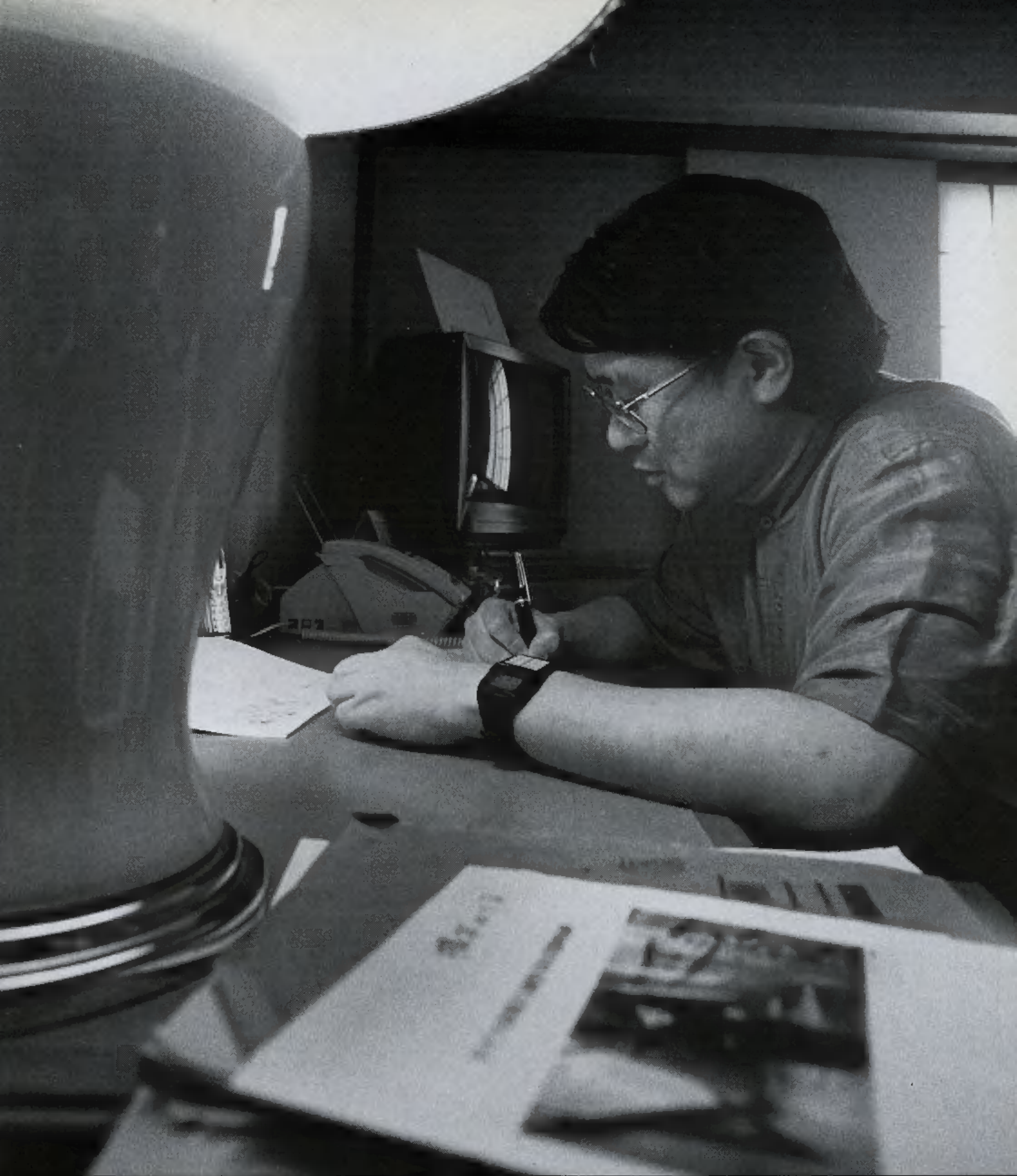
朝日ソノラマ編集部・編

朝日ソノラマ

天野喜孝「D-邪王星団」より

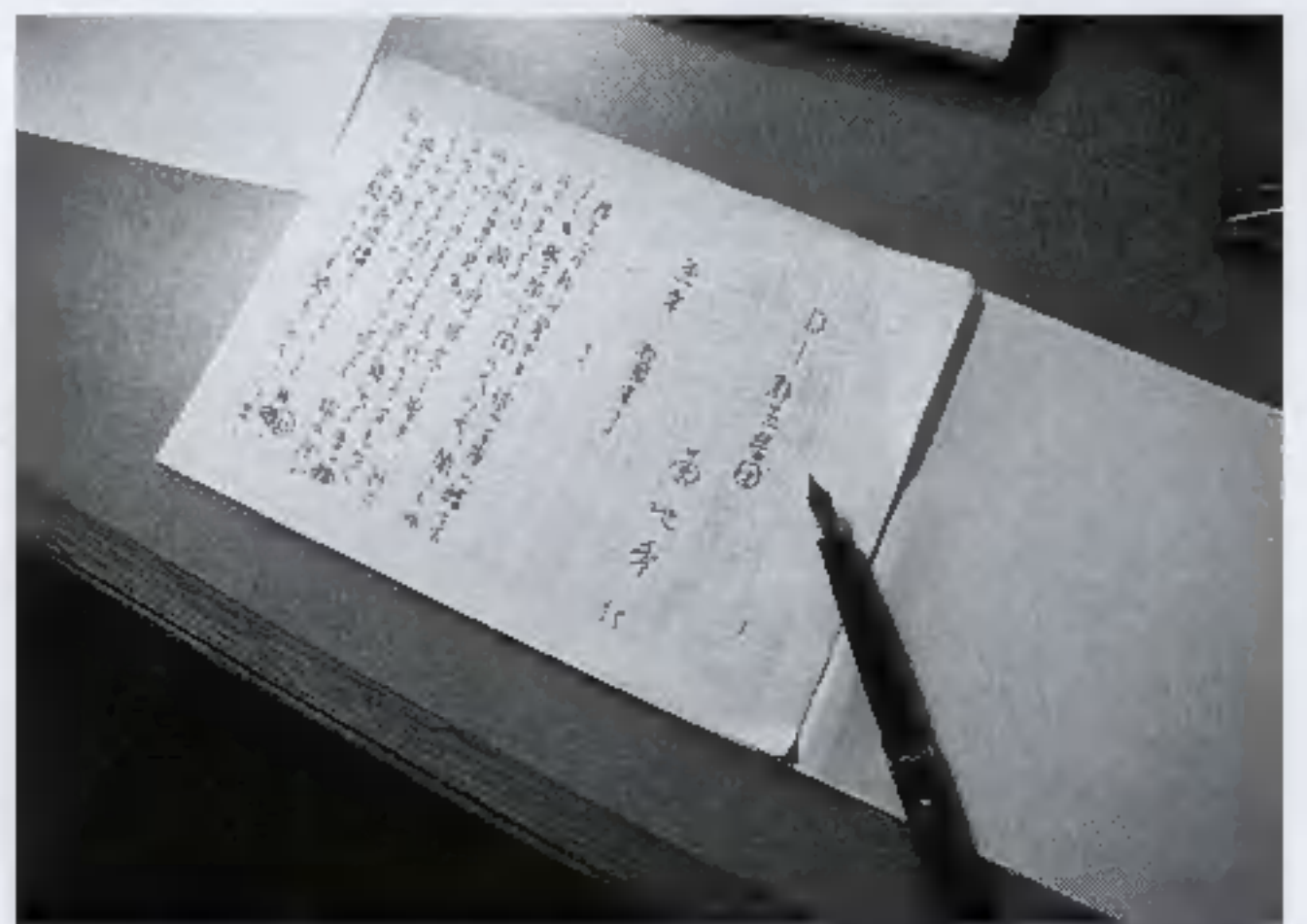
"D"を書く

菊地秀行

撮影＝飯塚康行
添文＝品川四郎

1982年の作家デビュー以来、今年で作家生活19年、数えでいけば、すでに20年。
その間の著作数は200冊に迫る勢いだ。『魔界都市《新宿》』の翌年に登場した
『吸血鬼ハンター“D”』のシリーズも、刊行中の『邪王星団』で長篇第12作目。
『蒼白き堕天使』がスタートした頃からの懸案だった『妖殺行』の映画版もようやく完成、
そのクオリティの高さも手伝って、執筆は快調に進む。
古くは『死街譚』で口述筆記を経験したこともある東京・銀座のホテルに氏自らこもって、
今日も“D”は黙々と書き継がれる。

インクの補充。手書き原稿は処女作以来の伝統。

担当Ｉ氏のツッコミに苦笑。Ｉ氏との付き合いも足掛け20年になる。

「隣のビルの会社の様子がよく見えるんですよ。朝の出勤時とか、お昼どきとかね」
思わず『裏窓』気分で希薄になりがちな時間感覚を補う。

執筆快調の『邪王星団』は怒濤の勢いで2001年４月には完結巻となる四巻目を脱稿。しかし、一巻目もここでスタートし、長い間〝D〟を育んできた銀座東急ホテルは同年１月に閉館されてしまった。

（平成十二年五月二十八日　銀座東急ホテル861号室にて撮影）

吸血鬼（バンパイア）ハンター“D”読本
朝日ソノラマ編集部・編

はじめに

菊地秀行

〝D〟シリーズ第一作『吸血鬼ハンター〝D〟』は83年1月に刊行された。処女作「魔界都市〈新宿〉」に次ぐ第二作のテーマに吸血鬼を選んだのは、ハマー・フィルムの『吸血鬼ドラキュラ』(58)以来、私の精神の中に連綿と流れる闇の貴公子のイメージを、何とか小説に定着させたいと思ったためである。ところで、私は長いこと、あるジレンマに悩まされてきた。つまり、吸血鬼とは斃(たお)すべき悪でありながら、こんなカッコいいヤツはいないぜ、という矛盾である。

『吸血鬼ハンター〝D〟』のときも、これにモロぶつかった。吸血鬼は斃されなければならない。これが大前提である。人間と仲良く共存する吸血鬼——SFならいいテーマかも知れないが、私の書くものではあるまい。

となると、彼らを滅ぼすヒーローが必要だが、これも吸血鬼にしたかった。彼こそ私のヒーローだったからである。

吸血鬼が吸血鬼を退治する——これでジレンマは呆気なく解決したものの、同族同士の争いでは、ヒーローが目立たなくなってしまう怖れがある。読者に

とっても、所詮、別の生きものの話で、感情移入がしづらいだろう。読者に無関係なヒーローの物語を、いつまでも読んでもらえるとは思えない。
かくしてDは、人間と吸血鬼との混血になった。この〝ダンピール〟が、最高の吸血鬼ハンターだという、以前読んだ記述も参考になった。
そして、人間であって人間に非ざる者を表現するため、私は彼に人外の美貌と強さを与えた。
ただし、シリーズもののヒーローが成立するためには、弱点も必要である。Dもまた時として人間の血への渇望に身を灼き、陽光の下で体調不良に陥ってしまう。このあたりは読者の皆さんの支持を受けたようだ。
Dの旅には実はある目的がある。その断片は作中にふり撒いてきたが、まだまだ真相を明らかにするには遠い。その遠い日の最後の光景は、すでに私の脳裡にある。
後はいつ訪れるか、だ。
少なくともその日まで、Dの夜の旅は——おかしな言い方だが——果てしなく続くだろう。

Dの左手——〈吸血鬼ハンター"D"〉のこと

Dとは何者か。
これは、八十年代からわれわれをやきもきさせる大問題のひとつである。彼はどこからきたのか。どこへいくのか。彼の目的は、いったいなにか? いまだ明かされることのない、凍結された過去を持ち、見る人の心を引き留めずにはいられない長身痩軀の美貌のハンター。
魅力的で謎めいたDは、今日も辺境を彷徨しているのだろうか。彼の過去や秘密が明かされる日は来るのだろうか。明かされたその日には、なにが待っているのだろう。

こたに・まり
評論家。94年、SF評論集『女性状無意識（テクノガイネーシス）』（勁草書房）を上梓、94年度日本SF大賞を受賞。著書に『聖母エヴァンゲリオン』（マガジンハウス）、共訳書にダナ・ハラウエイ『サイボーグ・フェミニズム』（トレヴィル）がある。

Dは、ダンディのD

菊地秀行といえば、「吸血鬼」である。
思わずそう断定してしまいたくなるほど、彼の吸血鬼作品は、魅力的である。彼自身、巻末のあとがきでよくよく話題にしているように、吸血鬼というモティーフに特別の思い入れがあるらしい。怪奇幻想怪物映画の古典作品のコレクターとしてあまねく知られている菊地氏は、あとがきを読んでいると、とくに二十世紀初頭に活躍した怪物映画俳優ベラ・ルゴシの熱烈なファンだということがよくわかる。
現在、吸血鬼といったらパッと思い浮かぶのは、アイルランド作家ブラム・ストーカー作『吸血鬼ドラキュラ』だが、ストーカー版の吸血鬼ドラキュラ伯爵様は描写を熟読するかぎりにおいては、あんまりファッショナブルだったとはいいがたい。どっちかというと、東欧というヨーロッ

パの辺境からやってきた田舎大名といった感じだ。
それではどこで、夜会服のリッチな男というイメージができあがったのか。
マシュー・バンソンの『吸血鬼の事典』(青土社)は、その内容のおもしろさと情報量の豊富さからわが愛読書としてずいぶん活用させていただいているが、吸血鬼のファッションについても、ちゃんと言及している。
たとえば、われわれがよく知っている、というか具体的なイメージとして思い浮かべる吸血鬼のコスチュームは、『吸血鬼ドラキュラ』が舞台化・映画化される過程で編み出され、怪物俳優ベラ・ルゴシがその麗しい姿をスクリーンで最初に演じたのがきっかけで広まったのだという。菊地秀行氏をトリコにし、そして、本シリーズのヒーロー〝D〟が生み出されたきっかけにもなったベラ・ルゴシは、亡くなったときにも吸血鬼俳優らしく吸血鬼の必需品である黒のケープに包まれて埋葬されたそうであるが、彼に続く役者たち、クリストファー・リーから極東の国で演じる平幹二郎まで、吸血鬼といえば黒の夜会服にケープ。背が高く痩身で貴族的風貌は当然といった、高貴なイメージに包まれている。

吸血鬼文学としての個性——Dの設定

吸血鬼すなわち美しいものというイメージを最大限に引

吸血鬼は二十世紀末に近づけば近づくほど人気がうなぎのぼり。十九世紀に生み出された三大怪物(吸血鬼・狼男・フランケンシュタイン)のうち、他のふたつをはるかに引き離して、抜群に好まれているのは、おそらくこういうお洒落でナイスなイメージがあるからかもしれない。本シリーズの主人公である吸血鬼ハンター〝D〟も、そうした映画版の貴公子型を踏襲してめっぽう格好いい。
黒ずくめの衣装。長身痩軀で口数が少なく、めちゃくちゃ強い! そしてこの世のものとも思えぬほどの美しい若者。このたび、二十一世紀の最初の春に日本で公開されたアニメ版『バンパイアハンターD』のパイロット版を某所で見たら、これが妖精王子のように神々しいお姿で、思わず拝んでしまおうかと思ったほどだった。なにしろ、本書の挿し絵で活躍している天野喜孝氏のイラストがそのまま動いているかのような感じなのだ。美しくて繊細で、でも風景描写のゴージャスな雰囲気は、これまたゴシック度満点なのであった。それにしても、あの繊細なイラスト世界が、重厚な雰囲気をまったく壊さぬまま、緻密な物語を展開するなんて、まったくすごい時代になったものである。

き延ばし、美男の徹底ぶりが少女漫画をも凌駕するような

Dの物語は、吸血鬼文学として、相当個性的である。

もともと吸血鬼という怪物像は、十九世紀の初め頃、英国詩人のバイロン卿の主治医ジョン・ポリドリが書き下ろした短編「吸血鬼」を嚆矢とするようだ。当時ハンサムで才能があって男にも女にもモテたバイロンは、斜に構えて社会批判を堂々とする悪魔的知性の持ち主。そんな彼をモデルに、ポリドリは人々をもてあそびながら破滅させる吸血鬼像をルスブン卿として描いたのだった。

社交界の有名人バイロンのモデル小説というだけでも、当時の道徳観では相当インモラルでスキャンダラスであったのは当然だが、作者が実はバイロンだったというデマも手伝い、吸血鬼すなわち美貌の悪魔的プレイボーイという図式が十九世紀を通じてヒットし、舞台などで一般化する。しかし十九世紀末、一八九七年にブラム・ストーカー『吸血鬼ドラキュラ』という吸血鬼小説の決定版が出てみると、吸血鬼は強くて邪悪な怪物というイメージに塗り替えられる。とくにストーカー版の画期的な部分は、科学者ヴァン・ヘルシングという吸血鬼の敵役を作り出し、吸血鬼文学のなかに怪物退治という闘争的な要素を持ち込んだことである。かくして、ここに吸血鬼vs.ハンターの不滅の闘いの歴史が幕をあける。

その後、吸血鬼小説の系譜は二十世紀に作られた映画世界によってあまりにも有名になり、特に五十年代よりイギリスのハマー・プロダクションという怪物映画専門の製作所で作られた作品は、怪物退治が激化（？）して、吸血鬼ドラキュラ伯爵を演じるクリストファー・リーも、冷酷なハンターを演じるピーター・カッシングも、どっちがどっちを演じてもおかしくない残酷俳優コンビとして一世を風靡する。

もともと吸血鬼とハンターの関係は、ミステリにおける犯人と探偵のように、どこかで犯罪性を共有しているものだ。一見、善対悪という対照的な役割を振られている怪物とハンターだが、ハンターは怪物のことを理解していなければ捕獲退治できない――すなわち一歩まちがえば怪物になっていたかもしれない――そんな心の闇を持っている。こうした追うものと追われるものとの間の絆は、今日たとえばサイコものや多重人格ものに数多く描かれてさほど珍しいものといえなくなってしまったが、翻って吸血鬼とハンターの場合、両方の役割を合体させるというDのような設定はあまり類例がなく、これはまことに画期的な発明であったと思う。

七十年代以降の海外の吸血鬼文学は、大きくふたつの流れに分かれている。あくまで吸血鬼を怪物、つまり悪として描いていくものと、吸血鬼という種族に女性や有色人やゲイといった社会的なマイノリティの立場を重ね合わせて、人間文明における他者とはなにかといった問題を提示して吸血鬼＝悩める他者像として描く傾向のものと、そのふたつだ。前者の代表は、スティーヴン・キングの『呪われた

町』だし、後者の代表はアン・ライスの『夜明けのヴァンパイア』だろう。

七十年代以降活発化する日本の吸血鬼文学には、どちらかというと吸血鬼という怪物たち、つまり他者たちの種族的な葛藤を描いたものも多くて、萩尾望都『ポーの一族』や半村良『石の血脈』、それに笠井潔『ヴァンパイヤー戦争』といった代表的な作品は、いずれも吸血鬼という種族の心理的な問題にまで踏み込みながら物語を展開している。

こうして見ていくと、〈吸血鬼ハンター〝D〟〉のシリーズは、吸血鬼と人間という狭間におかれた混血種を主人公にすえている点で、より吸血鬼像の内部に入り込んでいて、他に類を見ない独特の物語を作っていると思う。

どうして、このようなユニークな設定ができあがったのか、たいへん興味深いところだ。創造過程での理由はいろいろあるのだろうが、このDというキャラクター造型の背景に、ひとつの同時代性を重ねて注目してみるというのは、あながち的はずれではないと思う。

新宿論と混血論——都市・身体・吸血鬼

わたしはかつて〈吸血鬼ハンター〝D〟〉と前後して開始された長大シリーズ〈魔界都市・新宿〉について、その作品が新宿をめぐる独特の都市論を展開した作品だと論じたことがある。〈魔界都市〉に描かれた「新宿」は、八十年代の都市論を鋭角的に示すような内容だった。六十年代から七十年代にかけてだんぜん若者文化の中心地で風俗や流行の先端だった新宿は、八十年代にはいるとその地位を「渋谷」に明け渡してしまう。七十年代の風景をのこしたまま、つまりそこだけ時が止まったかのように、あいかわらずさまざまな事物を飲み込んで繁茂する七十年代的新宿を、菊地秀行はひとつの「幻想世界」に見立てる。そして、それをデモーニッシュな生命体のように描き出す。〈魔界都市・新宿〉のおもしろさは、二十世紀東京の都市の風景を、ゴシックふうな言語で変換して説明するところにある。『吸血鬼ドラキュラ』が、十九世紀の当時の先端的な都市ロンドンの風景を、中世の闇を映し出すゴシック的な言語で説明していたとするなら、〈魔界都市・新宿〉は、その系譜を継ぐ作品だと思う。そしてそれは、現実の新宿の魔性を明敏に説明づけるものであったのだ。

〈魔界都市・新宿〉は、八十年代的な都市論と密接に関わっている。幻想的作品は、時として現実世界とは無関係に発生し読み解かれていくと考えられがちだが、すぐれた幻想小説ほど、鋭い現実批評を隠し持っていることが多い。わたしが菊地作品に興味を感じるのは、まさにこの点で、

〈魔界都市・新宿〉も「街」に関する思索を積み上げる傑作だったと思う。同様に本シリーズ〈吸血鬼ハンター〉は八十年代に激変を遂げた身体論、つまり「からだ」の物語だったのではないだろうか。

というのも、物語は次のような世界背景を持っているからだ。

時は西暦一二〇九〇年——つまり気の遠くなるような遠い未来世界。Dのいる地球は、人間の文明が一九九九年に核戦争のため衰退し、かわって吸血鬼の高度ハイテク文明が勃興、宇宙へとその文明の翼をのばしたが、種それ自体の限界から人口が激減し、いままた人類たちの文明に取って代わられようかという局面に向き合っている。

そう、背景となっている世界では、吸血鬼と呼ばれる種族と人間たちと、ふたつの異なった文明が存在しているのだ。こうした世界で、人間に雇われ吸血鬼退治に奔走するハンター〝D〟は、吸血鬼と人間の間に生まれたダンピールという混血種なのである。

遺伝的に人間と吸血鬼との間に生まれたD。科学技術の粋をこらして人工的に製造された亜種。したがって、Dに代表されるような「からだ」にまつわる身体論は、遺伝的な混成種、混血といった異種混淆の世界観、つまり雑種に関する考え方を探求していたと思う。

ふたつの異なった種が対立するなかで、混血児として生を受けた子供たち。ダンピールは、両文化を行き来できるはずなのに、本書では高貴冷酷な吸血鬼の血を引きつつも、吸血鬼からは裏切り者とさげすまれ、粗野残忍な人間の血を引きつつも、人間からは悪鬼として憎悪されている。つまりいわば二重に排他的な立場におかれていた狭間の種なのだ。このどっちつかずの立場にいる孤独な存在が、Dの陰りあるヒーロー像の要因となっている。と同時に、疎外されるダンピールという混血児に焦点をあわせていけば、対立する両種の境界線に、単なる二者択一的な価値観ではない、おどろくほど豊かな両者のやりとり、すなわち両者の葛藤や共生や混合、再生にかかわる活発な文化を発見することができるのだ。それは、逆にいえば、純血種にまつわる信仰が改めて問い直されたということなのではないか。

注目すべきは、こうした混血や狭間や共生といった世界観もまた、都市論とともに八十年代に活発化した議論のひとつだったことである。そして、こうした議論の背景にはテクノロジーの発達、バイオテクノロジーやメディアテクノロジーの勃興があったのは、見逃すことができない。

人工物と人間との共生環境が、遺伝子技術とコンピュータ技術によって作りあげられていく八十年代の変貌は、そのあまりの激変ぶりから、世紀末にかけてあまたのホラー作品に結実していく。

遺伝子組み替え技術の粋をこらした食物が市場を席巻し、人工衛星が飛び、ケータイやコンピュータのメールシステムなどの通信手段が身体の一部のように入り込んでくる世

界。もはやどこまでが自然でどこからが人工物なのか判然としない雑種的な世界。完全管理体制で子供が産まれ、デジタル時計でスケジュールが動き、スポーツさえもが科学技術と絡み合った世界。そうした変化が直撃したのは、わたしたちの一番身近な身体だったと思う。

物理的な肉体性と、自己イメージとして認識される身体像がかならずしも一致しない、という状況が指摘されはじめたのもこのころだ。今ではそんなぐらぐらゆれうごく身体論はいつしか自明の風景のひとつになってしまったようだが、たとえば、八十年代ハイテクによる認識の変化を扱ったサイバーパンク系SF小説には、その具体的なイメージが数多く散見されるのである。

改めて〈吸血鬼ハンターＤ〉シリーズを読みなおしてみると、そうした異種混淆の世界がこれでもかという感じで描かれている感じがする。Ｄの真の出自はいまだ謎に包まれているが、ときおり、吸血鬼である父親と、人間である母親がいるらしいこと、なんらかのテクノロジーが関わっていることなどが断片的に明かされている。Ｄの他にも、本シリーズで描かれるさまざまな登場人物たちは、その多くが混成種の問題を抱え、そこには高度科学文明世界の繁栄をむさぼり尽くした吸血鬼たちのハイテクノロジーが関わっている。わたしが、本シリーズの作風をサイバーパンク世代のゴシック（テクノゴシック）と呼称したいのも、そんなわけがあるのである。

ともあれ〈魔界都市・新宿〉が「街」なら、〈吸血鬼ハンター〝Ｄ〟〉は「からだ」である。混血、すなわち異種混淆への思索が、さまざまなヴァリエーションで登場する、それが〈吸血鬼ハンターＤ〉シリーズのひとつのおもしろさを形作っているのではないだろうか。

異種混淆の多彩さ

では、それを念頭に置きつつ、物語のほうをすこし振り返ってみよう。

Ｄのデビュー作となった『吸血鬼ハンター〝Ｄ〟』（1983年）では、吸血鬼に襲われた娘ドリスの依頼で、リィ伯爵と闘うＤの姿が描かれている。雇い主のもとで、さまざまな冒険に遭遇していくという趣向で、毎回そうした雇い主との事件を通じ、Ｄ自身の正体の謎、そして、この不思議な未来世界の謎、そのさらなる運命が少しずつ、明かされていく。物語がはじまった当初のＤは、間違いなく孤独な旅人にふさわしい物語展開に身を置いていた。

第二作目の『風立ちて〝Ｄ〟』（1984年）では、辺境の村ツェペシュで人間と吸血鬼との間の混血種を作ろうと

する吸血鬼たちの実験と、その謎をさぐるDが描かれる。こうした実験がDの出自にかかわっていたのだろうか。はたしてその実験の背景に、約五千年前から始まった吸血鬼という種の後退がかかわっていたことが明らかにされるのである。

続く『D―妖殺行』（1985年）は、D版ロミオとジュリエットで、吸血貴族マイエルリンクと人間の娘とが恋に落ち、ふたりは宇宙へ逃げようと駆け落ちしたため、Dは娘の父に頼まれて二人を追う。通常はストイックきわまりないDが中心のためエロティシズムに欠けるのは否めないのだが、この巻は特別で、全シリーズのなかでもきわめてロマンティックではなやかな展開となった。

さらに、吸血鬼が人間貴族化のウィルスを開発、それが暴発する顛末をえがいた『D―死街譚』（1986年）、吸血鬼と人間が平和に共存する夢を見続けるシヴィルという娘の最期を追った『夢なりし“D”』（1986年）、ダンピールを身ごもった娘タエを連れて帰ろうとするダンピールのハイパー婆さんの活躍を綴った『D―聖魔遍歴』（1988年）、水中で生きるために人間の肉体を使った遺伝子混合体実験を行なう貴族とその実験の行方を追った『D―北海魔行』（1988年）と、八十年代のDシリーズは、マッドサイエンティストでもある吸血鬼たちの文明の退廃的姿と、それに関わった人間たちとの文化的混合状態に焦点が当てられている。

吸血鬼に襲われた人間が飢餓感を抱えて生きていかねばならない一方、生命力のない吸血鬼たちは、自らのサバイバルをかけて遺伝的な実験を繰りかえす。このなかで吸血鬼であること、人間であること、そして両者の狭間を生きることの意味が何度となく問い返されていく。

ここで注目されるのは、吸血鬼たちの世界に対するDの批判的なまなざしである。彼の超絶的能力は明らかに父である吸血鬼からもたらされたものなのだが、Dはそれを憎悪している節があるからだ。このへん彼の母親が人体実験に供されたせいなのか、いまだにはっきりしたことはわからない。

今は斜陽の吸血鬼の文明世界が、あちこちで綻びかけ、その矛盾点の結晶であるかのようなDが次々と、それを葬っていく。自分の身内を手に掛けるといっても過言ではないD。そして旅すれば旅するほど、華麗なまでにその栄華の時の爛熟ぶりが偲ばれる吸血鬼世界。八十年代を通じて、人間の雇い主とともにそれらの世界への滅びの序曲を奏でていたDは両者の間をゆれながら、共存不可能性と直面する。だから、八十年代のDは孤独の色が濃い。

しかし、そんな彼にもやがて単に両者の間を振り子のようにゆれながら、境界線上にたちつくすという単純な構図にはおさまりきらなくなる時がきた。世界がより複雑な様相を表しはじめ、特に吸血鬼世界への関心が示されていったせいか、短編集『昏い夜想曲』をはさんで、九十年代に

再開されたDの物語は、Dと対等の関係性をもつ人物像が次々と描かれていくことになる。

とくにより吸血鬼世界へと接近し、吸血鬼が単なる悪ではなく、時によっては魅力的な人物像として描かれ、Dもまた彼らとの間に奇妙な絆を結ぶといった展開になる。たとえば、死に場所を求める貴族の姫と四人の騎士たちの壮絶なバトルに焦点をあてた『D―薔薇姫』（1994年）、貴族でありながらDを雇い、ともに冒険世界に出かけていく憎めない魅力的なバラージュ男爵との旅を活写する『D―蒼白き堕天使』1~4巻（1995-6）、Dと同じ実験室で生まれたもうひとりのD'との愛と相克の冒険を描いた『D―双影の騎士』1~2巻（1996-97）、辺境の商工ギルド輸送隊との忘れられない旅となった『D―ダーク・ロード』1~3巻（1999）、そして、宇宙から帰還した吸血貴族が登場する『D―邪王星団』（2000-2001）と、矢継ぎ早に登場する長編は、八十年代のようにDが共同体から疎外された他者としてのみ存在するのではなく、吸血鬼／人間間の関わりに翻弄された人々のつながりのなかでその存在が受け止められているというニュアンスを強く持つようになるのだ。これは、Dの性格の変化と同様、目がはなせない部分だと思う。

Dはドラキュラの D

とはいえ、Dは、なにを考えているのかよくわからない人物である。

容姿端麗、才色兼備の完璧な人物であり、それは非現実的な色彩を帯びている。でも、実際には完璧なキャラクターほどおもろしみに欠けるものはない。どちらかといえば、それは神話的な造形といってさしつかえないものであろう。神に近い造形であれば、なにをするのかまず予測がつかない。感情移入しにくい、つまりなにを考えているのかつかまえにくい。だからこそというか、そうした取り澄ました高貴なお嬢様といった風情のDのからだには、あのように、ちょっと信じられないような秘密が隠されていたのではなかろうか。

そう。左手の存在である。この左手、人面瘡というべきなのだろうか、口数の少ない潔癖な彼にはまったくミスマッチな、口うるさい爺さんのような人相風体でありながら、その麗しい彼と合体してしまっている左手。これはいったいどうしたことか!?

世にもうるわしい絶世の美男が欠損した肉体の持ち主でもあるという設定に加えて、その亀裂の入った身体に、どういうわけだかへんな爺さん顔の人面瘡が生えているとい

うのは、あまりといえばあまりの衝撃であろう。

これは、はっきりいって、斬新すぎる設定である。しかし振り返ってみると、なぜか菊地秀行作品の美男は、その手のギャグが挟み込まれている場合が多くて、《魔界都市》シリーズでも、その中核をなす必殺捜し人・秋せつらなどは、人の子とも思えぬほどの麗人、そして冷酷な殺し屋なのに、本業はのどかな「せんべい屋」である。

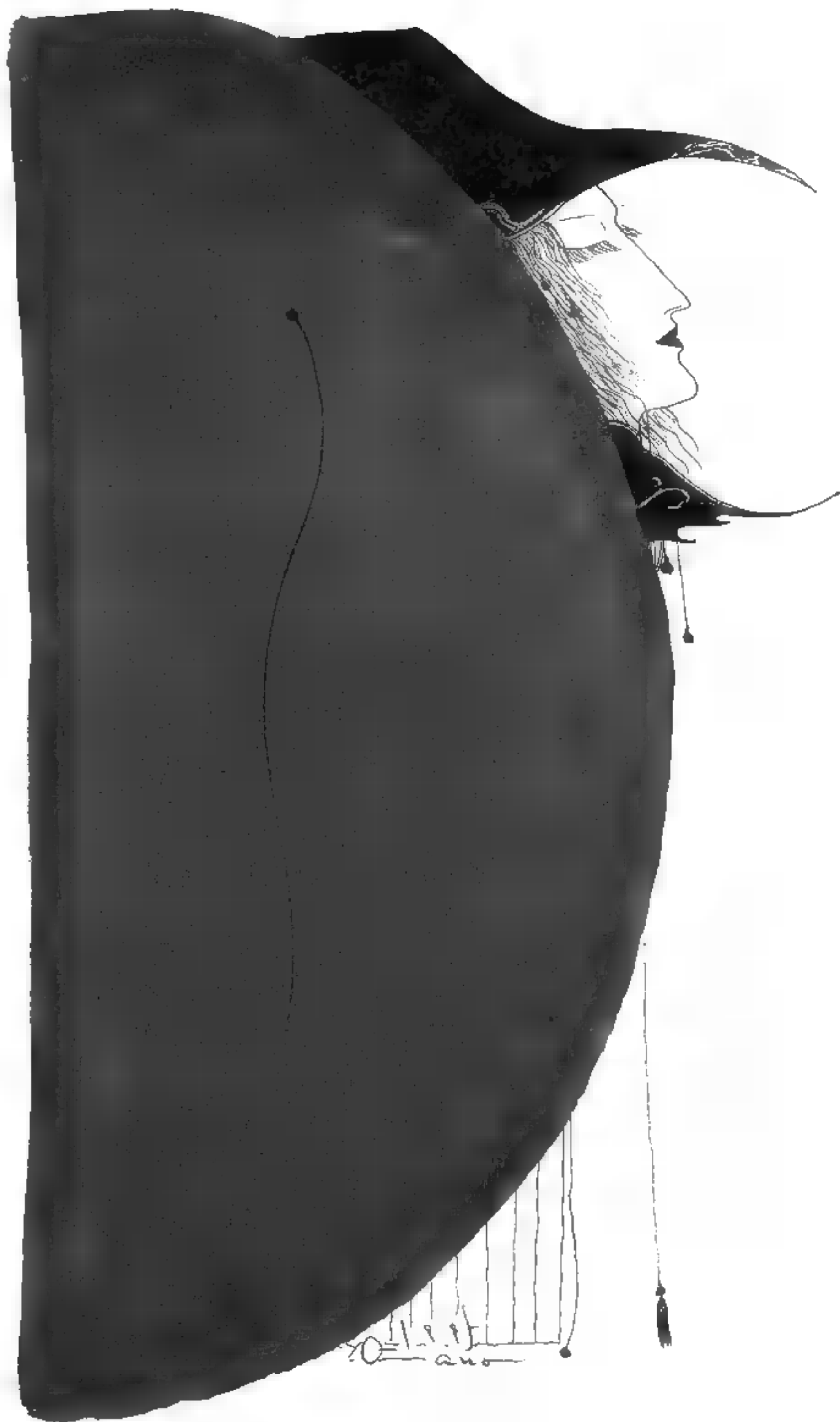
せんべい屋。爺さんの顔をした人面瘡。

それが美男という逸材と組み合わされるのだ。

これを美男を描くことへの作者の照れととるべきなのか。おそらくそうではあるまい。ここには、なんらかの必然性がそうさせているように思う。もっとも、まだ継続中の物語のなかではっきりしていないけれども。

ただ、ひとりの読書家としていわせてもらえば、この左手の存在がはっきりしてから、なぜかDへの親近感が増したような気がするのである。悲壮で気高い妖精のようなDが、この左手との間でだけは、だれにも見せないユーモラスな面を出したり巫山戯（ふざけ）たりするのだから。もちろん、左手はおやじふうな寒いギャグをとばしつつ、その一方でDの身体の不死性に重要な役割を果たしている。Dだけなら、きっと崇高すぎて近づきがたい孤独の旅人の物語になったであろうが、この左手のせいで、妙に人間的な光景になっているのは、特筆に値する。だから、油断はできないのだ。一見ミスマッチな組み合わせが現実のある真理をついているというのが、菊地作品のおもしろいところであり、その組み合わせの奇怪さ、斬新さ、センスのよさ（カンのよさというべきか?）は他に類を見ない予見的な力に満ちているのだから。

ひょっとするとこの二つに分かれてしまっている主体というか、共生するふたつの魂は、異種混淆性と身体論に深く関わっているのではないだろうか。

ダンディーなベラ・ルゴシのドラキュア的なファッションから生み出されたDは、だからこそダンピール（混血種）のDとして、その批評的な思索を投げかけているのではないか。そう思いつつ、この先左手の、いやDの冒険を楽しみにしているのである。

AMANO YOSHITAKA "D"collection

D―ハルマゲドン

菊地秀行

天野喜孝氏の画集『魔天』に付したもの。いきなり、Dシリーズのクライマックスを書いてしまった。むむむと思っていたら、天野氏の描き下ろしイラストが狂喜の出来栄えで、めまいがした。

遠い彼方で、闇が悲鳴をあげた。
ごおごおと唸り、呪いの叫びを発しながら、嚙みちぎられた空間へ風が吸い込まれてゆく。
彼は頭上を見上げた。
途方もない密度を持った暗雲が、高速度撮影のように渦巻き疾り、風の後を追う。地平から地平へ。どよめく雲の壮絶さ。
最後の手段として放った「食空鬼（スペース・イーター）」の力を、光さえ通さぬ分厚い闇の中で目撃しながら、彼は軽い疲れと、凄愴な攻撃の下をやってくるであろう「敵」に対して、かすかな賞賛と誇りを感じた。
正常空間の組織を唯一のエネルギー源とする「食空鬼」をもってしても、「敵」の歩みをはばむのは不可能だ。
西の空から小さな光の珠が急角度で地上へ流れ、みるみる青白い半球を産んだ。数キロとも数千キロとも思える地平の果てから、エレクトロン原子弾の放出した衝撃波が次々と空気をゆさぶり、彼の全身を叩く。轟音は後からやってきた。
そのすべてが徒労に終わることを彼は知っていた。
風が渦巻き、嗅（か）ぎ慣れた匂いを黒いケープのはためきに込めた。
やはり、ここになったか。
その想いだけが強い。
彼は平原の彼方に眼を向けた。
風の勢いにともない、双眸が爛々とかがやきはじめる。紅く紅く紅く。
風の音に声が混じった。

怨念と苦痛を凝集させたその響き、常人ならば耳を押さえる前に発狂するであろうその響きが、彼には天上音楽のごとき甘美な調べに聴こえるのだった。
周囲で、いや、その足元から平原の果てに到るまで、蠢く気配があった。
彼の足首を闇から生まれたような黒い無数の手が摑んだ。灼け爛れた腕と腐れ果てた腕。その付け根には顔らしきものがつき、風と声は、その口にあたる部分から発していると思われた。
――いよいよ、最後のときが来た
と彼らはいった。
――おれは七五〇〇年前に死んだ
――おれは六〇〇〇年前
――おれは四九五六年前だ
――みな、ここで死んだ。もうじき、おまえも死ぬ。いや、その前に殺してやろう
彼は哄笑した。死神の宣告よりもなお暗い、死者を嘲る笑いであった。
その声を恐れたものか、周囲の腕はたちまち塵と化し、風に巻かれて去った。
彼は片足で大地を蹴った。
別の手が現われた。
――私はここで戦い、倒れた
と静かな声がいった。
――この世の悪と戦って、だ。心に恥じることは何もない
彼は再び嘲笑した。正しき死者を。正しかるべき死を語った影は千々に砕けて大地にわだかまった。
腕と頭は次々に現われた。
どうした、わざわざ冥府より戻って、わしにきかせる言葉しかないのか、と彼は檄をとばした。
すでに死を味わったものどもならば、もはや恐れはあるまい。再び、偽りの生に満ちた勝負をつづけるがよかろう。
彼の右手が躍り、ひとふりの短剣が宙に舞った。地面に落ちる寸前、一本の腕がそれを摑んだ。
すべての腕がそれを摑んだ。
彼の足元で凄まじい死闘が開始された。
鋼と鋼の打ち合う音。そのたびにあちこちであがる火花。憎悪も、荒い息づかいも、ののしりの声さえない死者同士の戦い。鋼が何かを断ち斬るたびに、死者の名残の塵が彼の顔に吹きつけた。
どれほどの時間それがつづいたか、彼にもわからない。闇だけが彼のかたわらに澱んでいた。時などたたなかったのかもしれない。
彼は自らの発する言葉をきいた。
おまえたちは、また、死ねた。幾たび生き返ろうと、真の死を味わえるとは、何と素晴らしいことか。
答えるものはなく、聴くものもいなかった。
彼は平原の名を口の中で唱えた。

呪詛(じゅそ)のごとく、祈りのごとく、雅歌のごとくに。

ハルマゲドン。

聖なる書に記された善と悪、最後の決戦場。

だが、決戦は何度繰り返されたことか。

彼の眼は、この地で雌雄を決し、滅びていったものたちの姿を、即座に見ることができた。

足の下に。

大地と思われた場所は、すべて悪臭を放つ腐植土であり、踏みしめるたび、土から滲むものは腐敗しきった黒血であった。土そのものが死者の肉なのである。

突如、猛烈な旋風が彼の顔をそむけさせ、宙天を裂く稲妻の怒号が闇を震動させた。

眼の位置を戻したとき、彼は見た。なお閃く光彩の下を、恐れ気もなく突き進んでくる一頭の騎馬を。

閃きとともに浮かび、暗黒とともに溶け去る騎手は、光と闇とを背負い、そのどちらにも忌(い)まれる存在に違いない。

恐らくは彼自身も。

よく来た。

と、遥か前方とも眼の前ともとれる位置に停止した人馬にむかい、彼はいった。

やはり、来たか。ここまで。待っていたぞ。

閃光が数メートル前方に立つ黒衣の影を示した。

鍔広の旅人帽(トラベラーズ・ハット)、彼のものと見まごう黒いケープ、何より鮮やかなのは、胸の前にかがやくペンダントの青であった。

ついに相見(あいまみ)えた。彼はここに辿りつくまでの長い長い歳月を想った。

「敵」の背から光るものが閃光をはね返してのびた。遅滞なく弧を描いた刃(やいば)は、無限の長さを誇りつつ彼の腰を薙(な)いだ。彼は声もなく笑った。

刃は信じ難い速度と美しさで反転し、黒衣の頭頂から股間までを切り裂いた。鋭い苦痛が彼を襲った。

額から鼻にかけての生あたたかいしたたり。傷口がふさがらなかったのだ。敵は恐るべき技倆の主であった。

よくぞ、ここまで。

感嘆の叫びを発しつつ、彼は右てのひらに「印刷(PRINT)」した攻撃防御(AP)用ユニットを作動させた。「敵」の足元から途方もなく太い灼熱の柱が噴き上がり、優美な姿を押し包んだ。ユニットの励起したマグマの奔流であった。いや、よく見れば、天空を紅蓮(ぐれん)と染めながら闇の密度にはばまれたかのように、遥か上空でその末端をどこまでも偏平に押し広げてゆく炎の中には、おびただしい顔が浮かんでいた。

ハルマゲドンに倒れたものは、煮えたぎる溶岩のただ中にすら存在するのであった。

「敵」も炎に包まれていた。

姿勢は微動だもせず、ケープの裾(すそ)で顔だけを覆いながら。噴き上げる火流は髪の毛一本揺るがせていない

ように思われた。
突如、平原は紅から蒼白に変じた。
火柱は瞬時に動きを停め、はじめからそうであったかのように、そびえたつ円柱にも、天空を支える直径数千キロに及ぶ大皿の周囲にも。きらきらと光る珠がむすばれはじめた。
灼熱から極寒へ、寸毫の間もおかずになされた彼の波状攻撃であった。
だが——彼は見た。
マイナス二七二・八度——極超低温に原子核の電子の動きまで凍りつかせたはずの「敵」——その瞳が徐々に開くのを。
眼窩から滲み出す色が白い柱を変えていった。——真紅へと。
彼の瞳と同じに。
「敵」が顔を覆ったケープを苦もなくふりおろした途端、永劫に封じこめるはずの氷の檻は跡形もなく消えた。
炎が闇を切って走った。彼の身体を貫いたものは、数本の白木の杭であった。空気との摩擦で火を噴いているのだ。
見事だ。
彼はこうなることが、ずっと前から決まっていたような気がした。
「敵」が大地を蹴った。風を巻いて迫る。
彼の右手がかすかな音をたてた。
「敵」が硬直した。
二人の間に、もうひとつの影が立っていた。静けさとはかなさにみちた、透きとおるような影——女。
自らの幻影製作機構の産み出したものとは知りながら、その実体は、血と砂鉄に一万年の歳月をまぶして塗り削ったような彼の心にさえ、緊張を失わせる何かを有していた。
「敵」を倒すためではなく、その姿を見たいが故に、この女を呼んだのではないか。
不思議な風にゆれる心の動きを彼は恐れた。
彼の仕掛けた罠は、彼にとっても危険な陥穽であった。
いま渦中にある対決は、実は物理的兵器ならぬ精神の結晶化度によって雌雄を決する。怒り、憎しみ、愛——極めて低いレベルの感情の残滓は、ごく微量といえど、致命的な結果を招く恐れがあった。
奴はどこまでそれを拭い去れたか。
彼はAP機構の探査装置と攻撃装置を「自由裁量」回路につないだ。機構は彼の意志を離れ、「敵」の心的レベルに応じたアタックをかけるはずであった。
女の髪が風に舞った。
その口が綴った一連の言葉を。彼と「敵」は等しく読みとった。
会いたかった。

突然、三つの影を含む平原の広大な一角が音もなく陥没した。
周囲を取り巻く闇はより濃密な物理的硬度をもってぐんぐんとそそり立っていった。
土ではない。
それは、折り重なった死体の形成する層であった。たったいま生を終えたような生々しい身体が頭上へ流れすぎ、やがて蛆（うじ）を湧かせた腐乱死体の層が前後左右を上へと走った。
彼らが叫んだ。
——おまえたちも来たか
——おまえたちが最後の戦士だ。早く、早く、仲間に入れ
数千数万の死者の声は、三人の頭上でぶつかり、反響し、放ったものの洞窟のような口へ吸い込まれた。
招かれているのか。彼はそう感じた。
その刹那、凄まじい激痛が首筋を襲った。
眼前に世にも美しい青年の顔があった。
胸前に突き出した両手の先から、白刃が彼の頸（くび）半ばまでを切断し、骨で停まっていた。
おまえの方だったのか、と彼はとめどなく流出してゆく血の気配を感じながら思った。
生を終えたものたちに仲間へ入れと誘われ、それにすら歓びを感じなかったのは。生者に背を向け、死者の誘いにも耳を貸さぬ孤独の恐ろしさよ。ただひとつの成功例に、わしは何を与えたのか。
だが、なぜ一気に首を切り落とさなかった。それが命取りになるぞ。
口腔内に逆流した鮮血を、彼は一気に眼前の「敵」めがけて吐き出した。
真紅の眼が、一瞬、光を失う。
彼は特殊な弧を描いて女の背後に廻り込んだ。女を斬らねば刃も彼には届かぬ位置であった。
白光が闇を切り、停止した。女の胸元で。
彼の右手が自動的に上がり、黒い光が「敵」の胸を貫いた。
崩れ落ちる「敵」を見つめる眼に、ふと憐憫（れんびん）の翳（かげ）が宿った。
気がつくと、どこまでも暗い平原に、彼だけが立っていた。女の姿はない。
終わったか。
なぜか、途方もなくあっけないような気がした。これは違うと、心のどこかで頑強に否定するものがあったが、彼にはもはやどうしようもなかった。
わしはまた、死ねなかった。これから、どこへ行けばいい。
完全に「敵」の身体へ背を向ける寸前、彼は、倒れ伏したその左手の異常な曲がり方に気がついた。
愕然とふり向いた瞬間——
凄まじい突風が平原全体を覆った。天空を裂く稲妻

の色は真紅だった。いや、彼の視界全体がどこまでも紅く染まった。大地をどよもして噴き上がる血風のせいであった。
それは「敵」の頭上で漏斗状にすぼまり、さらに細まり、一本の線となってその左てのひらに流れ込んだのである。
そして、稲妻が落ちた。■
小さな眼がふたつ、彼の方を横目でにらみ、愉快そうに笑った。
自らの頸からしたたる血潮が血風の後を追っていることに、彼はようやく気がついた。
闇が平原を閉ざし、閃光がそれを切り裂いた。
「敵」が立っていた。夜目にも美しい顔が、全身が、電磁波の放つ燐光に包まれ、それは、この世ならぬ青き光の影像であった。
終わらぬか、と彼は万感の想いをこめてつぶやいた。■

胸の裡で。
わしとおまえはやはり未来永劫、死ぬことも生きることも許されず修羅の戦を戦う運命か。そうなのか。
「敵」の刃が躍った。
凄絶な攻撃を避けて、彼の身体は木の葉のように宙を舞った。
着地したその胸を、寸秒と待たずに白刃が貫いた。
それもよかろう。
湧き上がる哀しみと歓喜の中で、彼はすべてを受け入れた。行く手には生もなく死も遠く、そして退く道もなかった。
相抱くように重なり合った二つの影を、青い光が押し包み、平原はさらに青く、風はびょうびょうと吹きつのった。
果てしない修羅の道であった。

（1984年12月）

イゾベルの肖像画

菊地秀行

同じく天野氏の画集『かんおけ』用の一篇。私は絵画怪談というのが好きで、一本書いてみたいと思っていたら、ひょんなことから実現してしまった。

「これが、イゾベルです」

天鵞絨のカーテンは、村長の声を合図に左右に分かれ、白壁にかけられた縦横二メートルほどの肖像画を、世にも美しい訪問者の網膜に灼きつけた。

イゾベル・ドレイク。この館のかつての主人であり、南西部辺境区に軍政による支配を敷いた獰猛な将軍は、朱色の軍服に身を固めて二人を睥睨していた。

否。

その眼に視線を当て、

「なぜだ？」

とDは訊いた。つい三〇分前に村へ入ったばかりのハンターは、若い村長から詳しい事情をきいていなかった。

肖像の鼻から額にかけて――すなわち双眸は無惨にも明らかに刃物によって削り取られているのである。

「イゾベル・ドレイク将軍は、残虐無比な軍人であると同時に、類い稀な美貌と若さを誇った魔道士でもありました。あまりな残忍さから、ついに決起した村人にこの館で焼き殺されましたが、猛り狂った群衆も、この肖像画だけは美しさのゆえに残さざるを得なかったといいます。たとえ、その少し前、焼け落ちる柩の中から、将軍の声が、我が恋人が千年後に甦り、館を乗っ取った一族のひとりに生まれ変わって、将軍を解放、辺境一帯の人間を抹殺すると予言したにせよ。何よりも彼らを脅かしたのは、将軍の燃える紅玉のごとき両眼でした。これだけは残しておいてはならぬ悪魔の眼だと、勇気あるひとりの村人が、ナイフで削りとったのです。その瞬間、肖像画は血の涙を流したといいますが、それは伝説でしょう。何にせよ、その村人は余計なことをしてくれたものです。その館に住むものは、ただでさえ呪いがかかっているというのに、僕たちはまさしく彼の末裔なのですから」

「娘は二人だと言ったな」

ひんやりと怯えを誘う、鋼のようでありながら、夢の中の声みたいに響くDの言葉

に、村長はうなずいた。
「二人とも娘だというのも、因縁でしょうか。妻が半年前に亡くなっているのがせめてもです」
　ついさっき、居間で会った一七歳の娘たちを、Dの脳はどのように理解しているのか。転生という異世界の事業にふさわしく、どちらも、ともに月のように玲瓏と、ともに花の如く眩しい娘たちであった。
　同じ眼がDを見、同じ唇が挨拶を放ち、同じ仕草で歓迎の意を伝えた。髪の形、衣裳を等しいものに合わせたら、Dですら見分けがつかないのではないかと思われた。
　姉がイザベル、妹がイゾデル——双児である。村長に言わせると、性格は正反対だという。Dを見た姉が慎ましく頬を染めるにとどまったのに対し、妹は眼をかがやかせた。
「焼いてしまったらどうだ？」
　とDは肖像へ顎をしゃくった。村長は苦々しげに首をふり、
「それはできません。これは村で唯一の貴重な観光資源です。『都』の貴族研究団体からも『薔薇』級の指定を受けています。私の一存では何とも」
　村長は口ごもり、頬を赤らめた。Dが見つめているのに気がついたのである。
「何か？」
「依頼は実行する。——考え直すなら、いまだ」
　すっきりとのびた村長の鼻梁のあたりに、苦悩の色が浮かんでいた。
「いえ——お願いします」
「何を？——お父さま？」
　冷やかすようなイゾデルの声が背後から響いた。つつましく、華麗に、花のような娘たちが戸口に立っていた。
　そして村長の依頼とは、イゾベル・ドレイク吸血将軍の滅亡から、きっかり千年——あと三日後に、将軍の恋人の生まれ変わりと判明した彼女たちのうちひとりを、その場で殺害して欲しいというものであった。
「この村で最近、貴族の手になる犠牲者は出ていないか？」
　と夕食後にDは訊いた。生まれ変わりが三日後に成就するとしても、すでに萌芽は現われているかも知れないからだ。イザベルとイゾデル——そのどちらかは、自らも知らぬ間に、千年の時を経て甦った妖魔の意志に支配された虐殺を行っているかも知れない。二人には事情を話していないと村長はDに告げていた。
「それらしい事件は皆無です。ただひとつ——東の外れに住むツィグという老人が、薬草を採りに行った帰り路、崖から落ちて死にました。四日前のことです」
　Dの眼が妖しく光った。
「彼の年齢は？」

「二〇四歳になります。村の最年長者でした」
「誰よりも村とこの館の歴史に詳しいわけだな。彼の家と事故現場の位置を教えてもらおう」
村長の若い顔に緊張と恐怖の翳を貼りつけて、Dは立ち上がった。

馬にまたがったとき、背後から蹄鉄(ていてつ)の響きが近づいてきた。
Dはふり向いた。白馬の騎手はドレスから乗馬用の服装に変えたイゾデルであった。Dは何も言わなかったが、その静かな眼光にあうと、イゾデルの方から、
「立ち聞きしていたの、ごめんなさい。あなたの行きたい場所へは、私が案内するわ」
と言った。
「夜はもう深い」
とDは言った。戻れという意味である。
「死の闇よりは深くないわ」
とイゾデルは返した。
「私がただのお転婆に見えて？　人は運命を自然と知るものよ。特に不幸なそれは。イゾベル将軍の伝説――私、随分前にツィグから聞かされていたの」
Dは無言で馬首を巡らせた。それをどう取ったか、
「ありがとう」
と呼びかけイゾデルはその後を追った。

二人はまず、ツィグの家へ向かった。二〇〇歳を越えた老人は、その最期を見てもわかるように、肉体的には健康そのものであり、昔の憶い出と、彼自身の曾祖父母からきいた人間と貴族の物語を、澱(よど)みなく子供たちに話せるほど、精神的にも健常であった。――イゾデルはこう告げた。
Dが彼の死に何かあると判断したのは、以前、似たような状況を経験した覚えがあるからだ。
人間との勢力関係が逆転したとき、貴族の一部は自らを柩に封じ、人目につかぬ深山幽谷の奥や海底深く、或いは地上三万六千キロの静止衛星軌道上に打ち上げ、数千年の眠りについた。それだけの時間(とき)が過ぎれば、彼らについての知識も失われる。新しい時代に復活したとき、その生命を危険にさらすのは、人間たちが持つ彼らについての記憶なのだ。その妖術、超能力、姿形を覚えているのといないのとでは、滅びへの危険度は桁(けた)ちがいになる。
凄まじいあばら家の内部は、意外と整理が行き届いていた。ただ一角――奥の間の本棚付近を除いて。
ことごとく床に放り出された書籍へ眼をやって、イゾデルはためいきをついた。天井の電気灯が弱々しい光を放っている。
「一昨日、村の人たちと遺品の整理にきたときはこんなじゃなかったわ。誰が何を探していたのかしら？」
Dは沈黙したまま本棚を見つめていた。イゾデルは

表情を変えて、
「ひょっとして、ツィグ爺ちゃんを殺した犯人が？
一体、何を？」
Dはふり向いて、
「イゾベル将軍に関する何か――多分、資料的なものだろう」
食い荒らされたような書架を検分し始めたDにならって、イゾデルは室内を観察しはじめた。
一時間ほどの家捜しの後、二人は家を出ることにした。
先に戸口に向かったDがふり向いて、壁に右手を当て、
「見えるか？」
と訊いた。
「え？」
「見えるか、おれが？」
「もちろんよ。みんな見えるわ」
「いま、電気灯を消した」
とDは静かに言った。
「窓を見ろ」
戦慄に爆発しそうな心臓を意識しつつ、イゾデルは右横を向いた。
黒いガラスに血のように赤い光点がふたつかがやいていた。
「私の――眼？　イゾベル将軍の肖像画と同じ……D、私なの？」
「三日後にわかる。それまでは監禁だ」
「わかってる。でも、怖いわ、D、とっても」
悲痛な訴えにDは答えようとしたのか、しなかったのか。このとき、彼は身をねじって部屋の奥へと跳んだ。
戸口から黒い巨大な影が入ってきた。それが人形に見えたのは一瞬で、まるで闇をくり抜いた闇のような気がして、イゾデルは眼をしばたたいた。

入道頭の先から爪先まで漆黒の巨人――三メートル近い。
腰をかがめてのばしてきた左手の下を、Dは疾風のごとく走った。
閃く刀身は、巨人の左腰から右の腿にかけて切り裂いた。
スポンジでも貫くような手応えが、Dに戦法の変更を要求した。
巨人が右手を払った。風圧がイゾデルを打ちのめし、窓ガラスを弾きとばす。
巨人の細胞はDの一撃にも復活する再生機能を備えているにちがいない。
二撃目が襲った。こればかりは石のようなパンチはDの口もとすれすれをかすめた。昏の脇が切れたのは風圧によるものであった。
新たな攻撃を繰り出す前に、巨人は自らの行為の結

末を知るべきであった。
三発目の拳がDの顔面へ打ち下ろされる、その肘へ白熱の一刀が閃いた。腕はもろくも飛んだ。黒血の奔騰とともに巨人はのけぞった。彼はDの口もとへ流れる血のしたたりを見たかどうか。
白刃を胴に受けながら、巨人は戸口へと走った。壁をぶち抜いて逃亡に移る。Dは追わなかった。
刀身を納めた彼を、イゾデルの畏怖の極みともいうべき声が迎えた。
「D――あなた……私と同じ眼を……それに、その唇の牙……あなた……ダンピール、なのね」
世にも美しい若者を映す瞳に、変転する感情が彩りを添えた。恐怖、尊敬、同情、そして、侮蔑と欲情――この歳の少女に特有な情念のうつろいであったかも知れない。
「D……」
うるんだ声のつづきは、戸口から響いた馬車の轍とサイボーグ馬のいななきに停められた。
外へ出た二人の前で馬車から下りたのは、召使いと姉のイザベルであった。
「お父さまが庭で巨人に襲われたわ。それから、湖近くの農家から知らせがあって――湖の真ん中に、柩らしいものが浮かんでいるって」
Dは湖へ急行した。姉妹も一緒である。一時的なものかどうか。イゾデルの双眸は紅い光を失していた。
発見者の農夫が出したボートにDは乗り、物体を調べて戻ると、すぐ騎乗した。
「D――あれは？」
姉と妹が同時に同じ質問をした。
「柩だ。イゾベル将軍の最期は確か――」
イザベルが答えた。
「村人のひとりが心臓に杭を打ち込んだ瞬間、塵と化した、としか伝わっていないわ」
「湖の中に眠っていたとも考えられるわね」
とイゾデルが暗い表情をこしらえた。
「ねえ、中味は何が入っていたの？」
「わからん。おれの剣も通らなかった」
Dの答えは、二人の美しい娘を氷の人形に変えるに十分だった。

村長は頭蓋骨陥没の重傷であった。それでも、医術の心得がある召使いと、すぐ近所に住む医師の努力で、三人が帰り着いた頃には、かろうじて話ができるまでに回復していた。
Dから柩の一件をきくと、喘ぐように、
「間違いありません。子供の時分、ツィグ爺さんから、イゾベル将軍が心臓に杭を打たれた瞬間、柩は鋼鉄の貝のごとく閉じ、自ら湖中に滑り込んだと教えられました。あなたを襲った巨人は、そのとき、ともに水に

「消えた護衛用の人形(ゴーレム)でしょう」
　これだけを打ち明けて、再び昏睡状態に陥った。
　とりあえず、村人への指示は副村長へ一任し、村議会の幹部が話し合った上で、柩の陸上げは見送ろうと決まった。イゾベル将軍の最期を知るものは、幹部連の中にもおらず、柩が彼のものだという確証もない上、万がいち、貴族が眠っているにせよ、水の上ならば身動きひとつできないと、これだけは村の誰もが心得ていたのである。
　翌日は何事もなく過ぎた。イゾデルはひとりで地下室に閉じこもり、鍵はDが保管した。
「まさか、あの妹(こ)が？」
　かがやく双眸について知らされたイザベルは戦慄したが、その声と表情に安堵の翳が過(よぎ)るのは如何(いかん)ともしがたかった。
「まだ、わからん」
　とDは素っ気なく告げた。深更に近い夜である。漆黒の大伽藍(だいがらん)に星が散りばめられている。
「イゾベル将軍復活の日まで、あと二日。何が起きても不思議ではない時間だ」
「イゾベル将軍の恋人について何かご存じかしら？」
「君はどうだ？」
「何も。名前さえ伝わっていないのよ。きっと、きれいな貴族だったんでしょうね」
「きれいな貴族か」
　イザベルは、はっとしたようにDを見て、
「随分、年を取った声が出せるのね」
「貴族が好きか？」
　またきこえた。イザベルはDの様子を窺い、彼の質問だと判断した。声は腰のあたりからしたようだが。
「とっても怖いわ。でも——話だけの怖さよ。村にも、今までとは違うイメージを持った女の子が何人かいるわ」
「どんなイメージだ？」
　今度はDの問いであった。
「月光の下をさまよう美しい人たちよ。あの黒いマントと白くて長いドレス——最高だわ。私も——」
　ここで何を感じたか、総毛立ったような表情で口をつぐんだ。Dは彼女を見ていない。前方の闇へ眼を向けたまま、
「ああなりたいか」
「……」
　冷気に封じ込められたまま、イザベルは、Dの左手がゆっくりと喉にかかるのを待った。
　意識不明の状態で運びこまれた姉を見て、イゾデルが眼を見張った。
「どうしたの？」
「おまえと同じだ」
　貴族へのあこがれを口にする少女の眼は炎のように燃えたのであった。

「私なの、姉さんなの？」
イゾデルは狂気のように叫んだ。
「それとも――二人とも？」
Dは答えず地下室を出て、村長の寝室へと向かった。
夕刻から昏睡状態を脱していた村長へ、
「いま、村の通信舎から連絡があった。『都』の歴史学者が、明日の晩、村に入るそうだ。村外れの停車場まで、おれが出迎える」
「よろしく」
村長はやつれた顔を手で覆うようにして言った。

夕暮れどきといっても、東の空にはまだ、水のような冷光が残っている時刻、村外れの停車場で、世にも美しい吸血鬼ハンターと白髪白髯の老人とが邂逅した。
二人が名乗りあったとき、道路脇にそびえる大樹の大枝から黒い巨影が襲った。
「やはり来たか」
とDの左手が、納得と笑いをこめてつぶやいた。刀身を構えたDの瞳が爛々と紅くかがやき、唇から白い牙がのぞくのを認めて、「都」から来た老人は、およそ学者らしからぬ怯えを全身の震えに表わして、尻餅をついた。
「イゾベル将軍の召使いか、恋人とやらのか？　それとも、おまえが恋人か？　どちらにしろ、ここが死に場所だ」
Dの言葉が終わらぬうちに、巨人の身体が旋回した。巨大な独楽が生じた。うなりとぶ風が停車場の施設を吹きとばし、巨木を根こそぎ掘り起こしてしまう。
風は触手のごとくDの全身に絡みついた。マントの裾がちぎれる。巨木が吹っとんだ。風に巻かれて、その速度に対応しきれず、樹皮が剝がれ、次の瞬間、二つにひねりちぎれてしまう。
巨人が動揺した。風圧が熄んだ。動かぬDと――真紅にかがやく双眸を見たのである。自らの唇を咬みちぎって、流れる血を飲んだダンピール――貴族の血を引く吸血鬼ハンター。その正体と力を知った驚きが術の力を弱めた刹那、宙に躍ったDの一刀は、その頭部を胸まで切り下げていた。
その傷口がみるみるふさがり――またも露わになると、巨人は大地をゆすって前のめりに倒れた。
その足で、Dは村長の家――旧イゾベル将軍宅へと戻った。
村長の寝室へ通されたときには連れがいた。イゾデルであった。
うっすらと眼を開ける、ベッドの父へ、
「イザベル姉さんが斬られたわ。――私の血を吸おうとして……」
「イザ……ベルが……」
移した視線の向こうで、玲瓏たる美貌がうなずいた。
「仕事は終わった。柩は浮いたままだが、復活させる

恋人が甦された以上、将軍も成す術はあるまい。報酬を受け取ったら、おれは村を出る」
青白い手が上がった。ふくれ上がった血管が縦横に走るそれは、グロテスクな芸術品の趣があった。
「感謝します、D」
Dは無言でそれを握り、きびすを返した。
ドアの閉じる音が、悲劇の閉幕を告げたかのように、村長は意識を失った。
眼を醒ましたのは深夜であった。月もない。暗雲がガスのように空を埋めていた。
かたわらの椅子で、付き添っていたイゾデルが眠っている。
呼ばれて、眼を開いた娘へ、村長は、肖像画のところへ連れて行ってくれと頼んだ。
「どうして?――無茶よ、その身体で」
反対する娘へ、
「湖の柩はそのままか?」
「ええ」
「どうも気になる。イザベルの死体も見たいが――まず、絵のところへ連れて行ってくれ。人手は要らん。納戸に介護杖があったはずだ」
絵の周囲には霜のような静寂が下りていた。
「最後の日だな」
と村長が自分に言いきかせるみたいに口にした。
「もう終わったわ」
とイゾデル。
「いや、まだだ。何も終わっていない」
その声と、床に当たる杖の音が、イゾデルをすくませた。
父がふり向いた。父の顔だ。父の身体だ。父の声だ。だが――別人であった。
「あなたは――誰?」
やっと絞り出した声へ、
「おまえたちは、将軍の恋人だと呼んでいた」
「そんな――そんな――その声は男じゃないの」
「そのとおりだ。それが、なぜ、いかん?」
村長の口もとに黒い笑みが広がった。
「私が、愛しいものが、なぜ、男であってはならないのだ?」
村長は肖像画に近づき、眼の部分に片手を当てた。
「あの日、汗臭い村人どもは、次々に愛しいものの仲間や友人、家族を灰と化せしめたが、この肖像画だけには手をつけられなかった。ただひとつ、この眼を除いてな。幸か不幸か、そのせいで、イゾベルの性別は後年になるほどわからなくなり、将軍という称号のせいで逆転し、いま、ようやく復活のときを迎えたのだ。私は、おまえの血を吸ったら、愛しい女を湖から呼び戻し、『都』へと馬車を駆る。人間どもの支配を覆すなど、千年前の精神を持った貴族には、いともたやす

いことよ」
　ゆっくりと近づいてくる父の形をしたものから、イゾデルは後じさりしつつ、
「じゃあ、私と姉さんの眼の光は？……」
「おまえたちの飲みものに遅効性の薬物を入れておいたのだ」
「――でも父さんはあの巨人に殴られて大怪我をしたわ。死ぬところだったのよ。父さんに乗り移るのに、どうしてそんな真似を？」
「私が入れば、容れ物も不死となる。あのハンター、怖るべき奴と見た。目くらましは、厳しくやらねば、な」
「それなら、どうしてDにツィグ爺さんの事件を教えたの？　あの人のことよ。きっと、過去に何かあると思いついたわ」
「黙っていても、いずれ、村の連中やおまえたちから知れる。それと、こいつの意識もまだ残っていた」
　自分の脳を指さし、村長はにいと笑った。朱唇の間から白い牙が剝き出しになった。十歳は若く見える美貌が、肖像画の恋人にふさわしいと、イゾデルは考えたことがなかったろうか。
「父さん？――父さんは?!」
「すでに吸い取った。ここにあるのは、わたしのための抜け殻だ」
「それなら容赦はいらんのお」
　村長は愕然と頭上をふり仰いだ。
　明かり採りの窓。それが人の形に抜けたと見えた刹那、おびただしいガラス片のシャワーをきらめかせて、Dは村長の前に着地した。
「貴様……立ち去ったのではなかったのか!?」
「すこし気になることがあってな」
　それが、Dとは似ても似つかぬ嗄れ声だと、村長に気づく余裕はない。
「ツィグが殺されたのは、将軍の――女将軍の性別を知っていたからじゃな。おまえが召使いのでくの坊に命じて、念のために探させた古文書は、皮肉じゃの――あの柩を発見した農夫が預かっていたわ。というより、以前、ツィグの家を訪れたとき、床に落ちていたのを、金目のものと失敬してきたらしい。ひょっとしたら、ツィグも忘れていたのかも知れん。農夫も柩と関連づけてうす気味が悪くなったんじゃろう、わしらが柩を見物に押しかけたら、森の中で拾った品だが、村長に返してくれと手渡しおった。正しい事情はそのとき訊き出したのよ。おまえが村長の頭など砕かず、腕の一本ぐらいにして、責任上、真っ先に駆けつけておれば、わしらの眼につくこともなく、隠しおおせたものを。これぞ、天網恢恢疎にして洩らさずというやつだ」
「だが、イゾベルが女だとわかっても、娘たちの眼が伝説通りになった以上、疑いはそちらに向いたはず

だ」
「その通り。女が女に惚れる場合も多々あるでな。だから、おまえにだけ『都』から歴史学者が来るとホラを吹いてみた。学者の役は副村長よ」
「……成程。そこへ私の命を受けたあいつがやってきたわけか——ぬかったわ」
　ここで、やっと声の異様さに気づいたか、村長は奇妙な眼ざしをDの左手のあたりに当てた。
「千年だぞ、Dよ——私は待ちつづけた。愛するものの復活をな。短くはなかった」
　それはそうだろう。一千年の歳月にも想いを風化させぬため、村長に取り憑いた〝恋人〟の魂は、どのような方法で、苛烈な孤独に耐え抜いてきたものか。
「生も死も遠かった、Dよ。だが、私はいま宣言する。この世界でイゾベルとともに生き抜くと」
　その言葉ごと、Dの刀身は村長の胸から背へ走り抜けた。
　串刺しになった身体は、軽く後退して剣を抜き、にんまりと微笑した。
「私は死なんよ。イゾベルが守っていてくれる」
　その両眼が真紅に燃え上がるのと同時に、Dの身体は両側から火を噴いた。
　念力放火——パイロキネシスであった。
「あっけないぞ、Dよ。死とはそういうものだ。私とイゾベルの生は末長くつづく——」
　哄笑へ変わろうとしたその心臓を、炎の尾を引きつつ飛来した刀身が貫いた。
　怖るべき速度であり、力（パワー）であった。〝恋人〟の身体は五メートルも吹っとび、壁に激突した。
　絶叫が上がった。まこと、死はあっけなく訪れるものかも知れなかった。村長の身体がこと切れても、壁まで貫いた刃は抜けなかった。それは、怖るべき女将軍の肖像画をも刺し貫いていた。その心臓を。
　死体にすがりつくイゾデルを尻目に、Dは部屋を出た。下のホールまで下りたとき、玄関からイザベルが小走りにやってきた。
「いま、湖の監視隊から早馬がありました。柩が急に腐り果てて、水中に沈んだそうです」
　それが、千年の想いの果てであった。
「上に行け」
　それだけ告げて、Dは屋敷を出た。
　闇よりも昏い漆黒の騎馬が、果てしない道と時間とを走り出した頃、怖るべき女将軍の肖像画は、木台も画布も崩れ落ち、一塊の塵と化して床に広がっていた。

（1997年11月）

AMANO YOSHITAKA "D"collection

D——霧の村

菊地秀行

またまた天野氏の「吸血鬼ハンター〝D〟画集」へ。30枚。全く自信がなく、出来栄えについても首をひねっていたら、担当のI氏が賞めてくれたので、ヒヒヒと舞い上がってしまった。

その湧き出す激しさからすれば、霧よりも煙と呼ぶ方がふさわしかった。

星ひとつあれば、いかなる深さの闇をも見通すDの眼にも、荒れ狂うがごとく吹きつけてくる白一色以外は見分けられなかった。

「これは異常じゃぞ」

左手がこんな呆れ返った声を出すのも珍しい。

「霧自体は自然の産物だが、このかかり方には何者かの意図が働いておる。近寄らぬ方が無難じゃ。戻ろうではないか」

「道がわかるか？」

「ん？」

Dは左手を後方に廻した。

「おお、見えん。感じもせん——馬はどうじゃ？」

Dは手綱をひいて後ろを向かせたが、馬はそこから廻って元の位置で止まった。

「——同じ、か。しかも、何かに怯えておるな。これはいかん。断固、野宿じゃ」

こう主張して、嗄れ声は止まった。

「気配と足音じゃ。ざっと——ほう、五十人」

Dは馬上で動かない。相手が万人であろうと、この態度は変わるまい。相手の接近と人数もとうにわかっているのであった。

程なく、霧の中から騎馬の左右におびただしい人影が現われた。誰ひとり止まることもなく、霧に閉ざされた道を進んでいく。

まともな服装をした農夫たちである。Dには眼もくれず、霧から現われ、霧の中に去っていく。
中年の男女が多い。子供もいるが、ごく少数だ。
やがて、彼らの姿が霧の奥に消えると、
「さて、どうする?」
と嗄れ声が訊いた。
「今の奴ら、生きた人間とも死霊ともつかぬ。何処から来て何処へ行くのか? わしらを無視するとは何事じゃ。よいか、絶対に追ってはならんぞ、わかったな」
その声は後方へと流れた。
「こら、何処へ行く? 固い地面が嫌になったのか? ふむ、前だけは霧も薄くなってきおったの」
答えは当然ない。馬の足取りも悠々と滑らかだ。
一〇分ほどで、村へ入った。木の柵に囲まれた村は霧の中に眠っていた。時間からすればたかだか宵のくちなのだが、人声ひとつしない。住人は家の中に閉じこもっているようだ。霧を怖れて。
広い道を辿って、広場へ出た。
「柵の出入口にも誰もおらんかった。空からは明かりひとつ洩れておらん。ここは無人じゃぞ。となると、先刻の連中は、あれは――?」
嗄れ声の疑問は、次の瞬間に解かれた。
左手の小路の奥から、激しい足音と悲鳴が近づいてきたのである。
「この息遣い――追われておるぞ」
嗄れ声が終わらぬうちに、悲鳴は絶叫に変わった。
小路から跳び出した人影は、全身に白い糸をまとわりつかせているように見えた。
その背後から別の人影がよろめき出て、前のめりに倒れた。背中に黒い塊を背負っている。それが前方の人影へと躍った。
二つの影が重なる寸前、人影がDの方を向いて、助けてと叫んでから倒れた。
躍りかかった影は、しかし、すぐに顔を上げてDを見た。
がさがさと手が持ち上がった。八本ある。すべてが五〇センチ近い蛮刀を握っていた。二本の足が蜘蛛みたいにせり出して身体を支えている。いや、まさしく蜘蛛だ。
「何処……カラ……来タ?」
奇怪な発音だが、意味は理解できた。
「外カラハ……入レヌハズダ……貴様……何者ダ?」
Dは答えない。霧さえ透かしてかがやく美貌が、身も凍るような冷厳さをこめて、人蜘蛛を凝視している。
それをどう取ったか、しゅう、と息を吐いた途端、その身体は霧を巻いてDの頭上にあった。
その手が閃き、しかし、風を切る音はひとつ――きいん、と空気が火花を放ち、蜘蛛は五メートルも離れた釣瓶井戸の木枠に跳び移っていた。

その手足がことごとく震撼しているのが、Dに見えたかどうか。
「オレノ刀……八本同時ニ振ッタ……ミナ、ヨケルトハ……外カラ来タ男ヨ……オマエハ……何者ダ?」
その身体から、ばらばらと黒いものが地に落ちた。蛮刀を握った四本の手であった。
「出テイケ……コノ呪ワレタ村カラナ……オレハモウ逃ゲラレン……ソイツラモ、ダ」
手足の切り口からは、確かに黒い汁が溢れていた。それが霧のように広がって、白霧に溶け合ったと思うや、蜘蛛の影は彼方の家の屋根に跳び、たちまち見えなくなった。
音もなくDが一刀を鞘に収めたとき、
「怖るべき奴だの。——おまえの必殺の一撃を、四本の腕を失くしただけで防ぎよった」
嗄れ声に、Dの足下から這い上がってきた男の声が重なった。
「ありがとう……助かった……リザも助けてやって」
サイボーグ馬の足にすがるようにして立った人影は、十三、四と思しい少年であった。
「この村の子か?」
とDが訊いた。少年のシャツの背中は黒く染まっていた。
「そうだよ……ワチだ」
「おれはD。——君の家は何処にある?」
「あっち……西の外れだよ」
「おれを泊められるか?」
「いいよ。でも、おれしかいない……みんな……いなくなっちまった。頼むよ——リザを……」
その顔の前に黒い手袋をはめた手が下りてきた。
眼の前で人蜘蛛に殺害された若者——兄のジョクを家の土間に寝かしてから、少年のワチは台所で奇怪な説明をはじめた。
ワチもジョクも、いや、この村の住人全部が、実は、ある時期以前の記憶を喪失しており、この村も自分の故郷かどうか判然としないのだという。
何人もの村人が、その疑問の答えを求めて村を出たものの、彼らは二度と戻らず、また、その前後から例の人蜘蛛が現われ、村人を惨殺しはじめた。
村人は総出で人蜘蛛を迎え討とうとしたが、神出鬼没の攻撃を浴びて次々に斃れ、今ではワチとジョク以外に、ワチの恋人リザしか残っていない。
「いつからの記憶がない?」
Dの問いに、
「この村にいるって気がついたのは、ひと月ちょっと前だよ。それ以前のことは何にも覚えていない」
「村に見覚えは?」
「ない。それなのに、みんな、道具の使い方なんかはちゃんと覚えてた。でも、道具そのものは、見るのも

はじめてだ」
　感電でもしたかのように、ワチの身体が震えた。
「そうだ――リザのところへ行こう。あの娘はひとりで隠れてる。いくらおれが一緒に逃げようっていっても、自分の家を離れようとしない。きっと、あの人蜘蛛が怖いんだ。でも、あんたが来てくれりゃあ、きっと村を出られる」
　土間へと駆け下りる少年の後を追いながら、Dの左手が、
「殺人魔のうろつく村の中に、ひとり住む娘か。あの坊主の方が押しかけるといっても断っておるのじゃろうが――解せんなあ。それに村人全員の記憶喪失。これは何かある――といっても、おまえも感づいておるだろう」
　Dは村の北の外れに建つリザの家まで無言を通した。
　ドアには鍵もかかっておらず、黒髪の少女は、白い霧と洋燈の薄明に閉ざされた一室で二人を迎えた。
　村を出ようというワチの言葉に、リザは首を横にふった。
「どうして!?　――出て行った連中もいるんだ。おれたちだって村を捨てられるよ」
「駄目なのよ。私にはわかるの。この村を出ようとすれば死ぬしかない。出て行った人たちだって――」
　少女の顔は静かで、霧に支えられているみたいに落ち着いていた。
　ワチの顔は怒りで震えた。
「前から思ってたけど――君は何か知ってるのか？　おれたちは何なんだ？　どうして記憶がない？　この村は何なんだ？」
「わからない――私には何も。ここを出て行っちゃいけないということ以外は何も」
「何故、彼と一緒にいない？」
　とDが不意に訊いた。その顔を見るや、みるみる白蠟のような顔に朱を昇らせて、
「それもわかりません。ただ――」
「ただ？」
「怖くないんです」
　ワチが眼を剝いた。
「あの化物――君だって、見ただろ」
　少女は答えず、
「私には何もしないわ。わかるのよ。毎日、家の周りや内部をうろついているわ。でも、大丈夫なの」
「そんな莫迦な。みんな殺されてるんだ。兄貴だって」
　激昂する少年の肩を、Dの手が押さえた。
　恐怖の表情が、耳を澄ましているDを見て和らいだ。
「この音は？」
　少年も聴覚に意識を集中したが、何も聴き取れなかった。
「知っています」

とリザも認めた。
「この家にいると気がついたときからずっと。でも、何なのか、何処にあるのかも――」
「知りたくないのか?」
Dの問いに少女は沈黙した。少年が叫んだ。自分だけ取り残されているような気がした。
「――おれには、何にも聴こえねえよ。音なんか、ありゃしない」
「ここにいろ」
Dは影のようにドアに近づいた。
「何処行くんだ? おれたちも一緒に行くよ」
「その娘を守ってやれ」
「――けど、ここにあいつが来たら?」
浮き足立つ少年の足下に、三〇センチほどの小剣が放られた。少年がそれを取り上げたとき、Dの姿は何処にも見えなかった。

廊下を進むと、一〇メートルも行かずに白い壁が迎えた。
「その向う側じゃな」
と左手が言った。
「入口はここにある。だが、ここにはない」
「開けられるか?」
「わしよりは、おまえの領分じゃな。――わお!?」
壁の表面を斜めに断った銀色の線は容易に消えなかった。Dの背が鍔鳴りの音をたてたとき、その線が上下に広がりはじめ、壁いっぱいに黒々とした空間が穿たれたのである。
「ふむ――これをつくったとき、奴め、よもや自分以外に開けられる者が出てくるなどとは考えも――」
嗄れ声は前方へ流れた。Dが歩き出したのである。
そのとき、背後で悲鳴が上がった。リザの声である。
もと来た方へ疾走するDの背後で、壁の戸口はふたたび漆喰に塗り込められていった。

部屋のソファに横たわったリザの顔は蒼白であった。
脈を取るワチに近づき、Dは、どうした、と訊いた。
「わからない。急に悲鳴を上げて、――窓の方を見てたから、あの蜘蛛野郎がいたんだろう」
Dの左手がリザの額に当てられた。すぐに離して、
「どうだ?」
「代謝機能が極端に落ちておるな。もう少しで死人じゃ。原因は不明。少なくとも、何かを見たせいではあるまい」
「治せるか?」
「やってみよう。ただし、保証はしかねるぞ」
また乗せられた左手を見て、ワチが眉を寄せた。
「何をしてるんだ? リザは大丈夫なのかよ?」
彼にはDと左手の会話が聞き取れなかったのである。
答える代わりに、Dの右手がかすんだ。

窓の外で、おお！　と驚きの声が上がり、次の瞬間、窓ガラスを微塵に砕いて、奇怪な影が床に落ちたのである。

蛮刀を握って蠢く腕は、かつては八本――今は四本。

「貴様ぁ」

ワチが走り寄った。ふりかぶった右手には、Dの小剣があった。

「よせ」

低い制止の声を聞くはずもない。奇声とともにふり下ろされた小剣は、蛮刀の一本に受け止められ、新たな二本が無残――少年の腹を十文字にかっさばいた。噴き出した鮮血が床に真紅の十字架を叩きつけた。

蛮刀が受けに入った。その何本かに跳ね返されるべき刀身は、人間の力ではあり得ぬカーブを描いて二本の手を切り飛ばした。

声もなく、人蜘蛛は窓辺へと跳ねる。闇へと吸いこまれるその影を、Dの左手から白木の針が追ったが、声はなく、

「まかしたぞ」

言うなり、何たることか、刀身一閃、Dは自らの左手首を切り離すや、それが床に落ちるのも見届けずに、窓外へと身を躍らせた。

左手が動き出したのは、その気配が消えるのを感知してからであった。それは、ぶつぶつと例の嗄れ声で、奇妙なことを言った。

「さて、わしの見立てが確かなら、置いていかれる用もないのだが」

しかし、少女はソファの上で可憐な蝋人形のごとく意識はなく、恋人たる少年は自らと床とを血に染めて無残な痙攣を繰り返している。やがて、五指を立て、左手はひょこひょこと歩き出した。

どちらの方へ。

前方を行く気配と血の臭いだけは、渦巻く霧も消すことはできなかった。北の端へ向かっているとDにはわかっていた。丈の高い草むらを疾走する前方に、小高い隆起の影が滲みはじめた。丘だろう。人蜘蛛の気配はその内部に吸いこまれた。

出入口などない。どこから見ても平凡な丘陵である。いくら掘っても出てくるのは土ばかりであろう。

リザの廊下の壁と等しく、Dは一刀をふるった。斜面に穿たれたあり得ない門口を抜けて侵入した彼を迎えたものは、青い光と死者の群れであった。

もうもうたる霧を踏んで歩む彼の周囲で死者たちは、助けてくれと哀願した。

お願いだぁ　助けてくれ

いや　殺してくれ　おれたちは生きるも死ぬもできない　ああ　苦しい　苦しい

殺してくれ　殺してくれ　殺してくれ

死者たちの身体に首はなかった。両手がDを求め、

少し離れたところに転がった生首が、涙ながらに、永劫に訪れることのない永劫の平穏を求めるのだった。

「ワカルカ……コイツラガ……何者カ?」

地を這う白い霧を踏んで、前方から人蜘蛛が現われた。失った六本の腕からの出血のせいか、青い光に浮かんだ顔はひどく透きとおって見えた。

Dの返事を待たず、人蜘蛛は、

「生ケル死人ヨ……ココへ入レル男……オマエナラ……トウニワカッテイル……ダロウ、オレノ……役目モ……ナ?」

Dは無言である。秘策が渦巻いているのか、或いは人蜘蛛の勝手な思い込みか。

「村の者か?」

と訊いた。死体のことである。

「ソウダ……彼ラハココデ……永劫ノ生命ヲ……与エラレルハズダッタ……オレハ……ソレガシクジッタトキノ……処理係ダ」

しくじったとき――そのとき、何が起きるのか。

左手は指の動きを止めた。

這って行く先には虫の息のワチがいた。いや、正確には彼ののばした右手の先――Dの小剣の方へ向かっていたのである。そしていま、ワチの呼吸(いき)が止まった。

なぜか、

「これは、いかん」

と左手は洩らした。彼は明らかに小剣を我が物にしようと企んでいた。短打(タパ)のような指の動きが速度を増し、あと五〇センチ――

「ぐおお」

この呻きが洩れたのは、死人の手が小剣の柄を握りしめ、ふり上げるのを見たときだ。風が唸って、今度は声もなく、左手は床に縫い止められていた。

ぬうとワチが立ち上がる。姿形は同じだが、そこだけ毒々しい紅に濡れた唇と、その間からこぼれる白い乱杭歯は――貴族とその犠牲者の証しだった。

床の上でわななく左手を、別人のように残忍な眼つきで眺め、

「そこで死ね」

と吐き捨てて、ワチはソファの少女に歩み寄った。彼が生命懸けで救おうとしていた愛する娘のもとへ。

――しかし、リザを見つめる眼は妖しくかがやき、その口は絶え間ない飢えに苛(さいな)まれるみたいに、卑しく歯を鳴らしている。

「わかったぞ、リザ」

とワチは唸るように言った。

「おれたちが何なのか。この村の正体も、みんなわかった。そして、おまえのことも、な。なぜ、眠りつづけている? おれたちとこの村がある限り、おまえは生きつづけねばならないはずだ」

血走った眼から、涙が溢れはじめていた。ワチは少

女のかたわらに膝をつき〟少しの間、安らかな——死顔といってもいい寝顔を見つめた。それから、ゆっくりと、その白い喉へわななく朱唇を近づけていった。
乱杭歯の歯先が喉の内側を走る青いすじに食いこむ。
その顔が、身体ごとぐいと引かれた。三メートルも離れた床の上へ放り出されて、ワチは獣の雄叫びとともに跳ね起きた。
凶暴と狂気が吹き荒れる瞳が、ある姿を捉えた。
「——兄さん!?」
腹を十文字にかっさばかれた死体が甦ったとするならば、土間の遺体が甦ったとて、何の不思議があろう。喜びとも恐怖ともつかぬ表情を霧の中で繰り返す弟へ、
「まだ、用がある。——連れて行こう」
と死人の兄はリザを、弟と同じ眼差しで見下ろした。

そこにあるのは、茫々たる空間と青い光、そして屹立する巨大な装置だけであった。
ゲージもレバーもスイッチひとつない銀色の大円筒の列が蜿蜒と連なる果ては、Dの視力をもってしても見定めることはできなかった。
音だけがあった。貴族の癖ともいうべき、完璧の中の〝乱れ〟——人間の耳にやっと届く地鳴りのような機械音。なぜわざわざこんな音をたてさせるのか、当の貴族にもわかるまい。

「これが、〝御神祖〟の夢だ」
Dの前に這った人蜘蛛から、低い声が漂ってきた。ひどく流暢な物言いであった。
「あの御方がこのメカをつくり、村をこしらえ、村人たちを生んだ。彼らは、全く新しい生命になるはずだったのだ。おれは知っているとも。彼らは陽光の下を歩き、村を訪れる旅人や商人たちと交わった。食事は、わずかばかりの乾燥血液だった。Dよ——この村の者たちが何年生きていたと思う? 今の話は三千年も前のことなのだ」
人蜘蛛の声に、憧憬のようなものが滲んだ。
「だが、夢はいつか醒める」
と彼はつづけた。
「〝御神祖〟にも破綻の予感はあったのだろう。村人たちはここを出て行くことは禁じられていた。それに抗う者もなく、また、彼らの誰も死ぬことはなく、村は三千年に近い歳月を耐えてきた。そして、ある日、彼らのうちの何人かが、不意に村を出たいという衝動に駆られたのだ。それは、どうしようもない性質なのかも知れん。外へ出たい。そして、人間の血を吸いたい、と。おれの仕事は、そのときはじまったのだ。村は霧に閉ざされた。出て行った者は永劫にその中をさまよい、入ってくる者たちは、すべてこの村を知らずに去る。それが霧の持つ意味だ。そして、以後、血の飢えを抱いた者たちは、みなおれが始末した。彼らの

すべてが死に絶えても、霧が晴れることはあるまい」
ここに霧はない。冷厳なる運命を抱いた生命を創造した機械群は、青い光の中でかすかな鳴動をつづけていた。
新しい生物――〝神祖〟は何を生み出そうとしていたのか。
Dの脳裡に、ある言葉が浮かんで消えた。
〝成功例は、おまえだけだ〟
「それでも、修正と治療の機会はあった。おれが処分しても、村人たちは死ななかった。さっき、おまえが見たとおりにな。もうひとりの〝管理者〟が彼らを蘇生させ、新たな記憶を与えて生活を続行させてみた。だが、それも……Dよ――殺戮と再生は、それまで何百度となく繰り返されてきたのだ。そのたびに彼らが血を求めずにいる期間は短くなり、ついに、ひと月と保たなくなった。そして、サイクルはまた繰り返される。おれも殺戮に飽いた。Dよ――この村へ入って来られたただひとりの男よ、おぬしの剣なら、或いは――」
「管理者か」
こう言ってから、つづく問いを放たずDはふり向いた。
背後に二つの影が立っていた。
三つ目の影を肩に担いだ男は、ワチの兄であった。
「それは、この娘のことだ」
と彼は肩のリザをゆすって見せた。
「どうして意識を失ったかはわからねえが、ワチの話からすると、おめえにこの地下への通路を見つけられたくなかったんだろう。その〝処理係〟がおめえを片づけたら、眼を醒ますだろうよ。――おっと、動くんじゃねえ、蜘蛛野郎。この娘に何かあったら、その呪われたメカの調整はどうする？　霧の中でさまよってる連中が、一斉に外へ跳び出しちまうかも知れねえぞ」
「何が望みだ？」
訊いたのはDであった。
ちら、と怯えを含んだ視線を彼に送ってから、兄は人蜘蛛に向かって、
「おれとワチだけ――外へ出せ。後の奴は構わねえ」
と言った。ひどく利己的で卑しい表情をしていた。
「リザを戻して、下がれ。処分は後でする。それまでは生かしておいてやろう」
と人蜘蛛は応じた。
兄の眼に赤光が点った。獣の唸りを上げてリザを下ろし、髪の毛を摑んで白い喉をさらけ出す。
「それなら、この娘の血で外の人間どもの代わりにしてくれる。〝管理者〟も殺せるか、〝処理係〟よ」
白い首すじへ兄の口が吸いついた。ワチが躍りかかったのはその刹那であった。
「D――リザを！」

悲痛な声は苦鳴に変わって、ワチは跳ねとばされた。引き裂かれたその首すじから鮮血が飛び散った。

口を血に染めた兄が身をひねってリザを見た。その前に世にも美しい黒影が立った。D。

牙を剝いて跳躍に移ったその姿を、翻るコートが魔鳥の羽根のように包んだ。

白刃を手に、Dがその位置を変えたとき、兄は床上にわだかまる塵と化していた。

「リザ……」

よろめきつつ、人蜘蛛が抱え起こした少女に歩み寄ろうとするワチの前で、少女は静かに起き上がった。

少女への想いは血の渇望に打ち克ったのか。それとも——

リザ、おれは……

広げた両手の中にリザが身を入れた。ワチの身体はわなないた。のけぞった口から血塊が溢れた。その背から、真っすぐにのばしたリザの右手指が突き出ていた。

見る見る塵と変わる少年を見下ろして、

「咬もうとしたか?」

とDは訊いた。リザの答えは、

「——わからない」

であった。青い光だけが三人と——果てしないメカニズムの影を包んでいた。

ふと、Dは気づいた。

「霧が出てきたな」

兄弟を追ってきたものか、白布に似た流れが、静かに三人の足下を漂っていた。

村を出るときも、夜明けなのかどうかはわからなかった。霧はなおも渦を巻き、見送りに出た人蜘蛛とリザを淡い影のように滲ませた。彼らはもう誰ひとり訪れてくるはずもないこの村で、永劫に虚しい再生と処理と管理とをつづけるのだろうか。

柵を抜け、しばらく馬を進めてからDはふり向いた。二人の影はもう見えなかった。別れの言葉もない別れであった。

騎馬は歩きはじめた。

やがて、霧の奥からおびただしい人影が現われて、Dの両脇を通りすぎた。血走った眼。牙を鳴らす口——だが、

「あの飢えが満たされることはあるまいな」

と左手が言った。

それから、長い時間をかけて、Dは霧の村を出た。夕暮れであった。街道を往き来する旅人たちを、白いものが包みかけていた。

Dは静かに、

「霧が出てきたな」

と言った。

(2000年9月)

AMANO YOSHITAKA "D"collection

城の住人

菊地秀行

新宿の「ロフト／プラス・ワン」で行った「忘年怪2」の福引の賞品。前回は「魔界都市ブルース」であった。もう少し長くするつもりだったが、時間がなかった。好編だと思う。

「お眼醒めですか？」
少年の一日は、マリアのこの声ではじまる。
「うん。――お陽さまは出てる？」
「もう高うございますよ」
瞼(まぶた)をこする少年へ、若い召使いは母のような笑顔で応じる。
「ふーん」
少年はベッドを出て、ガウンを羽織り、長い階段の果てにある居間へ入る。
光が満ちている。
絨毯も壁紙もシャンデリアも――豪奢(ごうしゃ)な館にふさわしい装飾がすべて欠如しているのは、少年の祖父の趣味だと、マリアは教えていた。
「お母様は何処へ行ってしまわれたのだろう。お父様は何処へ行ってしまわれたのだろう」
食事中、必ずこう尋ねる少年へ、
「お二人でご旅行中なのです。お手紙が参っておりますよ」
とマリアは、青銅でできた葉書きを見せる。文面はその都度異なるが、元気におすごし、愛しの××、で終わる便りを、少年は何度も読み返すのだった。
食事が終われば、世界は少年のためにある。
「今日は南の国だよ」
黄金の槍を片手に宣言する少年を、優しい眼で見つめながら、マリアはうなずいて、その手を取ろうとする。
「よしてよ。僕は子供じゃないんだから」
「存じておりますわ。でも、危ないところへ行ってはならないと、お父様とお母様から、きつく言われておりますの」
「危ないところ？」
そんな年頃にふさわしい、好奇に満ちた瞳がかがやいている。

「あそこかな？　北の国にある黒い部屋？」
マリアは少し表情を変えて、
「――どうして、ご存じなのです？　どの国もひとりでいらしてはいけませんと、あれ程、ご注意申し上げましたのに」
「僕はもう子供じゃないよ」
と少年はすねたように繰り返す。
「それに、僕の国にいるのは、もう飽きてしまった。随分長いことここにいるんだもの。マリアは僕よりずっと小さかった」
「よくわかりますわ」
とマリアは言った。
「でも、申し上げましたね。お父様とお母様がお戻りになられるまでは、この国を出てはいけません。お遊びになる道具は、たくさんあるはずです」
「それはそうだけどさ。でも、みんな飽きちゃったよ」
「他所(よそ)の国は面白いですか？」
「ううん。ここと同じ。長い廊下がどこまでもつづいてて、カーテンが風に舞って。そして、だーれもいないんだ」
「なら、今日は道具でお遊びなさい」
少年は、ちょっと唇を尖らせたが、マリアの表情に、例の――滅多に見せないが、見せたとなると、一歩も退かぬ決意の色を認めて、渋々とうなずいた。

道具は確かに飽きるほど揃っていた。小さなドームに入ると、少年は無数のお陽さまがかがやく宇宙(そら)の果てまで行くことができたし、奇怪な魚たちが蠢(うごめ)く暗い海の底をうろつくこともできた。
そんな怪物たちとは、別の広間で戦う羽目になった。
怪物は意外に強く、少年は何度も危機一髪のところまで行ったが、自分でも驚くほどの力が発現して、そのたびにやっつけてしまった。怪物の牙や爪や放射する光は、絶え間なく少年を傷つけたが、痛みを感じるのはいっときのことで、数分後にはもう回復していた。今日もそのうちの一匹と戦い、少年はすぐに飽きてしまった。
もう長い長いあいだ、そいつらと戦ってきたのだから、無理もない。
しかし、熱い飲みものを運んできたマリアへ、汗を拭いながら話しかける少年の眼は、ふたたび燃えるかがやきを取り戻していた。
「凄い敵と遇(あ)ったよ」
と少年は、ここ何年も発したことのない、熱い声を紡(つむ)いだ。
「まあ、どんな敵ですの？」
「あれは――騎士だな。黒づくめで――本当に頭から爪先まで黒いんだ。他の色がついているのは、胸の青いペンダントと――白い顔」

「白い顔？」
「そうさ。お陽さまみたいに白くかがやいている。あんなきれいな顔、見たことがない。お母様よりきれいなんだ」
「それは、いい夢でございました」
　とマリアは、この娘がいつもそうするように哀しげに笑ってみせた。
「夢かなあ」
　と少年は首をかしげる。子供の望みは夢を現実に変えることだ。
「そうに決まっています。それに、そんな騎士はおりません。黒づくめは——死の色でございます」
「シの——色？」
　少年の眼が不思議そうに細まった。
「シって何だい？」
「何度も申し上げましたが、おわかりになりませぬか？」
「全然」
　と、かぶりをふってから、少年はすぐに、
「でも、それは、ひょっとして、とても怖いことかなあ？　だったら、あいつこそそうだよ。あんなにきれいなくせして、僕はにらまれた途端、身動きひとつできなくなった。身体中から汗が噴き出して、じきにそれも止まった。僕は干からびたミイラになってしまったんだ。奴は指一本動かさず、僕をやっつけた。シって、怖いの意味か？」
「そうですわ」
　マリアは愛しげに少年を見つめてから、高い高い天窓を見上げた。
「どこでその敵と？」
「昨日見た夢の中でさ」
　少年は、霧の怪物を二つにしたばかりの黄金の剣を得意げにふり廻した。
　マリアは何故か眼を閉じた。その肩が小刻みに震えているのを見て、少年はふくれ面をした。
「何がおかしいんだ？」
「いいえ。おかしくなんかありません」
「——泣いてるの？　心配いらないさ。僕のアルカードの剣で、マリアを泣かす奴など、みいんなやっつけてやるよ」
　マリアはそっと瞼を拭い、少年の肩に手を置いた。それはそれは優しく、労るかのように。
「そうですね、若様はお強いですものね。——でも、そんな怖い敵が来るのは、きっと随分先ですね。それまでは——」
　少年は断固、かぶりをふった。
「そんなことないよ。僕にはわかるんだ。あいつはもう、そこまで来てる。——何を見てるんだよ、マリア。そんな顔をするな。僕まで哀しくなるじゃあないか」
　いいえ、とマリアは答えて首をふった。赤茶の髪が、

繊細な竪琴（ハープ）弾きの指に託された弦のように切なげにゆれた。

「そんなことありません。若様はきっと私を守って下さいます」

「もちろんさ。おまえはずっと僕のそばにいてくれた。誰もこの国からいなくなっても、おまえだけは残った。今度は僕が守る番だ」

　少年はマリアの前で誇らしげに胸を張った。高々と掲げた剣が陽光を跳ね返した。

「敵」がやって来たのは、ひと月後であった。陽光がひめやかにさし恵む大ホールで、マリアは黒い美丈夫を迎えた。

「――貴族がいるな」

　と彼は言った。

「まだ幼い子です」

　とマリアは答えた。

「いずれ成人になる」

「いいえ」

　左右にゆれる少女の顔と髪とを黒衣の若者は見つめた。

「あの方は――大きくなれません。そういう貴族が時折生まれると、侍医が申しております。お生まれになってから二〇年になりますが、今でも――」

「何処にいる?」

　と若者は訊いた。マリアの話も、哀しげな話しぶりも知らぬげな、陽光のように冷たい声であった。

「この城の何処かに。お捜しになられますか?」

　とマリアは、微笑を含んで言った。それだけが、避けようのないシへの最後の抵抗だとでもいう風に。

「おれはダンピールだ」

　と若者は言った。

「貴族の血は貴族を招く。――どけ」

　長い道を若者とマリアは歩き出した。

　巨大な城壁の門の通路は谷間の道のようであり、ひとつの棟を越すには、高さ一〇キロまでを五秒で上昇する重力カーを使わねばならなかった。

　頂きの展望室で、眼下に広がる居城や尖塔、回廊の集積を見下ろす若者の横顔を、マリアは恍惚と眺めた。この男（ひと）の美しい眼に、わずか三日で築き上げられたという貴族の大伽藍（だいがらん）は、どのように映っているのだろうか。壮大華麗な吸血鬼文明の遺跡か、かりそめに覇（は）を唱えた薄明の一族の、虚しい墓所か。

　青い重力泡に包まれて最下層の回廊に降り立ち、やがて、北の居城の前に辿り着いたとき、マリアは、ああ、と嘆息した。

　若者の歩みを食い止めるべき貴族のメカのことごとくは、すべて作動しなかった。迷路ですら、この若者の前にはひとすじの道となり、飢餓空間は、恥ずかし

げにその口を閉じた。
「ここが襲撃されたのは、一〇年前のことじゃ」
それは姿なき声であった。マリアは、はっと若者の左手の方を見たが、もちろん人影など存在しなかった。長い夢を見ているような気がマリアはした。
「その面影が破片もないとは、余程優秀な修復機構が備わっていたらしい。生き延びた貴族ひとりを養うのはたやすい仕事だったろう」
聞こえない。マリアは廊下の端にそびえる豪奢な扉と、その前に立つ少年を見た。深緑のケープをまとい、黄金の剣を手にした一〇歳ほどにしか見えない貴族を。
扉は開いていた。
若様。自分の声を、マリアは遠く聞いていた。
「開けちゃったよ」
と少年は静かに言った。その眼に光るものがあった。
開いたドアの向うに、マリアは二つの寝台を見ることができた。
貴族の誇る自動修復機構も、少年の両親が蒙った傷だけは癒すことができなかった。
寝台からこぼれた灰は床に風紋を描き、一〇年前の悲劇と、この城に押し寄せた人間たちの怨みを、シーツから生えた二本の木の杭が伝えていた。
「お父様とお母様は、いつ旅から戻ったんだ、マリア?」
少女は眼を閉じた。
その視界を封じた闇の中で、少年は黄金の剣を抜いたに違いない。
そして、黒衣の「敵」に打ちかかったに違いない。
一度だけ刃と刃が相打ち、世にも美しい音とともに刀身が跳んで、遠い床の上に固い響きをたてた。
マリアは眼を開いた。
少年は扉の前に立って眼を閉じていた。
その前で、黒衣の美丈夫は刀身を肩に収め、きびすを返したところだった。
「待って」
マリアは後を追った。
若者は足を止めてふり向き、マリアを陶然とさせた。
「なぜ、城を出ない?」
と若者は訊いた。
「わかりません」
とマリアは答えた。正直な答えだった。
この城へ連れて来られたのは七歳のときである。少年はすでに――一〇歳に見えた。
息子の相手になってくれ。成人したら、おまえは無事に返す、と少年の父は言った。
「このお城には、成長に必要なものがすべて揃っています。食べものも、知識も、遊び道具も。私など必要ではありません。なぜ――?」
それでは、あまりに寂しいではありませんか、と少年の母が言った。マリアもそう思った。

あれから一〇年になる。
「おまえの母に会った。連れて来てくれと言われたが、それはおれの仕事に入らぬ——好きにするがいい」
ふたたび背を向けた若者を見送り、マリアは扉の前へと戻った。
少年はひとりで立っていた。
「私は——出て行きます」
とマリアは言った。少年は黙って視線を落とした。
「ここにいれば永遠に生きられます。私などいなくても」
少年は顔を上げた。それはこれから、精いっぱいの嘘をつくと告げていた。
「——おまえなど行ってしまえ、人間なんか」
マリアはそっと、小さな肩を抱いた。少年は跳ねのけようとしたが、マリアは離さなかった。陽光が——闇にかがやく陽の光が二人の影を床に落としていた。ひとつだけを。

長いことそうしていて、マリアは少年から離れた。
「さようなら、若様」
ゆっくりと後じさり、少女はすぐに背を向けて走り出した。口もとを押さえた手と指の間から、低い嗚咽(おえつ)が洩れた。それはいつまでも長い廊下と扉の前に立つひとりぼっちの少年の周りに漂って消えなかった。
だから——
少年は今でも彼の国にいる。五〇〇年後、その城を訪れた学術調査隊は、月光の下を走り廻る小さな足音や、廊下を曲がる後ろ姿を見たが、その正体はついにわからなかった。
彼らが見つけたものは、小さな部屋の寝台に横たわる老婆と思しい人物のミイラで、それも隊員のひとりが近づき、赤茶色をとどめた髪に手を触れた途端、粉々に砕けて一塊の灰になったという。

（２０００年12月　協力／牧史子）

吸血鬼小説総進撃 “D”の■(けんぞく)属たち

笹川 吉晴

ささがわ・よしはる
評論家。文庫解説に「かまいたち」（宮部みゆき）や「魔犬■喚」（朝松■）あり。ネットの「週刊書評」でも活躍中。

闇よりもなお暗き黒衣に身を包み、月の光よりなお白く輝く牙をもって、女の首筋より迸り出る真紅の血潮を飲み干すもの。太古より歴史の陰に潜み、悠久の時の流れの中を永遠にさ迷い続ける呪われた不死者(ノスフェラトゥ)——吸血鬼(ヴァンパイア)。この忌まわしくも魅力的な怪物たちの、小説における足跡を辿ることが、今回我々に課せられた使命である。いざ、足を踏み入れようではないか、恐るべき闇の世界へ——!

吸血■、近代に現わる

一八一九年、ジョン・ポリドリの短編小説「**吸血■**」（国書刊行会他）にロンドン社交界を席捲するルスヴン卿と名乗る謎めいた青年貴族が現われたとき、僕らの吸血鬼の歴史は幕を開けた。ロマン派の天才詩人バイロン卿をモデルに、抗(あらが)いがたい魅力で女たちを次々と虜(とりこ)にし、悪徳に耽(ふけ)って純朴な青年オーブレーを堕落から破滅へと導くこの華麗な誘惑者こそ、邪悪のヒーローたる近代的吸血鬼像を確立した偉大なる先駆者である。彼の登場によって、泥だらけの屍衣を身に纏(まと)って田舎の墓場に寝起きし、生臭い息を吐き散らしながら牛馬や仲間の百姓を脅かしていた土俗的なブルーカラーの怪物は、都会的で魅力に溢れた闇の貴族へと華麗な変身を遂げたのだ。

一躍斯界(しかい)の寵児となり、舞台や続編に引っ張りだことなった卿にあやかるべく辺境の眷属(けんぞく)たちも続々と文明社会に押しかけてくる。中にはN・ゴーゴリの「**ヴィイ（妖女）**」（一八三五／沼野充義編『ロシア怪談集』河出文庫他）やA・トルストイの「**吸血鬼の家族(ヴルダラーク)**」（一八四七／沼野充義編『ロシア怪談集』河出文庫他）のように地元を大切にして地に足の着いた（土に横たわった?）地道な活動に徹する者もいたが、大抵はすっかり踊らされて大衆消費社会に飲み込まれてしまった。〝一ペニーの戦慄(ペニー・ドレッドフル)〟と呼ばれる週刊の小説本紙上で著者匿名のまま（ジェイムズ・マルカム・ライマーと言われる）、一〇九週にわたって活躍した『**吸血鬼ヴァーニー**』（一八四七／矢野浩三郎編『怪奇と幻想①』角川文庫、および『ヴァンパイア・コレクション』に一部訳載）ことサー・フランシス・ヴァーニーなどはその典型である。ルスヴンの貴族イメージを踏襲しつつも過程を楽しむ誘惑者ではなく、何度退治されようとも甦ってひたすら女を襲いまくる扇情的でパワフルな悪に徹したその意気やよしだが、吸血に熱中するあまり時代設定や自己の出自にすら無頓着で、矛盾もお構いなしの行き当たりばったりときた。

もっとも、モンスター・ヒーローとしての吸血鬼像を明確に打ち出して人口に膾炙(かいしゃ)させたヴァーニーは、結局いつ果てるとも

知れぬ同じことの繰り返しの（作者に強要された）〝人生〟に倦み果てて火山の火口に自ら身を投げるのだから、俗化・消費され尽くしていく後の同族たちの種族的運命を予見していた哀しい存在とも言える。彼の一人称による独白は吸血鬼に表現すべき〝自我〟が芽生えたことを示しており、自分に振られた役回りとの間で引き裂かれるわけだから、色悪の役に徹するルスヴンよりも現代人に近いのかも。

一方、一八七二年、それまでは愛の妄執に突き動かされて、夜な夜な墓場より甦っては恋人の元に通っていたT・ゴーティエ**『死霊の恋』**（一八六三／岩波文庫他）のクラリモンドのような女吸血鬼たちの中からも、欲望に基づいて行動する新しいタイプの妖婦が現われた。**『吸血鬼カーミラ』**（シエリダン・レ・ファニュ／創元推理文庫他）ことマーカラ・カルンスタイン伯爵夫人である。彼女は獲物を求めて放浪し、気に入った相手を見つけるや巧みにその家に入りこんで、百五十年以上にわたって身につけた手練手管で誘惑して血を吸い尽くすのである。しかも彼女が目をつけるのは若く美しい娘ばかり。つまりカーミラはレズビアンの吸血鬼なのだ。禁断の一線を越えさせる誘惑の手口は、時代の制約から露骨な描写がないのがかえって淫靡。

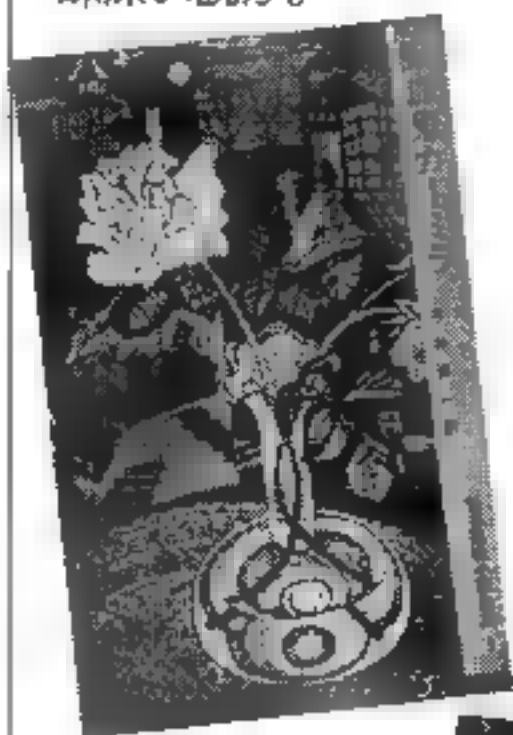
そんなセクシャルで狡猾な女吸血鬼に立ち向かうのは、先祖代々続く吸血鬼研究の大家ヴォルデンベルグ男爵。後に続々と名乗りを上げる専門的吸血鬼ハンターの偉大なる先達だ。

華麗なる悪の誘惑者あるいは凶悪無比な怪物、対するは勇気と知性の人——。単なる獲物が歯応え（牙応え？）のある好敵手となって吸血鬼側もついに本気になった。個人的に食餌をしているだけの小物どもに任せてはおけないと、一八九七年、一人の魔人が遠くトランシルヴァニアから乗り込んでくる。言わずと知れた吸血鬼の王——〝串刺し公〟ヴラド・ツェペシュことドラキュラ伯爵である。

すべてはDからはじまった

ブラム・ストーカーが召喚した**『吸血鬼ドラキュラ』**（創元推理文庫他）によるロンドン侵略は、人間・吸血鬼界の双方に大きな衝撃を与えた。何しろ世界に冠たる大英帝国の首都、最新の風俗や科学技術に溢れた先端文明都市ロンドンが、ヨーロッパの最辺境からはるばるやってきた中世生まれの怪物によって脅かされるのだ。しかもその正体は歴史上悪名高き串刺し公。その

「真紅の法悦」
我が国初の吸血鬼小説アンソロジーはポリドリ、レ・ファニュからマシスンまで。矢野浩三郎編「恐怖と幻想」（あるいは「怪奇と幻想」）の1巻目と併せれば、とりあえず基本はバッチリ。

「吸血鬼カーミラ」
貴族出身。名前のアナグラム、細かい生態、吸血鬼ハンターの登場など「ドラキュラ」に及ぼした影響は大きい。ちなみに、カーミラが想起させる〝血の伯爵夫人〟エリザベート・バートリとヴラド・ツェペシュの繋がりについては、R・T・マクナリー&R・フロレスク「ドラキュラ伝説」に興味深い説が。

「The Vampire」
原版は1960年にイタリアで編まれた、英米以外の名作にも目配りしている好アンソロジー。カーミラ映画『血とバラ』を撮った愛妻スケベ監督ロジェ・ヴァディムが序文を寄せている。

古(いにしえ)よりの悪の力に対抗するは、ただ人間の勇気と叡智のみ――！
ヴラド・ツェペシュという実在の人物が持つ圧倒的な存在感。膨大な量の情報（そして作者の創作）を基に、ヴァン・ヘルシング教授によって体系づけられた吸血鬼学の明確なイメージ。そしてプロットに巧みに取り入れられたディテールの〝今日〟性。これらをもってストーカーは、ドラキュラが〝現代〟に生きる血肉を具えた存在であることを強烈に印象づける。そして、あらゆる登場人物たちの語りが交錯しながら重層的に組み立てられていくこの記録が最終的に立ち上がらせるのは、唯一自らの語りを持たないドラキュラの孤高の姿なのだ。
「なんとかしてあのロンドンの雑踏する町のなかで――あの殺到する人の渦のなかで、生を味わい、世の中の移り変わりを見、死をともにしとうなっての」（平井呈一訳）
と語る彼の言葉には、どこか寂しさが漂う。そして終幕、ついに滅びのときを迎えたドラキュラを描写するあの一文！ ここに至って、ついに吸血鬼という怪物は人間と同等の〝内面〟を獲得する。
こうして、ドラキュラ伯爵はロンドン制圧こそ失敗したものの吸血鬼の脅威を天下に知らしめ、斯界に君臨する基礎を築いた。ドラキュラ以後の吸血鬼は皆、彼から生まれたも同然であり、どうあがこうとその影響から逃れることはできない。まさに名実ともに吸血鬼の王(キング・オブ・ヴァンパイア)。ドラキュラ伯爵の下、二十世紀を迎えた吸血鬼の王国は盤石の体制を築き上げげんとしていく。F・G・ローリング**「サラの墓」**（一九〇〇／岡達子編『イギリス怪奇幻想集』現代教養文庫他）、M・R・ジェイムズ**「マグナス[illegible]」**（一九〇四／『M・R・ジェイムズ傑作集』創元推理文庫他）、マリオン・クロフォード**「血こそ命なれば」**（一九一一／『真紅の法悦』他）、アルジャーノン・ブラックウッド**「移植」**（一九一二／『ブラックウッド傑作選』創元推理文庫他）、E・F・ベンスン**「塔の中の部屋」**（一九一二／『真紅の法悦』他）など、後に名作傑作としてアンソロジーの常連となる顔触れが輩出した。
しかし、やがてこうした吸血鬼たちの活動を雲散霧消させるような大事件が勃発する。二度にわたる世界大戦である。

世界に散った吸血鬼

一九一四年に勃発した第一次世界大戦は人類史上初の機械的な大量虐殺となる。それは吸血鬼たちにとっても大きな衝撃だった。自分たちが一人一人に対して丁寧に、情熱をもって手作業で広めてきた〈死〉を人間たちがいとも容易(たやす)く、しかも効率的にばら撒いている！ だから、例えば不道徳なオカルト遍歴を重ねてきたドイツ人青年フランク・ブラウンはH・H・エーヴェルスの**『吸血[illegible]』**（一九二二／創土社他）において夢遊状態の中で女の血を吸う〝病〟に罹(かか)るが、その自らの行為を国家による吸血行為である〈戦争〉と重ね合わせる。その彼の目下の仕事は滞米ドイツ移民に国粋主義を喚(よ)び起こし、ヨーロッパの戦争に従軍させるアジテーションなのだ。また、カール・ジャコビの**「黒の告知」**（一九三三／『吸血鬼伝説』他）では故郷の城を戦火によって破壊された青年が従軍してMIAとなるが、戦後アメリカで吸血鬼となって発見される。新しい戦争が生み出した、新しい吸血鬼の姿がここにはある。
そして大戦の機械的な〈狂気〉をさらに組織化したファシズム、とりわけナチスが台頭してくるに及んで、吸血鬼たちの生活もまた脅かされ始める。例えば故郷で静かに暮らしていたドラキュラ伯は、M・M・ウェルマン**「悪魔を[illegible]るな」**（一九四〇／「ミステリマガジン」一九九九年八月号）の中で、居城に司令部を置こうと無礼なドイツ軍がずかずか上がり込んできたため、久し振りのお客様としてたっぷり〝おもてなし〟する。他にもナチという招かれざる

客にこってりとお仕置きを食らわせる吸血鬼がしばしばいたことが、F・P・ウィルスン**『ザ・キープ』**（一九八一／扶桑社ミステリー）、友成純一**『吸血山脈』**（一九九二／ソノラマノベルス）、朝松健**「夜の子の宴」**（一九九七／『邪神帝国』ハヤカワ文庫）などによって明らかになっている。

一方、多くの者はヨーロッパに見切りをつけてアメリカに渡った。国は広いし文明は若い。隠れ家にも獲物にも事欠かない。一九二三年には怪奇雑誌「ウィアード・テールズ」も創刊されてちょうどよい温床となった。夜型の人間が多い大都会や映画業界などに紛れ込んだり、静かな田舎に引っ込んだり。何しろ広いから、身の周りで慎ましくやっている分にはそうそう気づかれることもない。中にはロバート・ブロック**「コウモリはわが兄弟」**（一九四四／『ドラキュラのライヴァルたち』）のように〝人類吸血鬼化計画〟によって世界征服を企む気宇壮大な御仁もいたが、発想は町の発明おじさんレベルであっさり挫けた。

そう、もはや世界は吸血鬼個人には到底手に負えないほど巨大化していたのである。そのとどめが第二次世界大戦に衝撃的な幕を引いた〝核〟だ。一発の原爆が何万人もの命を一遍に吹き飛ばす時代、一人の吸血鬼にいったい何が出来る？　戦後、強大なエネルギーを手に入れた人類が恐怖する一方で繁栄を謳歌している間、吸血鬼たちは一部を除いて社会の片隅で細々と生き永らえるか、自己パロディを演じるかしかなかった。何しろあの闇の帝王ドラキュラ伯までがクロード・クロッツ**『パリ吸血鬼』**（一九七四／ハヤカワ文庫）のように、社会主義かぶれの子息ともども、道路工事で故郷の城を追い出されてパリでかつかつの暮らしを送る羽目に陥った挙句、吸血鬼俳優に転身せざるを得なかったのだから。

だが、さすがは太古より連なる闇の血脈。伝統派が行き詰まりを見せる陰で、新たな勢力が一族復権の機会を虎視眈々と狙っていたのである。そして一九七五年、アメリカはメイン州の田舎町より彼らの侵攻は開始された。

吸血鬼、立つ！

メイン州セイラムズ・ロット――この寂

「吸血鬼ドラキュラ」（魔人ドラキュラ）
先頃出た完訳はありがたいが、やはり平井呈一翁の名調子こそベスト。冗長になりがちな[illegible]もテンポよく、登場人物も生き生きとしている。直訳必ずしも名訳ならず。

「ドラキュラの客」
完成版からは削られたドラキュラ初登場は墓場に狼。かっこいいの一語に尽きる。

「吸血鬼ドラキュラ」（菊地秀行・文　天野喜孝・絵）
初接触の衝撃から40年、菊地秀行の原点回帰は数ある「ドラキュラ」のアレンジ中、ハマー映画「吸血鬼ドラキュラ」をも凌ぐ最高のバージョン！　なんとも燃える男のドラマだ。

「吸血鬼」
大量死の洗礼を浴びたのは本格ミステリだけではないのだ。主人公のフランク・ブラウンは「妖花アルラウネ」の誕生にもかかわっている。作者のエーヴェルスは「ドラキュラ戦記」に重要な役で登場。

れた田舎町に亡命ドイツ人カート・バーローが移り住んで来たとき、吸血鬼小説の新たな歴史が始まった。彼こそは凶暴にして狡猾、十字架の力さえも無力化してへし折る新世代の吸血鬼だったのである！　彼が人口一三〇〇人（映画では二〇一三人）の町を〝死〟に至らしめてゆく過程を克明に描いたスティーヴン・キングの『**呪われた町**』（集英社文庫）は二十世紀における吸血鬼、いや、ホラー小説の金字塔である。

　現代アメリカに吸血鬼が現われたとしたらいかなる事態が起きるのかを真正面から、リアルに徹して描き切ったこの作品は『ドラキュラ』がそうだったように、以後の同族たちに対する強い呪縛を伴った輝きを放っている。ここまでやられたらもう同じことは出来ない。新しい切り口を見つけるか、スケールを格段に広げるか――つまり何か違うこと、あるいは桁違いにでっかいことをやらかすしかない。

　後者を選んだ気骨ある男がロバート・R・マキャモンの『**奴らは渇いている**』（一九八三／扶桑社ミステリー）に登場する、ハンガリー王家の血を引くプリンス・コンラッド・ヴァルカンだ。八百歳を超え（D伯より年上！）いまだ少年の外見を持つヴァルカンは世界制覇の第一歩として、巨大都市LA（ロサンジェルス）全域を支配下に置くべく砂嵐で外部と完全に遮断。暴走族や殺人鬼を次々と配下に加え、各地区を計画的に制圧してその軍勢を爆発的に増やしていく。残念ながら外見同様、精神的にもいささか成熟が足りなかったためと、偶然の天災によって後一歩のところで野望は潰（つい）えたが、ほとんど王手だったのはお見事。

　それに対してさすが帝王の意地を見せたのがドラキュラ伯爵。ヴィクトリア朝に戻ったキム・ニューマンの『**ドラキュラ紀元**』（一九九二／創元推理文庫）で追撃してきたヘルシング教授を返り討ちにし、イギリスに舞い戻って何とヴィクトリア女王に婿入り！　大英帝国を吸血鬼支配の独裁国家に作り替えてしまう。シャーロック・ホームズら抵抗勢力は捕らえられ、人間たちは栄達のため、自ら進んで〝新生者（ニューボーン）〟と呼ばれる吸血鬼になることを望む――。

　結局、ホームズの兄マイクロフトらの反逆によってドラキュラはイギリスを追われるが、続編『**ドラキュラ戦記**』（一九九六／創元推理文庫）ではドイツ皇帝を手懐（なず）けてドイツ軍最高司令官兼首相に就任。第一次世界大戦が勃発するや、撃墜王〝レッド・バロン〟ことリヒトホーフェン男爵率いる第一戦闘航空団（JG1）と巨大飛行船アッティラ号を先頭に立てて復讐戦を挑んでくる。JG1――通称〝リヒトホーフェン・サーカス〟の実態は巨大なコウモリ型の飛行怪物に変身する吸血鬼戦隊！　そして、ドイツ空軍旗艦アッティラ号より颯爽と降り立つ最高司令官ドラキュラ伯爵の勇姿――！

　伯爵以外にも古今の吸血鬼が有名どころからマイナーまで総登場。さらには歴史上実在の人物からフィクションの登場人物まで有名人が続々と吸血鬼の列に加わっていく。このままシリーズが現代まで辿り着いたとき、世界は吸血鬼のものとなってしまうのか!?

　否、人間とてこうした吸血鬼の侵略にただ震えて手をこまねいていたわけではない。いつの世にも悪鬼に対し敢然と立ち向かう、少数だが勇気ある者たちが存在するのだ！

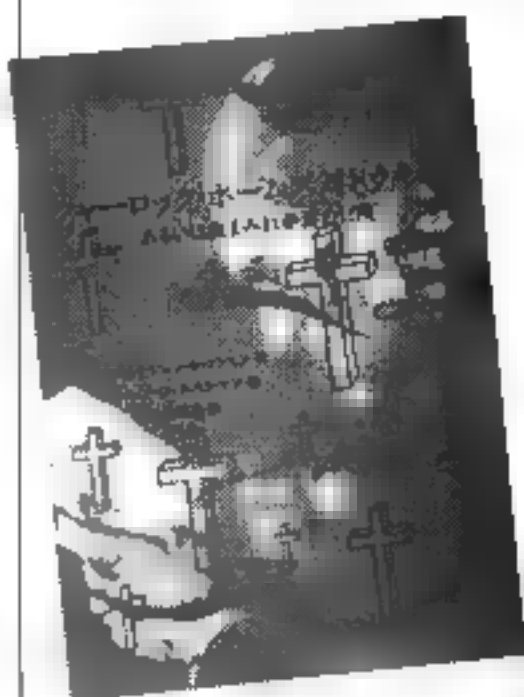
杭を打ち込め！

　対吸血鬼戦において必要なもの――それは何よりもまず〈知性〉である。ヴォルデンベルグ男爵、ヘルシング教授ら黎明期の吸血鬼（ヴァンパイア）ハンターたちは深い学識と強靭な知力をもって、初めて恐るべき敵と互角に渡り合うことができた。他にも、例えばM・W・ウェルマンの『**月のさやけき夜**』（一九四〇／『吸血鬼』国書刊行会他）によれば怪奇・推理小説の始祖エドガー・アラン・ポーが赤貧と病苦に喘ぐ中で吸血鬼に遭遇。知識を生かした機転によって辛く

もこれを撃退している。
情報の収集と分析が初期吸血鬼戦の死命を制していたのならその時代、ヴィクトリア朝のロンドンにこれ以上はないという適任者がいるではないか!? そう、かの名探偵シャーロック・ホームズだ。そして、彼があえて乗り出すにふさわしい相手となれば魔人ドラキュラ伯爵以外にはあり得ない! 一九七八年に発見されたジョン・D・ワトスン博士の未発表記録をローレン・D・エスルマンが編集した**『シャーロック・ホームズ対ドラキュラ』**(河出文庫)によれば、ヘルシング教授と同じくドラキュラのイギリス侵攻を見抜いたホームズは教授に助力を申し出るも拒否され、独自にドラキュラを追う。そしてベーカー街二二一Bにおいて、ついに相対する両雄!
「ミスター・シャーロック・ホームズだな? わしはドラキュラ伯爵だ」「死よりもはるかに悪いことというのがあるのだぞ、ホームズ君。考え直さぬ限り、きみはその意味を知ることになろう」(日暮雅通訳)。この堂々たる貫禄! さらには、何の見返りも得られぬのに生命を賭してホームズと行動を共にするワトスンにその理由を問うべく、追われる身となりながらもあえて舞い戻ってくる伯爵の姿に滲み出る帝王の孤独!(それに対し「シャーロック・ホームズは私の友人だ」とのみ決然と答えるワトスンの心意気よ!)
結局ホームズとヘルシングの肉迫にドラキュラは英国から敗走。一説によればホームズはドラキュラの甥にあたり、双子の吸血鬼の弟がいるともいうから(F・セイバーヘイゲン『ホームズ・ドラキュラ・ファイル』一九七八/未訳)吸血鬼に強いのも当然かもしれない。
こうした初期ハンターたちの尽力もあり、二十世紀に入ると吸血鬼に関する知識は広く一般に普及していく。吸血鬼退治は必ずしも専門家の仕事というわけでもなくなった。例えば六〇年代にはトランシルヴァニアの閑村で発生した吸血鬼事件調査のため、国際情報機関U.N.C.L.E.(アンクル)がエージェントを派遣した事例が報告されている。デヴィッド・マクダニエルの**『ソロ対吸血鬼』**(一九六八/ハヤカワ・ミステリ)は人気スパイTVシリーズのノヴェライゼー

「パリ吸血鬼」
独の測量部隊に城を追い出されたドラキュラの愛犬が、主人の子孫を慕ってアメリカに渡る忠犬映画『ドラキュラ・ゾルタン』もこの頃。言っとくけど、そちらはマジである。

「呪われた町」
個人的にはモダンホラーの最高峰、20世紀吸血鬼小説の最高傑作ではないかと思う。余分なものは何もない。足りないものもまた何もない。

「シャーロック・ホームズ対ドラキュラ」
P・カッシングがホームズ&ヘルシング、C・リーがワトスン&ドラキュラ、監督はもちろんT・フィッシャー——という映画が観たかった! それにしても菊地さん、訳したかったでしょう?

「ソロ対吸血鬼」
世界のオタクの父、F・J・アッカーマンまで登場。おいしい場面目白押しの奇蹟的な傑作だ! やっぱり吸血鬼は活劇に映える。

ションというか設定を借りたオリジナルだが、ドラキュラ伯からヴラド・ツェペシュの名を受け継いだ遠い親戚筋がU．N．C．L．E．の敏腕エージェント、ナポレオン・ソロとイリヤ・クリヤキンのコンビに襲いかかる。ちなみにナポレオン・ソロとは元を辿れば007の生みの親イアン・フレミングがTV用に生み出したキャラクター。つまり、これはドラキュラとジェームズ・ボンドの代理戦争なのだ。

　吸血現場に踏み込むやワルサーやトカレフの銃弾をぶち込むなど吸血鬼に対して本格的に銃火器を使用したはしりだが、もちろんびくともしないのですかさず掴んだ銀のナイフで十字架を組んで突きつけるあたり、燃えます！　アクション・シーンの痛快さもさることながら不気味な雰囲気描写も上々で、普段はクールなイリヤが吸血鬼に関してはやけに腰が退けているというところには、彼が吸血鬼伝説に馴染みの深いロシアからの亡命者だという設定がうまく活かされている。現在入手は困難だが、万一見つけたらとにかく必読！

　こうして手の内を知られ尽くした吸血鬼は人間を力でねじ伏せるべく、大規模侵略やテロリズムに走り出す。より凶悪・狡猾化した彼らに対処するには、知識に加えて重武装を施した高度な専門家が必要となった。エクソシストを擁する対邪悪機関――ローマ法王庁は早速、対吸血鬼の専従チームを設けている。と言っても外注だが。ジョン・スティークレーの**『ヴァンパイア・バスターズ』**（一九九一／集英社文庫）が報告する〝チーム・クロウ〟は法王庁と契約した吸血鬼駆除会社の社員たち。吸血鬼出現の報せを受けるや現場に急行、鎖帷子に十字弓で武装し、「ロックンロール！」の雄叫びとともに車のウィンチで吸血鬼どもを日射しの真っ只中に引きずり出してとどめを刺す。一見豪放磊落だが神経をいつも張り詰め、残虐行為も躊躇なく行わねばならないため精神のバランスを、酒やクスリに溺れるようにして、常に危ういギリギリのところでどうにか保っているハードでヘヴィな仕事だ。しかも助けた相手からは疎まれ（彼らの〝家族〟や〝隣人〟を彼らに代わって虐殺するわけだから）、おまけに性悪な相手に手を出してしまったためしつこく付け狙われて仲間は次々と殺され、片時も気の休まる間がない。もう毎日がゲリラ戦である。

　こうした対吸血鬼戦の頂点は、魔界都市〈新宿〉を舞台にした菊地秀行**『夜叉姫伝』**（一九八九～九二／祥伝社文庫）だろう。四千年もの間さ迷ってきた〝姫〟が安住の地として魔界都市に狙いを定めた。中国から来た四人の最強の吸血鬼を総力を挙げて迎え撃つ〈新宿〉側もまた、誰一人として〝普通〟の人間がいないという、まさに〝魔戦〟！　魔界都市が迎えた誕生以来最大未曾有の危機を描き切ったスケール感もさることながら、一方で永遠のさ迷い人たる吸血鬼の哀しみをも描出してみせる、世界の吸血鬼小説史上希有な傑作だ。

　そして戦いは遠い未来までも続く。西暦一二〇九〇年、一度は地球の覇権を握りながらも衰退した吸血鬼と叛旗を翻した人類は辺境で闘争を続けている。さまざまな特殊技能を身に付けた吸血鬼ハンターたちが我が物顔で跋扈する時代、一番の凄腕はもちろん――！

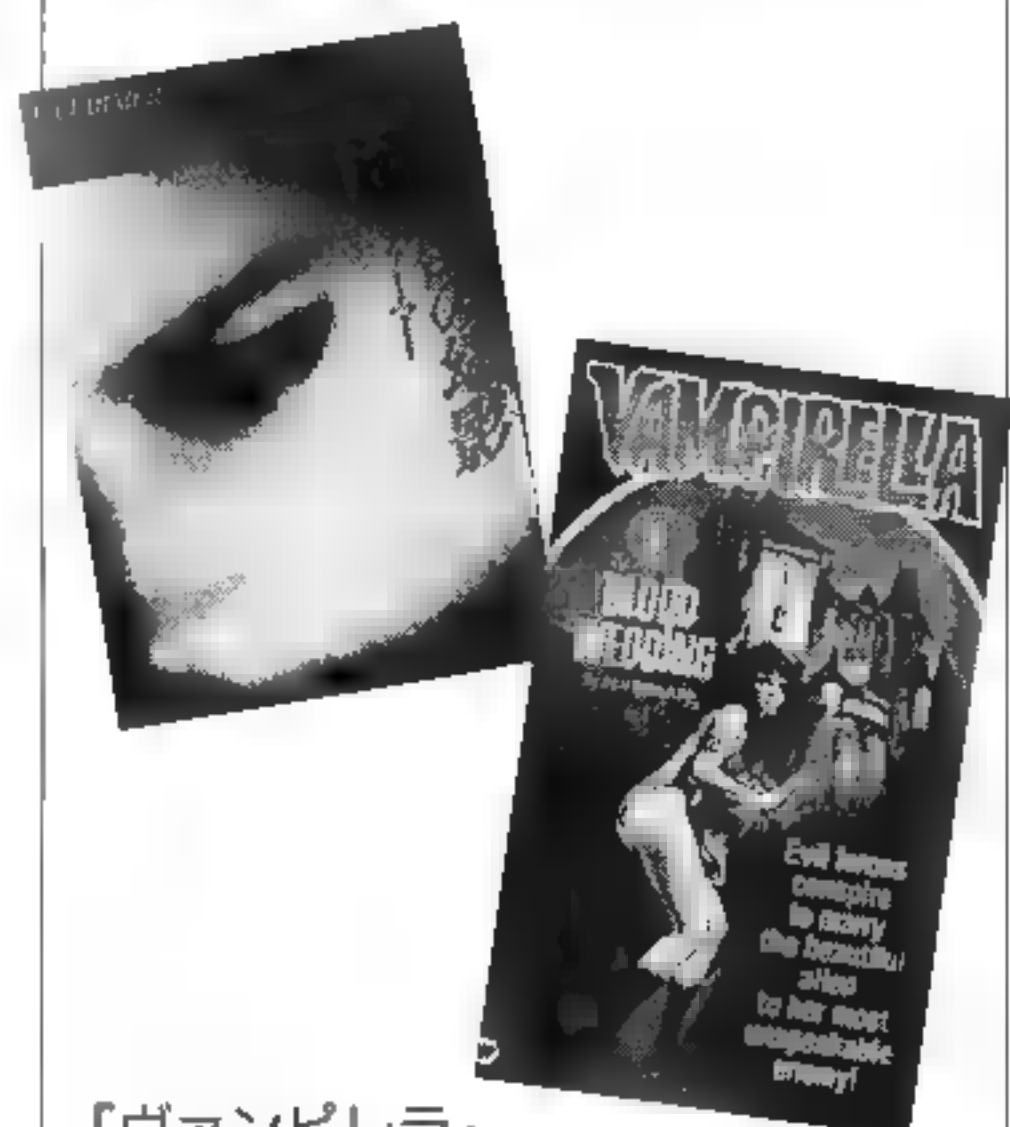
吸血生活

戦いを通じて吸血鬼のさまざまな生態も明らかになってきた。まず生息場所だが現在では、大抵の連中はやはり辺鄙な地よりも都会を好む。夜型の人間も多いから目立たないし〝餌〟も豊富というわけだ。また、定住を避けて飛行機（S・キング**『ナイト・フライヤー』**一九八八／新潮文庫）や船（G・R・R・マーティン**『フィーヴァードリーム』**）、車（P・Z・ブライト**『ロスト・ソウルズ』**一九九二／角川ホラー文庫）などで放浪し、行く先々で獲物を調達

している連中も多い。
　定住する場合にはカモフラージュのためにも職業が必要だ。風俗店で男から根こそぎ吸い取るレイ・ガートンの『**ライヴ・ガールズ**』（一九八七／文春文庫から刊行予定）のような〝天職〟もあるが、大抵はバーテン、ミュージシャン（共に『ロスト・ソウルズ』）などの水商売や業界人。ガソリンスタンド（田中文雄『**[illegible]の[illegible]様**』一九八八／ソノラマノベルス）や工場（『パリ吸血鬼』）の夜勤など昼夜逆転の仕事に就いている。変わったところでは軍隊に入った奴もいた（M・W・ウェルマン『生ける亡者の恐怖』一九三六、D・ドレイク『最後の手段』一九七六／共に『**ドラキュラのライヴァルたち**』）。死が日常的に大量生産されるところだからちょっとくらい吸っても分からない。あと意外に多いのが医者。血液は入手しやすいし、小さな町なら検死も自分で出来るから誤魔化せる。
　また、もともと貴族などの資産家だったり長期にわたって資産を運用していたりするから、趣味のお店経営（『呪われた町』、菊地秀行《**[illegible]き影のリリス**》一九九五～／中公文庫）程度で悠悠自適に暮らしている者も多い。
　対照的にいじましいのが倉阪鬼一郎の『**赤い額縁**』（一九九八／幻冬舎）、『**白い館の惨劇**』（二〇〇〇／同）に登場するコンビ。フリーライターや翻訳をやりつつ、それだけでは食えないので小説の新人賞の下読みをバイトでやっている。それで資金を貯めて将来の値上がりを見越した古本転がしをやろうというんだから、人間のオタクと変わらない。
　その素人探偵コンビ物や《緋の墓標》シリーズなどによれば、吸血鬼業界には相互支援組織が存在する。いろいろと制約のある種族だから、人間に混じって安全に暮らすためにはそうした組織があると安心だ。探偵コンビが属しているのは防諜対策にあぶり出しハガキを使うような暢気な互助会的組織（何しろ勧誘制）だが、新しい身分の提供など仕事はきちんとしている。これが《緋の墓標》シリーズの組織になるとかなり大規模な国際秘密機関のレベルであり、人間社会の隅々にまで根を張って協力者も多い。武装勢力もあり、仲間を危険に晒す

『黒い黙示録』
　古書怪談でもある「黒い告知」を原表題とするジャコビの短編集。吸血鬼とは関係ないが、貝のお化けが登場する「水槽」も不気味な傑作。

『吸血山脈』
　吸血鬼の恐怖も、ナチの暴走する変態行為の前にはすっ飛んでしまうあたり、さすがスプラッター・キング。『ザ・キープ』というよりも友成版『戦争のはらわた』か、はたまた『ナチ女収容所』か『カリブゾンビ』か。

『淫獣の幻影』
　吸血鬼に率いられた異次元妖怪集団VSハードボイルド探偵。SF界の巨匠P・J・ファーマーが1965年にものしたアメリカ版超伝奇ヴァイオレンス。日本ではポルノ文庫の叢書から刊行されたが、訳者が朝松健というのも一部では有名。

『ヴァンピレラ』
　宇宙から来た正義のセクシー女吸血鬼。オタク野郎の夢の結晶だ。1969年に登場した人気アメコミの小説版。

者には厳しい掟も存在するが、基本的には人間と共存共栄していくことを目的とした平和的性格を持つ。ちなみに彼らは〝吸血鬼〟は差別語として嫌い、自分たちのことは〝不死者〟を表す〝ウブリル〟と呼ぶ。これほどではなくても、緩やかなネットワーク程度のものは結構存在するようだ。

歴史への招待

組織化の有無にかかわらず歴史の陰に身を潜め、あるいは関わってきた者たちも長命な種族だけに多い。中には歴史上有名な人物が実は――という場合も結構ある。例えば歴史上名高い謎の不死者サン・ジェルマン伯爵なども吸血鬼であったと伝えられている（チェルシー・クイン・ヤーブロ《サン・ジェルマン伯爵》シリーズ、一九七八～／未訳）。

近代吸血鬼の祖、ルスヴン卿のモデルとなったバイロンが実際に吸血鬼だったと暴露するのはトム・ホランドの**『真紅の呪縛』**（一九九五／ハヤカワ文庫）だ。旅先のギリシャで吸血鬼の王族に見初められ、吸血鬼にされたバイロンは精神的彷徨を重ねる。彼にしつこく絡むのは、冷たくあしらわれた意趣返しに「吸血鬼」を書くポリドリ。続編の**『渇きの女王』**（一九九六／ハヤカワ文庫）では、インドの奥地で死の女神カーリーとして崇められていた女吸血鬼がロンドンに襲来。若き医師エリオットと共に立ち向かうのはブラム・ストーカー！　つまり一作目は「吸血鬼」、二作目は『ドラキュラ』の裏面史になっているわけ。自分の子孫の血だけが吸血鬼の不老性を保つという設定も効果的に使われている。

きゅうけつき奇想天外！

吸血鬼の生態研究が進むに従い、その実態に関する考察やさまざまな変わり種の報告も次々に寄せられるようになった。まず考えられるのは吸血行為が何らかの病気、あるいは遺伝に関する異常ではないかということ。『渇きの女王』でもバイロン卿が実験治療をエリオットに託しているが、半村良の**『石の血脈』**（一九七一／ハルキ文庫）は肉体を変質・石化させた後、不死の超人として甦らせる代わりに大量の人血を必要とする奇病と、それを巡って太古より連綿と続いてきた秘密結社の存在を報告している。また、ダン・シモンズの**『夜の子供たち』**（一九九二／角川文庫）は、免疫不全体質を他者の血液摂取によって驚異的な自己回復能力に転化する遺伝子を受け継ぐ、ルーマニア生まれの一族が隠然たる闇の勢力を誇っているという秘密を告発する。

伝染性という点からウィルス説も根強い。リチャード・マシスンの**『地球最後の男』**（一九五四／ハヤカワ文庫）は細菌戦の結果らしい〝吸血バチルス〟の蔓延により、世界中の人間が吸血鬼と化した事実を突き止める。ただ独り残った男ネヴィルの家を夜ごと取り囲み、生血を求めて叫ぶかつての隣人たち――！　ちなみにネヴィルは平凡な中年の元工員だが孤独な極限状況の中、地道に吸血鬼を狩る傍ら独学で吸血鬼現象全般について実験・研究を重ね、多くの興味深い仮説を立てた新吸血鬼研究の先駆者。私生活における絶望的に深い孤独と寂寥も哀切な必読の記録だ。

また、デヴィッド・マレルの**『トーテム』**（一九七九／ハヤカワ文庫）は、ワイオミングの山麓で発生した新種の狂犬病が感染者を食人集団へと退化させた事件を記録している。彼らは一旦死んだ後蘇生して原始的なカルトを形成し、人間狩りを始めるのである。

ウィルスと似たところでは寄生生物説もある。北上秋彦の**『呪葬』**（二〇〇〇／アスペクト・ノヴェルス）では南方から復員兵が持ち帰った生物が心臓と脳に寄生し、宿主の身体が生体活動を停止した後も血を求めて動かし続ける。大原まり子の**『吸血鬼エフェメラ』**（一九九三／ハヤカワ文庫）になると寄生というより身体を乗っ取って

その人間に成り済まし、意識も人間同様に持っている。

一方、山田正紀の『[illegible]氷民族』（一九七六／ハルキ文庫）や『**フィーヴァードリーム**』、押井守の『**獣たちの夜**』（二〇〇一／富士見書房）などは吸血鬼を人類とは別系統種族としており、血を吸われた人間が吸血鬼に変わることもない。

別種族ということではこれ以上はないのが宇宙から来た連中だ。古代ムー帝国を作り上げた吸血神ヴァーオゥは地球へ不時着したラルーサ人であり、吸血行為によって共生体ゾルーカを相手の体内に注入し不死の超人化する。追ってきた敵ガゴールとの戦いに破れ、永い眠りについたヴァーオゥを再び目覚めさせる血を持った少女キキを巡って勃発するのが、笠井潔の『**ヴァンパイアー戦争**』（一九八二〜八八／角川文庫）だ。壮絶な暴力と奇想が人類文明史を大胆に読み替え、地球全体の命運を賭けた大戦へと発展していく。半村良の〝伝奇ロマン〟や平井和正の《ウルフガイ》と、菊地秀行・夢枕獏の超伝奇ヴァイオレンスを繋ぐ先駆的大作である。

一方、火星の妖女「**シャンブロウ**」（C・L・ムーア、一九三三／ハヤカワ文庫）やA・E・ヴァン・ヴォークト『**聖[illegible]**（避難所）』（一九四二／『吸血鬼伝説』他）のドリーグ生命体、その影響を受けた『**宇宙ヴァンパイアー**』（コリン・ウィルスン、一九七六／新潮文庫）ことウボ＝サスラ人らはいずれも人間から生命エネルギーを吸い取る。特に『**宇宙ヴァンパイアー**』は思索的側面を持つ一方で、死体を乗せて漂流してくる巨大宇宙船、女一人に男二人の吸血鬼、精神病院に潜む配下、精神感応による追跡など『ドラキュラ』の物語構造を実に巧みに換骨奪胎した、正当派怪奇SFとしても読み応えがある。

似たような種族に〝マインド・ヴァンパイア〟というのもいる。吸血鬼全般にも言えるが強い精神力で相手を支配して意のままに操り、その恐怖や苦痛を糧とするのだ。ダン・シモンズの『**殺[illegible]チェスゲーム**』（一九八九／ハヤカワ文庫）はこのマインド・ヴァンパイアの一団が世界を裏で牛耳っていることを明らかにする。ホロコーストなどにも関わっている彼らは年に一回孤島に集まり、捕らえてきた人間たちを駒にする殺人ゲームに興じるのだ。

他にも各地の辺境で発見された土俗種や、透明だの不定形だのの怪物を紹介していたらきりがない。いっぱいいるんだ、変なのが。

「石の血脈」
菊地ファンは平井和正と半村良と山田正紀を読め。吸血鬼と人狼の上下関係についての理屈がすごい。

「地球最後の男」
ロメロの“リビングデッド”シリーズの元ネタ。読んでいて、果てしなく落ち込んでいく傑作である。“I am Legend（私は伝説だ）”という原題の[illegible]味は衝撃的。

「宇宙ヴァンパイアー」
「ドラキュラ」の見事な本歌取り。ウィルスン・ファンにはボロクソの映画版も、あれはあれで面白い。[illegible]いの人、T・フーバーに[illegible]索を求めるのが間違っている

吸血鬼上陸す

これだけ精力的に活動している吸血鬼だから、当然この日本にも姿を現わしている。我が国には土着の吸血鬼がいなかったからことごとく外来種になるわけだが、意外にもその渡来の歴史は古い。少なくとも江戸初期にはすでに出現していることが確認されている。横溝正史の『■■■校」（一九三九／角川文庫他）によれば文化九年（一八一二）、髑髏検校なる吸血鬼が松虫・鈴虫という二人の女吸血鬼を引き連れて将軍家に仇なさんと江戸に跳梁したが、博学者・鳥居蘭渓によって阻まれたとある。日本初の長編吸血鬼小説は、当時まだ訳されていなかった『ドラキュラ』を実に巧みに江戸に移し替えた、怪奇味満点の傑作時代活劇だ。長崎沖の不知火島なる孤島に眠っていた検校の正体は――一応伏せておくが天草・島原の乱に由来する。

同じく『ドラキュラ』を翻案した山田正紀の『**天動説**』（一九八八～八九／カドカワ・ノベルズ）もやはり島原の乱と関わりがある。天保十年から十二年（一八三九～四一）にかけて江戸で頻発した怪異の陰には蝦夷地より来襲し、甲賀の忍術遣いを手足に江戸城内の覇権争いにつけ込んで暗躍する〝さたん〟と呼ばれる吸血鬼の存在があった。甲賀衆は遡れば天草・島原の乱の際、城攻めに参加した。このとき吸血鬼とキリシタン憎しで結びついたとみられる。最新の研究によれば安土・桃山時代にはすでに吸血鬼が来襲し、それを追って来日した教会の騎士と織田信長らが共闘したらしいが（ゆうきりん『**戦国吸血鬼伝**』二〇〇一～／ハルキ文庫）、ともかくキリスト教伝来と軌を一にするように対抗者たる吸血鬼もやってきたことは間違いないだろう。

昼行灯（ひるあんどん）だが夜になると剣技が冴える貧乏侍・小森鉄太郎、岡っ引き仙三らの奮闘によってさたんは江戸から撤退。追撃した蝦夷地での決戦を経て勝負の舞台は大陸に移り、明治の御代、日露戦争にまでなだれ込む！　悪の象徴・吸血鬼は決して滅びず、人間の愚かしい争いの陰で暗躍する。スケールの大きな中にどこか虚無感の漂う伝奇巨編の傑作だ。

下って大正期、ロシア革命を背景に帝国軍人と吸血鬼の共闘を伝えるのが田中文雄『**黄金（ロマノフ）■の■照**』（一九九二／ソノラマノベルス）、《緋の墓標》の一編だ。目的は革命で追われたアナスタシア皇女の救出。敵は皇帝（ツァーリ）ニコライ二世の亡霊を甦らせロシア支配を企む希代の怪僧ラスプーチンと、彼の操るゾンビ軍団！　吸血鬼・日本軍部・ボルシェビキ政権・白ロシア軍などのさまざまな思惑が絡んだ近代裏面史は著者の『**邪神たちの２・２６**』と同様に、超自然というファクターを通して常識的な歴史を読み替える。

昭和に入り、十五年にわたる戦争へと向かう暗く殺伐とした時代にも吸血鬼は出没している。小泉喜美子の『**血の季節**』（一九八二／文春文庫）はある幼女殺人犯の告白。それによれば、彼は戦前の少年時代にある外国公使館の兄妹と交友していたが、昭和二十年、空襲の混乱の中で彼女に吸血鬼の接吻を受けたという。果たして彼は精神異常なのか？　その公使館にはルーマニア生まれのラドラックなる書記官が勤務していたというが――。

戦後の復興期から高度経済成長の中では鳴りを潜めていた吸血鬼たちだが、人々のライフスタイルが変化し始めた八〇年代に入ると暮らしやすくなったのか姿を現わし始める。竹河聖の『**血のピアス**』（一九八七／光文社文庫）ではトランシルヴァニアから来た女吸血鬼とその一党が麻布に屋敷を構え、夜の六本木を堂々と闊歩（かっぽ）して獲物を物色しているし、都筑道夫の『**血のスープ**』（一九八八／祥伝社文庫）では大塚のハンコ屋の主人が、ハワイで知り合ったオカマの吸血鬼に召し使われて王子にマンションを借り、獲物となる男女を連れ込まさ

れる。この吸血鬼の生態はかなり特異で不気味なのでぜひ一読を。
　また、《蒼き影のリリス》や竹河聖の『[illegible]に光る眼』（一九九九／角川書店）は都会の吸血鬼たちの間に内紛があることを教えてくれる。後者は都会に隠れ棲む猫人(キャットピープル)族の存在と、彼らが吸血鬼の狩りの対象となっている事実をも伝えている。
　それでも、所詮都会は個人で生き抜かねばならぬ厳しく孤独な場所。共同体を作って暮らせる安住の地を求め、小野不由美の『屍鬼』（一九九八／新潮社）では吸血鬼少女に率いられた集団が、人口一三〇〇の閉ざされた山村・外場村を丸ごと吸血鬼のコロニーに変えようと乗り込んでくる。目のつけ所はよかったが、途中で村人に発覚して集団同士の血みどろの抗争の末、皆殺しの憂き目に遭った。
　しかし、この『屍鬼』にも顕著なように、吸血鬼についての理解が深まるにつれてその〝人間性〟を認めて共感を寄せ、あるいは共存を模索する動きも出始めた。その端緒となったのは一九七六年、サンフランシスコで行われたある吸血鬼へのインタビューである。

我が友吸血鬼

　十八世紀末に若くして吸血鬼となった男が半生を語ったアン・ライス『**夜明けのヴァンパイア**』（ハヤカワ文庫）は吸血鬼の内面に深く迫り、この呪われた運命を背負った種族に対する深い共感を呼び起こした。そして、ここで語られた自分の〝人間〟像に不満を持ったレスタト・ド・リオンクールが自伝『**ヴァンパイア・レスタト**』（一九八五／扶桑社ミステリー）を書くに及んで、吸血鬼による年代記《ヴァンパイア・クロニクルズ》が誕生する。遍歴を重ね、ついには神にまで会ったレスタトはスーパー・ヒーローとして（職業だってロックミュージシャンだ！）、その人気は今やドラキュラをも凌ぐほどだ。
　一方、黒の革ジャンに銀のナイフ、ミラーグラスを身に着けたパンクな形(なり)のソーニャ・ブルーは〝偽装者〟を狩るスーパー・ヒロインだ。この世界と重なり合って存在する〝真世界〟の住人は、こちらの世界では人間に擬態している。吸血鬼となった眼にはさまざまな怪物の姿に見える彼らをソーニャは駆逐していく。ナンシー・A・コリンズの《**ソーニャ・ブルー**》シリーズ（一九八九～／ハヤカワ文庫）はハードボイルド・アクションとダーク・ファンタジーを融合させ、九〇年代的吸血鬼像を提示

「髑[illegible]検校」
　見事なジャパネスク「ドラキュラ」。歌舞伎にしたら面白いぞ。猿之助か？

『天動説』
　巨悪との果てしない戦い。時代の狂気との照応。山田正紀の小説は強い娯楽性の陰で、さりげなく骨太だ。短編「銀の弾丸」は日本におけるクトゥルー神話アクションの先駆。

『きみの血を』
　主人公は在日米兵。市民の軍隊にはいろんな奴が集まってくるということですね。『パリの狼男』の現代版とも言える。

する。現代の吸血鬼は同じスタイリッシュでも、クラシックよりサブカルチャーの方が似合いのようで。

日本では、トランシルヴァニアから来たフォン・クロロック伯爵が日本人女性との間に娘をもうけた。現在女子高生の娘エリカが首を突っ込んだ奇妙な事件が手に負えなくなると、山奥の洞窟に棲むクロロックが乗り出してくる。赤川次郎の人気シリーズ**《吸血鬼はお年ごろ》**（一九八一～／コバルト文庫）である。エリカの母と死別したクロロックは新たに高校生妻を迎えている。人間社会に馴染んだ親しみやすい吸血鬼の典型だろう。ちなみに、赤川次郎は他にも吸血鬼ものをはじめホラーの隠れた佳作を、日本モダンホラーの黎明期から多数ものしている。タイトルからはそれとわからない作品もあるので、発掘してみては？

人間との間に情熱的な愛情ではなく、個人対個人の確かな友情を築くことに成功した吸血鬼もいる。ジョージ・R・R・マーティンの**『フィーヴァードリーム』**（一九八二／創元ノヴェルズ）ではジョシュア・ヨークという吸血鬼が十九世紀後半、蒸気船フィーヴァードリーム号を建造して、ミシシッピ川を航海しながら潜んでいる仲間たちを捜そうとした。人間との共存を夢見る彼は、船長として雇ったアブナー・マーシュとの間に友情を育む。アブナーにとっても、フィーヴァードリーム号は人生の晩年に理想を現実化した夢の船であり、やがて彼らの前に残忍な〝血の支配者（ブラッドマスター）〟ジュリアンが立ちはだかったとき、一度は敗北し、打ちひしがれながらも再び立ち上がった二人は共に生命を賭けて立ち向かう――！　吸血鬼と人間の種族を超えた〝男〟の友情、そして夢と挫折を描いた泣かせる名品だ。ここにはかつて〝悪魔〟と恐れられた吸血鬼と、その獲物でしかなかった我々人間とが対等なパートナーとして共存していく、素晴らしい未来の可能性が示されている。

吸血鬼になりたい

だが、あまり吸血鬼に感情移入するのも困りもの。時には常軌を逸しておぞましい振る舞いに及ぶ者も出る。サンドラ・ヴォ・アン**『私の中の中』**（一九九八／講談社）は自分の中にいる〝彼〟の殺人欲求を満たすため、自ら吸血鬼になることを決意した男の告白だ。吸血鬼が具えている特徴を一つ一つクリアしようと涙ぐましい努力を重ねる奮闘記だが流血シーンは凄絶。また、デヴィッド・マーティン**『死にいたる愛』**（一九九四／扶桑社ミステリー）では自分が吸血鬼になったと信じている幼馴染みにつきまとわれ、連続殺人の罪を着せられるは妻を殺されかけるはと散々な目に遭う。その自称吸血鬼のキャラクターがとにかく強烈で変態（ナスティ）ホラー・ファンは必読だが、彼が狂っているのかそれとも本当に吸血鬼なのか、最後まではっきりさせない展開が秀逸。一方、シオドア・スタージョン**『きみの血を』**（一九六一／ハヤカワ・ミステリ）には動物を捕らえて殺し、その血を飲むうち次第にエスカレートして、行き着くところまで行った男のことが克明に記録されている。吸血鬼志願というより予備軍ですね。

これら吸血者たちに共通しているのは幼少期に不幸な育ち方をしたため他人とうまく交われず、自分の殻（＝妄想）に閉じこもっているということ。安住の地を探し求める孤独な魂の彷徨なのである。リチャード・マシスンの**「血の末裔」**（一九五一／『吸血鬼伝説』他）に登場する吸血鬼に憧れる少年もまた、周囲からは異常者扱いされる孤独なアウトサイダーだ。それだけに最後の一行は切なく感動的である。吸血鬼ファンは必読の傑作だ！

――でも皆、お互い気をつけようね。

吸血鬼[illegible]

最後に吸血鬼をテーマにしたアンソロジーをまとめて紹介しておこう。海外作品で

はスタンダードを並べた《怪奇幻想の文学》第一巻**『真紅の法悦』**（一九六九／新人物往来社）や、パルプ雑誌の名作が揃った仁賀克雄編**『■血鬼伝■』**（一九九七／原書房）、総花的なピーター・ヘイニング編**『ヴァンパイア・コレクション』**（一九九五／角川文庫）が定番路線。マニアックなセレクションでは種村季弘編**『ドラキュラ・ドラキュラ』**（一九七三／河出文庫）や、傑作揃いのマイケル・パリー編**『ドラキュラのライヴァルたち』**（一九七七／ハヤカワ文庫）。エレン・ダトロウ編**『血も心も』**（一九八九／新潮文庫）やバイロン・プライス編**『妖魔の宴　ドラキュラ編』**（一九九一／竹書房文庫の日本版には菊地秀行のロングエッセイもついている）には近年の書下ろしによる精華が収められている。

一方、日本の作品を幅広く集めたのは東雅夫編**『屍■の血族』**（一九九九／桜桃書房）。また、一九九七年には『ドラキュラ』百周年を記念して菊地秀行ら八人の作家による**『血』**（ハヤカワ文庫）、二〇〇〇年には津原泰水監修の《十二幻想》シリーズの一冊として**『血の12幻想』**（エニックス）がそれぞれ書下ろしアンソロジーとして刊行された。

ここに挙げてきた吸血鬼小説はまだまだほんの一例。また、掘り下げて読んでいけばさまざまなテーマ・問題が浮かび上がってくる。吸血鬼の世界はなんと豊かなことだろうか！

「ドラキュラ・ドラキュラ」
　定番からずらした曲者揃いのラインナップ。編者の種村季弘には他にも『吸血鬼幻想』などの吸血鬼本がある。

「ドラキュラのライヴァルたち」
　ちょっと変わったアプローチの作品を集めたB級傑作路線。同じ編者による“キングコング”“フランケンシュタイン”編も秀作揃いなので、古本屋を探せ！

「幻想と怪奇」
　1973年から74年にかけて発行された日本初のホラー&ファンタジー小説誌。雑誌関連では他に別冊「幻想文学」の「ドラキュラ文学■」、「■画宝庫」の「ドラキュラ雑学写■事典」、「SFマガジン」1997年11月号の吸血鬼特集が必■か。

天野喜孝「吸血鬼ドラキュラ」

元祖"D"とも言うべきハマー・プロ末期の『キャプテン・クロノス／吸血鬼ハンター』。

コッポラ版『ドラキュラ』のヴァン・ヘルシング教授（アンソニー・ホプキンス）。

『D』の魅力を根源までたどるなら、そこには「斃す側」も「斃される側」も凄絶なまでにカッコいい、ドラキュラ伯爵とヘルシング教授——二大キャラクターの合体融合（別名いいとこ取り）が見えてくる。吸血鬼の血を持ちながら吸血鬼を狩る——まさしくアンビヴァレンツな『D』の魅力の根源に迫る！

ドラキュラのD、ダンピールのD。

D for Dracula, D for Dhampir.

吸血鬼ハンターたちの昔と今

文＝ケヴィン・レーヒ（Text by Kevin Leahy）

Disney vs Vampire Hunter D, July 2001

「バンパイアハンターD」■■版ポスター。

エドワード・ヴァン・スローン扮する老碩学ヘルシング教授。

魔人ドラキュラ
Dracula

吸血鬼ドラキュラ
Horror of Dracula

ヘルシング教授（ピーター・カッシング）の■台十字架で陽だまりに押し倒されるドラキュラ伯爵（クリストファー・リイ）。

ドイツ出身の俳優ホルスト・ヤンセン扮するクロノス。

キャプテン・クロノス
Captain Kronos: Vampire Hunter

クロノスはフェンシング剣法だが日本刀も使う。

娼婦カトリーナ(シェリル・リー)を襲う吸血鬼ヤン・ヴァレック。

ジェームズ・ウッズ演じるジャック・クロウ。

ヴァンパイア／最期の聖戦
John Carpenter's Vampires

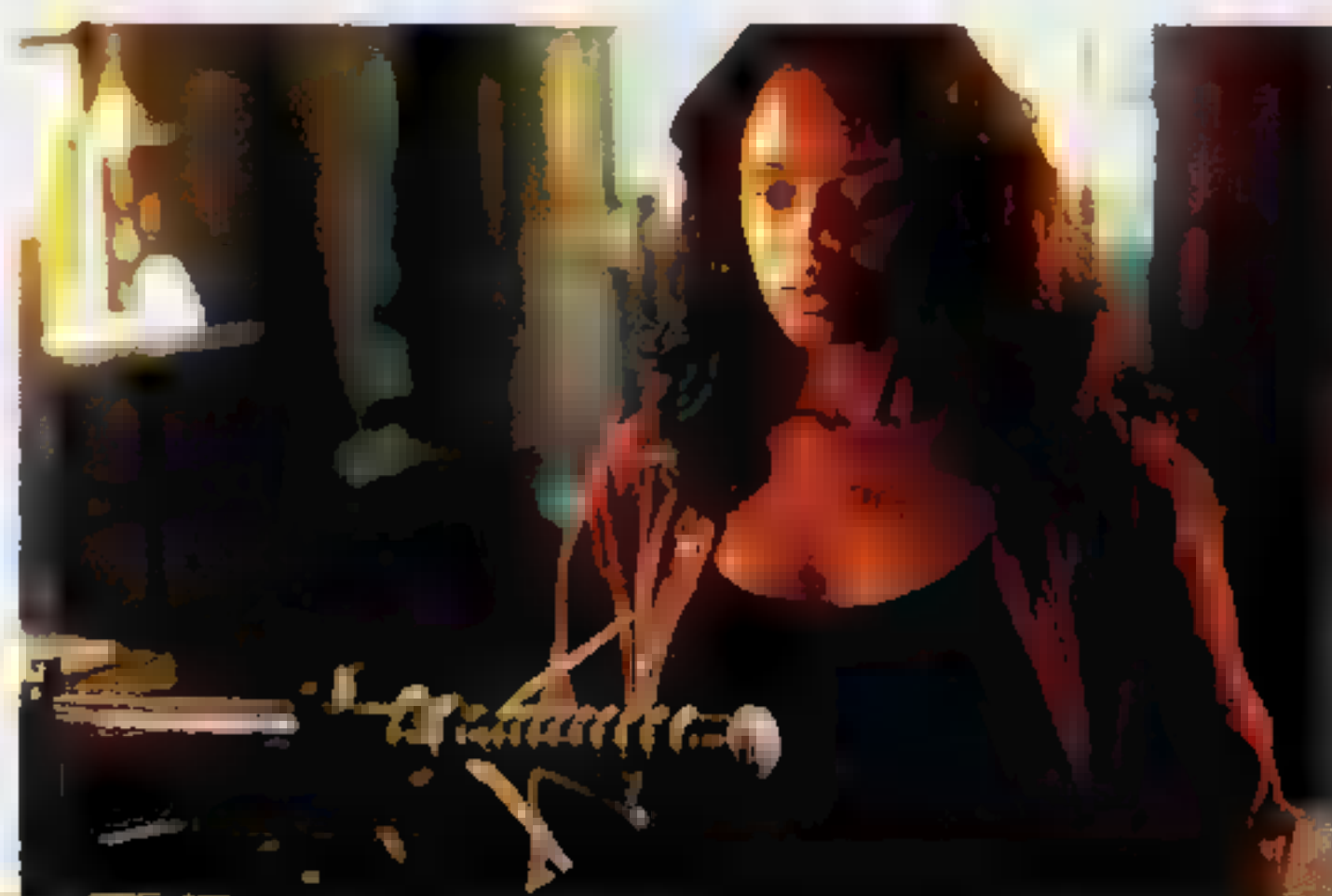
荒野のハンター集団チーム・クロウの面々。派手な活躍を見せるのは映画の冒頭だけで、すぐにやられてしまうのがタマにキズ。

吸血鬼退治、GOクロウ様！

■その後、数多の吸血鬼映画出現で、吸血鬼退治を担う役柄も無数を数えてきた。ヘルシング教授も『ドラキュラ72』や西部劇調の『サンダウン』では三代目に至り、その間に本家もジョン・バダム監督七九年版『ドラキュラ』では名優ローレンス・オリヴィエ卿が改めて老碩学に扮し、コッポラ監督九二年版『ドラキュラ』ではハンニバル・レクターことアンソニー・ホプキンスが奇矯な性格のヘルシング教授に挑戦するなど、さまざまにバリエーションを増やしてきた。しかし時代はすでに新たなハンターを必要としていた。八五年に最初の〝D〟アニメーションが製作され、天野喜孝氏の〝D〟イラストが米国『トワイライト・ゾーン』誌の読者欄に登場したのも同じ頃。西部劇に酷似した辺境の荒廃した世界をゆく吸血鬼ハンターの物語は、原典たる小説が翻訳されなくとも、例えば『マッド・マックス』大好きのアメリカ人には存在してむしろ当然、やがてコミックや若手作家による小説に、荒廃した未来世界や現代の闇に跋扈(ばっこ)するヴァンパイア一族と対決するハンターたちの活躍が目立つようになる。中にはアン・ライス女史のような耽美に走るものもあるが、これまた〝D〟の重要ポイント。それはともかく、ジョン・スティークリーの『バンパイア・バスターズ』を原作としたジョン・カーペンター監督九八年の『ヴァンパイア／最期の聖戦』もそのひとつ。ジャック・クロウ（ジェームズ・ウッズ）率いる〝チーム・クロウ〟は『妖殺行』のマーカス兄妹みたいなハンター集団だが、真っ昼間に隠れ家を暴いてブラック・バスの一本釣りよろしくヴァンパイアを「釣り出す」という乱暴な連中だ。しかし、チーム・プレイの成果が冒頭だけというのは、ちょっと弱すぎるのではありませんか、監督？

人間から成り上がった吸血鬼フロスト（スティーヴン・ドーフ）とブレイド（ウェズリー・スナイプス）の一騎打ち。

斃された吸血鬼は瞬間的に黒い塵と化してしまう。

ブレイド
Blade

コミックから誕生したブレイドは銃やショットガンはもちろん、赤血球破壊剤などの武器も使う。

毒牙をもって毒牙を制する

■ハンターと言うよりならず者集団に近い〝チーム・クロウ〟だったが（原作ではもっとマシ）、コミック世界に出現した『ブレイド』は、まさに〝D〟と拮抗する存在。と言うか、これは〝D〟そのものではありませんか。出産直前の母親が吸血鬼に咬まれたため、ブレイドは半身吸血鬼の血を宿す結果的ダンピール。望まぬ伝説の〝デイ・ウォーカー〟——すなわち〝昼歩く吸血鬼〟となり果てたブレイドは、放っておけば吸血鬼の血に支配されそうになる肉体的苦痛に堪えながら、母親を咬んだ吸血鬼を探し求める。九八年に映画化された『ブレイド』は忍者刀に酷似した仕込み直刀を背中に立て、ショットガンやパルスライフル、さらには相棒特製の赤血球破壊剤といった武器を手に、若いだけの成り上がり吸血鬼フロストの野望を粉砕する。人工血液を服用し、人間社会の闇に潜むをよしとする純血吸血鬼一族に対するフロストの反乱に、吸血鬼文明の起源を記した古文書の解読が絡む物語は、これで神祖が登場すればまんま〝D〟の物語にも変更可能。ただし完成した映画は剣戟というよりは、CG多用のデジタル・アクションにテクノサウンドが炸裂、肉体派スター＝ウェズリー・スナイプス渾身の活劇と相成った。好評につき現在『ブレイド2』を製作中のアメリカン〝D〟は、黒いロングコートを翻しながらビル街を跳躍する『マトリックス』序章とも言うべきアクションを味方に付けて、実写版『吸血鬼ハンター〝D〟』も決して不可能ではないことを証明してみせる。しかし、いかに視覚効果技術が進歩しても、小説に描かれる〝この世ならぬ〟美しさを持つ若者を演じることのできる役者は、やはりこの世には存在し得ないのだという事実をも、同時に証明してしまうのであった。

ブーツをはいた吸血鬼ハンター＝バフィー・ソマーズ（サラ・ミシェル・ゲラー）。

バフィー／恋の十字架

Buffy the Vampire Slayer

バフィーの秘密を知って協力してくれる学校側の人間は、ただひとり図書室のジャイルズ先生（アンソニー・ヘルド）のみ。

[illegible]

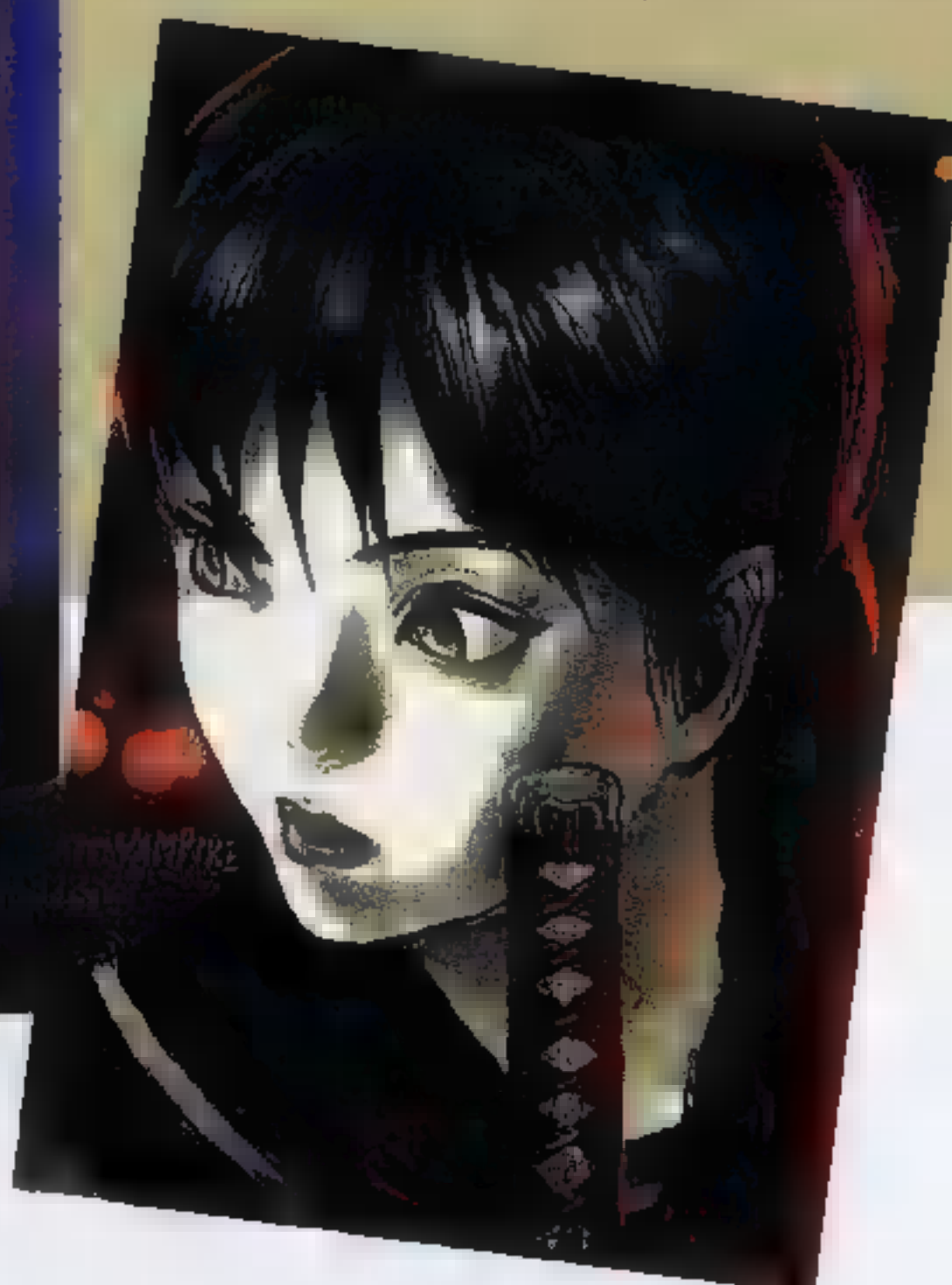
映画史に名高いドイツ表現主義時代の無声映画「吸血鬼ノスフェラチュ」(21)は、実は本物の吸血鬼を主役にした作品だった! 驚愕の真相を描く『シャドウ・オブ・ヴァンパイア』は、吸血鬼映画の監督が吸血鬼退治をしなければならなくなる皮肉な設定の傑作。

シャドウ・オブ・ヴァンパイア
Shadow of the Vampire

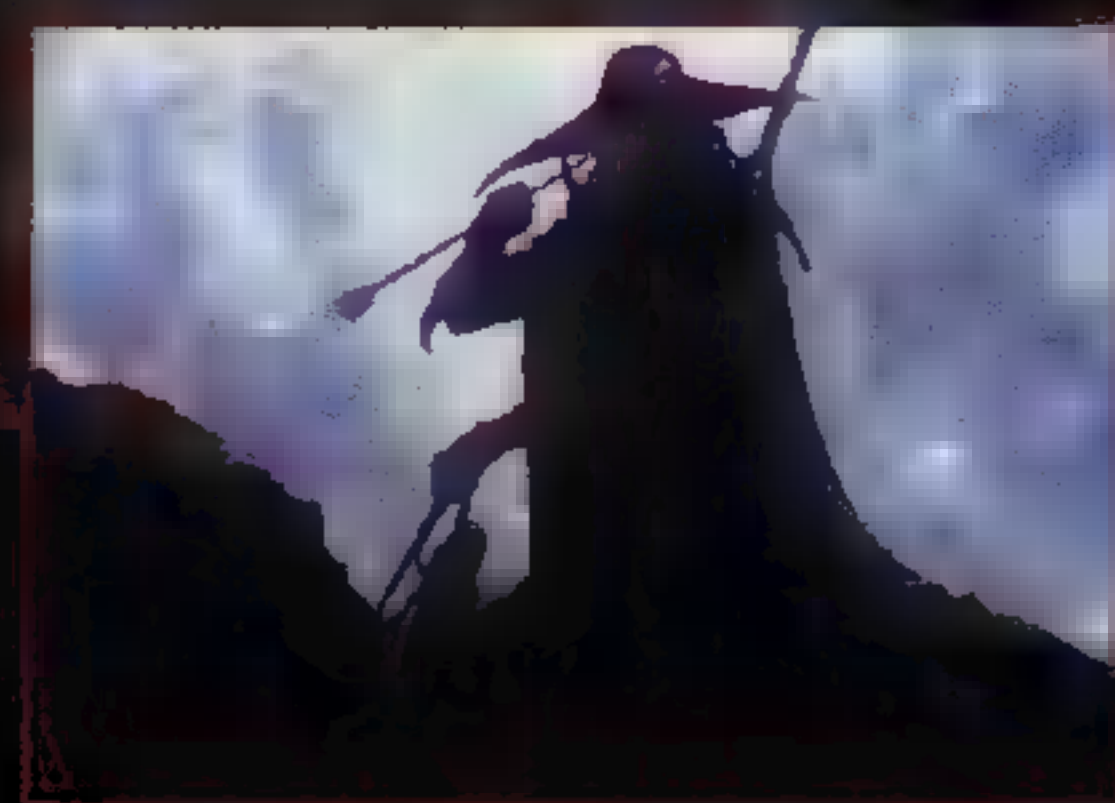
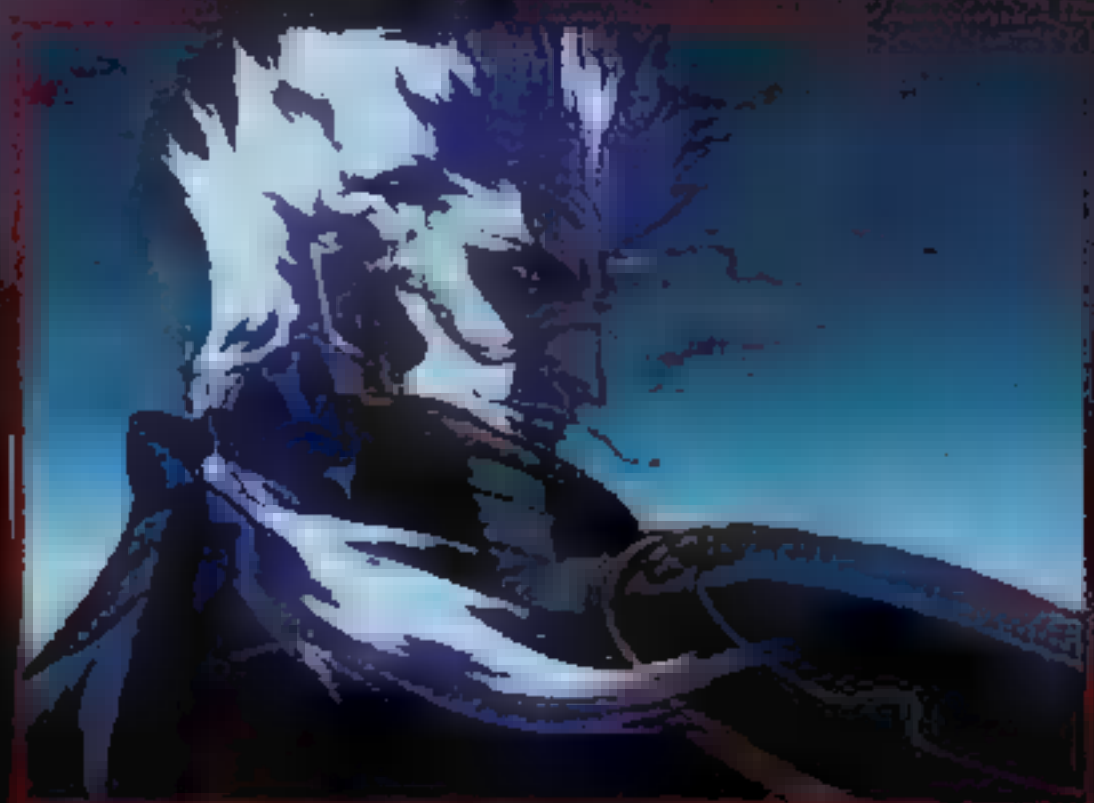
日本ヘラルド映画配給/2001年8月公開

実在した監督ウィルヘルム・ムルナウに扮するジョン・マルコヴィッチ。

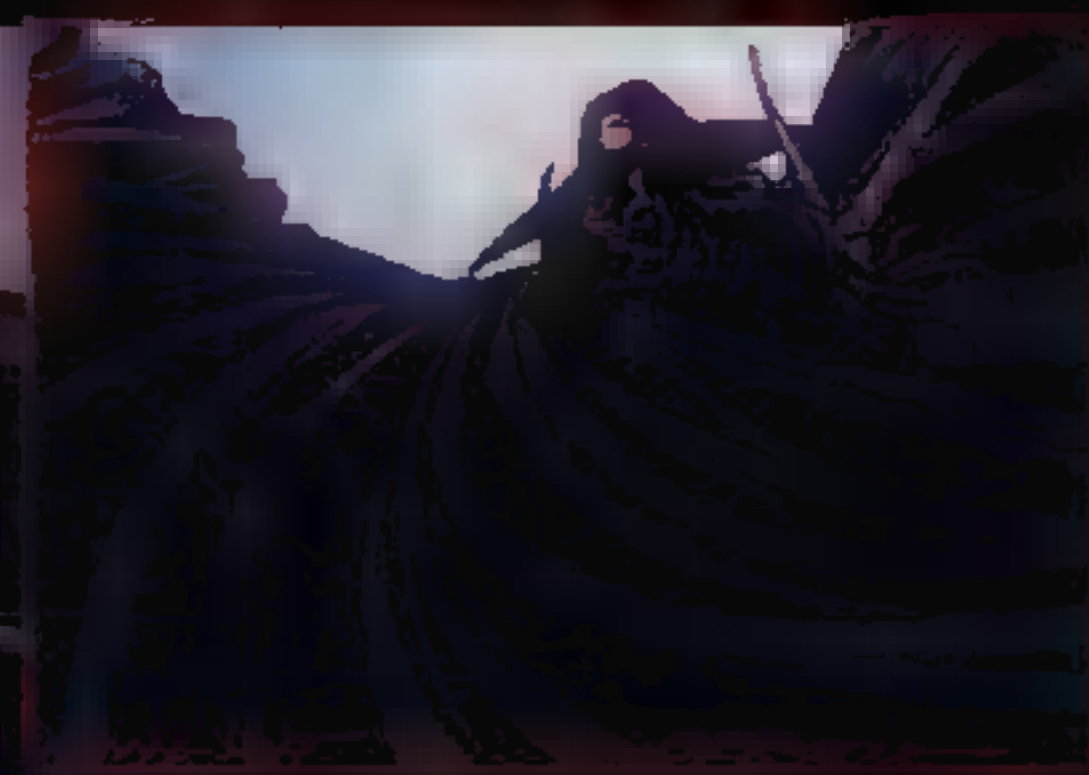
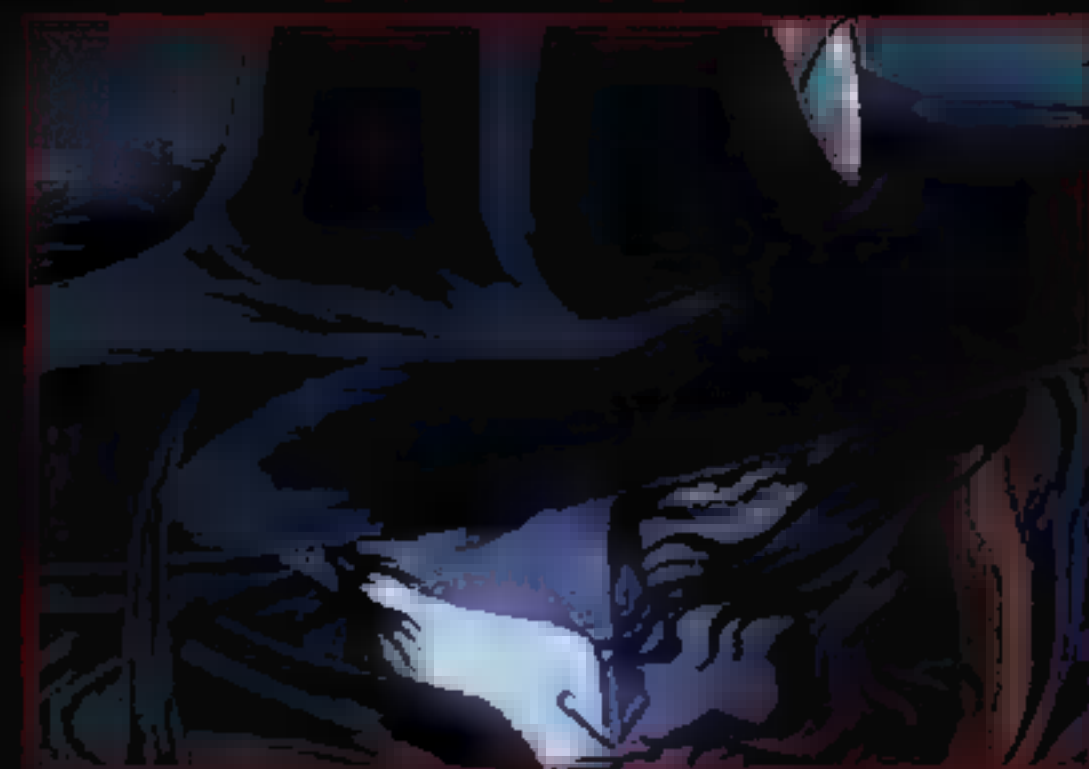
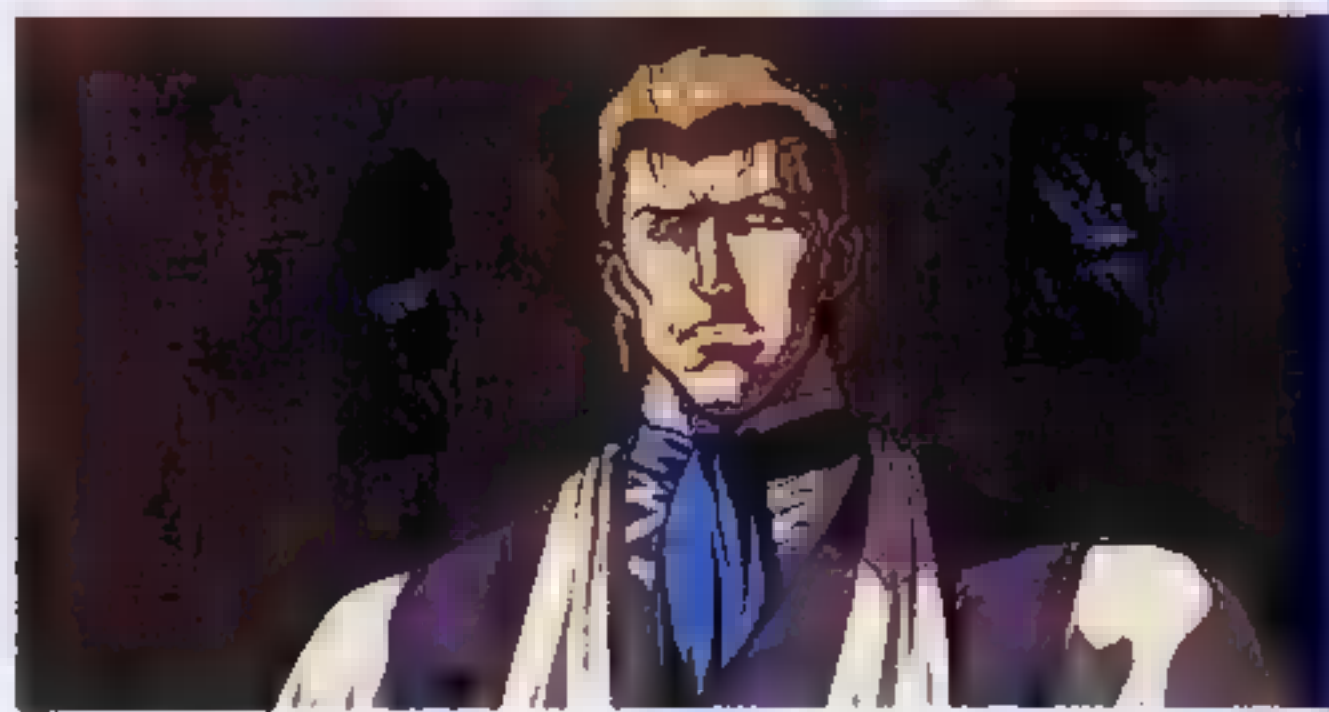
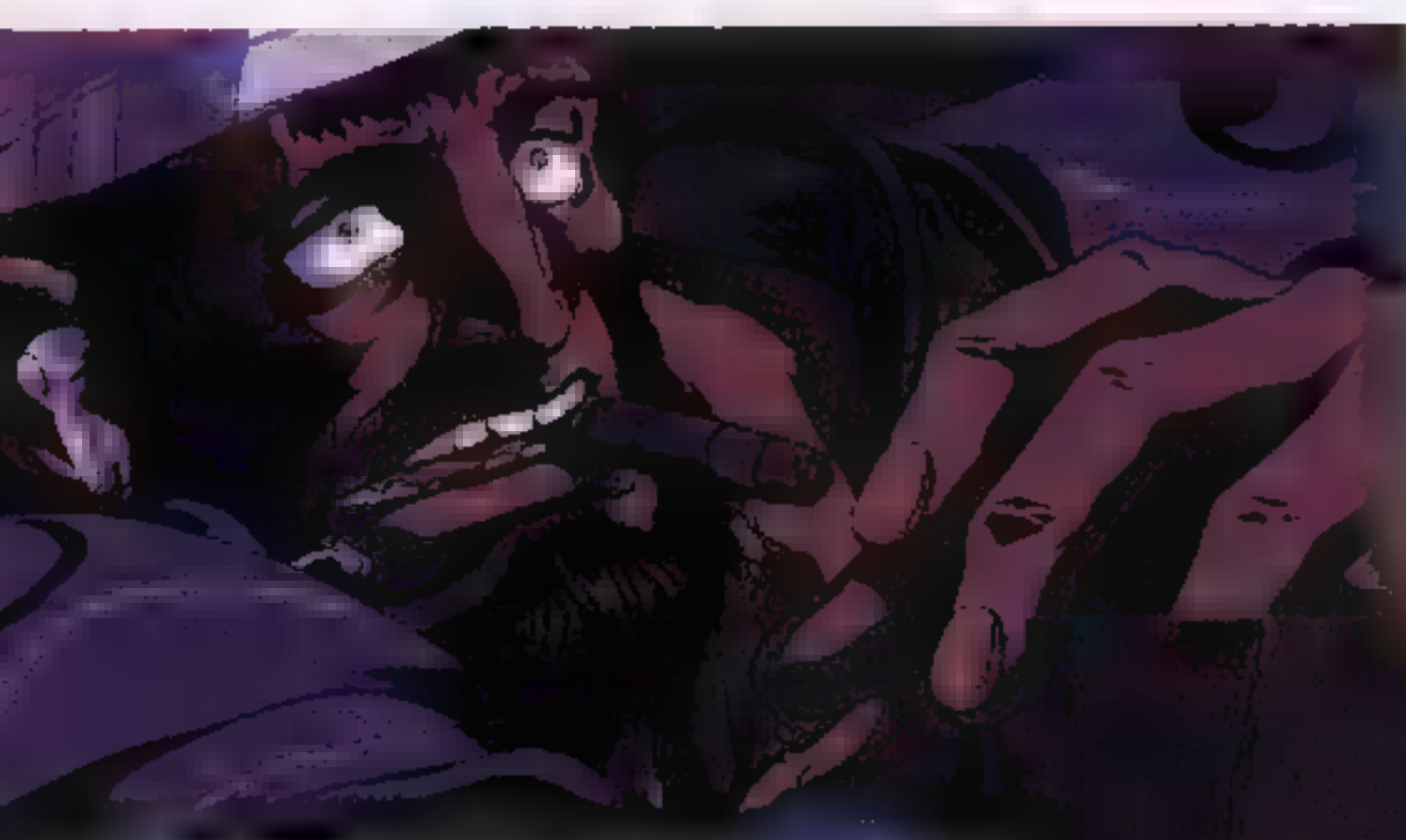
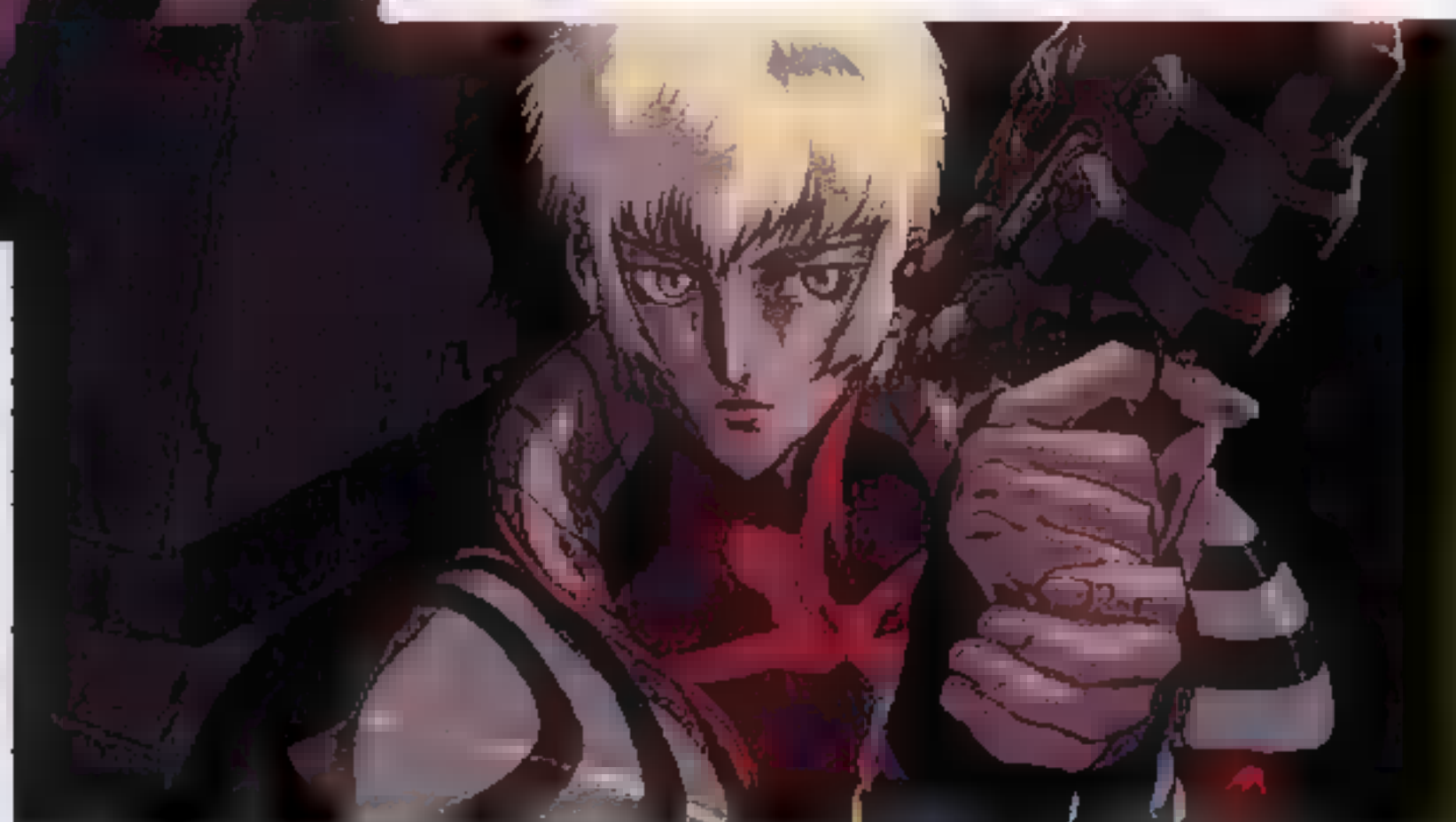
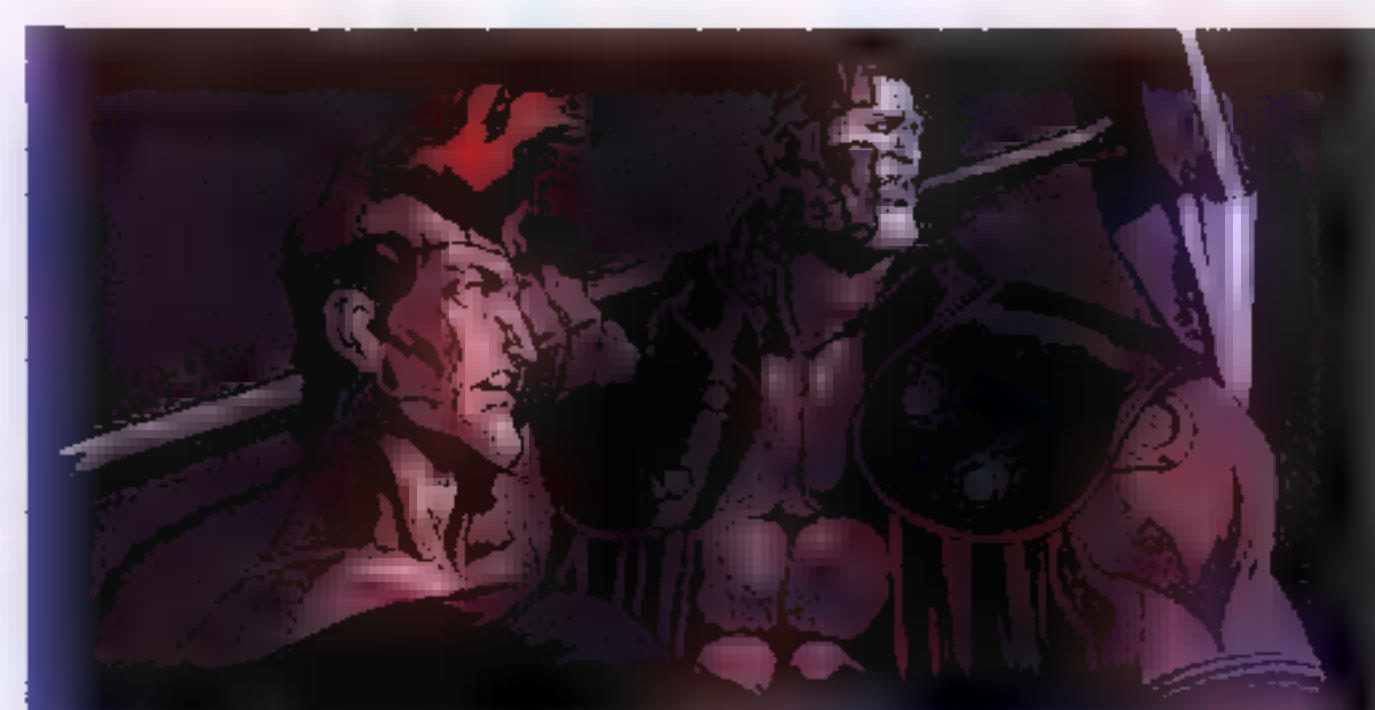
押井守原作の孤独な女子高生吸血鬼ハンター小夜(SAYA)は、セーラー服に日本刀をふるって悪鬼を退治する。

BLOOD/THE LAST VAMPIRE

吸血鬼ハンターたちの昔と今

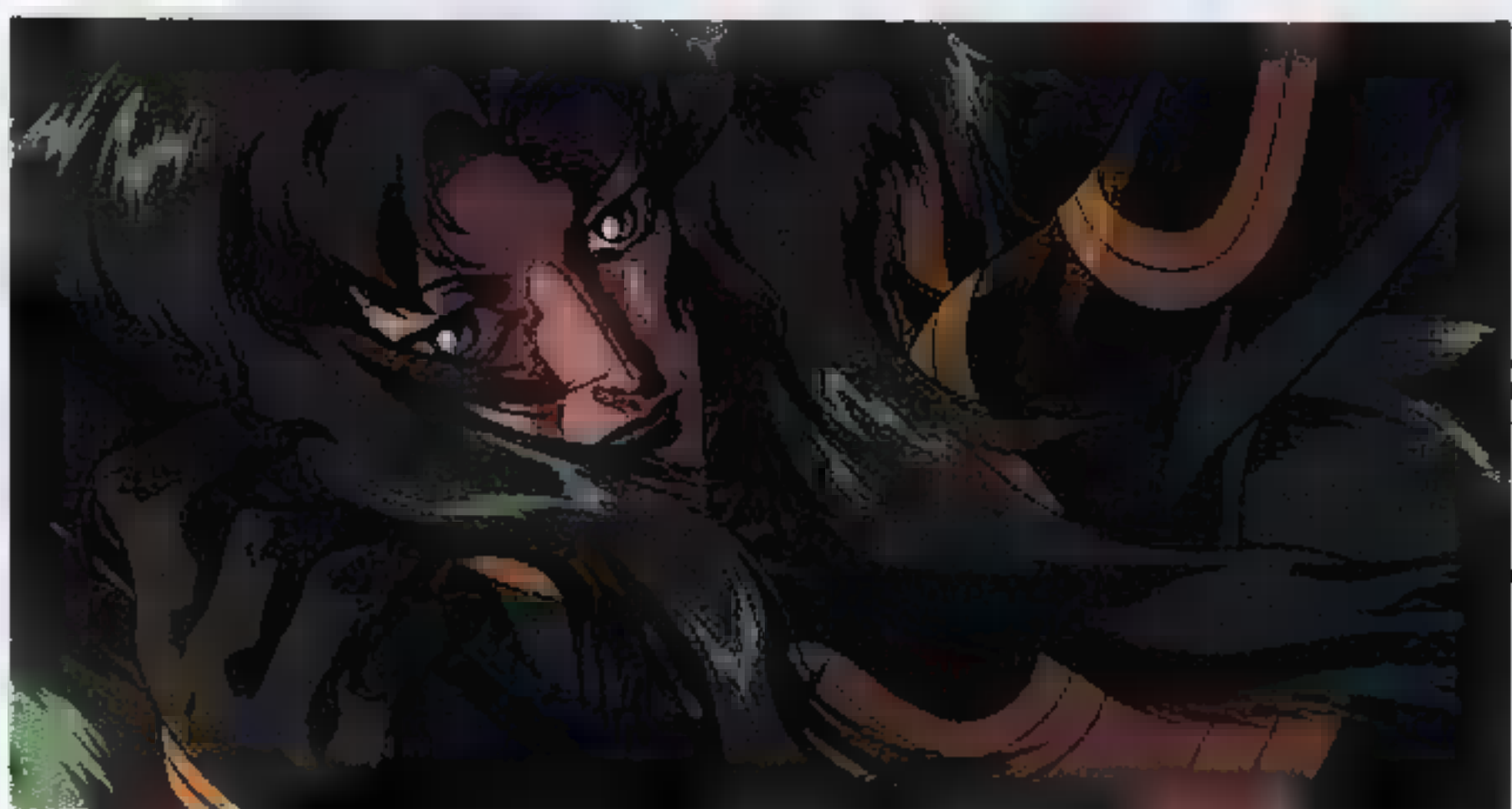
はるか遠い未来……最終戦争後、人類の頭上に君臨した「貴族」——すなわちバンパイアは原因不明の種族的衰退を迎え、黄昏の彼方に没しつつあった。しかしその一部は辺境の一角に留まり、なお人々の心胆を寒からしめ、対貴族プロフェッショナル《ハンター》の誕生をうながし、なかでも貴族と人間の混血児《ダンピール》は、理想のバンパイアハンターとされた……。

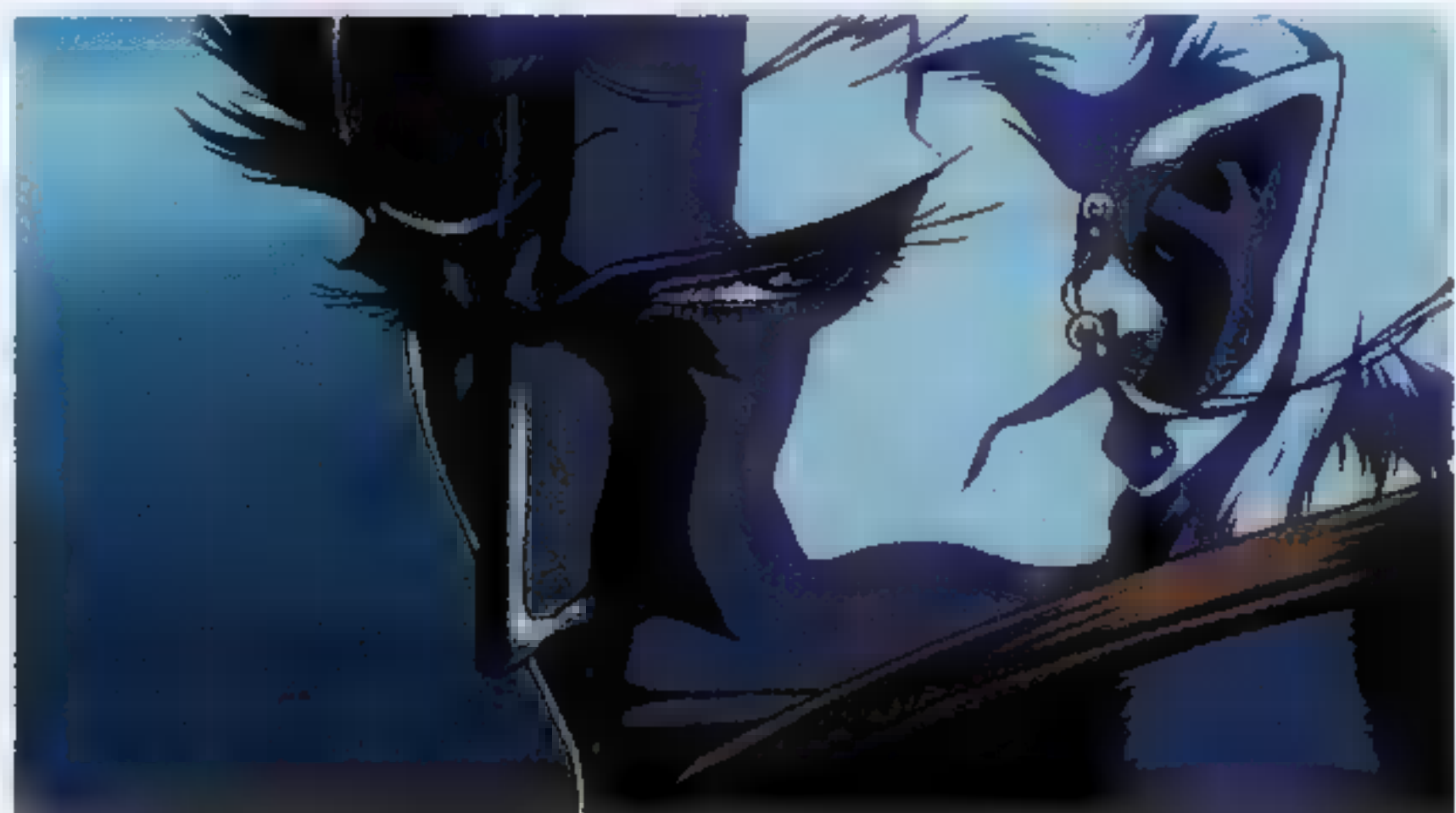
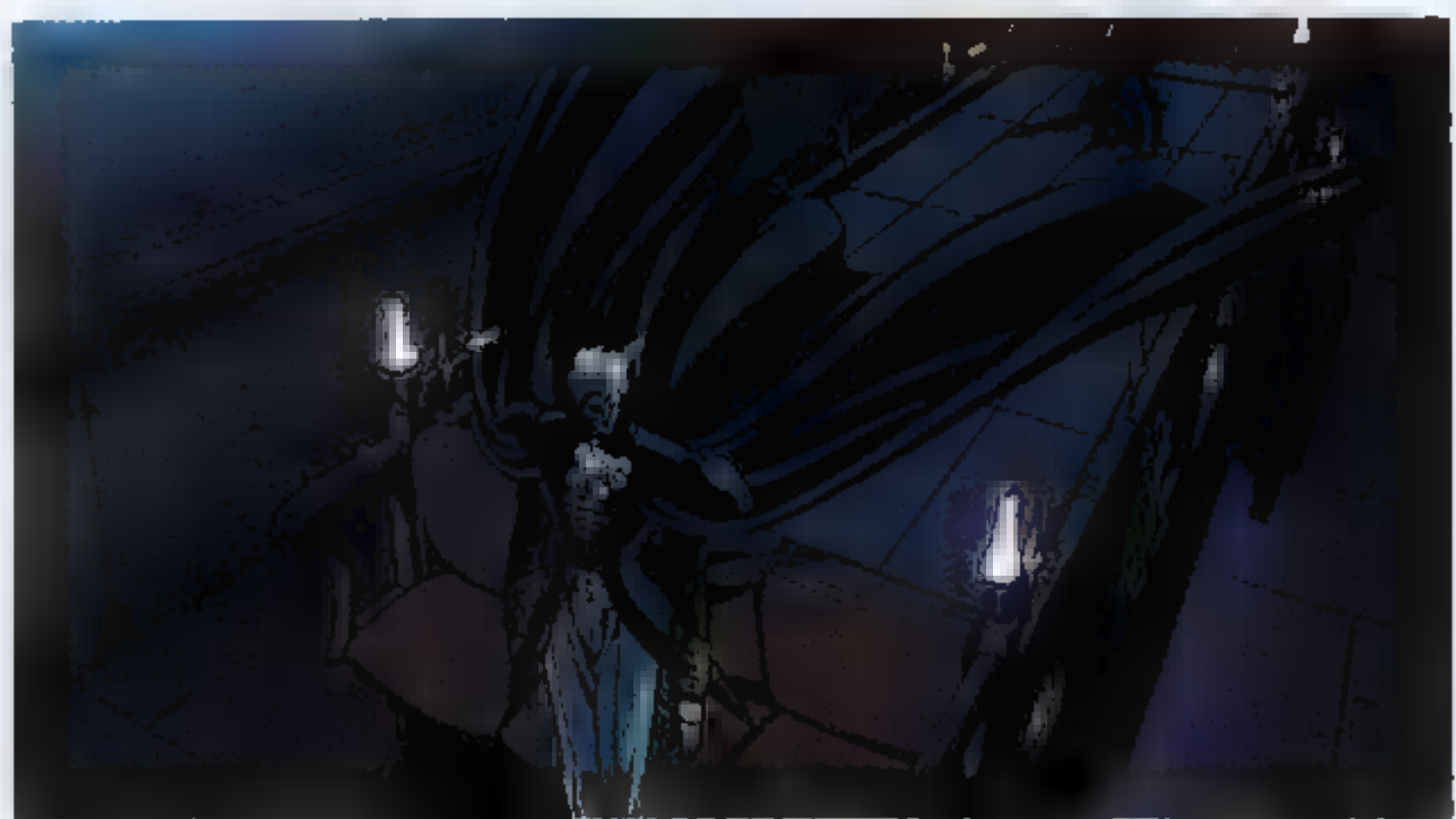
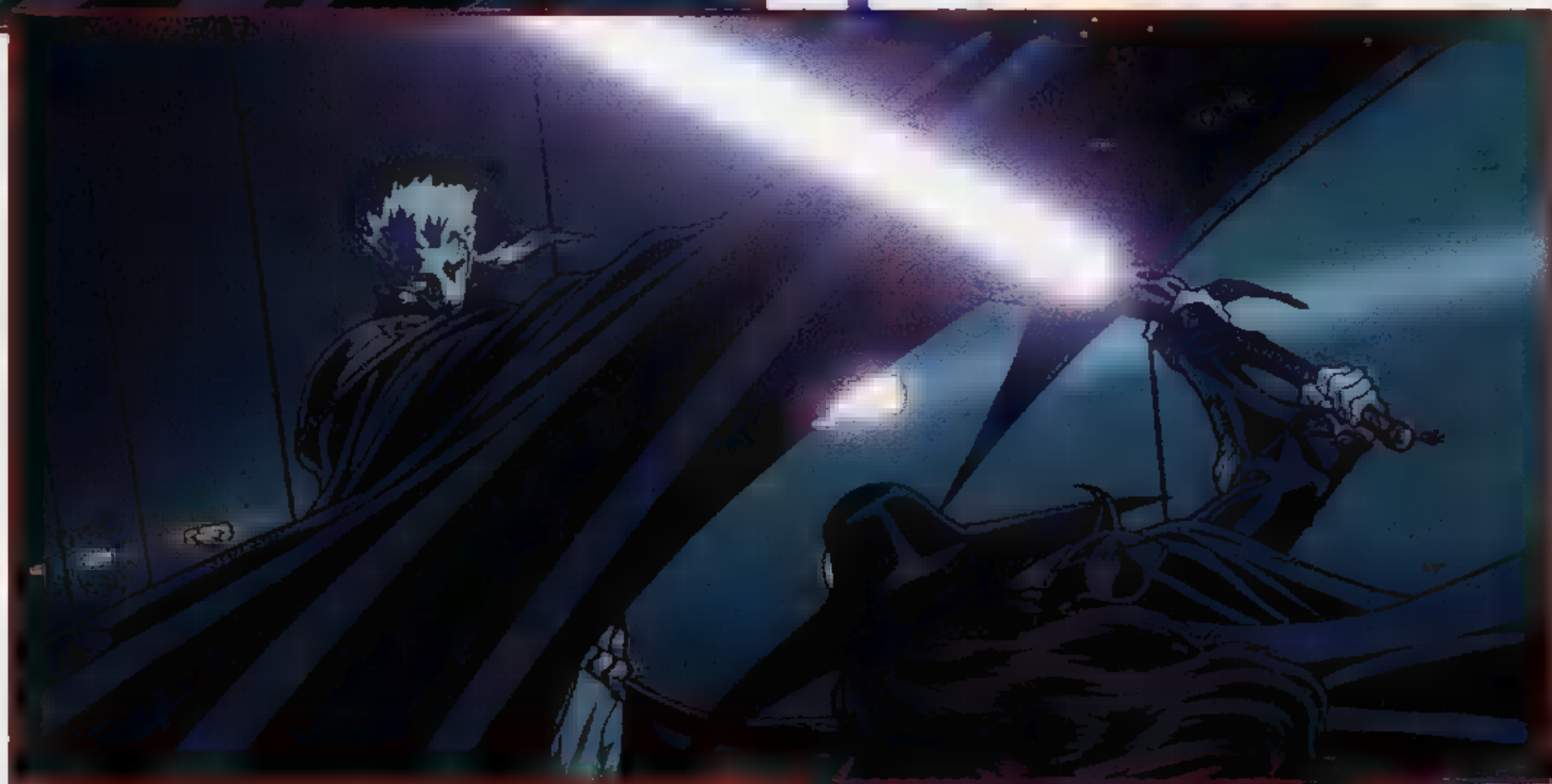
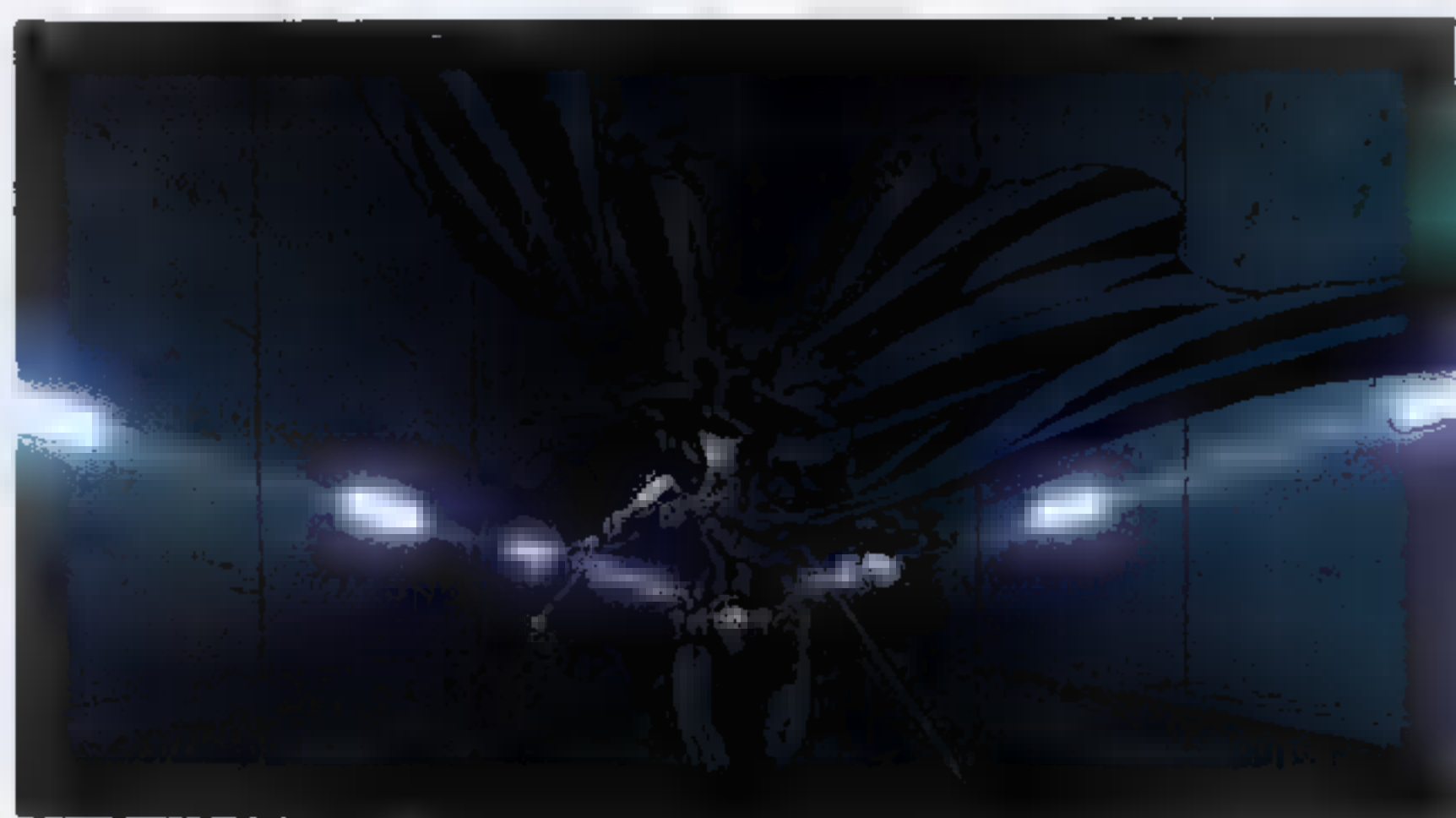
そしていつしか、ひときわ美しい若者の名が人々の口の端にのぼるようになった……。

バンパイアハンターD 名場面アルバム

バンパイアハンターD

VAMPIRE HUNTER D

依頼主
エルバーン

「……報酬は二千万ダラス……それ以下では応じぬ」
「約束しよう……二千万ダラスだ！　娘を呪われた宿命から……救ってくれ」
「……もう、手遅れかも知れぬ。すでに貴族の洗礼を受けていたとしたらどうする？」
「君以外にもハンターは雇った。先を越されるぞ」

同業者
マーカス兄妹

「どうやら御同業らしいな。それに同じ獲物を追ってる……そうだろ？　俺はボルゴフ……ボルゴフ・マーカス！　あんたの名を聞かせてくれ！」

「ダンピールも大勢見てきたが、お前のような奴は初めてじゃ。死なすには惜しい……実に惜しい……じゃがお前をここから帰すわけにはゆかぬ。その命、もらい受けるぞ！」

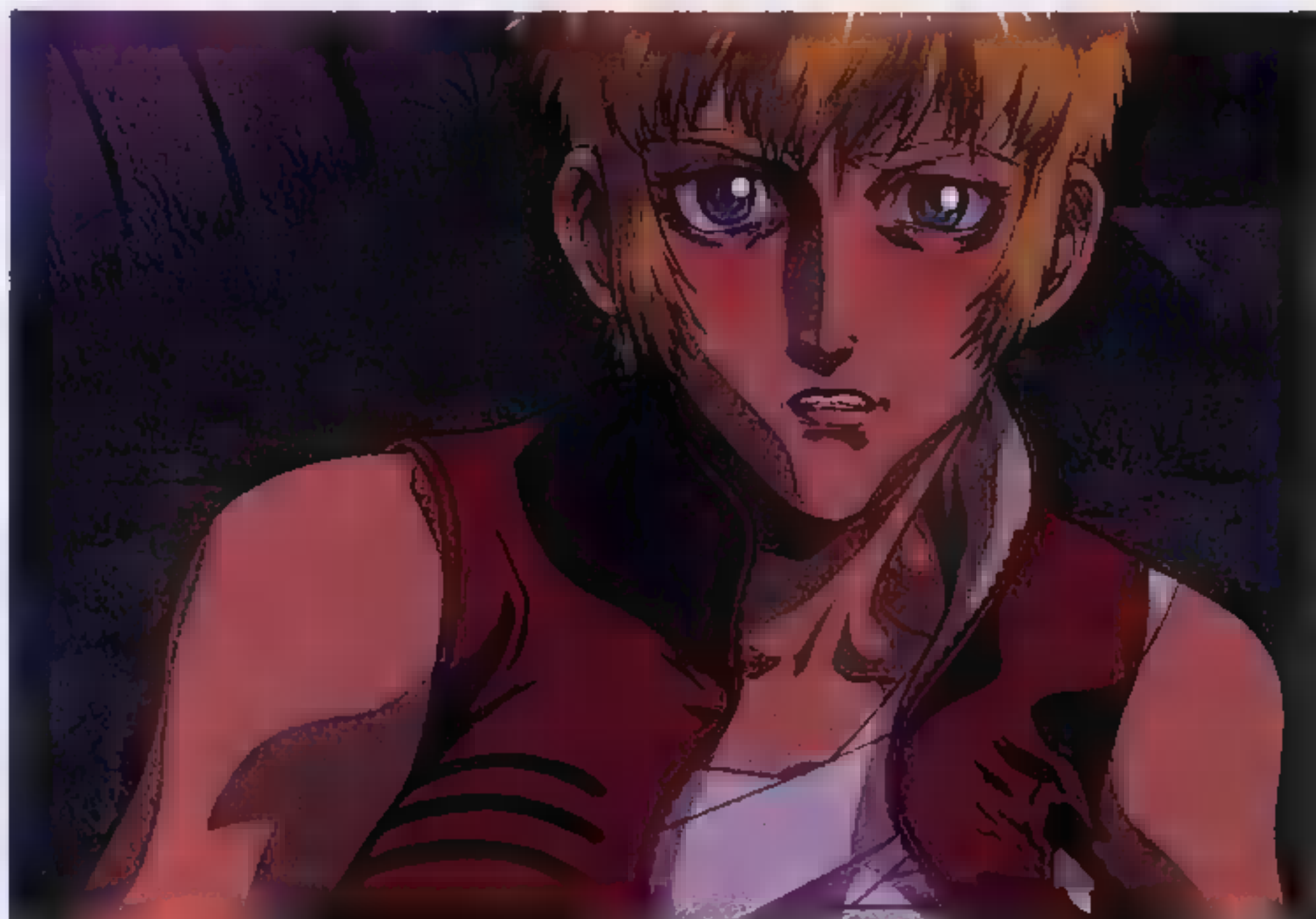
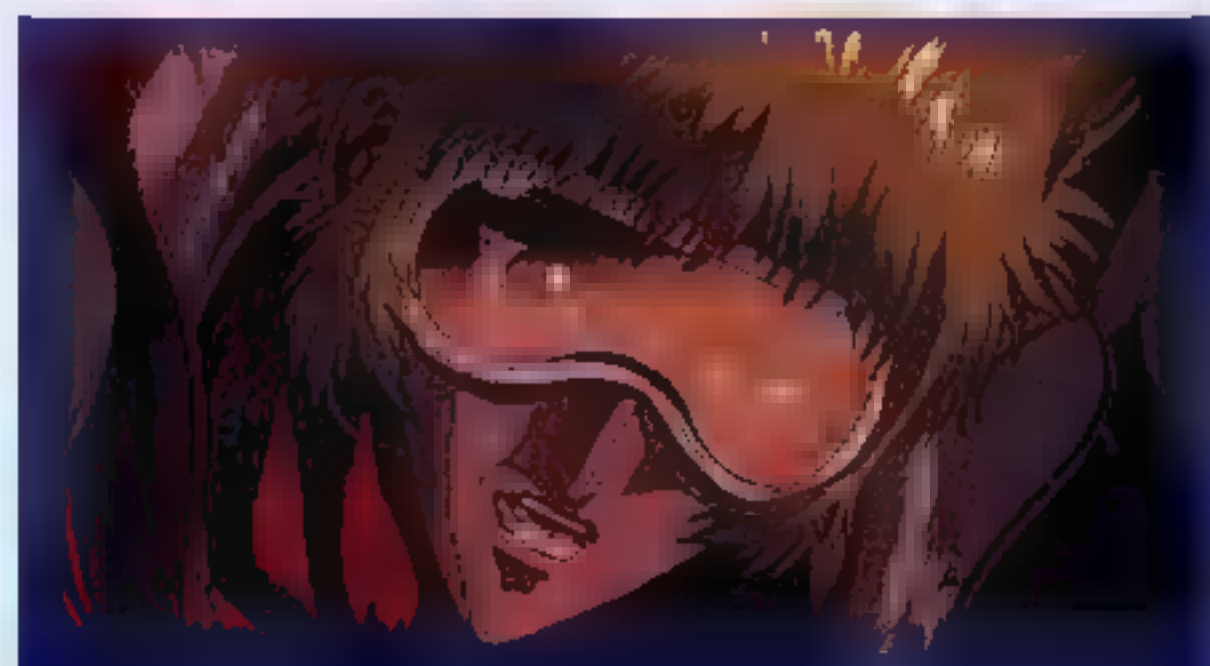
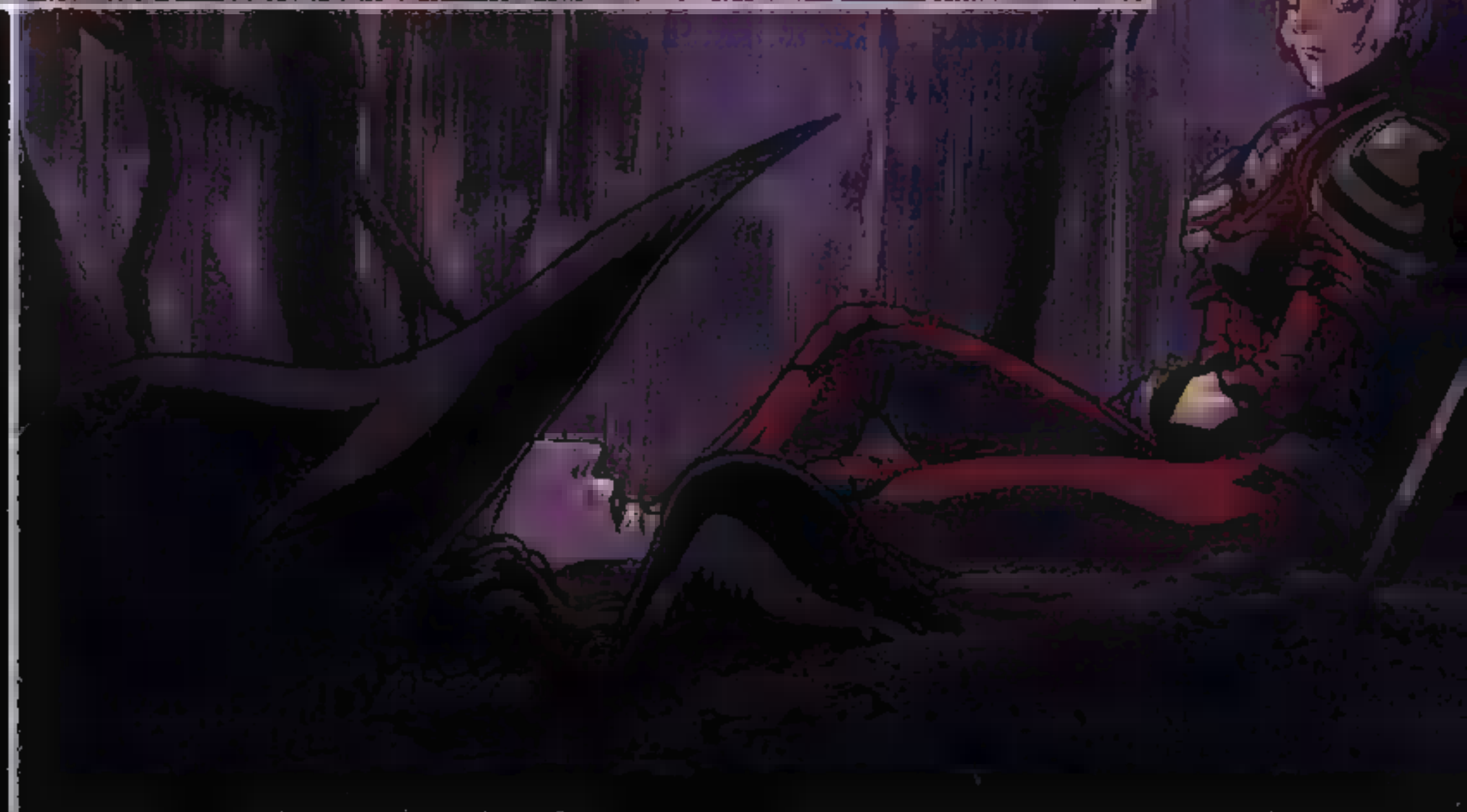
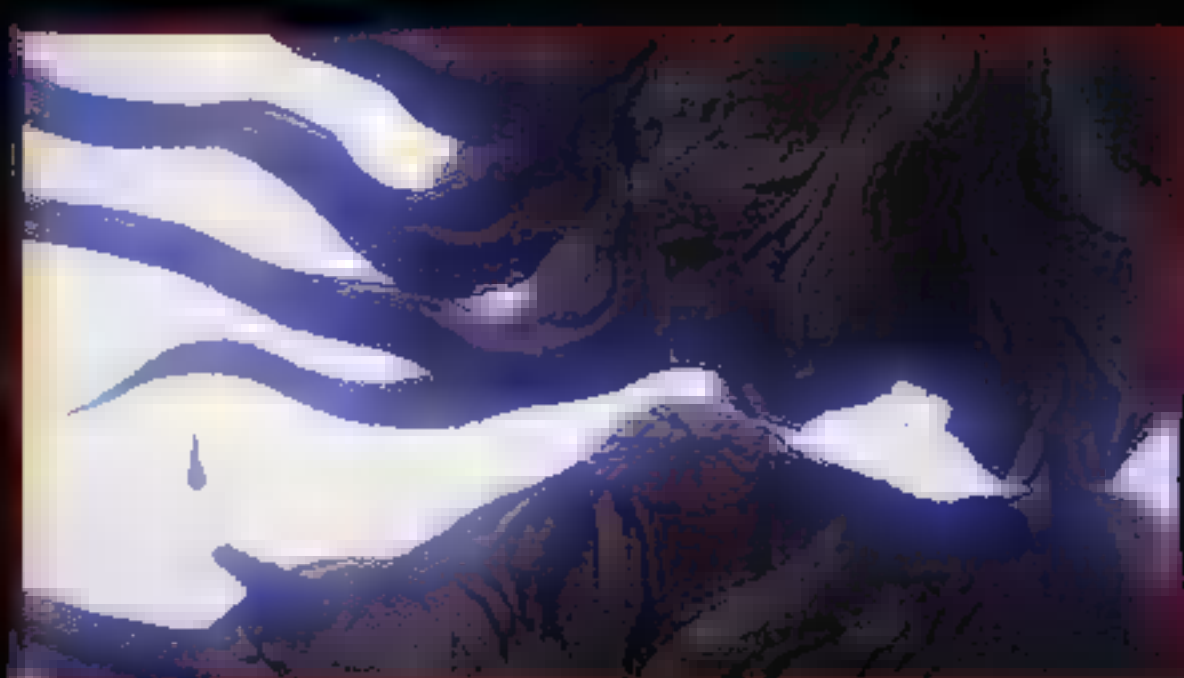
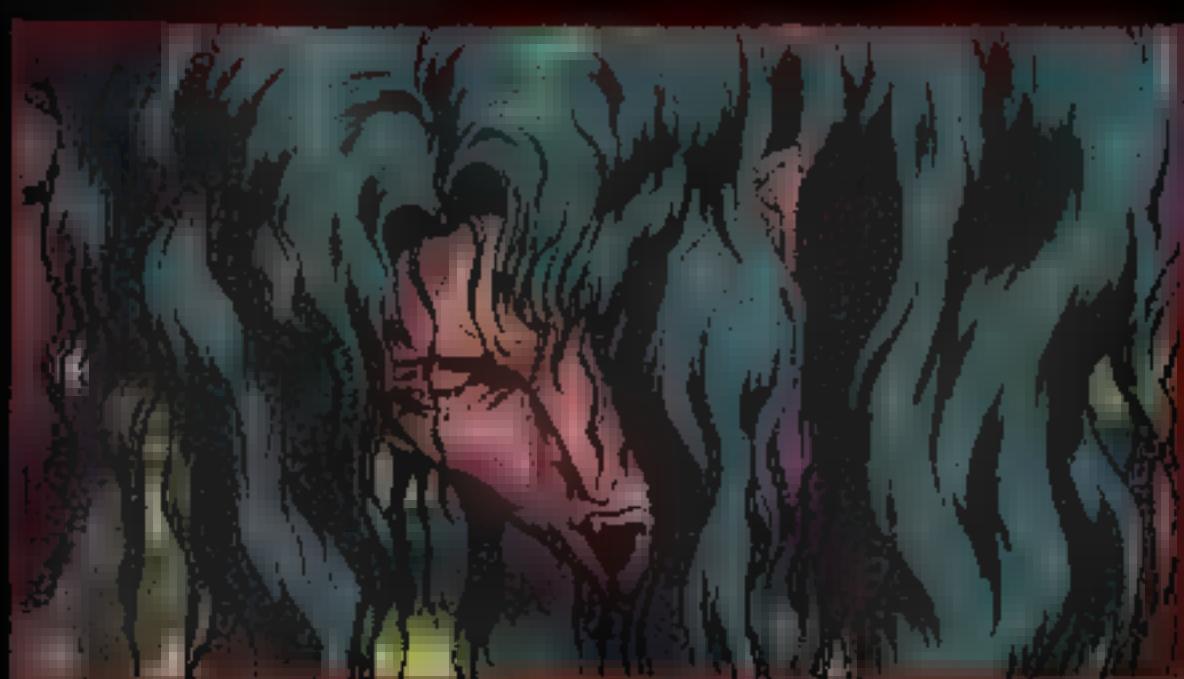
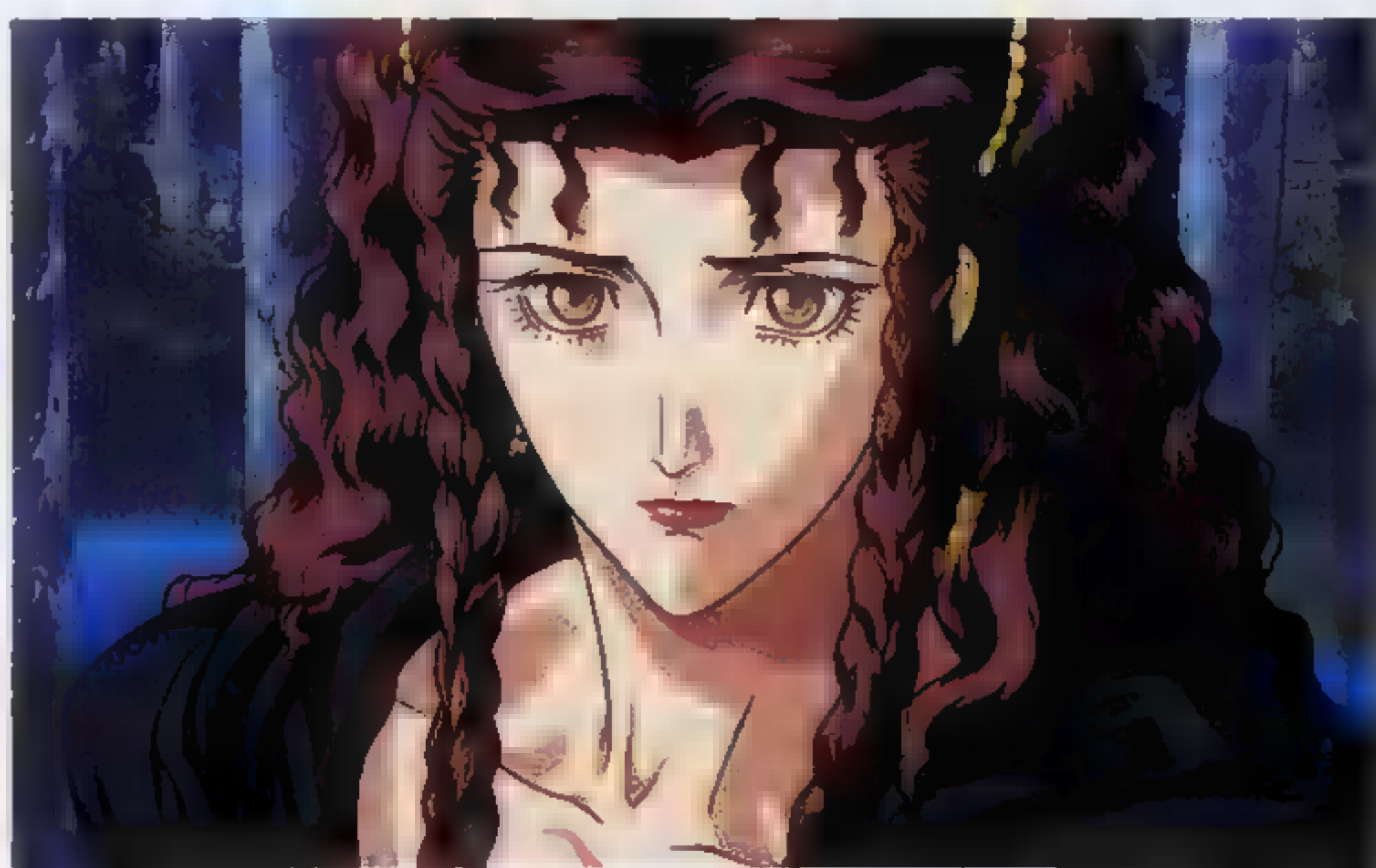
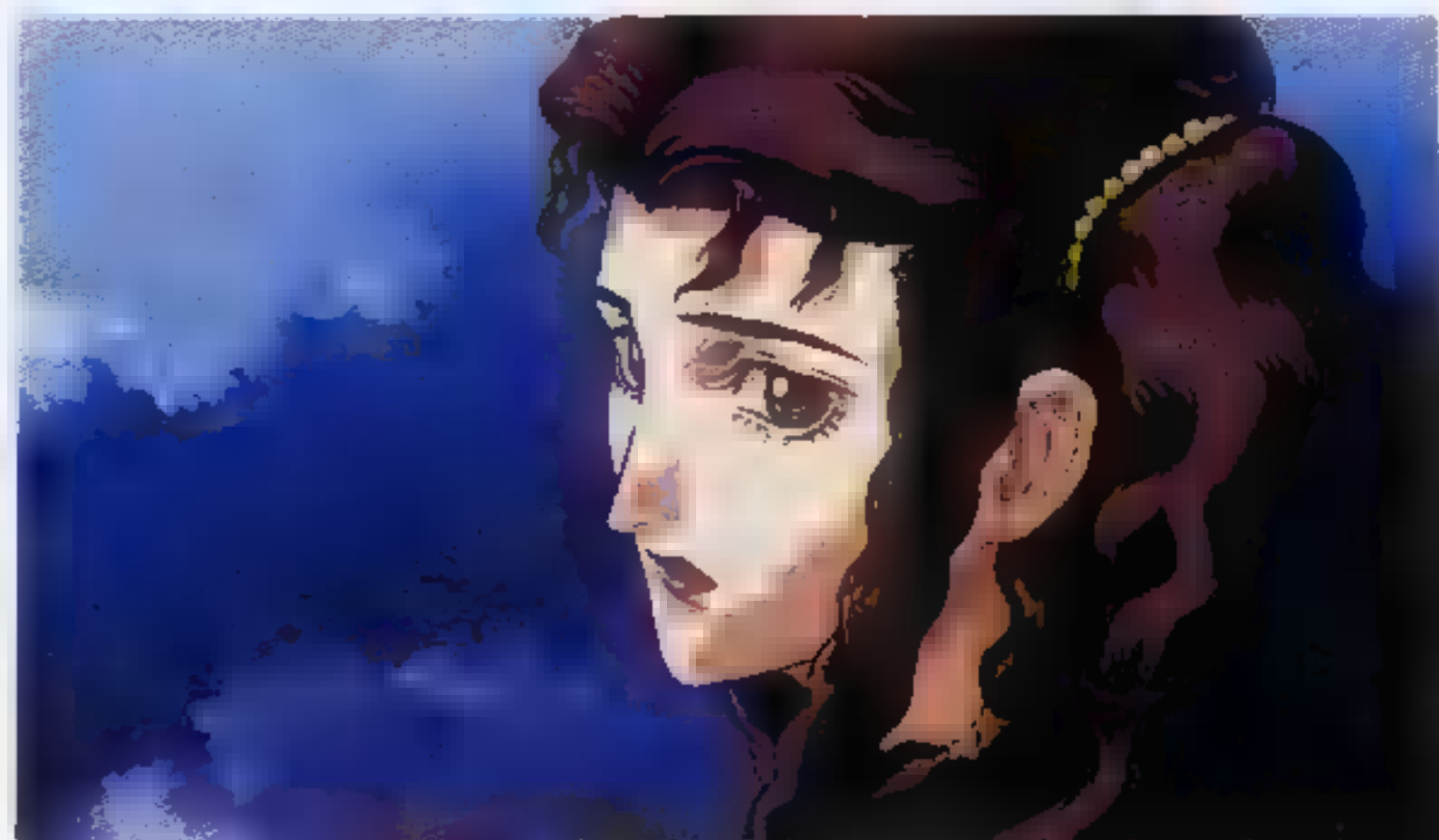
「ここは護衛の任についた我ら三人にお任せくだされ。そやつ、初めからそのつもりで乗り込んでおりますれば、その策に乗ってやるも一興！」

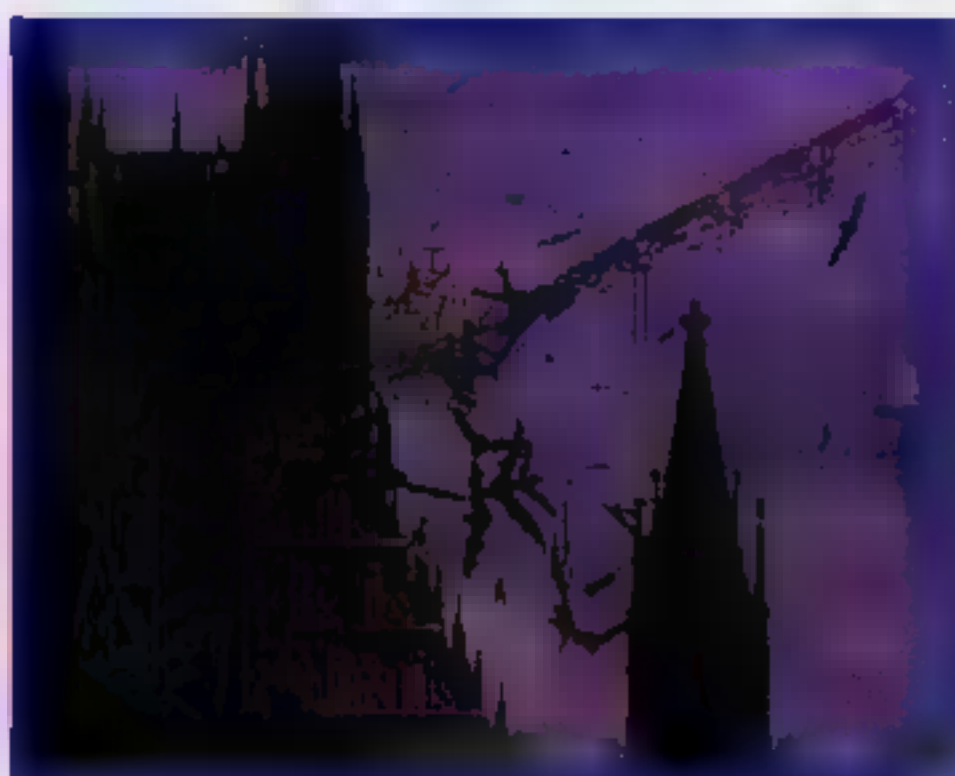
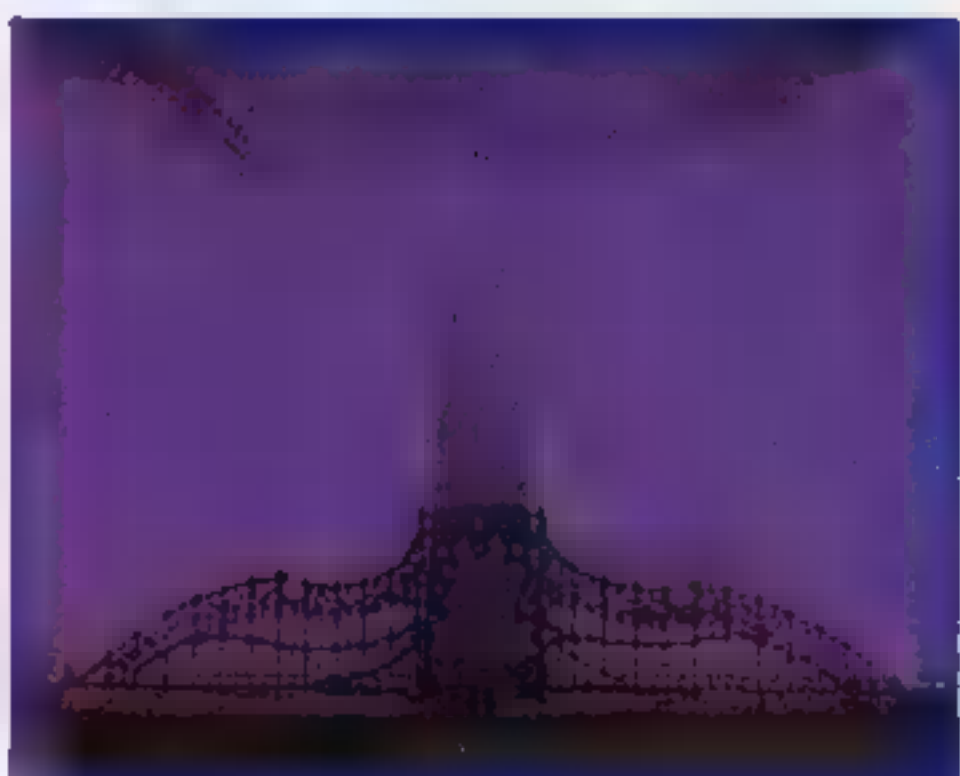
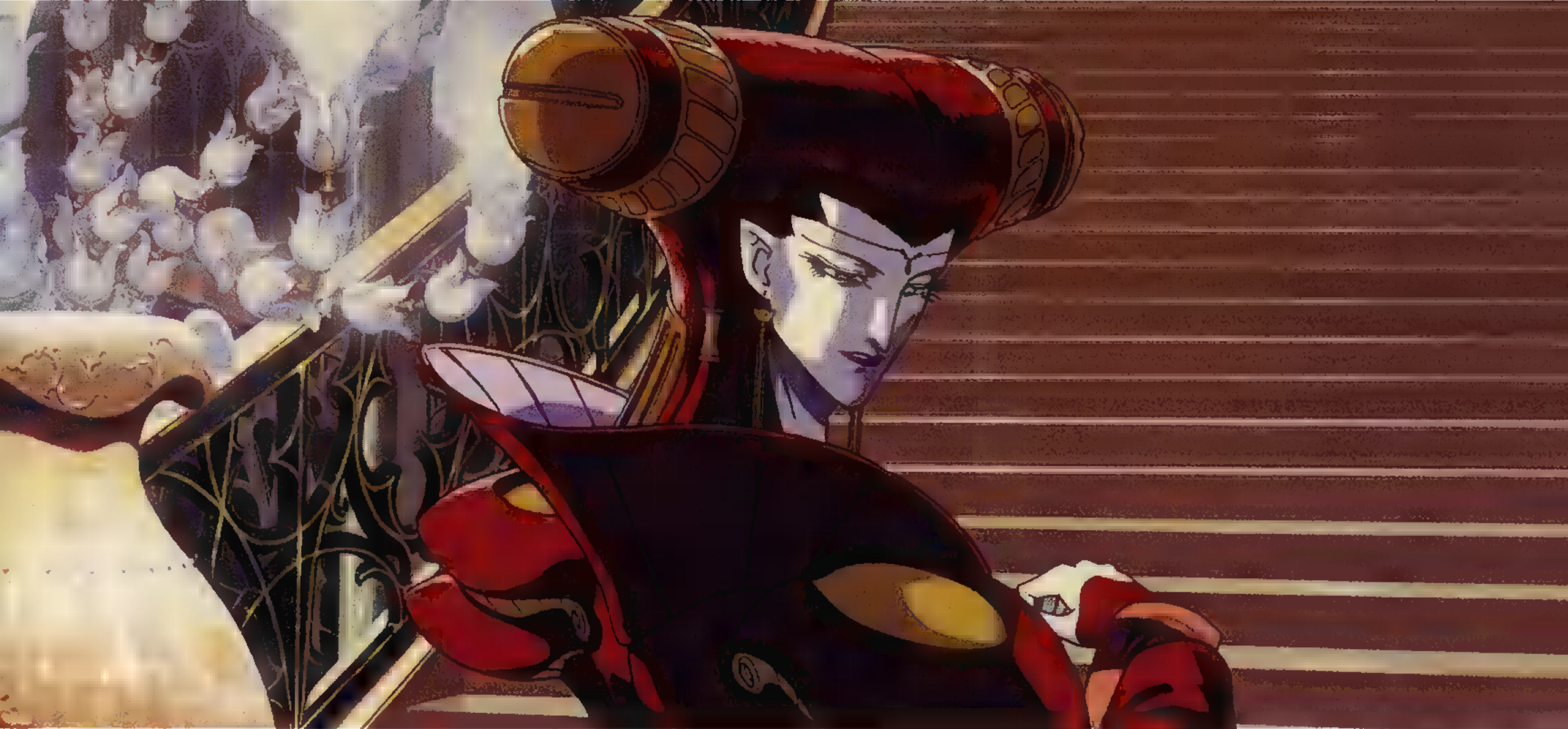
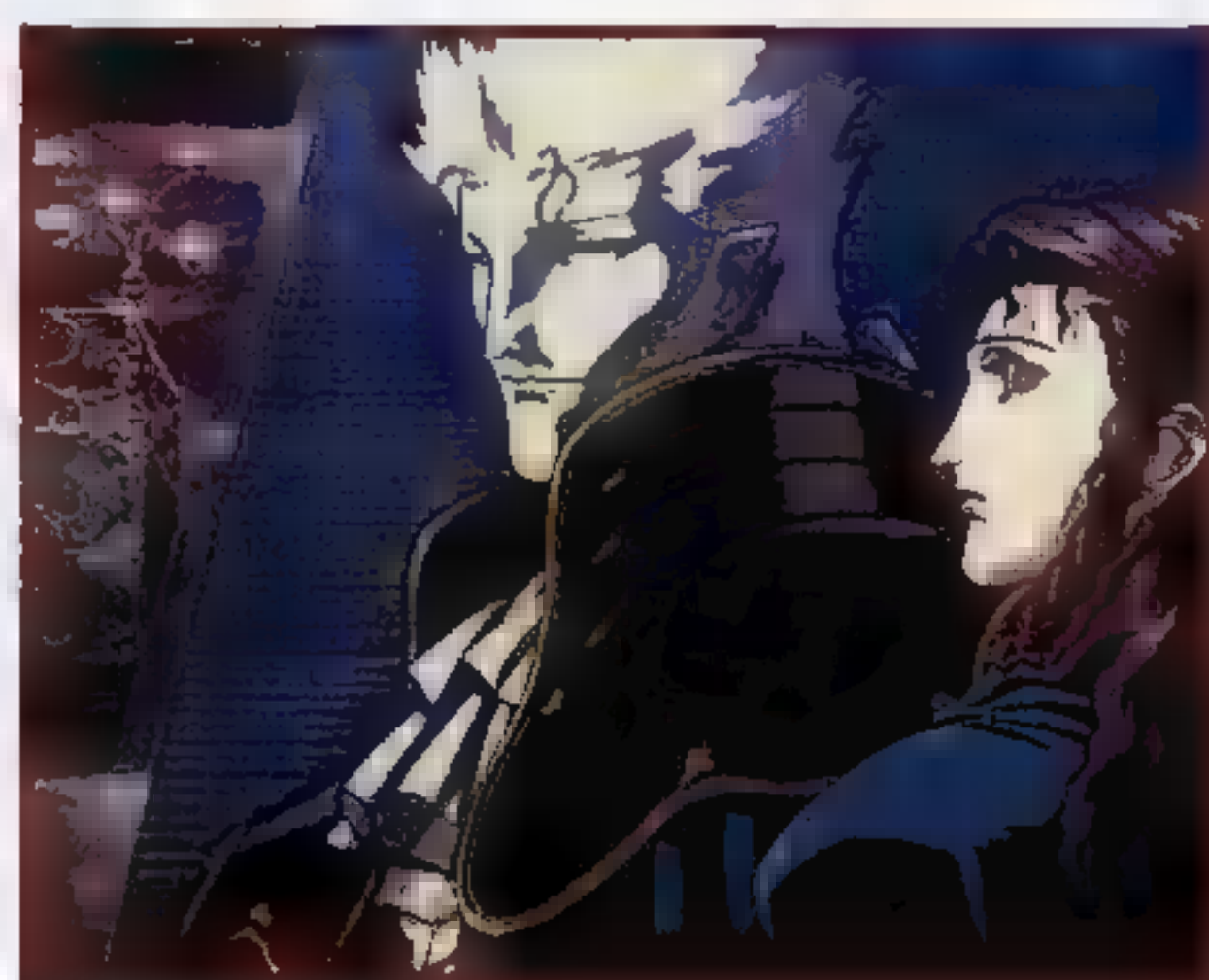
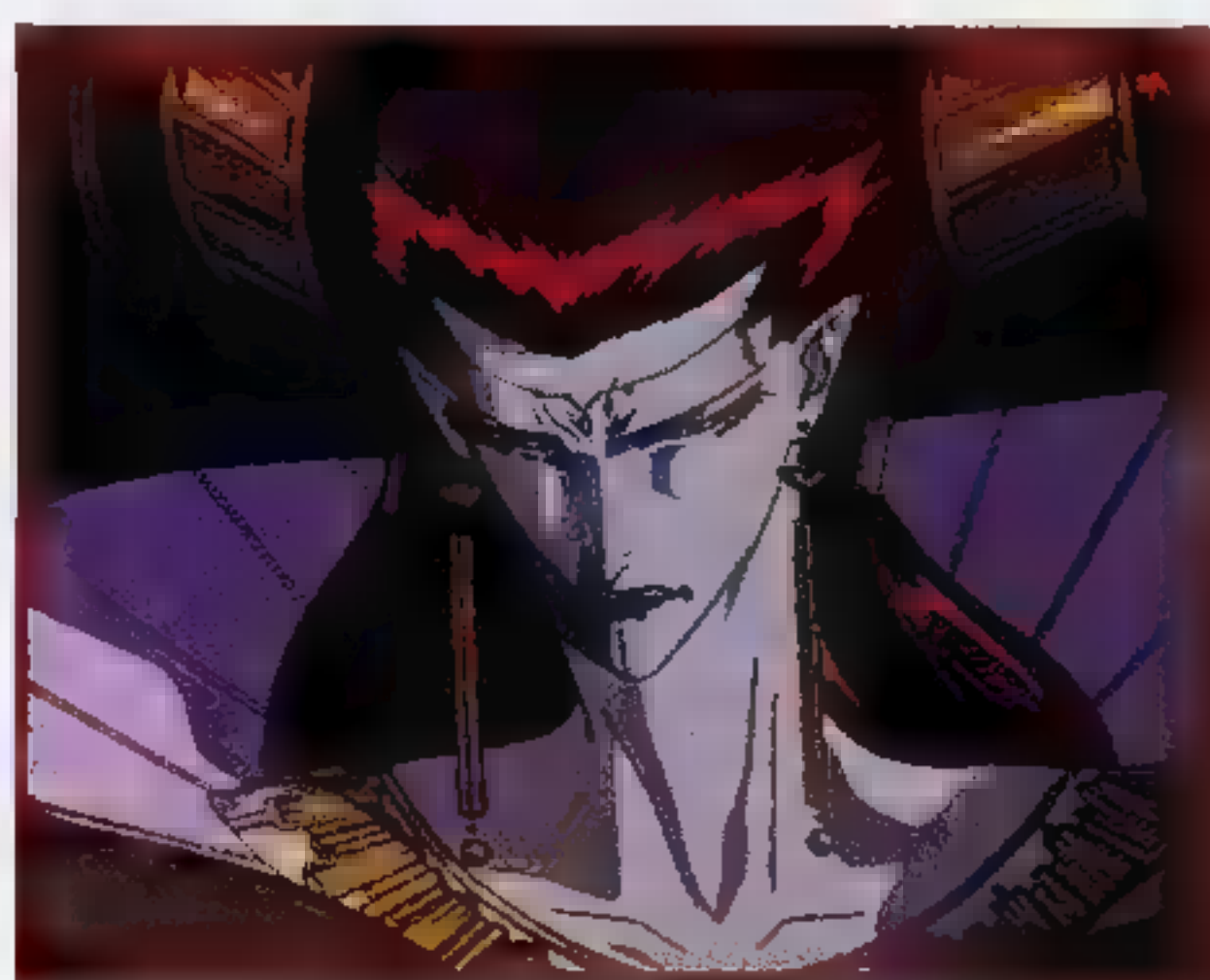
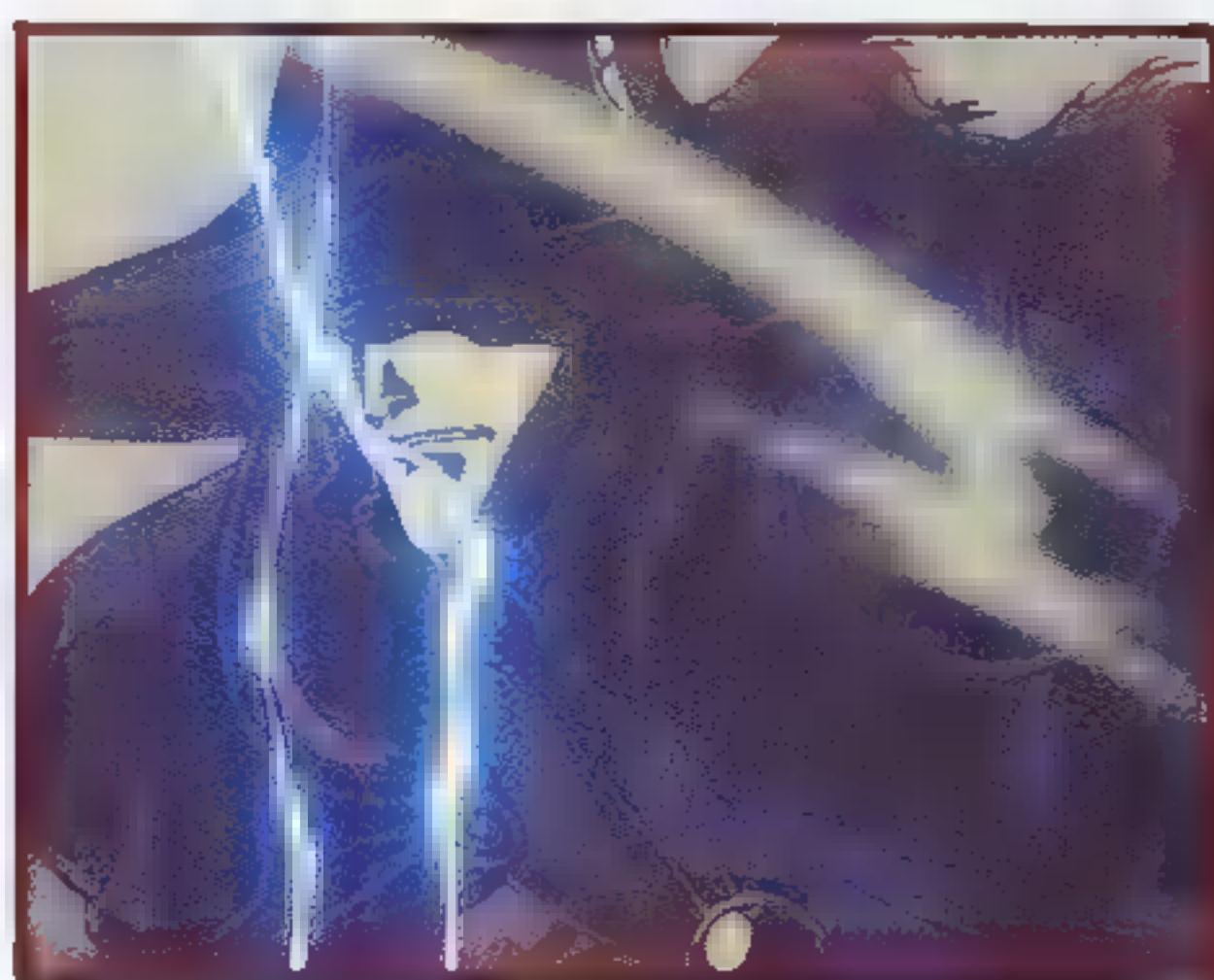
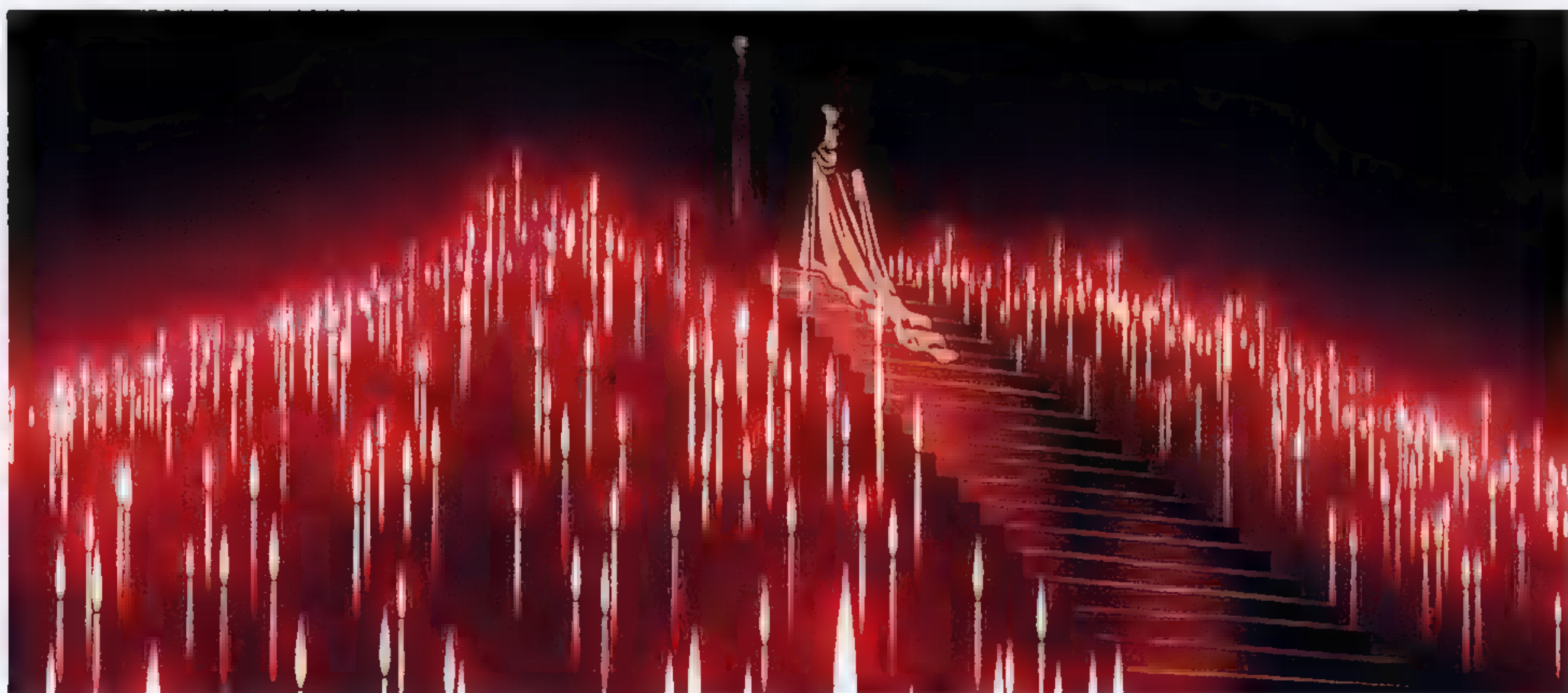
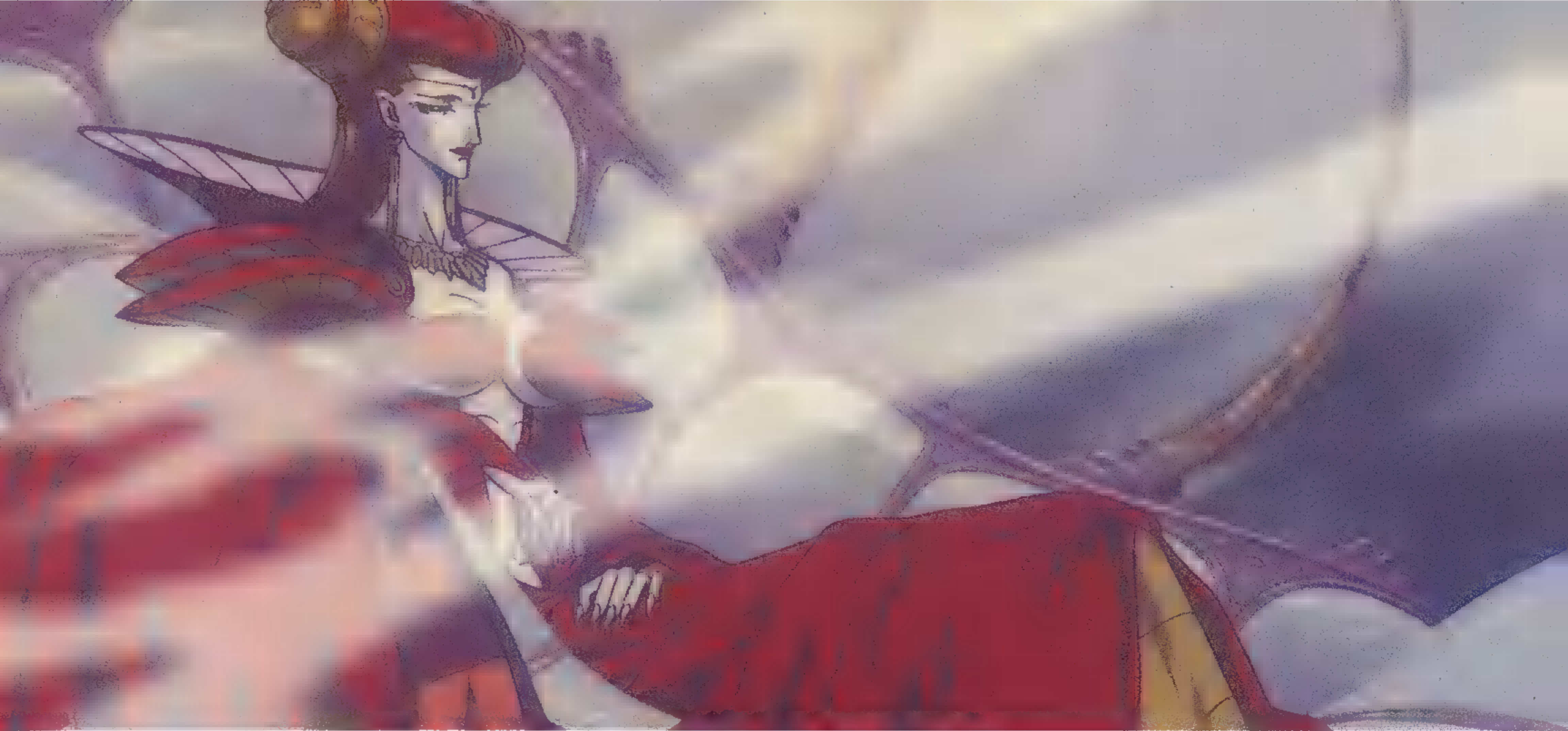
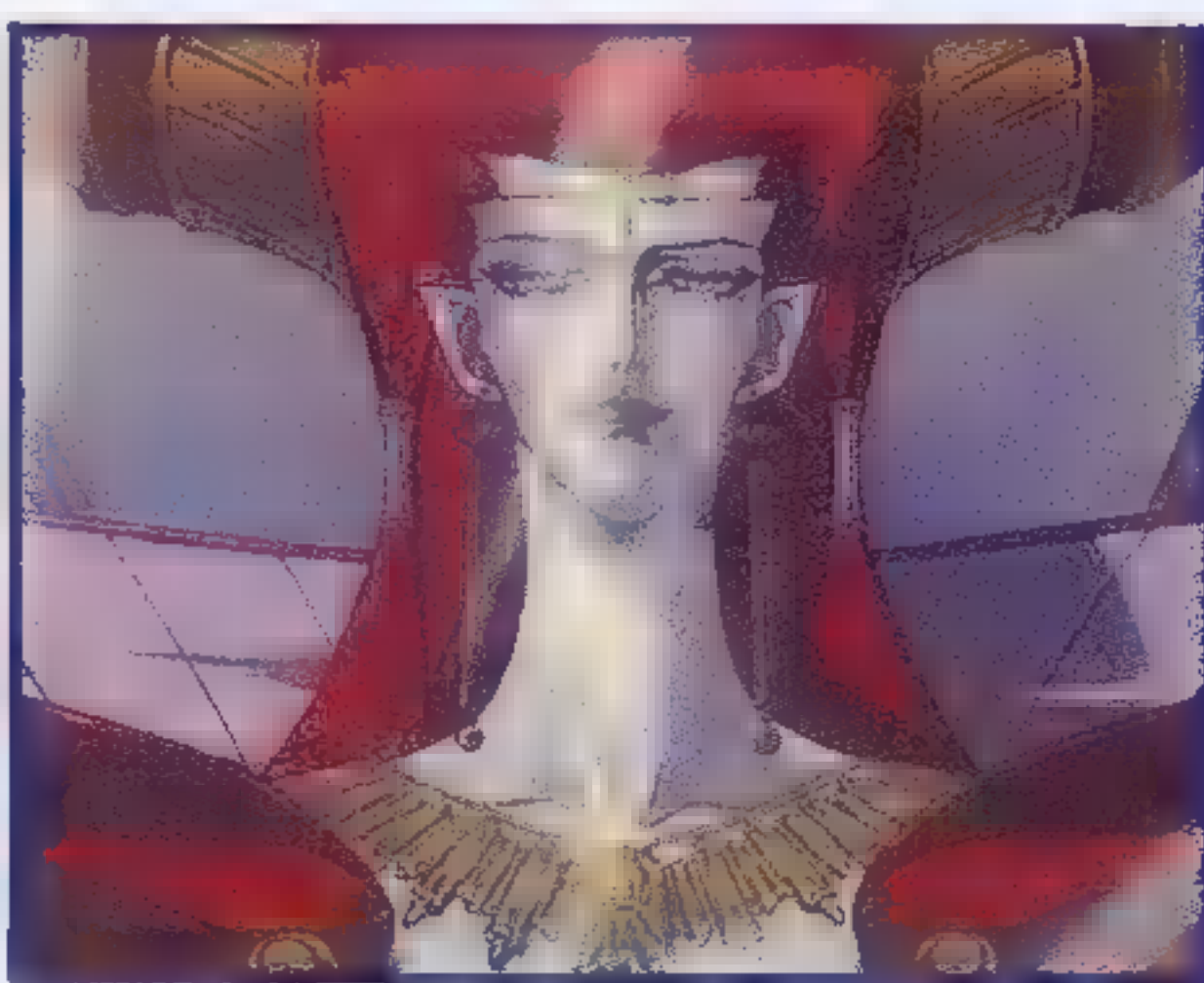
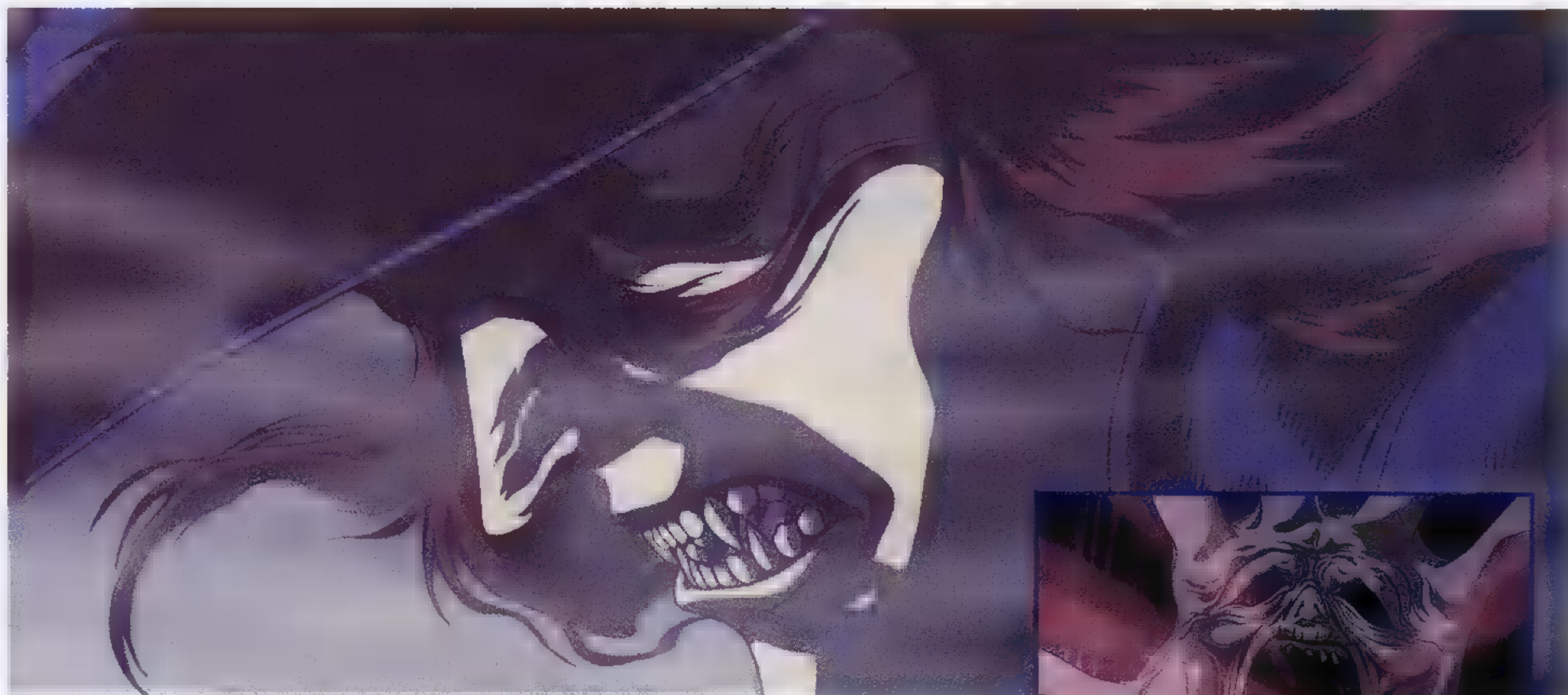
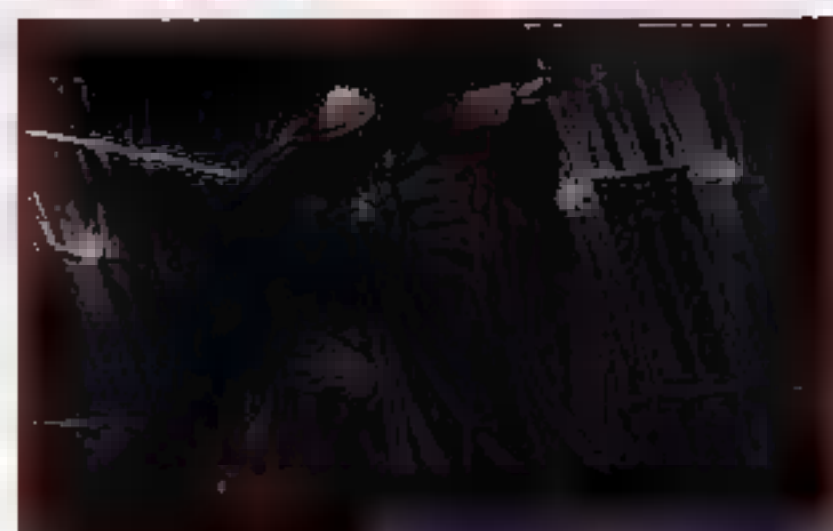
バルバロイ三護衛

逃亡貴族マイエル=リンク

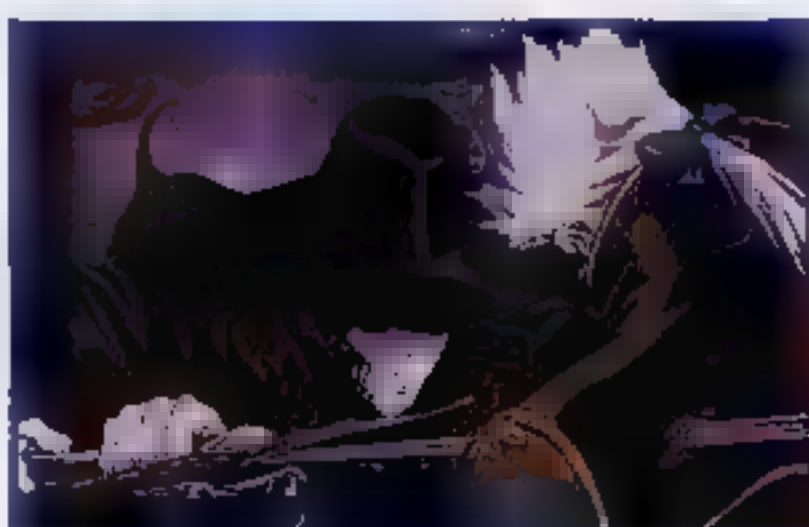
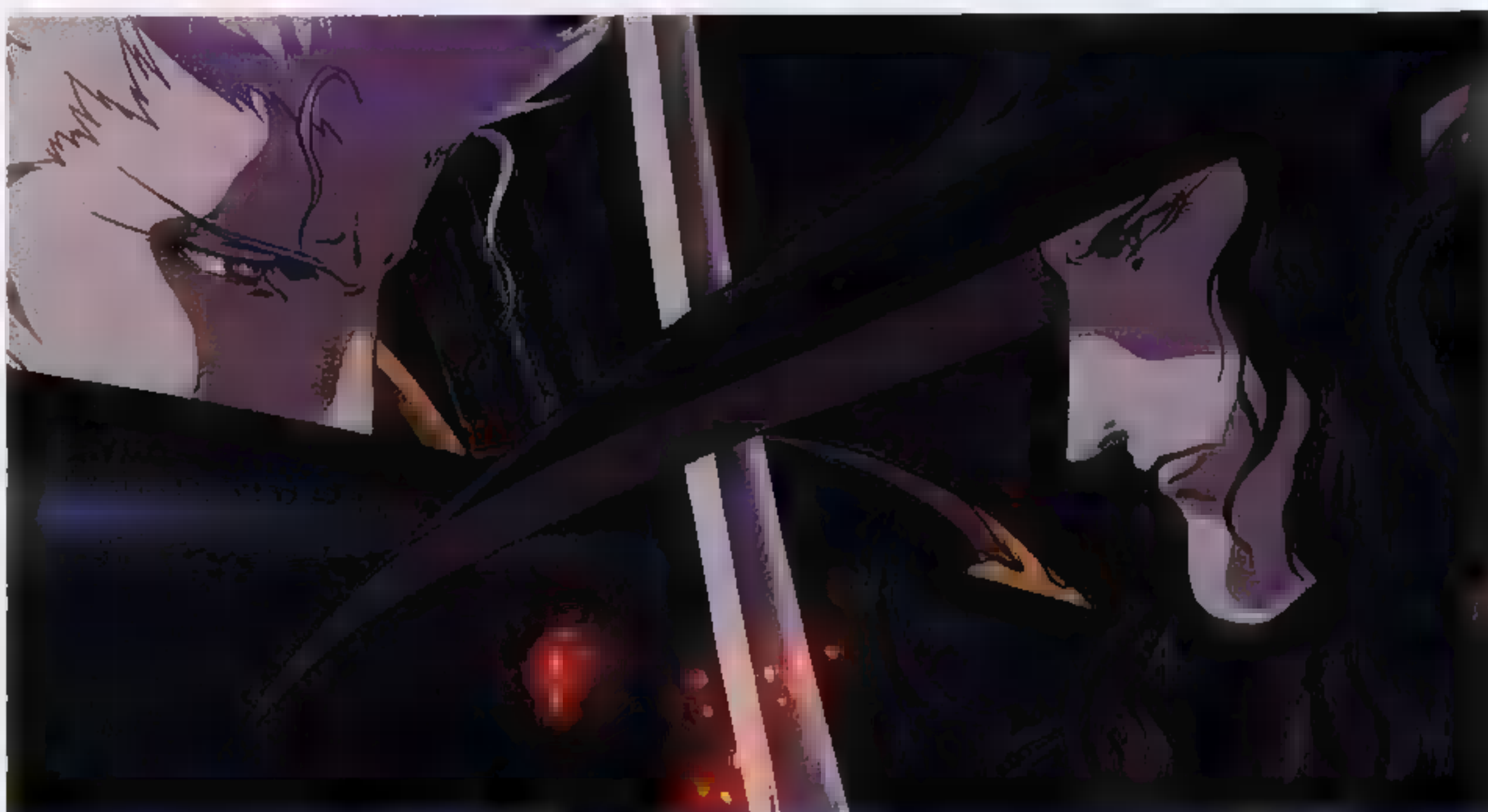
「……ダンピールのハンターに優れた技倆の男がいると聞いた。お前がDか……一度会いたいと思っていたぞ。私はマイエル=リンク」

「……俺もその名を聞いている。貴族でありながら、決して人間には牙を向けぬ男だと……だが、そうではなかった！」

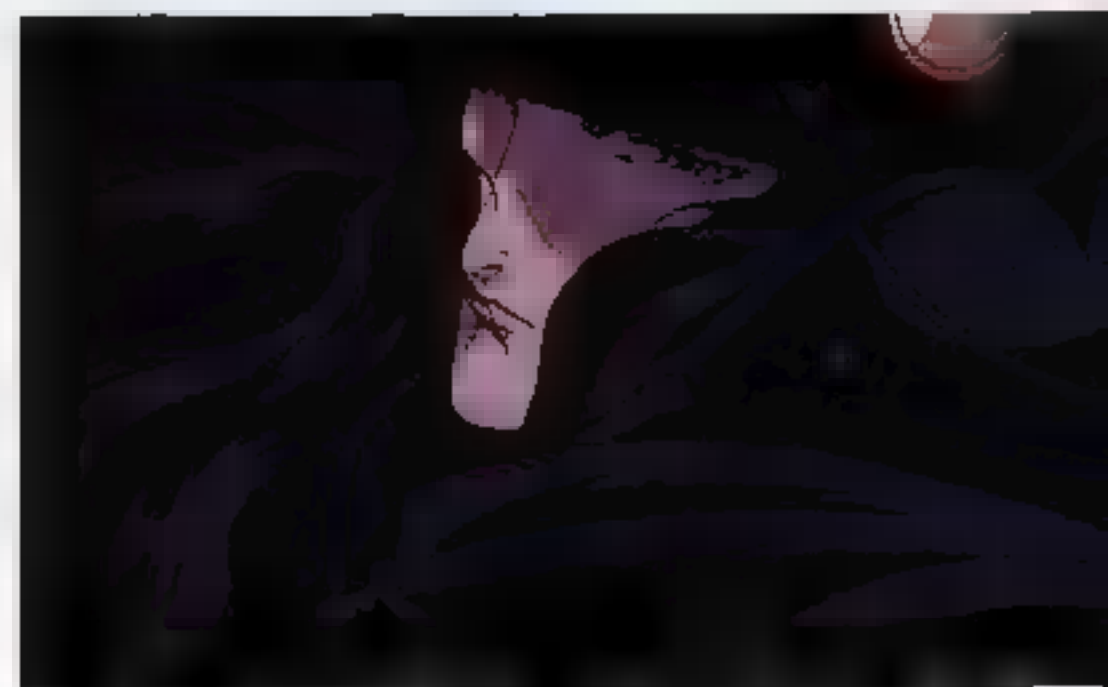
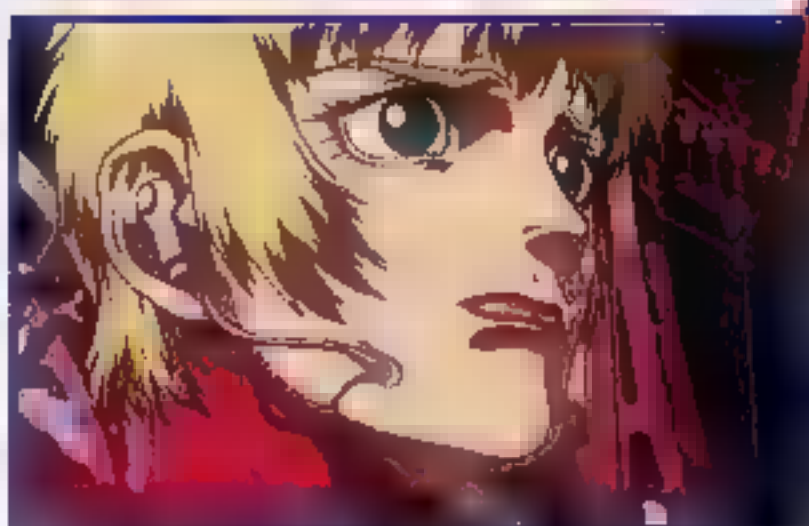
追捕者“D”

レイラ

「死にかけて母親の名を呼ぶ娘にハンター稼業は向かん」

生身のハンター

「ハンター稼業に向かないのは、あんたの方よ」

血を分け隔てた恋

「……父は、あなた方に何も言わなかったのね。私は――……マイエル＝リンク様を愛しています。エルバーン家のシャーロットはもうこの世にはいないのです」

「……貴族を愛してる？……ふざけんじゃないよ。あの貴族のせいで、何の関係もない大勢の村人がどうなったか知ってるの？」

「星々への港、我が地にあり……
そなたたちを星々の果ての『夜の都』へ運ぶ船じゃ。何とか飛べるとよいが……」

「かたじけない。カーミラ殿、礼の言葉も尽くせぬ」

「ダンピールのハンター……お前を見ていると哀しくなるぞ。
それほどまでして人間の手先になりたいか」

「……時に忘れ去られた者は……静かに滅びを受け入れろ……
この世において、すべては『かりそめ』の客……」

バンパイアハンターD「名場面アルバム」

「これが私とお前の宿命か…… だがD…… これだけは胸に刻んでおけ。いつかお前も耐え切れずに、人間をその牙にかける時が来る……誰もこの性(さが)には勝て■」

運命の指輪

「……その時は、俺が追われる身となる……それだけのことだ！」

最後の対決

…To be cotinued at your Local Theaters!

「バンパイアハンターD」

川尻善昭(監督) 菊地秀行(原作) 観ながら対談

大のアニメ嫌いで知られる原作者・菊地秀行氏と、その氏が絶賛するDアニメーション最新映画版を監督・脚本した川尻善昭氏が、映像版"D"の魅力と裏話を披露する！

構想?年の『D』アニメーション最新作

——そもそもの企画の始まりから。

川尻：これまで『妖獣都市』(87)から何本もビデオ作品を手がけてきて『獣兵衛忍風帖』(90)が終わった頃に、そろそろ劇場作品をやりたいねと。マッドハウスの丸山社長と話をしまして。何をやりたいのかと訊かれた時に、菊地さんの『吸血鬼ハンター"D"』だと即答していたんです。

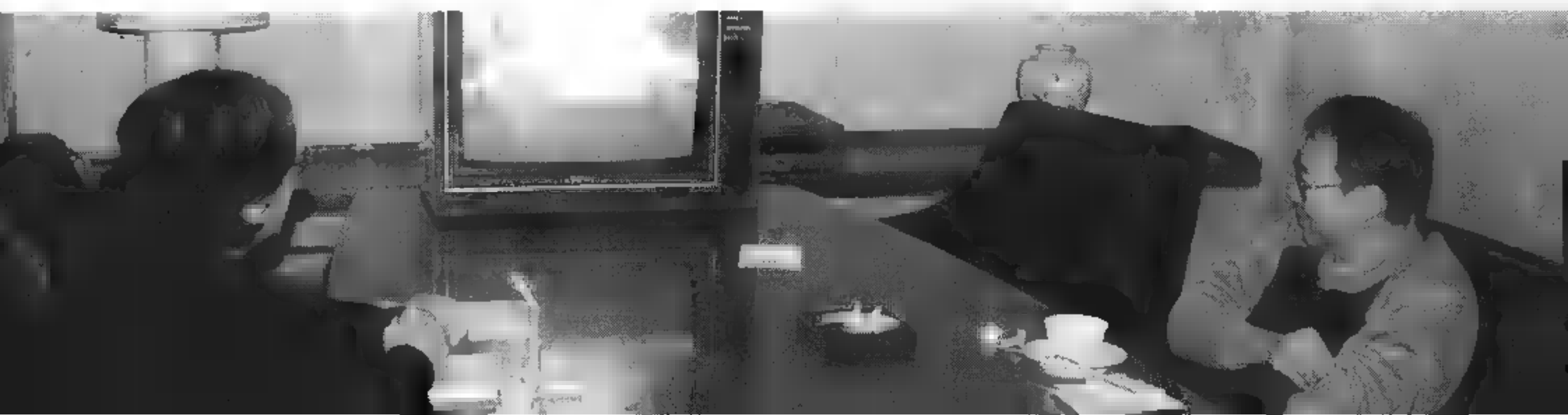
菊地：なんでまた(笑)。

川尻：どうせ劇場作品をやるなら、グローバルな配給を意識した作品を目指したかったんです。ジャパニメーションの特殊性と、ある程度実写と同じように観てもらえる、そういう世代をターゲットにしたいと思ってましたし、それに吸血鬼(バンパイア)というのは世界的にオーソドックスなものじゃないですか。その上『D』は、菊地さんなりの荒唐無稽なアイディアがいっぱい詰まっていて、ロマンスありアクションあり、それに僕の大好きな幻想的な雰囲気——そういうものがすべて詰め込まれた作品ですからね。これを絶対にやりたいと。そんな感じで勝手に決めてまして。

菊地：ありがとうございます(笑)。

川尻：そこで直接、菊地さんに「映画化させてください」と申し込んだわけなんです。六年ぐらい前のことです。

——もう構想十年という感じなんですけど。

川尻：そのくらいやってる感じですね。でも構想よりも、それを実作業に移すまでに

川尻善昭●1950年横浜市生まれ。虫プロを経て、71年マッドハウス設立に参加。84年の「レンズマン」で監督デビュー。「妖獣都市」「獣兵衛忍風帖」など監督作品多数。

時間がかかる。話が出たのは七年くらい前かも知れません。菊地さんに許可をいただいてからは、どういう形で作りたいのか頭の中で決まってましたからね。あとはそれを具体化する作業が続いてここまできた。スポンサーの決定や、スタッフを揃えたりとか、苦労はいろいろありましたけれど。

――直接、菊地さんのご自宅に川尻さんがうかがったとか。

川■：脅迫に行ったんですよ（笑）。

■地：川尻さんにああ来られると断われない（笑）。当時は僕のアニメ嫌いに拍車がかかっていた時期で、正直なところ「もうええわい」という感じだったんです。

　最初は川尻さんではなく丸山社長がいらっしゃって、改めて『D』をやりたいとおっしゃる。最初の『D』（83年）が公開されたずっとあとのことで、村山（実）さんが編集部長でいらしたころです。その時は断わって、そのまま話が流れるかと思いきや、なんと川尻さんが来られた。川尻さん本人が現われたらこれはもうしょうがないと（笑）。観念してOKはしたんですが、実はその前に『妖獣都市』（87）を見ていましたからね。あのグレードでやっていただければ何の問題もないだろうと。

――完成した今回の「D」をどこまで予想できました？

■地：予想なんてできない。できるわけがない。どんな映画になるかすら分からなかったですからね。やっぱり実際に見てみないと。

川尻：僕にしてもそうですね。絵コンテにしろ何にしろ、頭の中で作っているものじゃないですか。それが結果的にどうなるかというのは、僕自身も含めて分からない部分は多いんですよ。音楽をこう入れてとか、こういう流れでとか、感覚でしか言えないから、どこまで気持ちよくできるか、いろんなスタッフとマッチングの部分がどうなるかというのは、運の部分が大きいと思うんですよ。

――実質的な製作期間は？

川尻：二年くらいですね。音響作業とかシナリオは別にして。

――脚本は直後に出来あがってましたね。

川尻：そうです。

――絵コンテまでの間はそれなりにあったと思うんですが。

川尻：やはり二年くらいですね。

■地：二年！　絵コンテはすごかったですね。新宿の喫茶店で見て、うひぇー（笑）。

川尻：絵コンテまでの二年間が一番つらかったですね。頭の中はそれを映像にしたくてしょうがないのに、実製作が決まらないものだから。その間、仕事の量は一番やったんじゃないですかね。五本くらい持ってましたけど、どれにも集中できない。もう頭の中は完全に「Dバージョン」になってる。本当はこんなこと言っちゃマズイんですけど（笑）。

――最初から『妖殺行』で行こうと。

川尻：本当は一作目が分かりやすいだろうと思ったんですが、一度映像化されているということで、別の話をやってみようと。映画にするには、限定された時間なり空間なりが必要です。そういった意味で『妖殺行』はチェイス中心で数日の物語、映画としての時間軸を操作しやすい。そして何よりも観客が設定を理解しやすいということ

で『妖殺行』を選んだんです。ただ残念なことに『妖殺行』には「お城」が出てこない（笑）。吸血鬼を映画にしたときに城が出ないのはいけないんじゃないかと（笑）。それでクライマックスに城を持ってきたんですよ。

菊地：あれはそういうことだったんですか（笑）。

川尻：そうなんです。やっぱり吸血鬼ものとして、スタンダードな記号をちゃんと使わないといけないと思いましてね。逆に今回の「城」があれば、城が出てこない話もできるじゃないですか。『北海魔行』とか。一本目はどうしても城を出さなきゃなと（笑）。

菊地：カーミラが出てくるのは何か理由があるんですか。

川尻：マイエルリンクというのは、むしろDに近い吸血鬼じゃないですか。たまたま追われることになってしまうけど、本来ならDと闘う運命になかった吸血鬼です。しかし、それでは吸血鬼本来の怖さというものを出しづらい。カーミラにはスタンダードな吸血鬼として出てもらったんです。原作の一作目のエッセンス、吸血鬼ものの基本として押さえられているものを持ち込んだわけです。

菊地：なるほど、そうですよね。

川尻：原作を読んでない人でも、正統派の吸血鬼作品として受け取れるようにしたんです。勝手に変えちゃいましたけど（笑）。

菊地：映画が原作と違うというのは、これまで五十年以上見てきたから大して驚きはしなかったですけどね。お城は分かりました。出したかったんだろうなと。カーミラはどうかなぁと思っていたんですが、いまの監督の言葉で納得できました（笑）。

——原作が『妖殺行』と決まった段階でファンの関心は、あの「少女」の名前がどう処理されるのかと。

菊地：そうそう。あの娘には名前がついてないですからね。

川尻：何となく決めてしまいました（笑）。

菊地秀行●1949年銚子市生まれ。ライター、翻訳業を経て82年に「魔界都市〈新宿〉」で作家デビュー。以後、「吸血鬼ハンター」「魔界都市ブルース」等、精力的に執筆。

菊地：なんで名前つけなかったんだろうな。最初つけなかったら、ずっとそのまま行っちゃったですからね。この謎は原作者にもよくわからない（笑）。

川尻：非常に純真で無垢な設定だから、名前をつけると色が着いちゃうという心配があったんじゃないですか。

菊地：名前でイメージが限定されるというのは確かにありますね。名前といえばマーカス兄弟も映画のマルクス兄弟のつもりだったんです。兄弟といったら、昔マルクス兄弟というのもいたな、じゃあちょっと崩してマーカスにしてやれと思っただけで（笑）。

——まさか、それで四人なんですか。

菊地：そうだね（笑）。女性が一人色づけにいて五人とね。

映像完成、D颯爽登場！

菊地：プロモーション・リールでDが月夜を背景に登場する瞬間を見たときは、大感激でしたよ。これはやっぱりかっこいい。この前に村長から依頼される場面があるじゃないですか。あのシーンをすっ飛ばして、娘がさらわれてすぐこの場面に来てもおかしくないくらい、すごいシーンだと思いま

すよ。

川尻：いや、本当はそうなんですよ。

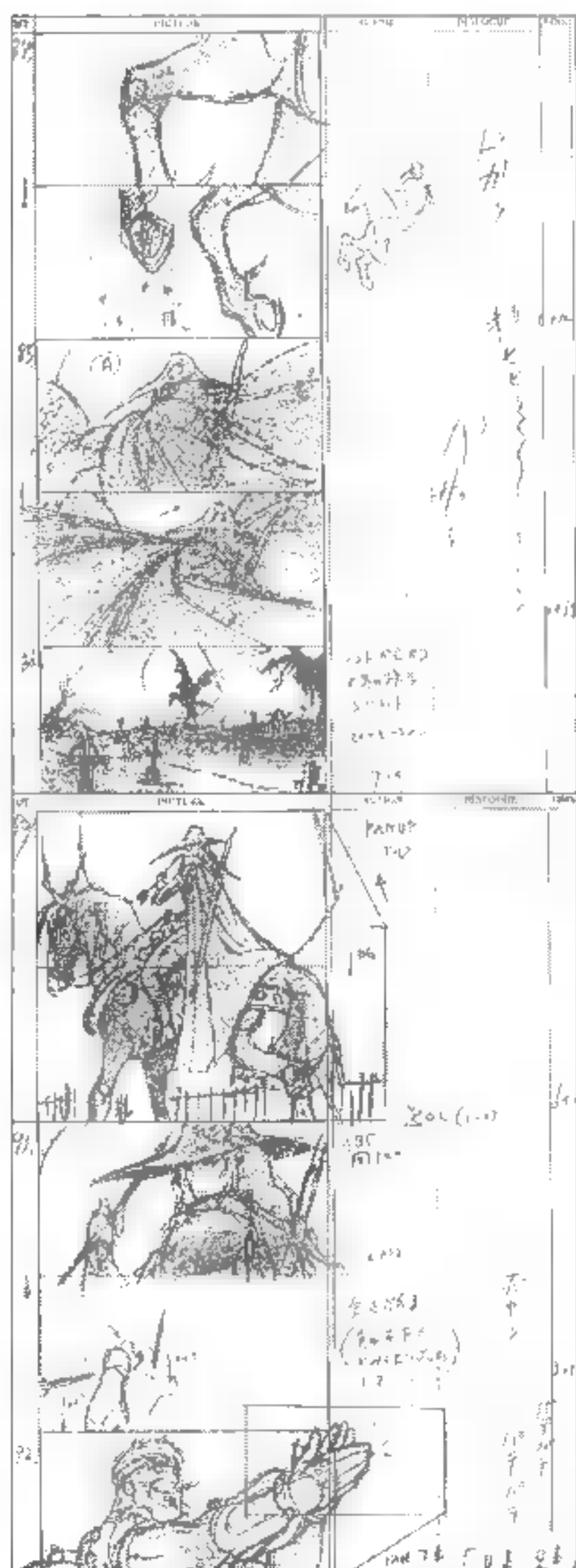
■■：えっ？　なんですかそれは（笑）。

川尻：日本国内向けのビデオだったらそれでOKなんです。いきなりこの場面に飛んだ方が絶対かっこいい。しかしグローバルな市場展開ということで、順序立てて説明したかった。ちょっと説明的なんですけれど、それが必要かなと。あとは一気に流れ込めますから。最初はちょっと抑え気味に。もちろん『D』の世界を知っている人には、いきなりの方がストレートでいいと思いますけど。

菊地：なるほど、そうですか。他にも「いきなり」の方がいいという意見を聞いて、僕もそう思ってたもんですからね（笑）。

川尻：『D』は意外に約束事が多い世界じゃないですか。説明しなくちゃいけないことはいっぱいある。ダンピールさえ、一般の人には分からない。普通の観客には理解しづらい世界です。だから、ダンピールというのはどういう存在なのか、ダンピールの力を借りればならない事件で、ダンピールを雇いながらも人間たちはとても恐れている——そういうことを「絵」として表現しておきたかった。このあと「普通の人」がほとんど出てきませんからね。ガリューシャの町で少し登場しますけど。何を説明して何を省くかという選定は、かなり難しかったです。観客は設定じゃなくて物語を見ていくわけですから。もちろん、ディテールというのは大事だと思うんですけど、観客に設定を完全に理解させるとなると、映画のテンポとしてはちょっときついかなと。

川尻監督自身の手になる絵コンテ

■地：原作にはないイメージというのがたくさん出てきますが、退避所のシーンなんかもすごいですよね。

川■：そうですか（笑）。貴族の退避所は小説でもモノリスのイメージですよね。

■■：そうです。でもDが小石を弾いて防御レーザーを確認するというのはちょっと思いつかなかったですよ。

川尻：原作では、Dのペンダントが退避所に対して効力を持っている。それを説明しようとすると、Dの背景——出生の謎にまで行ってしまう。それでこれに変えたんです。

■地：変えたにしても、小石をピッピッと飛ばすというのはすごいアイディアだなと。ああいうアクション、なかなか出てこないですよ（笑）。サンドマンタのシーンだってすごいですからね。

川尻：今回、スタッフを自分の思うように集められたんでね。Dをやるんだったらキャラクターはこの人、美術はこの人というように決めてました。すべてスタッフのおかげです。

英語のD、日本語のD

——画面は声を想定して動かすんですか。

川尻：ええそうです。セリフだって何秒で

しゃべるかというのを決めちゃいますから。フィルムが完成したら確認作業です。日本語版の台本を持って、夜中にビデオを見ながら「このセリフ入るかな」と思いながら一人でアフレコやるわけです。このの人のイメージでと自分なりに芝居して、ストップウォッチを手にして、自分でやってみて「あれ、これじゃ入りきらないなぁ」とか。アニメの監督って情けねぇなあと（笑）。

■■：それ、川尻さん一人で全部やるんですか？

川尻：そうですよ。Dからレイラから全部。

■■：どれくらい時間がかかるんですか？

川尻：そうですね、一晩はかかりますよ。

菊地：一晩じゃ終わらないでしょう。

川尻：いや、逆に一晩くらいで終わらさないと集中力が続かないですよ。ただ『D』は台詞がすごい少ないんで。台本を見ても、ガラガラとかドカーンとか効果音の方が多いくらいですよ（笑）。普通のビデオだったら、アフレコ自体が五、六時間で終わっちゃうんじゃないかな。セリフの分量からいうと。

菊地：Dの声は、最初は誰だったんですか？

川■：もちろん塩沢（兼人）さんですよ。

■■：ああ、やっぱりそうですか。試写のアンケートには「英語の声優さんが、決まったイメージがなくていい」とありますね。

川尻：洋画を観て、より魅力的に感じるというのはありますね。言葉がはっきりと分からないだけに、ミステリアスだったり、捉えどころがなかったりするから、身近でない分だけ。

■■：映画を観ていて、逆に吹き替えの声優さんが合っていないとガクッってくるのと同じですよね。おっと「日本語版は必要ない」なんて、すごいことが書いてある（笑）。

川尻：それは塩沢ファンじゃないですか（笑）。塩沢さんがいないなら他の人ではやらないでくれと。

■■：もっとすごいのがありますよ。「何もかも遅過ぎます。私に塩沢さん以外のDを見せる気ですか」と（笑）。

川尻：三年前に出来上がってればよかったんですけどね。日本語のアフレコはこのあいだ一人だけ、スケジュールの関係で先にカーミラを録りました。前田美波里さんで。

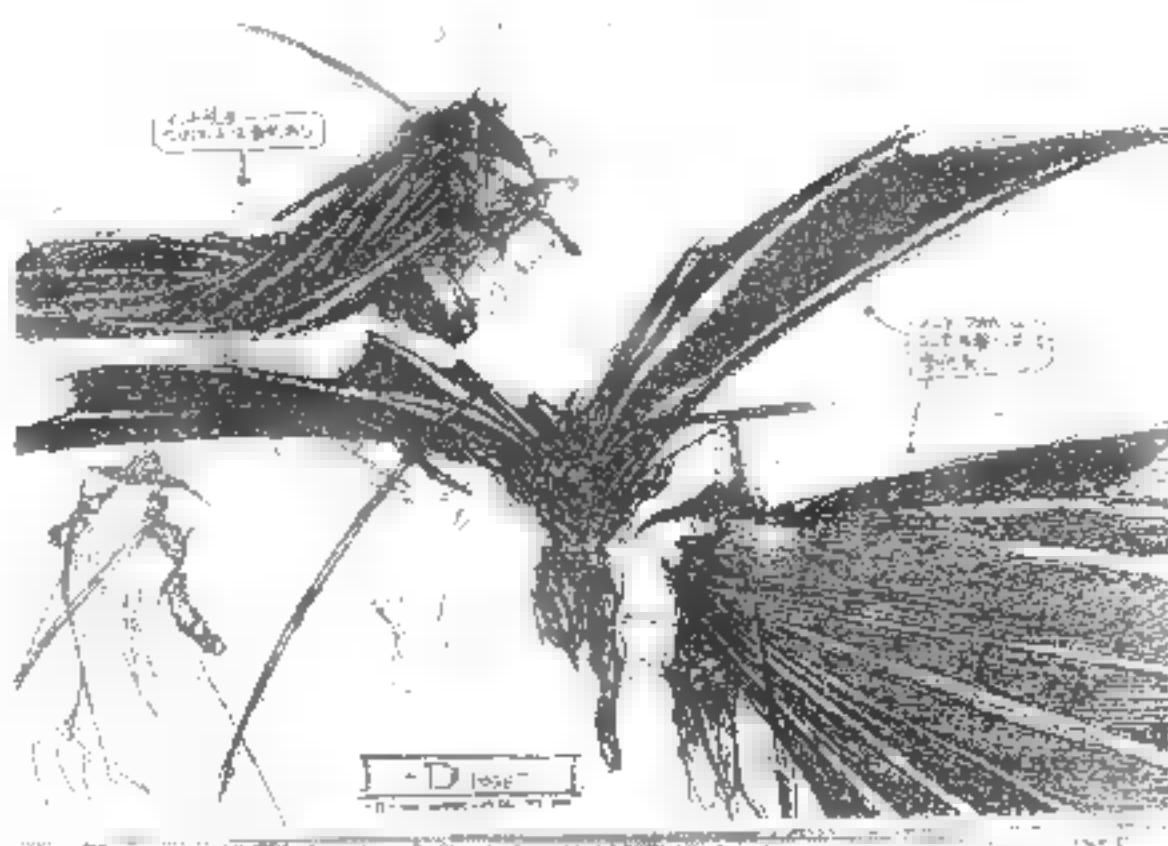
菊地：前田美波里！　すごい迫力（笑）。

川尻：Dの世界というのは勧善懲悪と違うじゃないですか。あんまりそういう風にもしたくないなと思いまして。吸血鬼は吸血鬼なりのポリシーを持ってこの生態系の中で生きている。その威風堂々とした感じ、それに美波里さんはいま舞台の女優さんですから、滔々と歌い上げるようなセリフまわし、それと高貴さとか上品さとかそういったものが欲しいんで決めました。

菊地：迫力あったでしょうね。

川尻：迫力ありました。背が高いんですよ（笑）。絶対ツーショットで撮られたくないなと思いました（笑）。無理やり撮られてしまいましたけど（笑）。

菊地：マイエルリンクは？

川尻：山寺宏一さんです。「オッハー」の人です。洋画でもおじさんから渋い二枚目から、エディ・マーフィのような吹き替え

Dのキャラクター・デザイン

とか、幅広いですよね。軽めから渋めのかんじから何でもこなしますよ。すごいカッコいいです。TVにも出ていますが、TV画面とマイクの前と全然違いますよ。声優さんはみなさんそうですけど（笑）。

■地：まるで違う（笑）。

川尻：違います。そう言えば、まるで違うって、僕もこないだ言われましたよ（笑）。十月に釜山（プサン）映画祭で『D』を上映したんですが、その時に観客とのQ&Aで『獣兵衛忍風帖』と『D』と、どっちも見ましたけど、どっちもかっこいいですね。でも監督さん、全然イメージ違いますね」なんてはっきり言われてしまいました（笑）。ないからこそ、そういうのにあこがれるんじゃないか。菊地さん、作品と作者のギャップってどう思われますか。

菊地：願望充足小説はいけないとよく言われるけれど、ヒーローものを書く人なら、絶対にあるはずだと思います（笑）。

川■：願望がないと絶対に作品のイメージが出ないですよ（笑）。Dみたいな人が書いてたら、非常に殺伐とした無味乾燥なものになってしまうんではないですか（笑）。

菊地：そもそもそんな連中はコツコツ書くわけがない（笑）。

川尻：頭の中で膨らませているから面白い。身近にそういう人がいるわけでもないし。舞台の上で腹が立ちましたよ、よけいなお世話だよって（笑）。

小説からの画面移行の難しさ

■■：グローヴとベンゲの戦闘シーンもすごいですよね。

川尻：ここでは英語のセリフで「ティンカーベル、おいで」と入ってます。日本語では「こっちへおいで」と言っているだけですけどね。これは翻訳段階であちらが勝手に変更したんです。

——向こうから「ティンカーベル」がいいと？

川尻：そうです。日本語台本から英語への移行というのはかなり自由にやってもらったんですよ。シチュエーション的に外人にとって分かりにくいところは多分にあると思うんで。日本語版と一番違うところは、吸血鬼は悪い、勧善懲悪に近い部分はちょっとあるんで、その辺は多少そういうふうに設定しないと彼らにとっては理解しづらいんじゃないでしょうかね。日本語字幕ではまた日本寄りにしていますが（笑）。

■■：このシーンの前に、グローヴがベンゲにレーザーを撃ち込みますよね。その時、悲鳴みたいなものが聞こえるんですけど。

川尻：あれはバカ笑いなんですよ。バルバロイの連中は自分の技を見せたくてしょうがない。だから楽しくて仕方がない。

——小説を読んでいる立場からすると、グローヴの描き方なんていうのは、難しいような気がするんですけれど。

川尻：そうですか。わりと原作からそのまま素直にイメージしたんですけど。むしろ、カロリーヌとかマシラとか設定変えているじゃないですか。それは説明しなくちゃならないからなんですね。カロリーヌは半分貴族で、貴族の血にあこがれていたり、マシラはマシラで左手と同じような存在ですよね。それらは説明していかなくちゃならないことなんで、別の技に変更したんです。なるべく怖く見せればそれでいいかなと判断しました。

■地：小説では、Dの年齢に関してぼやかしているんです。吸血鬼は何百年も生きられるから「これ五百歳のおっさんではないか」と思われるとやばいなと思って、見た目だけ判断できるように適当にごまかして

あったんですけれど、映画では意外にはっきりやってますよね。ラストでDが来るところ。

川尻：Dが時間を超えて旅しているということと、人間の短い人生を見つめていくというところはきちんと残したいなと。ただ具体的に何年後とか、そういうことは出さないようにしました。あそこで五十年後とか出ると「あいつ何歳なのかな」と考えさせちゃう。それだけは避けました。原作では時を飛び越えてという直接描写はないですけれどもね。

――そういうことで言えば、冒頭の十字架のシーンもちょっとドキッとしました。原作では、人間は「十字架」という単語さえ思い出せないように記憶処理が施されていますから。

川尻：すごい難しい設定なんですよ。それはおそらく文章でないと理解できないことなんです。だから十字架は出てくるけど、マーカス兄弟の車のサーチライトが十字になっていたり、装甲車自体が上から見ると十字架の形をしていたりとか、ほとんど分からない

――その程度にしか使ってないですね。

菊地：その方がいいと思いますよ。

川尻：十字架も多少は出てこないといけませんから。

菊地：全部お約束事を守っていただいたと（笑）。

――レイラのバイクのヘッドライトも十字架で、退避所の壁面を走る時に退避所の表面を十字架形の光が滑っていくんですね。

川尻：マーカス兄弟がそういうのをちょこちょこ使ってます。すごい吸血鬼には通じないけど、下っ端レベルには通じるというつもりです（笑）。

菊地：カロリーヌは一度首を切られて、また生き返ってきますよね。これは何か意味があるんですか。首を切られただけでは死なないということですか。

川尻：ええ。同化もできるし再生もできるという。

菊地：木に同化できるというのは、吸血鬼の胸に木の杭を打ち込むということから来ているんですか。

川尻：そうです。マーカス兄弟は武器も杭だったりとか。原作にもあるように、吸血鬼は首を切るか心臓に杭を打ち込むかしかないということで。武器を絵的にどうするかと考えたときに、やっぱり弓とか、首を切る円月刀とか。実は製作中にジョン・カーペンター監督の『ヴァンパイア／最期の聖戦』が公開されまして、スタッフが観てきて「おいボウガン使ってるぞ」なんてね（笑）。これは「やばい」と思ったんですが、最初の十五分を見て安心しました（爆笑）。

菊地：あの監督はまじめにバカやってますよね（笑）。

川尻：もっとおカネをかけてバカやってほしいですよね（笑）。

菊地：せこいですよね。

川尻：製作中は他にも『ブレイド』とかありました。しかも『ブレイド』はダンピールじゃないですか。菊地さんは『ブレイド』をご覧になった時はどう思いました？

菊地：モロとは思わないけど、少しはパクっているのかなと（笑）。ちょっとこれはやばいのではないかと思ったんだけど。

アニメーションのロケーション

菊地：馬小屋のシーンはオリジナルですね。

川尻：物語が中盤にさしかかって、普通の人間にとって、吸血鬼とダンピールというのはこういう存在だということのダメ押しです。それと西部劇ムードをもうひと押ししたいと。

■■：このじいさんを昔に助けたのはDなんですよね。
川尻：そうです。「私がその時に助けられた子供のひとりだ」と。
菊地：いいオリジナル・エピソードですよね。
――一作目に色濃く出ていたウエスタンの風景ですよね。
川尻：Dシリーズの中からいろいろなイメージを持ってきています。似たようなエピソードが『妖殺行』以外の別の作品にあるということはいっぱいあると思います。
■■：マイエルリンク一行が遺跡で休息を取るシーンは、一転して古代ローマという感じですね。
川尻：ロケハンもイタリア、オーストリアに行きました。
■■：ロケに行ったんですか！　この映画用に？

ポンペイの遺跡に立つ川尻監督

川尻：ええ。美術監督と二人で。イタリアの雰囲気が欲しいなあと。石造りの巨大建築物というのは、やっぱりじかに空気を味わいたい。日本からも、アメリカ側から見てもエキゾチックな雰囲気じゃないですか。トランシルヴァニアというのは実は何もない土地です。僕らが持っている吸血鬼のイメージは、どちらかと言えばイタリアとかに近いだろうなということで、イタリアにロケに行くのがいいだろうと。大変なロケでした。
■■：それはすごい。実際、異様に細かいですよね。
川尻：美術はすごいですよ。異世界というのではなくて、吸血鬼には歴史を感じさせる嗜好みたいなものがある。中世のバロックやゴシックというところに。その重厚さとか華麗さとかを表現したいなと。で「これは本物見なければ分からん」と。一週間くらいしか行けませんでしたが、イタリアはどこを見ても面白くてね。三年か四年くらい前の九月に、イタリアに三日ほど、あとはオーストリアに。ウィーンのシュッテン大聖堂も見ました。その数日の間に撮ったスチール写真が千二百枚以上。まじめに取材しましたよ（笑）。イタリアには夜に着いて、ローマに入るとコロセウムがライトに照らされている。やっぱりすごい迫力で、圧倒されました。

デジタル効果の光と影

菊地：画面の色具合はどうやったんですか。
川尻：今回はかなりチャレンジしたつもりなんです。それまでビデオ作品中心だったので、フィルムで再生できる色は限られていました。そのフィルムをビデオに起こすわけじゃないですか。その時にさらに色調が変わってきたりとかしてたんですよ。ビデオだとブルーとか赤とかが非常に映えて、中間色は茶色になったり青になったりしちゃうんです。グレーはどっちに振れるか判らない。現像の仕方で全然変わっちゃう。でもフィルムの感度がよくなってきたおかげで、相当に淡い色も再現できる。今回は中間色を中心に非常に重い感じを出せたなぁと思ってるんですけど。ところが、ハードがどん

どん進化しているせいで、かえってよく見えすぎちゃって困ることがある。せいぜいB4版くらいのサイズで描いているものが、スクリーンでは何十倍にも拡大されます。手描きミスの部分とか、紙の質感とか、そんなものまで見えてしまう。いままでになかった苦労が出てきますね。セル・アニメでやっている以上、あり得ることなんですけれど。いずれすべてデジタル化するだろうから、何でもなくなってくるんだろうけど、例えばセルを何枚も重ねると、画面全体が黄色くなる。そういうことが明確に出ちゃう。顔は何枚までしかセルを重ねられないとか、そんなことを計算しながら作業しているわけです。表現の幅が広がった分だけ作業は面倒になる。しまいには嫌になりましたけれど（笑）。

――精度がよすぎるんですね。デジタル処理ということではどうですか。

川尻：『D』では今後の勉強のために使ってみようと。で、こういうことがやりたいんだけどできますか、みたいな形でやったわけなんです。その段階で絵コンテは上がっていたんで、普通のアナログでも行ける部分は相当あるんですけど、いくつかデジタルならではの効果がどうしても欲しいなというところ、冒頭の十字架のシーンとか、カーミラ城内のロウソクもそうなんですけれど、無数にあってそれがチラチラ動いているとか、細か過ぎて手作業ではできない部分とか。無数のコウモリが城の上を飛んでいる場面となると、あんまり小さいものは無理なんですよ。しかも手作業にすると静かな動きになってしまう。コウモリの群れが蠢くように飛ぶというのは、デジタルの方がきっと素晴らしく上がるだろうと。

――シルエットがブワッとコウモリになるところですね。

川尻：そうです。でも、画面を横切る大きめのコウモリなどは、手描きなんです。デジタル作業が間に合わなかったんで、僕が自分で描きました（笑）。もちろん、違いがあまり出ないようにやりました。デジタルはいろいろなことを表現できるけれど、素材がよくなければ面白いものにならない。決して簡単になったわけじゃなくて、人間がハードに使われている部分というのが相当ありますね。

[illegible]地：そういうものですかねぇ。ハードは『妖獣都市』の頃に比べたら格段の差ですか。

川尻：ハードは全然違います。

[illegible]：僕は『妖獣都市』の霧の中の飛行場での格闘シーンとか大好きだったんだけど、これに比べれば単純だったですよね。

川尻：そうですね。いまのフィルムで撮ったら、霧もひとつひとつの粒子、ブラシを使って出すんですが、それが粉末状に見えてしまうんじゃないかなぁ。そのくらいはっきり出てしまう。特に映画では「いかに見せないか」がカギじゃないですか。すべてが明らかになったらもうそれでおしまいです。どうやってヒントを少しずつ出していくか。僕らが見せたいのは雰囲気なんです。どういう雰囲気を持っている映画なのか。ハードの感度がよくなった分だけ、いかに見せなくするかの努力をすることになります。

Dのさまざまな「音」

――音楽や音響を向こうでというのは最初からの計画で。

川尻：そうです。どうしても洋画の音質や、音楽の雰囲気としてハリウッド的なものが欲しいと。ただ、作曲がイタリア系の人で、まだ三十七、八歳の若い人ですが、日本人に近いメンタルな面を持っていて、どんどんメロドラマ風の曲になっていく――つまり語り過ぎちゃうんです。とにかく語るな。音楽で語らないでくれと。絵が語ってくれるから、音楽は何も語らないで淡々とやってくれ。というところでそのイタリア系ミュージシャンとしては、非常に苦労して抑えてもらって、それでちょうどいい具合に仕上がりました。それでも充分語っているんですけどね（笑）。
　おそらくロケットの飛び立つ場面がメロディ的に一番美しくて。単品で聞くとそんなでもないんだけれど、ほかのところを抑えてあるからあそこで気持ちが高揚していくという感じで、非常にうまくいったかなと。

■地：日本でまた別に音楽を加えるんですか。

川尻：まだ決定してませんが、たぶんエンディング用に主題歌をつけると思います。アメリカ公開版では現在のままやったりとか、いろいろなバージョンがあると思うんですけどね。

■地：英語声優のオーディションは向こうでやったんですか。

川尻：僕は立ち会ってないんですが、向こうにおまかせでやりました。こういう性格の人で、声質としては非常に太くて低いとか、そういったことはコメントとして出してますけれど。Dでいえば『スピード2』主演のジェイソン・パトリックとかね。ちょっと切なくて、甘ったるいんだけれど寂しそうな声をね。それはかなり近かったなと思ってます。日本語版は、まだ決定はしてませんが、限定館で日本語版を上映するか、一日の上映のうちの何回かが日本語版になるんじゃないかと思います。公開は字幕版が主体です。

■地：それはすごい。

川尻：あくまで「洋画」という扱いです。アニメ・ファンだけじゃなく、一般観客にも入ってもらえればという形で公開されます。

■地：音楽の指示なんかも全部川尻さんがやるの？

川尻：指示出しということでは、そうです。参考用の音楽を先に付けちゃうんですよ。テンプ・トラックと言うんですが、例えばカーミラの城の場面では『オーメン』（ジェリー・ゴールドスミス）を乗せたり。で、一回編集する。それを作曲家に渡すんです。僕の持っている音楽イメージはこれだと。編集は音響監督にやってもらいますけど、作曲の参考用として作るんです。設定した一曲の中で前半部分は『ターミネーター』のここを使って、ここは『オーメン』とか。で、これで編集してと。いまはコンピュータで全体の尺をいじることができますから、編集自体は楽じゃないですか。

――それはアヴィッド・システムで編集するということですか。

川■：そうです。絵と同じで、音楽を言葉で伝えるのは難しい。僕も音楽用語なんて全然知らないし。海外の作曲家で誰がいいかと訊かれても、そんなに出てこないんですよね。だから僕がイメージした曲を、いろいろ聴いてあちこちから頂戴してきて。吸血鬼といってもSFですから。あんまり古色蒼然とした音楽ではなくて、そうかといって軽くはない。ヘヴィメタを使う手もあるとは思うんですけれど、ちょっと情緒的に残したいところもある。テンプ・トラックで一番多かったのはマーク・マンシーナの『スピード』ですね。あれがほとんど主体です。

――では、馬車での追跡劇のところも。

川尻：ほとんどそうです。あとは一作目の

『ターミネーター』（ブラッド・フィーデル）と『ミミック』（マルコ・ベルトラミ）を使いました。『ミミック』は羽音を使った音楽が非常に面白くて。あと、ハンス・ジマーの『ザ・ロック』。イメージ的にはジマーやマンシーナとか、ミュージカル・イフェクト（ME）的な、十分くらい流しっぱなしでも構わなくて、しかも出し入れ自在な形がいいです。どこから音楽が入って、どこで終わっているのか気が付かないようなもの。日本の作曲家ではそういう人がちょっと僕の頭の中にはなかったんですよ。ちゃんとここから始まって、ここから終わるものばかりで。そうじゃなくて、どこに入ってたか分からないようなもの。でも観客の心情を自在にコントロールしちゃう。

マーク・マンシーナの出世作
「スピード」（スコア■CD）

――それほど「スピード」の音楽に感動なさったと？

川■：絵的にもすごいですけどね。やっぱり、あの音楽はかっこいいですよ。僕はメチャクチャ好きですね。仕事中もあれを流していると、筆が走るんですよ（笑）。ハードさと繊細さの両方が、僕は好きなんです。非常にリズムが激しかったりとか、ヒットがビシバシくるんだけれど、メロディそのものにはフワーとなる。当時、頭に来ましたよ、間違えて挿入歌のCDを先に買ってしまって（笑）。こんなの聞きたくねぇよと（笑）。

菊地：サウンドに関してはこれで完成ですか？

川尻：まだ変えます。分かりづらいところを直すと思います。意味不明だったりとか、多少あるんで。例えば最後の場面で、ロケットの不調なところが分かりにくいんですよ。そこを直さないと。レイラが何を叫んでいるのか分からない。絵でもちょっと分かりづらかったですね。ですから音で調整します。

■■：そこまでやるんですか。こうなると、やっぱり小説の一作目をやって欲しかったですよね。最初のアニメも、あれはあれでいいと思うけれど。これを観ちゃうと川尻さんでやって欲しいなと思っちゃいますよね、原作者としては。

（二〇〇〇年十二月二十一日／有楽町マリオンにて収録）

収録第1日
2001年1月25日

■■■の川尻監督以下レコーディング・スタッフの■さま。手前はマッドハウスの丸山社長。初日です。

バンパイアハンターD 「アフレコ」奮戦記

取材●藤江明義
構成●品川四郎

不安定な天気で21世紀の初雪がちらつく東京・麻布十番のアオイ・スタジオで収録です。集まられた声優さんたち全員に共通のひと言は「ここまで絵があるアニメーションは珍しい！」とのことでした。それにしても、これほどまでにキャラクターを別々の声優さんに振り分けたアフレコも珍しい（ホントだよ）！

石■■■…ナレーション／神父

■■■■■■■■■■■■■■■■■■笑う■■■■ないよ■これ。■■■■■■よ、■■■ない■■■（笑）。■■■版も■■■■■た■■■。長尺もので絵が全部入■■るの■■■■■■■■■■■■が■■■。■■な■■ら（笑）。■■■■けたのは■■■■■■■■■■■■せる■■■■■■のが■■■■■い■■と■■■■■■感じを出せればいいなと■■■■。■■■す■■逆に神父■■は「■■く」と■■■■■■■の神父■■■■になれる■■■と■■最初と最後を看■■■■■■

永井一郎…Dの左手

TVに映画にソノシートの■から活躍のベテランです。■■■&川尻作品では『妖獣都市』のマイヤートがありますが、Dの左手はこの人一代、もちろんプレステ版ゲームでも左手は永井さんです。「そう、ずっと左手やってます。塩沢兼人に次いで二代目のご主人様に仕えてます。でも今回のご主人はおとなしいなぁ。兼人はクセがあったから。でも左手がしゃべるって面白いアイディアですよね。■に膝にできた顔■やったこともありますよ。なんか僕にはそういうの、まわってくるんだなぁ。まあ、できるだけ台本通りに、主役を食わないよう、やらしてもらってます。食っちゃったら人面疽じゃなくなっちゃうからね（笑）」

田中秀幸…D

青い■■■■、ではありません■■■代目■■を務め■■■な■と■■文庫■「妖殺■■■は■■エル■■■■■■こらっし■■■た。最近■■■■三国■■の劉備■■■■■劉備■■■■■Dはあん■■じゃ■■ないキャ■■■■なん■■画面の■■方■■■り変わ■■に■■ます。前に塩沢兼■■■■た■忘■■■■■よ。例えば「ロ■■■■戦記」■■■■ラジオ版の■■■■兼■■■僕は■■■■■■■のはある■■■■配役の丸山■■が■■■■ば■り■なく柔らかくしたい■■■■る■で、お引き受■■■ました。

原作者菊地先生登場。特別出演はあるのか？
「え、おれの声なんか入れたって
しょうがねえだろう」（笑）

収録第2日
2001年1月28日

再び調整室の皆さま。川尻監督は風邪を押してマスクで出陣。

辻谷耕史（つじたにこうじ）…アラン＝エルバーン

実は［illegible］責任艦長タイラー」その人であります。「［illegible］初は肉体的な、熱血漢のイメージだったんですが、さらわれたシャーロットの兄ということで。普通の人間で妹のことを思っているという感じを出してほしいと指示がありました。僕の出番は前半の数カットで終わるんで、作品の世界観を一緒に作りながら、でも見えてくる前に終わってしまうという（笑）。あまり何も作らずに、現場でのイメージに沿った形ですね。［illegible］は年に数本しかやらないんですが、たまた［illegible］ディレクターの方が推してくれたみたいで、昨年末に放映された「グラン・ブルー」のジャック・マイヨールをやりました。ほとんどしゃべらないんで、楽だったですよ（笑）」

かないみか（かないみか）…レイラの孫

［illegible］いけ！［illegible］パン［illegible］の［illegible］パン［illegible］［illegible］ぎょ注意報！』［illegible］す。レイラの孫［illegible］いうこと［illegible］林原め［illegible］の二世代あとの声ということになりますか。「普通だったら、［illegible］ん、全部［illegible］も不思議［illegible］少女時代も孫役［illegible］別々の人がやる［illegible］ですよ［illegible］も［illegible］いいので［illegible］笑）と［illegible］ありがた［illegible］役［illegible］最後のエピ［illegible］ードに［illegible］不思［illegible］人（D）に［illegible］無邪気に［illegible］い［illegible］あまり難［illegible］とは考えな［illegible］にと［illegible］ました。［illegible］つも［illegible］ばかな役が［illegible］『宇宙戦艦［illegible］5［illegible］てら、ネジが五本［illegible］抜［illegible］のをら［illegible］ていて［illegible］ホ［illegible］に［illegible］の［illegible］思い［illegible］ス」に続く［illegible］『ふたりはふたご』と［illegible］う［illegible］ありまして、川田妙子［illegible］に［illegible］やってます。よか［illegible］見［illegible］や［illegible］さい（［illegible］

大友龍三郎（［illegible］ぶろう）…ノルド

［illegible］たいに大［illegible］方［illegible］す。［illegible］V吹替版の「［illegible］ーミネーター」本人や、ビデオ版『グ［illegible］イル』黒人囚人コフィーなどの声を担当され［illegible］。「今回［illegible］ね（笑）。［illegible］の［illegible］そ［illegible］う風に［illegible］物［illegible］（笑［illegible］うの［illegible］リーの中に［illegible］ね。T V［illegible］と『未来戦［illegible］の敵役［illegible］後［illegible］よ［illegible］発［illegible］、あれは［illegible］ラといい［illegible］ビだっ［illegible］たよ。い［illegible］あ、［illegible］用な［illegible］ジと合わな［illegible］昔［illegible］時に［illegible］にて［illegible］と［illegible］も［illegible］川幸夫さ［illegible］の芝居で『近松心中物語』［illegible］ってます。二十［illegible］前の初演メ［illegible］か［illegible］り集ま［illegible］んで。［illegible］ら大阪に［illegible］な［illegible］よ」

大塚芳忠（おおつかほうちゅう）…カイル

「新スタートレック」の白塗りアンドロイド＝データ少佐でお馴染みの方です。「何も指示はありません。僕が絵を見て考えてきた感じを一度やったら、それでOKだということでした。すぐにキレたり、いつもニヒルな、ひねくれた感じのヤツですよね。僕がよく演るタイプです（笑）。例えばニコラス・ケイジでも「フェイス／オフ」とか『コン・エアー』とか。データ（ブレント・スパイナー）はひねくれてはいないけど、人■じゃありませんからね（笑）。ビデオ版の『インデペンデンス・デイ』ではジェフ・ゴールドブラムを演ったんですが、気が付いたらスパイナーが出ていて。相当にイカレた博士でしたけどね。あとジャン・クロード・ヴァン＝ダムはビデオ版を全部やりましたよ。アクションものなんで、やっててもあんまり面白くないんですけど（笑）」

しのはらえみ
篠原恵美…シャーロット

デビュー作は『プロジェクトA子』の大徳寺美子、代表作は『美少女戦士セーラームーン』のジュピターこと木野まこと、さらに『獣兵衛忍■帖』では陽炎もやってます。洋画では『ニキータ』や『私がウォシャウスキー』や『ホーム・アローン2』などに「アリゲーター2』や『地獄の殺人救急車』なんて意外な作品も！

■終日の■■室。監督ついに40度の高熱を発してダウン！　ピンチピンチ！（でもないけど……）

山寺：吸血鬼の美形とかそういうことはあんまり気にせずに、物語が純愛ですからね。最初、怪物っぽくなりすぎてますと指示がありましたので、そこを気をつけて。素直に絵を見た感じと、作品の中身に沿った感じで行こうかなと思ってました。

■■：川尻さんの作品はいつもそうなんですけど、わりと淡々と感情をあまり出さずにと今回も指示されましたので、そういうところは心掛けました。

山寺：僕もあんまり感情過多になりすぎないように。でも二人の■■がドラマチックだったんでね、つい入れたくなるんですけど、なるべく抑え気味に■

■原：川尻さんの作品に関しては、ある意味すごくリアルなお芝居を要求されるから。

山寺：世界はとんでもないんだけどね。

■■：そうそう。オーバーにならないようにと言うのはそういう意味だと。

山寺：かっちり映像もあるし。

篠原：アメリカではもう一部で上映したんでしょ。オーディションの時に聞きました。

山寺：あ、もうやってるんだ。

篠原：だって最後のクレジット、キャストとか全部外人よ、名前が■

山寺：英語の台詞入ってたら、アテレコみたいになってたんだ。

■■：それも可能だったんでしょうけど。あえてアニメとして。

山寺：■が入った状態は想像してなかった。僕は原音を忠実に再現しようという気持ちが働いてしまうタイプだから、なくてよかったのかな。

■原：音楽とか効果音とか、あれば盛り上がるから、やりやすいことはありますけど。

山寺：そうそう、それは大きいっすよ。吹替えの場合は。芝居できてなくても作品として成立しちゃう気がするから（笑）。あっ、だから「甘えんな」ってことで、わざと映■だけだったのかな（笑）。

■■：そうかも知れない（笑）。

山寺：だって、ロウソク一杯でパンしていくところなんて、音楽ないわけないよね。早く音楽入ったのが見たいですよね。

篠原：ほんと、そうですよね。

——劇場公開は英語で、日本語字幕です。

山寺：なんてこった！

■原：じゃあ、私たちは?

——ビデオやDVDの■■のために。

山寺：日本語で公■しないんだ。

篠原：あらら、さびしー。

山寺：ガクー。

■■：なんだー。並行上映したっていいのにー。

山寺：それを言うと文句になるからねー（笑）。

え？　この日本語版上映しないの？

あらら、さびしー。

ガクー。

まえだびばり
前田美波里…カーミラ

ホホホホ

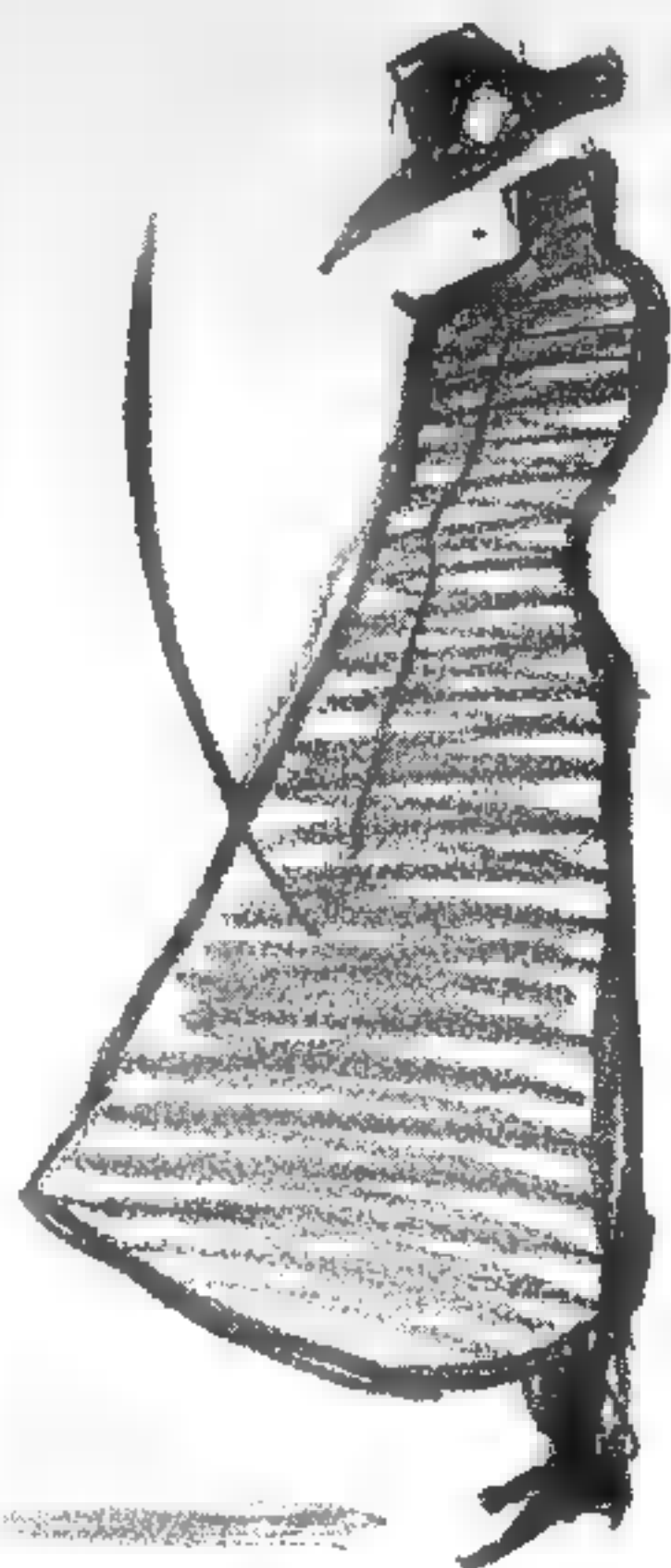
かつて出演した化粧品会社のポスターが軒並みはがされたという伝説を持つ超絶プロポーションの持ち主ですが、いまは舞台で多忙なため、この時すでにカーミラのやんごとなき音声は収録済み。残念でした。

山寺[illegible]…[illegible]

俗[illegible]を[illegible]と言われま[illegible]、川尻作[illegible]は『獣兵衛忍風[illegible]』の獣[illegible]、また『ARIEL』の[illegible]でもあ[illegible]。[illegible]ィ・マー[illegible]ィ[illegible]リー・スナイ[illegible]あるい[illegible]ル・J・フ[illegible]、さらに『ロジャー・ラ[illegible]』のラ[illegible]TV版[illegible]マ[illegible]・ヘッドルー[illegible]』など、早口[illegible]！

上映されなかったからといって肩を落とす必要はない！　収録された日本語音声はこのあと川尻監督立ち会いのもと、サンフランシスコでミキシングされたのだ。キャラクター数と参加声優メンバーがほぼ等しい（異常なまでに別々の人が声を当てている）という奇跡的事実も含めて、こんな豪華な音声仕様のアニメーションが他にあるか!?　日本語■■が収録されるDVDは必ずゲット!!

D for Dictionary

D―大事典

品川四■ ■
compiled by Schirow Schinagawa

協力:藤江明義/田辺匡
in assossiation with Akiyoshi Fujie and Tadashi Tanabe

Dイラスト=天野喜孝
Yoshitaka Aman■

項目カット=阪下和美
Kazumi Sakashita

凡例

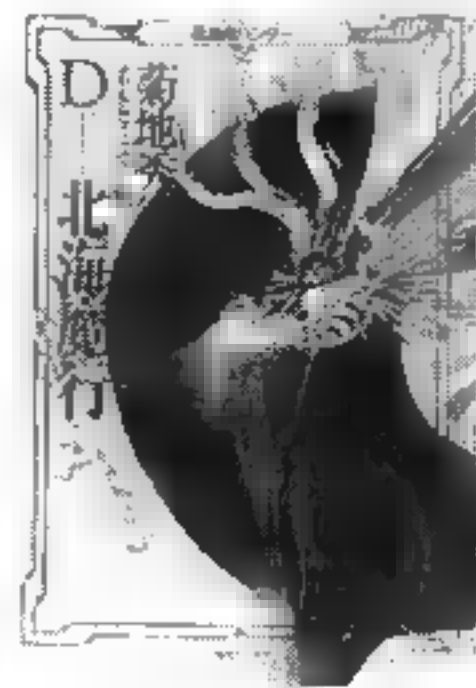
本事典は、菊地秀行氏の人気シリーズ「吸血鬼ハンター"D"」全作品の森羅万象から■択した項目を面白く読めるように編集したものです。作品のタイトル(原典表記)については、煩雑を避けるため以下の略表記を採用いたしました。

■■ハンター"D"→D
風立ちて"D"→風立ちて
D―妖殺行→妖殺行
D―死街譚→死街譚
夢なりし"D"→夢なりし
D―■■遍歴→聖魔遍歴
D―北海魔行→北海魔行
D―薔薇姫→■■■
D―■■き堕天使→■天使
D―双影の騎士→双影の騎士
D―ダーク・ロード→ダーク
D―邪王星団→邪王星団

D―ハルマゲドン→ハルマゲドン
D―昏い夜想曲→夜想■
D―戦鬼伝→戦鬼伝
D―想秋譜→想秋譜
イゾベルの肖像画→肖像画
D―霧の村→霧の村
D―城の住人→城の住人
D―夜の街道にて→夜の街道にて

「アイ・ネバー・ドリンク・ワイン」【酒はやらん】（聖[illegible]歴）「I never drink wine.」――ダンピールの口癖。あくまで口癖であって、実行とは無関係（特に最近ではその傾向が強い）。

アイ・リン（夢なりし）シヴィルの眠る「村」の学校時代の友人で、クルツ治安官の奥さん。シヴィルとは一番仲がいい。シェルドン婆さんの住まいから南西へ二キロほど行った農家に住んでいる。茶のスカーフで束ねた黒髪の下の顔は、とうに女の盛りを[illegible]ぎて、鋭い眼や、きつい口元に生活の澱を滲ませているが、すっきりと通った鼻筋や優雅な細い眉には、色褪せた綿シャツやロング・スカートとは縁遠い生活を思わせる、風雅のようなものが漂っていた。飼いならすのが難しい食肉獣を飼いならしている。夫とともに、三十頭もの食肉獣と多数のチキナーを育てている。

あいぞう-ばん【[illegible]版】（原典）それまで文庫書き下ろしの形で刊行されていた菊地秀行氏の人気シリーズ＝吸血鬼ハンター〝D〟を、愛読者の熱望に応えて、あえて四六判上製の単行本として定本刊行したもの。一九九二年九月から一九九三年三月までの間に、シリーズ第一作『吸血鬼ハンター〝D〟』から『D―北海魔行』までの七長編と、中篇集『D―昏い夜想曲』の全八巻を第一期として配本した。全巻の表紙を天野喜孝氏の描き下ろし最新〝D〟イラストで飾り、本文中にも、やはり描き下ろしになるフルカラー・イラスト一葉を挿入している。装幀及び造本は、天野喜孝氏の画集『魔天』や『飛天』も手掛けている矢島高光氏。各巻税込み定価＝二〇〇〇円（当時）。初の全一巻刊行となる『D―北海魔行』のみ二二〇〇円（やはり当時）。各巻には挟み込み付録として月報「ランシルバ通信」を添付、各方面からのエッセイや、菊地秀行氏がかのクリストファー・リイ氏にインタビューした連載会見記「ドラキュラ伯、かく語りき」を掲載している。残念ながら現在は絶版であります。

アイダ（堕天使）メイとヒュウの軽業師姉弟が住んでいた西部辺境の街＝リデル近郊にあると思しき湖。その湖水はずいぶんと青いらしく、しばしば「アイダの湖水よりも青い」と形容されることがある。メイ&ヒュウ姉弟も幼い頃から水遊びに興じたのだろうか。

アイルランド【[illegible]蘭土】（風立ちて）人類最終戦争前の古代の地名のひとつ。彼の地の妖精をモデルに、貴族たちはさまざまな人工獣を造った。

アウター-へん-きょう【外辺境】（聖魔遍歴）「帰らざる砂漠」と砂漠の町がある辺境。移動妖気が発生し、物騒な虫が風に乗ってくるような辺境。

[illegible]おい-かべん-の-はな【青い花弁の花】（夢なりし）シェルドン婆さんの家の裏庭にいつのまにか咲いていた花。万能屋マギーの譬えによれば、海の色。

Y. Amano

シェルドン婆さんはこの花びらを紅茶に浮かせてDに振る舞った。おかげでDは体内に大変な怪生物を宿すことになる。

あお-きし【蒼騎士】（[illegible]） ダイアンローズの四騎士のうちの一騎。またの名をブルー・ナイト。真昼の光さえぬくみを喪う(うしな)ような深く昏い青の甲冑に身を固めている。操る大槍は「モリブデン、クロム鋼、高分子熔鉄、プラス、訳のわからねえ合成物質」より成り、全長五メートル以上、重さにして五十キロを軽く超える。「火竜どころか大陸魚怪(クラーケン)でも仕留められそう」なその槍をもってDを貫くも、返し槍に遭いあえなく初陣を終える。

あお-じろき-だてんし【蒼白き堕天使】（原典） 正式題名『D—蒼白き堕天使』。シリーズ第九長篇。一九九四［平成六］年七月三十日第一巻発行。以下、第二巻は一九九五［平成七］年四月三十日、第三巻は一九九五［平成七］年十一月十五日、第四巻（完結巻）は一九九六［平成八］年三月三〇日に、それぞれ発行。現在のところ『北海魔行』を凌いで『邪王星団』に次ぐシリーズ最大長篇。ただし、完結までに足掛け三年かかっているために、執筆期間を換算するとやはり『北海魔行』が最大瞬発力を見せた最大長篇ということになる。Dの抱える父子問題にも匹敵すべきヴラド卿対バイロン男爵のパラージュ父子対決がメインだが、物語の舞台はどうも冬であるらしい。

あかい-くも【赤い雲】（堕天使） 貴族ですら恐怖する「呪われたもの」のひとつ。大気圏外浮遊生物。五万平方キロに及ぶ身体を持ち、冬のある日、地表に降下してきて貴族を含む下方のすべての生物を吸収してしまう。降下速度があまりに遅いため、また地表到達時間と位置を正確に割り出せるため、その場所の全生物を避難させるのが唯一の対処方法。あとは三日待てば、雲は壮大な夕焼けのごとくに去ってゆく。しかし、二十数年の間隔で地表を襲う雲の生態は、貴族の科学力をもってしても解明できなかった。「タロスの武器庫」に並ぶ存在として登場。

あかい-こうや【赤い荒野】（双影の騎士） 砂に含まれた成分のせいで血のように赤い平原。セドク村の村外れにある。死体安置所や墓場の死体が行列をなして向かった先。直径二キロのすり鉢状の大陥没が発生し、やってきた無数の死体が丸二日間に亙って その穴に飛び込み続けた。陥没の落差は三百メートルほど。陥没に飛び降りたこの地方の死者は数千体に達する。侵入者を感知すると、目くらまし（と思しき）ガスを噴出する。〃赤い土地〃との記述もあり。大陥没の底には縦横三メートルの鉄の扉があった。

あかい-し【赤い死】（双影の騎士） 貴族は吸血鬼ハンターを——なかんずくDを指し示して「〃赤い死〃よりも恐ろしい」と言う。何かとてつもなく恐ろしい存在らしいが、それよりもDの方がはるかに恐ろしいらしい。セドク村の三代前の治安官老(オールド)ジャルがDに対してそう告げた。「それは貴族の噂よ」と応じたのはミア・シモン。

あかい-みずうみ【紅い湖】（堕天使） ジャン・ドゥ＝カリオールが男爵バイロンの母コーデリアのために、ヴラド・バラージュ卿の城の地下に用意した地底湖。コーデリアの苦痛を和らげるため、血と同じ成分の溶液で満たされている。息子バイロンの処遇をめぐってヴラドの怒りを買ったコーデリアは、永への恐怖と苦痛に苛まれながら、未来永劫この湖に閉じ込められる運命にあった。

あかい-め【赤い眼】〈聖■■〉燃える宝石のように赤いその眼は、ヴェネッシガー侯爵より大きく威厳のある貴族の瞳。タエの言葉によると、そのまなざしは哀しげで、Dに似ているという。Dは赤い眼の主について「君臨するもの」と説明している。

あか-きし【紅騎士】〈薔薇姫〉ダイアンローズの四騎士のうちの一騎。またの名をレッド・ナイト。四騎士に加わって百五十年、薔薇姫の城館にやってきたDを迎えた真紅の騎士。その背に二本ずつ交差した真紅の長剣は、抜くや真紅の風となって空を走り、太刀風を超音波と変えて鋼鉄さえ切断する超音波砲(フォノン・イーザー)=ギャオス剣法である。その秘技もむなしくDの一刀のもとに両断されるが、長剣が最後に放った超音波砲は、地に立ててあったもう一刀に反射してDの左手を斬り落とした。

Y. Amano

あかっ-ぽい-ふんまつ【赤っぽい粉末】〈戦鬼伝〉“妖かし使い”サベイが使う魔薬。文字通り赤い粉だが、これを振りかけることにより、死した生き物すら生前のごとくに操ることが可能。人買いブルワーの馬車馬の首を斬り落とし、しかるのち首なし馬をもって馬車を駆ろうとするあたり、この赤い秘薬あっての芸当であろう。

あくま-の-いしきり-ば【悪魔の石切場】〈D〉リイ伯爵の居城から二キロほどの地にある。通称『遺跡』。広さも定かならぬ草原の一角にはおびただしい数の石像が林立し、あるいは地に伏し、天を仰いでいる。ドリス・ランがここでウィッチを倒した。実はリイ伯爵の居城とは地下道でつながっている。Dがミドウィッチの蛇女を操って脱出した場所でもある。

あ-げんし-ろ【亜原子炉】〈双影の騎士〉大洞窟の大施設――神祖の地下王国で日ごと繰り返される呪われた実験から逃れるために、魔道女シューシャは仲間と語らって動力源たる亜原子炉を暴走させたという。いまから四百年ほど前の出来事である。

あつさ-いっセンチ-の-ぬの【厚さ一センチの布】〈夢なりし〉夜間、どうしても森で睡眠を取らねばならない時。これにくるまって眠れば肉食昆虫の歯も槍も通さない。

アトラント〈堕天■〉かつて東の海に存在したといわれる伝説の大陸。奇金属オリハルコンを製造した。

アドルカ-の-しさい【アドルカの司祭】〈ダーク〉昏睡したDを廃墟の土中から連れ出そうとしたレディ・アン聖騎士が出会った老人は、灰色の頭巾付きの長衣をまとい、腰にまかれた細い紐から粗末な皮製のパウチやガラス瓶やらをぶら下げており、自らを「アドルカの司祭」と名乗った。三年ほど前に引退したという老僧は、失われた宗教の秘密を求めて廃墟を調べていたが、その成果は愛娘アンを発見して怒り狂うゼノン公ローランドの振り回した長槍によって出現した。槍の一撃で崩れた岩壁の裏から現われたそれは――一万年前の聖者の磔刑像だった。

アドルカ-は【アドルカ派】〈ダーク〉現在まで残っている数少ない宗教宗派のひとつ。貴族の全盛時には、貴族からの防御と解放を求めてさまざまな形態の新興宗教が数万から創設されたが、ほんの数種を除いては形ばかりのものに過ぎなかった。吸血貴族が支配する世界で生き残るために、宗教は殺生を禁じていないのが特徴である。

アニス〈夜想曲〉峨々たる連山と黒い森に四方を囲まれた東部辺境区の村。村人千人あまりの小村だが、農地からの収穫と、西端を流れるガーナウ河の水流を利用した材木資源の収益により、付近では屈指の豊かな村落として知られる。気象調整装置の影響をほとんど蒙らず、素朴な四季に彩られている。二歳の時に聴いた“歌”の歌い手を求めてライが訪れた。

アフタヌーン【A】辺境標準時の時刻表示のひとつ。
① シヴィルが眠る村の酒場の前で、Dの足が止ったのが、12：○○A少し前。
② 正午をピークとして前後二時間、貴族の超人的なバイオリズムが最も低下するダンピールの睡眠時間には最も相応しい時刻が、一：○○A。
③ スーインを拉致した暁鬼と国王(キング)エグベルトと悟られずのツィンの三人が、珠を交換条件に“黒い淵”へ来いとDに指定した時刻が、１○○A。
④ “丘”を目指すツェペシュ村青年団のリーダー=ヘイグが、日没までにあと二時間しかないと思いつつ、西の方角へ眼を飛ばしたのが、３○○A。

アマカケル〈ダーク〉高度一万メートルを飛ぶ鳥。毒学者グレートヘン博士の操る猛毒は、メフメット大公とゼノン公ローランドの目の前で、頭上をゆくアマカケル百羽のうち八十五羽すべてを血の霧とともに落下させた。残る十五羽はローランドの長槍に

よってすでに射落とされていたものである。

あまりにも-にんげん-らしい【あまりにも人間らしい】（堕天使） 貴族の言葉で言うところの、最大の侮蔑的表現。かの『猫山小僧』が誕生した際にも、集まっていた妖怪たちはこう言って恐れおののいたという。

アムネ（夜想曲） アニスの村のホテルの娘。十七歳。貴族の歌を聴くためやってきたライに関心を持つ。ライがまだ貴族化していなければ、いまもコピエ村長と一緒にライの面倒を見ているはずである。

あめ【雨】（風立ちて） 辺境では雨は一種の福音。吸血鬼は流れ水を渡れないという伝説にあるとおり、統計上、貴族による雨の日の襲撃はゼロに等しい。よって辺境では雨の日には顔をしかめながらも嬉々として家路を急ぐ。

アラン（夢なりし） 病院の院長でシヴィルが眠る「村」の実力者。白い顎鬚を生やした老人。現在六十五歳。シヴィルの夢を存続させるために殺し屋バイオ兄弟（ブラザーズ）までも雇う。夢を見続けさせようとする側の代表的人物。クルツ治安官のミサイル銃に吹き飛ばされ即死するが……。

アリストクラート・コイン【貴族通貨】（D） 都市部に核をおいた革命政府が新貨幣"ダラス金貨"発行と共に大々的に処分した貨幣。貴族通貨で闇ルートでの価格は一枚につき千ダラスを越え、辺境での半年分の生活費に値する。

ある-く-しじゃ【歩く死者】→ウォーキング・デッド

ある-しょち【ある[illegible]】（堕天使） 神祖が男爵バイロン・バラージュの母コーデリアに施した実験処置。このため、バイロンの右手は失われている。

アルファー-がた-ブラック・ホール【α型ブラックホール】（風立ちて） 三〇四六年、太陽系から二億七千万キロの近地点を秒速二千キロで移動中、冥王星を呑み込んだ直後、Dが一二〇九〇年に閉鎖空間を破った影響で忽然と消失したため、他天体脱出用の恒星間ロケットを建造中の貴族科学院は、これが原因で非難され、大院長以下上層部の更迭が行なわれた。

アルミノン（風立ちて） 傷薬に使う花。ツェペシュ村のカイザー夫人はこの花を摘みにきたところ、貴族に襲われてしまう。

アレキサンドレイア（戦鬼伝） 三年前、『都』の立ち入り禁止区域で発掘された遺構の中でひときわ異彩を放っていた大図書館。その地下倉庫から発見された文献には、解読の結果、辺境に散らばった貴族の家系図のようなものが含まれていた。解読・分析に当たっては、『都』の若き言語学者セルナ・ニコルの尽力があった。

アレクシス・パイパー（夢なりし） クルツ治安官がアラン院長に渡した犯罪者リストに経歴が載っていた男。電子鞭の使い手。殺人者数七名以上。アラン院長がDを倒すため「村」に呼ぼうとしていた殺し屋のひとり。

アン（ダーク） ハルドゥ村に住む十歳前後の女の子。噴水病にかかり、同い年と思しい少年とともに助けを求めに街道封鎖のバリケードのところまでやって来たが、村人に持たされたお金を巻き上げられ、追い返された。ほどなく辺境商工ギルド輸送隊に発見され特効薬の投与を受けたが、手遅れで少年とともに死亡した。目の前で死んだアンを見ても、もうひとりのアン――幼い貴族レディ・アン聖騎士は何も感じなかった。

あんうん-そうこう【暗雲装甲】（堕天使） 公爵シェーン・グリードが着用する甲冑。暗雲の塊で膨張と収縮を繰り返す。雲間には青白い稲妻がきらめいて、目標を攻撃する。ヴラド三強のひとり、化粧好きのクロモがその稲妻の犠牲になった。

「あんたで九人め」（D） ドリスがDを倒したと確信した時に放った言葉。ドリスが強すぎるのか？　それとも他の八人が弱すぎるのか？　両方でしょうな。

あんない-にん【案内人】（[illegible]天使） 古代の秘儀により忽然と現われ、十二歳以下の子供二名の生命を代償に契約を結び、呼び出した者を「彼方」の理想の地へと案内する存在。頭からすっぽり灰色の頭巾を被り、首から下も同じ色の長衣をまとっている。腰のあたりで結んだ紐が唯一のアクセント。長衣の胸から突き出した巻いた皮とも紙ともつかないその表面に、地図らしき模様が描かれている。隠し持っている山刀で子供の耳を切り、付着した血を舐めて十二歳以下かどうかを判定する。「案内人」との契約を破棄した場合、生贄も契約者も永劫に呪われるという。「案内人」が与えた痛みは消えない。「案内人」と貴族が合体すれば、その力は倍どころか五倍ほどにもなる。合体例は過去にも数例があり、そのときは貴族の精神が「案内人」に敗れたため三つの村が完全に破壊され、死者は三千人を越えたという。「破壊者」との一体化を求めたバイロン男爵に対抗して、ヴラド・バラージュ卿は「案内人」との合体を企てた。

イ

いおう-カー【[illegible]車】（想秋譜） 燃料コストの安い分だけ近所迷惑な臭いを撒き散らす車。セシルを乗せてシャーリイズ・ドアから森への一本道に入った

ライルの硫黄車は、分かれ道から五百メートルほどのところでサイボーグ馬に乗ったDとすれ違った。

いきて-いる-もり【生きている森】（双影の騎士）作った貴族でさえ入るのをためらう場所。邪悪な目的を持つ人間の魔道士たちはそんな場所へも分け入って、滅び去った貴族の遺した高度な呪術文明の片鱗を窺おうとした。同様の昏き魅力を誘う場所として、絶対零度の極冠地帯や五万メートルもの深海があげられる。

いけ-にえ【生贄】（想秋譜）秋の村＝シャーリイズ・ドアでは、貴族が出現すると、若い娘をひとり沼沢地に差し出して、村にそれ以上の犠牲者が出るのをまぬがれようとする風習がある。当初は生贄だけを置き去りにしたが、現村長マートクから二代前の村長の時代に改正され、ひとりだけ護衛の付くことが認められた。生贄を差し出した家族は、その報酬として向こう十年間、村からの補助だけで暮らしてゆくことが許される。セシルの護衛に名乗りを上げたのは、もちろんライルであった。

いける-ししゃ-たち-の-こうしん【生ける死者たちの行進】（双影の騎士）北湖山脈が消えてムマへの道＝死人街道が出現したため、それまでムマに行けずに数十年間から数百年間を彷徨っていた〝奴〟の犠牲者たちは、歓喜の表情を浮かべながら数千のオーダーで行進した。その様子を仮にこう呼ぶ。

いける-やま【生ける山】（[illegible]歴）北西辺境区に棲息する単純な鉱物型の生物。総重量五百億トンの岩山にしか見えない。動くだけしか能がない代わりに、十年に一度動き出すと、そのたびに一万人は押しつぶされる。鉱物型生物は、その新陳代謝が重量によって大幅に制限されるため、この個体以上の発達は望めない。生山鳴動して死者一万人。

イザベル（肖[illegible]）イゾデルの双児の姉。慎ましやかな性格。Dが村を訪れた三日目の晩に双眸が赤くなり、妹のイゾデルと同じ地下室に入れらた。

い-じげん-くうかん-から-の-エネルギー【異次元空間からのエネルギー】（双影の騎士）貴族が開発したエネルギー形態。数学と幾何を応用して異次元空間からのエネルギーを取り出すことに成功したものの、開発から約一千年後、その「向こう側」からの奇怪な生物の攻撃によって破棄された。文明を維持するためにはエネルギーが不可欠だが、太陽光線から得ることを潔しとしなかった貴族文明ならではのエピソードと言えよう。

いし-ゆみ【石弓】（風立ちて）辺境では子供でも手製の石弓が作れるらしい。

いすわり-さんにん-しゅう【居座り三人衆】（戦鬼伝）半月ほど前、シュラト村のライアの家に現われ、そのまま居座ってしまった謎の三人衆——偽装体妖術のジュラン、〝妖かし使い〟サベイ、再生能力人間クラムの三人を指す。いくら平凡な田舎娘とはいえ、ライアは十七歳の少女であるからして、男たちが居座っても別におかしくはない——いやそうじゃなくて、三人衆はライアのなかのもうひとりのライア、つまり貴族の血を引いた〝隠されっ子〟＝シニストロの女戦士ライアの家来たちなのであった。

い-せき【遺跡】（[illegible]）数百年前、貴族と対抗するだけの知恵を備えた人間の一派が築いた砦＝要塞。見えざる波動をもって敵をなぎ倒す。特にサクリ村と薔薇姫城館の中間に建つ廃墟については、Dや薔薇姫の言によれば二千年前のものだという。

イゾデル（肖像画）イザベルの双子の妹。姉とは正反対に自分の思うことをさっさと口にする活動的な性格。Dが村を訪れた最初の晩に双眸が赤くなり、地下室に閉じこもる。

イゾベル・ドレイク（肖像画）かつて、南西部辺境区に軍政による支配を敷いた獰猛な将軍。残忍無比な軍人であるとともに、類稀な美貌と若さを誇る魔道士でもあった。あまりの残忍さから、決起した村人によって館で焼き殺されたが、焼け落ちる柩の中から、館を乗っ取った一族の中に恋人が一千年後に蘇り、自分を解放して辺境一帯の人間を抹殺すると予言したという伝説が伝わっている。将軍といえども美しき薔薇には必ず刺がある。

イゾベル-の-しょうぞう-が【イゾベルの肖像画】（肖像画）かつて［已］のものであった館に飾られている縦横二メートルほどの肖像画。その双眸はナイフによって削り取られている。現在では『都』の貴族研究団体から『薔薇』級（クラス）の指定を受けている文化財で、村で唯一の観光資源になっている。イゾベルの恋人が判明して滅びたとき、木台も画布も崩れ落ち、一塊の塵と化した。

イゾベル-の-ひつぎ【イゾベルの柩】（肖像画）湖の中央に浮かび上がった柩の堅牢さはDの剣も通さない。村長がツィグ爺さんに聞かされた話では、イゾベルが呪詛を放った瞬間、柩は鋼鉄の貝のごとく閉じ、自ら湖の中に滑り込んだ。イゾベルの恋人が滅びるとともに急速に腐り果て、水中に没してしまう。

いた-み【痛み】（[illegible]薇姫）痛いこと。苦痛。「刺された瞬間の痛みは、普通の人間と変わらん」とは、サクリ村のエレナに対するDの返答。青騎士の長槍を腹に受けたDに向かって「いくらダンピールだって痛みは感じるんでしょ」なんて突っ掛かるからだよ。

いちまん-さつ【一万札】（夢なりし）シヴィルが眠る「村」のホテルでDが支配人に差し出した紙幣。コイン以外にも、紙幣に類する物が流通しているらしい。単位は分からないが「酒場まで行って釣りを借りてきた」というくらいだから、さぞかし高額の紙幣なのであろう。支配人は「一万なんて札を見るのは、久しぶり……」と嘆息した。Dの物語に紙幣が登場するのはこれが初めてで、いまのところ最後。

いっかく-じゅう【一角獣】→ユニコーン

いつのひも【いつの日も】（ダーク）湯の町カクタス村に流れていたギターの曲。

いでんし-じょうほう-の-かいどく【遺伝子情報の解読】（風立ちて）貴族文明ではすでに五千年以上前に完了している。解読成功は西暦六〇〇〇年代か？

いでんし-へんかん-そうち【遺伝子変換装置】（風立ちて）ツェペシュ村廃墟の実験室にあった超科学機器のひとつ。

いでん-びょう【遺伝病】（風立ちて）名前さえ知らぬ過去の遺物。この時代、貴族たちの遺伝子工学の成果により、近親相姦などによる知能障害、その他の弊害は存在していない。労働力確保という最重要問題から、父と娘、母と息子などの関係は許容されている。要は構わんから「産めよ増やせよ」ということだが、なればこそ、快楽の追求のためだけにリナを襲った村長の行動には、断固として許せぬものがある。

いと【糸】（堕天使）Dが繰り出す蜘蛛の糸ほどもない細い糸は、先端に鉤が付いていた。Dはこれを使って、フィッシャー・ラグーンの館の屋上に侵入する。

いどう-がい-く【移動街区】（死街譚）読んで字のごとし、動く街のこと。直径約三キロの楕円形で、面積三平方キロ以上。三基の核融合炉が生産したエネルギーは素粒子変換器によって反重力タイプに変えられ、基台を地上から一メートルの高みに浮遊させる原動力となっている。またの名を浮遊街区。高さ十メートルに達する楕円形基台には公園から墓場まで、監獄から病院まで、通常の町や村に備わる施設はすべて整っている。住人は五百名。航行装置は複合コンピューターによって管理され、時速二十キロの巡航速度を保つ。エンジンへの反重力エネルギーの全面注入が可能な場合、六〇度までの傾斜なら、いかなる崖も山脈もよじ登ることが可能。二百年前、北方大山脈（ノース・グレイト・マウンテン）の麓近くで神祖を乗せている。装備する火門はプロメテウス砲の他、二インチ広角砲を二十門。迎撃ミサイルが三十基と意外に古風。

いどう-かじ-や【移動鍛冶屋】（堕天使）村の鍛冶屋程度ではできないレベルの仕事もこなす。古代からの工作秘術を身につけた一族の末裔。貴族しか駆使し得ぬ最新のエレクトロニクス・テクニックも難なく使いこなして、辺境の村々や旅人たちの工具や武器を整備し、改造し、必要とあればその場で製造もする。人間でも貴族でも平等に扱い、商売相手を選ばない。

いどう-しゃ【移動車】（堕天使）ディームリ村北の外れの飛行体発着場に整備されている施設内移動用機関。音声コマンドで作動し、施設内へ移動する。ただし、コントロール・センターなどの重要施設には、当発着場のVIPといえども認識カードを必要とし、挿入スリットへカードを挿入しなければならない。しかるにDはVIPカードなしで重要施設入場の有資格VIPと認定された。旅客センターのホール近くから、コントロール・センターの地上五百階まで、ほんの数秒で疾走するほどの移動力を誇る。

いどう-ようき【移動妖気】（聖魔遍歴）特定の場所で発生した妖気が、台風のように動いたものと思われる。これが辺境の街道に出現すると、誰も通行できなくなる。数日にわたり居座ることも珍しくないらしい。

イナー-へん-きょう【内辺境】（聖魔遍歴）バーナバスの町がある辺境。バイパー婆さんが「神隠し破り」の名をとどろかせている。

イノセント・プレイリー（死街譚）辺境第二の平原地帯。Dを乗せてすぐ、移動街区が通過した。付近には、約二十キロの先にハヒコの村がある。

いのち-ある-にんぎょう【生命ある人形】（堕天使）主に妖術師たちが、人間の召使に不可能な雑用を行なわせるために製作したもの。彼らの調合した不可思議な霊薬は青銅や土、あるいは花や空気からさえ、生命を備えた人形を作りだす。なかでも粘土をこね上げた像は最も強靭かつ従順といわれ、魔道士、妖術師、貴族たちがこぞってその性能を競い合ったという。ジャン・ドゥ＝カリオールのこしらえた戦闘用泥人間（ゴーレム）はその最新作で「破壊者」の容れ物だったが、千手足のサイファンは軽々とその心臓を刺し貫いた。

いのり-の-ことば【祈りの言葉】（聖魔遍歴）ランスの墓の前でタエとDが唱えた。その祈りにいわく——

「我ら、愛しきものを送らん
汝が国の平穏の廟（みたまや）に
汝がやさしき腕（かいな）の夢に
我ら　大ならずされど小ならず
遠く去り　また生まれる

ゆえに呼べ　遙かなるものなりと
地をさまよいつつ我　汝を求めしも
答えなく
憂し世に影のみを見ん

されど　我　恐るるを知らじ
沈黙の言葉を知り
見えざるものを見るが故に
我ら汝なり　汝は我らなり
遙かなるもの　いま　ここに送らん」

いーらい【[illegible]頼】(堕天使) 超一流のハンターたち七人に舞い込んだ男爵バイロン暗殺の依頼は、物語の一カ月前に届けられた通信用MDで伝えられた。南部辺境区のとある廃墟への集合を呼び掛け、その後、旅費として彼らの年収にあたるほどの額が届けられた。贅沢な方法でその廃墟まで往復しても十回以上繰り返せる額。手付けは貴族しか合成し得なかった貴金属のかけら(一生遊んで暮らせる金額相当)を、成功報酬は辺境区の半分が丸ごと買い占められる額が提示された。

いわーくま【[illegible]】(双影の騎士) 五十トン近い体格を有する熊。ケンツはこれを仕留める際に肺まで達する裂傷を負い、さらに細菌の巣と言ってもいい土砂降りのジャングルから生還したが、それは西部辺境で学んだ薬草知識のおかげだった。

インパクト・キャノン【衝撃砲】(夢なりし) 全長一メートル、直径二十センチに達する円筒形の大型武器。これより小ぶりの砲もあるらしい。スタンレイ・クレメンツが対D用に引っ張り出した衝撃波砲は、突進する五トンの大型獣さえはねとばす衝撃波を放つが、砲声は静寂を極める。射程数メートルでは、その威力の範囲は直径二メートルほどか。

インプ(風立ちて) 貴族が産み出した人工獣。愛蘭上の妖精がモデル。人に危害を加える邪悪な妖精のひとつ。

インモータル・ソルジャー【不死身兵士】(堕天使) 貴族が巨大な地虫(アースウォーム)の生命維持システムを応用した不死身の兵士。時間の制限なく戦い続けられる。辺境や極地の大貴族はこれを密かに製造・軍隊化して、中央執行部に反旗を翻した。その戦いは三世紀にわたったが、戦後その製造は禁止され、生命維持システムのノウハウも銀河の彼方にあるという大重力星の核部に凍結された。当然ながら地虫たちのほとんども殺戮されたはずだったが、そのうちの一匹はクラウハウゼン村手前の平原に出現した。

ウ

ウーリン(北[illegible]行) フローレンス村出身の十六歳の少女。珠の鑑定をしてもらおうとクローネンベルクの街に赴くが、街の世話役ギリガンの掌中に落ち、あたら若い身空の命を落とす。ギリガン商会の地下室に手枷足枷で捕らえられ、魔虫〝語りべ〟をけしかけられるあたり、読む者の涙を絞らずにはおかない。ああ、かわいそうなウーリン。

ヴァーノン・ベリ(風立ちて) 人間の画家。西暦四〇一八年に自宅で食事中、一八七八年のロンドンで美女の寝室を襲う「ある貴族」の姿を目撃。三カ月がかりで一枚の肖像画を描き上げた。これは以後六千年近い歳月にわたって「神祖」像の最高傑作とされるにいたる。閉鎖空間の修理回路が起こした事件のひとつ。

ヴァルハラ(ダーク) Dとロザリアとクィンが一緒に目指した村。仮称「虐殺の村」の西にある。街道を五十キロほど行った先にあるダッジ・タウンで道を確認すべし。

ヴァルハラーきょう【ヴァルハラ卿】(ダーク) ゼノン公ローランドの回想に登場する川下りを主催した貴族。例外的に流水を好むローランドとはウマが合ったと思しく、バラードラック男爵の夜宴とともに「どの夜も月と星に満ちていたが」と夜の谷川で感傷的に嘆じられる。ゼノン公がそのような感傷に浸ったのは「Dのような若造がこの世にいるとは思わなかったわい」という正直な感想ゆえだったが、河原の向こう岸にはいけ好かないシューマ男爵がいて、その様子を見ていた(はず)。

ヴィシューヌ(妖殺行) マイエルリンクが〝少女〟――村長の娘をさらった村。正確にはさらったわけではないが、〝少女〟の家出に気づいた父親の折檻

を見かねたマイエルリンクが憎悪に燃え、ついに村長の血を啜ってしまったため、さらったものと勘違いされてしまう。たったひと咬みで悪鬼と化した村長は別の犠牲者を求め、八十戸、五百人からの村人を一夜にして疑似貴族に変えてしまった。惨劇の直後に村を訪れたマーカス兄妹は、銀髪と威厳に満ちた顔を持つ、村長と思しき五十年配の老人に出会う。胸元と口を隠した老人はかろうじて保った意識で、北へ逃げたマイエルリンク男爵の追捕を依頼した。報酬は一千万ダラス。

ウィッチ（D） 老婆の気獣使い。術をかけている最中に、伯爵の城へ向かう途中のドリスに結界を破られ、結果的に殺されてしまう。

ウィンズロー（堕天使） ミスカの祖父、コルネリアス・ドレイクが治めていた土地。バラージュ卿の用心棒＝ヴラド三強のひとり「千手足のサイファン」が以前に用心棒をしていた土地でもある。

ウィンズロー・リーチ（一般） ブライアン・デ・パルマが七四年に監督したカルト傑作『ファントム・オブ・パラダイス』の主人公の名前。漆黒の革ツナギにその長身を包んで、銀色のヘッド・マスクで爛れた顔を隠し、自分の書いた曲を盗んだ悪魔＝スワンに復讐する。演じたのはウィリアム・フィンレイ。滅びゆくスワンが悔しげに「ウィンズロー！」と絶叫する瞬間は、劇中最高のクライマックスである。

ウェイトリィ（D） ランシルバ村のお爺さん。村長ローマンの権勢をかさに着た息子グレコたちの圧力に屈して、ドリスに物を売れなくなった店の主。

ウェザー・コントローラー【気象調■■】（D） 七つの大陸の地下に埋め込まれた十数基の装置。貴族たちが設置した物と思われる。そのため、夜だけは貴族たちにも人間たちにも、もっとも過ごしやすい温度と湿度を維持している。時たま画一性をきらった貴族が仕組んだプログラムにより雷雨や吹雪が吹き荒れる地域も存在する。反乱軍もこれだけは破壊しなかったため、いまも各辺境セクターの気象を調整しているが、場所によっては異常が生じている地域もある。

ヴェネッシガー・こう・しゃく【ヴェネッシガー侯爵】（聖魔遍歴） タエを連れ去った貴族。グラディニアの城主かどうかは、実のところは不明。もし城主だとすれば、パイパー婆さんに倒されたのと同一人物のはず。

ウェポナー【武器■人】（夢なりし） 辺境を巡る行商人の職種のひとつ。辺境にはなくてはならない存在。

ウォーキング・デッド【歩く死■】（D） 吸血鬼たちが作った凶獣、もしくは核戦争が生み出したミュータント。ゾンビと同系列。

うごく・もり【動く森】（■■歴） Dが入手したメモによれば、D一行が最初の晩に夜営した場所から南西に二十キロの地点にある。そびえる木々の高さは百メートルを優に越え、北方の森林地帯でも見つからぬ大森林を形成する。鳥の声も虫の羽音も聞こえず、森の生き物は樹木のみ。木の表面には蛍光菌類が付着し、陽光が通らないのに明るい。川も流れていて、触手を持つ怪生物が潜んでいる。砂漠の主の命令に従ってDたちを襲うが、パイパー婆さんの術によって掻き消された。

ウシブタ（ダーク） 三つ首鶏や大兎とともにクラクフ村で飼育されていた家畜。大口径〝ペネトレーター〟弾をこめかみと肩と脇腹に喰らったメフメット大公の巨体が家畜小屋に突っ込んだため、安らかな眠りを妨げられた動物たちは大公の身体の上を跳ね回った。

うま【馬】（風立ちて） Dの馬はどこの村でも手に入る平凡なスタンダード・タイプのサイボーグ馬。しかし、性能面で絶対に有利なツェペシュ村治安官の乗るカスタム・グレードが追いつけなかった。Dの能力が馬の性能を引き出すと考えられる。

うみ【海】（■■歴） この時代にも海はもちろん存在するが、原始的な交通手段に依存する辺境の住人には、海を見ずに一生を終える者も少なくない。例えば北の辺境出身の農夫ランスのように。あるいは万能屋マギーのように。

ヴラド・さん・きょう【ヴラド三強】（堕天使） クラウハウゼン村に名高いザナス、化粧好きのクロモ、千手足のサイファンの三人を指す。もともとはジャン・ドゥ＝カリオール配下の者たちだったが、ヴラド・バラージュ■の親衛隊とも言うべき存在に供された。親衛隊長と呼ばれるクロモにしてからが「親子で殺し合うがいいや」とせせら笑っているような連中であるが、いずれも命懸けの働きを見せる。三者三様、異なる相手によって斃されたというのも面白い。

ヴラド・の・うま【ヴラドの馬】（堕天使） 胴も脚もチタン装甲で覆われた黒馬。

ヴラド・の・しろ【ヴラドの城】（堕天使） 男爵バイロンの父、ヴラド・バラージュ卿の居城。クラウハウゼン村の中央に位置する。二重の堀を擁し、自動監視モニターが周囲を警戒、正門には哨兵が配置されている。巨大なホール全体が落とし穴、底には冷たい水がごおごおと流れている。この水は村を流れる川に繋がっている。館との描写もあり。街道を外

Y. Amano

れた間道を直進すると町へ、右へ曲がると館へ出る。その底部には城のエネルギー循環を支える巨大な装置がある。途方もないサイズの黒いピストンが縦横に並び、それを支えるアームは優に五十メートルはある。地下には焼却炉。北側地下のヴラドの寝室には、天蓋と環状の五重水路で守られた青銅の柩がある。地下といえど、窓には分厚いカーテンが降りていて、一点の光とてない暗黒になっている。対空防御に関しては、敵の接近を三次元レーダーが捉え、数百基に及ぶレーザー、粒子ビーム砲、火薬利用の高角砲が迎え撃つ。西に家畜小屋がある。礼拝堂あり。DNA錠などで厳戒にも厳戒を重ねた地下には、妻コーデリアを幽閉した紅い地底湖がある。湖面には一隻の青銅ボートが浮かんでいるが、水に動きがないため舫（もや）われてはいない。

ヴラド・バラージュ（**堕天使**）クラウハウゼンの村で西部辺境統制官を務める貴族。男爵バイロン・バラージュの父。青紫のマントを着用する。バイロンより頭ひとつ高い――二メートルを越す長身。正方形に見えるほど肩幅が異常に広い。面長の顔は黒く、金属の光沢を帯びている。はだけた漆黒の胸もとには黄金と宝石を散りばめた胸飾りをしている。真紅の宝石を頭部にはめ込んだ黄金の笏（しゃくじょう）杖を持っている。妻コーデリアの反対を押し切って、その胎内の息子バイロンに神祖の処置を行う。神祖の覚えめでたく、神祖の息のかかった老魔道士ジャン・ドゥ＝カリオールを使って奇態な実験にふけっていた。材料は、年端もいかぬ赤ん坊や少女たちだったという。破壊者が取り憑いていたフシアを笏杖の一撃で倒す。紫青のガウンも着用。マントとお揃いのところを見ると、お気に入りの色らしい。Dとの戦いで切断された右肘から先は、電子義手にしている。義手をチタン合金製のものに変えているが、描写は左手になっている。握力五〇トンの義手が作る直径二ミリにも満たない水鉄砲の水流はマッハ三を越え、Dの胸を貫通する。Dとの戦いの傷が癒えぬまま「案内人」と合体する。

うらない-ぼう【**占い棒**】（**双影の騎士**）ミア・シモンの持ち物。色とりどりの模様が描き込まれた長さ二十センチほどの金属製の棒。太さは指揮棒ほどもない。

エ

A・Pユニット【**攻撃防御用ユニット**】（**ハルマゲドン**）AP機構とも表記される。神祖の右の手のひらに「印刷（プリント）」されている防御ユニット。ハルマゲドンの地において、灼熱のマグマを大地から噴き出させ、瞬時にマイナス二七二・八度の極超低温の空間を現出させた。探査装置と攻撃装置を「自由裁量」回路に繋ぐことで、使用者の意思から離れ、敵の心的レベルに応じたアタックをしかける。

A-の-きせつ-の-だい-さん-の-つき【**Aの季節の第三の月**】（**双影の騎士**）季節と月の表示の仕方。無粋なようだが「A」とはオータムの頭文字のことであろう。違ったらごめんなさい。

えいごう-つうろ【**永劫通路**】（**堕天使**）貴族の墓所を守る数多の防衛装置のうちのひとつ。侵入者を異空間へと導く。同様の装置に「虚構通路」※がある。

えいよう-ざい【**栄養剤**】（**堕天使**）辺境を旅する者には欠かせない必需品＝カプセル。ビタミン、ミネラル、疲労除去剤など九百種を配合し、わずか五秒で衰弱した者の生気を回復させる。高価な品だが、辺境を旅する時にこれを所持していないことは「裸で旅することに等しい」とさえ言われる。男爵バイロンと旅を続けるDは、ヒキガエルを背負って街道に倒れていた少女タキにこれを与えた。タキが見る間に頬を薄桃色に変え、生気を取り戻したことは言うまでもない。タキに取り憑いていたヒキガエルは、姿を消したまま、その後まったく物語に登場しなかったが、特にこの栄養剤のせいではない。

えきたい-きんぞく-の-そうこう※【**液体金属の装甲**】（**堕天使**）フィッシャー・ラグーンの身体を包む銀色の液体金属の装甲。装着は千分の一秒で行われ、装着後は銀色ののっぺらぼうに見える。分子の結合度を自由に変化させ、あるときは水のように敵の打撃を呑み込み、あるときは超硬質装甲として跳ね返す。手のひらが布地みたいに開いて相手を押し包み、その力は岩石をも抱き潰す。要するに『ターミネーター2』の液体金属T－1000みたいになれる鎧ということ。銃で撃たれると銃創が開いたり、手が蟷螂拳みたいに「ちょんわちゃんわ」になったりするのだろうか。うらやましい。ラグーンはこの

装甲はある人物の剣を除いては破れないと豪語したが、Dは一刀のもとに両断し、溶け崩れさせた。

エグベルト（北海魔行） ギリガン五人組のうちのひとり。五十近い髭だらけの男。またの名を〃国王(キング)エグベルト〃。海でも地面でも部屋の中でも、自分の国土を規定することにより、その空間内のあらゆる事象、物理法則を自在に操ることができる。領土内の重力を五倍十倍にしたり、空気中にニンニク成分を混ぜるなど朝飯前。ギリガン五人組の中では、最も人間らしい血が通っている。そのせいか、同僚（？）のサモンに秘めたる想いを寄せ、一度は恋敵としてグレンを倒すも、貴族の血を受けたサモンに進んで咬まれ、グレン同様貴族と化す。

エネルギー-せいめい-たい【エネルギー生命体】（風立ちて） ツェペシュ村に出現した生命体は実体がなく、再三にわたってDを苦しめた。実は丘の廃墟遺跡から戻ったクオレ・ヨーシュタインが操っていた。

エネルギー・パイプ（双影の騎士） エネルギーの還流装置。貴族の施設であろう。セドク村の西の外れの荒野にも、その一部が走っている。このあたりでは深さ十メートルと、非常に浅いところに設置されている。パイプの太さは一メートルをドらない。何百何十年もよく耐えて、よく無事だったという記述から、あちこちのパイプは壊れてしまっているらしい。パイプからのエネルギー漏出の暴走は、最終的に辺境の四分の一を破壊しつくすと推定される。

エネルギー-よけ-の-くすり【エネルギー除けの薬】（双影の騎士） ミア・シモンが呑んでいた薬。このために高エネルギー波を受けても、深刻な影響を受けなかった。

エフェリス（ダーク） 血のワインの高級種を産する土地。貴族の愛飲する酒と思しいが、諸謔味がたたって神祖を滅ぼすための武器を造り上げてしまったシューマ男爵の叔父さんは、エフェリス産の血のワインも飲まずに考えあぐねて、ついにその武器の究極の隠し場所を思いついた。その場所を知っているのは、もちろんシューマ男爵その人である。

エベネザー・ヴィリズヤ（死[illegible]譚） 移動街区の住人（だった）。かつて『飢餓の時代』、餓死寸前の自分の子供を前に、合成バターを他人より半ポンド余分に盗んでしまう。飢餓のどん底を這っていた家であったため、最初は穏便に処理されたが、街の掟を破った初めての男をどうしても許すことができなかった町長ミンの命で射殺され、自殺に見せかけられた。直接手を下したのは、当時治安官助手であったベイリー・ハットンである。

M八〇二六CT（風立ちて） ツェペシュ村所有のコンピューター戦車(タンク)。村はずれの土手に埋もれていたのを発掘し、『都』から技術者を呼んでチューンナップした二千年前の戦車。野盗や大巨獣から村を守っていたが、丘の上の廃墟を攻撃中に、丘に呑み込まれてしまう。

エル・キャピタン（聖魔遍歴） 内(イナー)辺境の街バーナバスにある酒場。ビューロー兄弟が宿とした。

エルデ（堕天使） 男爵バイロン・バラージュの一行を襲った山賊団の女性メンバー。左手に気象コントローラーのリモコンが巻いてある。裏切った仲間ベニスに刺し殺された。エルデはベニスよりも美形だったからねえ。

エレキ・クラゲ（堕天使） フィッシャー・ラグーンの館の電気風呂に使用している電気クラゲのこと。

エレクトロ・アナライザー（風立ちて） ツェペシュ村廃墟の地下研究室に並ぶ超科学技術機器のひとつ。

エレナ（薔薇姫） バイク青年集団を率いるサクリ村の純朴な不良娘。十五メートルからの長さの鎖分銅を自在に操る。五歳の時、薔薇姫に一家を襲われ、両親とともに四歳の弟と二歳の妹を喪い、天涯孤独の身となる。腹部には白騎士のスレイヤーより受けたその時の傷が、今も赤黒い十字を遺している。貴族と村人との〃サクリ村なあなあイズム〃に強く憤慨反撥し、Dとともにダイアンローズの四騎士、ひいては薔薇姫打倒のために奔走するも、最後の最後で貴族の誘惑に陥落してしまう。そんなエレナを眼の前にしてDが取った行為の重さは、Dの「ひどく疲れたような足取り」や「あんな寂しそうな後ろ姿」などの描写に見て取ることができる。

えん-じゅう【炎獣】（双影の騎士） 「どんな妖物の記憶の中にだって忍び込んで昔を憶い出させてやるさ」――とはギルハーゲン村の魔道士オリガの得意技＝記憶の過去遡行の謳い文句であります。他には影食いや心霊鬼も記憶遡行術の対象として引用された。

えんしょう-だん【炎[illegible]】（堕天使） 焼夷弾の一種。十万度の火球を生じさせる。遠距離から使用するが、その飛翔音は蚊の羽音より小さい。ザナスが小手調べでD一行へ使用。昆虫焼夷ミサイルとの名称もあるらしい。

エンデ・ランパール（死街譚） 移動街区の住人（だった）。筋肉の病にかかっていた当時十二歳の子供。普通の町医者であれば充分に治療可能な病気であったが、ミン町長は移動街区を降りるのが嫌さに、治療不可能として自殺させてしまった。

えん-とう【円筒】（堕天使） 馬車を襲ったプラズマ

光球を喰い止めるためにバイロン・バラージュが投擲した金色の円筒は、青い光を放つパワーフィールドを作り出し、プラズマ光球の突進をしばらくの間、阻止した。また（他のタイプの）円筒の先から出る緑色の光点は、光点状の走査機構（センシング）で、対象物の表面を移動しながら弱点と急所を探る急所センサーである。その結果を攻撃モードを選択し、攻撃部位に連絡する。コンピュータは攻撃モードを選択し、攻撃箇所に亜空間伝導路をつなぎ、光速粒子ビームを通す。金色に対して銀色の円筒の方は、またの名を「シュタイン原子弾」とも言う。

オ

オー-エス-ビィ【OSB】（堕天使）アウター・スペース・ビーイング（Outer Space Being）＝外宇宙生命体の短縮呼称。ビーイングとはいっても職探しに来たわけではない。五千年紀後半から激しくなったOSBの地球攻撃によって、大陸のいくつかは沈み、太陽系内の貴族の基地は灰燼に帰した。その超科学同士の対決は地球の大陸と海洋を[illegible]い、貴族勢力衰退の遠因となったとも言われる。その後一千年をかけて貴族の反攻が開始され、さらに二千年の五角状態が続き、OSBは銀河系内から忽然と撤退した。貴族の歴史書には「その意図不明」と記されている。

オールド・ジャル【老ジャル】（双影の騎士）セドク村の三代前の治安官。でっぷりと太った白髪の老人。

おうきゅう-し【応急紙】（北海魔行）旅での事故には欠かせぬ、二十センチ四方の通気のよいセロファン状の紙。表面に塗布された薬品層は、止血、消毒、栄養、保温、冷却の各層からなり、軽い風邪から裂傷まで、さまざまな応急措置に威力を発揮する。百枚一束でもかさばることなく、携帯にも便利。クロロック教授の術に落ちたトトの左胸の応急措置に、Dが用いた。

おうごん-の-ディスク【黄金のディスク】（堕天使）ミスカ・ドレイクが持っていた数千年前のものと思しき黄金のディスクの表面には五万ミクロンの記憶素子が打ち込んであり、遥か何千年か前の舞踏会の様子が記録されている。

「お、おめえもか、ぶるーたす」（ダーク）ロザリアの手料理は「辺境では滅多にお目にかかれない」とDが言うほどの御馳走だった。剛毅を気取って素直になれないゴルドーは最後まで意地を張っていたが、当然のように食卓に着くDを見てついこの台詞を漏らしてしまう。

おおうそつき-で-みえっぱり-のエエかっこし【大嘘つきで見栄っ張りのエエかっこし】（双影の[illegible]士）にせDの性格こそがD自身の本性だと仮定したときのDの性格。あくまで"仮定"ですよ。いずれにしても、半分は真実だと思うし、そうでなければならぬ理屈である。何と言ってもDとにせDは『戦慄の絆』の仲でありますから。

おおがに-ロボット【大蟹ロボット】（北海魔行）フローレンス村の顔役ギリガンが、商会母屋の三階にある"工場"で作り上げた黒い円盤型のロボット。

オオカンバ（夢なりし）辺境の森に生える樹木。他にもオニエリシダなど、第五長篇『夢なりし"D"』の冒頭にはこの手の辺境樹木がいっぱい出てくる。

おお-ぐも【大蜘蛛】（風立ちて）ツェペシュ村の調教師サイラス・ファーンが使用した護衛獣（ガード・ビースト）。脚の長さが優に三メートルを越える巨大蜘蛛。鳥籠ほどのバスケットに収容されている。巨大な顎の隙間から白い糸を吐くところから、蜘蛛に似た突然変異体か。その糸の凄まじい粘着力と強度は、本物の蜘蛛の糸より細い一本で、蜘蛛本体を枝から吊るし、さらに獲物を引き上げる。

おお-ぐも【大蜘蛛】（堕天使）ディームリ村の北の巨木に巣喰う怪物。メイとミスカを襲った。全長五メートルで灰色の剛毛は、針のように毛羽立っている。その背や脇腹には折れた槍や長剣が何本も突き刺さっている。足の長さは十メートル近い。小豆色の眼。その悲鳴は鉄とガラスをすり合わせたような声。その背中から吹き出す糸は強烈な粘稠（ねんちゅう）度と溶解力とを備えている。

オオシオクジラ（北[illegible]行）北の辺境海域に棲息する鯨。捕鯨禁止の国際法がまかり通った結果、この時代にも鯨は結構いるらしい。

オオメチュウ（北海[illegible]行）食肉性の虫。灰色の頭に複眼を持つ。クロロック教授の術に陥って虫の息のトトを狙うが、Dの鬼気によって追い払われる。

おか【丘】（風立ちて）ツェペシュ村にある底辺の直径二キロ、高さ二十メートルほどの丘。平凡な丘陵にしか見えないが、頂上を極めようとすると到達に数時間を要する。が、駆け降りるのには二分とかからない。頂上には貴族の廃墟がある。

おかしな-かたち-の-はか【おかしな形の墓】（[illegible]）死んだランスの墓にするためにDがスチール・パイプで作った墓標。もちろん十字架である。

おか-つなみ【陸津波】（[illegible]）その行くところすべてを粉砕し、空中高く巻き上げずにはおかない辺境現象。サクリの村近くに出現した際、村全体を一時期地中深くに沈めて守り通したのは、他ならぬダイアンローズの四騎士であった。

おーかみ【女将】(■天使) フィッシャー・ラグーンの館の女将は「狐そっくり女」であるという。キツネ目というのなら分かるが、どんな女将だろうか。髭でも生えているのであろうか。

オックス(北海魔行) クローネンベルクからフローレンスに至る途上の村。さらにその先には、辺境北部への安全なる途、大型フェリーの発着所がある。

オライリ(北海魔行) フローレンス村の乾物屋。フローレンス小学校のドアの床を張った。

おり【檻】(D) 特に、ランシルバ村の収容所の中にある獄舎の別称のこと。超高密度の格子で囲まれた独房。

オリガ(双影の騎士) ギルハーゲン村に住む南部辺境随一の魔道士。髑髏に皮を貼り付けたような顔だちの白髪の老婆。黒い木の葉が眼帯代わりに左眼を覆っている。得意技は戻り笛による記憶の過去遡行で、人間、馬、鳥、影食い、炎獣、心霊鬼――どんな妖物の記憶にも忍び込んで、失敗ひとつなく過去を思い出させることができるが、術を行なう道士自身のみ過去遡行することができない。また他人の「失われた記憶」を喚び戻す代償に、オリガ本人の身体は歪み干からび、体重は十分の一にまで落ちてしまう。五歳の時にDに出会っているらしく「幼いオリガの前で三十人近い野盗を叩き斬った」との記述あり。その光景がたったひとつのオリガの過去の記憶だった。蒼い騎手ユマのために八つ裂きにされてしまう。

オリハルコン(堕天使) かつて東の海に存在したといわれる伝説の大陸アトラントで製造されていたという奇金属。フィッシャー・ラグーンがDを案内したソーントン通りの倉庫には、オリハルコン・ベースの合金製ドリルを装備した地底掘削用ドリル・マシンも格納してあった。

「おれ-の-いのち-は-ふたつ-ある」【おれの命はふたつある】(妖殺行)「YOU ONLY LIVE TWICE」00D/ダンピールは二度死ぬ――なんちって。

お-ん-な【女】(ハルマゲドン) ハルマゲドンの地で、神祖の幻影製作機構が産み出した実体なき幻影の女。当然ながら、神祖の想い人でありDの母であるはずだが、劇中にその描写は一切あるはずもなし。神祖が彼女と別離してから一万年の歳月が流れている。

おんぱ-しゃだん-えき【音波遮■液】(堕天使) 文字通り音をシャットアウトする液体。まあ、耳栓代わりである。液体とは言っても、ゲル状に近い粘液物質であろう。水軍人たちの発する「水琴」の音を遮断するために、男爵バイロン・バラージュがタキに使っている。

カ

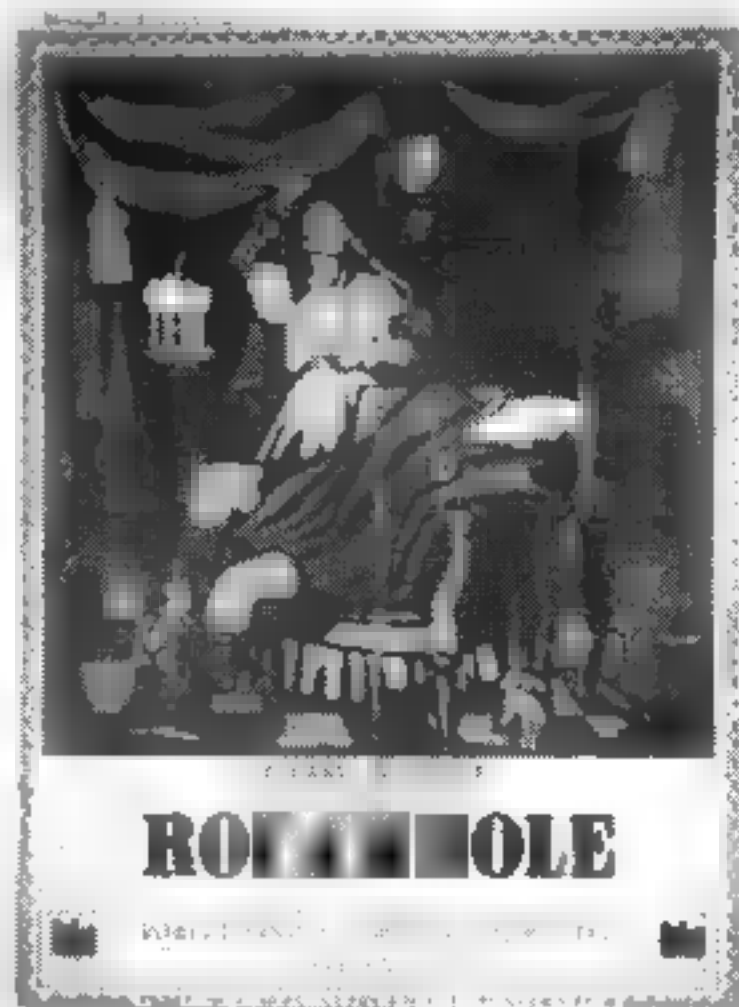
カート(夜想■) 金属製のプロテクターに身を包んだ装甲服姿の戦闘士。美少年プライスに従い、ビジマとともにアニスの村に入り、村長コビエに雇われる。村でDと一戦を交え、片腕を斬り落とされた。

ガード・ビースト【護衛獣】(風立ちて) 人工妖魔や盗賊から身を守るために旅行者が購入する魔生物。大もとは貴族の放った妖魔妖獣を祖先とする。その妖魔妖獣の世代交代が進むにつれ、新種、育種が多数発生し、二千年ほど前からごくまれに人間にも飼育可能なものが出現し始めた。飼育・調教の方法は、ある種の音波と呪文を使うという以外厳重に伏せられ、一般人には窺い知ることも不可能。

がいこつ-ごうとう-だん【骸■■団】(双影の騎士) バルガと組んで寺に泊った旅人を襲っていた強盗団。蛍光塗料で塗った骸骨のコスチュームを人馬ともに着て、バルガから流された情報をもとに旅人を襲う十騎。馬の眼窩から放つ火球は直径一メートルほどで、放射能こそ発生させないものの中心温度は一万度に達する。

カイザー-ふじん【カイザー夫人】(風立ちて) ツェペシュ村の農夫カイザーの夫人。アルミノンの花を摘みに来たところを貴族に襲われた。事件当時、夫は隣村へ出かけていた。サイラス・ファーンが「不幸ならず者」をダミーの貴族として捕らえ、それをDが始末した当日、何者かに白木の杭を胸に打ち込まれて死亡。

かいとう-だん【海盗■】(北海魔行) 北海沿岸の村を荒らす海賊グループ。四年前、フローレンスの村が海盗団の襲撃を防ぐために招いた指導者=戦士の運命は、村長とハン老人、そしてスーインの三名だけが知っている。

かいとう-ロカンボール【怪盗ロカンボール】(Rocambole)(一般) 一九六二年のフランス=イ

タリア合作映画。日本公開六四年。アルセーヌ・ルパンばりの怪盗紳士ロカンボールが二十世紀初頭のロンドンでドイツの間諜を追う冒険譚。シルクハットから鳩を出す古典奇術を完成させた奇術師＝チャニング・ポロック二世がロカンボールに扮した最後の映画版で、通算六回目の映画化。十九世紀に誕生したヒーローながら、六三年にはTVシリーズにもなっている人気者であります。

かい-ふく-りょく【■復力】（堕天使） 基本的に不老不死の貴族は、手傷を負っても浅ければ瞬時に、重くとも数時間以内に完治する。また、負った瞬間以外、必ずといってもいいほど痛みは伴わない。

かい-ま-だん【怪魔団】（D） 麗銀星を筆頭に拷審無・とんがり頭・せむしの四人で大巨獣ハンターを営むと偽っているが、実は〝怪魔団〟と名乗る残虐無比の強盗団。ランシルバ村で見せた、グレコ一味に対する手口からも明らか。

カイル（妖殺行） マーカス兄妹の四男。粗暴凶悪な性格は、兄妹一。黒シャツに黒レザーのスラックスを穿き、黒光りする革の胴衣を着用。凶猛な表情と異様に長い胴が際立って目立つ男である。腰に収まった直径三十センチほどの半月型の刃物――円月刀を武器にする。端にワイヤーか紐をつけ、伸縮自在に振り回しては一種の制空権を作るのが一般的だがカイルの場合はブーメランのように自由自在に操り目標は必ず翔って手元に戻す技の域に達する。女ダンピール＝カロリーヌを追いながら逆にその双眸に捉えられ、吸血鬼となってしまい、最期はボルゴフの三本の鉄矢に看取られた。

カイル（ダーク） 辺境商工ギルド輸送隊の隊長。たくましい体軀の男。鬢には白髪をたくわえている。マーカス兄妹のへらへらカイルとは異なる性格で、荷馬車を襲った空飛ぶ化け物の火の玉攻撃に我慢できず反撃を仕掛けるが、逆にやられてしまう。

かえら-ざる-さばく【帰らざる砂漠】（聖魔遍歴） 通過しようとする者がことごとく呑み込まれ、二度と帰ってこないところからそう呼ばれる生きている砂漠。砂漠の町からバーナバスまでは四日で越えられる距離。ただし、生きて越えられればの話。迂回すれば一週間ほどかかる。空は厚い雲に覆われ、晴れ間が見えたのは、ここ五十何年かに一度。陽は通さなくても熱は通過させ、逃がさないのがこの砂漠の特徴。球体や蝶、竜巻、野盗を操り、心理攻撃も行なう。心理攻撃の中には海を見せるものもある。その正体は砂嵐をガードとした貴族の研究所で、人間と貴族の融合を研究課題としていたらしい。研究所が放棄されても機械は作動し続け、その研究成果を砂漠に流し込み続けていた。その結果、砂漠自身が意志を持ち、進化していたもの。だが本心では永遠の眠りにつくことを望み、そのためにD一行を襲った。Dの小刀の一撃でその機能を停止し、望み通りの眠りにつく。

Y. Amano

かえら-ざる-かわ【帰らざる河】（一般） 一九五四年の映画。マリリン・モンローとロリイ・カルホーンが、■バート・ミッチャムの手で激流にもまれる筏から救われる。別に河が生きていて人を帰さない話ではない。

かえん-じゅう【火炎獣】（■天使） 時速二百キロで疾走する燃える怪獣。

かえん-だん【火炎弾】（■薇姫） ダイナマイト形式の自発火薬。一種のナパーム弾で、円筒形の本体に付いた発火リングを抜いて放置すれば、五秒後、一万度の高熱が半径五十メートル以内を灼き尽くす。シャンバラの森に遺されていた貴族の岩穴＝巨大な岩のピラミッドは、エレナが用いた火炎弾によって、金属製の触手＝捕獲装置もろとも吹っ飛んだ。

かえん-だん【火炎弾】（堕天使） ディームリ村の祭祀館に侵入した二人組が、男爵バイロン・バラージュに向けて放った手製の武器。銃で発射する。ケロシンとゲル化油をベースに、数種類の化学燃料を加えたもの。

かえん-びん【火炎瓶】（風立ちて） ワインの瓶に自動耕運機の燃料とボロ布を詰めた即席の火炎瓶。その炎は二千度に達する。

かえん-ふんしゃき【火炎■■】（聖魔遍歴） 特にバイパー婆さんが持っていた『都』特製の火炎噴射器は、火龍の体脂肪を詰めたタンクと、皮製の圧縮ポンプ、プラスチックのノズルで構成されている。

かき-だし【書き出し】（一般） 手紙や小説などの最初の一行、そもそもの冒頭の一行を指す。そこで問題。以下のDシリーズ作品と書き出しの一行の組み合わせの中で、仲間外れのものがひとつだけある。それはどれか（答えは欄外にあり）。

吸血鬼ハンター〝D〟　落日が平原の果てを染めている。
夢なりし〝D〟　月が出ていた。
D—北海魔行　夜半から風が強くなった。
D—双影の騎士　風は疾く、重かった。
D—ダーク・ロード　道は翳っていた。
D—邪王星団　静かだった。
D—戦鬼伝　城郭は蒼穹に挑んでいた。
D—想秋譜　とりわけ、ある季節の映える村がある。

かぎ-ばり【鈎針】（堕天使）Dが切り放した左手を鎖につけて音波探査機として使った際に、その反応伝達用の糸を結びつけるために使った。その極細の糸は、貴族でさえ感知できなかった。

がくいん【学院】（風立ちて）『都』に設置されている。

かく-されっ-こ【隠されっ子】（[illegible]遍歴）神隠しにあった子供を指す。あらゆる超常現象の入り乱れる辺境においても、戦慄すべき事象。あり得ぬ状況から忽然と消え去るものたち。消失原因の大多数は、不定期に発生する次元渦動や未知の生物によるものと推定されるが、対象が若い娘の場合は、貴族が絡むことも多い。帰ってきたあとの「隠されっ子」の末路は、ほとんどが悲劇に終わる。両親に会った日に牙をむくもの、しばらくして発狂するもの、親たちと離れて集団で暮らすものの無残な殺し合いをするものなど、さまざま。Dが遭遇した事例では、南西区（セクター）の村で八歳ぐらいの男の子が、三カ月、貴族のところにいた。すべて異常なしで、両親と半年間無事に暮らしたのにもかかわらず、疑心暗鬼にかられた母親の訴えで村を追い出され死亡、父親も村人に殺された。

カクタス（ダーク）辺境商工ギルド輸送隊がハルドゥ村の生き残りとともにたどり着いた村。辺境を巡回する辺境医療部隊が臨時病院を開設していて、生き残りの人々の噴水病の完治を証明してくれた。

かくめい-せいちょう【革命政庁】（風立ちて）『都』に設置されている。T・フィッシャーの「犠牲者による貴族のレベル識別法と防御対策」を禁書に指定。

カゲ（[illegible]天使）男爵バイロン暗殺のため、父親ヴラド・バラージュに雇われた七人の刺客のひとりにして員数外。会合に姿を現わさなかったばかりか、以後、登場すらしなかった。まことに影のような存在である。村の宿での会合から推察する限り、街道の魔術師ヨハン卿の暗躍ぶりが、どうもその行動に合致しそうである。しかしもっと重要なのは、Dを敵にまわして、最後まで死ななかった戦士は現在のところ、このカゲひとりだけだという事実の方であろう。

かげ-の-せんじょう【影の戦場】（双影の騎士）大施設の内部にある直径百メートルの円形の広場。周囲の壁には無数の扉と窓が穿たれている。あちこちに骨が積まれ、床には血の染みが点在する。四方をとりまく扉が消滅し、黒々と打ち抜かれた楕円形の穴から、大量のDが出現する。壁は何層にもなっていて、それぞれに戸口があるらしい。出現した大量のDは、実はDのクローンであった。

かじ-や【鍛冶屋】（堕天使）紅はこべたちの最初の襲撃の森から二キロ先にある村の外れにある鍛冶屋。小さな工場に等しいサイズの作業場がある。農機具の修理や製作だけでなく、自動車や簡単な電子装置の販売まで扱うが、その値段、品揃えは『都』からのルートの種類で決定される。

ガストン（風立ちて）ツェペシュ村の水車小屋の老人。十年前、リナに村独特の貴族発見法を施した一人。Dが村を訪れた頃には「使っていない水車小屋」との記述があるので、すでに死亡したか。

かぜ-たちて【風立ちて】（原典）正式名称『風立ちて〝D〟』。シリーズ第二長篇。一九八四［昭和五十九］年五月十日発行。陽光の下を徘徊する吸血鬼——「昼歩く貴族」の恐怖に脅えるツェペシュ村の物語。吸血鬼と人間の遺伝子情報までさかのぼる壮大なお話であります。

かたり-べ【語りべ】（北海魔行）咬まれると告白癖がつく魔虫。尺取り虫のような身体に、異様に大きな単眼二つと棘状の口を持つ。刺された者は三十分以上苦しみ抜いたあげく死に至る。スーインの妹ウーリンがその犠牲となった。

かちゅう-の-じゃようせい【花中の邪妖精】（夢なりし）邪妖精の一種。手に小さな槍を持ち、毒花の汁を血に、花びらの皮膜を肉としている。

かどう-スペクトル【渦動スペクトル】（死街譚）貴族が自分のものと信ずる土地の周囲に設けたさまざまな防御・攻撃施設のひとつ。貴族同士の果てしない領土間抗争の産んだ狂気の遺物である。色彩を武器化し、ダーム鋼の航空戦艦すら切断してしまう。

参考：『邪王星団』（これが三巻の表紙絵）

かね-の-ね【鐘の音】（北海魔行） ラストで鳴り渡るフローレンス小学校の鐘の音が、どれほど『北海魔行』の物語に潤いを与えたことか。■

カプセル（風立ちて） Dが食事として摂った物。乾燥血漿と滋養分を含んでいる。カップに満たした清水に落として血を作りだし、飲料する。ダンピールの食事に普遍的に使用されているらしい。普通のダンピールなら一個ずつ一日三回食するが、Dはツェペシュ村に来て五日目に使用したことから、最低五日間は食事を摂らなかったようだ。

カブトムシ（堕天使） ヴラド・バラージュ卿の館を巡回する一種のパトロール・カー。ガードマンとしても機能している。巨大なカブトムシみたいな形をしているため「カブトムシ」と仮称されるが、さらに通称は「ビートル」で、駆動部は車体後方にある――なんて言ったら怒りますよ。■

かみ【神】（堕天使） 人間の信仰の対象として、貴族の弾圧の対象になったらしい。しかし『都』にも神を祀る場所が残っていたことから見て、完全な弾圧は不可能であったらしい。

かみ-の-け【[illegible]の毛】（夢なりし） 人間の髪の毛は特殊な獣脂を塗れば無限に長い通信線として使える。死体運搬人（デッド・キャリアー）が加工して売っている。

かめ【甕】（堕天使） この場合は「水でいっぱいに満たした甕」となる。通常の貴族なら、水を張った甕に一昼夜も漬けておけば滅ぼすことが可能。ところが合成人間の闇水軍頭領＝ガリルは、捕えたミスカ・ドレイクを人間なら五、六人も入りそうな大きさの水甕に漬けたうえに、拷問酸を流し込んだ。たらーり、たらり。

かやく-しき-ライフル【火薬式長[illegible]】（堕天使） 不死身のフシアが使用した銃。どう考えても古典的な銃としか思えないが、人間の頭半分を吹き飛ばす威力がある。

からす【[illegible]】（堕天使） ジャン・ドゥ＝カリオールの実験室への来訪者を告げるしゃべる鴉。その両眼には眼球の代わりに紫色の水晶がはめ込まれている。

カラドーマ（双影の騎士） 人間を見つけては雪の中の巣に連れ込み、喰らいつくすという雪魔人。セドク村がある地方の雪山に伝わる伝説。吊り上がった目尻、どろんと死んだような眼球、三日月形に裂けた口とそこからのぞく黄色い歯列。白い[illegible]毛が密生した顔は、凶暴残忍で知能的。群れで行動するらしい。■ 行列を作って雪中を歩く。結局、神祖が作ったものらしい。

ガリ（双影の騎士） セドクの村人。息子をにせDに殺された。ミア・シモンを盾にDを脅したが、両手に白木の針を打ち込まれた。

ガリー（[illegible]姫） サクリ村民。吸血薔薇の洗礼を受けた村人を収容したテントの見張り番。貴族の血に酔い痴れたエレナに唾を吐きかけ、その犠牲となりかけるも、失神するにとどまる。イヤな奴だが幸運な奴。

カリス（風立ちて） ツェペシュ村「学校（スクール）」の生徒でリナのクラスのクラス委員。頭脳明晰、実行力も統率力も抜群。なかなかハンサムではある。ただしリナは、カリスの明るい笑顔の下に沁みつく影みたいな冷たさを嫌っていた。リナとはろくに口をきいたこともない。村娘たちに騒がれるのは馴れているので、リナへのアプローチは皆無。実家は獣の解体屋。『都』に行く権利を狙ってリナに言い寄っていたが、覚醒したリナによって自宅の解体小屋で喉を食い破られ、血をすべて吸われてしまう。

かりそめ-の-きゃく【かりそめの客】（[illegible]合） ①「運命」の数学的解析を可能にし、それを全文明の歴史的必然に重ね合わせた貴族科学院が、その研究成果の発表をすべて中止し、非難の矢面に立たされた時に、全貴族の頂点に君臨した『神祖』が一千年ぶりに姿を見せ、事態を収拾した際にふともらした言葉。大河のごとく悠久に流れる歴史において、ひとときその流れにとどまるうたかたの文明のにない手のことを指している。この『神祖■』のひと言は、貴族の歴史上、全貴族の疑惑と否定の眼差しを受けた言葉として有名である。②チャールズ・ボーモントがチャド・オリバーと共作した短篇小説のタイトル。作品集『夜の旅その他の旅』に収録。ただし、吸血鬼小説でもなければ怪奇小説でもなく、ちょっとSFがかってはいるが、ひたすら〝奇妙な味〟の小説である。

か-りゅう【火竜】 ①**（聖[illegible]歴）** 火を吹く竜。火炎噴射器の材料として使用されている。②**（風立ちて）** その肋骨は軽く、花瓶の材料にされている。肋骨には鋭い刺が突き出している。

「かりゅう-も-いちころ」【火竜もいちころ】（堕天使） 辺境でよく口にされる慣用句。おもに自分の武器の威力を誇る時に使うが、だいたい使った者は逆に自分が「いちころ」になる。

ガリル（堕天使） バラージュ卿の闇水軍を率いる頭領。右眼だけの隻眼。暗視ゴーグル付きのヘルメットを被り、発声装置も兼ねている金属製のマスクをして、息をつぐたびに、ひゅうひゅうという音をさせている。戦争用の合成兵士担当の貴族が創り出した液体人間で、水軍人と呼ばれる。ガリルは貴族を

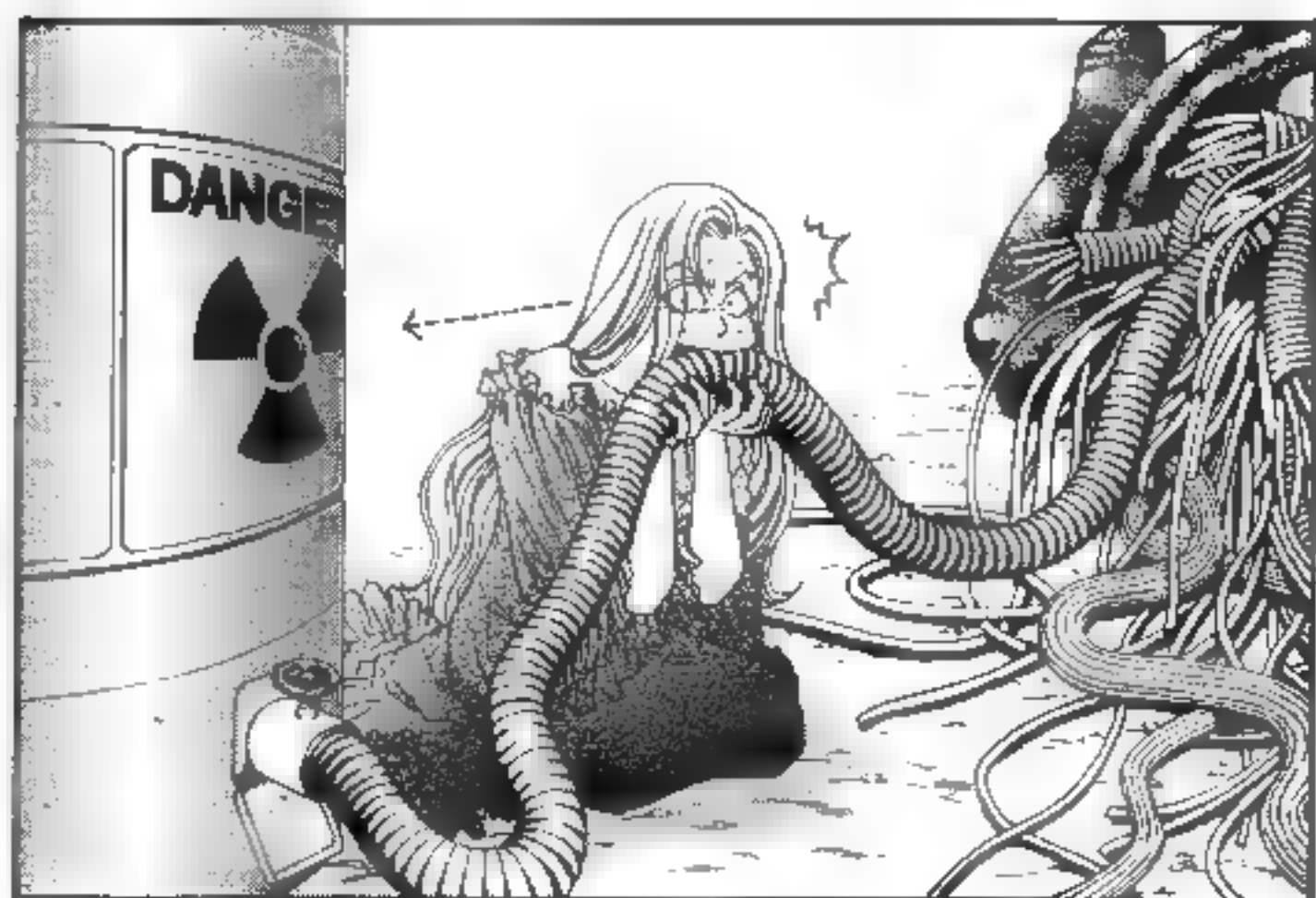
滅ぼすために、貴族すなわちヴラド・バラージュの犬となった。水滴の音を利用した催眠術の一種を使う。その身体は液体細胞で構成され、Dの刀で斬られた顔面をひと撫でで修復する力を持つ。バイロンの光線技に胴体を両断され、ついに癒着せずに果てた。水滴のリズムは破壊デシベル域の音波としても使用できる。その破壊力はシャバラ渓谷をも破壊する。

ガル（想秋■） シャーリイズ・ドアの村人にして大工。Dが村に着いた日の深夜、サラヤ家のひとり息子とともに、娘が東の林檎畑で貴族の犠牲となった。

ガルー（D） リイ伯爵家の御者。通称「人狼ガルー」。黒いインヴァネス姿でラミーカの馬車を操る。遺伝子工学とサイボーグ技術によって吸血鬼の手で世界中に撒き散らされたまがいものもいるが、これは本物。瞬間時速六百キロ、マッハ〇・五。ひとたび獣に変じればヒドラ並みの再生能力をもつが、Dの刃の前では傷を負った。後半、ランシルバの森でダンに襲いかかる寸前にDの剣によって倒される。

かるわざ-し-きょうだい【■業師■■】（堕天使） 大湿地帯の渡しでD一行に出会った軽業師の姉と弟を指す。ぷくぷくと丸顔の少女メイと、スマートな少年ヒュウの姉弟で、年の頃は十一、二。両親はすでに死亡。いままでいた小さなサーカスから呼ばれて『都』の曲馬団に向かう途中だった。Dが「見事だ」と誉めたエネルギー保存の法則に反するような軽業を持ち、空中から攻撃するヒチョウに飛びつき墜落させる。D一行とは一旦対岸の渡し場で別れるが、幽霊騎士団（ファントム）に追われた際に再会。その後もヒュウはフシアの手に落ちたり、メイはフィッシャー・ラグーンに三万の値を付けられたりと、姉弟には波瀾万丈の旅が待ち受けている。

カルンスタイン-ふうふ【カルンスタイン■■】（■天使） 貴族の夫婦。夫はアダム、妻はミルカーラ。白鳥（スワン）型イオン・シップで成層圏旅行をしたり、あと五百年したら柩を地球周回軌道に乗せたいだのと、宇宙マニアらしい。ミスカ・ドレイクが再生する黄金ディスクの記憶情報として登場する。

カルンスタイン-はくしゃく【カルンスタイン■爵】（一般） もっぱらクリストファー・リイ＝ドラキュラ伯爵の吸血鬼映画シリーズで名高い英国ハマー・プロで、影ながらに後期の女吸血鬼シリーズを支えた吸血鬼伯爵。登場作品に『ドラキュラ／血のしたたり』『ヴァンパイア・ラバーズ』などがある。

K. Sakashita

カロリーヌ（妖殺行） バルバロイ三護衛のうちのひとりにして吸血鬼。不気味なほど深い藍色のドレスに身を包み、自分の吐いた毒煙の霧に自分の影を映して幻惑させる〝映し身の術〟を使う。いわゆる偽物の貴族だが、辺境第七地区（セクター）を担当するさる貴族の乳母であった母親の血を引く、女ダンピールであった。機械油を飲んでは巨大な朽ちたロボットの腕を操り、樹液を啜っては木々の枝を己が触手とするなど、貴族と人間の吸血関係をあたり構わず敷衍（ふえん）してしまう物騒な相手である。Dに淫心を催し、ベンゲ亡きあとマシラと共謀してマイエルリンクの裏をかこうとする。

かんご-ふ【看護婦】（死街譚） 移動街区の病院に勤務していた彼女は、Dをローリイの病室まで案内する、ほんの数メートル行く間にテーブルにぶつかりそうになり、ガラスに手を突っ込みかけ、敷居につまずいて、ツルギ医師に抱きとめられた。のちに疑似吸血鬼になりローリイに襲いかかった。

かんそう-けっしょう【■■血■】（夢なりし） 闇市か非合法のもぐり医師の所へ行かぬ限り入手困難。ダンピールが丁錠入りのカプセルをひと瓶買えば、一年は食事なしで過ごせる。Dなら長ければ一週間、二個のカプセルで保つ。

かんそう-けっしょう【■■血漿】（■天使） 貴族の科学力が合成したもので、本物の血と香りも味も栄養分も寸分変わらない。男爵バイロンは食事として、日に三度溶かして嚥下している。

かんそう-コーヒー【■燥コーヒー】（ダーク） 旅人用の乾燥コーヒーは、その素晴らしき味から「黒いトウガラシ」と綽名されている。独特の興奮性物質のせいで、副作用なしの覚醒効果が抜群。地獄の味

とも描写される。

かん-ちょう【館長】（北海魔行）フローレンス村の博物館の館長は、すでにいい年齢のお婆さんだが、スーイン&ウーリンの姉妹は昔からよく面倒を見てもらっており、特にスーインは勉強を教えてもらったりもしていた。

がんめん-しんけい-つう【顔面神経痛】（死街■）ジョン・M・ブラッサリー・プルート八世の見立てによると、Dの顔はどうもそうらしい。

キ

ギイ【双影の騎士】ミア・シモンと同じくらいの身長の、しかし年齢は七十歳以上に見える顎鬚の老人。黒光りするほど垢じみ、皺で埋めつくされているが、実は貴族の下僕用サイボーグ技師で、神祖の命令でムマを造った。神に生贄を捧げて、大施設の地下牢で五千余年も生き延びていたが、自身の妄想が造った〝神〟の高エネルギー波を浴び、ミアに看取られて死亡する。

きおく-でんぱ【記■伝播】（死街譚）吸血した者の記憶が犠牲者の脳内に移るという特異現象。ほとんどは一部分にとどまるが、時には貴族とまったく同一の記憶を持つ犠牲者が誕生することもある。移動街区の工場区で発見された、咬み傷のない失血死体に憑依したプルート八世は、この現象を頼りに〝主人〟の情報を得ようとするが、何も得られなかった。

き-おん【気温】（聖■遍歴）「帰らざる砂漠」の気温は日中で摂氏四十度を越える。昼と夜の差が三十度以上もある――というが、砂漠ってもともとこのくらいの気温差がありますよねえ。

き-かい【■】（夢なりし）金属と水晶と電池の複合体。アラン院長が二時間で組み立てた、シヴィルの夢の中からシヴィル本人を抽出することができる機械。

きかい-へい【機械兵】（■天使）貴族の墓所を守る番兵。生物が決して備えられない残忍さを持つ。同様の役目にはドール・アニマルが存在する。

ぎじ-きぞく【疑似貴族】（一般）貴族の犠牲となり、再生した者。

きしょう-コントローラー【気象コントローラー】（堕天使）山賊のエルデが持っているリモコンで気象をコントロールできる装置。太陽光というモードがある。これをビームに絞って使用できる。温度は調節できる。二万度までの上昇を確認。当然、雨も降らせられるし冬にもできる。

ぎせい-しゃ【犠牲者】（ダーク）貴族に血を吸われながら、何らかの理由で吸血を中断され放置された者たち。通常は村から放逐され、厳重な監視下に隔離されるか、あっさりと処分される。村の中には吸血鬼ハンターなどの専門の処分屋を雇って処分させるところもある。かくして犠牲者は未知の土地へと逃亡し、鬱蒼たる森や山岳地帯の奥、人々が忌み抜いて近寄らぬ太古の呪われた遺跡等に生活の場を求めた。犠牲者は互いに引き合う性質をもっていて、逃亡した犠牲者は自然に集落を形成するようになる。犠牲者は人間より遥かにゆったりとしたペースで歳をとる。ときおり湧き上がる吸血の衝動を、自分の血や同じ犠牲者の血を吸って癒す。この自己吸血行為のために人々に嫌悪され、それゆえ犠牲者の集落は見つかり次第、焼き討ちにされることになる。また喉の傷は、いかなる手段をもってしても忽然と再生するため、犠牲者たちはスカーフや類似の品で口づけの痕を隠さざるを得ない。犠牲者の動きを封じるには喉を掻き切るのが一番よいが、しばらくすると傷口はふさがり、元通りに活動できるようになる。比較的貴族の影響の少ない者たちは、特殊なメイクで喉の傷跡を塗りつぶして人里に近い場所で集落を築く。交流を拒まず、一般人が加わることもある。このような集団は、辺境だけでも数百にのぼる――と、ロザリアの「村」もそのような集団の一つ。

ぎせいしゃ-に-よる-きぞく-の-レベル-しきべつほう-と-ぼうぎょたいさく【犠牲者による■のレベル識別法と防御対策】（風立ちて）T・フィッシャーの著作。『都』の革命政府から禁書に指定されているが、今なお辺境の人々に広く読み継がれている。

ぎせいしゃ-の-さいみん-じょうたい【■性■の催眠状■】（風立ちて）貴族の犠牲者は、一種の遠隔催眠を受けることになる。この状態では、正常時の約七倍の力という、人間の骨格と筋肉に本来備わっている眠れるパワーを発揮する。

ぎせいしゃ-の-たに【犠牲者の谷】（ダーク）ロザリアの仮称「虐殺の村」からダッジ・タウンへ向かう街道の本筋からは外れた途中の傍らにある。初期の犠牲者たちが黒い棺桶の中に横たわり、砂の中に潜んでいる。血の渇きを癒さず、枯木のように干からびて生活しているが、内心の欲望が知らず知らずのうちに旅人を招いてしまう可能性がある。特に月夜の晩はその確率が高くなるという。以前は、実際にはそのような事態は起こらなかったらしい。

ぎせいしゃ-を-ふうじる-こや【犠牲者を封じる小屋】（堕天使）クラウハウゼン村の聖域に建っている小屋。合成建材のドーム状の小屋で、出来合いの品物。入ってすぐ管理人用の小部屋で、テーブル

と椅子と簡単な炊事場を備えている。その向こうが優に三人は入れる、鋼鉄の柵で仕切られた房になっている。貴族の手先の侵入を防ぐために、窓はない。小屋をめぐる柵は二百キロ近い長さがある。

きせつ-やまい【季■病】(双■の騎士) ケンツがかかった病。若いうちでないとかからないらしい。おそらく「草津の湯」でも治らない病気であろう。

き-ぞく-かがく-いん【貴族科学院】(風立ちて) 三〇四六年のα型ブラック・ホール消失に関連して、上層部の更迭が行なわれた。

き-ぞく-せんよう-めいろ【貴族専用迷路】(堕天使) 貴族ですら恐怖する「呪われたもの」のひとつ。東部都市区に存在すると言われる。人間にとっては単なる蜂の巣都市でしかないが、貴族の血を引くものが踏み込めば再び相まみえることの叶わぬ迷宮(メイズ)と化し、二度と戻れなくなる。貴族に対する選択的「神隠し」だというが、なぜそうなるのか、どういう目的があるのか、原因はいっさい不明。「タロスの武器庫」に並ぶ存在として登場。

き-ぞく-てき-とくちょう【貴族的特徴】(風立ちて) 貴族の犠牲者は、その貴族的特徴をおおむね受けついで再生する。つまり血を吸った貴族が変身能力を有すればそれを、獣を使いこなせればその力を受けつぐ。ただし、その能力は純粋の貴族より数段劣る。

き-ぞく-どうし-の-たたかい【貴族同士の戦い】(堕天使) 貴族同士は必ずしも友好的な関係を保っていたわけではなく、戦いに明け暮れていた日々の方が遙かに長い。それゆえ、敗者の逃亡貴族たちは、隣国の救いを求めて亡命し、あるいは人里離れた深山幽谷や地底の洞窟、深海の都市などに逃避した。その名残りは廃墟として残っている。捜索者の放ったメカや逃亡者のガードが生き残り、現在も徘徊している。海人たちを呑み込む大渦や大海魚もそれらの生き残りの戦闘兵器であることが多い。

き-ぞく-と-おなじ-はか【貴族と同じ墓】(夢なりし) そこに入ることは、西暦一万年のこの時代では最大の屈辱である。転じて、辺境における典型的な悪口雑言罵詈讒謗となる。頭に「夜行獣に食われちまえ」をつけると、より完成した悪口となる。

き-ぞく-と-じゅうしゃ【貴族と従者】(ダーク) 貴族が従者を選ぶ場合、その性質獰猛な者ほどアンドロイドのような絶対服従の機械を選ぶ。人間や同類では気に障るからである。

き-ぞく-と-みず【貴族と水】(ダーク) 貴族は水を嫌うが、それゆえに平気で流れ水に近づけ手を入れることができる男は、貴族の女に無条件でもてはやされる。そういう例外的な貴族にヴァルハラ卿やゼノン公ローランドがいる。→【水】

き-ぞく-と-りょうみん【貴族と領■】(ダーク) 貴族が領民を餌食にするのは当然の行為だが、そこには貴族の品性や、人間に対する考え方についての差が大いに反映される。ほとんどの貴族は、血の渇きを覚えるごとに、領民のもとへ使いをやって、人身御供を供出させた。この際、医療的な意味での吸血を行なって安らかな死を迎えさせるものと、半ばのみにとどめて無事、村へ帰すものとがあり、吸血鬼と化した領民を汚らわしいと焼き殺すものと、下僕のひとりに加えるものもいた。また、数少ない貴族たちの例の中には、領民と交渉の上、定期的に血液の供与を受けて友好的な関係を保つ一派、人身御供の見返りとして、その親兄弟に大枚の財宝や超技術の一部を授けるものたちもあった。

『き-ぞく-の-あかつき』【『貴族の暁』】(風立ちて) J・サングスターが著した貴族の歴史書。貴族の残した絵画やホログラフィ映像、立体音楽などを研究して、あえて貴族文化の長所に触れたため、出版と同時に発禁処分となり、サングスターは辺境追放の憂き目に遭った。リナの愛読書。一説によれば『貴族の暁』はサングスターの「貴族文化史三部作」のうちの第二部に当たり、貴族文明の発祥を詳述した第一部『生ける貴族の夜』と、貴族の肉体的特性を医学的に解明した第三部『貴族のえじき』の二冊もすでに書かれていたと言われるが、単なる風説とも言われ、推測の域を出ない。→【死者の暁】

き-ぞく-の-かいが【貴族の絵画】(風立ちて) リナの台詞によれば、「舞台はすべて闇と暗黒、夜の月光と霧――なのに、どうしてこんなに美しく感じるのかしら」と感想される絵画。他にも「棺から起き上がった貴族たちが、太陽に手を伸ばしている絵」が何枚も見られたが、あるものは完膚なきまでに破壊され、あるものは焼かれ、あるものは黒く塗りつぶされていた。貴族の見果てぬ夢だったのだろうか。

き-ぞく-の-しろ-ガイドブック【貴族の城ガイドブック】(ダーク) 貴族の城は中世ヨーロッパの城をモデルにしているため、周辺の地勢、防御構造などは、古い図書や絵巻物を一読すれば大抵は解明できる。数千年間にわたる人間・貴族戦争で、人間が昼間の攻城戦に最も使用したのは、それらから抜粋した中世要塞の三次元解体図であった。これは後年、安価なペーパー・バック版として辺境全体に広がった。Dもサドル・バッグに一冊持っている。ただしギャスケル城は載っていない。

き-ぞく-の-ちゅうせい-し■み【貴族の中世趣味】

〈ダーク〉建築、衣裳、装飾、絵画—あらゆる美術分野における、貴族のゴシック趣味。いかなる土地にも三日あれば『都』なみの大都会を建設し得るだろうに、辺境の荒涼たる山河や暗■な森はそのまま残し、近代的なビルやドームの代わりに、破風(はふ)や尖塔で埋もれたような、古風な城館を造り上げた。道路はすべて石造りであり、時折、超高速移動のために専用道路が建設された。

Y. Amano

きーぞくーのーばーしゃ【貴族の■車】〈堕天使〉衝撃には強いが熱には比較的弱いという風評あり。標準装備は次のようになっている。しなやかな車体は三次元レーダーと超音波破壊板を兼ねている。精緻微妙な彫刻の多くはレーザー・ビームや超小型ミサイル、あるいは槍の穂や鉄の矢を射ち出す発射装置になっている。ドアを閉めれば完全密閉の要塞となる。貴族の位に応じて、科学者が奇想天外の武器と防御装置を車体に装備する。

きーぞくーのーひつぎ【貴族の柩】〈堕天使〉貴族の柩は寝所どころか、住居や避難ポッドになるため技術の粋を集めて作られている。五十年ほど前に行われた廃墓地の一斉調査では三次元空間拡張回路をとりつけた品が二百個近く出土し、うち数個は順調に作動していた。このため死亡した調査員の例は枚挙に暇がない。居住性は抜群らしく、生まれてから一度も柩の外に出てこない貴族もいると記録されている。

きーぞくーのーぼーしょ【貴族の墓所】〈■天使〉貴族たちの墓所は、人間の眼と破壊から隠蔽するため、あらゆる努力が払われた。地下の大墓所は定番として鬱蒼たる森、峨々たる山中、凍結湖の底など、ありとあらゆる場所が改造され、あるいは柩を呑み込んだ。地上を遙か離れた成層圏を漂うステーションにもおびただしい数の墓所が設けられた。昔ながらの風習を尊ぶ者たちも、三次元幻像や、錯覚ゾーン、迷路などを駆使して墓暴きたちを阻止した。一時期、電子機器、化学兵器、生物兵器など貴族の科学技術の粋は、もっぱら墓所を守るために使用された。

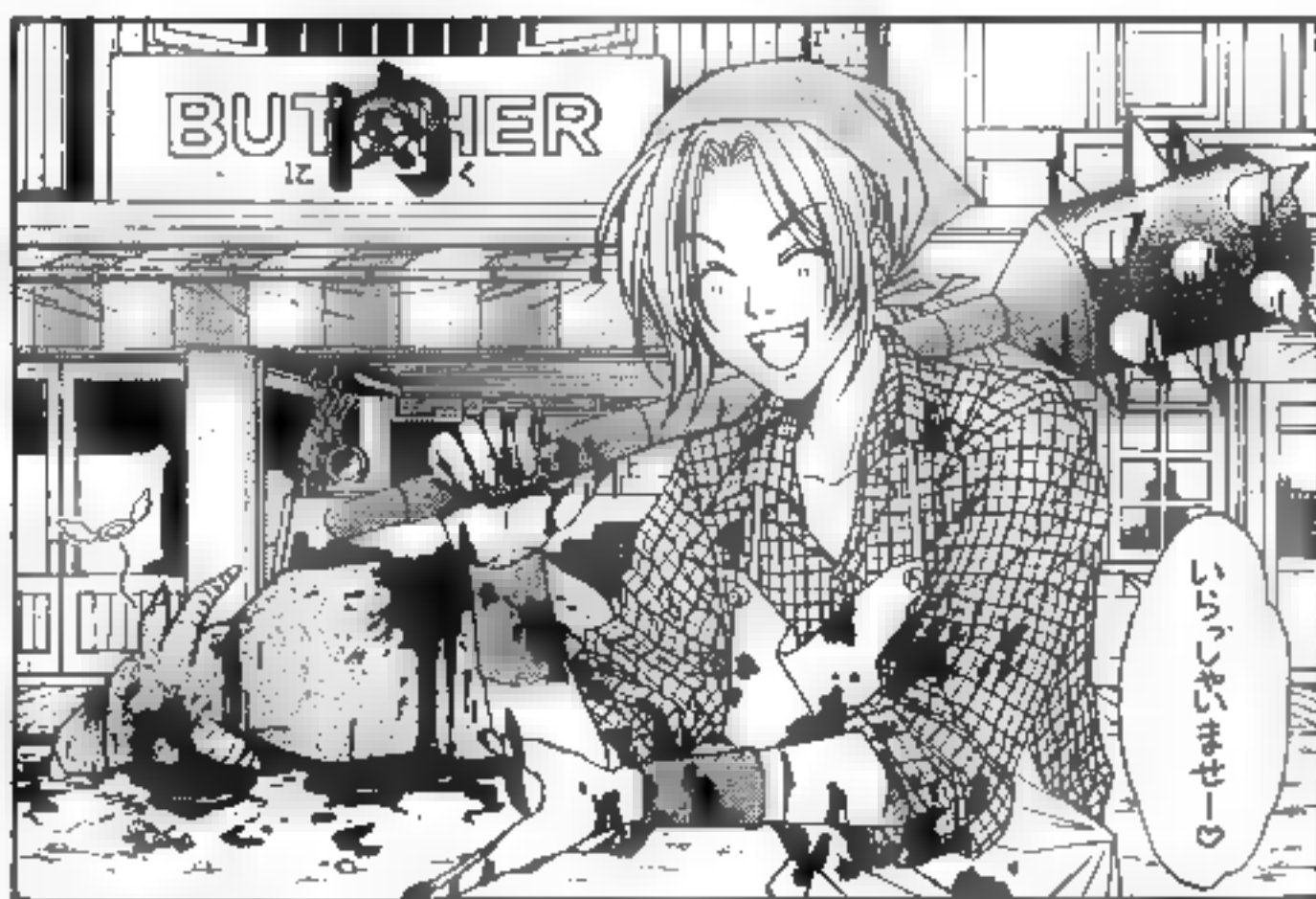
きーぞくーのーみさき【■■の岬】〈北海魔行〉〝貴族の道〟からフローレンス村への道路に入り、さらにそこから海へと寄った場所。名前は、かつて貴族支配全盛の頃、抵抗者への見せしめあるいは面白半分に、貴族が人間たちを投下した名残。その数があまりに大量かつ長期にわたったため、名残は付近の魚たちに一種の条件反射■能を植え付け、崖上に人間の気配がするや、千年を経た今でも崖下に蝟集(いしゅう)し、牙を鳴らして餌をせがむ。修業者グレンと思い出サモンの隠れ場所でもある。

きーぞくーのーみち【貴族の道】〈双影の騎士〉セドク村から西に延びている道のこと。六角形の石とも金属ともつかない物質を敷き詰めている。幅十メートルの貴族が敷設したこの道は、数千年もの間、ささやかな摩耗の痕跡も示さず、大地と海底と空中を縦横に駆け巡っている。

きーぞくーハンター【貴族ハンター】〈堕天使〉貴族たちは吸血鬼ハンターをこう呼んでいる。極端な軽蔑を込めて「汚らわしい屍肉食い(グール)」とも呼ぶ。

きーぞくーをーたおすーとーやくそくーしーよう【「貴族を倒すと約束しよう」】〈D〉Dがダンと交わした言葉。続けて「姉さんだけは泣かしちゃならん」とも言っている。

きーたいーようぶつ【気体■■】〈堕天使〉ディーム村の巨木に棲みつく生物。無数の金色の点が渦巻くような姿であるというが、何のことやらさっぱり分からん。

きたーのーまち【北の町】〈妖殺行〉レイラの素性を

K. Sakashita

知っても、構わない、いつまでも待つと言ってくれた、たったひとりの男＝肉屋の若主人が住む街。いつも雪に覆われてるような街だが、今はどうしているのやら。元気に暮らせよレイラさん。

きーのーくいーかいどう【木の杭街[illegible]】（[illegible]） サクリ村から逃亡しようとする者たちがダイアンローズの四騎士に血祭りに上げられた道。街道沿いには犠牲者たちの白骨が杭に刺さって並んでいる。

キム（D） ランシルバ村の粉屋フー・ランチューの妻。リイ伯爵に襲われ、脈もなく息もしない、しかし心臓だけは動く「生ける死者」となる。夜中に開け放たれた窓の際に立ちながら、燃えるような眼で「ドリス・ランを渡せ。さもなければ、おまえの女房は永久にこのまま生きも死ぬもならぬ」とリイ伯爵の声で宣言した。マッケン夫婦の奥さんも同様の運命をたどっている。

ギムレット（D） 通称のっぽ。身体全体が流線形で、怪魔団の物見役。突然変異の結果、時速五百キロに及ぶ疾走が可能となった超人。超スピードの移動と停止を繰り返すことにより残像効果を生み出し、無数の分身を出現させることができる。Dに挑むが所詮は敵ではなく、時速六百キロのDの一刀で両断され、あえなく死亡。

ギャスケルーだいしょうぐん【ギャスケル大[illegible]軍】（ダーク） かつて第三区管理官として南部辺境区最大の領土を誇った大男の貴族。その凶暴さ、残忍さ、冷酷さは並ぶものがなく、面白半分としか考えられないやり方で領民を苛み、彼だけが解読し得た超古代の技術を領民たちの身で試しては虐殺を重ねた。虐殺した人々の死体に防腐処置を施した上でピラミッド状に積み重ねると、その高さは五百年で地上三千メートルに達したという。他の貴族にも蛮行を働き恐れられたが、異星人との戦争においてその軍勢を初戦で破って「ギャスケルあり」と謳われた勇猛な将軍でもあった。その個性的で孤高の存在は、貴族を調べる人々に対するアンケートでは、第三位を大きく引き離して「興味ある貴族」と「会ってみたい貴族」の万年第二位。ちなみにその両方の第一位は「神祖」。その神祖の覚えはめでたかったとの記述がどの本にも記されている。二百年ほど前、人工血液と称して近隣の貴族に毒を贈り、全員を毒殺。被害者の領地を併合した罪で、『都』の貴族院に、陽光による滅びを命じられる。この決定に反抗して“Gの乱”を起こし、「物質消滅の技法」を駆使して五十年にわたって『都』の軍勢と攻防を繰り広げた。ついに捕らえられ、領土の最高峰ギャスケル峰の頂きにある太古の遺跡で陽光にさらされ、灰と化す。自身、復活の技法を修得していたとも言われるが、今回の復活は神祖との契約によるものらしい。復活後、Dを倒すために七名の凶悪無比の貴族を招集するが、Dとの戦いに敗れ自ら城を崩壊させ逃亡する。その後『邪王星団』で、宇宙から帰還したヴァルキュアに殺され、無残な死体となってDと再会することになる。次も復活できるかどうかは不明。

Y. Amano

ギャスケルーじょう【ギャスケル城】（ダーク） 城の中庭には薬草園を配した草木の大地が広がり、裏庭には大理石の散策路が整備されている。城に同調していない者には内部が迷路と化し、ロザリアを監禁していた塔の最上部には幅二メートル、深さ十メートルもの流水を巡らしているなどの、各種防御装置が施されている。ギャスケル以外はその所在も知らぬ一室に、神祖の巨大な像が安置され、その手に刺客として七人の貴族の名が刻まれた石版を携えている。ただしその中の一人ロザリアの名は、彼女が刺客として覚醒する瞬間まで、判読不可能なほど磨耗していた。城の最上階の屋上は飛行体の発着場となっており、飛行体はその階下に格納されている。ギャスケルが脱出の際、完全消滅を指令し、城は砂で造られていたかのように崩壊した。

ギャスケルーのーばしゃ【ギャスケルの馬車】（ダーク） 六頭立ての馬車。何から何まで巨大。黒馬は通常の馬よりふたまわりは大きく、体長は三メートル。全高も三メートルほど。車体は鋼。すべて怪異な彫刻で埋まっている。馬は自慢の合成馬。

ギャトガヤ・チェリアン（ダーク） 香りで生物の脳を操る誘導草の一種。ギャスケル大将軍と『都』との一戦では、大層役立ったという。ギャスケル城の中庭にいまも咲いている。

ギャロ（双影の騎士） ケンツとともに大陥没に降りてきたセドク村の若者。ミイラ美女に抱きしめられて干からびてしまい、ミイラ美女ともどもケンツの火炎放射器で焼き殺された。ギャロってなんギャロ。

きゅうけいーじょ【休憩所】（双影の騎士） 街や村と

は別に、旅人用にサイボーグ馬やエネルギー・パイクを提供する街道のポイント。

きゅうけつ-か【吸血花】（堕天使）七人の刺客のひとり紅はこべが使う武器。赤い霧状にして相手に吹きつける。その種（?）は血を吸い、真っ赤な花を咲かせる。その根は体内に一メートル近くも張る。花は引き抜かれるときに悲鳴を上げる。毛根の先から噴出する毒素は、ダンピールたるDの血液成分さえ、毒に変える。これはこの花が汚れた血を好むことからの機能。抜き取られる寸前にその毒素の分泌量は十倍に達する。

きゅうけつ-が-にんげん【■血蛾人間】（堕天使）西部辺境に棲息。羽根に黄金（こがね）の燐粉■鎌のような爪と吸血チューブを有する。毒蛾人間（モス・マン）と同種、または同じ物か?

きゅうけつき-ハンター-を-なのる-やから【■血鬼ハンターを名■る輩】（ダーク）吸血鬼ハンターを名乗る輩は多いが、実際に「夜の生き物（ナイト・クリーチャー）」たる貴族を倒した者は一パーセントにも満たないという。

きゅうけつ-き-ゆういん-ざい【■血鬼誘引剤】（堕天使）特にそういう名前で描写されてはいないが、吸血鬼だけを惹きつける合成薬品。貴族はこの匂いを嗅ぐと血を吸いたくてたまらなくなる。早い話がマタタビであります。ヒュウ少年を探しにきた男爵バイロン・バラージュに対して刺客フシアが使用した。バイロンの腰が抜けたかどうかは不明。

キュウシュウミミズ■**（夢なりし）**強力な分子振動で土砂を分解し、細胞核に備わる「口」で吸収する五十センチの大ミミズ（長さか太さか?）。旅人の足首に絡みついて溶かしちぎり、首や心臓の急所に飛びかかる。地中から現われ、群れで行動する。

きゅう-たい【球体】（聖■■歴）砂漠の町から五キロも行かぬ地点でD一行が遭遇した怪生物。「帰らざる砂漠」を行くものの前におびただしい数で現われ、空中を漂ってくる。半透明の球体で、直径約四十センチの真円形。内側で液体らしい多彩色の塊が柔らかく蠢いている。その正体は「砂漠」がD一行の居場所を知るために送ったもので、砂漠の主の"眼"の役割を果たす、言わば探査プローブであった。特に武器はなく、ひとつはバイパー婆さんのラッパ銃で破壊された。

きょうか-ビニール-の-コート【強化ビニールのコート】（ダーク）輸送隊のゴルドーたちが使用したコート。フードを被って口元まで覆うと、内蔵されている圧縮ボンベから酸素が注入される。放射能を撒き散らす生物相手や毒ガス地帯を通過するのに必須のアイテム。

きょう-じりょく-じゅう【■磁力銃】（堕天使）山賊が装備していたドライヤーに似た銃。サイボーグ馬の制御チップを破壊するのに使用。

きょう-き-さんみゃく【狂気山脈】（ダーク）毒学者グレートヘン博士に実験のために毒を盛られて死にきれない貴族が、五百万人から閉じ込められているという場所。神祖すらその所在は知らぬという。

きょこう-つうろ【虚構通路】（堕天使）貴族の墓所を守る装置。侵入者を異空間へと導く。同様の装置に永劫通路がある。

ギャラクシー-エネルギー-すいしん-せん【銀河エネルギー推進船】（風立ちて）政府が計画している恒星間進出計画用の宇宙船。

ぎょう-き【暁鬼】（北海■行）ギリガン五人組のうちのひとり。南地区（セクター）の人種とも見える顔立ちの男。通称もまたの名もない代わりに、もうひとつの性別と姿態とを持つ。すなわち、上半身は腰までかかる金髪に真っ赤な眼を持つ妖しき女性（にょしょう）、下半身は二股に分かれた銀鱗の尾を持つ人魚である。マインスター男爵の研究成果のひとつが暁鬼その人であった。

きょだい-カタツムリ【巨大カタツムリ】（風立ちて）サイラス・ファーンが飼育するガード・ピーストのうちのひとつ。

きょだい-ねこ【巨大猫】（堕天使）ディーム村の巨木に棲みつく生物■稲妻を走らせる。

ギョティーヌ（ダーク）辺境の村で公開処刑に使用される処刑器具。■高さ五メートルほどの板のてっぺんに重い■の刃が据えつけられ、執行係が支えのロープを切り落とすと、刃が死刑囚の首めがけて落ちる。名称の由来はこの器具の発明家の名前を取ったとも、発明家自身もギョティーヌの犠牲になったとも言われている。死刑台に昇って行く階段は十三段。クラクフ村でロザリアと輸送隊三人組がその露と消えかかった。真面目な話、フランス革命で悪名高い断頭台はフランス語で「ラ・ギョッティーヌ」と申します。英語で言えば、もちろんギロチン。ギロチン帝王も大悪獣ギロンもこれが語源。

きょ-りゅう【巨■】（風立ちて）全長二十メートルに達する凶暴無比な野獣。辺境では骨から鱗まで使用できる貴重な生物。装甲を有するが、その強度はマグナム・ガンで撃ち抜ける程度。ひとたび手にかかれば骨の一かけらまで利用される。ツェペシュ村「学校（スクール）」にあった筆立てや屑籠も、巨竜の牙や骨から作られていた。

ギリガン（北海魔行）クローネンベルクで商会を営む街の世話役。体重三百キロの人間ナメクジ。自力

Y. Amano

では動くことができないため、地上一メートルの鋼の檻に身を横たえたまま移動する。檻には鉄輪と関節を組み合わせた支持装置がついており、それなくしては、手足の動きもままならない。ジャバ・ザ・ハットとハルコネン男爵を一緒くたにしたようなものか。あるいは山田風太郎のファンなら茶屋四郎二郎と言うかもしれない。糸のように細い眼、思うさま左右に広がった鼻と口、分厚い唇。そういう押し潰されたガマガエルみたいな顔が直接胴にめり込みながら、スーパー・サイズの三つ揃いを着て、僅かな頭髪を七三に分けている。甲高く粘ついた声で喋るあたりは、大映時代劇の上田吉二郎か。いったん死んだと思われたが、密かな〝血の探求者〟ゆえに一命を取り留め、フローレンスの村では大蟹ロボットを操ってDと二度対決し、二度逃げおおせた。

ギリガン-ご-にん-ぐみ【ギリガン五人組】（北海魔行） ギリガン商会の用心棒。ギリガンの屋敷の[illegible]れに住む——というか閉じ込められているというか。ギリガンのために働いているという風はまったくない——どころか、ギリガンから〝さん付け〟で呼ばれているくらいである。傀儡のシン、悟られずのツイン、思い出サモン、国士エグベルト、そして暁鬼の五名よりなるが、正確に言うと五人組ではない。読者ならとうにご存じのはず。ギリガンの土地財産すべてを交換条件に珠の奪還を命じられ、互いを出し抜こうとひそかに画策しながら、辺境最北端フローレンスの村に赴く。

きり-さき-ジャック【切り裂きジャック】（風立ちて） ロンドンの貧民窟イースト・エンドを徘徊中に、マリー・セレスト号の乗組員と同時に閉鎖空間に呑み込まれる。

きり-じょう-しん-にゅう【霧状侵入】（[illegible]街[illegible]） 移動街区町長の娘=ラウラを襲った吸血鬼が具えていた、貴族としての基本能力。柿色のTシャツにしわだらけのジーンズ姿ながら、まだ若く筋骨たくましい男であったが、ツルギ医師に白木の杭を打たれ死亡。貴族の下僕ではなく疑似吸血鬼である。細胞の記憶は完全に抹消されていた（Dの左手談）。

ギリス-しょうしょう【ギリス少将】（ダーク） 復活貴族にしてギャスケル大将軍が呼び寄せた七人の「招きびと」の一人。将軍の技術によって夜の闇を身にまとい、白昼も行動する。自らを影に変え、影に潜む闇人。闇人となったギリスにくぐり抜けられたものは細胞が焼け爛れ、心肺機能も停止する。また、相手の影を取って動きを封じる「影取り」の技を持つ。齢四百五十三歳。レディ・アンをやや歪んだ形ながら愛しているが、徹底的に拒絶されている。にもかかわらず、捕らえられロカンボール卿に殺されそうになった彼女を抱えて逃亡。ギャスケルとロカンボールを敵に回して戦ったものの、自らの技をロカンボールにコピーされ、最後は卿の長剣の影に自分の影を貫かれて敗れる。

きり-の-むら【[illegible]の村】（[illegible]典） 正式名称「D—霧の村」。天野喜孝画集『吸血鬼ハンター〝D〟』のための書き下ろしD短篇。貴族の実験台となった霧に閉ざされた村の悲劇を描く。やはり成功例はただひとつなのだ。

きんいろ-の-たてごと【金色の竪琴】（[illegible]歴） クレイ・ビューローが武器に使う琴。弦が奏でる音で黒い蝶を消滅させ、不死身の兵士を塵に変えた。かつてクレイがある貴族を殺した際、その音楽堂から手に入れた品物で、本体は黄金、弦は銀でできている。武器として使う以外に、もちろん楽器としての本来の性能も高い。

きん-の-べ-いた【金の延べ板】（堕天使） フィッシャー・ラグーンがザナスとの取り引きで使った——というか、ザナスがごねたのでしょうがなく三枚に増やして出した。

ク

グール【[illegible]食い】（D） 吸血鬼たちが作った凶獣、もしくは核戦争が生み出したミュータントのひとつ。

くい-うち-じゅう【杭撃ち銃】（風立ちて） 直径五センチほどの銃身の周りを囲む杭の尻に発火薬をつけ、小型モーターで連射する火器。遠距離では効果が薄れるが、近距離では絶大な威力を発揮する。

くい-うち-じゅう【杭射ち銃】（夢なりし） 機関部内のガス・ボンベが秒速七百メートルの速度を五百グラムの杭に与えて射ち出す銃。クルツ保安官がDに対して使用。

くい-うち-じゅう【杭打ち銃】（ダーク） 高圧ガスの力で白木の杭を毎秒五百メートルのスピードで撃ち出す。クラクフの村人たちが手にした杭打ち銃は、

三本の杭をレディ・アン聖騎士の胸に同時に打ち込んだ。

クィン（ダーク） ハンター集団グレイズの一員。ロザリアを「処理」しようとしてDに両腕をへし折られた。ヴァルハラ村の出身でそこに女がいると語り、なんとかDとロザリアの一行に加わる。ギャスケル大将軍を目撃し、いわんや本人から直接名前なんぞを聞いてしまったがために、ドネリコ村の広場でDにその様子を説明している最中、将軍の「物質消滅の技法」のために消え去ってしまう。

くうあつ-じゅう【空圧銃】（ダーク） 辺境商工ギルド輸送隊の護衛武装のひとつ。ハルドゥ村を街道封鎖していた連中も持っていた。

くうかん-わいきょく【空間歪曲】（D） 麗銀星が持つ能力。四肢を除いた部分に限り、自らの意志で体内の空間を歪めて四次元の通路を作り、それを敵の身体に繋ぐことができる能力。つまるところ、頭部及び胴体に受けた敵の攻撃は、すべてそのまま敵の身体に撥ね返ることになる。このため、麗銀星を指して空間歪曲人間（スペース・ワープ・マン）と呼ぶことがある。

くうしょく-ちゅう【空食虫】（ダーク） メフメット大公が操る全長一メートル近い巨大な赤色の虫は、自分の身体を食べる「我食らい」ののちに消滅し、代わりに存在した空間に「穴」を穿って周囲のあらゆる物質を呑み込んでしまう。具体的に言うと、この虫が現われてむしゃむしゃ始めたら、あたり一帯はエアロックを開け放った宇宙船の内部みたいになってしまうということ。この「穴」を埋めるにはもう一匹の空食虫を放り込むしかない。また、その「穴」に呑み込まれたものは時空の彼方に飛ばされてしまうが、それにはきっかり十秒の余裕があり、タイムリミットの瞬間に同じ「空食虫」による穴を別の空間に発生させれば、吸い込まれたものは自動的にそこから排出される。ロザリアと輸送隊三人組、その四人を処刑しようとしたクラクフの村人たちも処刑台（ギロティーヌ）もろとも呑み込まれてしまうが、Dの左手の超人技によって無事に別の穴から生還した。タイミングがずれていたら、原形質に逆戻りしていたところだ。空食虫を飼い馴らすのは難しく、いつ自分を食い始めるかも予測不可能。捕獲者が穴に吸収されることも数知れない。そのため先天的に虫扱いに秀でた血筋の人間以外は飼育に手を出せず、その扱いは秘術秘法の典型とされている。

くうちゅう-ごうとう-だん【空中強盗団】（ダーク） 生物の内臓らしき袋にガスを詰めた気球を身体に括りつけ、身体の前後につけた小さなプロペラで飛翔方向を制御する強盗団。獲物が貨車のような大重量物でも気球を取りつけ、浮遊力の強烈なガスで空中に吊り上げて奪い去る。ジャルハ村に着いた貨物列車を襲撃して、Dやシューマ男爵、駅の役員たちに撃退された。

クオレ・ヨーシュテルン（風立ちて） リナたちと一緒に消えたツェペシュ村失踪事件の子供の一人。農夫ハンス・ヨーシュテルンの息子。十年前の失踪当時の年齢は八歳。現在は十八歳か。村に帰ってきてから受けた検査のために発狂した。名前の印象とは裏腹の身長一九〇センチ体重百キロ、うつろなまなざしの大男。瞳の色は青。精神エネルギーの増幅制御能力を持ち、エネルギー生命体を操る。十年前の実験の結果。得た能力の代わりに知能低下を引き起こしたが、吸血鬼として目覚めたあとの本当の顔は別人のように理知的な表情をたたえる。丘に普通に登れる。廃屋にひとり暮らし。のちにサイラス・ファーンの家に連れて行かれ、超高密度のエネルギー生命体を操る。森にある実験室への出入口を見つけて、タジールを解放してしまう。失敗作ゆえ、溶け崩れたらしい。

クスカ（薔薇姫） サクリ村の刀鍛冶ブラスコの息子。他の村人と同様、薔薇姫の〝花の祝福〟を受けるが、ママ・キプシュの調合した薬により一命を取り留める。

くすり-うり【薬売り】（双影の騎士） 旅人相手に街道を習慣的に往来する。赤白青の三色まだらの幟（のぼり）を背中から頭上へ高々と差し、白い薬箱をぶら下げ、白衣を着ている。

くび-いち【首市】（堕天使） 南部辺境区のある貴族の館で、年一回開かれる市。人間や獣の生首が売買されるが、ダンピールの生首は最も安価でひと山いくらで取り引きされる。これは貴族のダンピールに対する蔑みが反映されているからである。

くびすじ-の-キス・マーク【首すじのキス・マーク】（風立ちて） 貴族の口づけを連想させるため、夫婦間でも禁忌とされている。

クビトリ（薔薇姫） シャンバラの森に棲息する、額と下顎が異様に突き出た巨猿。自分の首を他の生物の首とすげ替えることによって老いた肉体のみを取り替え、永遠に近い生命を得ることが可能。サクリ村バイク青年団のニシューがこの犠牲となった。

くび-なが-りゅう【首長竜】（堕天使） 西部辺境大湿地帯に棲む怪物。吸盤のような口と三つの目を持つ。渡し船の航路の東に巣があるらしい。生物の体液を常食とする。時速百キロの船にも負けない水中移動速力を誇る。

くみ-たて-しき-グライダー【組み立て式グライダ

ー】（吸天使）Dがヴラドの館に侵入する際に使用した。フィッシャー・ラグーンが用意したもので、翼長六メートル、胴長四メートル。翼に貼った飛翔獣の鱗が風力と速度の調整を容易にし、子供でも楽に長距離の空の旅を愉しめる。Dはこの翼だけをサイボーグ馬に装備し、殺戮の平原の大穴を飛び越えた。

くも【雲】（風立ちて）紫に光る雲。護衛獣（ガード・ビースト）の一種にして電気獣。サイラス・ファーンが操る。

くも【蜘蛛】（風立ちて）八本の脚の長さが優に三メートルを越す巨大な蜘蛛。護衛獣用鳥籠ほどのバスケットに収まる。サイラス・ファーンが操る護衛獣の一種。

クラーケン【大■魔】（D）吸血鬼の遺伝子工学と生物工学で作られた物もある。

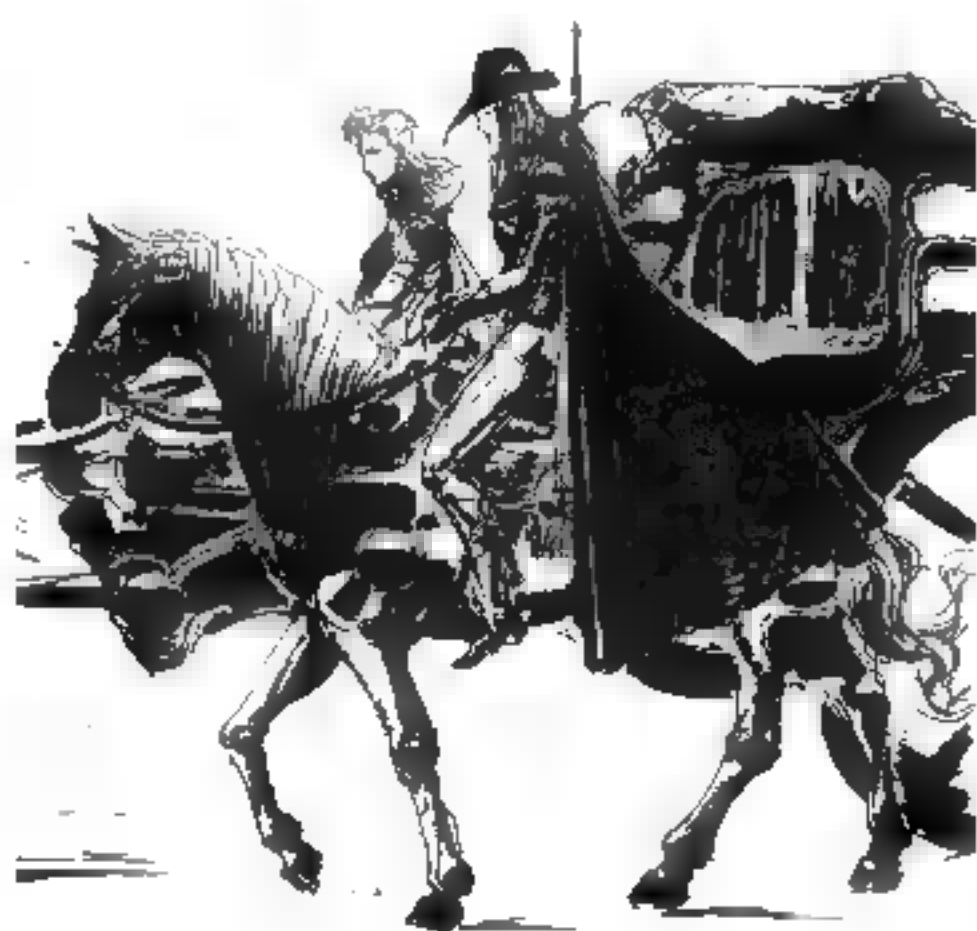
クラーケン【大怪■】（■天使）全長百キロにも及ぶ。貴族同士の戦いの中で作られた。

クラーケンきんか【クラーケン金貨】（北■行）辺境相場の五倍の金貨。逆しまのトトがウーリンに持ちかけた博打の賭け金がクラーケン金貨だった。

くらいやそうきょく【■い夜想曲】（原■）正式名称『D―昏い夜想曲』。シリーズ第一別巻。中篇集。あるいはその表題作にしてシリーズ初の中篇「D―昏い夜想曲」を指す。雑誌『獅子王』一九九一〔平成三〕年十月号／十一月号掲載。二歳の時に聴いた貴族の歌の〝謎〟を求めてアニスの村を訪れた少年ライの運命を描く。

グラウ（■■姫）倉庫を改造してサクリ村の外れで呑み屋を営んでいる。グラウの呑み屋はサクリ村バイク青年団の格好のたまり場でもある。

クラウス（北■■行）船着き場のある港町。ギリガン＝大蟹ロボットの脅迫に動揺した村長がスーインの家に駆けつけた時、留守にしていたスーインの買い物先としてDが告げた町の名。もちろん買い物に行っていたはずもなく、スーインは〝貴族の岬〟から二十分ほどの隠れ家に身を潜めていた。

クラウハウゼン（吸天使）男爵バイロン・バラージュの目的地。Dとバイロンが出会った定期乗り合い馬車停車場から西へ二百キロ、辺境の果てにある村。その向こうは数千メートル級の山脈がそびえる。フィッシャー・ラグーンの館があるため、この地方一の豊かさを誇っている。貴族領主がいまだ健在であるにもかかわらず、村人が生き生きと夜の生活を送っている辺境ただひとつの村。西の外れに聖域が一箇所ある。同じく廃棄された倉庫群もあり、そのうちのひとつがクロモの住処。村外れにはラグーンがメカを製作するために作った広大な製造工場が広がっていた。ラグーンの私設治安部隊が村を統括しているため、治安官は形ばかりのお飾りにすぎない。

Y. Amano

クラクス（ダーク）ギャスケル大将軍の浮動領地（移動領地）――「さまよえる大地」のなかにある寂れた村。クラクフ村を目指していたDと輸送部隊三人組は、いつのまにか見たこともないクラクスの村に入っていた。

クラクフ（ダーク）辺境商工ギルド輸送隊がジェルキンの次に向かった村。ジェルキン村からは丸二日の道程で、辺境ながら数百人程度の人間が住んでいる。その周囲は柵で囲われ、その直径は狭いところでも数キロに及ぶ。

くらげ【浮海母】（妖殺行）辺境に棲息する食肉性の浮遊生命体の通称。二十年に一度の割で生まれるその大型のものは、直径二キロに及ぶ身体でひとつの村を覆い、生命体だけを選択的に溶かし、吸収してしまうと言われる。

クラコウ（北海■行）北の辺境フローレンス村のお爺さん。出刃包丁をもって鮭の首を切り落とすさまは村人から名人芸と賞賛される。吸血鬼と化した村娘ハンナがグレンにその首を落とされた時、クラコウ爺さんの名人芸を思い出したかどうかは不明。

グラディニアじょう【グラディニア城】（■遍歴）タエが連れ去られ、下女として働いていた貴族の城。ヴェネッシガー侯爵の居城（推定）。特殊な用途を持っていたというが、バイパー婆さんによっ

てほとんどの防御■構は潰され、城主も滅ぼされている。

グラディニアーじょうーのーきぞく【グラディニア■の貴族】（聖魔■歴） タエを「隠されっ子」にした張本人。城に乗り込んできたバイパー婆さんに棺を出る途中で心臓に杭を刺され、三時間後に息絶えるまで無茶苦茶に暴れまわった。

グラフ（双影の騎士） ケンツとともに大洞窟の大施設に降りてきたセドク村の若者。足跡をつけるために靴底に仕込んだ蛍光塗料の色は青。

クラム（戦鬼伝） 半月ほど前、シュラト村のライアの家に現われ、そのまま居座ってしまった三人衆のうちの一人。ライアの家の倉庫で「やるぞ」との掛け声一声、いきなりDの白刃に腰から上下を分けられてしまったが、腰上胴部にある本体が無事な限り、甲殻類のようにいくらでも手肢のスペアが——首さえ生え換わってくる怪人。森の中でDを待ち伏せするが、本体を縦に割られ、今度こそ倒されてしまう。

クラリス（堕天使） Dを護衛する黒マスクの一団のメンバーで唯一の女性。赤い髪の持ち主。公爵シェーン・グリードとの戦闘で死亡。クラリスとは「明晰な光」というのが語源らしい。ありがとうレクター博士。

クラリス（双影の騎士） セドク村の遥か北に住む占い師でミア・シモンの母。セドク村の事件に関わる邪悪な力とDの来訪を予知するが、その直後に血を吐いて倒れた。にもかかわらず、一人娘のミアにセドク村へ行くようにと命じる。ミアがセドク村に着いた頃には、すでに確実に死んだものと思われる。クラリスとは「明晰な光」というのが語源らしい。ありがとうハンニバル博士。

グーリッツ（堕天使） 西暦八〇〇〇年代に出現した貴族。またの名を〝退廃者〟グーリッツと呼ばれた。貴族でありながら、吸血行為のおぞましさについて五百冊もの著作を残し、自身もそれを中断すべく、あらゆる行為を試みたがことごとく失敗に終わり、自説を撤回してすべての著作を火に投じたという。飢えの渇望に勝利した貴族が皆無であることの証左のひとつ。

クリーナー【■空■除■】（ダーク） 正しくは瞬間転移除去装置と呼ぶべきもの。貴族たちが持ち前の潔癖さから、戦闘後の死人兵の死体や兵器の残骸を宇宙空間へ放出するために使用した。金属の棒の先端から細い管が伸びて、骨組みだけのパラボラ・アンテナのように広がる。そのアンテナの中ほどが宇宙空間につながっており、見苦しいものはすべて宇宙の彼方へと瞬時に消える仕組みである。ギャスケル城の倉庫からこれを拝借したDは、行く手に広がる炎地帯（フレア・ゾーン）を次々と吸引して進んだ。これを使えば、何人も逃れ得ぬと言われるギャスケル大将軍の浮動領地からも脱出可能なため、さすがの将軍もちとびびった。

グリムーヘン【グリム鶏】（風立ちて） 三日に一個、金の卵ならぬウラン塊を産む。憑依能力のある妖精を使うと一日に三個産むようになる。

クルツ・ボーゲン（夢なりし） シヴィルが眠る「村」の治安官。Dとは病院のロビーで初めてすれ違った。清潔だがつぎはぎだらけの綿シャツとズボンに身を包んだ中年男。シヴィルの学校時代の恋人で、病院へは毎日見舞いに来ているが、現在はアイ・リンと結婚している。本人は雑貨屋になるつもりだった。年齢四十八歳。体重七十一キロ。身長一八九センチ。十文字の傷は五年前と八年前に毒が付いた剣での傷。左胸下に四つ、腹筋のど真ん中に三つ、弾痕と矢傷。肩甲骨の下一杯に焼け爛れた紫の肌。こんな傷を負いながら、二十年間で二日しか治安官の仕事を休んでいない律義者。八年前、拳銃とレーザー・ライフルで武装した札付きの凶悪犯三人組を相手に太陽銃（ソル・ガン）で立ち向かい、腹に銃弾を喰らいつつもたったひとりで三人を仕留めた過去を持つ。最後は夢の主の望みにより、貴族になってDに挑むが、その長剣の前に果てる。シヴィルを守る黒衣の弓使いの正体だった。

くるま【車】（堕天使） フィッシャー・ラグーンの愛用車は、甲虫（カブトムシ）のような、ずんぐりした乗り物。エンジン音がすることから、使用しているのは内燃機関か？ それでも油圧ブレーキやガル・ウィング・ドアを装備している。

グレートヘンーはかせ【グレートヘン博士】（ダーク） ギャスケル大将軍が呼び寄せた復活貴族にして七人の「招きびと」のひとり。まるで『都』のオペラ座の大舞台を圧する偉大な歌姫のような声と、それが醸し出す絢爛たるイメージを有する女博士だが、二歳の時に父親の趣味から盛られた毒で地獄の苦しみを味わい、しかしそれを克服する喜びを魂に得て三千年、貴族の歴史のなかで「生まれて来ない方がよかった女」と評されるほどの毒学者として恐れられた。五万人以上の貴族を実験台に毒の研究を続けたが、神祖も知らぬ狂気山脈の何処かには、その百倍もの貴族がうめき苦しんでいるという。ために神祖から最高苦の刑を科せられ、得意とする安楽死術もままならぬ苦痛刑に喘いでいた。敵も味方も信用せず、どこにでも「毒風」を撒き散らす物騒な毒薬

婦人だが、ギャスケルがDから受けた刀傷の痛みを瞬時に癒すほどの技も併せ持つ。喉から吐き出す長さ三十センチの針には直径一ミリにも満たない半透明の管が繋がっており、突き刺した相手に体内から直接毒を注入する。クラクフ村の女村長ユッタ・カミュに化けてゴルドー、セルゲイ、ジューク、そしてロザリアにそれぞれ異なる種類の毒を飲ませ、その息を毒息に変えて密かにDに吸わせた。さらにもう一種類の毒を吸わせることで秘技「黎明」をDに仕掛けたが破られ、自らが光に焼かれて白骨となり灰となって滅びる。

クレイ・ビューロー（**聖[illegible]**）外（アウター）辺境一の戦闘士ビューロー兄弟の弟。ブルー・ジャッカルの表層皮で作った深いブルーの鍔なし帽と、同色のシャツでたくましい身体を包んでいる。二十歳そこそこだが、気の弱い男など睨み殺せそうな凶暴顔。黄金の胴に銀の糸を張りめぐらせた竪琴を右腰に括りつけている。竪琴は、あらゆる物質の分子構造を破壊する超音波発生装置。指向性の破壊音波も使える。竪琴は倒した貴族の音楽堂で入手したもので、弦は銀、本体は黄金。吟遊詩人（トラバドゥール）顔負けの声量の豊さと音程の確かさを持っている。タエをめぐって農夫ランスと素手の殴り合いをして倒される。Dとの決闘で額に木の針を打ち込まれてしまうが、その直前、借りを返すために、Dを狙ったソーントンの殺し屋を竪琴で倒した。

クレイボーン・ステイツ（**妖殺行**）辺境第九八区の首都所在地。かつて宇宙空港（スペース・ポート）があったことで知られる。マイエルリンクと〝少女〟の逃亡目的地。ヴィシューヌの村からは進路を北へ取るのが最短距離。途中、バーナバスの街を通過する。付近には「帰らざる砂漠」もあったはずだが、はて、みなさんどうしたのであろうか。

グレコ（**D**）ランシルバ村長ローマンの息子。年の頃二十四、五の赤毛の大男。ドリスにしつこくつきまとうが、その度にドリスに赤恥をかかされている。親の権力をかさにきて、仲間とつるんでいるゴロツキ。親が金を持っているので、戦闘服などの『都』の品を手に入れることができる。伯爵が麗銀星に渡した「時だましの香」を盗み、ラミーカに襲われたドリスを救出する。その後、麗銀星と手を組みDを倒す。最後はラミーカに全身の血を吸われ死亡。本能の赴くままに生きる人間の代表である。

グレコ・ローマン（**複合**）①アマチュア・レスリングの型の一つ。②ランシルバ村の村長とその息子のこと。転じて、いやらしい権力主義親子の譬え。

クレム（**北海魔行**）フローレンス村の若者。赤髪の娘。リカルドやハンナと夜光草を摘んでいる時、貴族と化した修業者グレンと思い出サモンに遭遇、ドとなりスーインを襲う。

グレン（**北海魔行**）辺境の〝修業者〟。ペレスを倒して娼館を脱出したトトを斬り倒した直後、Dの美影身と遭遇、執念にも似た敵愾心を燃やす。口笛を吹きつつ相手の剣を自分の剣に追随せしめる捨て身の秘技〝ローレライ〟を駆使するもDには敵わず、ついには貴族＝吸血鬼となってDの前に立ち塞がる。ギリガン五人組のひとりサモンとは凄艶なる男女の関係に陥るが、これもひとつの究極の愛の形なのかも知れない。

くろい-ちょう【**黒い蝶**】（**[illegible]歴**）文字通り、色の黒い蝶。「帰らざる砂漠」に棲息し、数千数万匹の大群で群がる。突然、銀色に輝き、群れをなして

Y. Amano

明らかに高度の意図と知性による幾何の図形を描き出す。Dは長剣で、パイパー婆さんは『都』特製の火炎噴射機で、クレイ・ビューローは黄金の竪琴で、それぞれ撃退した。特に武器はなく、ただDたちにまとわりついた。「球体」同様、D一行の居場所を知るために「砂漠」が放ったもの。銀色の模様を見たものは脳から特殊な電波を出し、その電波で「砂漠」は侵入者の居場所を知ることができる。

くろい-スカーフ【**黒いスカーフ**】（**風立ちて**）溶け崩れるリナ・スーインの顔に、Dはそっとかけてあげた。Dの持ち物だったか？

くろい-てぶくろ【**[illegible]い手袋**】（**ダーク**）辺境商工ギルド輸送隊のジュークは、同行するというDに思わず右手を差し出して、無駄と悟った瞬間、しかしDは「よろしくな」という言葉とともに黒い手袋をした右手をしっかりと握り返してきた。寡黙なヒーローはどんな返礼をしても様になる。

くろい-ふち【**黒い淵**】（**北[illegible]行**）フローレンス村の森の北にある沼。傀儡のシンと国王（キング）エグベルトと暁鬼がDを誘い出した場所。

クローネンベルク（**北海魔行**）辺境の中央から二百キロほど北へ入った平野部に広がる、人口三万の小地方都市。辺境各地から送られる物資の集散地として栄える中継地点。珠を持ってフローレンスの村を出たウーリンの目的地。

グローベック（**妖殺行**）マーカス兄妹の三男坊。通称グローヴ。常に死にかけた病人みたいな男だが、ひとたび発作が起こるやもうひとりの〝彼〟――生気に満ちた青年が現われる。緩やかなウエーブの前髪が額にかかり、無邪気な瞳と血色のよい健康そのものの顔を持つ青年は、全身から精確無比のパワー・レイを放射して敵を一瞬のうちに殲滅する。ヴィシューヌの村では迫りくる五百人の吸血鬼を瞬時に掃討した。マーカス兄妹にとっては必殺の最終兵器みたいなものだが、一回の発作で消耗する体力は測り知れず、マイエルリンク追跡行が続くうちにグローヴの本体は本当の死体と化してしまった。最後二回の発作で、グローヴの中の〝彼〟は〝少女〟の笑顔と絶望を立て続けに目撃してしまう。

くろ-■し【**■士**】（**■■**）ダイアンローズの四騎士のうちの一騎にして副将格。約四百五十歳。ともすれば奮い立ち荒ぶる青騎士や紅騎士を前に常に冷静を保ち、心技両立の騎士道精神に燃える真の騎士である。逃亡者を血祭りに上げる紅騎士、青騎士を前に「我らは鬼畜ではないぞ」とたしなめ、村娘エレナを〝戦士〟と認めるあたりにもそれはうかがえよう。白騎士に右腕を落とされ、Dに左腕を落とされてなお生き永らえ、薔薇姫が両肩に植えた放電薬をもって再度Dの前に立ち塞がる。敵ながらまことに天晴れな奴である。

クロケムシ（**堕天使**）その大群は針だらけの毛布のような外観をとる。クラウハウゼン村手前の平原で平原ネズミや三つ首イノシシ、土掘りバイソンなどとともに大暴走――レイジング・ランを巻き起こしたが、大地を割って出現した地虫(アースウオーム)の巨大な舌にことごとく呑み込まれてしまう。

くろ-マスク【**黒マスク**】（**堕天使**）Dの護衛を依頼された五人組の容貌の総称。そのリーダーは頭から黒いマスクを被った壮漢。マスクには眼どころか口さえも開いていない。リーダーはブロス。他のメンバーはゼッカ、シュウマ、バイアン、クラリス。全員、ことごとくグリード公爵との戦闘で果てる。

クロモ（**堕天使**）もとジャン・ドゥ＝カリオールの私兵にして、クラウハウゼン村ヴラド三強のひとり。通称「化粧好きのクロモ」。ヴラド・バラージュ■の親衛隊長というが、もとはカリオールの配下だから忠誠心には薄い。朝から晩まで化粧している化粧男。他人にも化粧を施し、施された者はその化粧にふさわしい性格に変じてしまう。「死なずの化粧」を施された者は不死者になる。虹色のコートを着用。馬面に細すぎる眼、異様に厚い瞼にあぐら鼻の異相の持ち主だが、化粧の効力で青春の美少年の顔に見えるというちゃっかり者。男爵バイロン迎撃の準備もせず、早朝から強盗殺人に勤(いそ)しんでいる性格異常者。いざとなったら逃げ出してしまおうくらいに考えているマイペース男でもある。意外と臆病者。Dに脅されて山城のヴラドの墓所へ案内したが、待ち受けていたグリード公爵の稲妻で胸を貫かれ、瀕死の重傷を負う。最後にグリード公爵に「死に化粧」を施して息絶えた。

クロロック（**堕天使**）貴族にして男爵。鶴のように瘦せこけているが、その鋭い爪は装甲獣でさえ一撃で即死させられる。中世人間学の碩学(せきがく)。ミスカ・ドレイク所有の黄金のディスクに記録されている。第七長篇「北海魔行」のクロロック教授とは別人のはずで、別人でなくてはならない（すでに死んでいる）はずだが、知識・外見・名前など、限りなく教授を連想させる人物である。

クロロック-きょうじゅ【**クロロック教授**】（**北海魔行**）白髪白髭に緋色のマント姿の老人にして碩学。歩く知識の蔵とも呼ばれる。白い羽根ペンと干した動物の皮を携行し、左手首からの血をもって人相を描き写す。教授がその似顔絵に囁きかけると、描かれた者は教授に従わざるを得なくなる。珠の意味を真に理解し、また実際に掌中に収め、しかも実践して見せた人。しかしその結果も三日天下に終わった。

クロロック-はくしゃく【**クロロック伯爵**】（**一般**）ロマン・ポランスキー監督の映画『吸血鬼』に登場する吸血鬼。けっこうドジだが、対するアブロンシウス教授がもっとドジだったために吸血鬼は世界に蔓延した――というお話。

ケ

ゲート【**門**】（**双影の騎士**）ムマの巨大な菱形の建造物。高さは優に五〇〇メートルを越える。巨大な扉とそれを支える門枠だけでできている。扉は木製のようだが、石造りの門枠と同様に表面はひどく艶光っている。幅はわからないほどで、左右は渦巻く雲の壁に溶け込んでいる。厚さは無限大。神祖の心理障壁らしい。

けいたい-へんげ-にん【**形■変化人**】（**堕天使**）西部辺境の名物という。いずれ「物体X」のようなものであろう。夜行性らしい（そう願いたい）。

けいやく-せんとうし【契約[illegible]士】（双影の騎士）雇い主を探して、街道を習慣的に往来している。売り込みのため、旧式の鉄甲車から、重機関砲や鉄鋲銃（鋲打ちガンと同じものか？）の銃身を突き出し、車体に「戦士あり」と大書している輩もいる。

ケイン（夢なりし）ナン・ランダーの数軒先に住む幼馴染みのボーイフレンド。ナンと同い歳ぐらいだが、顔つきはずっと幼い。Dに決闘を申込み、斧を持つ手首ごと切断される。

けしょう-ばこ【化粧函】（堕天使）ヴラド三強のひとり「化粧好きのクロモ」が持っている三段重ねの化粧函。当然ながら化粧ブラシその他、必殺の化粧用具を装備。

ゲスリン（複合）①腕利きのA級ハンター。貴族を見つけることもできず、貴族の口付けを受けた八歳の娘ジナ・ボランに喉を引きちぎられて死亡。報酬は前金で十万ダラスだった。のちに心理攻撃でDを襲う。以前からの顔見知りらしく、Dに「ひさしぶり」と挨拶した。②腕利きのA級探偵。ま、早い話が名探偵。イギリスの作家＝フィリップ・マクドナルドが生んだ紙上探偵アントニイ・ゲスリンのこと。代表作に『鑢』や『ゲスリン最後の事件』がある。

ケダモノグサ（北海魔行）その名のごとく、吠えるような音を立てて花弁が開く物騒な辺境植物。一人旅でただでさえ神経過敏になっていたウーリンを驚かす。

けっか-てき-さん-ごえい【結果的三護衛】（ダーク）ジェルキン村を目指す辺境商工ギルド輸送隊の護衛セルゲイ、ジューク、ゴルドーの三人を指す。最初はもっといたはずだが、隊長のカイル亡きあともDとともに結果的三護衛として、輸送隊の任務を全うしようとする任侠心厚き好漢たちである。『ダーク・ロード』全三巻の物語を三人全員が生き延びた。

げっこう-そう【月光草】（風立ちて）月に光る草。良い香りがするらしい。

けっぺき-しょう【潔癖症】（一般）貴族は概して人間の快楽には否定的で、ちょっと目立ったばかりに客や従業員ばかりか、主人の一族郎党に至るまで皆殺しにされた娼館もある。

けっぽう-らん【血泡[illegible]』（夢なりし）巨大ヒヨコ＝チキナーの血から生まれた直径五十センチほどの血の気泡。意志あるもののごとく、宙に浮かび、襲いかかる。

Y. Amano

げ-どく-ざい【解毒剤】（夢なりし）ジゴクイチゴの汁から摂った解毒剤。妖霧の脅威から逃れられる。

ゲルツ・ダイアソン（死街譚）移動街区の住人。町長宅の管制室作業員。町長の名簿（リスト）によれば、四十過ぎの男。三時間ほど仮眠して自宅から帰ってくると、疑似吸血鬼となっていた。

げんえい-きこう【幻[illegible]】（死街譚）貴族が自分のものと信ずる土地の周囲に設けたさまざまな防御・攻撃施設のひとつ。貴族同士の果てしない領土間抗争の産んだ狂気の遺物である。視覚的幻影のみならず、自分たちの生態系すら別のものと〝納得〟させてしまうという。

げんかく-ざい【幻覚剤】（風立ちて）酒と同じく、辺境ではこれに溺れる者も多い。

けんきゅう-じょ【[illegible]究所】（堕天使）『都』の研究所では貴族を研究しているらしい。生きた貴族の血なら高く買い取るという噂もあり。一回の買い取り量は二〇〇CCから四〇〇CCまで。血液型は問わないとか。献血手帳をお忘れなく。

けん-ざん【剣山】（複合）①生け花を活ける際に使う鉄製の延べ板。表面には針状の棘が密生しており、踏むと痛い。②文字通り剣の山。登ると足が切れて痛い。③ヴラド・バラージュ卿の「山城」が建つクラウハウゼン村の北方の山。→ソード・マウンテン【剣山】

げんし-しゅりゅうだん【原子手榴弾】（風立ちて）超小型の手榴弾。外観は鉛色の円筒。十万度近い炎を発する。

げんし-だん【原子弾】（双影の騎士）ミア・シモンがエネルギー・パイプの破壊に使用しようとした爆弾。外見は楕円形の金属塊。赤い先端部を引っ張ると、錐状の指向性アンテナが伸びる。このアンテナで破壊力を一方向に限定させる。例えば、地面に突き刺せば、その破壊力は地下にのみ向けられ、地上での影響は五十メートル程度に収まる。十分のタイマー付きで、作動を始めると赤ランプが点滅する。

げんし-とう【原子灯】（堕天使）もちろん灯りとして使用する。これが辺境の村の必需品なのか、旅の

携帯品なのか、どこでも見られる物なのかは不明。クラウハウゼン村の街路でも見かけられたことから考えると、かなり汎用的な物らしい。

げんしりょく-こううんき【原子力耕運機】（風立ちて） ツェペシュ村では野良仕事に使われていた。

げんしりょく-ストーブ【原子力ストーブ】（風立ちて） ツェペシュ村「学校（スクール）」に設置されていた。

げんそ-へんかん-むし【元素変換虫】（堕天使） 元素を変換する虫。たぶん恐ろしいことになるに違いない。西部辺境で、Dと落ち合おうとしていたバイロン・バラージュ男爵に襲いかかろうとした。オオカマキリに似た身体で、油のような体液を有する。瞬時に身体の有機質を無機質＝鋼に変化させ、いかなる攻撃も跳ね返す。夜行性らしい（そう願いたい）。

ケンツ（双影の騎士） セドク村の若者。村の狩人の息子で、十九歳。素手の喧嘩はもちろん、武器を使わせても村では右に出るものはいない。左手首から肘までを覆う革ケースには、鉄矢と円筒状の発射台が内蔵されており、右手の革当てからは特殊鋼の刃を持つ蛮刀（隠し刃）がせり出す。全身に百余箇所に及ぶ傷跡が残り、そのうちの半分のせいで生命を落としかけている。西部辺境で薬草の知識を得、『都』のひとつにある図書館で学んだ護身魔法を身につけている。足跡をつけるために靴底に蛍光塗料を仕込み、防毒マスクと耐熱服で装備して、村の若者三人を引き連れ、大陥没に降りてきた。Dによって傷痕ひとつ残さず、血一滴流さず、胴を輪切りにされたため、ミアとの下山の途中、痛みを訴えて気絶した。

ケンラーク（堕天使） いかなる環境も自分の生存に最も適したもの＝水に変えてしまう合成生物。その姿は巨大なクラゲに似ている。ほぼ偏平な傘の下には瘤状の胴体が備わり、そこから数百とも数千ともとれる糸のような無数の触手が蠢く。闇水軍頭領ガリルが対バイロン・バラージュ用に開発した合成生物。その触手に触れたものは、たとえDであれ、水と化してしまう。早い話がクラーケンのアナグラムで真っ二つになる。早い話がクラーケンのアナグラムでありますが、そういうことをしれっと言っちゃあいけません。ねえ先生。

コ

コーデリア・バラージュ（堕天使） ヴラド・バラージュ卿の妻にして、男爵バイロン・バラージュの母。長い髪と、その髪と同じ色の瞳を持つ。黒髪の場合は黒瞳（第三巻）で問題ないが、金髪の場合は金瞳（第四巻）ということで、ちょっと怖い。殺される運命にあったバイロンを助けたためにヴラドの怒りにふれ、ジャン・ドゥ＝カリオールに人体改造手術を施される。そのため水への恐怖を残したまま未来永劫、水中で生きることを強いられている美しき水中花である。本体はヴラドの館の地底湖に閉じ込められたままだが、カリオールの実験の成果の分身（ドッペルゲンガー）で外を出歩くことができた。ヴラドの城に侵入して、心臓に白木の針を刺されたDを助けて、城外に連れだす。Dとともに、ヴラドが潜んだ山城へ向かう。バイロンとヴラドの父子対決のさなか、ヴラドの笏杖で心臓を貫かれ瀕死の重傷を負う。分身はカリオールが機械を破壊したことで消滅した。

コーマ（複合） ①病理学用語で昏睡の意。②ロビン・クックの医学サスペンス小説。映画にもなった。監督はマイクル・クライトン。③中央街道沿いの村。クラウハウゼンを目的地とした場合、廃村ディームリの次に位置する村。④ツェペシュ村自警団の副団長格の男の名。無謀にもDに襲いかかり、脳天から股関節までを一刀両断。昏睡する暇もない。

コーマ（風立ちて） ツェペシュ村自警団の副団長格。体重百キロは下らぬ、むさくるしいひげ面の大男。背中に背負っている黒光りする鉄棒は、中ほどから先端にかけて鋭い円錐形の突起がある。コーマが使えば石壁を砕き、近距離で投擲すれば大口径ライフルに勝る威力を発揮する。小竜（リトル・ドラゴン）や熊をこの鉄棒で殴り殺しては毛皮や肉を売る猟師。尋問と称して、リナとクオレを拷問した。Dと力比べの末、鉄棒とともに脳天から両断された。

ごーれむ【[illegible]】（D） 身長二メートルは優に越す禿頭の巨漢。青銅の筋肉組織を持つ男。Dに筋肉を堅化できない口蓋へ剣を突っ込まれ、ひるんで堅化が解けた隙に脳天をかち割られ死亡。

ゴーレム【粘土巨人】（D） 吸血鬼たちが作った凶獣、もしくは核戦争が生み出したミュータントのひとつ。特に怪魔団の携帯無とは関係ない。

ゴーレム【人形】（[illegible]） 双生児の妹イゾデルの護衛。入道頭の三メートル近い巨人。その肉体は対物に対しスポンジのような弾力を有し、その細胞はDの一撃にも復活する再生機能を備えている。ツィグ老人の家でDを襲撃したが、その一撃がDを吸血鬼化させ、片腕を切り飛ばされて逃亡する。身体を独楽（こま）のように回転させ、停車場の施設でさえ吹き飛ばす風を巻き起こす。自らの血を吸ったDによって頭部を胸まで切り下げられた。

ゴーレム【粘土人間】（堕天使） ジャン・ドゥ＝カリオールが製作した戦闘用粘土人間。身長二メート

ル五十、体重は五百キロを越える。鉄靴を履いている。材料の土に薬品を混入しているため、その強度は鋼並み。泥人間との記述もあり。

こい-びと【恋人】（肖像画）特に、南部辺境区の残忍な将軍にして美貌の魔道士イゾベル・ドレイクの「恋人」を指す。イゾベルがその残忍さゆえに村人の手で焼き討ちにされたとき、一千年後に現われてイゾベルを復活させると予言された者。

こうかく-せいぶつ【甲殻生■】（堕天使）シャバラ渓谷いっぱいに■たわる巨大な生物。

こうかく-りゅう【甲■竜】（夢なりし）全長五メートルに達する竜。

こう-かんど-テスター【■■度テスター】（堕天使）肉体と精神をチェックする計測機器。男爵バイロン・バラージュの馬車に装備してある。その精度は一京分の一の生体精神までチェックできる。あまりにもあっけなく甦れた「破壊者」の気が乗り移ったのではないかと、Dとバイロンが確認のためミスカに用いた。

こう-きゅう【光球】（聖魔遍歴）光の球体。光の球。「帰らざる砂漠」が周囲の監視目的のために放っている。触れたものを麻痺させる。

ごうせい-コーヒー【合成コーヒー】（風立ちて）リナの馬車の備品。Dの電子ランプで沸かした。

ごうせい-せいぶつ【合成生物】（堕天使）軽業師姉弟の姉メイを誘拐しようとした蛙顔や、「水琴」を操ったケンラークなど、いずれも合成生物だった。

こうせいのう-はかいだん【高性能破■弾】（双影の騎士）セドク村の警備隊が、大陥没に投げ込もうとした。もともとは、貴族の武器庫から入手したもの。

こう-せいのう-ばくやく【高性能■■】（堕天使）読んで字のごとし、性能の高い爆薬である。んなこたぁ言われなくてもわかるが、Dに酷似した存在の男爵バイロン・バラージュが使用したとなれば話は別。さらに高性能を発揮したに違いない。世の中、そういうもんである。

こうせん-しき-しょうじゅん-そうち【光線式■準■■】（想秋譜）光学反応による弓矢の目標自動追尾システム。バズラが大蒜（にんにく）エキスを塗ってDを射抜いた弓矢に、用心には用心を重ねて装備しておいた装置。バズラが『都』で仕入れたものだが、はて、闇夜の相手にはどう反応するのであろうか。

こうてつ-の-くい【■鉄の杭】（風立ちて）長さ五十センチに達する杭。ベルトのパウチに数本（五本ほどか）を挟んで、ハンマーで打ち込む。

こう-ば【工場】（北■■行）ギリガン商会母屋の三階にあるギリガンの研究室兼私室。ここで作られた大蟹ロボットは、瀕死のギリガンを乗せて天井ドームよりフローレンスに向けて飛び立った（ものと思われる）。

こう-ぶんし-ほそう-ざい【高分子舗装剤】（堕天使）「タロスの武器庫」のさらに奥、熔解した工場から封印堂にいたる地下通路二千メートルを充填し、もし封印堂が破られた場合も「破壊者」のそれ以上の出現を阻んでいた。五千年かけて「破壊者」が掘り進んだとの記述から察するに、相当の強度を有するものと考えられる。

ごうもん-さん【拷問酸】（堕天使）貴族に対する拷問に使用する酸。貴族自身が作った。完全に滅ぼすことはできないが、地獄の苦痛を与えられる。闇水軍頭領ガリルが、ミスカ・ドレイクに対する拷問に使用した。その量は大甕（おおがめ）いっぱい。拷問酸は貴族の肉体のみを侵し、まとった服はいっさい侵さないという電子レンジ効果を持つ。

ごうもん-じょ【■■■】（■立ちて）ファーンの家の別棟にある自警団用の拷問所では、コーマたち自警団がリナとクオレを拷問にかけた。

こう-ろ【香炉】（堕天使）ミスカの祖父コルネリウス・ドレイクがミスカに残したもの。小さく古びた金属の香炉。香炉を点すと立ち昇った黒煙が未知の化学反応を引き起こし、「案内者」に化ける。

コガネドクバチ（夜■■）辺境の昆虫。

コガネユキクサ（夜想曲）辺境の植物。

こきゅう-まく【呼吸膜】（堕天使）薄い透明な膜で、水を通さず、呼吸は自由にできる。闇水軍の持ち物。滝に逆さ吊りにされたタキとメイに使われた。作品中では特に「呼吸膜」という名では呼ばれておらず、これはあくまで仮名。

こくい-の-かげ【黒衣の影】（夢なりし）二メートルを優に越す岩のごとき大男。Dをつけ狙う。左手

Y. Amano

に弓を右手に矢を握り、何度となくDを襲う。シヴィルを守るその人は、シヴィルの最愛の男だった。

こく-とう【黒刀】（堕天使） 男爵バイロン・バラージュの武器。まさか「くろがたな」とは読むまい。その辺の旅人や戦闘士、武術者が手にできないような光沢を放つ剣。

ごく-ぼそ-いと【極細糸】（堕天使） 全長五キロ以上に及ぶ糸。シャバラ渓谷で、Dが切り放した左手を鎖につけて音波探査機として使った際に、その反応伝達用の糸として使った。その極細糸は、貴族でさえ感知できなかった。いわく、それほどに細い糸だということ。

こけい-えいよう-ざい【固形■■■】（双影の騎士） サイボーグ馬に食べさせる。

こさつ-ざい【■■剤】（■薇姫） ママ・キプシュが特別に調合した、薔薇姫の吸血薔薇対抗薬。身体に塗っておけば、吸血薔薇が触れてもすぐに枯れてしまう。エレナがサクリの村外れの遺跡で薔薇姫と戦った時に用いた。

ごじゅう-まん-かい-だて-の-ビル【五〇万階■てのビル】（堕天使） ディームリ村の巨木はそれほどに巨大であった。んな無茶な。

こじん-よう-ひこう-ぐ【■人用飛行具】（■天使） 『都』の人間でさえ、そうそう眼にできぬ装置。ジェット・エンジン、ロケット式、イオン・フライト方式、磁力推進式などの方式がある。バックパック式のメカニズム。右のスリングにリモコンのスイッチがはめ込まれている。

こだい-ぶんめい-き【古代文明期】（風立ちて） 核戦争以前の文明を指す。読者の時代の文明のこと。みんなで怒ろう。

こっけつ-の-いと【■血の糸】（聖魔■■） ピンゴ・ビューローの「夢の水泡」を弾けさせるためにDが左手から繰り出した。

ことづて-ばと【言云て鳩】（堕天使） 化粧好きのクロモがジャン・ドゥ＝カリオールへの伝言を伝えるのに使用した伝書鳩。カリオールの館の鴉と同類か。製作者はカリオールと思われる。

コトフ（北海魔行） ゴマ塩頭のフローレンス村民。スーインから、ハン老人の棺を安置した納屋の見張りを頼まれたが、安酒を枕に高いびき。役に立たなかった。

こども-りょうきん【子供料金】（堕天使） 軽業師姉弟の姉メイが口走った言葉。Dの依頼料には大人料金と子供料金があるらしい。

こなや-の-にょうぼう【粉屋の女房】（風立ちて） ツェペシュ村の粉屋の女房は、失踪事件の半月後の夕刻、近くの森に月茸を取りにいった際、丘から下ってくる三人の子供を見つける。

この-よ-ならぬ-もの【この世ならぬもの】（夢なりし） 夜の森の昆虫たちも知っているDに対する不可欠の形容詞。枕詞。だからといって〝あの世〟のものというわけではない。

コピー（堕天使） Dシリーズに名のみ高い「神祖」は、小説では文字通りその「名前」の一部と、はた迷惑なその「実験精神」ばかりが描かれてきたが、第九長篇『堕天使』ではついに、本体に限りなく近い、合成蛋白と人工筋肉から成る「コピー」が登場した。神祖のコピーを出現させたのは、ディームリ村の北に位置する飛行体発着場を管理する特A級コンピュータで、女性人格を持つそのコンピュータは、神祖に対する敬愛思慕の情もだしがたく、愛する男性のデータからコピー体を合成したのであった。さながら機械にまでそんな想いを抱かせるあたり、『スター・トレック』シリーズのカーク船長（ウィリアム・シャトナー）みたいな女ぐせの悪さだが、神祖の顔にシャトナーの顔がちらつくと思うと、ちと気色が悪い。うっぷ。↓やつ【奴】

K. Sakashita

コピエ（夜想曲） アニス村の村長。はて、男か女か？

こ-びと【小人】（堕天使） 殺数の平原の赤い草の中に潜む、身長五十センチもない刺客。複数潜伏し、入り込んだ者の両脚を鉈で切断する。侵入者の剣に対してはその身長が有利に働くが、弓矢や槍には弱い。ジャン・ドゥ＝カリオールの創造物らしい。

ご-ふく-や【呉服屋】(■■遍歴) バイパー婆さんの将来の夢。この夢を実現しようとしていることは、裁縫の機械を馬車に積んでいることからもうかがえる。人探しをやる前は『都』で子供服の仕立て屋をやっていたことだし。

ゴブリン(風立ちて) 貴族が産み出した人工獣。愛蘭土の妖精がモデル。人に危害を加える邪悪な妖精。

ご-ぼう-せい【五芒星】(夢なりし) シヴィルが眠る「村」の病院のシンボル・マーク。

こむぎ-こ【小麦粉】(ダーク) この世界でも、小麦粉があるらしい。辺境のチェーン店=雑貨屋ヤライの店でも扱っている。

コルダ(戦鬼伝) シュラト村の青年。ライアのお尻を触ったため、三人の護衛に両手の骨を付け根から折られてしまう。だってライアはねえ、もともとは……。

ゴルドー(ダーク) 辺境商工ギルド輸送隊の結果的三護衛のひとり。ターバンの男。家に泊めた「犠牲者」のために、自分以外の全家族が殺された。そのためダンピールを信用していない。家族を殺した「犠牲者」を杭で刺して以来、刃物が一切使えなくなってしまった。そのため猟師になることを諦め、逆療法として輸送屋を生業に選んだ。刃物が使えるようになったら、猟師になることを望んでいる。多連装銃を愛用。レディ・アン聖騎士によって血綴草を植えつけられるがセルゲイに助けられる。Dがロザリアを斃すのを見て、逆上してDを刺してしまうが、それによって刃物に対するトラウマは癒された。

コルネリウス・ドレイク(堕天使) ミスカの祖父で公爵位を持つ貴族。南部辺境管理委員会理事という要職にあったが、村人に裏切られて滅んだらしい。フィッシャー・ラグーンの館に大切なものが預けてあるとミスカに遺言したが、それは十年前ヴラドとの会見に来たとき、護衛をしたラグーンに託した古びた金属の香炉のことだった。万が一、自らの一族の証しを持った者が引き取りに訪れた場合、速やかに手渡し、できる限り援助を与えるよう、大枚の貴金属を渡して依頼した。

こんちゅう-じゅう【昆虫銃】(双影の騎士) ①昆虫のような形をした銃。非常に持ちにくい。②撃つと昆虫が飛び出す銃。どのような対敵効果があるのだろうか。③銃が昆虫であること。もはやどういうものなのか想像もつかない。④その実体は不明だが、『双影の騎士』第二巻で強盗団が持っていた銃のこと。

コンピューター-タンク【コンピューター戦車】(■立ちて) M8026CT(数字は制式採用年、CTはコンピューター・タンクの略か)。光学兵器防御の特殊コーティングを施した扁平な車体。三次元立体センサーとキャタピラだけが太古の名残をとどめている。ツェペシュの村外れの土手に埋もれていたのを数年前に発掘。『都』から技術者を呼び、チューンナップした。このおかげで三年間、野盗や大巨獣の被害はゼロになったが、村は万年金欠病になった。二千年前の型だが、マニュアルが残っていたので稼動できる。何らかの理由で放棄されたらしい。一五〇ミリ大出力レーザー砲を装備。一千万度の熱球を発射する。砲身はセラミック製。超小型核炉で駆動する。

コンロイ(死街譚) 移動街区住民。身長二メートル、体重百五十キロ、胸筋の厚さも幅も大火竜の鱗ほどはありそうな巨漢。その両腕は、素手の喧嘩なら熊さえ絞め殺したことがある。最大電圧五万ボルトの狩猟用電磁手袋を武器に、ダンピールと判明したDを街から叩き出そうとして喧嘩を売る。ツルギ医師のカラテにより地に這わされた。

サ

さいがい-たいさく-システム【災害対策システム】(堕天使) 貴族が設置した完全自動の防災システム。ある程度の広さや美術、学術的な重要性が認められる地域を大災害や大自然の変動から守るために設置された。例えば火災が起これば、消火プレーンが飛来してたちまちのうちに消火剤を散布する、といった具合。

サイコ-ウィットネス-しょち【サイコ・ウィットネス■■】(風立ちて) 尋問に使用。

サイボーグ-ば【サイボーグ馬】(一般) 骨格は軽合金製。飼葉(かいば)が必要らしい。その仕様によってスタンダード・タイプ、カスタム・グレードなどの種類が存在する。性能もそれに応じて差が生じる。しかし、

Y. Amano

Dの手にかかると、平凡なスタンダード・タイプでも、カスタム・グレードも追いつけない性能差を発揮する。ちなみに、時速で三キロ、耐久力で二割の差があるツェペシュ村の保安官のカスタム・グレードが、Dの騎乗するスタンダード・タイプにはまったく追いつけなかった。知性や感性は並みの馬以上だが、ニヒリストにはならない。

サイボーグ-ば【サイボーグ馬】（ダーク） 輸送屋の荷物運びには、道に迷わない——一度通った道は必ず覚えている記憶素子を備えたサイボーグ馬が使用される。ゴルドーたちが入手したサイボーグ馬は、田舎で仕入れた物なので『都』製より技術や耐久性で劣っているが、素子センサーは新品同然で、「勘」回路もついている。月のない森の中でも、葉っぱ一枚触れずに全力疾走できるとは、売り込んだ老人の売り込み文句。

さいし-かん【祭[illegible]】（堕天使） ディームリ村の集会所から南に二丁ほどのところに建っている。三階建てで、一階二階の窓は鉄格子つき。夜間は管理人の老司祭以外いない。

さいせい-さいぼう-きょうか-えき【再生[illegible]胞強化液】（堕天使） ジャン・ドゥ＝カリオールが不死身のフシアの再生細胞を強化するために使用した薬品。カリオールの実験室の井戸状の穴に満たされているらしい。

サイファン（堕天使） ジャン・ドゥ＝カリオールの私兵にして、クラウハウゼン村ヴラド三強のひとり。またの名を「千手足のサイファン」と言う。格闘技の天才。たとえ相手が飛び道具を持っていても、必ず素手で勝つといわれている。倒された相手の無残な死体を見ると、千人がかりで襲われたとしか思えないことから、この名が付いた。肩越しに背中を掻く手が腰のあたりまでくるほど、手が長い。傭兵あがりで、以前はミスカ・ドレイクの父が治めるウィンズローの村で用心棒をしていた。その不可視の脚は、五十トンの巨石をも動かすフライング・キックを放つ。

さいみん-ほう【[illegible]法】（風立ちて） 尋問に使用。

サイラス-こっとう-てん【サイラス骨董店】（北海魔行） ウーリンが珠の鑑定をしてもらおうとそのドアをくぐった店。ギリガン商会の息がかかっていたため、ウーリンはたちまち捕まってしまう。

サイラス・ファーン（風立ちて） ツェペシュ村自警団の団長。護衛獣（ガード・ビースト）の販売人兼調教師。護衛獣を使って娘のベスを襲った吸血鬼に挑むが、返り討ちにあい吸血鬼となってしまう。その後、吸血鬼と化した旅のならずものを「貴族」に仕立てて、村人の前でさらしものにした。最後はベスと一緒に、エネルギー生命体に殺されてしまう。妻は早くに亡くしている。

サイレン（風立ちて） ツェペシュ村ではサイレン三回連続で「広場に集まれ」の合図。

サカトビガエル（北[illegible]行） 辺境最北部の地方で、酒のこくを出すのに使われる食用蛙。蝮酒や蜥蜴酒などのように、そのまま酒瓶の中に一匹ずつ入れられる（どうやって？）。

さか-ば【酒場】（聖魔遍歴） 辺境の小さな町では、酒場が娼窟を兼ねている場合が多い。

サクリ（薔薇[illegible]） 貴族との退行的共存によって栄える村。辺境にありながら常に作物に恵まれ、村人が日々の糧のために追われることがない。薔薇姫の統治する領地内にあり、ダイアンローズの四騎士のもと、直接統治される。村に至る幅広の街道沿いには木の杭が並び、反抗者は四騎士の手で串刺しとなる。村長はトシュク。

さくれつ-じゅう【炸裂銃】（死街譚） 移動街区の治安官＝ベイリー・ハットン愛用の銃。形式は太古の回転式拳銃（リボルバー）に酷似しているが、装弾数三十六発。弾丸たるや、小竜なら一発、中型火竜でも半ダースで仕留め得る炸裂弾である。部屋がせまかったりで、ロケット・ランチャーが使えない場合にこれを抜く。

さくれつ-だん【炸[illegible]】（聖魔遍[illegible]） 拳銃から発射する弾。野盗の男が持っていたオートマチックに装塡されていた。クレイ・ビューローに対して使用。

さつりく-の-へいげん【殺戮の平原】（[illegible]天使） クラウハウゼンの村から剣山（ソード・マウンテン）の山城に行く途中に広がる草原。怪飛行生物が発生させる乱気流のせいで、空を飛んでは越せない。かつて、西部辺境の貴族の後ろ盾を得てヴラド・バラージュ卿に反抗した村人と、ヴラドの兵との戦いが行われた場所。敗れた村人は捕えられ、千人を越える捕虜はこの平原で生き埋めになった。平原の地面と草が赤いのは、その流血のせいだと言われている。過去の戦闘の際、村人を援護した貴族の戦士は、この平原に突然開いた大穴に飲み込まれた。その赤い草の中には身長五十センチもない小人の刺客が多数潜伏している。

ザナス（堕天使） ジャン・ドゥ＝カリオールの私兵にして、クラウハウゼン村ヴラド三強のひとり。いつまでも二十歳前後の若々しい容姿をしている貴族または合成人間。カリオールの愛弟子で、普段は博士の助手をしている。カリオールの標的と瓜二つの面を作って、その魂を写し取り、相手を支配下に置く。この技を「面移し」と呼ぶらしい。雨中、水車

人とともにDへの襲撃を仕掛けたが、術を破られ、Dに斬り捨てられる。

サバイバル・ベルト【生存帯】（聖[illegible]）辺境では普遍的な装備品らしい。通常は幅広ナイフや山刀を装備する。ちなみにパイパー婆さんはパウチと壺。クレイ・ビューローは竪琴。ビンゴ・ビューローは——丸腰である。

さばく-の-ぬし【砂漠の主】（[illegible]歴）はるか昔の研究が生み出した生物。ただの砂漠を〝帰らざる砂漠〟にしていた張本人（？）。Dによって眠らされる。

さびし-そうな-いい-なまえ-だ-なあ【寂しそうないい名前だなあ】（戦鬼伝）機械翼に死の溶解液で襲いかかった巨人＝自称ダイナスがDの名を聞いて漏らした言葉。正直者のことゆえ、百パーセントそのままに受け止めてよかろう。

サベイ（戦鬼伝）半月ほど前、シュラト村のライアの家に現われ、そのまま居座ってしまった三人衆のうちの一人。辺境の妖虫妖獣たちを操る〝妖かし使い〟である。Dを出し抜いて、馬車でライアを『都』へ送ってしまおうとする人買いブルワーをさらに出し抜いて、赤っぽい粉末で首なし馬を立たせ、出立しようとしたところ、地中から現われたダイナスに〝待った〟をかけられ、大岩のごときダイナスの拳を頭にもろに受けて即死してしまった。合掌。

サベナ（双影の騎士）死人街道でDを馬車に乗せた生きる死体。他の生きる死体と同様、ボロをまとった青白い肌の娘。以前に〝奴〟に血を吸われていた。ムマでの試練は、最後の試練まで残ったが、DNAを注射されミイラ化してしまう。哀願して、Dの手で命を断たれた、ある意味では幸福なキャラクター。

さまよえる-だいち【さまよえる大地】（ダーク）ギャスケル大将軍の浮動（移動）領地のこと。

サマーズ・モンタギュー（風立ちて）辺境巡回吏。百五十年前に数百例に及ぶ貴族の犠牲者を分類し、彼らの主人の能力に関する精緻な統計を残している。

サム・フェリンゴ（D）『都』で医学を修め、ランシルバ村に開業する医師。ドリスとダンには心を砕く好人物。若き日はピーター・フェリンゴと名乗ったスパイダー・ハンターであった。Dが留守の時に襲いに来たリイ伯爵をニンニクの粉末で（Dの魔除けがあったにせよ）見事、追い払うことに成功する。しかし吸血鬼のしかけた記憶操作により、ニンニクの効果を確信した瞬間にその記憶を失ってしまう。白木の杭を手に、大見得を切って吸血鬼に挑む様子は、まさに古今の吸血鬼映画を彷彿とさせる名場面であろう。リイ伯爵に襲われて吸血鬼と化し、ドリスを伯爵の城へ連行する途中、ラミーカに鋼鉄の矢で心臓を貫かれ、死亡。

サムソン（夢なりし）クルツ治安官がDを逮捕した口実を説明するのに使った人物。クルツの農場に食肉獣を預けている。

さめ【鮫】（[illegible]遍[illegible]）全長三・五メートル、体重二百五十キロを下らない流線形をしている。もちろん「帰らざる砂漠」が作り出した幻覚だが、この世界にも現代と同じような形の鮫がいるのだろうか。まるで『ビートルジュース』である。

サモン（北海魔行）ギリガン五人組のうちのひとりにして紅一点。またの名を〝思い出サモン〟。人の思い出を餌にする妖術ノスタルジアを駆使して珠争奪戦に参加するも、思い出を持たないクロロック教授には最初からかからず、自分の思い出すら斬り捨てるDにも効果はなかった。よく考えれば卑劣な術だが、最後までDに喰い下がった見上げた執念と、修業者グレンに尽くした血みどろの情をもって、決して憎むことのできないキャラクターである。国王（キング）エグベルトから受けた致命傷によって死の床に横たわるグレンを見て、結果的に心中を図るが、海中でマインスター男爵に遭遇して貴族と化し、その牙でグレンを咬みエグベルトを咬み、三人まとめて吸血鬼となる。グレンに喉首を咬まれながら自分もグレンの首を咬むあたり、壮絶凄艶の四文字に尽きる。

さんかく-かんけい【惨角関係】（北海魔行）修業者グレンと思い出サモンと国王（キング）エグベルトの関係。最初は人間だったのに、気がつくとみんな吸血鬼になっていた。貴族の血、みんなで分ければ怖くない。

さん-ごう-でんき-おり【三号[illegible]檻】（風立ちて）人間大の妖獣・凶鳥を封じこめる高圧電気の鉄檻。電撃スイッチと電子錠がついているが、ちっとも珍しくないものらしい。

さん-ごえい【三[illegible]】（妖殺行）マイエルリンクがバルバロイの里で雇った用心棒——ベンゲ、カロリーヌ、マシラの三人を指す。契約金は幻の一万ダラス金貨十枚。マイエルリンクに信頼されぬまま、マーカス兄妹とDを相手に奮戦する。

さん-ごえい【三[illegible]】（ダーク）→【結果的三護衛】

さん-じげん-くうかん-かくちょう-かいろ【三次元空間拡[illegible]回[illegible]】（堕天使）貴族の柩に取りつけられた装置。柩内部の空間を拡張し、広大な空間を出現させる。その空間には貴族の好みによって大庭園や果てしない大洋が存在したりする。五十年前に行なわれた廃墓地の一斉調査では、多数の調査員が死亡もしくは行方不明になった。

さん-じげん-こう-きどう-カメラ【三次元■機動カメラ】（堕天使）長さ五十センチほどの楕円形の筒。薄い四枚の羽根で空気流を巧みに操りながら姿勢を維持しつつ、底部のマイクロ・アイで俯瞰とピンポイントの超接写を同時に行なう。少なくとも高度二千メートルを維持できる能力を持っている。

さん-しまい【三姉妹】（D）特に「ミドウィッチの蛇女」を指す。ひとつの胴に三つの美しい首を持つ凶悪無比の妖魔で、その名の由来は、かつて辺境の一地区ミドウィッチ地方で数百人の村人を食い殺し、若い男女を淫虐の餌食とした事件に因る。リイ伯爵に三千年飼われていた。Dに血を吸われその虜になり、城から逃がした罪を問われ、最後は伯爵のロボットによって処刑される。超未来と中世の化物の渾然一体がD世界の魅力である。

Y. Amano

さんぞく-の-アジト【山賊のアジト】（堕天使）「村」の北の峠に巣喰う山賊のアジト。気象コントローラーで降らせた豪雨により河に転げ落ちた獲物を網にひっかけ、強力なウインチで巻き上げる。岩棚の奥は自然の洞窟を広げた通路になっていて、奥には直径二百メートルは下らない、ほぼ真円に近い広場がある。周囲は岩山。街道へは岩山の南にある自然の路を使う。膨張建材で作った五軒の小屋と倉庫がある。

さんだん-とう【散弾筒】（風立ちて）護身用の武器。ルーカス・マイヤーが所持していた。マイヤーはこの武器で妖鳥と蛇人を撃退した経験がある。轟音とともに三十発の球型弾（ボール）を発射する。

サンド・バイパー【砂蝮】（死街譚）土中深くに潜む巨大な蛇状の存在。誰も見たことのない全長は数十キロにおよぶとされる。移動街区のプロメテウス砲の原子弾により退治されたと思われる。英語で書くと「Sand Viper」。日本人は語感から「サンド・パイパー」（Sand Piper）と発音してしまいがちだが、そうすると「砂漠の笛吹き」になってしまうのでご注意を。

ザンバ（■薇姫）辺境区の西の端に位置する村。サクリ村からは、通常郵便物輸送用の早馬をもってしても八時間はかかる（がDは五時間で済ました）。人が絶えて三百年、村に建つ廃墟＝体内寺院は、刀鍛冶プラスコの斎戒沐浴の場でもある。寺院内の丹田に当たる部分には、二千年も前から七彩の薔薇の花が一輪咲いており、薔薇姫がエレナに与えた貴族の刺青を消すために必要となる。ママ・キプシュの依頼で寺院に赴いたDは、ここで左腕一刀流の黒騎士と対峙することになる。

シ

ジー-の-らん【Gの乱】（ダーク）『都』の処罰に反抗したギャスケル大将軍が起こした軍事紛争。五十年にわたり『都』の軍勢と攻防を繰り広げた。ギャスケルの捕縛によって終結をみたが、この戦乱で辺境区の六割が死に絶え、放射線や細菌兵器に汚染された広大な土地が永久に封鎖された。そのため『都』では辺境区の全面封鎖も検討された。

シヴィル・シュミット（夢なりし）ほぼ完璧な防音設備が張りめぐらされた病院の七号室で眠りつづける十七歳の娘。金髪に瞳は黒。白いドレス姿でDの夢にも何度か現われる。秋のある日に「村」から少し離れた森の中で貴族の口づけを受けて倒れているのを発見されて以来、三十年間眠り続けている。しかし実際は貴族の口づけを受けたあと、村を放逐され森に捨てられてしまい、村と村人を含めた世界の夢を見続けていた。しかし夢を見続けることに疲れ、Dを招んで夢を終わらせようとしたのだった。すでに三十年間存在してしまった村人たちは、シヴィルが夢から覚めると消えてなくなる運命にあるため、必死にこれに対抗する。

シヴィル・シュミット（一般）カール・テオドール・ドライエル監督の一九三二年の映画『吸血鬼』の主人公の名前。だからどうした。

シヴィル-を-かんだ-きぞく【シヴィルを咬んだ■族】（夢なりし）黒ずくめの大男で、顔つきはこの世のものとも思えぬいい男。あんたと似てるね――とはシェルドン婆さんの言葉。誰のことかって？ 神祖に決まっとろうが■

シェーン・グリード（■天使）ヴラド・バラージュ卿配下の公爵。全身を暗雲装甲で包んだ別名「黒雲の騎士」。両手を合わせて全身を巡る稲妻を指先に収束させると、一千億ボルトの紫青の光条となって相手を襲う。山城のヴラドの墓所でDを迎え撃つが、返り討ちに遭う。実は短く切った金髪をもつ若い女で、公爵は大の称号だった。二百年前、西の貴族の

夜会からヴラドに拉致され、それ以来ヴラドの護衛役にされていた。夫はシェーンを救いに来て滅ぼされた。最期は虫の息のクロモに「死なずの化粧」ならぬ「死に化粧」を施され、息絶えた。

ジェッペ-じいさん【ジェッペ爺さん】(■■姫) サクリ村に住む九十歳のお爺さん。一年前、若返りの秘薬とされるモドリグサを求めてシャンバラの森に入るが、そのまま行方知れず。クビトリに襲われたものとされていたが、今回、隣家に住むバイク青年団のニシューによって、それが事実であったことが確認された。

ジェルキン(ダーク) 辺境商工ギルド輸送隊が荷物を届ける先の村。村長は二百歳近い老人。ジャルハ村から、奇岩が折り重なり毒性のガスが白煙となって立ち昇る道を荷馬車で六時間行ったところにある。村外れに遺跡がある。実は、かつて大将軍ギャスケルと『都』の軍隊が雌雄を決した古戦場であった。

シェルドン-ばあさん【シェルドン婆さん】(夢なりし) シヴィルが眠る「村」の西はずれ、果樹園の西の果てに住む百二十歳の老婆。夫はすでに亡くなっているらしく、家の裏の小高い丘の頂に墓石が立つ。百年以上も前に受けたサイボーグ手術により、栄養素混入血液の取り換えは三十年に一度で済む。Dに「青い花弁の花」を浮かべたお茶を飲ませたのがこの人。

しおざわ-かねと【塩沢兼人】(一般) OVA『究極超人あ～る』や『あ～る』のCDでR・田中一郎君の声を担当している声優。え? 他になんかやってたっけ? これしか知らないよ、おれ。

しおざわ-かねと【塩沢兼人】(一般) OVA『吸血鬼ハンターD』やカセット文庫『北海■行』のDを担当している声優。青二プロ所属。①Dのキャラクターにぴったりの美声である(鎌倉市/岩田栄穂子)。②かの「この世ならぬもの」の声をああも完璧なまでに演じ切ることのできる声優さんは、この方以外に考えられません。声の響きそのものに既に〝魔力〟が秘められているのですから(奈良市/近藤美穂)。③ご存じのとおり「錆を含む」と表現される美声の持ち主の正体は、やはり年代モノの鉄人か!?(名古屋市/菅家めい子)。④溺れるDの声も麗しゅうございました(山形市/鈴木都記子)。みなさんの声に感謝!(編集部) 以上は雑誌『グリフォン』掲載時のもの。みなさま、お元気で最新映画版をご覧になっておられますでしょうか。

K. Sakashita

しがい-たん【死街譚】(原典) 正式名称『D―死街譚』。シリーズ第四長篇。一九八六〔昭和六十一〕年一月三十一日発行。動く街――移動街区を舞台に吸血鬼新人類の謎をめぐる物語。若きドクター・ツルギとランシルバ村のドリス・ランを接点として、第一長篇とはゆるい続編関係にある作品。

し-き【死気】(■■姫) 触れたものの生命をその場で奪う気。妖気ともいい、鬼気ともいう。生あるものが触れれば、すべて死滅する。物理的には、ぬーぼーとした霧状の白い人型となって現われる。薔薇姫の強烈なエネルギーによって守られた死気は、死霊騎士団となってDに襲いかかった。

じき-あらし【磁気嵐】(死街譚) 貴族が自分のものと信ずる土地の周囲に設けたさまざまな防御・攻撃施設のひとつ。あらゆるメカニズムの電子系を狂騒させてしまう。移動街区の進路に出現した磁気嵐の谷は、平均幅四・七二キロの磁気帯を持ち、街をすっぽりと呑み込んでしまい、甚大な被害をもたらした。

じげん-かどう-じゅう【次元■■■】(風立ちて) ナイト・クラウドと並ぶ「神隠し」の二大原因。名前はヌビ。

し-こう【死光】(堕天使) 「タ■スの武器庫」から出現した「破壊者」の目から発する光線。この一撃

で「破壊者」は幽霊騎士団（ファントム）を狭霧のように吹き飛ばし、五万トンの金属でできた武器庫の大扉を腐食させた。

ジゴクイチゴ（**夢なりし**）その汁は、旅人が妖霧対策用に使う解毒剤の材料になる。

しーこつーばら【**死骨原**】（**■天使**）ヴラド・バラージュ卿が一子バイロン男爵との決着をつけるために息子を呼びだした場所。父ヴラドが幼いバイロンを抱いて歩いた城の西に広がる原である。その名の由来は、貴族と戦って果てた村人たちの死体が野ざらしに放置されたからだとも、貴族の奇怪な実験に使われた生物の死骸が捨てられたからだともいう。土はたっぷりと血を含んでいるように赤く、生い茂る草は異様に丈が高く緑が濃い。上空には飛翔生物が飛び、蜥蜴状生物が土を掘り返しては、昆虫や地虫をついばむ。

じーざけ【**地酒**】（**風立ちて**）ツェペシュ村の「学校（スクール）」にあるクラス用の地酒。マイヤーが自腹を切って購入してあった。冬期には零下一〇度が標準気温となるツェペシュ村の寒さのために「学校」でアルコールを飲むことはタブーとはなっていない。来客用に出されるものらしいが、女生徒にえこひいきされたDにはなみなみと注いで出された。

ししゃーにーよるーすいちゅうーこうげきーへいき【**死者による水中攻■兵器**】（**ダーク**）『都』の記録「ギャスケル大将軍の兵器目録」にも載っていた生物兵器。溺死者の死体を利用したもので、猛烈な吸気によって小さな渦を生じさせ、吸い込んだ物を砕く。その威力は五十トンの負荷に耐え得るサイボーグ馬の骨格を一秒足らずで破砕する。また、呼気をもって液体を超音速で飛翔する槍に変え、鋼の板さえ貫く。

「ししゃーのーあかつき」【**『死者の暁』**】（**一般**）アメリカの監督ジョージ・A・ロメロによる一九七九年の映画『ゾンビ』のこと。英語タイトル『Dawn of the Dead』を直訳すると『死者の暁』になる。監督ロメロは『ゾンビ』に先立つ六八年に、ゾンビ出現を描いたモノクロ作品『生ける死者の夜（Night of the Living Dead）』を発表しており、八三年にはゾンビたちの医学的特質を解明しようとする『死霊のえじき（Day of the Dead）』を作って自身の「ゾンビ三部作」に一応の決着をつけた。↓【貴族の暁】

じしんーたい【**■体**】（**双影の騎士**）REN台地では矮人族に神と呼ばれ、崇められていた。ケンツに破壊される。

じそうーしゃ【**自走■**】（**ダーク**）背後の円筒＝ボイラーを使用して蒸気で動く車。内部は二人分のスペースしかなく、ボイラーの熱気と水蒸気が容赦なく侵入する。蒸気車ともいう。Dとロザリアがクィンの似非遺言にしたがってヴァルハラへの移動に使用した。

じそくーろっぴゃくーキロ【**時速六百キロ**】（**複合**）①マッハ二分の一。マッハ〇・五。②Dの長剣がさばかれる速度。③人狼ガルーの瞬発脚力速度。④数十本からなる鋼線が、ギリガン操る大蟹ロボットから吐き出される速度。⑤速い順に並べ替えるとどうなるか？　⑥答えは②、①＝③＝④の順。Dの太刀さばきが一番速いに決まっとる。

したいーのーりようーほう【**死体の利用法**】（**夢なりし**）苛烈な環境のもとで生きる人々は、死者を必ずしも聖なるものとは考えない。髪の毛は特殊な獣脂を塗れば無限長の通信線として使えるし、臓器は移植が効く。骨ですら、高カルシウム分を含む肥料として重要な役を果たす。空洞化した脊椎に削った骨盤を取りつけ、腸の腱を張ったギターは、ベテラン調律師の手にかかれば、神韻縹渺たる妙音を発する。家族のある死体はともかく、路傍に行き倒れたものたちは、形ばかりの供養を済ませると、粗末な遺品だけを収めた棺が共同墓地へ運ばれるかたわらで、町はずれの「解体屋」へ運ばれる。

しちにんーのーしかく【**七人の刺客**】（**堕天使**）男爵バイロン・バラージュを暗殺すべく、父たるヴラド・バラージュ卿が雇った刺客＝超一流の吸血鬼ハンターたちを指す。タネル、紅はこべ、ヒチョウ、マリオ、ヨハン、ヨプツ、フシア、カゲの総勢七人から成る。いずれ劣らず、仲間を蹴落とす協調ぶりにおいては右に出る者がない。それでもくじ引きで襲撃の順番を決め、その順番を結構素直に守っているあたりが微笑ましく、なかなか憎めない暗殺集団である。誰ですか「八人の間違いじゃないか」なんて言ってるのは。カゲは一種の影男。頭数に影まで入れる人がありますか。もう一度算数をおさらいしなさい。

しちにんーのーまねきーびと【**七人の「招きびと」**】（**ダーク**）甦ったギャスケル大将軍がDを斃すために呼び寄せた七人の復活貴族のこと。登場順にシューマ男爵、ギリス少将、ゼノン公ローランド、ローランサン夫人、レディ・アン聖騎士、メフメット大公、グレートヘン博士の七人に加えて、最後にロカンボール卿を迎える。しかし将軍が城に奉る神祖の石像が手にした銘板にはこのうちの二名が記されておらず、しかも最後まで読めなかった最後の刺客の名は意外や意外の人物だった。それにしても、呼んだ方も呼ばれた方も、その理由の一切を知らず。なんともはや。↓【招きびと】

しっ-そう【疾走】（双影の騎士） 疾走時のDは、狂走するサイボーグ馬と並走するほどの速度を出す。当然ながら人間はおろか、貴族にもできない芸当である。一瞬の休みもなく三日で二千キロ以上を走破した。つまり七二時間で踏破したことになり、時速二十七キロ以上の俊足というか、文字通り駿足となる計算である。

しっぱい-れい【失敗例】（風立ちて） 実験の失敗作として、廃墟に閉じ込められていた。七、八歳児程度の大きさで、異様にせり出した額と陥没した両眼を持つ。その血走った瞳には人間性の断片すら窺えず、並み外れた大きな唇に赤黒い舌、しかし上下の歯並びは人間のそれ。四足歩行をする。農家の主婦と子供を二体で襲った。長い頭髪がある。青白い水死人のような肌。単に生物というのでなく人間には違いないが、骨格の形状、筋肉の発達、内臓部位など二百近い点で明確な相違点が認められる。頭骸の形から脳容量、知能程度ともに極端に低いだろうと推定される。

じどう-しゅじゅつ-ユニット【自動手術ユニット】（風立ちて） ツェペシュ村廃墟の実験室にあった超科学機器のひとつ。

しなず-の-けしょう【死なずの化粧】（堕天使） 辺境の地で広く行われている化粧で、埋葬の際に、再生を期して死者の顔に施される。化粧好きのクロモが用いた場合、死者は文字通り「死なず」の状態——再生してしまう。

ジナ・ボラン（風立ちて） ツェペシュ村の住人セカ・ボランの娘。貴族の犠牲になった。埋葬されようとしていたところ、昼にもかかわらず棺を突き破り、吸血鬼ハンター＝ゲスリンの喉を締めつけ、そのまま道連れにして川に沈んでいった。まだ八歳の若さだというのに。村での登録ナンバーは009。

シニストロ-じょう【シニストロ城】（戦鬼伝） 貴族の廃墟だが、昔も今も、堅牢無比な城塞である。地下数十階に据えつけられたその大原子炉は七千年前から、そして五千年後貴族が撤収したのち現在までの二千年間も絶えずエネルギーを供給し続けている。発電量は時間当たり五千万メガワット。その供給先＝エネルギー・ラインの末端は記録装置から故意に削除されていたため謎であったが、若き言語学者＝セルナ・ニコルによって古文献から解読された。

しにん-づめ【死人爪】（ダーク） 吸血鬼やその犠牲者の手が人間の身体をつかんで、切り離しても指だけが食い込んだままになる現象。いったん食い込んだら相手が死ぬまで離れない。その爪には死人毒があって、心臓にまわれば長くても一日で死亡してしまう。ギャスケル城から迷い出た三人官女の正体を暴いた運送屋ジュークがこの犠牲となる。解毒には死人毒と同じ成分を持つ草（おそらく毒草）を使うしかないが、その草はギャスケル城の中庭の真ん中に生えていた。解毒草の仲間には猛毒のジュポン・デ・ラ・ネールや誘導草ギャトガヤ・チェリアンなどがある。

しにん-の-て【死人の手】（D） 貴族が作った人工魔、死人の手そっくりの青白い花。安全だが、奇怪な存在である。人狼から逃げるダンの足に絡みつくが、力を込めて引けば簡単に抜けてしまう。

しねん-が-うんだ-ばけもの【思念が生んだ化物】（双影の騎士） 大施設の観測室でDたちを襲った怪物。部屋の機能が光り輝く姿を形作った。その光のなかに〝部屋の主〟の顔が見える。その光には破滅的なエネルギーがみなぎっている。このエネルギーは「にせD」の肉体の防御機能をオーバーするほど強力。

し-の-きり【死の霧】（堕天使） ミスカ・ドレイクの技。自分の血や自分が触れた犠牲者の血を戦う相手の体内に入れて毒に変え、霧にして相手を包む。貴族といえど三日は身動きができなくなるという。

しはい-にん【支配人】（夢なりし） シヴィルが眠る「村」のホテルの支配人は禿げ頭だが、地主でいばり散らすスタンレイ・クレメンツの鼻を明かしたこともあり、Dには好意的である。

しびと-かいどう【死人街道】（双影の騎士） 北湖山脈が忽然と消失したために出現した北の果てにある道。ムマヘと向かってこの道を辿った者たちは五千年以上にもわたり、総数は二千万人以上。そのすべては〝あのお方〟の実験に使用されるためにムマへと呼び寄せられたもので、この街道は実験に使用できる人間を選別するためのテスト・コース。やる気のない人間——精神的な強さの足らぬ人間は、この街道ですべてを投げ出し、進むことも退くこともできずに、路傍の屍と化して果てる。

ジミー・サングスター【Jimmy Sangster】（一般） 英国ハマー・プロ五五年製作のモノクロ怪物映画『怪獣ウラン』の脚本を手掛けたことから、ハマー・プロで製作された無数のホラー・SF映画を書きまくった脚本家。もちろんハマー初期の傑作『フランケンシュタインの逆襲』や『吸血鬼ドラキュラ』の脚本を手掛けたのもこの人である。一時期は本名では足りずに別名儀まで使用していた。七四年にハマー・プロは倒産したが、特に辺境に追放されることもなく、八〇年代になってからはペーパーバ

ックの推理小説にも手を染め、日本でも『誘拐』(角川文庫)などが翻訳紹介されたりした。

しもべ【下僕】(死■■) 貴族の下僕となった者の身体は、とどめを刺された場合、下僕化からの日数によってさまざまに異なる。下僕化から三日目ならば腐爛死体となり、半月後なら、溶解してしまう。一年以上経った場合であれば、まず塵と化す。死のみは正しい生命の限界に従う理である。

じゃおう-せいだん【邪王星団】(原典) 正式名称『D—邪王星団』。シリーズ第十二長篇。二〇〇〇[平成十二]年七月三十一日第一巻発行。以下、第二巻は二〇〇〇[平成十二]年十一月三十日、第三巻は二〇〇一[平成十三]年二月二十八日、第四巻(完結巻)は二〇〇一[平成十三]年四月三十日に、それぞれ発行。原稿分量と執筆期間を換算した場合のシリーズ最大長篇。神祖の手で宇宙に放逐されていた"絶対貴族"ヴァルキュアが五千年を経て地球に帰還、七人の刺客を放って復讐を開始する。久しぶりに"時だましの香"が登場したり、前作『ダーク・ロード』から引き続いてギャスケル大将軍が登場したりと、さまざまにシリーズ他作品への読書欲を刺激する最新作。完結巻を待って本事典を完結させる計画もあったが、残念ながら項目収録を断念。

しゃくねつ-しゅりゅうだん【灼熱手榴弾】(ダーク) 輸送隊三人組のゴルドーが死人毒に侵されたジュークに自決用に渡した。もちろん使わずに済むけどね。

シャケロ(想秋譜) シャーリイズ・ドアの村人。セシルが生贄としての初夜を何事もなく過ごした代わりに、その幼い娘が貴族の犠牲となってしまう。

ジャスト【J】(■合) 辺境標準時の時刻表示のひとつ。

①ゼロ・ジャスト(0J)は真夜中を指す。

②ママ・キプシュが家の奥の調剤室で、薔薇姫の吸血薔薇解毒剤を調合しながら、ヤキの青い苔が足りないとエレナに告げた時刻が、0J。

シャバラ-けいこく【シャバラ渓谷】(堕天使) OSB占戦場のある大平原の外れにあり、刺客とDとの死闘の舞台となった。数万年の歴史を有する大渓谷で、貴族以前に覇を競っていた超古代の人類が棲んでいた。その本体は金属で作られた城塞。滝の部分は城壁で、滝の途中に突き出た岩は、下部レーダー・サイトらしい。大平原側の入口から川沿いの道を二キロ入ると、天も見えないほどの崖に錆だらけの巨大な鉄の鎖がぶら下がっている。Dはこれをうち振って音波探査機がわりにして、渓谷内のすべての生物の存在を識別した。浮遊虫、巨大な甲殻生物、七色の蝶、薄紫色の毒茸などが棲息。天空からの鎖の二百メートルほど離れたところには、急な石段がある。一万段ほど登ると、山腹を削り取ったような広場に出る。削り取られた山腹には全高百メートルに達する石像が彫刻されている。かつてこれを発見した人間の探検家が、その凄惨さに打たれて三日三晩動けず、ミイラと化したという。

シャムニ(堕天使) 大湿地帯と峠のあいだにある中央街道の村。D一行が街道魔術師ヨハン卿の前を通り過ぎたのはこの近く。しゃにむに通り過ぎたわけではない(と思う)。

じゃ-ようせい【邪妖精】(夢なりし) 毒花の汁を血とし、花びらの皮膜を肉と化した花中の妖精。小さな槍を手にしている。月光を浴びた白い花びらが、うすむらさきの霧を吹く時、同時に邪妖精が地に堕ちる。

じゃ-ようせい【邪■精】(風立ちて) 貴族たちが作り出した人工獣のうちでも、妖精は例外的に友好的性格のものが多いが、やはり邪悪なものも存在する。これを邪妖精と呼ぶ。妖精飼育工場跡でヘイグたちに取り憑いたのもその一種。憑かれたものの影は、妖精のそれに変わるらしい。その姿は芋虫を思わせる胴体と、針金のように細い手足がグロテスクなアンバランスを成している。溺死の人間に憑依能力を有するものをうまく使えば、調教不能と言われる一角獣に広大な土地の開墾をさせることも可能。またグリム鶏の産むウラン塊を三日に一個から一日に三個に増量することができる。貧しい辺境の村では、危険を冒してまでも飼育する場合があるという。ツエペシュ村にもかつては飼育場があったが、いまでは廃墟と化している。

シャーリイズ・ドア(想秋譜) ランダウ平原のほぼ中央部に位置する人口二千足らずの村。とりわけ秋に映える村として知られ、緑に黒ずんでいた世界

が夕焼け色に染まり始めると不思議な活況を呈し出す。「あそこは秋に気に入られているのさ」と十キロほど離れた隣村の人々が言い、「秋の村、秋の人々――それならば、秋の旅人がいるだろう。しかし、私はその任ではない」と、昔その村に滞在した無名詩人が謳った村。村の北外れには沼沢地があり、かつての貴族の館の所在地として記憶される。秋の村シャーリイズ・ドアへは、森からの一本道を分かれ道で左へと曲がる。分かれ道にあるべき標識は失われているのでご注意を。

ジャルハ（ダーク）ドネリコの北五キロにある村。鉄道の駅があり、辺境商工ギルドが物資補給の一ポイントに使用している。シューマ男爵の入った柩と土は、前の駅ヴィゴネールから乗車してこのジャルハで降ろされたが、到着は奇跡的に三十分遅れに留まった。よかったね。

シャングリ・ラ【理想の地】（堕天使）貴族同士の戦いによって敗れた者たちが逃げ込む逃亡者の理想郷。古代の魔道書に最先端の量子力学や神秘工学の成果が組み合わされ、数千年の時間と数千万人の滅びの結果として、異界へのほころびを開けることに成功し、この地を見出した。現在では、辿り着く術を知る者が死に絶えて、単なる伝説の地とされているが、実はいたいけな子供二人の生命を代償に契約をかわした「案内人」の案内によってのみ、大海原に出現した白い道を辿って渡ることができる。

シャングリ・ラ・ワイン（夢なりし）シヴィルが眠る「村」の酒場でDが注文した飲みもの。「酒はやらん」（アイ・ネバー・ドリンク・ワイン）がダンピールの口癖だったはずだが……。

ジャン・ドゥ＝カリオール（堕天使）クラウハウゼン村に住む辺境統制官ヴラド・バラージュお抱えの医師。いわば典医である。神祖から直接、魔法手術の手ほどきを受けた。また、男爵バイロンの母コーデリアにつき添い、バイロンの出産を担当した博士で、バイロンの幼年期と少年期での、最も優れた下僕であり、教師であり、心の師であった。腰の曲がった老人。金襴の刺繍の異様に丈の長いガウンを身に纏う。老人斑と皺と白い顎鬚で埋め尽くされた顔は太古のミイラのようなのに、糸みたいに細い両眼には黄色い光が溢れ、途方もない知力と邪悪さと意思の力とを噴きこぼれさせている。ヴラドの命令で愛するコーデリアに人体改造手術を施して以降、ヴラドを弑するチャンスを狙っている。コーデリアのために分身を造りだす技術を発明したが、その分身の破滅をコーデリアに命じられ、制御装置らしい機械を破壊したあとに頸動脈を切って自殺する。

シャンバラ-の-もり【シャンバラの森】（[illegible]）辺境特有の、昼なお暗き魔の森。サクリの村からは約三百キロの果てにある。さまざまの薬草と同時に、貴族の実験によって作り出されたクビトリやキバナシクイ、金属生命体や蛇人間、果ては「森の人」などの魔の生物が棲息する。

じゅう【十】（D）ドリスの父親が書き残した吸血鬼の弱点を示す単語の最初の一文字。

じゅう-がた-エネルギー・タンク【10型エネルギー・タンク】（風立ちて）ツェペシュ村の保安官の持ち馬であるサイボーグ馬の胴体下部についているタンク。リナがその馬の体色とともに個体識別の判断材料としたところを見ると、タンクの型は外見上の大きな特徴となっているらしい。

じゅうごう-きんぞく-ドリル【重合金属ドリル】（堕天使）山賊が馬車の解体に使用する。岩をも穿つ。しかし男爵バイロンとミスカの馬車には文字通り歯が立たず、ドリルの歯が折れた。

じゅうじ-か【十字[illegible]】（ダーク）現在でも貴族を撃退する力を持つ、失われた古代宗教の品。アドルカの司祭が廃墟で発掘に従事していたが、それは図らずもレディ・アンと親子ゲンカを始めたゼノン公ローランドの長槍によって石壁の奥から出現した。

しゅうよう-じょ【収容所】（D）貴族のくちづけを受けた犠牲者を収容する施設。全長十メートルに満たないカマボコ形の収容所のまわりは武器で覆われている。

シュウマ（堕天使）Dを護衛する黒マスクの一団のメンバーのひとり。公爵シェーン・グリードとの戦闘で死亡。

ジューク（ダーク）辺境商工ギルド輸送隊の護衛のひとり。髭面の男で喧嘩好き。強いというだけで相手に敬意を表す癖があるらしい。左手一本で反動の大きな火薬銃を自在に操る。射撃のプロも顔負けの腕を有する。ギャスケル城から迷い出た貴族の犠牲者に襲われ、死人爪の毒を受けて重態に陥るが、Dが城の中庭から取ってきた解毒草でケロっと治った。Dの右手と二度も握手した痛快な人物。

シューシャ（双影の騎士）サイボーグ老人ギイの姪で魔道女。ギイとともに地下帝国（＝大施設）で働いていたが、その苛酷な実験に発狂寸前になり、何名かの仲間と亜原子炉を暴走させて逃亡した。凍てついた氷河の谷間の村に住いを構え百年を過ごしたが、夢の中での神祖の呼び掛けに耐えきれず村を後にした。それから三百年、幽鬼のごとき姿で辺境をさまよい歩き、セドク村の北の丘陵地帯に居を定め

たが、家ごと焼かれて三年前に死亡したと伝えられる。村人に殺される前夜、夢に現われた神祖の手で取り替えられた心臓のために、死なない幽霊となっている。神祖の侍女だった。ムマの入口に引き込む能力は〝あのお方〟の秘書として身につけた能力。

シューマ-だんしゃく【シューマ男爵】（ダーク） ギャスケル大将軍の呼んだ七人の「招きびと」のひとりにして復活貴族。ごく稀にいる昼歩く貴族でもあるが、陽光を防ぐために上薬を塗っているらしい。丸い山高帽に膝まであるケープ、ジャケットからボウタイまで朱色ひとすじに固めている。顔は若いのに、鼻の下には美髯を蓄え、右手には黄金の握りのついた青いステッキをついている伊達男。その技は、相手に触れずしてステッキで敵を突き殺す。百年前の父の代からの約束によって将軍の招きに応じるが、Dとは「呪われた保管庫」のなかで対峙した。ギャスケルの空間移動にヒントを与えた本人。その礼として、杖に防御機構の修正回路が組み込まれている。かつて叔父が隠したという対神祖用の武器を発見しようとするが失敗し、レディ・アンの花を受けて退却。さらにギャスケルがロカンボール卿完全復活のための「四つの生命」のひとつとして自分を殺そうとしているのを知って逃亡。カクタス村の湯につかりながらD一行を待ち、共闘を提案した。追ってきたロカンボールと対戦するが、再現された自分の技で身体を六つに斬られ、そのまま滅びた。裏切り者でも薄情者でもなく、飄々としてノンシャランな憎めぬ人物。

Y. Amano

シューマ-の-おじ【シューマの叔父】（ダーク） シューマ男爵の叔父さん。神祖の宮殿で「究極戦闘要員」のトレーニングと武器の開発を担当していた。クラクフ村近くにある瀑布の裏に隠されていた人間の宗教儀式を掃討した現地指揮官。性格的には諧謔味に富んだ男で、ために神祖の配下でありながら神祖を滅ぼす武器を開発してしまう。しかしまた意外と小心者で、完成した武器に怯え、自分が掃討した人間の宗教儀式の遺跡に武器を隠した。隠し場所には遺跡の溶解に使用した生体機器を護衛として待機させていた。

じゅじ■つ-ぶんめい【呪術文明】（双影の騎士） 貴族たちが発展させ、高度なレベルで実現したそのほとんどは、垣間見ることもタブーとされ、あるものは焼かれ、あるものは地底深く封印された。その禁断の知識の発見と再現は、ほとんどが邪悪な目的を持つ人間の魔道士たちによって行なわれた。

シュタール（■■姫） サクリ村バイク青年団の一員にして副リーダー格。負けん気の強いエレナのよきキャッチャー役。シャンバラの森で蛇人間の犠牲になりかけたのがこの人。その直後、エレナを追う黒騎士を阻もうとして、ついに命を落としたのもこの人。本当ならエレナのよき伴侶として、快活な家庭を築くことができたはずなのにねえ。

シュタイン-げんし-だん【シュタイン原子弾】（堕天使） 男爵バイロン・バラージュの持ち物。外見は銀色の円筒に過ぎないが、その威力は全高百メートルに達する石像を瞬時に炎に包み、消滅させてしまう。

しゅってん-きょか【出店許可】（夢なりし） 万能屋マギーが治安官に求めたもの。辺境の村で巡回商人が店開きをするのに必要らしい。

しゅどう-コントロール【手動コントロール】（死街■） 移動街区の手動（マニュアル）システム。五百年前に廃棄したって言ったでしょ！　いま頃言っても手遅れです！

シュトルム（堕天使） 大湿地帯の泥土の大渦巻き。直径百メートルにも及ぶ。

ジュポン・デ・ラ・ネール（ダーク） 一メートル以内に近づいただけで、どんな生物でも即死するという猛毒の花。ギャスケル城中庭の薬草園に咲いていた。

シュラト（■■伝） 北方辺境の雪国の村。Dが身体の疲れを癒すため、一軒の旅館に部屋を取った村でもある。酒場でワインを頼んだところ、父親の酒を買いにきた少女ライアと遭遇した。

ジュラン（戦鬼伝） 半月ほど前、シュラト村のライアの家に現われ、そのまま居座ってしまった三人衆のうちの一人。野良着姿に能面のごとく無表情な大男としてDに相見えるが、左手の評価によれば、三人衆のうちでは最も手強いとか。何もない空間に浮かび上がらせた青い影をもって敵の姿形を模した偽装体を作り、その偽装体を消すことによって本体をも消滅せしめる妖術を使う。偽装体をDに重ね合わせようとしたところを袈裟掛けに斬り下げられてしまった。

じゅんかい-こうえき-にん【巡回交易人】（D） ド

リスの農場で採れる合成蛋白を金銭ないしは生活必需品と取り替えてくれる交易人。ドリスとダンが栽培した蛋白は高密度と定評があり、交易人は破格の値段で引き取ってくれる。

じゅんかい-どれい-こうじょう【巡回奴■工■】（**双■の■士**）強盗団が捕えたミア・シモンを売ろうとした相手。

ジョーナ（**■天使**）クラウハウゼン村方面へ父と一緒に向かっていた娘。化粧好きのクロモに化粧をされて操られ、父親を護身用のナイフで刺し殺した。その直後、ジョーナ自身もクロモに刺し殺され、ビアス川に投げ込まれた。ただそれだけ。無益な殺傷場面の少ない「Dシリーズ」だが、これは見事に物語とは無関係。いくらクロモが異常性格者だと説明されても、ちと可哀想ではある。ただし、クロモが川べりに流れ着いていた男爵バイロン・バラージュを発見するきっかけにはなった。

じょうか-えん【浄化炎】（**ダーク**）Dの左手の人面疽が大気を吸い、Dの血を飲むことで口腔の奥に燃える青白い炎。このエネルギーでDの体力を維持し、破損し損傷した部位の治療を行なう。ローランサン夫人の銀の針——盲目毒にも有効だが、この場合は解毒に三日かかった。

しょうきゃく-だん【焼却■】（**堕天■**）山賊の頭ドゴマがベニスの勧めで男爵バイロン・バラージュの馬車を焼き払うべく使おうとした武器。その焼却温度は二万度を越えるため、使ってしまったら「何もかもおじゃん」になってしまう。ベニスより美人のエルデは代わりに左腕のリモコンで、修理した気象コント■ーラーを太陽光モードに転じて馬車を攻撃した。ベニスは面白くなかったに違いない。

しょう-けん【小剣】（**堕天使**）刃渡り二十センチほどの黒い剣。Dの持ち物。

しょう-じょ【少女】（**妖殺行**）特にヴィシューヌ村の村長の娘を指す——というより、それ以外に呼びようがない。夕顔のようにあどけない細面の顔に腰までかかる髪の美少女というだけで、名前はいまだ知れず。十七歳になったばかりだが、闇と光——貴族と人間の差を超えた想いによって男爵マイエルリンクと結ばれ、その逃避行に身をまかせる。最新映画版で初めて「シャーロット」と名前が付いた。名付け親はもちろん川尻善昭監督。

しょう-ぞう-が【肖像画】（**D**）リイ伯爵の居城の広大な地下広場、全高十メートルもある石壁には「神祖」の肖像画がかかっている。

しょう-ぞう-が【肖像画】（**原典**）正式名称『イゾベルの肖像画』。天野喜孝画集『かんおけ』のための書き下ろしD短篇。脱稿と同時に英語翻訳版が製作され、バイリンガル掲載された。初めて公式に英語版が発表されたD作品である。村の名前も村長の名も知れぬのに、イゾベルだのイゾデルだのイザベルだのいっぱい出てくる。ああややこしい。

しょう-たく-ち【沼沢地】（**想秋譜**）約十平方キロの土地に大小二十近い沼地が点在する湿地帯。シャーリイズ・ドアの村北の外れにあり、かつての貴族の館の所在地として記憶される。地熱によらず、水に含まれるバクテリアのせいで、水温は二十度を下らず、毒素を成分とする瘴気は、近づく生物をことごとく死亡させるばかりか、耐性を有する怪生物を生み出すに至っている。村長の息子ライルがそんな怪生物の一つ、一種の水蛸に襲われ、水中に引き込まれかけた。昼なお暗い沼沢地へは、森からの一本道を分かれ道で右へ曲がるのが近道です。

しょうめい-だん【照■■】（**妖殺行**）バルバロイの里へ入るため、援助を請うための連絡としてマイエルリンクが使う。

しょうめい-ちゅう【照明虫】（**聖魔■歴**）青く眩い光を放つ虫。ホタルのような発光昆虫と思われる。文字通り照明に利用するが、闇を駆逐するまでには光は強くない。バイパー婆さんが馬車に装備していた。

しょうめい-スティック【照明スティック】（**ダーク**）二十センチほどの化学物質を棒状に固めたもの。ひと振りで眩い炎を放つ。

しょく-しゅ【触手】（**聖魔遍■**）特に「帰らざる砂漠」の中を移動する森の川の中に潜む触手は、先端が鋼鉄の槍になっている。おびただしい触手を持つ。

しょくしゅ-の-かたまり【触手の塊】（**■立ちて**）サイラス・ファーンが飼育する護衛獣（ガード・ビースト）のうちのひとつ。紫色で、うねうねと蠢く。動く毛玉と思えばよろしい。うえぇ。

しょく-にく-じゅう【食肉獣】（**夢なりし**）全長二・五メートル、体重七百キロを軽く越える酒樽そっくりの草食獣。レーザーすら通さぬ鎧（よろい）のごとき黒い甲殻と、パワー・ショベルを連想させる顎、その形に沿って湾曲した上下二本、つまり、上顎に一本、下顎に一本の巨大な臼歯というおぞましい外見にもかかわらず、この上ない美味を食卓に提供する。奇怪な姿形の存在は人間を毒すためにしか許さなかった貴族の美意識が生んだ例外中の例外。致命傷を与えぬ限り、切り取られた部分の肉は十二時間で盛り上がり、当人は苦痛も感じず暴れもしないという重宝さで、二頭いれば、五人家族が飢えることはない

とされている。その代わり、滅多に子供は生まぬ上、個体数も限られていて、一頭でも見つければ、貴族の飛行マシンが買えるだけの金と交換できる代物。飼育には食肉獣用の合成作物の結晶を与える。獰猛だが知能程度は高く、うまく扱えば「馴らす」ことができる。ただし、相当の危険と忍耐を必要とする。

しょくにく-せいめい-たい【食肉生命■】（ダーク）ガス状の生命体。他の生命体の体内に侵入して、その肉体を同化する。さらに特定のガスがこの生命体の成分と混じると、猛烈な毒性を発揮して自滅させることになる。ヴィゴネールを経由してジャルハに向かう貨物列車の荷物係が、強盗団に買収されて列車の護衛を始末するために用いた。

しょくにく-ネズミ【食肉ネズミ】（ダーク）仮称「殺戮の村」が襲われた時、ヤライの店の倉庫にいた。まあ、このくらいのネズミは珍しくないのであろう、ロザリアが見ても驚かなかったくらいだから。

しょくよう-ごけ【食用苔】（風立ちて）辺境の村にとって貴重な代用食になる苔。ステーキからスープ、ジャムと万能の調理が可能。また、この苔から生じるエキスを塗れば傷口もたちまちふさがる。毒蛾人間の毒も抜けるという便利な代物である。

じょし-と-しょうじん-は-やしない-がたし【女子と小人は養いがたし】（堕天使）「養いがたし」とは「手がかかる」「面倒だ」くらいの意。まったくへこむ様子のないタカビー女貴族＝ミスカ・ドレイクに対して、男爵バイロン・バラージュがDに近づきながら、嘆息交じりにもらした言葉。貴族も人間も、女と子供は扱いが■しい――やれやれ、大変だ、わしゃかなわんよ、という意味。原作者の本音でもある。女もいろいろ苦労はしてると思うが、なればこそ、男こそほんとに苦労してるんです。果たしてDは男爵の嘆息をどう聞いたか。

しょじょ-の-いき-ち【処女の生き血】（一般）今は亡きアンディ・ウォーホルが製作し、弟子にあたるポール・モリセイが七四年に監督した変態吸血鬼映画。顔のてらてらした俳優ウド・キアが、処女の生き血しか受け付けない特異体質の吸血鬼を怪演。だまされて娼婦の血を吸ってしまい顔面蒼白、全身虚脱、見るも哀れな境遇に陥る。まことに可哀想な、しかしカルトな人気を誇る吸血鬼映画。ウド・キアは九八年の『ブレイド』では純血の吸血鬼に扮している。

しょじょ-の-ち【処女の■】（双影の騎士）若い生娘の処血は、貴族が最も好むものである。それを百も承知でミア・シモンは自分の左手首を切って「処女の血」をしたたらせ、その血を代償に「にせD」を斃してくれとDに依頼した。

ジョッホ-りゅう【ジョッホ竜】（ダーク）貴族の力を使っても作り出すのが難しい透明生物の一種。ギャスケル大将軍の浮動領地にだけ棲息する。侵入者撃退用に使われた。体液は青緑色。体長二〇メートルほど。全身は熊に似ているが、毛はなく、身体つきもずっと■く華奢だ。形だけは人間そっくりの頭部を持ち、三本の指には二十センチもある鉤爪がついている。

ジョン・■・ブラッサリー・ブルート八世（死街譚）Dとともに移動街区に乗った男。街では特別住宅区のP9、治安局の隣に部屋をあてがわれた。皮のヴェストを着用し、腰のベルトには山刀を差す。身長は百六十センチと小身だが、険悪な面構えの髭面で滅法強い。憑依能力の他、テレパシー、分子浸透、吸血鬼をも倒す円盤剣など、技は多い。ハットン治安官に憑依し、町長ミンに憑依し、果てはローリイに憑依し、背後からDに杭を打ち、お目当ての疑似吸血鬼の方程式・化学式を町長ミンに売りつけようとした。売り手市場のため、最終価格は五千万ダラスから五億ダラス、五千億ダラスへと跳ね上がった。

シリアス【S】（死街譚）放射能汚染度指数。例えばSマイナス・9の場合、放射能汚染はごく軽微なため、薬によって除去可能。

ジリイラ-の-やま【ジリイラの山】（双影の騎士）セドク村の西の外れにそびえる山塊中のひとつ。海抜一五〇〇メートル。山頂は四季を問わず雪を戴く。大洞窟の施設の脱出孔のひとつがここに開いている。山頂から百メートルほど下ったところに、百年以上も前に造られた避難所がある。

しりょう-きし-だん【死霊騎士団】（薔薇姫）いかなる武器をも無効とする姿なき気――死気の集団。死人の集団ゆえにこれ以上殺すことができない。ためにDを苦しめるが、左手の■転による〝朱色の煙〟によって一時的とはいえ撃退され、残りは謎の遺跡の発する波動によって掃討された。

しろい-はな【白い花】（風立ちて）リナの部屋の窓の下にある小さな花壇に置いてあった。辺境の道でよく見かける。

しろ-ウサギ【白ウサギ】（堕天使）ヒュウの誘拐者からの手紙を持ってきた白ウサギ。二本足で立って、馬車の扉に手紙を張りつけた。Dの針で刺されると、なんと爆発してしまう。ヨハン卿の魔術の産物らしい。

しろ-きし【■■士】（薔薇姫）ダイアンローズの四騎士のうちの一騎にして大将格――というより謎の存在。推察するところ、薔薇姫に仕えて五百年。生

きている剣＝殺戮者〝スレイヤー〟を操る。薔薇姫城館の地下二百メートルの穴蔵――十キロ四方、高さ五十メートルの巨大な地下室にこもり、食料とホムンクルス相手の修行のH課を日々の糧として過ごしている。薔薇姫が何の前触れもなく穴蔵に通したDを見て、歓喜に身震いする。

しろ-の-じゅうにん【城の住人】（原典） 作者が密かに書き下ろしたDの第四短篇。二〇〇〇年末の新宿ロフト／プラスワンにて開かれた「忘年怪2」で、生原稿のまま幸運なファンへの贈り物に供された。前年の「忘年怪1」では、同じように『魔界都市ブルース』の書き下ろし短篇が生原稿プレゼントされている。ファンの狂喜はもとより、祥伝社ならびに朝日ソノラマを始めとする各出版社の担当編集者――いわゆる「菊地番」が目を剝いて愕然とし、地団駄を踏んだことは言うまでもない。ベストセラー作家の気まぐれというかファン・サービス、ここに極まれり。

シン（北[illegible]行） 通称〝傀儡のシン〟。ギリガン五人組のうちのひとり。身長は十四、五の子供の背丈ほどしかなく、土気色の肌に老人斑ばかりが小さな洞窟のように目立つ醜い顔をした老人。赤いマントをまとっている。傀儡師の名の通り、二十センチほどの木彫り人形を操っては人目をたばかる術師だが、その人形たるや、血糊の詰まった血管まで内蔵した精巧なもので、しかもシンひとりの傀儡魔力で、村の広場すら人形で埋め尽くすことが可能。ゴム製の小さな蜘蛛を操り、クロロック教授から珠の秘密を聞き出すが、教授にナイフで首を刺し通され、死亡。

シンアイ（堕天使） ミスカ・ドレイクが持つ記憶再生装置――一見、函としか見えないプレイヤー。その再生映像は視覚、聴覚はむろん嗅覚にも及ぶ。旧式のアンタッチ・スイッチでオン・オフをするらしく、ディスクを再生するのには三秒かかる。ミスカの祖父コルネリウスが神祖から拝領したありがたい品で、本来は「親愛」と書くのが正しいらしい。

しんけん-かいじょ【[illegible]】（風立ちて） 辺境では平均十五歳ほどで一人前の責任能力を有すると認められ、自立する。日本の元服なみ。環境が自立を要求するのである。リナに対する村長の親権は一昨年で切れていた。

じんこう-じんたい【人工靱帯】（堕天使） サイボーグ馬に使われている人工部品。

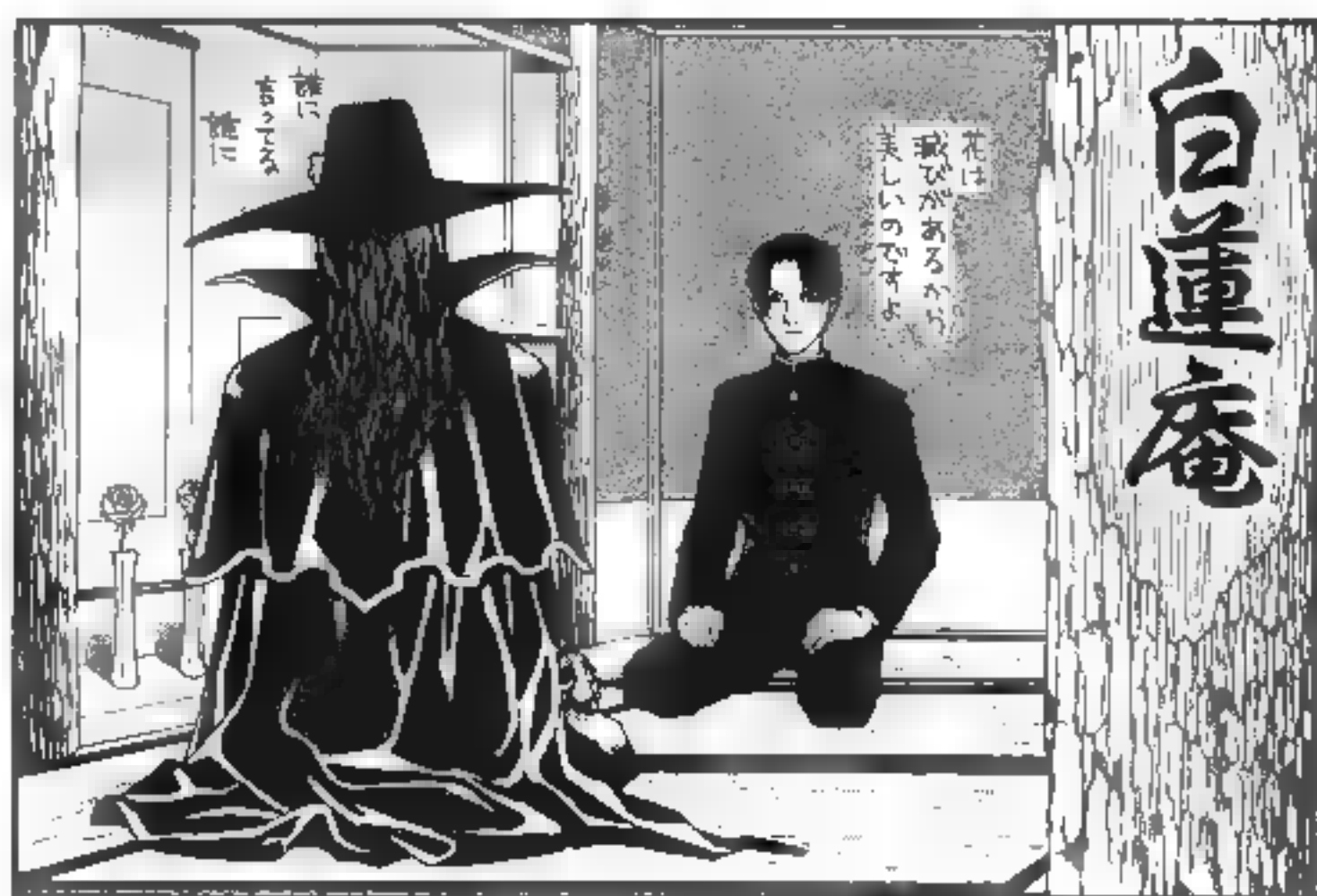
じんこう-の-いどう【人口の移動】（風立ちて） 『都』の革命政府が辺境開拓を大命題の一つに掲げ、地区単位、村単位で人口の移動を禁じた。よって、人々は過酷な環境の土地であっても、そこで暮らすしかなくなっている。

じんこう-の-しぜん-の-やみ【人工の自然の闇】（堕天使） OSBの「人工の自然光」に対抗するため、古の貴族が「人工の自然の闇」を作り出した。しかし、実戦に使用された記録はない。Dは神祖がそれを封印したと推定している。放置されれば一年もしないうちに地球そのものが、さらには全宇宙がこの人工の闇に包まれてしまうからである。一種の反物質か。

じん-こつ【人骨】（夢なりし） 空洞化した脊椎に削った骨盤を取りつけ、腸の腱を張ったギターは、ベテラン調律師の手にかかれば神韻縹渺たる妙音を発する。

しんさ-かん【審査官】（風立ちて） 政府が年にひとり、辺境地区の村から最も優秀な子を抜擢して『都』の教育機関で学ばせるシステムがある。『都』から学院に進む者の審査にやってくる、その選抜のための審査官。ツェペシュ村を訪れた審査官は、要請により、貴族の廃墟でリナの最終試験を行なった。

しんしゅ-せいぶつ-はっけん-の-とりきめ【新種生物発見の取り決め】（風立ちて） 新種生物を発見した場合は、頭骨ごと脳に冷凍処理を施し『都』に送る取り決めになっている。

しん-じんるい【新人[illegible]】（死街譚） 人間の精神とやさしさに、貴族の不死身を持ち、俗世の汚れを知らず永遠の生を謳歌する存在だ。わしはしくじったが、ナイト夫婦は成功した。――「わし」とは誰のこと

K. Sakashita

か、言うまでもないねえ。発想はよかったんだが「完璧さ」を求めたのが徒となりました。どこかの高校生も言うように、完璧なのも欠点ですからね。

しんーそ【神祖】（一般） 言ってしまっては身も蓋もないが、早い話がドラキュラ伯爵のこと。いかなる大貴族も畏敬の念を払う最高権威、まさに神のごとき存在である。小説の文中には「ドラ」までが台詞として登場しただけで、分かっちゃいるけど敢えて明言してはいけない「名前」として封印されている。菊地先生が講談社の要請を受けて、ブラム・ストーカーの名作『吸血鬼ドラキュラ』の児童向け簡約版を執筆したのは、Dシリーズでその名を明記できないフラストレーションのせいではない（と思いたい）。ミナへの執着が原因で一度は灰になる。貴族科学院で「運命」をめぐる騒動の時、千年ぶりに姿を現わしたとの記述があり、どうやら灰になったあとで蘇ったらしい。身長は二メートルを越す。広い肩幅、胸の広さと厚さもかなりあるらしい。

しんそーのーおすみつき【神祖のお墨付き】（堕天使） フィッシャー・ラグーンが神祖から受け取った「お墨付き」の内容は以下のとおり。ひとつ、クラウハウゼンの村人の血を吸ってはならない。ふたつ、夜間の公共娯楽場はフィッシャー・ラグーンがとりしきる限り、自由勝手とする。その他にもいろいろある。このため、ヴラド・バラージュ卿もラグーンの館にだけは手が出ない。

しんたいーきょうかーやく【身体強化薬】（堕天使） ジャン・ドゥ＝カリオールが作り、千手足のサイファンに飲ませようとした薬。肉体を鋼鉄に変える薬で、一滴飲めば、ひと打ちで館の核炉防壁も破壊できる超人になるが、一時間で全身が粉々になる。カリオールが「破壊者」をミスカから移す肉体を作るために完成した薬。貴族でないものが「破壊者」を宿らせれば、その肉体が保たないためである。

しんぴーそう【神秘層】（双影の騎士） 南部辺境随一の魔道士オリガ一族のみが触れられる、人間の精神の神秘域。

しんりーきょうせいど【心理強制度】（聖魔遊撃隊） 心理攻撃の強さの程度。単位は貴族定量のリゲルを使用。砂漠でDが受けた心理強制度は、貴族定量で五千リゲル。並の都市なら千分の一秒以内に全住民が発狂するほどの強制度。

ス

スーイン【風立ちて】 七十歳ほどになるツェペシュ村の村長。『都』からの物資を調達するのもうまいし、妖魔への対抗策もよく心得ている、村一番の実力者。リナの高い知能に眼をつけて養女にし、また無理やり肉体関係も結んでいる。村に貴族が出現したためゲスリンを、次にDを雇った。リナの誕生日にプレゼントを与えるどころか、大切なものを奪っている。実はスケベ爺い——というより、もはや人間ではない。村長などにしておいてはいけない。北の辺境フローレンス村のスーインとは何の関係もないことを祈りたい。

スーイン【北海行】 年の頃二十前後、フローレンス村出身の女漁師。ウーリンの姉さんにあたるが、十六歳の少女ウーリンよりはちょっと太め。船着き場にて初登場。出航後、傀儡のシン操る戦闘士の槍相手に軽妙大胆に立ち回り、これを煙に巻く。珍しくDが面と向かって「男でもあはいかん」と嘆じた相手でもある。おまけにマインスター男爵の廃墟ではDに背負ってもらったりと、いつファンからカミソリを送られてもおかしくない女性キャラクターだが、上下二巻分を支えるヒロインともなれば、致し方あるまい。父母を十三の時に喪い、今また祖父と妹を喪い、天涯孤独となってしまった身を斟酌して免じてあげよう。本当は絵描きになりたかったという手は太く厚く、十年余りの漁師生活のあとでは指先まで胼胝に覆われ、筆を持つのはきついという。しかし、代わりにチョークは持てる。画家ならぬ教師スーインは、今日も元気にフローレンス小学校で生徒たちを教えていることだろう。あーいい話だなあ。

すいーき【水鬼】（風立ちて） 雨の日に好んで出現する妖魔。ツェペシュ村では数年前に駆逐されている。村の要所に貼った護符は、半永久的に有効らしいので、村への侵入は難しいらしい。

すいーぐんーじん【水軍人】（堕天使） 闇水軍を構成する戦闘生物。全身がゼリー状の半透明物質に覆われている。洪水の中に潜み、ディームリ村に宿泊し

た D 一行を集団で襲う。相手の視界を奪う粘塊を吐き出す。長さ二十センチの水の深みにも身を潜められる。わずか十センチ足らずの水の深みにも身を潜められる。分厚い唇を持ち、人語を話す。太鼓腹。ヴラド・バラージュが男爵バイロン暗殺のために放った合成生物だが、まあ、一種のカエル男みたいなものであろう。

すいしゃ-ごや【水車小屋】（**堕天使**）クラウハウゼン村の外れにある廃棄された水車小屋。水車の直径は優に百メートル、幅五メートル。正確には発電所で、巨大なエネルギー変換装置をはじめとするおびただしいメカニズムや道具類、宿泊施設がそのまま残っている。二十数年前に、より廉価な太陽発電に切り替えられてから、廃棄されているらしい。メイを救出したDが入り込んだ。外の川には船着き場があり、ボートが舫（もや）ってある。

すいしょう-の-コントロール・センター【水晶のコントロール・センター】（**堕天使**）OSB古戦場の工場跡の一部。OSBの対貴族戦士製造メカで復活した街道（トレイル）の魔術師（マジシャン）ヨハンとD一行が対決した場所。高さ十メートルに満たず、平面に広がるメカニズムのための設備。内部は天井も床もクリスタルの輝きをはなち、あちこちに破損孔が開いている。

すいちゅう-よう-ガード・ビースト【水中用[illegible]獣】（**風立ちて**）サイラス・ファーンが使用する護衛獣。数本の鞭のような触手を持つ。縞模様の入った甲羅を持っている。水車小屋の前の小川に潜み、Dを水中に引きずり込んだが、逆に電撃雲の盾に利用された。

すい-ほう-ちゅう【水泡虫】（**夢なりし**）四肢を備え、槍を抱えた千分の一ミリもない妖精。肺に溜まった空気が好物。一匹でも肺への侵入を許せば、その体毒によって吸い込む息は炎と変わる。そのくせ、肺自体の内側も硬質化し、完全に焼け爛れるまで地獄の苦しみがつづく。手当てが遅れれば、その炎の息が全身にまわり、外側は色艶を保ちながら体内は焼け崩れた死人が出来上がる。治療可能な期間は侵入後四週間まで。

スキン・ベール（**北[illegible]行**）はじめトロトロなかプルプル、あっという間にコチコチになって、赤子泣いても蓋は取れないどころか身動きもままならず。Dの長剣すら切れ味を鈍らせる半透明の粘着物質。その正体は、悟られずのツィンの体液であった。一種の膠（にかわ）のようなものだが、ちょっと汚い。

スクール【学校】（**風立ちて**）特にツェペシュ村でリナ・スーインたちが通う「学校」を指す。リナが在籍する高等教育部は一クラスのみで、生徒は五十人に満たない。ルーカス・マイヤーはここで高等教育部の教師を務めている。

スター・トレイル【星間航路】（**堕天使**）貴族がその没落に挑むかのようにいくつか開拓し、外宇宙調査団を送り出した。第三長篇『妖殺行』にも深い関係あり。

スタンレイ・クレメンツ（**夢なりし**）シヴィルが眠る「村」の自警団長。襟が皮チョッキをつけたような大男で、旧型の戦闘強化服を身に着けている。髪には白いものが混じっているが、強化服なしでも熊ぐらい絞め殺せそうな男。七人の手下を持ち、防御獣の飼育を生業としている地主でもある。

スチーム-エンジン・トラック【蒸気エンジン・トラック】（**堕天使**）Dが出会った二十歳代そこその移動鍛冶屋が使用していたトラック。

スチーム-ばしゃ【蒸気馬車】（**堕天使**）その後部には円筒に鐘を被せたような蒸気エンジンを装備している。円筒と鐘状のベッドのつなぎ目には蒸気排出孔が空いている。馬に頼らない乗り物。サイファンとザナスが使用。

スチール・パイプ（**聖魔[illegible]歴**）Dがランスのために作った墓は、パイパー婆さんの馬車に積んであったスチール・パイプを紐で結んだ十字の形だった。それを手にしたDの手のひらには十字の形が痣になって残った。

スティック-ガン【杭打ち銃】（**夢なりし**）機関部内のガス・ボンベが秒速七百メートルの速度を五百グラムの杭にあたえる。吸血鬼になったあとのクルッツ治安官が持っていた銃。

すなびと【砂人】（**聖[illegible]**）「帰らざる砂漠」でD一行を襲った幻影のひとつ。頭部には眼も鼻も口もなく、ずんぐりした石に丸木をくっつけたような体軀にはすべての凸凹が欠けている。身長二メートルの不気味な人間のオブジェだが、切断されれば砂塵に還る。砂漠の意志が砂鉄を含んだ砂で造ったものらしい。Dの長剣にこびりついて、噂の斬れ味を鈍らせたりもする。別名「砂人間」とも。

スネーク・マン【蛇人】（**風立ちて**）ツェペシュ村「学校（スクール）」のマイヤー教師が散弾筒で撃退できる程度の辺境の魔物。

スノー・パーツ（**死街譚**）放射性同位元素除去剤。吸収した放射能のため、とりわけ夕暮れ時には、雪の美しさにも似た淡い輝きを放つ。ツルギ医師の手でスノー・パーツに覆われたローリイは、まるで雪をかぶった人形のようであった。

スピア（**[illegible]天使**）クラウハウゼン村を東西に流れる川。→【ピアス】

スピア・ガン【銛銃】（**北海魔行**）北海辺境漁師の

必需品。フローレンス村のドワイト愛用のそれは六連装で、銛の重量は普通の漁師が使う品の三倍になる。高圧酸素が打ち出す銛の速度は秒速百五十メートルに達し、三百キロのソウジョウカジキの頭蓋さえ一発で打ち抜き、一メートルに及ぶ巨鯨の脂肪層と二十センチに及ぶ頭骨を一回で貫く。人魚と化した暁鬼は、銛を二本と手鉤を喰らってなお海中に姿を消した。

スピードグモ（戦[illegible]伝）伝染病を媒介する毒虫たちを餌とする益虫。辺境の田舎では殺戮の対象にしかならないが、『都』へ出荷され有効利用される。シュラト村のライアの家の倉庫で、三人の家来たちが鉄棒をはめた木函の檻に飼っていた。

スペース・イーター【食空鬼】（ハルマゲドン）正常空間の組織を唯一のエネルギー源とする妖物。エレクトロン原子弾を放出する。神祖がDを阻む最後の手段としてハルマゲドンの空に放った。

スレイヤー（薔薇姫）白騎士愛用の生ける剣。その名の通り殺戮者。好敵手を前にするや鍔鳴りをもって応ずる。『サイレント・メビウス』のグロスポリナーみたいなものか。その斬れ味のほどは、黒騎士の右肩が一番よく知っている。

セ

せい-いき【聖域】（堕天使）クラウハウゼン村の西の外れに一箇所ある。かつて太古の宗教的遺跡があった場所で、聖なるものが祀られていた。そのほとんどは貴族たちの手で破壊され、埋め立てられ、遺跡らしい遺跡は世界にも指を折るほどにしか残っていない。人間は貴族たちとの戦いに利用するため聖域を発掘した。その結果、発見した護符や聖体のいくつかが貴族たちとの講和条約に威力を発揮した。

せい-かん-れんらく-せん【星間[illegible]】（堕天使）「連絡船」ということからもわかるように、貴族の宇宙開発——とりわけ外宇宙進出は著しく進んでいた。太陽の沈まない宇宙に貴族が進出することができたのは、太陽光線を弱点とする貴族の、地球との関係に秘密がある。

せいぎょ-チップ【[illegible]チップ】（堕天使）サイボーグ馬の部品。強磁力銃で破壊できる。

せいこう-れい-は-ひとつ-だけ-だ【成功例はひとつだけだ】（堕天使）神祖が時折（というかいつも）もらしている言葉だが、特に『堕天使』では、自分の精子を神祖の実験に提供したフィッシャー・ラグーンが「貴族と人間の合いの子でも造る気か」と問うた質問に対する神祖の答え。その唯一の成功例が何ものを指すのか、言うまでもなかろう。でもその「唯一の成功例」が、ラグーンの精子から造られたとは思いたくないのも、言うまでもなかろう。だってラグーンは禿げ頭だよ。

せいしん-しんそう-とろ-ざい【精神深層吐露剤】（風立ちて）尋問に使用。

せいしん-たい-いどう-よう-あ-くうかん-アルファ【精神体移動用亜空間α】（堕天使）男爵バイロン・バラージュがミスカ・ドレイクから「破壊者」を自分に移植するために行なった手順に出てくる概念。収束率九九九九九九九九分の一と言っているが、どういうことかよく分からない。これがあれば『エクソシスト』のカラス神父も、リーガンから悪魔を吸い取って階段から転げ落ちなくて済んだものを。ねえ。

せいしん-はどう-てんかん-モード【精神波動転換モード】（堕天使）男爵バイロン・バラージュがミスカ・ドレイクから「破壊者」を自分に移植するために行なった手順に出てくる概念。精神の波動を転換するためのモードという以外は、どう転換するのかわからない。これがあれば『エクソシスト』のカラス神父も、階段から転げ落ちなくて……。

せいぞう-こうじょう【[illegible]造工[illegible]】（双影の騎士）死人街道の途中に建つ施設。どれひとつとして柔らかい線のない構造物。城門ともいうべき巨大ないかめしい正門の扉は外れ、全ての建物や塔、中庭は荒廃している。そのサイズは工場というより都市で、セドク地下の大施設より大きい。前庭の背後にひときわ高くそびえる建物は中央研究センター。その地下三千階の一角には施設の中枢がある。別のビルには五百階に病院がある。ワン・フロアしかないが、『都』の大病院の百棟分はある広さ。それに反して設備からすると百人程度が収容人員。病院はすべてがコンピュータ管理されている。薬品庫も同様。地下には陽子炉がある。このエネルギーをDが解放したことで、施設自体は爆発した。

せいどう-けん【[illegible]犬】（北海魔行）青い鋼の皮膚を持った野犬。人間の匂いを嗅ぐや獲物に蝟集し、鋭い牙で肉を裂く。Dは十匹の青銅犬を二秒とかからず退治した。

せいどう-の-ボート【青銅のボート】（堕天使）ヴラド・バラージュ卿の城の地底湖に男爵バイロンとジャン・ドゥ＝カリオールが入り込んだ際に使用した。

せいぶ-へんきょう【西部辺[illegible]】（堕天使）他の辺境区に比して、滅亡後の貴族の暗躍が少なかった地帯。そのため、世代を重ねるうちに貴族の恐ろしさを肌で知らぬ者が多くなった地域。そのうち茶髪でルー

ズソックスでケータイ片手のコギャルであふれ返るに違いない。
せいぶ-へんきょう-だい-七-セクター【西部辺境第七地区】（風立ちて） ツェペシュ村の属するセクター。気象調整装置に異常があり、春夏はともかく、秋になればすぐ雪がちらつく。冬が終わる頃には、この地方特有の強烈な雨が降る。

せい-ま-へんれき【■■■■】（原典） 正式名称『D―聖魔遍歴』。シリーズ第六長篇。一九八八［昭和六十三］年三月五日発行。Dとバイパー婆さんを始めとする一行が生きている砂漠――「帰らざる砂漠」を踏破するお話。バーナバスの街を接点として、第三長篇『妖殺行』とは地理的には姉妹篇にあたる作品。
せいれき-一二〇九〇-ねん【西暦一二〇九〇年】（D） ランシルバ村でDとドリスが出会った年。ツェペシュ村事件の年でもあるか？
セイレン（夢なりし） 白と青の花が咲く。幼いクルツ・ボーゲンにシヴィルが首飾りにして贈った。
せ-かい【世界】（想秋■） かつてシャーリイズ・ドアにあった貴族が、百年前に自分たちの運命を見越して、緑の髪に白いドレスの愛娘が人知れず生きていけるようにと造った〝住まい〟のこと。完璧な血液合成装置もあるその中にいる限り、光に満ちた世界で永劫に生きることも可能であったが、娘は百年以上我慢して、ついに人間の血が吸いたくてたまらなくなり、シャーリイズ・ドアの村に出現した。ここで言う〝世界〟とは一種の〝仕組み〟〝からくり〟のことでもあり、娘の侍女＝青いドレスのラーナを象った〝世界〟は、あまりに精緻に巧妙に造られすぎたため、人間たちの〝世界〟に組み込まれ、独自の意志をもって――いや心さえ具えて〝生き〟始めたのであった。
セカ・ボラン（風立ちて） ツェペシュ村の住人。貴族のために娘ジナを失う。ただそれだけ。あっと、登録ナンバーは八〇〇九番だよ。いくらそれだけでも番号だけで呼んだりしてはいけない。「俺たちは人間だ！」
セシル（想秋譜） シャーリイズ・ドアの十八歳の娘。
ゼジル（堕天使） フィッシャー・ラグーンの館の娼婦。客であるバルコンに殺されたらしい。
ゼッカ（堕天使） Dを護衛する黒マスクの一団のメンバー。公爵シェーン・グリードとの戦闘で死亡。
せつだん-し【切断糸】（薔薇姫） 薔薇姫が操る糸。薔薇の葉脈を紡いだもので、触れたものは音もなく切断される。ダイアンローズの四騎士の鎧もこの糸で編み込んである。
セドク（双影の騎士） Aの季節の第三の月、二十六日の夕刻に、セドク村の外れの旅籠「セドクの家」で、東から巡礼にやってきた老婆たち二十名が、心臓麻痺を起こして死亡した。この小さな村の村外れには赤い荒野が広がる。この荒野で大陥没が起こり、そこにこの地方の埋葬されていた死者が数千体飛び込んだ。村の北には、かつて貴族の実験場だったらしい荒野と廃墟が広がっている。病院は東にある。北の外れには赤い荒野と大陥没が広がる。西の外れは濃度の強い酸性土のせいで、農耕に適さない平原。あちこちに峨々とした岩塊が盛り上がり、転がっている。サイボーグ馬で十分とかからずに東西に横断できるほど小さい村。
セドック（Seddok）（一般） 一九八〇年イタリアの怪奇映画『怪談生娘吸血魔』のこと。音楽はアルマンド・トロヴァヨーリ。
ゼメキス（死■） Dに出会ったプルート八世が尋ねた行き先。台詞にある「ゼメキスとの邂逅地点」という言い方からして、別の移動街区の名前と思しいが、あとにも先にも一回しか登場しない。もちろん映画監督ロバート・ゼメキスとは何の関係もない。
ゼラム-こう【ゼラム鋼】（北海魔行） レーザーすら一ミリ切り込むのに一時間かかる特殊鋼。ギリガンの身体を取り巻く支持装置に使われている。Dの太刀が簡単に切り刻んだことは言うまでもない。
ゼリー・ダンス・ルーム（堕天使） フィッシャー・ラグーンの館のイベント・ルーム。女体そっくりの感触の柔軟素材でできている。
セルゲイ（ダーク） 辺境商工ギルド輸送隊に属する結果的三護衛のひとり。外見はひょろっとしたノッポだが、護衛の中でも一番タフらしい。Dと同じような湾曲刀を二本、背負っている。輪胴式の火銃を使用。もともと学者向きとジュークに評される。ジュークの手に食い込んだ指を死人爪と見抜いたのも、日頃から読書をしていたため。死人爪の手術を試み、注射器の扱いや薬液の調合など、手際よく冷静沈着にすすめるのを見てゴルドーが呆れたところをみると、日頃はそのような面は見せていなかったらしい。

自称、街道一の考古学者。

セルナ・ニコル（戦鬼伝） 情熱に燃える若き言語学者。稼働を続けるシニストロ城の原子炉の目的を、城の別棟図書館の数少ない資料から解読した。『都』ではかなり優遇された地位にいるらしく、極端に配給量の少ない煙草にもこと欠かない。

せん-き-でん【■鬼伝】（原典） 正式名称『D―戦鬼伝』。シリーズ第二中篇。雑誌『獅子王』一九九一［平成三］年十二月号／一九九二［平成四］年一月号掲載。シュラト村の少女ライアの家に居座った三人衆の目的やいかに。

せんすい-きゅう【潜水球】（北海魔行） フローレンス村の貴族たちが〝水遊び〟に使ったもの。Dはマインスター男■の棺を確認するために使った。ギリガン操る大蟹ロボットと水中戦を演じた。

せんすい-きゅう【潜水球】（双影の騎士） 禁断の知識を発掘するため、魔道士が製作した手づくりの潜水球。五万メートルもの深海に潜行した。

せんばつ-システム【選抜システム】（風立ちて） 政府が年に一回、辺境地区の村を選択。その中から最も優秀な子を選抜して『都』の教育機関で学ばせるシステム。人口の移動が禁止された辺境では『都』に出るための数少ないチャンス。選抜された子がそれなりの業績を上げれば、村にも見返りがある。

ぜんめん-かくにん-きょう【全面確認鏡】（■■■歴） バイパー婆さんの幌馬車に装備されている。十数枚のレンズを特殊な角度に折り曲げた環に括りつけた鏡。馬車の四方ばかりか、地面と上空まで鮮明に映し出す。

せんとう-き【■■■】（堕天使） 貴族が敵味方に分かれて争った時代があるらしい。

Y. Amano

せんとう-りょく【■闘力】（聖魔■歴） ダンピールの戦闘力は、真昼の戦いにおいては四〇パーセントまで低下するという統計がある。

ぜんもん-の-かりゅう-こうもん-の-すいき【前門の火竜、■門の水鬼】（堕天使） 辺境での慣用句。火竜は強さを語るときによく語られる。別にこの世界に虎や狼がいないということではない。

ソード・マウンテン【剣山】（■天使） クラウハウゼンの村から北に五キロの場所にそびえる、緑が全くない黒曜石のような岩山。その中腹にはヴラド・バラージュ卿の「山城」がある。

ソーントン（■■遍歴） 若いとも中年ともつかぬ顔立ちの男。百五十センチに満たない身長で、肉体にはたっぷりと脂肪が乗った弁護士。分厚い眼鏡をかけると『都』の学者といっても通用しそうな様子。Dに「帰らざる砂漠」を越えて、バーナバスの町まで行くことを依頼する。バーナバス目抜き通り付近にある三階建の木造ビルの二〇二号室にソーントン法律事務所を構える。飛行具（フライヤー）を操る数少ない人物。

Dに依頼したことは、指定された期間内に砂漠を抜けてバーナバスの町にたどり着くこと。依頼主は「奴」である。ビューロー兄弟にDの抹殺を依頼したが、それはさらに誰かに依頼されたもの。最終的な依頼者はやはり「奴」か？

ソーントン-どおり-の-そうこ【ソーントン通りの倉庫】（堕天使） クラウハウゼン村にある。その内部は五階建てのビルくらいもある空間。パワー・シャベル（高さ五十メートル）、地底掘削用ドリル・マシン（ドリルのみで長さ三十メートル、全長四十メートル近く）、ビッグ・バン加速器（黒い小山のような大きさ）など、すべてフィッシャー・ラグーンが神祖からメカの理論だけを教わって組み立てたという（とても五階建てのビル空間には収まりそうもない）自慢の巨大なメカが詰まっている。内部には自走路が走っており、ラグーンはDとともに中虫（かご）に乗って移動した。ほとんど秘密基地ではあるまいか。

ソア（双影の騎士） セドク村の若者。警備隊の一員か？ 分厚いウールのシャツを着て、首に赤いスカーフを巻いている。洒落っ気にふさわしく他の連中よりは数段整った顔立ちの主。大陥没から出てきたDに、首を切断され死亡した。死後、何者かに首を縫い合わされ、地下の工場跡でミア・シモンの前に現われたが、ミアの閃光粉で燃焼した。地下の墓場で再びミアを襲った時、ユマの髪攻撃をこめかみに受けて倒れた。

そうえい-の-きし【双影の騎士】（原典） 正式題名『D―双影の騎士』。シリーズ第十長篇。第一巻は一九九六［平成八］年十一月三十日、第二巻は一九九

七［平成九］年十月二十日発行。Dのにせ者というか双生児が登場する話。こういう話はヒーローの数と同じくらい存在する定番でもあるのだが、あとがきから察する限り、どうも作者は思い通りに書けなかった——というか、作者の思い通りに物語が進まなかったようだ。さては「にせ作者」の仕業か。物語の舞台は冬である。

そうこう-かっちゅう【装甲甲冑】（ダーク）七人の「招きびと」のひとりゼノン公ローランドがまとう甲冑。材質はデュープ重分子鋼。しかし、精神力によってそれ以上の強度を得られる処置が施されている。手首から肘には一メートルもある刃が隠されており、七メートルにも及ぶ長槍も収納されている。その重量は五トンに達するが、ローランドは反重力を用いているとしか思えぬごとくに軽々と飛びまわる。自動修理回路が備わり、内部の操縦者をも保護し治療する。頭部にはめ込まれた二つの電子の眼からレーザーを放つ。モーターによって装甲そのものが旋回し、地中深く潜り込むことも可能。

そうこう-じゅ【[illegible]】（[illegible]）その皮は石より硬い。布地に仕込んで防弾に使用する。炸裂弾にも耐え得る。クレイ・ビューローはシャツの裏地に仕込んでいた。

そうこう-じゅう【装甲[illegible]】（双影の騎士）重量[illegible]トン近い動物。ポピュラーな生き物のせいか、装甲獣用のライフル弾もある。

そう-しゅう-ふ【想秋譜】（原典）正式名称「D—想秋譜」。シリーズ第三中篇。雑誌『獅子王』一九九二［平成四］年二月号掲載。秋色の村シャーリーズ・ドアを舞台に、ヘルガ婆さんが本人も「あっとびっくり」の出生が暴かれる作品。

ソウジョウカジキ（北[illegible]行）北の辺境海域に棲息すると思しき魚。しかしカジキというのは基本的に南洋の……。

そうとう-の-かいちょう【双頭の怪鳥】（堕天使）ディームリ村の巨木に棲みつく生物。どんな怪物が潜んでいてもおかしくないですが。

「その名は……ド……ラ」（D）心理攻撃を受け、父の名前を訊かれたDが口にした言葉。もちろん、このあとに続く言葉は決まっているのだが、同人誌に「えもん」と続けさせるネタを無数に提供したことでも有名。

ソル・ガン【太[illegible]】（夢なりし）自然光を増幅し、五千万度のビームに変えて放出する銃。千分の一秒で、厚さ一メートルのチタン鋼も貫く。超小型核炉が破壊されればそれきりのレーザー砲や粒子ビーム砲にくらべ、頑丈な太陽光吸収フィルム一枚あれば半永久的に使える上、晴天時三十分、雨天でも六時間の吸収(インプット)でビームの持続時間は二百時間を越す。治安官クルツ・ボーゲンの得物。

そん-ちょう【村長】（肖[illegible]）一千年前に美しき将軍イゾベル・ドレイクを焼き討ちにし、現在はその館に住んでいる一族の末裔。十歳は若く見える美貌をしている。妻は半年前に死亡し、双児の娘イザベルとイゾデルがいる。一千年前のイゾベルの呪詛によって、娘のどちらかがイゾベルの恋人として蘇り、イゾベルを復活させるのではないかと恐れられているが、そのときの対処を、Dに依頼した。

タ

ダーク・ロード（原典）正式名称『D—ダーク・ロード』。シリーズ第十一長篇。第一巻は一九九九［平成十一］年三月三十一日発行。以下、第二巻は同年六月十日、第三巻は同年九月三十日発行。神祖に次ぐ貴族ギャスケル大将軍とその七人の「招きびと」たちがDと対決するが、親分たる大将軍からして「なぜ復活したか」その理由を知らず、すべてが神祖の設定したゲーム盤上の駒にすぎなかったという、壮大な遊戯性の強い作品。

ダイアンローズ-の-よん-きし【ダイアンローズの四[illegible]士】（[illegible]薇[illegible]）薔薇姫に仕える四人の騎士。装甲馬にまたがり、青、紅、黒、白四色の甲冑によって識別される。鋼の鎧は、姫が薔薇の葉脈を紡いだ切断糸によって編んである。人間ではなく貴族でもない彼らは、貴族の科学力によって延命措置を施さ

れた改造人間＝バイオマンであった。いずれも剛勇無双のものだが、真の好敵手との死闘のうちに轟然と果てたい――実は相応しい死に場所を求めていたのであった。

ダイオウシャチ（**北[illegible]行**）北の辺境海域に棲息すると思しき魚。ずんぐりした側頭部に小さな凶暴な眼が光り、一直線に裂けた口内は炎の色を見せるシャチ。伸び切った体軀は三メートル、体重は七百キロを下らない。

タイガー・マン【**虎人間**】（**D**）吸血鬼たちが作った凶獣、もしくは核戦争が生み出したミュータントのひとつ。

タイガーマン【**[illegible]**】（**風立ちて**）その獣脂を大鹿の皮に塗って防水コートにする。

たいか-シールド【**耐火シールド**】（**ダーク**）耐火耐熱繊維の袋。ボタンひとつで馬車を覆う。保っても保ってまず三十分が限度。

たいかん-コート【**耐寒コート**】（**北海魔行**）漁師の必需品。足回りをよくするため、ほとんどがハーフコート。裏地に湯を入れて保温するタイプもある。キタダラの腸を容れ物に使えば丸一日は保つが、ひどく破れやすいため荒っぽい作業には向かない。

だい-きぞく【**大貴族**】（**一般**）①大きな貴族。②大変な貴族。③全世界の貴族を束ねる千名の貴族を指す。通常の貴族より強靭な精神力および体質を持つ貴族のなかの貴族。陽光さえ射さなければ、バイオリズムの減少は免れないまでも闇中のごとく行動し得る。近年ようやく、バラージュ家がその千名の貴族のうちのひとつであることが判明した。④ギャスケル大将軍も大貴族との描写があるが、神祖に次ぐ大貴族であるから、正確には大貴族を束ねる「魔王」であろうと思われる。将軍の呼んだ「招きびと」のなかにも数名の大貴族がいる模様。

たい-きぞく-よう-せんし-せいぞう-メカ【**対[illegible][illegible]用戦士製造メカ**】（**堕天使**）OSB古戦場にある一千メートルを越える円柱とも角柱ともつかぬ円柱群。一本の柱の根元には高さ五十メートルの楕円形の入口がある。生体としての器官とメカニズムの完璧な融合、超生命体。施設内部の太さ一メートルの透明の管は人間の血管であり、それが数十本もよりあわさっている。その管は真横に五百メートルほど走って、突如、硬質のパイプと化している。

だい-さん-じ-そうとう-せんそう【**第三次[illegible]討[illegible]争**】（**D**）西暦一二〇六〇年頃に起こった、貴族と人間の戦争。これによりランシルバ村を統治していた吸血鬼は逃亡した。以上は、Dが聞いた情報である。もっともD自身「三十年も昔の戦争だ、当てにはならんか」と続けて言っていたが。

だい-しっち-たい【**大湿地帯**】（**[illegible]天使**）西部辺境の一地方に名高い湿地帯。東西五キロ、南北二キロに及ぶ。中央街道を行くと出るらしい。あちこちに有毒ガスの吹き出す土地があり、大の男を丸呑みにする大怪魚が棲息する。街道が跡切れたところには桟橋があり、渡し船が発着している。中央街道から大湿地帯を渡って、北に行き（さらにどこかで曲がると）『都』に行けるらしい。対岸に渡る時間は、首長竜の巣からホバークラフトで三十分かかったとあるが、はて、普通の速度で行ったなら、とっくに対岸を通り越しているはずだが。

たいしゃ-ちょうせつ-ざい【**代謝調節[illegible]**】（**双影の騎士**）貴族用の薬。陽光に炙られて倒れたDに左手が与えた。

だい-じゅうりょく-ろうごく【**大重力牢獄**】（**堕天使**）貴族の能力をもってしても脱出不能な牢獄。「戦闘期」で勝利した貴族が、捕虜の貴族に科す最も苛酷な刑罰に使われる。これに閉じ込められた貴族は数百年もの間、究極の空腹感に責め苛まれる。停戦条約が結ばれてこの牢から救出された者たちは、救出者に飛びかかり血を吸ったという。

だい-どうくつ-の-だい-しせつ【**大洞窟の大施設**】（**双影の騎士**）太古に貴族によって作られた遺伝子研究所。一万年をかけて貴族と人間の血の融合実験をしていた。その実験によって次々に生まれる妖し子は、失敗作とみなされると底知れぬ深い穴に放棄された。施設の設計は神祖が行ない、彼専用の観測室もあった。広大な広間にはいまも眼に鮮やかな数千、数万の衣裳や、壁を埋め尽す武器、なかにはDの愛用の剣と瓜二つのものまで残されている。施設は地下三十キロ、東西南北方向三十キロに広がり、現在、機器が死に絶えた工場地帯が存在する。工場地帯の地下には、黒土の広がる墓場がある。大地震の直撃で裂けた地面から飛び出した柩はすべて三千年以上前のものばかり。神祖が作った自己修復装置も完全には働かず、飼育していた護衛獣が大破壊の影響で逃げ出し、大洞窟で繁殖している。村の地下に埋設されたエネルギー・ラインは、瞬時に解放すれば惑星の二つくらいは吹き飛ばす量のエネルギーを常時この施設に送り込んできた。Dによって揺曳炉から自然に朽ちるだけの破壊エネルギーを送られて、施設は終焉した。

たいない-の-かい-せいぶつ【**体内の怪生物**】（[illegible]**なりし**）水色の煙と青い花びらの芽が合成したものか。Dの身体を突き破って出てくる。いくつもの毛

むくじゃらの触手を持ち、蜘蛛とも蠍(きそり)ともつかない顔を持っている。

ダイナス（戦鬼伝） 貴族同士の争いの決着を代理戦争でつけるために、貴族の手で造り出された戦闘士。戦う相手はライアと定められている。運命の場所に赴く旅の途中でDと出会う。まだ覚醒してないライアの家に逗留して力仕事に精を出す、哀しいまでに明るく愚直な巨人。

ダイナモ【発電機】（風立ちて） 発電機の損耗を防ぐために、夜間の照明は獣脂を燃料とするランプを使用するのが、辺境の常識。

たいひ-と-つち-の-ほかん-こ【堆肥と土の保管庫】（堕天使） ディームリ村の巨木の中にある部屋。ケンラークの攻撃で水と化したDが、左手とこの保管庫の土を使って復活した。

だい-ま-おう【大魔王】（D） 貴族たちの頂点に立つ大吸血鬼＝王の中の王。その名は吸血鬼ドラ○○○。

たいよう-エネルギー【太陽エネルギー】（双影の騎士） 通常の形態から得られるエネルギーのうち、増幅器を利用した太陽エネルギーこそ理想に近いものだったが、貴族文明は自分の最大弱点から恩恵を受けるのをよしとせず、異次元空間や無限運動にさまざまなエネルギーの可能性を見出した。

たいよう-こう【陽光】（堕天使） 貴族は人工太陽の下では自在に動きまわることが可能。また、他天体――例えば月面で太陽光を浴びても平然としている。貴族は地球上で陽光を浴びたときのみ塵と化す。

たいよう-ランプ【太陽ランプ】（風立ちて） ツェペシュ村で使われている。たぶん、どの辺境の家にもあるでしょう。

だいりせき-の-ぼしょ【大理石の墓所】（夢なりし） 墓地の真ん中にあるひときわ巨大な大理石の墓所は貴族のものだった。天蓋(ドーム)状の天井には、情報衛星用のパラボラ・アンテナやレーザー探知機が設置されている。

タエ【[illegible]】 バイパー婆さんの手によってグラディニア城から助け出された娘。貴族の「隠されっ子」である。十歳の時にさらわれて八年間もグラディニア城で下女とされていたことから、十七、八歳らしい。両親はすでに死亡し、兄夫婦が家業の農家を継いでいる。背にかかる黒髪で、粗末な肌色のワンピースを着ているが、農夫（ランス）と戦闘士（クレイ・ビューロー）を闘わせるほどの美貌の持ち主でもある。しかし残念ながら、お腹には燃える宝石のように赤い眼を持った貴族の子供を――「奴」の子種を宿していた（ちぇっ）。Dの言によれば、兆候に気づいてから約半年で生まれ、普通のダンピールにはならないらしい。バーナバスの町に着いたその日に兄嫁の激しい罵りを浴びて、家を飛び出した。バイパー婆さんの幌馬車の裁縫機で作った赤ん坊の肌着を持って、バーナバスの町を去って行った。

Y. Amano

タエ-の-こども【タエの子供】（聖魔遍歴） 物語の中では生まれていないが、もし生まれているとすると、Dの異母弟誕生（？）ということになる。相変わらず困ったお父さんである。

タキ（堕天使） 街道(トレイル)の魔術師(マジシャン)ヨハン卿の助手を務める娘。大きくスリットの入った黄金色のドレスとそのドレスよりまばゆい黄金色の髪を持つ。紫色の大(おお)蝦蟇(がま)を背負って（襲われて）いるところをD一行に救われ、次の宿場までの予定で行を共にする。フィッシャー・ラグーンに五万の値を付けられる。ヴラド・バラージュに血を吸われるが、それ以前から貴族の犠牲者だった。その記憶は、タキ自身も知らぬ間にかけられたヨハンの催眠術で封印されていたのである。男爵バイロン・バラージュを襲い、逆に喉を食い破られ、息絶えた。

た-じゅうしん-かやく-ちょうじゅう【多銃身火薬長銃】（ダーク） 射撃モードのセレクトで、斉射も可能。斉射モードでは直径十ミリの弾丸を一度に三十二発発射する。この射撃を食らえばたいていの妖物は即死する。輸送隊のゴルドーが持つ武器。

た-じゅう-しんり-ぼうがい-そうち【多重心理妨害装置】（堕天使） 貴族の墓所を守る装置のひとつ。

た-じゅうそう-バトルフィールド【多重[illegible]】（堕天使） 「タロスの武器庫」の奥の封印堂に置かれていた品物。封印したものが眼醒めた時に果てしなき戦いに闘争本能を燃やせるようにしてある。ヒマつぶしのゲームである。ある空間に兵士と武器を用意し、それを数千、数万層にわたって重ね合わせてある。

タジール・シュミカ（風立ちて） ツェペシュ村の雑貨商ハリヤミダ・シュミカの一人息子。十年前に失

踪したまま現在も行方不明（当時八歳）。灰色の影として暗躍した。陽光の下でも活動できるように作られた吸血鬼。十年前の実験の結果、Dの剣を心臓に受けても死なない身体を授かったものの、右半分が圧搾器にでもかけれられたように押し縮められ、眼も耳も二分の一ほどに縮小し、しわだらけの顔になった。この顔を隠すためにマスクをしている。Dに首を落とされて死亡。実験完了時から凶暴で、無闇と血を吸いたがったため失敗例とみなされ、十年前に解放されなかった。他の「隠されっ子」が戻ってきても、タジールだけは帰ってこなかったため、ハリヤミダは悲嘆死を遂げてしまう。カイザー夫人を襲った犯人でもある。

「ただ-ひとつ-の-せいこう-れい」【ただひとつの成功例】（風立ちて） 光と闇の遺伝子の実験結果を、気配がDに告げた時の言葉。神祖のつぶやき。もちろんDのこと。

タッカー（[illegible]薇姫） サクリ村バイク青年団のひとり。シャンバラの森で、シュタールを襲った蛇人間の眉間に、火炎銃をもって直径二十ミリの鉛弾を命中させるが、再生能力に勝る蛇人間には致命傷とならなかった。その後どうなったのかは不明。おそらく崩壊する岩石ピラミッドの下敷きになったものと思われるが、およそ幸薄い人である。

たつ-まき【竜巻】（[illegible]） 特に「帰らざる砂漠」の中で発生する竜巻は、意志のあるもののごとく旅人を追いまわす、生きている竜巻である。

タネル（堕天使） 男爵バイロン・バラージュ暗殺のため、父親ヴラドに雇われた七人の刺客のひとり。土の分子に振動を与えて瞬時に砂に変え、地中を自由に移動し、移動後は速やかに土に戻す能力を持つ。地中からの長剣攻撃を得意とする。地中にいたままDの長剣で死亡したため、ついに容姿は分からずじまいだった。

たび-の-うたいて-と-こ【[illegible]の[illegible]い手と子】（堕天使） 十年前にジャン・ドゥ＝カリオールが愛した女。いまは四十歳ほどになっている。子供はカリオールの実の子で、十歳になる。ヴラド・バラージュ卿がカリオールの忠誠を試すために、わざわざ探し出して『都』から連れてきた。なんとも疑り深い御主人様である。

たま【珠】（北海魔行） 半透明・真珠に似た珠。マインスター男爵が居城の地下二千メートルの大実験室で続けていた研究の副産物。珠を分析することにより、人間と貴族の遺伝子の謎も解明できる理屈だが、早い話が珠の正体は○ン○――水中でも日中でも活動できるようになった貴族の新陳代謝の結果なんだなこれが。D、スーイン&ウーリンの姉妹、クロロック教授、ギリガンとその五人組、修業者グレンがさまざまに絡み合い、争奪戦を繰り広げることになったそもそもの元凶でもある。結果的に貴族の脅威は去ったとはいえ、フローレンスの村人たちにとってはいいはた迷惑でしかない。

タマコロビ（北[illegible]行） 食肉性の虫。毛むくじゃらで、口には数十の小さな牙をきらめかせている。クロロック教授の術に陥って虫の息のトトを狙うが、Dの鬼気によって追い払われる。

ダミー（堕天使） ジャン・ドゥ＝カリオールが霊的(エクト)物質(プラズム)を主成分にして作ったクローン・ダミー。戦闘能力は本物よりやや劣る程度。Dに斬り倒された。単なる人造人間(ホムンクルス)や能力移植体ではなく、人工的な分身(ドッペルゲンガー)である。

ダムド・シング【妖物】（一般） ①貴族が放った妖魔の一般呼称。②アンブローズ・ビアスの短篇小説のタイトル。

ため-いき【ため息】（風立ちて） めったに感情を表に出さないDが、ツェペシュ村のリナ・スーインに対しては調子が狂いっぱなしだった。リナに「あなた」呼ばわりされて、凶獣や貴族相手には一度ももらしたことのない長いため息を、十七歳の少女に対して何度となくついた。

ダラス（D） この世界の貨幣単位。吸血鬼ハンターを一日雇うと最低でも千ダラス。旅行用の圧縮食が一パック三食分で百ダラス。千ダラスは辺境での生活で半年分との記述もある。ゲスリンというA級ハンターの前金は十万ダラスだった。

タロス-の-ぶき-こ【タロスの武器庫】（堕天使） 貴族たちにとってすら「呪われた地」と呼ばれた地。大湿地帯の対岸の渡しから馬車で一時間ほどの場所にある、闇が固まったような巨大な城塞。大の大人ほどもある鉄鋲を打ちつけた大門がある。城塞部分は道に面した大門とそれを支える部分だけで、本体は岩山の内部にある。パラボラ・アンテナが設置された壁面は雨風に打たれてざらつき、銃眼が開いている。大門は五万トンもある液体金属で構成されているため、加えられた力の逆方向に流動し、あらゆるエネルギーを送り返して、門には傷ひとつつかない。岩山をくり抜いてつくられたため、内部は三方が岩に取り囲まれ、天井も岩でできている。発電所、変電局、エネルギー変換工場や得体の知れない施設が数多くある。

タン（[illegible]薇姫） サクリ村バイク青年団のひとり。シャンバラの森で蛇人間の犠牲になりかかったシュタ

ールを、火炎放射機で最終的に救ったのがこの人。その直後、同じく火炎放射機（クレーム・スロアー）で黒騎士に立ち向かいながらも効なく、股から切り上げた黒騎士の太刀により、真っ二つになってしまったのもこの人。

ダン（D） ドリス・ランの弟で八歳。姉思いの弟で銃の腕は相当なもの。霧魔などの低俗な魔物を倒し、農場を守っている。麗銀星に誘拐されたり、人狼に襲われたりとさまざまなトラブルに巻き込まれるが、Dに救われる。Dと約束を交わした少年でもある。ツルギ医師の証言によれば、半年後には一人前の男のように姉さんを助け、農場も広がったという。ちなみに、やはりフルネームは「ダン・ラン」というのだろうか。

ダンカン・B（夢なりし） バイオ兄弟（ブラザース）の弟。バイオテクノロジーにより細胞レベルから人間とは異なる殺し屋。細胞の活性化を促進し、肉体が切断されても独自な活動が可能な上、他の生物と融合して自在に移動することもできる。

たんさ-ちゅう【探■】（ダーク） メフメット大公の機械人間（オートマン）がグレートヘン博士とレディ・アン聖騎士捜索のために使用した虫。地中から放つ。

タンジャン-むし【タンジャン虫】（夢なりし） 毒液を吹きつけ、相手の眼を封じては、おもむろに砂粒ほどの鋭い歯で挑みかかる。辺境の森に住む虫で、この大群にかかれば全長五メートルに達する甲殻竜でさえ、二分で骨と化す。

たんしん-じゅう【短針銃】（風立ちて） リナが護身用に持っていた銃。微細なタングステンを発射する。

たんしん-じゅう【短針銃】（妖殺行） レイラ・マーカスの愛用する銃。長さ一ミクロン、太さ千分の一ミクロンの超高度■の針五十万本が高圧酸素によって射ち出される。命中した標的は砂塵と化す。

ダンバー・グリスウェル（死街■） ハットン治安官がミン町長の命令で誘拐した移動街区の住民。その後、疑似吸血鬼となって町長のもとを脱走し、住宅区で暴れまわる。町長のひとり娘ラウラを襲ったのはこいつか？　もしそうなら、柿色のTシャツに皺だらけのジーンズ姿のはず。

ダンピール（D） 吸血鬼と人間の混血。普段は人間と変わらないが、激怒すれば吸血鬼の魔力をふるう。吸血鬼ハンターになるものが多いが、吸血鬼となり依頼主を襲うこともある。人間には忌み嫌われる存在。程度によるが、吸血鬼の能力の半分ほどの力を受け継いでいる。全身骨折、内臓破裂であっても、三昼夜くらいで完治。闇でも見通せる。自制心の少ない者は人の血を吸う。しかし、被害者は吸血鬼に吸われたように操り人形にはならない。基本的な生理現象は貴族のそれが優先。筋力、視力、聴力、あらゆる物理的パワーを正確に吸血鬼の半分まで身につける。バイオリズムは深夜を頂点にして、正午に最低レベルになる。昼の攻撃に耐えるダンピールは一割にもみたない。晴雨を問わず、昼にあたる時間は肉体的生理が休息を要求する。日の差さぬ場所に逼塞しても、意識を保っているだけで八時間が限度である。陽光下を歩き回り、立ち回りを演じれば、まず四時間で仮死状態に陥る。超A級の吸血鬼ハンターがかろうじて五、六時間のフル活動を可能にする程度。

チ

ちあん-かん【治安官】（風立ちて） 西部劇の保安官に対応する街や村の法律執行者。ツェペシュ村の治安官は村長などとは異なり、謹厳実直な治安官である。まあ、『都』からのものも含めれば、その報■は村人の五倍はあるということで、謹厳実直でいてくれなければ困るんですけどね。

チキナー（夢なりし） 高さ二メートルにも達する巨大なヒヨコ。辺境には欠かせぬ食料兼収入源。チキナーになり得るのは、特別な数種に限られる。極めて敏感虚弱な体質のため、生活適温からプラス・マイナス一度ずれただけで、たやすく死を迎える。その他にも、餌や凶暴な性質に関する難問が山ほどあり、五人家族で一羽育てるのが精一杯。青い眼。幼鳥らしい騒々しさが少しもないのが、不気味。好物は人骨なので、入手困難なとき、アイ・リンは辺境を徘徊する行商人、死体運搬人（デッド・キャリアー）から買って与えていた。獰猛な性質で、嘴（くちばし）と鉤爪の一撃は、チタン鋼にすら空洞を穿つ。体色は白。体重三百キロ。垂直飛びで五メートルの跳躍が可能。足の指は三本。資料映像に『SF巨大生物の島』がある。

ちきゅう-だい-かいぞう-けいかく【地球大改造計画】（D） 三千年前の西暦九〇九〇年頃に行なわれた貴族の計画。これによりドリスの農場一帯は永久沃土化されたらしい。

ち-すい-か-ふう【地水火風】（風立ちて） 左手の食物。特に『風立ちて』では閉鎖空間を破るためのエネルギーである。水だけが用意できずに、Dの血液で補った。

ちじょう-そうとう-きこう【地上掃討■■】（臨天使） OSB＝外宇宙生命体が残した兵器。五千年を経た現在も稼働している。街道の魔術師（トレイル・マジシャン）ヨハン卿の飛行体を撃墜した。

ち-つづり-ぐさ【血■草】（ダーク） レディ・アン

聖騎士が無垢の少女を装って初登場した際、下げていた花籠に入っていた純白の花。その正体は、標的の血を吸い取って見るまに花を朱に染め、敵の体内に根を張っていく吸血花だった。握り締めると「きゅう」と鳴き、引き抜くと「きゃあ」と悲鳴を上げる。その根はあっという間に五メートルも伸びてしまう。ゼノン公ローランドの装甲冑胄に刺さり、メフメット大公の機械人間（オートマン）にも根を張り、ロカンボール■の左目にも咲いたが、グレートヘン博士の額に刺さった花は見る間に萎れてしまった。

ちていーくっさくーようードリル・マシン【■底■削用ドリル・マシン】（堕天使）フィッシャー・ラグーンが神祖から理論だけを教えられて造った巨大メカのひとつ。クラウハウゼン村・ソーントン通りの倉庫に収納されている。外見は黒光りするドリルが単体で存在するように見える。体高は五メートル、ドリル長のみで三十メートル、全長で四十メートル近いため、起重台で直立の姿勢を取っている。かつて東の海に存在していたといわれる伝説の大陸アトラントで製造された奇金属オリハルコン・ベースの合金製ドリルは、マントル内に侵入しても無事に帰還すると評判。

ちーのーいずみ【血の泉】（堕天使）呪われた「タロスの武器庫」の奥の封印堂に置かれていた品物。封印したものが眼醒めた時に血の渇きを癒す。膨大なメカニズムの一部が有限の材料から無限の血液を供給する。

ちーのーたんきゅうーしゃ【血の探求者】（北海■行）貴族を限りない憎悪と恐怖の対象とするこの時代にあって、貴族たちの血をその忌まわしさゆえに畏怖し、研究信仰する一団。クローネンベルクの顔役ギリガンのもうひとつの顔。おかげで彼はDに首を斬られても一命を取り留めることができた。

チャーリイーちん【チャーリイ陳】（D）麗銀星が自分の本名や素性を隠すために用いた偽名。旅籠の宿帳には「チャーリイ陳：職業／画家」と記している。本物のチャーリイ陳、もしくはモデルがいたとの説は伝わっていない。

チャーリイーちゃん【チャーリイ張】（一■）探偵作家アール・デア・ビガーズの生んだ中国系名探偵。小説もさりながら映画にもなり、古くはワーナー・オランドや最近のピーター・ユスティノフまで、結構な人気がある。

チャド・ベックリー（死街譚）移動街区の航路管制室に務めている。妻のベラ、息子のルークとサイモンの四人家族。磁気嵐を通過したあと、真っ先に吸血鬼に襲われてしまう。

チャン（双影の■士）ケンツとともに大洞窟の大施設に降りてきたセドク村の若者。足跡をつけるために靴底に仕込んだ蛍光塗料の色は緑。短槍を得意とするらしい。

チャンーのーにせもの【チャンの偽者】（双影の騎士）大洞窟の大施設を脱出しようとしていたDたちの前に現われた。頭頂から肋骨すべてを断ち切られて絶命したが、その際に血を振りまき、ミアとケンツの全身を濡らした。この血に臭放物質が混ぜられていた。この匂いで、Dが吸血鬼と化した。

ちゃんとーしたーれい【ちゃんとした礼】（双影の騎士）赤い荒野の大陥没で起きた事件をDに話したときに、ミアが要求したもの。Dにとっての「ちゃんとした礼」は、数枚の金貨だった。「これしか礼の仕方を知らん」とはDの弁というか弁解というか。

チューラ（D）毒蜘蛛使いのせむし男。背中の瘤の中に蜘蛛を飼う。ギムレットが倒される前にDの後ろを取り、蜘蛛を風に乗せて放つが、Dの左手に肝心の蜘蛛を喰われてしまい、抜け殻と化す。

ちょう【丁】（一般）昭和四十年代の前半頃まで、意外に広く使われていた日本古来の度量衡による距離の単位。本来は「町」と書くのが正しい表記だが、一種の口語表現として「丁」も頻繁に用いられる。大通りを「丁目」で区切る言い方も、実はここから来ている。時代によって「一町」の長さはさまざまに異なるが、明治日本がメートル条約に加入したのちの一八九一年、一・二キロ＝一一町と定められた

K. Sakashita

ため、結果的に一町＝一〇九・〇九メートルとなった。距離だけでなく、同時にその長さを一辺とする正方形の面積をも表す。英語で言う「ブロック」に近い感覚があり、現在なら「二ブロック先」と言うところを、昔は「二丁ほど先」などと言った。そういうわけで、男爵バイロン・バラージュに対してDが「二丁ほど南に祭祀館がある」と言ったのは、しかつめらしく計算すれば「二百メートルほど南に祭祀館がある」という意味で、つまり「少し行けば南に祭祀館がある」と言ったのと同じこと。それにしても、なかなか風趣な台詞をものされますな。永六輔さんとお話が合いそうです。

ちょう-おん-き【聴音器】（双影の騎士）村の坊主バルガが『都』で手に入れたものは、五十メートル以上離れた場所の会話も聴けるらしい。

ちょう-おんぱ-はかい-ばん【[illegible]音波[illegible]壊[illegible]】（[illegible]天使）貴族の馬車の車体に使用されているもの。攻撃物に対して超音波を発して、逆に破壊するものと思われる。

ちょう-おんぱ-はっしん-き【超音波発信[illegible]】（[illegible]天使）男爵バイロン・バラージュがいざというときのため、タキに渡した緊急用の棒状発信[illegible]。握ると超音波信号を発信する。貴族——少なくとも大貴族の血を引くバイロン男爵の耳は、超音波を可聴域に捉えているらしい。

ちょう-けん【[illegible]】（双影の騎士）Dが使用する長剣は、多くのハンターが愛用する直線型の剣とは異なる優美なカーブを描いている。黒光りする柄には、油を塗った蔦が巻かれている。鞘には高分子ザイルが巻いてあり、鍔には通し穴がある。高分子ザイルは刀身、あるいは鞘ごと放った刀を引き戻したり、ふり回して敵を威嚇するため。

ちょう-こうあつ-づくえ【超高圧机】（死街譚）マホガニー製のデスク。ナイト家の実験室にあり、ローリイの父フランツ・ナイトがいつもその上を指ではじいていた。表面の光沢を出すため発輝剤を塗布してある。Dの左手の舌が分析したところ、成分の原子配列がひとつの文字と式を構成していた。それこそ、人間を貴族とするための方程式と化学式であった。

ちょう-こがた-ミサイル【超小型ミサイル】（堕天使）闇水軍頭領ガリルが指の間から放つ武器。命中すれば、人体の肩を内部から弾けさせるほどの威力を持つというが、いったいどれほど「小型」であれば、そのような芸当が可能なのであろうか。同じように、指の間から必殺の「鉄の爪」を出す『X－メン』のウルヴァリンに訊いてみよう。

ちょう-じゅう-ごうこう-の-とびら【超重合鋼の扉】（堕天使）貴族の墓所を守る扉。数千、数万も設置されているらしい。

「ちり-に-なれ、つち-に-かえれ」【塵になれ、土に帰れ】（堕天使）貴族崩壊に際して人間たちが必ず口にしたといわれる決まり文句。

ツ

ツイグ（肖像画）イゾベル・ドレイクの住んでいた館のある村の東に住んでいた二百四歳になる老人。村の最年長者だったが、Dが依頼を受けて村にやってくる四日前に、薬草を採りに行った帰り道に崖から転落して死亡した。

ツイン（北[illegible]行）通称〝悟られずのツイン〟。ギリガン五人組のうちのひとり——にしてひとりに非ず。同じ日の同じ時刻に生まれた兄弟というか相棒というか、とにかくこの二人組をもってツイン＝TWINとなす。他人に化けるのがうまく、フローレンス村でもハン老人に化けていいところまで行くが、Dには見破られ、片手を失った。このツインと、老人の死体に化けて納屋で胸を刺されたツインとは別人で、悟られずとはつまるところ、悟られぬほどに人化けがうまいというよりは、二人組であることを悟られてはならぬという意味であろう。本人が言うように、悟られてしまったらそれでおしまいなわけで、結構アホな術師である。その代わり、膠（にかわ）のような体液はスキン・ベールとしてさまざまの役に立った。死人に化けている限り絶対に殺せないというあたりに、むしろ人化け術師としてのハイレベルぶりをうかがうことができよう。

つう-か【通貨】（D）この世界の貨幣にはアリストクラート・コインやグラス、ダントなどがあるが、最近では神祖金貨などというものも存在が確認された。

つうしん-けっしょう【[illegible]】（堕天使）直径二十センチほどの水晶状の物体で、うす紫の色彩の内側に金属の球体を包含している。「タロスの武器庫」の奥の封印堂でDが発見した物はおよそ五千年前の品。多重層戦場内に亜空間に包まれ、標識（ブイ）付きで発見を待っていた。

つうしん-とり【[illegible]】（ダーク）早馬などとともに、辺境の村が近隣の村と連絡をとるのに使用する。

つうしん-ばと【[illegible]鳩】（[illegible]像画）湖の監視隊が使用。イゾベルの柩が急に腐り果て、湖に没したことを村長の館に知らせにきた。

ツェザーレ（[illegible]天使）「貴族の口づけ」を与えた主

人の言うがままに動く操り人形。眠り男の別称でもある。人間でも貴族でもない亜人間の別称でもある。

ツエペシュ（風立ちて） 西部辺境第七地区（セクター）の村。全人口は千人足らず。二百年近く前に村として成立。西暦一一八九〇年頃か。四囲を黒い森で覆われたささやかな平地にある。狭隘な谷間の街道で外界と接している。周囲に牧場や太陽熱農園があるが、それらを含めても二百戸ほどしかない。リナが生まれる前、というから十八年以上前、貴族の一団に襲われ二十人近い犠牲者が出た。以来、生まれた子供達に語り継がれている。丘の上に貴族の廃墟があり、これが元凶となって白昼活動する吸血鬼という前代未聞の恐怖に巻き込まれる。吸血鬼ハンター＝ゲスリンを十万ダラスで雇い、さらに続けてDを雇うあたり、実は裕福な村なのかも知れない。また、村の自衛のためにコンピューター戦車も保有している。気象調整装置に異常があり、春夏はともかく、秋になればすぐ雪がちらつく。冬期には零下十度が標準気温になり、商人か巡回吏しかこない。屠殺場もあるらしい。雨飛沫が黄色いことから、このあたりは黄土系の土地らしい。スーインの家から学校へは北へ二キロの距離がある。村の中央には村の全人口を優に収容できるだけの広さを誇る広場がある。祭りや巡回商人の商品展示などの大掛かりな行事に使われる。広場のあちこちに超小型スピーカーが埋めこんである。村外れに使われていない水車小屋があり、ファーンにクビになったDが滞在した。

ツエペシュむら-しっそう-じけん【ツエペシュ村失踪[illegible]件】（風立ちて） 十年ほど前の冬の日に、ツエペシュ村の子供たちが失踪した事件。失踪者はリナ・ペラン、ルーカス・マイヤー、クオレ・ヨーシュテルン、タジール・シュミカの四名。五十年ぶり（一説には四十年ぶり）に決死隊が編成されて廃墟の丘を調査したが、一週間のうちに決死隊のなかにも消える者が出たため調査は中断。半月後の夕刻、粉屋の女房が近くの森に月茸を取りにいったときに、丘から下ってくる（タジールを除く）三人だけを発見する。

ツエペシュ-むら-はいきょ【ツエペシュ村[illegible]墟】（風立ちて） 底辺の直径二キロ、高さ二十メートルのなだらかな丘にある。この丘は一メートル登るのに男の足でも三十分かかる。（高さ二十メートルなので、六百分。つまり十時間かかるはず）。駆け降りると、二分もかからないのだが。三千五百年もの間、「神祖」によって実験が繰り返されていたが、それでも吸血の習慣がなくならなかったため、数十万もの生命が抹殺された。ツエペシュ村の創立者たちがやってきた二百年近く前でもすでに蔓草のはびこる廃墟だった。幾度か村の決死隊が調査し、古（いにしえ）の素性と見取図を作成したが、奇怪な現象が多発。五十年前の『都』からの調査団以降は、丘に登る者はいなかった。唯一残った石造りの建物に、中庭に面した洞窟のような入口がある。内部には奇妙な機械や家具が置かれている。彫刻や絵のかかった廊下を幾つも曲がると、ホールらしきところに出る。地下には巨大な実験室がある。四囲は廊下同様、巨大な石塊を十メートル近い高さまで積み上げた大城壁、床に並ぶデスクもごつい木製、それを飾り立てるのはフラスコやビーカー、奇態な色の液体が詰まった薬瓶――まるで中世錬金術師のラボそのもの。それら古風な器具の間には陽電子頭脳、エレクトロ・アナライザー、物質変換装置といった超科学技術機器が並ぶ。

ツタガラセ（死街譚） きわめて繁殖力の強い雑草。取りこぼしや細い根の一端でも残っていれば、新たに芽吹くまで三日、成木に達するまで三週間とかからないため、移動街区では雑草駆除の最重点目標となっている。Dがハットン治安官一味と戦う時にこれを使用、治安官助手のショットガンから飛来する散弾三十六発×二人分＝七十二発を、緑の綿菓子を思わせるその枝で払い落とした。と同時に、Dの剣が二人の治安官助手の頭を割った。

つち【土】（一般） あまり知られていないが、吸血鬼は自分の生まれ育った土地の「土」に拘束されており、その見えない絆の影響から逃れることはできない。生まれ育った土とともに「生きる」ことになるが、吸血鬼が移動時に柩の中に自分の領土の「土」を敷き詰めるのはそのためである。神祖や大将軍ギャスケルといえども、この法則から逸脱することは不可能。吸血鬼にとっては弱点にも等しい特性であるが、逆に、太陽光が致命的な結果をもたらすのは、土の上に立っているときだけ、すなわち、地球上でのみ太陽光線に弱いという逆説的なロジックを生み出し、吸血鬼たちが外宇宙へ進出することを可能にした。地球の吸血鬼＝貴族はいかにあがいても陽の出に立ち会うことは不可能だが、宇宙の夜明け――映画『二〇〇一年宇宙の旅』のオープニングなら胸を張って拝むことができる。→たいよう-こう【太陽光】

ツチナラシ（[illegible]） 一夜にして丘ひとつを呑み込む巨獣。薔薇姫領内に出現したそれは、ダイアンローズの四騎士によって葬り去られた。

つち-ほり-バイソン【土掘りバイソン】（堕天使）

K. Sakashita

クラウハウゼン手前の平原に棲息。クロケムシや平原ネズミ、三つ首イノシシなどとともに大暴走──レイジング・ランを巻き起こしたが、大地を割って出現した地虫（アースウオーム）の巨大な舌にことごとく呑み込まれてしまう。

つぼ【[illegible]】（[illegible]歴） パイパー婆さんのそれは陶製と思われる灰色の大ぶりの壺。高分子繊維の蓋がはめこまれており、中には婆さんが術に使う砂が入っている。

ツマク（[illegible]姫） 馬車を駆ってサクリ村から逃走しようとした一家。木の杭街道を疾走中、紅騎士に見つかり青騎士に退路を断たれ、一家六人皆殺しとなった。

ツルギ（死街[illegible]） 黒い髪と黒い瞳を持つ若き巡回医師。一年の契約期間をもって移動街区に滞在していた。身長は百七十そこそこ、体重も六十キロ台だが、投げメスによって敵を威嚇するなど、どこかの白衣の医師を彷彿とさせるような技を使う。カラテもこなし、医者としての腕もいい。旅が好きで医者になったという変わった男でもある。ただ、どうしても押しの強いタイプには見えないのに、Dに対してのみ一方的な男となる。Dを見る眼差しにも一種の執念を宿している。その正体は、ドリスの心を掴んで放さない恋敵への嫉妬であった。Dがランシルバを去った直後にドリスの農場を訪れたのが、他ならぬツルギだったのだ。ツルギの台詞から、また、移動街区に着いてからHが浅いことなどから、Dが移動街区へ招かれたのは、ランシルバ村でリイ伯爵と死闘を交えてから半年以上プラス数カ月以内と判明。ローリイと一緒に崩壊した街から降りた。

テ

でぃ【D】（D） ダンピールの吸血鬼ハンター。「鍔広の旅人帽（トラベラーズ・ハット）を目深にかぶり、色褪せた黒のロングコートをまとう。男らしい濃く太い眉、すらりとした鼻梁、意思の強さを表すきりりとしまった唇。修羅の世界で数多くの戦いをくぐり抜けてきたもの独特の厳しい顔立ちの中に、憂いをひめた瞳がかがやき、美の結晶を完全にしあげていた」──以上、D初登場の描写より。がっしりした身体に声は十七、八の青年のもの。二十歳に満たない風貌。切れ長の冷たい、しかし澄んだ黒瞳。男らしい濃く太い眉。すらりとした鼻梁。意思の強さを表わすきりりと締った唇。肩に左手を触れただけで人を気絶させる。その剣技は人狼の驚異的な再生を阻止する。魔除けの術が使える。貴族の口づけのあとに左手を押しつけるDの「まじない」は、吸血鬼の息がかかると十字を浮かび上がらせる。Dはドリスにこの処置を施した。両眼からの真紅の閃光は強烈な催眠効果を有し、ミドウィッチの蛇女をも支配下におく。左手で被質問者の額をつかむと、Dの質問には何でも答えるようになる。自らの言によると、雨に打たれれば体温が二度低下し、走る速度は三割落ち、代謝[illegible]能自体がレベルダウンするらしい。しかし雨中でも、その走る速度は百メートル六秒とかからない。その剣技は吸血鬼の回復能力を上回るほどの傷を与える。

〝怪魔団〟と闘った時は一人十五秒でかたをつける離れ業を披露。ミドウィッチの蛇女と闘った時には吸血鬼の牙を用いた。噛まれた相手はDの意のままに動く。ドリスに迫られた際も牙をのぞかせるが精神力でそれを押し戻し、「女の願いもかなえてやれんで、なにが一人前のダンピールだ」と左手に揶揄される。ハンター稼業以外の面でも有能ぶりを発揮し、除草剤の詰め替え、[illegible]の修理、太陽パネルの交換など、ダンとドリスが一月かかっても終わらない仕事を半日でかたづける。意外に器用。Dの作業量はドリス農場でおんぼろロボット一台とダンが三日でかたづける仕事を半日で終わらせる。三十キロの合成蛋白の箱を三つ一度に運ぶ仕事を三時間ぶっ続けで行なう。乳しぼりは左手一本でドリスの三倍のスピード。ハンターとして食べていけなくなっても、何ででも生計は立てていけるという生活力の持ち主であることがわかる。麗銀星とグレコに一度は殺されるが、左手の力で再生。リイ伯爵を葬り、見事に

ドリスとの契約を果たし、ダンとの約束も守りランシルバをあとにした。報酬は一日三度の食事とドリス自身だったが、結局Dは受け取らずじまいだった。が、後日ツルギ医師の話によると、しっかりと（ルパン三世ではないが）ドリスの心を奪っていった。色男である。

ディ-エヌ-エイ-じょう【DNA■】（■天使）貴族の墓所の扉を守る錠前。

D・フォース・フィールド【防御用力場】（ダーク）七人の「招きびと」のひとりローランサン夫人の馬車に装備されていたもの。御者台から客人用座席まで、半透明のカバーが覆うようになる。

デイ・ウォーカー【Day Walker】（一般）昼日中に活動する吸血鬼。Dの世界で言うところの「昼歩く貴族」。体質的に太陽光線の影響を受けないもの、薬品やシールドによって遮光処置をしたもの、何らかの理由で自発的に陽光の下で活動したがるもの、状況はさまざまだが、最近の吸血鬼物語に欠かせない必須要素である。映画では『サンダウン』や『ブレイド』でその生態が紹介された。ジョン・スティークリーの『バンパイア・バスターズ』を原作にしたジョン・カーペンター監督の『ヴァンパイア／最期の聖戦』では、荒野のデイ・ウォーカーと吸血鬼スレイヤー＝チーム・クロウの対決が描かれた。

でぃ-の-うた【Dの歌】（ダーク）貴族の中でも選ばれた一部のみが、ご神祖の館で聞かされた歌。口ずさんだのはD本人。夜空を歩きながらそれを耳にしたローランサン夫人は愕然とする。歌を作ったのは、夫人ほどの身分でも目もじしたことのない神祖の奥方だったからだ。

　生を知らず、死を知らず
　それゆえに、汝、その名を呼べ
　遥かなる者と

ディームリ（■天使）中央街道沿いの廃村。土砂降りのためD一行が宿泊地に選び、村のほぼ中央にある集会所とおぼしき煉瓦づくりの建物に入る。付近の川は幅約百メートル。頑丈な木の橋がかけられていたが、今は崩れ落ち、対岸に渡るには遥か上流と下流に渡された吊り橋か渡し舟しかない。集会所から少し離れたところに神堂。集会所から南に二丁のところに祭祀館。建物の軒下には板張り歩道がある。村は外壁の柵で囲まれている。村外れの北の森には、樹齢数百年の巨木がある。内部の空洞を利用して大小の部屋と通路が作られ、監視塔、飛行体の発着場、避難所、倉庫として利用されていた。内部には二階建て、三階建ての小屋まである。

ていき-のりあい-ばしゃ【定期乗り合い馬車】（■天使）西部辺境（？）を走る交通機関。街道に停車場が整備されている。

ていき-のりあい-ばしゃ-ていしゃ-ば【定■乗り合い馬車停車場】（■天使）定期乗り合い馬車の停車場には万が一の用心に、ボルトを射ち出す火薬銃と短槍、長剣が取り付けられている。Dと男爵バイロン・バラージュが落ち合った場所。

ティナ（風立ちて）リナと同じツェペシュ村「学校（スクール）」に通う女子生徒。カリスに熱を上げている。

デストロイヤー（双影の騎士）これを「破壊者」と翻訳すると『蒼白き堕天使』の「タロスの武器庫」に封じられていたとんでもない住人になってしまうのでご注意を。

てっこう-しゃ【■甲車】（双影の騎士）さまざまなタイプがある。ちなみにセドク村警備隊が装備していたのは旧型（タイプ）。鋲打ちの鉄板を熔接した車体は、異様にゴツゴツしている。砲塔から四〇ミリ砲身が五〇センチほど突き出している。数十年の戦歴を物語るかのように、装甲部に広がる焼け焦げやおびただしい弾痕がある。また、手入れの程度は低く、鉄板のあちこちがめくれ、砲身には錆が浮いてる。砲塔には鉄板を少し切り取り、ガラスをはめ込んだ照準窓がある。そのガラスには照準線（十文字）が描かれている。通常の戦車のような照準器はなく、壊れたらしい。四〇ミリ砲身から五五ミリ炸裂弾を発射する。その装甲は四〇ミリ砲戦にも耐えられるが、Dの刀身は紙のように切り裂いた。

てつ-どう【鉄道】（ダーク）辺境の一部に残る交通機関。路線が極端に少ないのと、強盗や妖物の襲撃が多く利用者がいないため、旅客は扱わず、鉄道自体は輸送専門。貨物列車には十名以上の護衛が乗っている。定刻より三十分遅れ程度は、むしろ時刻に正確な方に属する。

デッド・キャリアー【死体■■人】（夢なりし）辺境をめぐる行商人の職種のひとつ。瞬間保存措置を施した死体の提供を生業とし、新鮮な死体を求めて町や村を徘徊する。辺境にはなくてはならない存在。苛烈な環境のもとで生きる人々にとっては、死者は必ずしも聖なるものではない。アイ・リンはこの業者から、チキナーの餌である人骨を購入していた。

デミー（北海魔行）北の辺境で一般的な生活レベルの汎用銅貨。通常十デミー。

デュアー-かべ【デュアー壁】（死街■）移動街区の核融合炉制御室を取り囲む壁。厚さ二センチで三重構造。

テューダー-しゅ【テューダー酒】（ダーク）クラク

フ村の牢番が飲んでいた酒。

デューブ-じゅう-ぶんし-こう【デューブ重分子鋼】（ダーク）ゼノン公ローランドのまとう装甲甲冑の材質。

デューム-こう【デューム鋼】（死街譚）移動街区町長宅の管制室のドアに使われている。

テレナ（堕天使）十数人いるフィッシャー・ラグーンの愛人のなかでも、ラグーンが最も気に入っている女。ラグーンがヴラド・バラージュ卿の『山城』に呼ばれた日の前夜にヴラドに血を吸われ下女になる。ラグーンの手で心臓を突き刺され、死亡した。

テレパシー【■■感応】（堕天使）貴族が基本的に備えている特殊能力のひとつ。貴族は一種の精神感応によって、野生動物を下知できる。ただし、あらゆる生物を従わせることはできず、また、貴族の意思の微妙な乱れによって、その制御は容易に破れてしまうことがある。ミスカ・ドレイクはこの能力で、ディームリ村の巨木の大蜘蛛をいっとき自分の意思に従わせた。

T・フィッシャー（風立ちて）貴族研究家。『犠牲者による貴族のレベル識別法と防御対策』の作者。この本は『都』の革命政庁から禁書に指定されながら、現在なお辺境の人々に読み継がれている。私も一度は読んでみたい。

テレンス・フィッシャー【Terrence Fisher】（一般）英国のハマー・プロを舞台に、その初期傑作群のほとんどを演出した映画監督。代表作に『フランケンシュタインの逆襲』（五七）、『吸血鬼ドラキュラ』（五八）、『ミイラの幽霊』（六〇）、『吸血狼男』（六一）などがある。

でんき-あみ【電気網】（■天使）クラウハウゼンのホテルの終夜バーの用心棒の親玉がフシアに使用した武器。丸めると片手にすっぽりと収まる毛玉のように見える。霞網のように目標を包み、手首に括りつけた超高電圧の放電装置と発電器（ダイナモ）が五十万ボルトを放電する。

でんき-ぐも【■気雲】（堕天使）紫色の雲にしか見えないが、実は貴族が作り出した雲状生命体。そのサイズは数百平方キロの広さ、地上五キロに及ぶ、最高危険物の五指に入る妖物。生命を有するガス塊は十三種からなり、その成分が複雑に絡み合うため、内部には奇妙な毒ガス帯（ゾーン）が存在し、外部に対しては五十万ボルトもの高圧電流や酸性雨、腐敗風などをもたらし、通過したあとは大地は死の土地と化す。ただし複合生命体のせいか、発生後、せいぜい一昼夜で消滅する。そのガス状の脳には他種への限りない憎悪と破壊衝動のみが貴族によって植えつけられている。D一行が遭遇したものは高さ百メートルか一キロの比較的小さいサイズ。遭遇すれば逃走するしかないこの怪物も、貴族の馬車を破壊することはできなかった。

でんき-じゅう【■気獣】（風立ちて）ツェペシュ村の護衛獣調教師サイラス・ファーンが使用した護衛獣。紫に光る雲。鳥籠ほどのバスケットに収容されている。雲の内部から雲煙が湧き出し、それが直径五十センチほどの外周を形成する。そのスパークは、五十万ボルトにも達する。ファーンには電気雲と呼ばれている。

でんき-バス【電気バス】（風立ちて）ツェペシュ村と外部を結ぶ交通機関で、村から出て行くたった一つの手段。冬のあいだは不通である。村の街道にちっぽけなバス停がある。マルコ少年がこのバスの中からDに放った決意の言葉は、リナ・スーインの予言通りDに微笑を浮かばせた。

てんくう-より-の-しゅご-しゃ【天空よりの守護■】（■■）貴族の領地を守る謎のシステム。ブロックデン一族の領地を例に取れば、鉄をも溶かす稲妻、大地を腐食させる溶解雨、■械兵をも食いちぎる妖物などが忽然と天空より発し、領地を侵す者を撃退したという。真相については推測の域を出ないが、領地上空数百キロに滞空している〝武器庫〟がその正体である可能性がもっとも高い。

でんげき-ぶろ【■■■呂】（堕天使）フィッシャー・ラグーンの館にあるイベント・ルーム。性感を最も刺激する強さに電圧を調整されたエレキ・クラゲが充満している風呂。

でんげき-ぼう【電撃棒】（堕天使）好色漢バルコンが少女との艶戯プレイに使用しようとした大人の器具、というかおもちゃ。

でんし-ぎしゅ【■子義手】（堕天使）ヴラド・バラージュ卿が、Dに切断された右手の代わりに着けた義手。本物と見分けがつかないほど精巧。ときどき左手になったりするくらいですから。

でんし-ストーブ【電子ストーブ】（聖■遍歴）クレイ・ビューローの持ち物。夜営の時に暖をとるのに使用していた。

でんじ-てつじょう-もう【■■鉄条網】（ダーク）辺境商工ギルド輸送隊が夜営を張った際に、対妖物・野獣用に周囲に張りめぐらせて使用。超小型高出力の発電器（ダイナモ）は、三十万ボルトの高圧電流を鉄条網に流して、侵入する外敵を焼き殺す。しかし、分厚い鎧や耐電性の皮膚を持った敵には効かない。警報センサー付き。

でんじ-て-ぶくろ【電磁手袋】（死街譚） 移動街区の巨漢コンロイがDを街から追い出そうとして威嚇に使ったもの。本来は狩猟用で、最大電圧は五万ボルト。中型火竜ならば充分に倒せる必殺の武器。

でんじ-バリヤー【[illegible]壁】（D） ドリス・ランが『都』の闇商人から仕入れた中古の障壁。父親が生前に蓄えた金の三分の二以上もしたらしいが、時たま故障する以外は重宝な品。

でんじ-ペン【[illegible]ペン】（死街[illegible]） Dがローリイとの筆談のために使わせたペン。物語の後半では電子ペンとなる。ペンがない場合、Dは人差し指の先を口に当てて咬み切り、自分の血をもってメモをしためる。そのメモにいわく、『戦わねば斃される。君も仲間に入れ』――ローリイかんげき――っ!!

でんし-むち【[illegible]子鞭】（夢なりし） 万能屋マギーが馬を御するのに使用していた。殺し屋アレクシス・パイパーの愛用武器でもある。

でんし-やり【電子槍】（夢なりし） スイッチを入れると、内側の発条（ばね）がはずれて、一メートルほどの槍の柄は一気に倍に伸びる。同時に蓄電池もオンになり、一デューム鋼の穂先が青白いかがやきを発する。切創を与えられなくとも、触れただけで五万ボルトの高圧電流が直撃する、外見から想像される以上の極めて強力な武器。『辺境百科総覧』によれば、全凶悪生物二〇〇ランク中、五〇ランクまでの中型獣に有効とされる。これで労働獣の尻を刺すのは荒っぽいが、必ずしも無茶なやり方ではない。

でんし-ようせつ-き【電子熔接器】（風立ちて） リナの家の屋根が飛んだとき、タジール・シュミカが持ってきた修理道具。

でんし-ランプ【電子ランプ】（風立ちて） Dも持っている旅行用の小型ランプ。直径五センチ、高さ十五センチほどの銀色の円筒だが、照明の他にストーブや保温器、冷凍装置、調理台などの用途に使用できる。

でんせつ-の-たび-の-おとこ-の-ひと【伝説の旅の男の人】（北[illegible]行） フローレンス村での神祖の呼び名。

テント（[illegible]天使） 街道の魔術師（トレイル・マジシャン）ヨハン卿が使っているテントは、七彩のドームを半分に割ったようなテントというか陽除けだった。

でんどう-タール【伝導タール】（夢なりし） 脳波検査用に頭皮に塗り、電極を付ける軟体物質。

でんねつ-コート【[illegible]熱コート】（風立ちて） 分厚いコート。

てんねん-きねん-ぶつ【天然記念物】（双影の騎士） 処女魔道女ミア・シモンのことを指す。

テン・ボム・ガン【十連[illegible]】（D） ランシルバ村長の息子グレコの愛用する拳銃。中クラスの巨獣タイプなら、楽々とその装甲を貫くハイパワー炸薬を撃ち出す十連発銃。

ト

ドール・アニマル（堕天使） 貴族の墓所を守る番兵。生物が決して備えられない残忍さを持つ。同様の役目を担うものには機械兵が存在する。

どうちょう-しょり【同調処理】（風立ちて） 空間断層の物理的特性に適合しない存在は、形はそのままだが全く別の物質になるという、物質的な死をもたらす廃墟の防御機構を突破するために、Dが自分の身体に施したもの。

とう-や-き【投矢器】（双影の騎士） 重量五キロもある投矢器。五十メートル以上も離れたところから鋼の矢を放つ。円筒形の矢筒を装着して連射が可能になる。圧縮空気によって秒速二〇〇メートルで矢を射ち出す。

とうろく-ナンバー【登録ナンバー】（風立ちて） ツェペシュ村に住む人はもちろん個人の名前を持っているが、戸籍は番号で管理されているらしい。「登録ナンバー八〇〇九セカ・ボランの娘ジナ」という表記があるので、このナンバーは家ごとに採番されていると考えられる。

とき-だまし-の-こう【時だましの香】（D） 化学物質による時間への催眠術。昼を夜に、夜を昼へと偽ることができる。リイ伯爵がDを退治するための武器として麗銀星に渡している。その後グレコが盗んでラミーカを窮地に追い込むなど、活躍の目立つ得物である。名前のみ『妖殺行』にも登場したが、実に十数年ぶりに『邪王星団』で復活再登場を果たした。

とく-エイ-きゅう-コンピュータ【特A級コンピュータ】（堕天使） ディームリ村北の外れに位置する飛行体発着場を管理するメイン・コンピュータの種別。人間並みのプライドを持つ扱いにくいコンピュータだが、Dに対しての服従的な物言いはバイロンが驚くほどで、尋常な貴族相手には決してしない。その発する声は、合成音で澄んだ女性の声になっている。タキの印象では冷たく知的な美女といったところ。他の女性の音声も当然ながら合成可。この時の声はおそらくDの母か？　五千年前に一度だけ訪れた「神祖」に想いを募らせ、そのデータから神祖のコピーを合成する。

どく-きのこ【毒茸】（[illegible]天使） シャバラ渓谷に生えている毒茸は、薄紫色をした「可憐な」毒茸であるという。「美しい毒茸には毒がある」――って、そ

りゃ当たり前ですがね。

とくしつ【特質】（堕天使） 相手が強敵であればあるほど、闘志と残忍さが燃え上がる。これこそが貴族を文明の覇者とした「二大特質」であった。「タロスの武器庫」内で目覚めた「破壊者」に対して、男爵バイロンがその「特質」を垣間見せる。

ドクランバ（夢なりし） 辺境の森に生える樹木。第五長篇『夢なりし〝D〟』の冒頭にはこの手の辺境樹木がいっぱい出てくる。

トコフ（夢なりし） シヴィルが眠る「村」の村外れに住む農夫。酒乱の気のある乱暴者。当然ながら身寄りなし。Dにいきなり電子槍を投げつけ、いずこからか射られた矢で殺されてしまう。竜車を操っていた人間。

ドゴマ（堕天使） 山賊のボス。右眼を赤外線スコープで覆っている。忠告した手下を殴り殺すほど狂暴短気。その両腕はスチール製の骨を高分子筋肉でくるんだ人造の剛腕。制御は肩の電子神経コントローラーが行ない、内蔵の作動モーターは一千馬力の出力。その威力は鋼鉄のハンマーで貴族の柩をへこませるほど。男爵バイロン・バラージュがふるったハンマーの一撃で頭蓋を粉砕され、死亡した。

とつきーとうか【十月十■】（■■■） 胎児が母体にいる期間を表わす昔からの言葉。赤い眼の主の子供の場合は、兆候に気が付いてから約半年後に生まれる予定。

ドッペルゲンガー【二重存在】（ダーク） 本人と瓜二つの存在。その多くは本体の意思に反して邪悪な行為にふける。辺境では別段珍しい存在ではない。

トト（北■行） 通称〝逆しまのトト〟。またの名を蛮暁。北の辺境一の盗賊。太さの異なる二本の細い金属の輪を鳴らすことにより、相手の意志に干渉せずにその行動だけを——前ならば後ろ、右ならば左とベクトル変換することができる。人間のみならず貴族にも効力を発揮し、スーインの血を吸おうとしたマインスター男爵は、チンという輪の音とともに海に戻ってしまった。男爵の怒り、いかばかりや。グレンに腹を裂かれてなお、こぼれた臓物を元に戻して逃げ去る体力を有する怪物である。

ドネリコ（ダーク）「犠牲者の谷」から街道を西へ一時間、さらに五キロ先にある村。低地に位置しているため、しょっちゅう川の氾濫に遭っている。ドネリコの手前で濁流に遭遇したDは、世にも珍しき「柩の滝登り」を目撃する。北へ三十キロばかりのところにはギャスケルの領地への境界があるが、そこは〝Gの乱〟で使い放題にした核兵器や妖術兵器がそのままになっており、蟻さえ棲まぬ荒地と化している。反乱で氾濫に遭う村——なんちって。

トビハヤテ（夢なりし） 辺境に住む動物。「罠をはずしたトビハヤテのように」という譬えがあるように、すばしっこい動物。

ドミティウス・ブラウニング（ダーク） 大部な研究書『貴族伝説考』の著者。全容は不明だが、その第三巻には「貴族の中には心臓を白木の杭で貫かれても、その杭を抜きさえすれば復活する猛者もいる」との記述あり。街道一の学者を自称するセルゲイはこの『伝説考』の愛読者だったため、ゼノン公ローランドにやられた直後のDが復活してもすぐに納得した。

ドラクゼーきんか【ドラクゼ金■】（ダーク） これ一枚で他の金貨十五枚分の価値がある。輸送隊三人組が進呈しようとした馬に対してDが支払った金貨だったが、セルゲイは「尊敬してる相手から金は取れねえよ」と投げ返した。

トラベラーズーセンター【■■センター】（堕天使） ディームリ村北の飛行体発着場の旅客用施設。巨大なメイン・ホールを有する。自動管理機構の働きで、塵ひとつなく清潔に保たれている。本来なら来客用に昼夜分かたず、メイン・コンピュータ制御の造営回路によって、人工の夜をもたらすが、現在はエネルギー維持のため訪問者のあったときだけ造営する。メイン・コントロール・ルームのコンピュータによると、来客は五〇〇一年と二九八日ぶり。おそらく、どこの発着場でも規模こそ違え、同様の施設があるだろうと思われる。

トリカブト（ダーク） 別名オオカミグサ。ゼノン公ローランドが苦手とする植物。街道一の学者を自称するセルゲイが「呪われた保管庫」の記録から得た情報で実践使用、絶大なる効果を発揮した。のちにゼノン公の娘レディ・アン聖騎士にも使ったが「私には効きません」とあっけない結果。しかしレディ・アンは貴族とは言っても木〇〇形だからね。本当なら効いたのかも知れません。

ドリス・ラン（D） 辺境地区の一小村「ランシルバ」のはずれに住む、大柄で燃えるような瞳の十七歳の美少女。ランシルバの村ができる遙か以前から一帯を管理していた吸血鬼リイ伯爵に「貴族のくちづけ」を受けたことによりDを雇う。父親が人狼ハンターだったことから、ドリスも相当な鞭の使い手である。父親が死んでからは、弟ダンと二人で農場を経営している。伯爵に血を吸われる前までは、村長の息子グレコにつきまとわれることはあったものの、おおむね平和に暮らしていたと思われる。Dを

テ—ト

Y. Amanoa

雇ってともに暮らすうちに、次第にDに魅かれていく自分に気づく。

トルソ（北海魔行）フローレンス村の因業親父。自分はハン老人に借りがあり、息子はスーイン&ウーリン姉妹に恩がありながら、村議会委員の立場をかさに着て啖呵を切った。ドワイトが怒るのも無理はない。

トロリムシ（夢なりし）子供が捕まえるような虫。現代で言えばトンボやカブトムシであろう。

ドワイト（北海魔行）フローレンス村の漁師にして青年団長。分厚い皮のジャンパーにズボン、腰のベルトには、革紐で結んだ三十センチほどの木の棒を二本挟んでいる。スーインに想いを寄せるが、Dの出現に態度を硬化させる。治安官事務所前での乱闘に際してDの正当防衛を主張、Dをして「借りができたな」と言わしめた。武骨な性格だが、それゆえに一本気な好漢。Dに「漁師になれ」と勧めたことでも有名。

ドワイト・フライ【Dwight Frye】（一般）アメリカの俳優。一九三一年のアメリカ映画『魔人ドラキュラ』で伯爵の下僕レンフィールドを演じた。

ナ

ナイト【N】（複合）辺境標準時の時刻表示のひとつ。

①マイエルリンク男爵の逃避行・追跡行の始まったこの季節、この地方での標準日没時刻が、５００Ｎ。

②ハン老人の棺を納屋で見守るDのもとへ、国王（キング）エグベルトが訪れた時刻が、９００Ｎ。

③リイ伯爵の現われるだろう真夜中過ぎまでにはまだ時間があるとして、ドリスの首筋の傷をDが検分したのが、辺境標準時で９２６Ｎ。

④長居を決め込んだフェリンゴ医師の前で、ドリスが「あたしももう休みます」と時計を見ながらきっぱりと宣言したのが、９３０Ｎ。

⑤最後の戦いの晩、Dに報酬を支払おうとしたドリスの唇が、Dのそれと重なったのが、１１００Ｎ。

⑥移動街区町長ミンの家で、Dがラウラの見張りについてほどなくした頃が、貴族の訪問が最も盛んになる時刻――１１００Ｎ。

⑦珠争奪戦に明け暮れた夏の最後の日、思い出サモンがDに「スーインの家の前の海岸へ来い」と指定した時刻が、晩の１１００Ｎ。

⑧珠争奪戦の始まる前の年の夏、フローレンス村でスーインの隣の家の娘が、マインスター男爵に襲われた時刻が、真夜中の１４００Ｎ。

⑨シャンバラの森へヤキの青い苔を取りに行くと言い出したエレナに、今（０Ｊ（ゼロ・ジャスト））から行ったんじゃ、戻るのは早くて五時間後だとママ・キブシュが言った、その時刻が５００Ｎ。

⑩ちなみに、麗銀星がダンを人質にして、Dに「先日お会いした『遺跡』地帯へ来られたし」と指定した時刻は、夕刻の１８０（単位なし）。

ナイト・クラウド【夜の雲】（D）貴族の手で作られた人工魔のひとつ。半透明の物質で肉食、犠牲者を発見するや、瞬く間に取りついて分解・吸収する。蘇ったDに一刀で切断された。

ナイフ（堕天使）タカビー貴族ミスカ・ドレイクが隠し持っていた大型のナイフは、刃渡り三十センチにも及んだ。ほんとにどこに忍ばせていたんだろう。

ナギ（薔薇姫）Dがサクリ村に到着する直前に薔薇姫の犠牲となった（おそらく）サクリ村の少女。享年十七歳と一カ月。合掌。ほんの「三日前、友だちと、町の専門学校へ行くと話し合ったばかりなのに」ねえ。

なげ-ばり【投げ針】（風立ちて）白木でできた針。Dの武器。ツェペシュ村で「影」との戦闘時、鋼鉄の鏢を迎え撃つのに使用した。

なつ【夏】（北海魔行）いつの時代も誰にとっても、夏は短い。

なな-いろ-の-ちょう【七色の蝶】（堕天使）シャンバラ渓谷に棲息する蝶の一種。

なに-が-のぞみ-だ【「何が望みだ?」】（D）Dが最初に口にした台詞。人気シリーズ「D」の物語も誕生以来すでに長篇十二、中短篇九を数え、さまざまに変わってきたが、Dの無愛想ぶりだけは、遺伝子に組み込まれたもののように不変である。最近ではDの台詞がひとつあるたびに「考えられないこと」であるとか、誰かの質問に答えては「奇蹟に近い」とか、必ずと言っていいほど作者の駄目押しが入る。ほとんど「無言歌舞伎」とも言えるDの個性だが、きょうび、これほどまでに読者の感情移入を拒むキャラクターもまた珍しい。

なーまえ【名前】（一般）果たして〝D〟を名前と言っていいのかどうかわからないが、その名を聞いた者はいずれもある種の感慨にとらわれるらしい。『北海魔行』でフローレンス村の女漁師スーインは「格好いい名前。哀しそうな風に似てるわ」と答えた。『戦鬼伝』の戦闘士ダイナスは「寂しそうないい名前だなあ」と快活にもらした。みんな詩人である。

ならず-もの【ならず者】（風立ちて）またの名を「不幸なならず者」とも。たまたまツェペシュ村の近くを通りかかったせいで貴族の犠牲者になり、村を恐れさせていた「昼歩く貴族」として捕まり、Dに心臓を貫かれて殺された。岩みたいな顔を剛毛が埋め尽くし、右の耳たぶは殺害した娘――吸血鬼と化したベス・ファーンに引きちぎられたため、無残な形状を留めて消失している。ゆすりたかりや殺人も平気の悪党だが、檻の中で村人を襲った「貴族」としてさらしものに仕立てられたのは、ならず者とはいえまことに「不幸」であった。

なんせい-セクター-の-むら【■■区の村】（聖■遍歴）帰ってきた「隠されっ子」がいた村。Dが出会っているが、何の問題もなかったにもかかわらず、その子供は村から追われ、疑心暗鬼に駆られて非道なことをした父親ものちに村から追放された。帰っても帰らなくても「隠されっ子」の運命が悲劇に終わることを示す事件。

ナン・ランダー（夢なりし）Dに病院へ行くように告げた十八歳の娘。純白のブラウスと、ブルー地にワイン・レッドのストライプ入りスカート、腰まで伸ばした黒髪が特徴。病院のアラン院長をして「えらく可愛らしい」と言わしめた。他の村人たちと異なり、三月も早く――しかも何度もDの夢を見た少女。父母は健在。水泡虫に食われて入院中、シヴィルの隣の病室にいた。発動車に乗っている。

ニ

にくしょく-ちょう【肉食■】（死街譚）大型のものは翼長二十メートルにもなる凶鳥。普段は二千メートル以上の高空を飛んで気獣や浮遊生命体を捕食しているが、獲物がなくなると地上まで降りてきて街や人を襲う。ただし、肉は食用となり、この上なく美味である。血液も一種の精力剤となるので、無駄がない。

にくしょく-ミミズ【肉食ミミズ】（北海魔行）食肉性のミミズ（当たり前か）。黄土色の肌に黒い斑点を持つ。クロロック教授の術に陥って虫の息のトトを狙うが、Dの鬼気によって追い払われる。

ニコラス・マイヤー（風立ちて）ツェペシュ村の教師。十年前に失踪した息子ルーカス（あるいはフランツ／当時十歳）の父。

ニコラス・メイヤー【Nicholas Meyer】（一般）アメリカの映画監督。『シャーロック・ホームズの素敵な挑戦』や『タイム・アフター・タイム』などのSF佳作の他、『スター・トレック2／カーンの逆襲』『スター・トレックVI／未知の世界』などでも器用なところを見せている。日本では「メイヤー」と表記されるが、アメリカでは「マイヤー」と呼ばれるのが普通。

ニゴリカビ（堕天使）人間の頭に取り憑くカビ。西部辺境での棲息は確認されているが、その他の地方は不明。生きたフケのことではあるまいか。

にじ-いろ-の-えき-たい【虹色の液体】（想秋■）シャーリイズ・ドアの警護団リーダー＝バズラが、全身の汗腺から分泌する奇怪な液体。この液体によって土を溶かし、地中に潜り隠れることができる。その他、粘液質をもって必殺の一撃を鈍らせるなど、ギリガン五人組のひとり〝悟られずのツィン〟が分泌するスキン・ベールにも似た効果を発揮する。

Y. Amanoa

ニシュー（■■姫）サクリ村バイク青年団のひとり。投げ刃を得意とする。シャンバラの森でクビトリに襲われかけ、でも結局犠牲となってしまい、命ならぬ首を落としたのがこの人。一年前、ニシューの隣家のジェッペ爺さん（当時九十歳）も、モドリグサを求めて森に入ったまま行方知れず、クビトリに襲われたと推察されるだけに、なんとも因果な最期である。

にせ-ディ【にせD】（複合）①もうひとりのD。ざっくばらんなD。おしゃべりなD。べらんめえなD。左手のしゃべらないD。旅人帽（トラベラーズ・ハット）を脱いだD。Dに勝るD。Dより劣るD。Dに非ざるD。Dの偽者。②ザラブ星人が化けていたD。眼や耳や頭がこれ見よがしに尖っている。身体の模様に黒い線が走り、

塩沢兼人の声ではなく青野武の声でしゃべる。

にせ-ディ【にせD】（双影の騎士） 自己陶酔癖を持つDの双生児。鏡を見て毎回うっとりしていた。世界の覇権を貴族の手に収めるようにプログラムされている。大洞窟の大施設でDとともに生まれたD&Dダッシュは、まったく同じ条件で、同じ女性の子宮の中で育ち、千分の一秒と違わぬタイミングで分娩されたが、背中が癒着していたために母親の胎内から摘出手術で取り上げられた。大洞窟の大施設を作動させる準備のため、大陥没を起こした。ジャンケンは弱いが約束は守るタイプらしい。その袖口にはモーターつきの投射器が仕込まれていて、千分の一ミクロンの不可視鋼線を投射する。その衣類はDのものと異なり、再生能力を持った素材でできている。神祖の後継者を目論み、ムマの地でDと対決するが、Dの左手を計算に入れなかったために敗れ去る。

ニン-ニク【大蒜】 第一長篇『D』の時点では吸血鬼の弱点として人間が知るところとなってはおらず、記憶操作のため利用できても再度その事実を忘却してしまっていた。『聖魔遍歴』では貴族の若手なものとして一般認識されている。第七長篇『北海魔行』では一般人ではなく、戦闘士エグベルトによるとはいえ、人間に認識、利用されるに至っている。

ヌ

ヌビ（風立ちて） 次元渦動獣。ツェペシュ村の近隣を荒らしまわっていた魔獣。

ぬり-つぶされた-え【塗りつぶされた絵】（風立ちて） ツェペシュ村の廃墟に残る縦三メートル横二メートルの絵は真っ黒に塗りつぶされていた。Dの語ったところによると、似たようなものを何回か見たというが、あるものは破壊され、あるものは焼却されていた。復元されたただ一枚には、棺から起き上がった貴族が太陽に手をのばしている図が描かれていた。ツェペシュ村を恐怖せしめた神祖の「見果てぬ夢」との関連大だが、はたしてこれを神祖の「昼歩く貴族」として感慨に耽るか、いいかげんに「はた迷惑な実験はやめてくれ」と突き放して見るか。

ネ

ねえさん-には-ゆび-いっぽん-ふれさせ-や-しない【[illegible]さんには指一本触れさせやしない】（D） ダンに対してDが答えた台詞。結構いいやつである——というか、今後どれだけ新作が書かれようとも、二度と再びこのようなDの積極的な言葉を聞くことはないだろう。

ね-ぶくろ【寝袋】（風立ちて） Dの旅装備。収納時には黒っぽく、掌大の包みになる。出ている紐を引っ張るとみるみる膨らむ。保温装置付き。村長を嫌って水車小屋にやってきたリナに使うようDが勧めたが、D自身は一度も使ったことがない。保温センサーで外気と体温の変化を感じ取り、最も眠りやすい温度に保つ。

ねむ-り-おとこ【眠り男】（夢なりし） 病院で眠り続けるシヴィル・シュミットに川づけした貴族を指すか？ 最近では「ツェザーレ」というルビがついて小説の題名にもなっている。いったい誰が書いたものやら。

ネル（死街譚） 移動街区の住人。町長ミン家の女中。クリーニング店で働く恋人ベンとの密会をプルート八世に利用され、ベン経由で乗り移られた。プルート八世に憑依されたまま町長家の地下室を調査中、首を真一文字に裂かれ死亡。

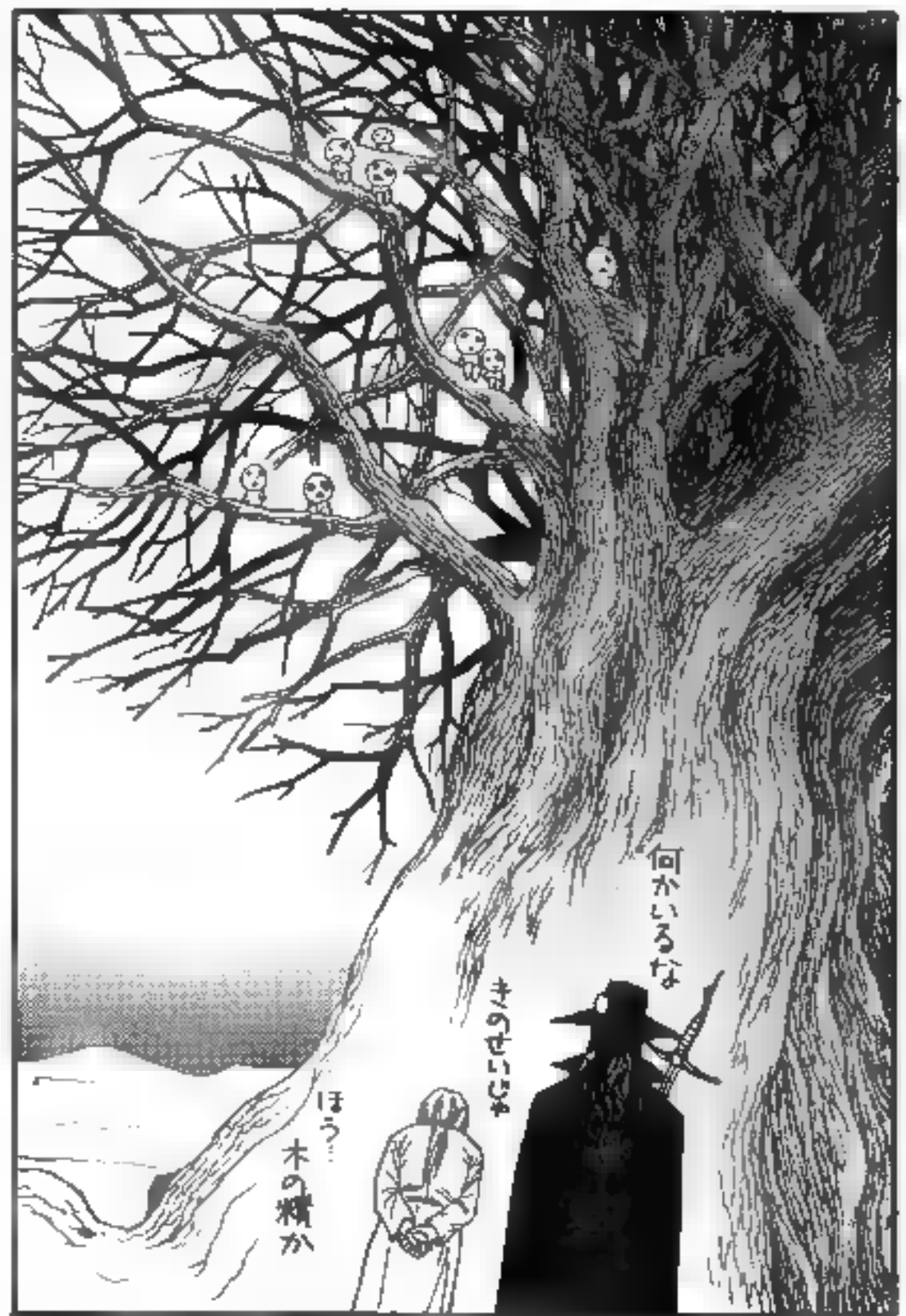
ノ

ノア・シモン（双影の[illegible]士） ミア・シモンの母で占い師。セドク村の大陥没に始まる事件を予知した直後、血を吐いて倒れた。そのため、代わりに娘のミアをセドク村に送る。ミアはDと出会った時点で、母はもう死んでいると考えていた。一説にはクラリス・シモンであるともいう。

のう-げか-そうち【脳外科装置】（夢なりし） 金属と水晶と電池の複合体。病院のアラン院長が『都』から取り寄せた新型だと語った装置。シヴィルの脳を操作し、夢を現実世界に抽出するのに使った。複数の銀色の針が装着されたコードが台車のモニターに繋がっている。実は、アラン院長が二時間で作った代物だった。部品は、いつのまにかデスクの上に出現していた。

のうこん-の-きょぼく【濃紺の巨木】（[illegible]歴） 「帰らざる砂漠」と「砂漠の町」とを隔てる大門の両側にそびえる木。数千匹の大蛇が身をくねらせ合ったような幹に、無数の亀裂が走っており、はるか昔に枯死している。

のう-じょう【[illegible]場】（D） ドリスの農場は緑あふれる草原に囲まれている。木とプラスチックの母屋を中心に、強化防水シートに温度調節装置を取り付けただけの蛋白合成植物農園と、家畜小屋、馬屋が散らばっている。農園だけで二ヘクタールもある。

ノース・グレート・マウンテン【北方大山脈】（死街譚） およそ二百年前、その麓に立っていた神祖を移動街区が拾い上げた。二百年後、町長ミンをして「一生の不覚だった」と言わしめた。なぜ二百年後

なのかは読者のみが知っている。

ノクターン【夜想曲】（夜想曲）アニスの村では、夜になると貴族の歌声が聞こえたという。

のろ-われた-ほかんこ【呪われた保管庫】（ダーク）ギャスケル大将軍が〝Gの乱〟で『都』の軍勢に勝利した記念に建てた記録保管庫。自らの生涯の記録を封印した。戦勝記録と大将軍の歴史は縦横五ミリほどの四角い金属片に、復活プログラムとともに記録されている。金属片はさらに縦二メートル、横一メートル、重さ一トンを越す石版に封入されていた。ジェルキン村外れの遺跡にある。その深部まで踏み込めるのは創造したギャスケル大将軍と神祖のみといわれるが、Dの呼び出しに応えて出現した。その外観は銀色の雲。内部は広大な空間が広がり、侵入を試みた者たちの使用した乗り物の残骸が転がる。内部の移動には、渦まく雲で構成された径七、八メートルの空間を形成する球体を使う。エイリアンが自分の世界に合わせて変化させたため、人間用の空気ではない。内部には異星人の兵器や指揮統制所、戦闘機製造工場、格納庫、発着所が活動可能な状態で放棄されている。保管庫の防御機構もいまだに生き残っていて、反陽子砲とミサイル搭載の異星人の戦闘機一千機の攻撃をも、軽々と撃退する。

ノルト（妖殺行）マーカス兄妹の次男。糸みたいに細い眼と、たくましい背中にくくりつけた六角棒が特徴。大容量のレーザー・ビームをも撥ね返す細い鋼芯を埋め込んだ六角棒は、倍近い長さにまで伸び、ノルトが振り回す時、最大の破壊力を生み出す。激流に呑まれたDのとどめを刺すべく追いかけるが、Dの太刀さばきの前には六角棒も簡単に斬られ、最後の引き水の術も破られ、頭から両断されてしまった。

ハ

ハーカー・レーン（D）ランシルバ村の住人。レーン家の主の名。特にその奥さんは健啖家というか悪食家というか、痺れイチゴでもけたぐり茸でも、色さえついていれば何でも口に入れてしまうという。一万年後に生き残った外谷さんの子孫であることは想像に難くない。

バーナバス（聖魔遍歴）内辺境の町。依頼人の要請で、ソーントン弁護士がDに告げた目的地。人口二千五百。ビルとは名ばかりで、建物はほとんどが木造である。砂漠の町からバーナバスの町に到着するには「帰らざる砂漠」を渡らねばならない。砂漠を突っ切れば四日。迂回すれば一週間。わざわざ危険を冒して砂漠を横断する人間は多くはない。

ハーピー【半鳥人】（D）吸血鬼たちが作った凶獣、もしくは核戦争が生み出したミュータント。ともあれ、小松左京の『保護鳥』は必読である、怖いよ。

ハーピー【妖鳥】（風立ちて）マイヤー教師に散弾筒で撃退される程度の辺境の魔物。

ハーモン（想秋譜）シャーリイズ・ドアの医師。東の林檎畑で貴族の犠牲となった、大工ガルの娘とサラヤ家のひとり息子を検死した。二人は中等学校を出てから、いつも一緒だったのに。

バイアン（堕天使）Dを護衛する黒マスクの一団のメンバー。公爵シェーン・グリードとの戦闘で死亡。

はいいろ-ぐま【灰色熊】（戦鬼伝）〝妖かし使い〟サベイがダイナスの背後から襲わせた辺境妖獣。体長二メートル以上、体重一トンは下らない巨獣だが、ダイナスは二匹まとめてベア・ハッグ、あげくは凄まじい勢いで頭を叩き合わせて、簡単にとどめを刺してしまった。

バイオ-ブラザーズ【バイオ兄弟】（夢なりし）馬にまたがる巨漢の兄はハロルド・B。黒豹に乗る弟はダンカン・B。超古代科学のバイオテクノロジーの落とし児。クルツ治安官の犯罪者リストに記載され、アラン院長が最終的に呼び寄せることに決めた辺境で一、二を争う危険な殺し屋。ハロルドは、本体から虚像を分離して敵の目を眩惑し、本体はその背後に忍んで必殺の武器をふるう。弟のダンカンは、細胞の活性化を促進し、その結果、肉体が寸断されても独自の活動が可能な上、他生物と融合して自在に

移動する。

ハイオク-ねんりょう【ハイオク■■】（ダーク） いざというときのために、村外れに埋めてあったもの。Dとロザリアが仮称「虐殺の村」の遺骸を火葬するのに使用した。引火すると十万度の炎を放つ。

バイオリズム（夢なりし） 貴族の超人的なバイオリズムが最も低下するのは、正午をピークとして前後二時間のオーダーである。

バイパー-ばあさん【バイパー婆さん】（聖魔遍歴） 別名〝人探しの蝮(バイパー)〟婆さん。内辺境一の神隠し破り。もう百歳は越えているらしいが、腰を曲げているのは同情を引くための芝居らしい。その顔は年齢もわからぬほどに皺だらけ。歯は一本もない。朱色のリボンを使って白髪を後頭部で束ねている。金属繊維のブラウスとベストを着用。触れただけで二つに折れそうな腰に巻かれた生存帯に、陶製と思える大ぶりの壺をつけている。壺に入れた異常な色彩の砂で絵を描き、砂絵そのものを吹き消すことで絵の素材となった対象に影響を与えたり、消滅させたりする。皮鞭もよく使う。闇の中でも昼と変わらず見える。楕円形の幌付き馬車に乗って『商品』である子供を輸送する。辺境に顔が広く、一声かければそれなりの手練が何人も駆けつけると豪語。グラディニア城から救出したタエを『帰らざる砂漠』を越えてバーナバスの町まで四日以内に届けるために、Dに同行を頼む。夢は呉服屋をやること。過去に息子を一人もうけたが、その息子は婚礼前の晩に花嫁の喉に牙を立てて、飛び出した。火薬銃で心臓を撃ち抜かれ死亡。撃たせたのはソーントンと思われる。婆さんの葬式には、辺境の習慣に反して御者のタエと会葬者のD、ビューロー兄弟のみが立ち会った。ダンピールを憎悪しているが、それは彼女自身がダンピールだったがゆえであった。Dの手を握りしめながら逝(い)った幸福な女性。

バイロン・バラージュ（■天使） ヴラド・バラージュの息子にして男爵。深い海の色のようなマントを着用。したたり落ちるような金髪と碧眼。凄まじい美貌の主。Dにクラウハウゼン村までの同行と父ヴラドの誅殺を依頼する。バラージュ家は陽光さえささなければ、バイオリズムの低下は免れないまでも、闇中のごとく行動し得る希少の例。これは大貴族の一族に限られる。マントから殺人光を発し物体を切断する。柩のなかは「息が詰まる」と発言する変わり者。多少の以心伝心の法を使えるらしい。人間がそばにいながら、その飢えを自制できるのは、母の胎内にいるときに神祖によってある処置を受けたため。この処置に母は反対したが、父であるヴラドは押し切り、処置は実行された。その影響で右手は義手になっている。誕生後、神祖に三カ月間引き取られていたという。実の父はヴラドではなく、神祖とかいっているが、ラグーンが提供した精子がもとかもしれない。二十年前にクラウハウゼンの父の元から出奔した。機械いじりは昔から得意だった。ヴラドを「破壊者」の力を用いずに倒す。タキに襲われたことで吸血鬼の本性に眼醒め、自らを依頼人として、あえてDに滅ぼされた。

パウチ（風立ちて） 小物などを入れる。Dもベルトに装着している。なかには小指大の透き通った円筒が入っていて、採取などに使った。

はかい-しゃ【■■■】（堕天使） 「タロスの武器庫」の破壊された工場のさらに奥の封印堂に、数千年ものあいだ閉じ込められていた存在。その工場は角のような突起が空間的秩序を無視して生え狂っているとしか思えぬ建物で、玄関は流体金属。Dも無視し得ないほどの鬼気を吹き出す。男爵バイロンが語るところによると、開発するために数百年の歳月を要し、第一期、第二期の貴族の開発陣はことごとく死に絶え、第三期に至ってようやく完成するも、責任者はその瞬間にすべてを破壊する旨を通達し、実行したという。破壊者はDとバイロンを眠らせ、ミスカを招いて自らを解放させた。三メートルの巨軀に合成皮革の戦士用の兜や胸当て、手甲、脚絆を着けている。右手に五メートル近い長槍、右腰に長剣。大雑把に鼻や唇を取りつけたような顔。目から赤い眼光（死光）を発する。幽霊(ファントム)騎士団の青い催眠光を使った攻撃で倒れるが、その本体はミスカに取りついた。さらにジャン・ドゥ＝カリオールの実験で半分はフシアに、半分はミスカに残った。蒼い光を発し、対象となった場所は円形に消滅する。

はくはつ-はくぜん-の-ろうじん【白髪白髯の■人】（双影の騎士） 貴族の中でも特に重きをなす魔道士。色とりどりの金属糸で織り上げた長衣の配色

の妙で、そのことが知れる。Dと対決して敗れたが、その断末魔のなかでDに「ムマに行け」と言い残す。

はくぶつ-かん【博物■】（北海魔行）フローレンス村の博物館にはマインスター男爵の肖像画が所蔵されていたが、不思議とその容貌は、村を脅かす〝海から還った貴族〟のそれとは違っていた。Dは館長から、その謎を解く鍵——四年前に村に雇われた戦闘士の昔話を聞き出した。

ば-しゃ【■車】（聖魔遥歴）バイパー婆さんの馬車は楕円形の幌をつけた幌馬車。御者台には強化プラスチックのフードが三方についている。四頭立てのサイボーグ馬の首に巻いた金属環に電流が通じると、アドレナリンの分泌を促す。バック・ミラーは銅を磨いたもの。タイヤを装備。自動操縦装置まで付いている。

バジリスク【綺■獣】（妖殺行）辺境の特に深山幽谷にのみ棲息すると言われる妖獣。その巨大な一眼が赤みを帯び、やがて真紅に輝き出すと、村人はひとり、またひとりと、恐ろしいその顎にかかるべくやってくる。ただし、犠牲者の中に家族へ別れを告げる者がいた場合、綺眼獣は容易にその存在を悟れてしまい、後は討伐隊の活躍を待つのみとなる。

バズラ（想秋譜）シャーリイズ・ドア村の警護団のリーダー。もともとは流れ者の傭兵だが、それゆえに腕は立つ。鎧型の胸当てや手甲とともに、両脇に構えた連射弓を武器とする。村の風習に逆らうDをあくまでも敵視し、火矢をつがえた二十人からの弓師（ボウ・マン）を従えてヘルガ婆さんの家を焼き打ちにし、Dに大蒜エキスを塗りつけた矢を打ち込んで、これを倒した。全身の汗腺から分泌する奇怪な虹色の液体をもって土を溶かし、地中に潜って足の下から電光速度で加える攻撃を得意技とするが、それは取りも直さず、十二〜三年前、シャーリイズ・ドアから東の地域が襲われ、金貸しが十数人も惨殺された事件の手口とそっくりであった。

はっこう-こ-カプセル【発光粉カプセル】（双影の騎士）ミア・シモンが常に持ち歩いている「カプセル怪獣」——もとい、必殺カプセル武器のひとつ。スプレーのように噴射することも、蓋を開けて中味の粉を撒くことも可能。カプセルのライター部で着火すると、眼もくらむ閃光を発して燃焼する。

はっこう-ひも【発光紐】（北■行）マグネシウムと炭化ジルコニウムをベースにした太さ七ミリの紐。こするだけで容易に発火し、非常用の簡易照明となる。水中でも使用可能。直射日光に一時間ほどさらすことにより保温帯の役目も果たす。Dがマインスター男爵の居城地下に至る際に使用した。

バトル-カー【■闘カー】（妖殺行）レイラ・マーカスの愛用車。巨大な四個のノーパンク・タイヤに長方形の鉄板を載せ、大容量の原子力エンジンと操縦装置をぶち込んだ乗り物。貴族のメカをベースにしているため、およそ美意識からは遠い外観を有しているが、後部エンジンの右側から大きくのびた七〇ミリ無反動砲の他、体熱探査機装備の二〇ミリ・ミサイル・ポッド、液体金属の槍を発射する貫通砲などの重装備に、時速百二十キロ、安定走行率九九パーセント、直径二センチのワイヤー・サスペンションにより、いかなる悪路も走行可能という性能を誇る物騒な車である。

はな-の-しゅくふく【花の祝福】（■■）薔薇姫が飛ばす吸血薔薇。四彩の薔薇は薔薇姫城館からサクリ村へと広がり、村人の背中——ほぼ第七胸椎の上に根を下ろし、血を吸われたのと同じ亜人間と化す。村の人口の九割以上がその祝福を受けてしまう。

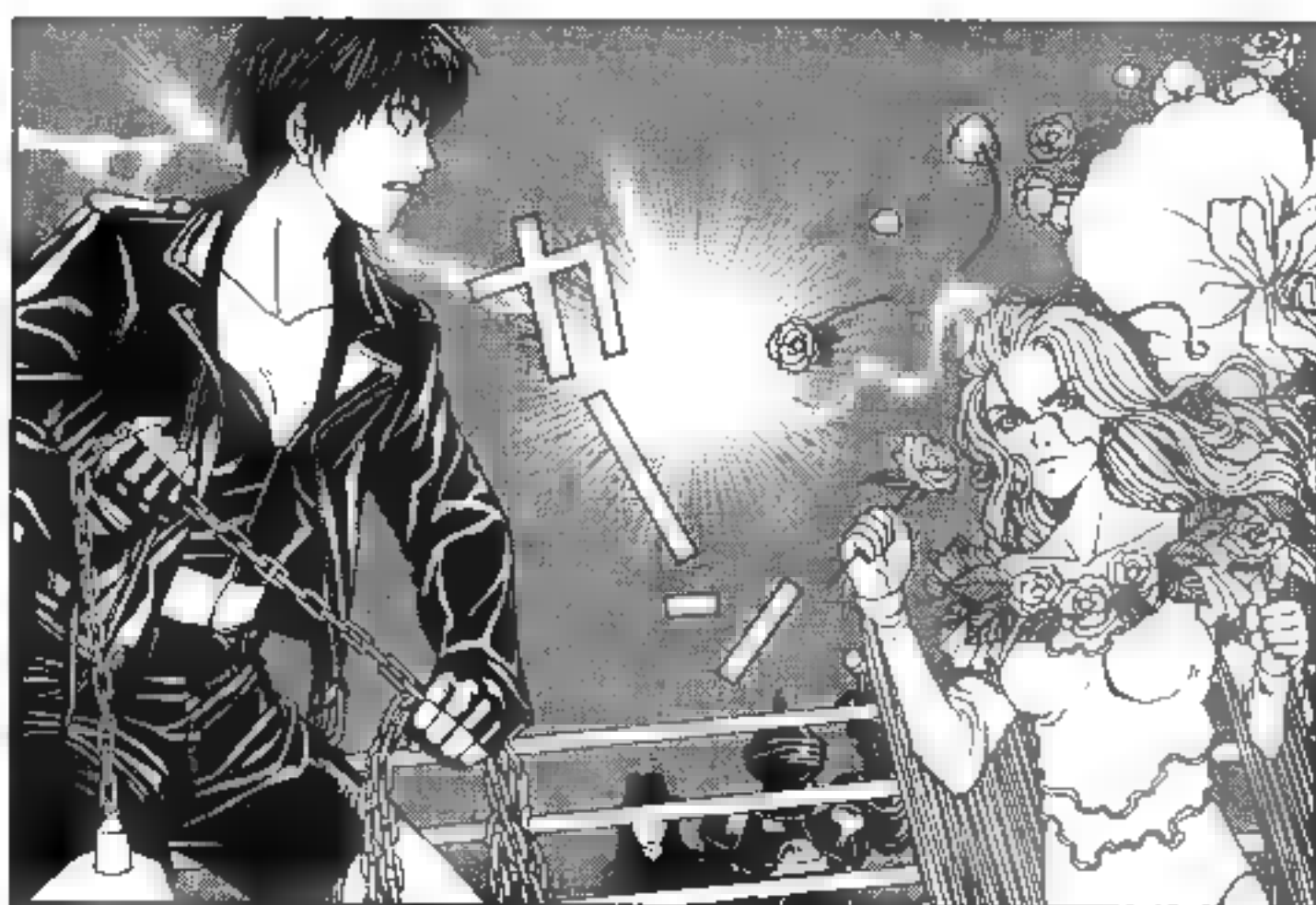
はは-の-はか【■の墓】（堕天使）男爵バイロン・バラージュ、父親ヴラドの放った刺客に問うて曰く。「母の墓には花が絶えぬであろうな」——決めつけるねえ。だがしかし、母の墓には花が絶えぬどころか、墓はヴラド・バラージュ本人の手によって破壊されていた。何という破戒おやじ。

は-まき【葉巻】（D）辺境では密造業者が手巻きした不純物八十パーセントの安物が出回っているらしい。フェリンゴ医師の葉巻は『都：専売局』のマーク入りのセロファンに包まれた高級品。

ばら【■■】（ダーク）『都』の最新の研究成果。どこにでも咲いている真紅の薔薇が貴族の血を引くものの手にかかると、見る見る萎れていく。自分自身に催眠術をかけて記憶喪失や別人格になり、傷跡さえも消してしまう貴族の犠牲者の識別法として報告されている。ジュークは真紅の薔薇を圧縮加工して赤いカプセルに入れていた。このカプセルに爪で傷つけるだけで、もとの真紅の薔薇に変わる。

ばら-き【薔薇姫】（原典）正式名称『D—薔薇姫』。シリーズ第八長篇。一九九四［平成六］年一月三十一日発行。詳細は隣の「薔薇姫」本人の項目を参照のこと。

ばら-き【■■姫】（■■）北の辺境貴族。サクリ村を治める〝姫〟の愛称（？）。ダイアンローズの

四騎士にかしずかれ、Dと対決する。が、実は「薔薇姫」の物語は、薔薇姫とエレナの喧嘩に挟まれたDと四騎士の物語なわけで、挟まれた方こそいい迷惑である。

K. Sakashita

ばら-の-はな-を-とうそう-の-もんしょう-に-した-べっしゅ-の-きぞく【[illegible]の花を刀槍の紋章にした別種の貴族】（**堕天使**）かつて太古で「中世」と呼ばれた時代、その貴族たちは戦乱に明け暮れたという。別種と言うのは人間の貴族のこと。おそらく薔薇戦争のことであろう。

バミューダ-かいいき【バミューダ海域】（**風立ちて**）Dが閉鎖空間を抜け出す時の煽りを喰らって五機のアヴェンジャーが閉鎖空間に巻き込まれた。

パラダイム・カクテル（**夢なりし**）シヴィルが[illegible]る「村」の酒場でナン・ランダーが注文した飲み物。飲んでもパラダイム変換は起こらないはず。ましてやカーペンター監督の『パラダイム』が観たくなるはずもない。

バリヤー【隠秘膜】（**死街譚**）特に、分子浸透（モレ・インター）によって物質を透過中のプルート八世を包む膜を指す。輪郭は水中の藻みたいに蠢き、中心は渦を巻いている。通過したあと、壁などの表面が仄光るといった後遺症を残す。

ハリヤミダ・シュミカ（**風立ちて**）ツェペシュ村の雑貨商。十年前に少年少女が忽然と失踪したあと、唯一人帰らなかった子供タジール（当時八歳）の父親。悲しみの果てに死亡。

バルガ（**双影の騎士**）魔道女シューシャの墓がある村の坊主。重硬石の墓石でシューシャの魂を封印した。泣き叫ぶシューシャの霊魂に喜々として矢を射ち込む、根っからのサディスト。『都』に本山がある宗派に属しているらしい。寺に泊った旅人の行く先を強盗団に流して、分け前をせしめていた。

バルコン（**堕天使**）体重二百キロは優にありそうな好色肥満漢。リパー亭に宿泊しているフィッシャー・ラグーンの館の常連。醜悪このうえない胸と、五重六重にたるんだ上に豚の尻みたいに突き出た腹、股間には逸物を持つ。以前にフィッシャー・ラグーンの館の女＝ゼジルを酔った勢いで殺したらしい。ラグーンの館に通いだして五年になる。年端もいかぬ田舎娘を極悪非道の器具を駆使して責め苛むのが趣味。

バルコン-の-ようじん-ぼう【バルコンの用心棒】（**堕天使**）一見、ただの背の高い色男だが、「西の都」では五指に数えられる戦闘士だった。特技は上衣の内側に隠した手裏剣打ち。時速二百キロで疾走してくる五匹の火炎獣を仕留めるほどの腕前を持つ。

ハルドゥ（**ダーク**）辺境商工ギルド輸送隊がクラクフ村の次に向かった目的地。噴水病のため、村人は八人を残して全滅した。

バルバロイ（**妖殺行**）妖婚の結果生まれた忌まわしき子供たちの里の名。逃亡中のマイエルリンクが立ち寄り、三護衛を雇いDの抹殺を依頼した。あるものは蛇そっくりの鱗に覆われた顔の下の唇らしいところから赤い舌をちょろちょろと覗かせ、またあるものは、狼のごとく全身が剛毛で覆われている。さらにあるものは、首から下は鰐の胴、鰐の四肢を持つ。過去暦一万年の一月一日、地中より噴出した恐るべき毒素のためにバルバロイの里はその半数が死に絶え、残りも全身を腐り爛らせ死を待つばかりとなったが、ある遠大な目的をもって旅を続けていたさる人物によって廃滅を免れた。これが三百二十年前のこと。その人物が「この里より五名、最も強くたくましき男を我が旅に同行させよ」と言い渡し、選りすぐりの五名を伴って立ち去るや否や、里の大地はみるみるうちに天空へと盛り上がり、息を三つするうちに木には若芽が吹き、花は実を結んだという。バルバロイの里を訪れたDを見て、長老は〝さる人物〟の血族と確信してひれ伏すが、Dはあっさりと否定した。

ハルマゲドン（**原典**）正式名称「D―ハルマゲドン」。神祖とDの父子対決を描くイメージ的要素の強い短篇。天野喜孝画集『魔天』のための書き下ろし。公式に発表された初の非長篇作品。これ以前に

は同人誌に発表された掌篇一篇があるのみ。

ハルマゲドン（ハルマゲドン）「聖なる書」に記された善と悪、最後の決戦場。死者の怨念と苦痛が響き渡る平原。その大地は、焼け爛れたり腐り果てた無数の腕と顔に埋め尽くされている。Dが神祖と父子対決した平原。ああ修羅の道。

ハルマゲドン・ゾーン（戦鬼伝） シニストロ城を中心とした半径二千キロに及ぶ地帯は、ハルマゲドン・ゾーンと呼ばれる古戦場だった。荒涼とした赤茶けた大地の連なりは、そこが原子戦争の跡であることを如実に示している。

ハロルド・B（夢なりし） バイオ兄弟（ブラザース）の兄。バイオテクノロジーにより細胞レベルから変換を加えられた人間とは異なる殺し屋。半透明の自分を本体から切り離し、それが実体の質感と色を備えると、本体は逆に色褪せ消えてしまうという二重存在（ドッペルゲンガー）能力を持つ。虚像をもって敵の目を幻惑し、本体はその背後に忍んで必殺の武器を振るう。

パワー・シャベル（防天使） クラウハウゼン村・ソーントン通りの倉庫に格納されている巨大メカのひとつ。フィッシャー・ラグーンが神祖から理論だけを教えられて作ったもの。五十メートルもありそうな武骨なアームにシャベルを取りつけた姿は、一区画など五分で粉砕しそうに見えるが、その前にビル五階建てほどの倉庫空間にはとても収まりそうもないと思う。

ハン（北海魔行） スーイン&ウーリン姉妹のお祖父さん。スーインがDとともにフローレンスの村に戻る前に、悟られずのツィンの魔手にかかっていた。催眠術師でもある。スーインはもう五年も術を使っていないと思い込んでいたが、三年ほど前に一回だけかけたことがあると、スーインに答えて言っている。誰にかけたのかは言うまでもあるまい。

ばん-ぎょう【蛮暁】（北海魔行） 開祖以外に信者のいない新興宗教＝三叉降臨（さんさこうりん）教の開祖。白髪混じりの頭髪は薄く、一見、肌にも眼にも生気はない。教えのみを信じて布教の旅に廻っているが、金なし弟子なし住家なしと自嘲する。船着き場でスーインのトラブルに割って入ってから、D一行に加わるようにしてフローレンス村に投宿する。しかしてその実体は？——おっとこれは言わぬが華。珠のために人目を欺いていたとはいえ、スーインは彼に悪人の意志を見ていない。Dの作った笛に対抗した上に「村長になれ」などと豪胆なことを言うあたり、しかも左手が「そうしろ」とけしかけるあたり、おまけにDが左手を握り締めることなく「それもいいかもしれんな」と答えるあたり、なかなかの名場面であろう。いまだこの老僧の正体を知らぬ読者は『北海魔行』を下巻から読むことをお勧めする。

はんぎょ-じん【半魚人】（D） 吸血鬼たちが作った凶獣、もしくは核戦争が生み出したミュータント。文字どおりの半魚人。ギルマンと呼ぶこともあるが、別にアマゾン産とは限らない。

ハンド-くん【ハンドくん】 映画『アダムス・ファミリー』シリーズに登場する右手首。人の言うことを聞いていろいろとマメな「手」だが、特定の人間にだけわかるようにしゃべったり、土を食べてエネルギーに変えたりするような特技はない。

ハンド・モジュール（ダーク） 腕時計型で、小さなキイを押すごとに辺境標準時、現在位置標示、ヘルスメーターへと画面が変わる。気温モードもある。「都」の機械工が手作りで年に十個しか製造できないので、辺境では入手が極めて難しい。これ目当てに命を狙われる恐れがあるので、所有者は滅多に人前にさらさない。輸送隊のジュークの持ち物。

ハンナ（[illegible]） ツマクやヤーライの一家とともにサクリ村を逃走しようとしたが、夫や二人の子供ともども木の杭街道で紅騎士・青騎士の剣の露と消える。

バンパイア-ハンター【[illegible]血鬼ハンター】（D）「ハンターたちの中で最高の名人。吸血鬼ハンターになれたのは、千人にひとりの割合なのに、吸血鬼と戦って勝てる見込みは五分五分」——ドリスはDにこう語った。

バンパイアハンター-ディ【吸血鬼ハンターD】（映像） 第一長篇を原作にした最初の映画版。監督は芦

田豊雄。音楽担当はTM-NETWORK。ためにTMNからDへとシフトしたファンは実際に多い。当時発売されたサウンドトラック・アルバムは、双方のファンにとってコレクターズ・アイテムとなっている。現在はDVDにて鑑賞可能。英語吹き替えによるアメリカ版も存在する。

バンパイアハンター-でぃ【バンパイアハンターD】（映像）ちょっと表記は変わったけれど、Dシリーズのアニメーション映画第二作にして最新作。原作は『妖殺行』。監督脚本は川尻善昭。少女の名前も晴れてシャーロットに決定した野心作。

バンパイア-ハンター-でぃ【吸血■ハンター"D"】（原典）記念すべきシリーズ第一長篇。一九八三（昭和五十八）年一月三十一日発行。献辞にテレンス・フィッシャー、ジミー・サングスター、ジェームス・バーナードといったハマー・プロ製作『吸血鬼ドラキュラ』のスタッフの名前あり。さらに岸本おさむ（修）氏の名前もあり。あとがきの「観ながら映画」はユニヴァーサル一九三一年製作の『魔人ドラキュラ』。→【D】

ハンナ（北海魔行）フローレンス村の若者。丸顔の娘。リカルドやクレムと夜光草を摘んでいる時、貴族と化した修業者グレンと思い出サモンに遭遇、下僕となりスーインを襲う。最後まで彼女の生血を求めて追い回すが、逆にグレンの白刃に首を落とされてしまう。

はんようし-ほう【反■子砲】（ダーク）「呪われた保管庫」内に放棄されていた異星人の戦闘機に搭載されていた武器。

ヒ

P・スーツ【戦■■化服】（夢なりし）シヴィルが■る「村」の自警団長スタンレイ・クレメンツの着ているのは旧型。クレメンツの部下のオレンジ色の強化服のタイプでも、常人の数百倍に達する筋力増加能力を持つ。

ピート（死街譚）治安官助手亡きあと、移動街区でハットン治安官とともに行動する。移動街区に墜落した略奪船を略奪しようとして、航行管制室でヤンとともに黒焦げ死体となって発見された。一種の熱線銃で殺られたものと思われる。

ピーモンド-じけん【ピーモンド事件】（死街譚）ダンピールの吸血鬼ハンターが、雇い主にとって両刃の剣であることを示す事件。ピーモンド村に雇われたハンターは、村長の娘の美しさの前に貴族の血を抑えきることができずに、ついに狩人(ハンター)自身が恐るべき獲物の一員と化した。村人総出で取り押さえ、心臓に楔を打ち込まれるまで、犠牲者の数は二十四名に達したと言われている。ただし、ツルギ医師の最新統計によれば、そのような悲劇は二万分の一パーセントにすぎないという。

ピアス（堕天使）クラウハウゼン村を北から南に流れる川の名。川の流れはヴラド・バラージュ卿の古城の地下へ潜り込み、東西に流れるスピア川と直交する。水流は巨大な水車を回せるだけあって強く、村の中でも年に数人の水死者が出ると言う。化粧好きのクロモはその下流に屋台を出し、ヴラド卿の命令などそっちのけで道行く父娘連れを血祭りに上げていたが、罪なき父娘の死体を川に始末した際、川べりに片手で引っ掛かっている男爵バイロンを発見し、得意の化粧を施してしまう。

び-えい-しん【■■身】（北■魔行）Dの枕詞。修業者グレンに対して使うこともあるが、それはあくまで"この世"のもの。Dの場合は"あの世"のもの――じゃなくって、この世のものならぬ人外のもの。同じ三文字だが、意味する次元はおのずと異なる。

ひこう-ぐ【飛行具】（堕天使）街道の魔術師(トレイル・マジシャン)ヨハン卿が使用した飛行具。黒い翼を広げた鳥のような形。その中央部の操縦席には楕円形の窓ガラスがはめ込まれている。そのずんぐりした形からは想像もできぬスピードが出る。翼を羽ばたかせて飛行する。もとはヒチョウの持ち物か？

ひこう-せいぶつ【飛行生物】（堕天使）殺戮の平原でDを襲った飛行生物。五キロほど離れた山城から飛び立って十秒を待たずDに襲いかかったことから、その飛翔能力は時速一八〇〇キロ以上か？　目標に向かって急降下し、急反転すると、身体の瘤がその間を通る風を増幅し、五十トン以上の負荷がかかる衝撃波(ソニック・ブーム)を発する。恐怖に顔を歪めたり、声もなく笑ったりするところから感情はあるらしい。その翼が起こす乱気流によって、翼長百メートルを越す大鷲でさえ、全身の骨を千箇所以上粉砕されて、地上に叩きつけられた。ジャン・ドゥ＝カリオールの創造物と思われる。

ひこう-せん【飛行船】(堕天使) フィッシャー・ラグーンが所有する闇色の飛行船は、水素を詰め込んで浮かぶ。貴族の知識による合金製の機体は、衝撃に対して剛性を帯びて、危機を回避する。投光器装備。

ひこう-そうち【■行装置】(風立ちて) 半透明の羽根のような装置。貴族が使用。ツェペシュ村廃墟の絵に描かれていた。

ひこう-たい【飛行■】(堕天使) ディームり村北の外れにある飛行体発着場のメイン・コンピュータが、Dの要求に応えて用意した飛行体。ずんぐりした銀色の■体で、せりだした小さな翼の下にイオン・エンジンを装備している。

ひこう-たい【飛行体】(堕天使) 要するに飛行機。大別すると貴族が使用した反重力や磁気場応用で飛行するものと、人類が独自に開発したものがある。人類が開発したものでも二枚の翼（複葉）と二基のエンジンで三百人もの乗客を運ぶ。その機体は布張り。五、六十年前から『都』と「辺境」を繋ぐ航空路が完成し、営業飛行も開始されていた。ただし、使用している機体は老朽化している。

ひこう-たい【飛行体】(堕天使) ヴラド・バラージュ■の山城の地下遺跡にあった飛行体は、駆動部分を骨組みで包んだだけに見える巨大な代物。エンジンとおぼしきボックスの上に、石造りの操縦席が固定されている。操縦は床から突き出た錆ひとつない鉄製のレバーで行なう。駆動部には石製の歯車が使用されている。

ひこう-たい-はっちゃく-じょう【■行体発着場】(堕天使) ディームり村北の外れにある発着場。無人のまま数百年が経過した現在でも、チェック・マシンによる整備・点検が自動で続けられている。単なる地方の発着場には思えないほどの広大な敷地を有している。幽閉空間からバイロンが脱出のために空けたトンネルのせいで幽閉エネルギーが逆流し、五十九秒で消滅した。

ビジマ(夜想曲) 制服じみたカーキ色の上下の戦闘士。美少年プライスに従いカートとともにアニスの村に入り、村長コピエに雇われる。綽名を〝食いだめのビジマ〟と言い、ほんのくぼ数ミリを残して裂けた口で何でも呑み込み腹に蓄え、必要とあれば腹を縦に裂いて中身を放つことも可能。

ひしょう-じゅう【飛翔獣】(堕天使) その鱗は、組み立て式グライダーに使用され、風力と速度の調節を容易にする。飛行獣とも呼ばれる。

ピスカ(風立ちて) ツェペシュ村「学校（スクール）」の生徒でリナの同期生。リナとはいちばん仲が悪い。

ひだり-て【左手】(D) 特にDの左手を指す場合、これは「人面疽」と同義語になる。麗銀星に切断されてちょこちょこと動き回るさまは映画『死霊のはらわた2』の左手を彷彿させる（もっとも世に出たのはDが先）。風と土を喰らいDを再生させる、生命エネルギー製造工場である。ここ一番で実に役に立つ左手だが、平時にDと話す時の突っ込みも捨て難い。Dとは息の合った凸凹コンビである。アニメ版では永井一郎がその全声優生命を賭してこのキャラクターに取り組んだ。

Y. Amanoa

ビタ・ビール(死街譚) まあ、辛口ビールのことであろう。移動街区の酒場に入っても、何も「いらん」という不粋なDのために、プルート八世が合わせて二人分を頼んだ。

Y. Amanoa

ヒチョウ(堕天使) 男爵バイロン暗殺のため、ヴラド・バラージュ卿に雇われた七人の刺客のひとり。葡萄酒色のマント状のもので首から下を覆う。顔がひどくうすい。空からの攻撃を得意とする。顔幅が妙に狭く、不必要なほどにゆったりとした黒衣をま

とっている。鷹のように鋭い目は、月明りのない暗夜でも一キロ先を真昼のように見て取る。マントはワインカラーの巨大な羽根。羽根にはミサイルを装備。その羽根は羽ばたくこともせずにホバリングする。大湿地帯でD一行を襲うが、軽業師姉弟メイ&ヒュウに接触され、墜落したところをDに胴体を切断され死亡。

ひつぎ【棺】（風立ちて）貴族の犠牲者を入れていた樫でできた棺。太い鎖で縛ってあった。

ひつぎ【柩】（堕天使）貴族の柩は寝所どころか、住居や避難ポッドになるため技術の粋を集めて作られている。五十年ほど前に行なわれた廃墟地の一斉調査では三次元空間拡張回路をとりつけた品が二百個近く出土し、うち数個は順調に作動していた。このため死亡した調査員の例は枚挙に暇がない。居住性は抜群らしく、生まれてから一度も柩の外に出てこない貴族もいると記録されている。

ビッグ・バン-かそく-き【ビッグ・バン加速器】（堕天使）クラウハウゼン村ソーントン通りの倉庫に収納されている巨大メカのひとつ。神祖から理論を教わったフィッシャー・ラグーンが独力で製作した。黒い小山のような基部の周囲をおびただしいレールが取り巻き、原子の見取図を連想させる外観を持っている。未知のある物理法則によって導かれるレールの湾曲率と角度から射出される「物質」は、疾走中に光速を越え、標的に命中した時、時間軸にも干渉する。その時間干渉作用を取り除き、純粋な破壊のみの稼働を旨とする究極兵器。不死身のフシア、そして「破壊者」に対して使用されるが通用せず、反対に消滅させられた。

ひとつ-の-かのう-せい【ひとつの可能性】（夢なりし）人間と貴族が理解し合って暮らせる世界。ある男がシヴィルに託した夢。

ヒトニトカゲ（戦鬼伝）簡単な手術で、一家の安全を守る護衛に変えることができる。辺境の田舎では殺戮の対象にしかならないが、『都』へ出荷され有効利用される。シュラト村のライアの家の倉庫で、三人の家来たちが鉄棒をはめた木函の檻に飼っていた。

ひと-の-かたち-を-した-じゅもく【人の形をした樹木】（双影の騎士）劇場版最新作の『D』では、カロリーヌが新解釈の変身憑依能力によって、そのものずばりの「人間樹木」に姿を変えるが、東部辺境地区のカインの森に生えているそれは、はるかに「人間」に近い外見を持つ食肉植物。犠牲者はその美貌、その肉体の妖艶さにはとうてい逆らえず抱きついてしまう。すると花芯から強烈な催眠汁が分泌され、その匂いで人間の思考は完全停止、手の形をした花弁の中に包み込まれ、そのまま溶解・吸収されてしまう。

ひなん-じょ【■所】（妖殺行）貴族文明斜陽の頃、辺境地区で立ち往生した貴族のために作られた駆け込み寺。ヴィシューヌの村から北へ五十キロの地点にあるそれは、長さ十メートルの漆黒の鋼の長方体で、特殊鋼板は厚さ一ミリだが小型核爆弾の直撃にも耐え、レーダー制御のレーザー砲などさまざまの防御機構に守られている。あるいは退避所とも。

ひ-もぐら【緋もぐら】（夢なりし）農場の家畜の護衛役。地上と上空からの侵入者を撃退するために、地中から炎を噴き上げる。配置される数は、その農場の周辺にいる外敵の数によって決まる。通常は数百本の炎の柱が吹きあがるように配置するらしい。

ビューロー-きょうだい【ビューロー兄弟】（■■歴）兄のビンゴと弟のクレイ、二人そろってビューロー兄弟。その腕は外辺境一と称される戦闘士であります。Dを倒すためにソーントン弁護士に雇われるが、兄はDの白刃によって刺し貫かれ、弟は兄の死を目撃した直後、やはりDの白木の針によって額を刺し貫かれてしまう。

ひょう【鏢】（風立ちて）ねじくれた鉄釘を四方に露出させた鋼鉄製で、猟師や地上戦専門のハンターが地面に撒くのを通常の使用法とするが、手練は飛び道具として使う。熟練者なら一秒に三個を投擲し、十メートル先で直径五センチの円内に集弾させることが可能。貴族特有の怪力がこれにマッチすれば、巨竜の装甲をも撃ち抜くマグナム・ガン並みの威力を発揮する。

ひょうい-のうりょく【憑依能力】（死街譚）ジョン・M・ブラッサリー・ブルート八世の使う特殊能力。分子浸透能力とは兄弟分みたいな技だが、あちらは移動する能力、こちらは留まる能力。いろいろと便利なものだが、うかつに貴族に乗り移ったりすると逆憑依に遭ったりして大変である。無傷の失血死体に乗り移った時もあわやとなったが、おどかすつもりの悪ふざけ。Dに斬り捨てられなかったのが不思議というか、当然というか。

びょう-いん【病院】（夢なりし）シヴィルが眠る「村」の病院は白亜の三階建ての建物。「村」の目抜き通りのはずれから、硬質充塡材で舗装された道を馬で五分ほど辿り、枝分かれした坂道で小高い丘の中腹まで登るとある。屋上のポールの先には五芒星のマーク——病院の象徴の旗が掲げてある。玄関前には柵。玄関は流体物質を応用したエネルギーで動

く総ガラス張りの自動扉。木製のエレベータで、地下の緊急病棟へ降りられる。

びょう-うち-ガン【鋲打ちガン】（堕天使） 秒速三百メートルで鋲を飛ばす。

びょう-うち-じゅう【鋲打ち■】（ダーク） 高圧気泡を弾けさせ、秒速三百メートルで百グラムの鉄鋲を射出する。

ひらい-もり【火■】（■■） エレナ操るバイクの両サイドに仕掛けられた推進ロケット付きの銛。早い話がミサイルである。長さ一メートルで計三本。エレナのバイクにはこの他にも、ライトにはレーザー発射機、電撃ショックなどさまざまな武器が搭載されている。まるで『007／サンダーボール作戦』のBSAロケットモーターバイクみたいである。エレナがレザー・タイトな黒ツナギで乗ってたりして。

ビレッジ【村】（風立ちて） 辺境行政単位。

ビンゴ・ビューロー（■■遍歴） 外辺境一の戦闘士ビューロー兄弟の兄。黒いシルクハットにくるぶしまで裾が届きそうな礼服は、葬儀屋を思わせる。蜘蛛のごとく痩せている四肢に似合わず、荒削りの岩のごとき声を発する。武器は装備しておらず完全な丸腰。いつも眠りこけているような「眠り男」だが、そのくせ悠々と騎乗したりする。口から形も色もシャボン玉に酷似したものを吐き出す。これはビンゴの見ている夢を吐き出しているもので、触れたものも夢と化して消える。夢見るビンゴ自身も夢なので、その間は不死身となる。Dを殺すため弁護士ソーントンに雇われ、砂漠の旅に同行した。基本的にはいい奴で「いまは正直やりたくはないんだ」と言いつつもDと闘う。最後は「夢の水泡」をすべて吐き尽くし、目覚めたところを刺し貫かれた。

ひんしゅ-かいりょう【品■良】（■遍歴） 北の辺境でランスたち農民グループが行なっていた実験は、植物の品種改良であった。水のない寒冷地でも実をつける新種が完成し、実験地に「帰らざる砂漠」を選んだものの、そのまま砂漠の虜となってしまった。

フ

フー・ランチュー（D） ランシルバ村で粉屋を営む男。村でも美人と評判のキムを奥さんに持つが、そのキムをリイ伯爵に襲われてしまう。

フー・マンチュー（一般） 大衆怪奇作家サックス・ローマーの生み出した天才悪魔。西洋人にとって、東洋人がまだ得体の知れない存在だった頃の、黄禍世相が生み出したとも言える怪人。小説はもちろん、ラジオや映画にも活躍し、映画では、ワーナー・オランドやピーター・セラーズに挟まれた形で、かのクリストファー・リイも何回かフー・マンチューに扮している。美女をさらってはべらすのは得意だが、美人の奥さんがいるのかどうかは不明。

ファー・セラー【毛皮商人】（夢なりし） 辺境をめぐる行商人の職種のひとつ。辺境にはなくてはならない存在。ブルージャッカルの皮で作ったシャツなどが高価な商品と思われる。

ファーン-の-ガード・ビースト【ファーンの■衛獣】（風立ちて） 大蜘蛛、電気雲、水中用のほか、でかい殻を載せた全長二メートルに近いカタツムリの化け物や巨体の四足獣、粘液したたるイソギンチャク状の生物、うねる紫色の触手の塊などもいる。

ファーン-の-なや【ファーンの納屋】（風立ちて） 護衛獣の飼育場も兼ねている。小屋の四方は、護衛獣の特性に合わせて超合金、ガラス板、プラスチックなどさまざまな材質の板で仕切られている。農具やら食料コンテナなどが並んでいる。

ファッション・メーカー【婦人服売り】（夢なりし） 辺境をめぐる行商人の職種のひとつ。辺境にはなくてはならない存在。

ファングエビ（堕天使） 沼に棲息するエビ。軽業師姉弟メイ&ヒュウの両親がこれを獲っていたところを蛇竜に襲われて死亡したとされていた。牙の生えたエビなんて獲るからだよ。

ファントム-きし-だん【幽■士団】（堕天使） 辺境に巣喰う妖獣妖魔のうちでも狂暴さ、恐怖度では屈指の一団。その姿は人間の形や、ぼろぼろの衣裳をまとった白骨、首が二つあるもの、全身に眼球をまぶしたようなもの、数十本の手足を蠢かすものと様々で、そのどれもが乗っている馬もろともに半ば透き通り、全身に青白い燐光を噴いている。その一撃はDの刀身さえ通り抜け、目標物を攻撃する。この攻撃は極めて精神的なもので、常識と反すること（跳ね返した攻撃が通用し、有効なはずの攻撃が無効）になる。軽業師姉弟メイ&ヒュウの乗った定期馬車を追ってタロスの武器庫まできたが、運悪く破壊者と遭遇する。幽霊騎士団の青い光は見たものの精神を呪縛する催眠光。これを防ぐため、この地方の人々は色濃いゴーグルを使用する。

フィッシャー・ラグーン（堕天使） フィッシャー・ラグーンの館の主人。なめし皮みたいに黒光りする顔に隻眼の大男。タキに五万、メイに三万の値を付けて、ザナスから買い取った男。Dを護衛させるために、ブロスたち五人を雇った。三十年前、駆け出しのチンピラだった頃、クラウハウゼン村で神祖と

Y. Amanoa

出会っている。ラグーンの館が領主の目の前で繁盛しているのも、神祖のお墨付きをもらっているから。神祖の実験のために自分の精子を提供した。実はハゲ頭。同じ街にいながら、ヴラド卿とは二十年以上会っていない。

ふういん-どう【封印[illegible]】（**堕天使**）世には出してはならぬ宝物や発明を封じ込めておく空間。建造には貴族院の許可が必要。そのひとつは「タロスの武器庫」の山腹から二キロ奥にあり、三次元方向にそれぞれ数キロの広さを持つ空間だった。中央には長さ五メートル、幅二メートルほどの寝台が置かれ、その周囲には奇妙な品々——メビウス書籍（壁を埋めつくすほどの予備がある）、多重層戦場（バトルフィールド）、血の泉など、封じ込めた「破壊者」の意識が封印堂脱出に向かないためのさまざまな娯楽（?）が置いてある。しかしその書籍はことごとく読み捨てられ、潤沢なはずの血の泉は渇き果て、多重層戦場もすべて破壊されていた。「破壊者」の退屈、いかばかりや。

ふうしゃ-ごや【風車小屋】（**夢なりし**）病院の近くに建つ。十年前に廃棄されたが、それまでは近隣一の発電能力を持ち、シヴィルが眠る「村」のエネルギー源だった。八人が常時勤務しており、小屋の高さは十五メートル。動力施設で使えるものは、五キロ先の核融合炉発電所に運ばれている。

ふう-ま【[illegible]】（**ダーク**）貴族の使い魔か？ 捜索能力に優れているらしい。馬車を木の枝などでカムフラージュしたあと「風魔でも使えば簡単に見つけられちまうぜ」とセルゲイはぶつくさ言った。

ぶき-こ【武器[illegible]】（**[illegible]姫**）貴族の領地を守る〝天空よりの守護者〟現象の正体であるとされている。数十年前にそのひとつが墜落した際の調査では、大口径粒子ビーム砲や、気象攪乱装置などと並んで、簡便な耐熱装甲とブレーキ・ロケットをまとった数種の妖獣の死体が確認されている。

ぶき-ロッカー【武器ロッカー】（**風立ちて**）ツェペシュ村「学校（スクール）」のクラスには、妖魔が襲撃してきた場合に備えてこんなものまで設置してある。

ふくごう-ライト【複合照明】（**夢なりし**）石油の炎とレンズを組み合わせた照明器具。シヴィルの眠る「村」の病院では、アラン院長の私室にこんなものまで備えつけてある。

フクロウ-の-め【フクロウの眼】（**夜想曲**）火が焚けない場合の野営に欠かせぬ二枚の薄膜。赤外線フィルターの役を果たし、闇の中でも周囲の認識を可能にする。アニス村へは徒歩約一時間手前の森の中で、ライが使用した。

ふくろ-じょう-せいぶつ【袋状生物】（**堕天使**）ディームリ村の巨木に棲みつく生物の一種。猛毒のガスを吐く。この毒ガスの不意打ちで、ミスカ・ドレイクと軽業師姉弟の姉メイが倒れてしまう。

フシア（**堕天使**）男爵バイロン暗殺のために父親ヴラド・バラージュに雇われた刺客のひとり。七人の中では最も若い吸血鬼ハンター。不死身のフシアを名前に冠しているだけあって、槍で刺されても死なず、切り裂いた首から一滴の血も出ず、胸に空いた直径五十センチもの大穴がひと撫でで跡形もなく塞がるほどの驚異的な再生細胞を有する。長髪が美形とすらいえる半顔を覆っているが、異様に青白い。体内で毒素を合成することも可能。例えば血をニンニクのエキスを炊き込んだ酸にすることも、その切断口から毒煙を出すことも可能。長さ六十センチほどでその半分が平べったい短槍を使う。また吸血鬼だけを惹きつける合成薬品も持っている。ジャン・ドゥ＝カリオールの実験によって「破壊者」に取り憑かれる。暴走してクラウハウゼン村付近をクレーターに変えるが、ヴラド・バラージュ卿の笏杖の一撃で倒された。

ふじみ-の-へいし【不死身の兵士】（**聖魔[illegible]**）首から上はまともな人間だが、首から下はミイラ。「帰らざる砂漠」の主に操られている。撃っても斬っても死なない。死んでも生き返らされ、砂漠の主の命令を遂行する。

ふたくび-おおかみ【双首狼】（**[illegible]薔薇姫**）①文字通り首が二つある狼。辺境によく出没する。最低でも普通の狼より二倍は怖い。②転じて、ものすごく怖いものの譬え。用例→「双首狼を前にした羊のような」＝ひどく怯えているようす。

ぶっしつ-へんかん-そうち【物質変換装置】（**風立ちて**）ツェペシュ村廃墟の地下研究室に並ぶ超科学技術機器のひとつ。

ふどう-りょうち【浮動領地】（**ダーク**）ギャスケル

大将軍は神祖から近隣の土地すべてを自分のものにする権利を得たが、領地の面積は一定のものとされた。そのため領地を好きな場所へ移動することができる。

ブッチャー【[illegible]体屋】（夢なりし）町外れにあるのがほとんどらしい。死体の解体も行なう。

ふゆう-ちゅう【浮遊虫】（堕天使）空気分子と同じサイズの虫。シャバラ渓谷に棲息する。存在してもまったく見えません。

プライス（複合）①ランシルバ村の収容所看守。ドリスを監視中、グレコに騙され、アリストクラート・コイン三枚で命を落とす。②中篇『昏い夜想曲』に登場する生意気な美少年。邪眼を特技とする。

フライング・ダッチマン（複合）①新宿にある酒場の名前。いつの時代の話か。②「七つの海を永劫にさまよわねばならぬ忌むべき存在」と称され、ダンピールと同じように人間から恐れられている魔物。

ブラスコ（[illegible]）サクリ村の刀鍛冶。一子クスカあり。Dが青騎士より奪った槍をもとに、対四騎士戦用の剣に打ち直し、ザンバ村の体内寺院で黒騎士と対戦中のDを偶然にも救うことになる。その斬れ味のほどは、黒騎士の左肩が一番よく知っている。

プラズマ-ちょうじゅう【プラズマ長銃】（堕天使）男爵バイロン・バラージュの得物のひとつ。その威力は、襲撃してきた合成人間＝蛙男の半身をやすやすと蒸発させてしまうほど。

フラゼッタ（堕天使）ヴラド・バラージュ卿の老忠臣。男爵バイロンがクラウハウゼンを去ってから二十年、ヨナとともにずっとヴラドの居城に留まっていたが、バイロンの目前で首を落とされ、灰と化す。

フランツ・ナイト（死街譚）ローリイの父親。妻とともに、移動街区では有数の天才的化学者として知られ、街を救ったこともしばしば。ナイト家代々の実験の目的が町長ミンの思惑と折り合わず投獄されたが、妻子と一緒に移動街区から逃げ出してしまう。二カ月後、移動家屋の原子炉加熱器にひびが入ったため野営していたところを、小竜に襲われ死亡。かろうじて娘のローリイのみが助かった。

ブルー・ジャッカル（聖[illegible]）辺境でも最も凶暴とされる獣。表層皮は鍔なし帽やシャツに加工される。その名のごとく体色は青。

フルーツ・マン【果実売り】（夢なりし）辺境をめぐる行商人の職種のひとつ。辺境にはなくてはならない存在。キャンディ・マンなら来ないほうがよい。

ブルワー（戦鬼伝）モノクルに気障な蝶ネクタイ、分厚い唇に猫なで声の紳士。自称・人材スカウト＝れっきとした職業斡旋業者だと言うが、実はその道三十年の辺境の人買いである。シュラト村のライアを六千ダラスで『都』に就職させる契約を結ぶが、謎の居座り三人衆のためにうまくいかず手をこまねいていたところ、折よく現われたDを貴族の二文字で釣り、まんまと邪魔者を消してライアを手に入れようとする。

フレキシブル・スチール（北海魔行）寒さの厳しい北部辺境の漁村では、漁業用の網も柔軟な鋼鉄製である。

フローレンス（北[illegible]行）辺境最北辺の漁村。海からやってくる貴族、千年の由来、妖しき伝説に彩られた村。ウーリンの死を看取ったDが珠を携えて向かうことになる。

フローレンス-しょう-がっ-こう【フローレンス小学校】（北海魔行）フローレンス村にようやく新設された小学校。机は二十個足らず、二十坪にも満たない小さな平屋校舎だが、魚を象った真鍮の紋章が嵌め込まれ、フローレンス小学校と読むことができる。

プロス（堕天使）Dを護衛する黒マスクの一団のリーダー。公爵シェーン・グリードとの戦闘で死亡。

プロスメン-きょうじゅ【プロスメン教授】（堕天使）科学者。千手足のサイファンがミスカ・ドレイクをクラウハウゼン村に案内しようとしたとき、ミスカを騙すため適当に語った名前。

ブロックデン-いちぞく【ブロックデン一族】（[illegible]姫）南部辺境地区の貴族。数千キロに及ぶその領地では〝天空よりの守護者〟現象がもっとも顕著に見られたことで有名。

ぶんし-きろく【分子記録】（双影の騎士）分子記録や空間封印レコードなどに記録されていた貴族の呪術文明の一端は禁断の知識だったが、邪悪な目的を持つ人間の魔道士たちの手で、細心の注意と魔力をもって繋ぎ合わされ、再生されたという。↓【空間封印レコード】

ぶんし-しんどう-だん【分子[illegible]】（妖殺行）強烈な超高速振動を加えることにより、構成分子間の結合エネルギーを破壊し、すべての物質を微細な塵と化してしまうダイナマイト状の爆薬。自分を追うDが激流にかかる橋の上を渡ろうとする瞬間を狙って、時限装置付きのものをマイエルリンクが使用したが、一瞬早くボルゴフの落とした稲妻のためDは激流に落下、攻撃は不発に終わる。

ぶんし-バリヤー-はっせい-そうち【分子バリヤー発生[illegible]】（堕天使）ジャン・ドゥ＝カリオールが腰に付けていた護身装置。「破壊者」の一部が起こ

した爆発は次元にも影響を与えるほどだったが、その爆発からもカリオールを守った。

ぶんしん-の-ほうじゅつ【分身の法術】（双影の騎士） ミア・シモンがまやかしの自分自身の幻像を産み出す術。分身を構成するのは、思念と空中の浮遊分子、ミア自身の毛穴からにじみ出る蛋白質で、そのつくりが精緻になればなるほど、分身の感覚は本人に似てくる代わりに、分身の受けた苦痛をミア本人も味わうという相互作用を発揮する。

ふんすい-びょう【噴水病】（ダーク） 数ある辺境の病魔の中でも最凶最悪といわれる伝染病のひとつ。毛穴という毛穴から噴水のように血を吹き出す奇病。これで全滅した村は数限りない。ひとりでも患者が出ると、近隣の村は総出でその村の周囲を包囲し、病魔の沈静を待つ。効果的な治療手段は見つかっていない。しかし、ごく最近、特効薬が『都』で開発され、ゴルドーたちの輸送隊はこれをハルドゥ村に運んでいた。

ふんむ-き【噴霧器】（堕天使） 貴族の墓を暴く時に使用される。これで水をかけ、貴族の能力を低減させる。

へ

ヘイグ（風立ちて） ツェペシュ村青年団のリーダー。三十前の長身の男。村でも荒っぽいことで有名だが、それ故に暴虐な移動山賊や人工魔獣から村を守ることのできる男である。クオレ・ヨーシュテルンを妖精の飼育場で拷問にかけようとしたところ、逆に何者かに襲われた。ウイスキーの呑み過ぎか。

へいげん-ネズミ【平原ネズミ】（堕天使） 体長三メートルに達するネズミ。群れを作る。クラウハウゼン村手前の平原でクロケムシや三つ首イノシシ、上掘りバイソンなどとともに安全地帯を求めての大暴走――レイジング・ランを巻き起こしたが、大地を割って出現した地虫（アースウオーム）の巨大な舌にことごとく呑み込まれてしまう。

へいさ-くうかん【閉鎖空間】（風立ちて） 空間を閉じ、その中にいる者は未来永劫同じ場所を巡ることになる。貴族の歴史を通じて、外側からならともかく、内側から破った例はない。Dが閉鎖空間を破ったためにさまざまな事件が発生した。一九四五年にバミューダ海域で五機のアヴェンジャー雷撃機が消失。一八七二年にはマリー・セレスト号の乗組員が消失。一八八八年には切り裂きジャックが消滅。一九〇一年にはヴェルサイユ宮殿でアン・モバリイとエレノア・ジョルダインがマリー・アントワネットを目撃。三〇四六年には冥王星を呑み込んだα型ブラック・ホールが消失。四〇一八年には画家のヴァーノン・ベリがある貴族の姿を目撃し、のちに「神祖」像の傑作と称される絵画を描くにいたる。

へいさ-ようじき-フィールド【閉鎖妖磁気フィールド】（風立ちて） ツェペシュ村廃墟の実験室にあった超科学機器。廃墟の丘を登るのに異常に時間がかかるのはこの装置の作用だった。自動修理回路がついている。

ペイジ（堕天使） フィッシャー・ラグーンの館の新入りの女。金髪を長く垂らした十九歳の清純そうな娘。ラグーンに気に入られたが、その正体はクロモの化粧で変装した千手足のサイファンだった。化粧のもとになったのは、可憐なくせに天性の淫戯でもって数百人の男を魅了し、その財産を奪った揚げ句、男たちの妻の一人に刺殺された希代の淫女。ためにこの女（男）とベッドをともにした者は男女の別なく脳髄まで溶かされ、狂わされ、唯々諾々と従う奴隷と化してしまう。

ベイツ（夢なりし） シヴィルが眠る「村」の治安官助手。二十八歳。クルツ治安官を尊敬しており、札付きの凶悪犯三人を相手に太陽銃（ソル・ガン）で立ち向かうクルツ治安官の話を、得意げにDに聞かせている。

ベイリー・ハットン（死街譚） 移動街区の治安官。身長二メートル九十四、体重二百四十キロ、東部辺境第三三四地区（セクター）生まれの大男。二名の治安官助手を従え、七連装ロケット・ランチャーと炸裂銃を手に、町の平和と自分の欲望のためDに挑むが、ツタガラセの枝であしらわれ、敵ではなかった。略奪船でガンヘッド（?）に襲われ死亡。

ペガス-きんか【ペガス金貨】（北海魔行） 南北辺境での最高貨幣。フローレンス村の場合、一ペガス金貨があれば、五人家族が半年は暮らしていける。

ベス・ファーン（風立ちて） ツェペシュ村自警団長サイラス・ファーンの娘。ふっくらとした童顔の十七歳の少女。森で食用苔を採取している最中に何者かに襲われ、吸血鬼となって父親を襲う。父親に毎日血を吸われたため、首から下は青黒く干からびている。最後は父親ともどもエネルギー生命体に殺された。哀れである。

ベスリク（薔薇姫） サクリ村で肉屋を営む。薔薇姫の〝花の祝福〟を受け、雑貨屋の親父や老婆らとともに「仲間に入れよう。一緒になろう」とエレナにおいでおいでをしていたところ、あとから来た黒騎士に首を刎（は）ねられてしまう。普段はいい人だったに違いない。

べに-はこべ【紅はこべ】（堕天使） 男爵バイロン暗

殺のため、ヴラド・バラージュ卿に雇われた七人の刺客のひとり。東部（辺境）地区に名高い吸血鬼ハンター。下半身が絢爛たる花びらに覆われて、その花粉を武器とする。花人間の花粉が体内に侵入すると、血を糧に花を咲かせる。茶のマントを着た長身の男。シャバラ渓谷でのDとの戦闘で片腕を失い、さらに大崩壊に巻き込まれて瀕死の重傷を負ったところを、通りかかったバルコンに拾われる。フィッシャー・ラグーンの館の屋上で再びDと対決し、赤い霧を吹きつけて死亡する。赤い霧は血を吸い、真っ赤な花を咲かせる。その根はDの体内に一メートル近くも張っていた。花は引き抜かれる際に悲鳴を上げる（マンドラゴラか?）。

ペネトレーターライフル（ダーク） 火炎獣の装甲さえ貫く火薬銃。その凄まじい反動から通常は三脚をつけ、固定して連射する。並みの人間では持ち上げることもできない。その大口径ペネトレーター弾は、メフメット大公の機械人間(オートマン)をもよろめかせる。この銃をジュークは肩付けで連射可能な技量を持つ。

ヘルガ-ばあさん【ヘルガ婆さん】（想秋譜） 通称"赤い籠(かご)のヘルガ"。シャーリイズ・ドアからは馬を駆って三十分の村外れに住んでいる。八十年ほど前に近くの村の貴族狩りに参加したまま帰らぬ亭主を待ち続けて、いまではもう百歳以上。ここ一週間ほど前から採ってきたスモモや林檎が黒く腐るため、不安になってDを呼んだ。が、本格的な秋の到来とともに現われる貴族の脅威の原因に、まさか自分自身が関係しようとは、いかなヘルガ婆さんといえども気づかなかったであろう。昔、村へ来た魔道士から教えられたという術により、魔法陣を使って貴族の塒(ねぐら)を特定することができる。

K. Sakashita

ベルグ（死街譚） 移動街区居住区では最年長層に属する老人。ツルギ医師の主張に同意し、Dを街から追い出そうとするコンロイを制止しようとした。

ペレス（北[illegible]魔行） ギリガン商会に飼われる三下(?)。サイラス骨董店から通報を受けたギリガンの命を受け、珠を奪還するため、娼館へトトを捕まえに行くが、逆しまの術にかかり、喉を裂かれて死亡。トトとは古い知り合いだった。

ベン（死街譚） 移動街区の住人。クリーニング店で働く青年。町長ミン家の女中ネルとは恋仲である。プルート八世はまずベンに乗り移り、しかるのちネルに憑依し、町長家を探ろうとした。

へん-きょう【辺境】（D） さまざまな貴族たちが領地を統治し、領民を恐怖せしめ、あるいは友好関係を維持し、ある者はいまだ権勢をふるい、ある者は落魄し、ある者は他の貴族と戦い、貴族文明が滅んでなおそれに対する畏怖が強烈に支配する地帯。はっきり言って何が起こってもおかしくない土地。妖魔妖獣魑魅魍魎の跋扈(ばっこ)は数知れず。景観としてはもっぱら「西部劇」の砂漠地帯の様相を呈する。

へん-きょう-と-くすり【辺境と薬】（ダーク） 『都』の新薬は辺境の村で最も必要としている品のひとつ。貴族たちは自分自身のための医療開発には熱心ではなかったが、餌である人間のためには、その科学力で「薬」の発明や「病院」の建設を行なった。その施設は現在も人間によって運営され、新薬の開発などの成果を上げている。辺境の村でハルドゥ村のような裕福なところは、運搬業者に依頼し、「新薬」や「新型医療装置」が開発され次第、問答無用で配達する旨の契約を結んでいる。

へん-きょう-の-おんな-の-たしなみ【辺境の女の嗜み】（風立ちて） 生と死が隣り合わせの辺境の女たちは、物心ついた頃からある程度の武器の使用法を習うのが習慣。男たちのように、火薬銃や石弓、レーザー・ガンなどまで習熟するには及ばないが、短槍や軽量長剣、鞭ぐらいは誰でもある程度こなすのが常識。

へん-きょう-の-じゅうみん-に-ふかひ-の-しめい【辺[illegible]の住[illegible]に不可[illegible]の使命】（双影の騎士） 貴族に血を吸われた犠牲者が出ると、その胸に杭を打ち込むために、村の男たちが一致団結して集まる。火事と葬式を凌いで無条件に全員が事に当たらねばならない。

へん-きょう-の-せい-せいかつ【辺境の性生活】（**風立ちて**）雪や雨でいともたやすく外界から遮断されるような辺境の村にとって、労働力確保の問題から、かなり不道徳な関係も許容されている。単なる快楽追求に終わらねば、夫と人妻、母と息子、父と娘——どれもが、新たな生命を芽生えさせる貴重な関係。貴族たちの遺伝子工学の成果によって、この時代に近親婚による知能障害、その他の弊害は存在しなかった。遺伝病は今の人類にとって名前さえ知らぬ過去の遺物となっている。

へん-きょう-の-そうぎ【辺境の[illegible]儀】（**[illegible]歴**）辺境の葬儀では、無縁の町民が葬列に加わるのが礼儀だが、バイパー婆さんの葬儀は知人のみで執り行なわれた。

へん-きょう-いりょう-ぶたい【辺境医[illegible]部隊】（**ダーク**）『都』が派遣している医療部隊。辺境を定期的にめぐっている。クラクフ村では噴水病鎮圧のために出動した。

へん-きょう-けいさん-きょく【辺境[illegible]算局】（**[illegible]立ちて**）いまから五一二七年前、つまり西暦六九六三年に建造された。貴族の種的衰退を食い止めるために、人間と貴族との結合を目的に実験を重ねていた。人間との結合を忌み嫌う反対派に気づかれぬように辺境に建築されたものの、反対派の襲撃で廃墟になったらしい。その廃墟のひとつがツェペシュ村の丘の上に建っていた。

へん-きょう-けいび-たい【辺境警[illegible]】（**D**）『都』から定期的に辺境の巡回警備に派遣される警備隊。あらゆる妖魔妖獣に対する訓練を積み、強力な兵器で武装した、一人一人が一小隊に匹敵するファイターたち。しかし〝怪魔団〟の前に十人の隊員は全滅させられた。久しく登場してなかったが、中篇『戦鬼伝』でシュラトの村に再登場した。

へん-きょう-しょう-こう-ギルド-ゆそう-たい【辺境商工ギルド輸送隊】（**ダーク**）辺境の村をめぐって注文を受けた品を届ける運び屋のこと。生活必需品とあれば深夜の急行便も実施する。物騒な辺境一帯をめぐるため、物資の不足や事故に備えて、鉄道敷設圏内に限り、いくつかの安全な駅に荷物を送り込み、そこで補給するシステムを採用。また金目の物資を運ぶため、充分過ぎる兵器と腕利きのガードが必要とされる。三つの村をまわるのに最低十人、辺境の一区画ともなれば、三十人以上が必要とされる。ちなみにカイルを隊長とする今回の輸送隊が請け負ったのは五村。その馬車は対妖獣妖物用にワン・アクセル、〇・五秒で時速一〇〇キロに加速するアフター・バーナー付きエンジンを装備している。

へん-きょう-しょうふ【辺境娼婦】（**風立ちて**）文字通りの職業である。人手の足りない辺境では、外界からの子種を宿す意味も兼ねていると思われる。

へん-きょう-ひゃっか-そうらん【辺境百科総覧】（**夢なりし**）辺境で生活する人々のために作られた百科事典。衣食住はもちろん、辺境の妖獣・動物・武器などが紹介されている。ちなみに、この百科総覧で電子槍を引くと「全凶悪生物二〇〇ランク中五〇ランクまでの中型獣に有効」と紹介されている。

へん-きょう-ひょうじゅん-じ【辺境標[illegible]時】モーニング(M)、アフタヌーン(A)、ヌーン(N)、ナイト(N)、ジャスト(J)などの単位があるが、標準時とはいっても、若干の地域差があり、必ずしも統一されていない。また時間の測定に関しては古来の六〇進法が援用されている模様。

ペンゲ（**妖殺行**）バルバロイ三護衛のうちの一人。全身が異様にひょろ長く、カマキリのように痩せ細っている。顔も手も墨を流したように黒く、身を包んだコートもまた暗夜のごとくに黒い。他人の影に潜んで地上を這い、黒布をもって影を模すなど、影の続く限りどこにでも潜むことができる〝影使い〟だが、Dが自分の影を白木の針で縫ったために隠れ場所を失い、退散せざるを得なくなる。バーナバス付近のゴースト・タウンで、再度レイラを襲おうとして盆のくぼを短針銃で撃たれ、ボルゴフの剣で胴をなぎ払われた。

ペンダント（**D**）Dの胸に下がっている青いペンダントには、マグナス・リイの城のはね橋を自動的に下ろし、城の警戒装置を外す能力あり。Dの手からダンに渡った。第二長篇『風立ちて』以降でも身につけているところから、現在は「二代目」であるというのは有名な話。Dはいくつも持っているか、どこかですぐに調達できるらしい。

ポーキー（**風立ちて**）貴族が産み出した人工獣。愛蘭土の妖精がモデル。人に危害を加える邪悪な妖精。

ぼう-えい-き-こう【防[illegible]】（**聖魔[illegible]歴**）特にグラディニア城の防衛機構は、ほとんどがバイパー婆さんにつぶされたが、ただ一つ残っていたのは侵入者を夜まで眠らせる催眠装置らしい。

ぼうぎょ-きこう【防[illegible]構】（**ダーク**）呪われた保管庫の防御機構のひとつに、地平の彼方に出現する女の悲鳴とも歌ともつかぬものがある。この声を聞けば、どんなに強い貴族の心臓でも止まり、血は腐敗する。メカニズムもすべて作動を止める。

ほうしゃーせんーじょきょーしっぷ【放射線除去湿布】（双影の騎士） 核エネルギーの放射を浴びて火傷したミア・シモンの応急処置に使用。強盗団の鞍鞄の中にあった代物。

ほうしゃせんーちりょうーやく【放射線治療薬】（双影の騎士） ミア・シモンの放射能火傷を治療するために、ユマの製造工場の薬品庫でにせDが見つけた。

ほうーしゅう【報酬】（D） 吸血鬼（バンパイア）ハンターの場合、その相場は最低でも一日五千ダラス。旅行用の圧縮食が一パック三食分で百ダラス。ドリスがDに出した報酬条件は、一日三度の食事と自分自身を好きにしてよいこと。これを高いと見るか安いと見るか？

ぼうすいーコート【防水コート】（風立ちて） 分厚い大鹿の皮に虎男の獣脂を塗りつけて作る。少し厚めに脂を塗ると硬化する時間が早くなり、強い雨足に会うと、頬げたをはたくような音がする。

ほうでんーよう【[illegible]】（[illegible]） 両腕なきあとの黒騎士に植え付けられた黒い薔薇の花。発する電撃は、五百万ボルトでイオン分離を成し遂げ、Dのサイボーグ馬の電子回路を破壊した。

ほっかいーまこう【北海魔行】（原典） 正式名称『D―北海魔行』。上下二巻のシリーズ第七長篇。一九八八［昭和六十三］年十月三十一日（下巻は同年十二月三十日）発行。のちに『蒼白き堕天使』や『邪王星団』が書かれるまでは文句なしにDの最大長篇を誇っていた作品。愛蔵版刊行時に初めて二段組で全一冊にまとめられた。Dに対する「美影身」という言葉が初めて登場した作品でもあります。北の辺境フローレンス村を舞台に、短い夏の珠争奪戦を描く。

ほっこーさんみゃく【北湖山脈】（双影の騎士） 地図にも載っている山脈。最高峰は北湖山の海抜五千メートル。他にも四千メートル級の山が三つ、三千メートル級なら七つもあるが、Dがムマの門を貫いた途端、二秒間で均（なら）されてしまい、代わりに死人街道が出現した。

ホムンクルス（風立ちて） ツェペシュ村廃墟の地下実験室で、リナが誤って混ぜ合わせた液体から生まれた人造生命体。稲妻とエーテルから誕生した。不完全だったためか、腕だけ見せたものの、すぐに力尽きて液化した。腕は赤ん坊のそれほどで、赤黒い腱や血管を表面に張り巡らせ、得体の知れぬ粘液で濡れそぼっている。指は三本しかなかった。

ホムンクルス【人造生命体】（堕天使） その名の通り、人工的に造り出された生命体。当然、さまざまな形態で製作されている。ジャン・ドゥ＝カリオートルが造ったと思しき偵察用のそれは、小鬼のような身体に翼をつけた姿をしていて、胸にTVアイをつけている。

ボルゴフ（妖殺行） マーカス兄妹の長男。兄妹中随一の巨漢。首から手首まで、薄い金属を張った革製の防具で筋肉の山を覆っている。手頃な下枝をぶった切り、そこに獣の腸の筋を張っただけの野蛮極まりない弓をもって、先端を尖らせた単なる鉄の棒にすぎない矢を放つ。しかも一度に五本を引き絞りながら、なお一本一本を精確無比のミサイルと変える豪傑である。原始的かつ乱暴なボルゴフの弓矢は、マイエルリンク相手に〝追い込み矢〟の神技と化し、男爵の両肩を垂直に刺し貫いた。遺伝子の組み換え技術を有していたという両親に授かったものか、走る時、下半身のみ巨人の足と化し、しかもほとんど足音を立てなかったり、斜面を歩む時、その体軀が地面に対してほぼ直角を維持したりと、不思議な技を見せる。他にも、月の視線から任意の一点景を選び、雲海をスクリーンとしてそれに投射するという破天荒な妖術（ただし寿命が三年ずつ縮むという）を操り、グローヴのパワー・レイの照準に利用したりしている。人食い蟻ミントの大群に身体中を食われたところをマシラに乗り移られ、クレイボーン・ステイツでマイエルリンクの胸を射抜いてしまう。

ボルトーライフル【ボルト小銃】（双影の騎士） ジリイラ山の避難所に備えつけられていた銃。高圧の圧搾空気の力でボルトを打ち出す。火薬式ライフルは、その銃声から雪崩を起こすため、このような銃が備えつけられている。避難所には五十発入り弾倉一ダースとガス・ボンベが三本、把っ手の付いたブリキ缶に入って置いてあった。ボンベは銃床底部の装塡孔に装塡。弾倉は引金前方の装塡孔へ装塡。弾倉を入れて四キロ近い重量になる。射出速度はマッハ三（時速一八〇〇キロ）に達するが、この重量のせいでライフルの反動はゼロに近い。

マ

マーカスーきょうだい【マーカス兄妹】（妖殺行） 辺境随一の腕利きとされる吸血鬼（バンパイア）ハンター・グループ。

へ―マ

長男ボルゴフ、次男ノルト、三男グローベック（グローヴ）、四男カイル、長女レイラの五名より成り、改造した辺境連絡用の原子バスと三騎の馬でもって移動する。冷酷非情をもって鳴り、これまでに仕留めた貴族は軽く三桁に達する。しかしその反面、同じ貴族を追いながら、常に彼らだけが生き残るため、ハンターたちの間では忌まわしい疑惑の影が渦を巻いている。ヴィシューヌの村で吸血鬼化した村長からマイエルリンク追捕を依頼された。予定報酬は一千万ダラス。

マーシャン・カウ【火星牛】（複合） ①火星の牛。もちろん真っ赤っ赤。②牛が火星であること。身体に運河と人面とピラミッドがある。九七年にマーズ・パスファインダーが軟着陸した。③火星が牛であること。宇宙空間に赤いミルクを放つ。④『風立ちて』に名前のみ登場した牛。たくましい男の形容に使われた。赤い色に興奮する（？）。⑤二〇〇〇年は火星映画の年とか言われたが、ディズニーの『ミッション・トゥ・マーズ』にもワーナーの『レッド・プラネット』にも、火星牛は登場しなかった。

マイエルリンク（妖殺行） 貴族の中でただ一人、支配される民がその徳を讃えるといわれる若い領主。男爵。人間を下等と見なかった貴族界の異端者でもある。身分や生物学的相違を乗り超え、ヴィシューヌ村の村長の娘＝〝少女〟と想い合うようになる。最新映画版では「マイエル＝リンク」と表記された。

マイクロ・コンピューター（風立ちて） Dが分析に使用した機器。貴族の科学文明の遺品で、残っている数は少ない。使いこなせる人間はもっと少ない。データ分析の他に「推理能力」までついている万能型。リナが数年前に一度、巡回商人が持っていたのを目撃したのみ。磁気ボールで操作する。ディスプレイは暗緑色。犠牲者の血液に残った唾液から加害者の顔を「推理」するほどの性能を有する。

マインスター-だんしゃく【マインスター[illegible]爵】（北海魔行） 水に浮かないという貴族の弱点を克服し、泳げるようになった貴族。正確にはフローレンス村博物館の肖像画と精神（こころ）だけが物語に登場したことになるが、あまり深く追求するとスーインが可哀想だからやめておこう。

マギー（夢なりし） 通称「万能屋」。月に二度、シヴィルが眠る「村」にやって来る中年の女で、ビール樽のようにでかい身体。上腕など痩せた女の腰ぐらいある。丸い顔に丸い目鼻がついている。夢の世界の住人ではない。シヴィルの夢が醒めたあと、Dに微笑を浮かばせた数少ない人物の一人。子供の頃に話で聞いただけで海を見たことがないという。『聖魔遍歴』のランスとは話が合いそうである。

マギー-の-うた【マギーの歌】（夢なりし） 「♪明日が来なくても覗いておいでよ　貴族の奴が間違うかもしれない　ひねくれものでいっぱいの国　誰も気がつきゃしない」――誰か「熊の木音頭」みたいに節をつけてあげよう！

まく【膜】（堕天使） 水を操る闇水軍が使う「膜」は、包んだ人物の姿を写し取り、そっくりのコピーを作り出す。いわば「複写膜」といったところか。

マグナス・リイ（D） 伯爵にして辺境第十地区（セクター）管理官。ドリスによると「年齢は百歳とも一万歳とも言われる」が、ラミーカが結婚の祝詞で述べた三七五七歳が正しいと思われる。小高い丘の上にそびえたつ城に娘ラミーカと住んでいる。中世ドイツの城を模した外面とは裏腹に、監視衛星や無数のテレビカメラなどの電子機械の力で守られている。ドリスに異常な執着を示し、さまざまな手を使って虜にしようとするが、Dに心[illegible]を貫かれ、顔の肉が溶け崩れ落ちながらもDの正体を悟り、疑問を投げかけたまま答えを得ずに死亡。

マジシャン【[illegible]術師】（夢なりし） 辺境をめぐる行商人の職種のひとつ。特に娯楽の少ない辺境には欠かせない存在。

マジソン-はし【マジソン橋】（堕天使） フィッシャー・ラグーンの目の前で、メイに両足で鼻っ柱を蹴られ出血したザナスが、タキともども「吊るしちまわねぇと気が済まん」と喚いた橋。クラウハウゼン村の近郊にある橋と思われる。映画『マディソン郡の橋』を観て激怒した作者の感想ではない（と思う）。

マシラ（妖殺行） バルバロイ三護衛のうちのひとり。最初は鼠色のコートを着た中肉中背の中年男だが、やがて不精髯で埋もれた顔の猟師となる。しかしてその実体は、宿主の腹部に現われるできもの――灰色の粘塊である。小さな鼻に紫色の肉片みたいな歪んだ唇。牙のように尖った黄色い歯を見せるマシラの実体は、茶色の管みたいな触手を操り、他人の身体に乗り移りながら五百年を生き永らえてきた、人間物体Xである。ついにはマイエルリンクの〝少女〟にまで自分の一部を注入してしまうあたり、想像するだにおぞましい。最新アニメーション版で映像化されなくてよかったというか。残念だったというか。

マス（死街譚） 言わずと知れた性春の「エネルギー放出活動」。プルート八世はDを見て「かきたく」なったそうだ。人間、ひとそれぞれである。

マッケイ（**■■姫**）サクリ村バイク青年団の一人。薔薇姫の吸血薔薇の洗礼に遭い、貴族化したエレナのために右肩を骨折、左耳を失い左眼も潰れてしまうが、かろうじて一命は取り留めた。

マッハ・エクスプレス（**双影の騎士**）街道随一と評判をとる早馬の郵便配達。

マドックス・ホー（**夢なりし**）クルツ治安官がアラン院長に渡した犯罪者リストに経歴が載っていた男。殺人者数十二名以上。アラン院長がDを倒すため「村」に呼ぼうとしていた殺し屋の一人。ナイフ使いの達人。

ママ・キブシュ（**■薇姫**）サクリ村の老婆。村外れの一軒家に住み〝魔法治療(ウィッチ・キュア)〟の看板を掲げる魔法医師でもある。人工心臓を二度交換している剛の者だが、さすがに三度目は命が危ないとか。家の奥の調剤室は歴代の村長すら覗いたことはないが、今回、五十年ぶりに訪れたエレナのために、薔薇姫の〝花の祝福〟——吸血薔薇の洗礼を受けた村人たちを救う薬を調合する。

マリオ（**堕天使**）〝人形師のマリオ〟として知られる傀儡師(くぐつし)であると同時に、西地区で三本の指に入る吸血鬼(バンパイア)ハンター。男爵バイロン暗殺のため、ヴラド・バラージュ卿に雇われた七人の刺客のひとり。黄色い上着（襟付き）を着ている。マリオが操る人形に獲物が気を取られているうちに、マリオが襲うのが通常の戦法。人形を操る不可視の糸で編んだ■を操って獲物を生捕りにする。網は包んだ瞬間に獲物の全身に食い入り、獲物は声を上げるどころか呼吸もままならず失神する。捕らえたミスカ・ドレイクに手を出そうとして……とある町外れで「破壊者」に憑かれたミスカに消滅させられた。

マリオカンバ（**夢なりし**）辺境の森に生える樹木。第五長篇『夢なりし〝D〟』の冒頭にはこの手の辺境樹木がいっぱい出てくる。

マルコ（**風立ちて**）ツェペシュ村「学校(スクール)」の生徒でリナのクラスメイト。クラス一おとなしくて細っこい少年。リナに恋心を抱いていた白い花の贈り主。リナの審査会の数日後（おそらくリナの代わりに選抜されたため）、村を出て電気バスで『都』に向かう。リナの志を継いで貴族の歴史を学ぶことを決意している——そう宣言して、Dに微笑を浮かばせた少年。

マント（**D**）リイ伯爵のマントは異様に赤く、てらてらと輝く裏地のマント。ひるがえすと空気を乱舞し巨大に広がる。

ミ

ミア・シモン（**双影の騎士**）セドク村から百キロほど北に住む占い師ノア・シモンの一人娘。セドク村の死体行進事件とセドク村に来るDを予知した母親から告げられて、北の村からやってきた。年齢は十六、七歳。子供の頃から母の指導で占いとそれに付随する術を学び、五感を鋭敏化する訓練を受けている。心臓の動悸を抑える制御の法や自らの幻を作り出す、分身の法術を使う。地下を走るエネルギー・パイプを認識でき、原子弾で破壊しようとする。強盗団の放射線を浴びて、『都』でしか治せない火傷を左半身に負った。神祖（？）に血を吸われ、DとにせDのうち生き残った方を守る役目を与えられた。最後はDと別れ、ムマに残った。

ミイラ-びじょ【ミイラ美女】（**双影の騎士**）大陥没に降りてきたケンツたち一行の前に、岩壁を崩して現われた。干からびた肉体がみるみる甦って、金髪、赤毛、黒髪、緑の髪の四人の美女の姿になったもの。人間を体内に取り込み、干からびさせる。ケンツの火炎放射器で焼き殺された。大施設の防御機構の一部らしい。

Y. Amanoa

ミサイル-ガン【ミサイル■】（**夢なりし**）直径二十ミリの銃口から超小型ミサイルを撃ち出す。ミサイルは銃身を出る寸前に最高速度に達し、時速二千四百キロで目標に突進する。衝撃信管を使用。一一・四九グラムのゲル火薬を搭載している。撃鉄がある。ミサイルはレーザー探知ユニットを装備し、目標を追尾する。

ミシュガルト-の-せきとう-ぐん【ミシュガルトの石塔群】（**聖魔■■**）「帰らざる砂漠」から五千キロ離れた地点にある遺跡。ここでDは、「砂漠」の半ばで死んだ旅人の白骨の腕とメモとを発見した。

みず【水】（**堕天使**）水——とりわけ流れ水は貴族には致命的な効果をもたらす。雨に打たれた貴族はバイオリズムが極端に低下し、その動作は緩慢に、思考は散漫になる。貴族の墓を暴く時には噴霧器や

バケツで水を浴びせるのはこのため。襲われた者が雨中に飛び出して助かった例もあり、また、貴族対策に水の入った壷を持ち歩く旅人も多いという。■

ミスカ・ドレイク（堕天使）南部辺境管理委員会理事コルネリウス・ドレイク公爵のタカビーな孫娘。黒髪に白いドレスをまとい、すっきりと細い柳眉、聖夜の闇のごとき黒瞳（一説に金茶色）、鼻すじと唇の精妙な美しさは、唇の皺のひとつひとつも網膜に灼きつくほど鮮明なのに、娘の全身は白い燐光に縁どられている。骨も肉も溶け爛れる毒血を手で触れただけで作り出す。「破壊者」にとりつかれたミスカは、その瞳を鈍い金色に輝かせ、口から半透明の巨大な水泡を吐き出す。その水泡は街道の魔術師（トレイル・マジシャン）ヨハン卿を包み閉じ込めた。その祖父の治める領地の名はウィンズロー。ヴラド・バラージュ卿の剣に胸を貫かれて滅びた。■

ミスカ-の-ばしゃ【ミスカの馬車】（堕天使）二頭立ての白い馬車。天蓋が開く。サンルーフ仕様とは洒落ておりますな。

Y. Amano

ミスカ-の-ひつぎ【ミスカの柩】（堕天使）防衛メカニズムとして十万度のレーザー・ビームを装備し、貴族以外のものを攻撃する。ミスカを柩に戻そうとしたDに対して半分だけ作用した。もちろんDのコートの防御機構が働いてコートが白煙を上げたに留まったが、男爵バイロンは「すまぬことをしたな」と謝った。

みず-ごと【水琴】（堕天使）水中、雨中、滝壺などに張り渡した糸。水が触れればこの世のものならぬ美しい音色を発し、生き物が触れれば、絡みついて息の根を止める。その音を聴いた者は夢遊病状態でその発信地へ向かう。抵抗できるものは貴族でさえも少数という。その強さは地上一千メートルの高さから落下した三人の人間の重さを支えきる。また、Dが使えば怪物ケンラークをも両断してしまう。

ミズスマシ（堕天使）Dがジャン・ドゥ＝カリオールの屋敷で見かけたプラスチック板をカットして、二枚の円盤にしたもの。これを水に浮かべ、一枚に片足ずつを乗せ、水上を歩行する。早い話が忍者の水蜘蛛。

みず-ぼうず【水鬼】（風立ちて）雨の日に好んで出現する妖魔。ツェペシュ村では数年前に駆逐されている。村の要所に貼った護符は半永久的に有効らしいので、村への侵入は難しいらしい。

みつ-くび-イノシシ【三つ■イノシシ】（堕天使）クラウハウゼン村手前の平原に棲息。クロケムシや平原ネズミ、土掘りバイソンなどとともに安全地帯を求めての大暴走――レイジング・ランを巻き起こしたが、大地を割って出現した地虫（アースウォーム）の巨大な舌にことごとく呑み込まれてしまう。もちろん首が三つあるイノシシであろう。

ミドウィッチの蛇女→三姉妹

み-な【美奈】（D）『神祖』と呼ばれるDの○○が、ただ一度その思いを叶えることができなかった美貌の女性。異魏羅須（イギリス）という地に存在したと言われている。『神祖』はこの美奈が原因で灰になったともいう。

みなみ-の-へんきょう-に-すくう-ようぶつ【南の辺境に巣くう妖物】（双影の騎士）近づく人間の思考を読み取り、その最も望む存在を思念の力で実体化させる能力が具わっている。歩行能力がないのと臆病なのが合わさった結果、産み出された防御能力。幻覚ではなく、本物を果てしないスケールで再現する。

ミニアチュール【技】（■天使）空間の秘密を解明した貴族が成し得る技。湖や谷を重ね合わせて小箱に封じ込めることも可能。■

ミニディスク【MD】（■天使）通信用に使われる。ヴラド・バラージュ卿による男爵バイロン暗殺の使命が入力されていた。もちろん「暗殺者が敵に捕らえられ、あるいは殺されても、当局は一切関知しない」というわけで、MDは「幸運を祈る！」と言い残して一秒後に自動的に消滅した。いや、貴族の科学力ならこのくらいやるでしょ。

みみ-せん【耳栓】（夜想曲）二百年前に貴族の歌にさらされたアニスの村では、夜間は耳栓をすることが慣習となっている。

みみ-せん【耳栓】（堕天使）闇水軍の催眠音を防ぐために使った、蠟でできた耳栓。

「みやこ」【「都」】窮極の科学技術の産物たる完全自動管制都市（サイバーネーション・シティ）。七つの大陸ごとに存在し、ここを中心に超高速ハイウェイが縦横に走っている。が、現実

には都の建物の壁面には埃がつもり、ハイウェイもほとんどが半ばで崩れ落ちている。人間は、吸血鬼たちが作り上げたこの都市の機能の万分の一の恩恵も受けずに暮らしている。

みやこ-ぐん-ほきゅう-しせつ【『都』[illegible]補[illegible]施[illegible]】（ダーク）『都』軍がギャスケル大将軍との戦争に際して作った施設。現在でも使用可能な品々が並んでいる。輸送隊のセルゲイが発見して、ゴルドーのための輸血マシンを持ち出した。人造血液だけで貴族百万人に千年供給できるだけの量が貯蔵され、他にも一基で一万人分の血液を半永久的にまかなえる血液製造器が百万基ある。その武器の貯蔵量は、引火すれば一地方が丸ごと吹き飛ぶ量。Dは原子弾を使って入口を塞いでしまった。

ミュータント-うま【ミュータント馬】（風立ちて）六本脚の馬。辺境で使用されている？

ミリア（風立ちて）ツェペシュ村「学校（スクール）」の生徒。リナのクラスメイト。カリスに熱を上げているうちのひとり。

ミレーユ・リューベック（[illegible]天使）リューベック医院の院長。長身の女性。クラウハウゼン村のフィッシャー・ラグーンとは昔馴染みらしい。

ミン（複合）①宇宙の大悪。フラッシュ・ゴードンと戦った。②移動街区の町長。Dを呼びよせた。身長百七十センチ、体重六十五キロほど、逞しい身体つきの白髪の老人。年齢二百歳以上。右手にスチール製のステッキを持つ。理想の高い完全主義者。移動街区に現われた吸血鬼を退治するためにDを招くが、自宅の地下室には棺があり、疑似吸血鬼を作っていた。町民全員の吸血鬼化が目的だった。実はサイボーグである。

ミント（妖殺行）人食い蟻。森の中で数億匹の群れが営む巣は、精巧な『都』の縮図となる。ボルゴフの身体を喰い荒らした。

ムービー・シアター【巡回映[illegible]館】（夢なりし）辺境をめぐる行商人の職種のひとつ。特に娯楽の少ない辺境には欠かせない存在。

むし【虫】（聖魔[illegible]）特に「帰らざる砂漠」から吹きつける砂に混じっている虫は、チタン合金よりも強靱で万力よりも強い顎を持つ虫。木やプラスチックのドアなどを紙のごとく食い破るが、もっと恐ろしいのはその来襲のあとに吹きつける薄桃色の花びらで、これに触れると即死する。飛来順序は狂わないため、砂漠の町の人々はこの虫の暴威に三分間だけ耐えればいい。

むち【鞭】（D）ドリスが使う鞭は、人狼（ワーウルフ）ハンターだった父親譲り。人狼の剛毛をよりあわせ、三月のあいだ根気よく獣脂を塗ってなめしたもので、まともに喰らえば肉がはじけるという。

む-ほうい-じゅうそう-くうかん【無方位[illegible]層空間】（[illegible]天使）ディームリ村北の外れにある飛行体発着場のメイン・コンピュータが、バイロンたちを幽閉した多次元空間。そのスペースには「果て」というものがないらしい。幽閉された者は光の円筒のような光る壁で構成された三次元空間によって、この多次元空間に呑み込まれることを防がれている。

む-ま【[illegible]魔】（D）作物や家畜の皮膚を腐らせる魔物。熱には弱く、ドリスとダンが四匹やっつけたとの台詞がある。ダンのライフルの腕前からすれば、容易に撃退できる。

む-ま【霧[illegible]】（風立ちて）村の作物を狙って、朝早く空から降下してくる妖物。

ムマ（双影の騎士）Dの左手は、その意味をとぼけまくった。ムマは、遙かな未来でDを迎えるはずだった、死人街道に忽然と現われた城砦。その周囲には高さ百メートルもある塀と差し渡し二十メートルもある堀を三重に巡らし、内部に屹立する建物は、角のようなレーダーやパラボラ・アンテナ、重力波砲や、デストロイヤー、G時空歪曲砲等が針のごとくせりだしている。堀には水がなく、何千メートルとも知れぬ深淵になっている。また建築物は広大で、城壁の奥の建物など、高さが二百、三百メートル級のものが林立し、塔ともなれば優に千メートルはあるのではないかと思われる流線形のものが建っている。その内部は深い闇で、Dをもってしても見通すことができない。貴族に成り損ないの干からびた死体が十万七、八千体、柩に納められている。死人街道の苛酷な試練を乗り越えて呼び寄せられたものは、ここでさらに試練を与えられ生き残りが十数人にまで絞られるが、そのほとんどが狂っている場合が多い。最後まで耐えた者に〝神祖〟のDNAが注射される。地下深い一角には移動してきた揺曳炉がある。Dが再調整したことによって、ムマは再び北湖山脈に閉ざされた。

むら【村】（夢なりし）少女シヴィル・シュミットが眠り続ける「村」のこと。特に名前は出てこない。門から真っ直ぐ広い目抜き通りが奥に続き、左右に家々や商店が並ぶ、どこにでもある構成の村だが、貴族と人間が対等に付き合っていた唯一の村。入植して二百年になる。他の村と同様、二重三重の塀を張りめぐらせており、青く錆の浮いた投槍器や火炎

放射器のノズルが銃眼や柵の間から四方を睥睨している。門の脇には監視小屋。訪問者は探査カメラに監視されているらしい。村外れには病院がある。目抜き通りを抜けると、他の村には見られない馥郁たる森と農耕地が広がり、それを取り囲むように果樹園が広がる。このような豊かな村は、全辺境でもわずか十数カ所を数えるに過ぎない。居住者約五百名の二十倍の人数を養える収穫物は、年に四度、村人総出の積み出し作業の末に、五十台の人型運送動力車で百キロほど南の貨物駅まで運ばれ、より貧しい辺境の村や『都』へ運ばれる。その収入のせいか、建物に比較的老朽化が乏しい。ある意味でこれ以上ない理想の村だが、しかしすべては夢の中のお話。

むら【村】(堕天使) Dと男爵バイロンが宿泊した村は、最初の襲撃の森から二キロのところにあった。村外れに鍛冶屋。宿は村に一軒。この村の北では山賊が横行し、奇怪な死者が続出している。一時間ほど馬車で行くと峠道にさしかかる。道幅は三メートルほどで、左手は断崖。五、六十メートル下には大河メルツ河の支流が走る。

むら【村】(ダーク) ロザリアの「村」の住民はすべて貴族の犠牲者たちであった。もとは廃村だったが、五十年ほど前に改修して入植された。人口は少なく二百ちょっとほどしかいない。ロザリア以外はすべて殺され、山のような村人たちの遺骸はDとロザリアの手によって火葬にされた。

むら-の-きょぼく【村の巨木】(堕天使) ディームリ村北の外れの森にある樹齢数百年の巨木のこと。根元の部分は百人が手をつないでようやく囲める太さで高さは一千メートルに及ぶ。内部の空洞を利用して大小の部屋と通路が作られ、監視塔、飛行体の発着場、避難所、倉庫として利用されていた。内部には二階建て、三階建ての小屋まである。その内部には大蜘蛛、巨大猫などさまざまな生物が巣喰っている。てっぺんには二、三人がまとめて抜けられるドーム状の蓋が付いている。

むら-の-しゅくしゃ【村の宿舎】(ダーク) 小さな村では旅人用に村人の家を開放するし、それなりの規模の村になると、専用の宿舎も備わっている。ただし、辺境商工ギルド輸送隊が村の中に宿泊するのは自殺行為。辺境では村人がいつも物資を狙っている。

メ

メイヒュウ(複合) ①一般的な英国人の姓のひとつ。Mayhewと綴ることが多い。②かの『スター・ウォーズ』でウーキー族のチューバッカを演じていたスーツ俳優。ピーター・メイヒュウ。③『堕天使』の一巻目中盤から登場する軽業師姉弟の総称。早い話が姉のメイと弟のヒュウ。ただし、この総称が本文中で使われたことはない(当然である)。

メカ・プレーン(堕天使) つまるところ飛行体。クラウハウゼン村近くに飛来したものは消火プレーンで、大量の消火剤を散布する。貴族たちが設置した完全自動災害対策システムの一端であった。

メサイア(北海魔行) 十年に一度——しかも三度しか鳴かぬその声を聞いた者は必ず不幸になると言われる妖鳥。クロロック教授の白い羽根ペンの原材料でもある。

メビウス-しょせき【メビウス書籍】(堕天使) 「タロスの武器庫」の奥の封印堂に置かれていた品物。封印された者が眼醒めた場合、永劫の時間を読書に

K. Sakashita

いそしめるようにしている。終わりのないこの書籍は、ひもとくものが知らぬうちに最初のページへと戻り、しかも書かれている内容はすべて異なるため、読むものは飽くなき知的好奇心に駆り立てられ、未来永劫にわたって読み進めることになる。なるほど、ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』が置かれていたわけですか。印刷自体は無制限に一度というわずかな割で狂いが生じるのみだったが、封じ込められていた「破壊者」は我慢できずに封印堂を脱出した。

メフメット-たいこう【メフメット大公】(ダーク) ギャスケル大将軍が呼び寄せた復活貴族にして七人の「招きびと」のひとり。メフメット卿と呼ばれる

ことも。ギャスケル城へやって来たD迎撃の一番手を申し出る。全長四メートルにも及ぶ巨大な、メフメットの機械人間（オートマン）を武器とする。貴族の科学力が産んだメカニズムは、優美で人間そのものと思える精妙な動きが可能。巨大なだけで本物のメフメット公と瓜二つの顔と身体のつくりを有し、遠隔地から自在に制御しうる。機械人間は大公と同じ技を使うが、その力は三百倍に達する。また機械人間は口から探索虫や空食虫を吐きだし、それを使う。メフメット大公はギャスケル将軍が新たに呼び寄せた刺客ロカンボール卿に倒されるが、その死によって機械人間は極彩色の粘塊と化した。

メモ（**聖魔[illegible]**）Dが「帰らざる砂漠」から五千キロも離れたミシュガルトの石塔群で発見したメモは、名も知らぬ旅人の手で綴られていたが、砂漠の半分を渡りきったとあり、動く森、砂漠に住む不死身の人間などの記録が残されていた。

モ

モーター・カー（**堕天使**）ミスカの馬車を追ってきた若者たちが使用。加工しやすい木や軽金属の枠だけの本体にタイヤとエンジンを装備しただけの、いわばゴーカート。エンジン部は油煙でまっ黒。

モーニング【**M**】辺境標準時の時刻表示のひとつ。

①移動街区町長ミンの家で、ラウラの見張りについていたDが、窓の外で何かを叩くような音を聞いたのが、１００Ｍ。

②Dが腑分けされた貴族の怪生物とともに一晩を明かそうとした夜、納屋でDの左手が「古代から決まっておる」と言った逢魔が時が、３００Ｍ。怪生物に異変が起きたのも、きっかり３００Ｍ。それに先立ち、Dがスイッチを回して、太陽ランプの光量をぎりぎりまで落としたのが、２５９Ｍ。

③二百年前の事実を確認すべく、執務室の椅子で寝込んでいた移動街区町長ミンのもとへDが訪れたのが、６００Ｍを少し回った頃だった。

④機械古戦場で、Dがカロリーヌ操るロボット巨腕と対決する直前の時刻が、８０９Ｍ。

⑤スーインの代理として祭りの防犯委員となったDが、村はずれの広場に着いた時刻が、９００Ｍ。

もくてき-ち【**目的地**】（**死街譚**）疑似吸血鬼によって導かれた移動街区を待ち受けていたのは、吸血鬼の失敗作が集う貴族の遺跡——廃墟の台地であった。

モス・マン【**[illegible]人間**】（**D**）人狼（ワーウルフ）と同じく、吸血鬼の手で世界中に撒き散らされたモンスターと思われる。羽音を立てて人を襲うこと以外の詳細は不明。

もどり-ぶえ【**戻り笛**】（**双影の騎士**）記憶の過去[illegible]行に使用する竹笛。内部に独特の仕掛けがあって、脳の記憶野にちょっかいをかける。魔道士オリガはこの笛で二万回近い人間や妖物の過去遡行を行なってきたが、ひとつの失敗例もなし。独特の仕掛けとは、還記憶構造によるものか。

もり-の-なかでの-きゅうそく-ほう【**森の中での休息法**】（**夢なりし**）爆裂弾ないし、焼却瓶をつけた矢と弓を片手に、石綿で作った寝巻で頭まで包んで休む。厚さ一センチの布は夜間に出没する肉食昆虫の歯や槍を通さず、ジゴクイチゴの汁の解毒剤さえ飲んでおけば、妖霧に襲われても翌朝、頭が痛む程度。万一襲われても、弓と矢で撃退する。

モレ・インター【**分子浸透**】（**死街譚**）超能力の一種。ジョン・M・ブラッサリー・プルート八世が好んで使う。人の身体も影のように通り抜けることが可能。使用中のプルート八世と接触した人間は、一時的に青い燐光を放つが、除去剤を飲めば大丈夫。簡単に落とすことができる。

ヤ

ヤーライ（**薔薇姫**）馬車を駆ってサクリ村から逃走しようとした一家。木の杭街道を疾走中、紅騎士に見つかり青騎士に退路を断たれ、老婆は恐怖のあまり心臓麻痺を起こし、残る一家五人も皆殺しとなった。

や-かい【**夜会**】（**夢なりし**）古い城館で夜ごと繰り広げられる夜会。白いイヴニング・ドレスに黒の夜会服、そして舞踏会——シヴィルの願っていた夢である。中島みゆきとは関係ない。

や-かい-の-ばしょ【**夜会の場所**】（**夢なりし**）シヴィルが貴族と踊る夜会が行なわれていた空き地。シェルドン婆さんの住まいから三キロ離れている。南西の森を抜け小道を一キロ行くとあるらしい。まるで「耳なし芳一」の赤間が関の寺みたいである。

やかた【**館**】（**堕天使**）ヴラド・バラージュ卿の典医ジャン・ドゥ＝カリオールの住む館は大邸宅だが、庭園は荒れ放題になっている。天を衝くような高い塔があり、その最上階はカリオールの広大な実験室になっている。その数少ないガラス窓や、四方八方に突き出したおびだしい角のようなアンテナが特徴的で、コードとも綱ともとれるものがそのアンテナからぶら下がってる。実験室にはタキオン噴射装置、巨大な遠心分離器、メーザー式スタビライザーなどがある。

やかた【**館**】（**堕天使**）フィッシャー・ラグーンの館は、クラウハウゼン村の西の外れに建つ大城館。

スケール的には村の中央に位置するヴラド・バラージュの居城には遠く及ばないが、館それ自体一個の巨大な歓楽の都で、大遊戯館にして娼館。夜ごと白数十の窓には極彩色の灯が点り、バイオリン、竪琴、チェロ、オーボエといった古典的な楽器から貴族の技術を模倣した電子オルガンの調べが滔々と流れてくる。すべて『都』から運んだ調度品や料理、酒、女がクラウハウゼン村にこの地方第一の豊かな財力を蓄えさせている。近くの村ばかりか、遠い辺境地区からも客が絶えない。食事に混入された催淫剤と空気中にたちこめる香料に含まれた媚薬の効果で、一週間でもここに留まった女は肉欲の奴隷になりさがる。屋上のペントハウスにはスイート・ルームがある。館の北にはエア・ポートがあり、飛行船が発着する。窓には貴族の怪力ですらどうしようもない鉄格子がはまっている。地下には隔離室がある。実体は敵の捕虜を収容する監獄だが、ヴラドに血を吸われたタキを収容した場所。電気風呂やゼリー・ダンス・ルームなどのイベント・ルームがあり、さらに新しいイベント・ルームをこしらえるために、「館」は一日も休まずにどこかを工事中である。女たちの顔も一週間に一度は変わる。女は「館」のスカウトが近隣の村や「都」まで出向いて連れてくることもあれば、募集の噂を聞いて押しかけてくる場合も多い。庭の池は二〇メートルもの深さがあり、地下の展望室から水着姿の踊り子のショーを満喫できる仕組みとなっている。

ヤキ-の-あおい-こけ【ヤキの■い苔】（■薇■） シャンバラの森に生息する薬草。吸血薔薇の洗礼を受けたサクリ村の人たちを救うために、ママ・キプシュが調合した薬の主成分。足りないこの苔を求めて、エレナはバイク青年団を率いてシャンバラの森に向かう。

やこう-じゅう【夜行獣】（夢なりし） 辺境に棲息する妖獣。侮辱の表現として辺境では「夜行獣に食われちまえ」という一般的な使い方がされている。↓【貴族と同じ墓】

ヤクバイナ-の-は【ヤクバイナの葉】（夢なりし） アイ・リンがチキナーに手の甲の肉を喰い破られた時、Dが口にした薬草の名前。

やすらぎ-は-ふるさと-の-わがや-に-こそ【安らぎは■の我が■にこそ】（聖■■■） 辺境を旅するものの格言。要するに「ホーム・スイート・ホーム」である。ただしDはこのあとに続けて「ほんとうにそうかな?」と言っている。

やつ【奴】（■天使） ディームリ村北の外れの飛行体発着場でメイとDの前に現われた「奴」の体格はDよりもひとまわり大きく、頭一つ高い。密林のように無造作に伸びた髪の毛で袖口のすり切れた黒いコート（裏地は赤）にマントを着用。その起こす風はすべてを腐食させる魔風と化す。合成蛋白と人造筋肉でコンピュータに造られたそれは、メイン・コンピュータが五千年前に訪れた「神祖」の姿を、出来得る限りのデータで再構成したものだった。Dの気配に反応して眼醒める。

や-とう【野盗】（聖魔遁■） 読んで字のごとし、野を行くならず者集団。特に「帰らざる砂漠」に出没する「野盗」は総勢三十名、サイボーグ馬に乗って攻撃してくる。一味のリーダーは当年とって二百歳。他の面々も百五十歳だの百歳だのという剛の者ぞろいの老年不良集団である。そのせいか、この時代に六連発リボルバーを持っているものもいる。これにより「旅人」の仲間が十人近くやられ、金品と遺体を奪われた。ミシュガルトの石塔群で発見された「旅人のメモ」の記述より。のちに砂漠の野党と呼ばれる。

やま-しろ【山城】（堕天使） ヴラド・バラージュ卿の城から北へ五キロ、剣（ソード・マウンテン）山の中腹にある城。城の大門の前まで地上から三千段の階段が続いている。鉈や鎌を得物とする猿人に近い身体つきの山の民が、城の護衛役を務めている。平地の城のものよりは狭いが、設備は決して劣らないジャン・ドゥ＝カリオールの研究室がある。その研究室の半分は、壁に仕込まれたジェット・エンジンで、外へ打ち出される。地下にはバラージュ一族の墓所があり、石壁に空けた穴には、絢爛たる意匠を凝らした一族の柩が整然と納められている。三次元的にはおよそあり得ない形に歪んだ門を幾つも潜っていくと、ひときわ天井の高い墓所に出る。腰ほどの高さがある壇上に、『都』の宮殿でもそうは見かけぬ豪奢な柩が鎮座している。これがヴラド・バラージュの柩。

やま-しろ-の-ちか-いせき【山城の地下遺跡】（堕天使） Dが山の芋虫とともに落ち込んだ穴の底にあった遺跡。太古の遺跡でざっと三万年前のもの。ロープ、滑車、移動用クレーンなどがあり、まだ工場として生きている遺跡であった。人造生命体（ホムンクルス）が番犬として徘徊している。

やま-の-いもむし【山の芋虫】（堕天使） 山肌と同じ色の巨大な芋虫を思わせる機械。山の民の乗り物で武器にもなる。木立の間を一本も折ることなくゆるゆると進む。そのボディは隙間が狭いところで厚みを失い、器用に身をくねらせて通り抜け、重さを感じさせない動きで前進する。直径五メートル、全

長十メートル、重さ三トンを越える。胴の側面が裂けてめくれると、折り畳まれた大鎌が現われる。六、七メートルは下らない大鎌は木を刈り、岩を切るのに使用される。その大鎌で切断された木立の切断面は摩擦熱のために火を噴く。背中は皺だらけ。Dの攻撃を中枢部に受けて、木立の間の黒い裂け目に飛び込んだ。

やま-の-たみ【山の民】（■天使） 決して地上には下りず、深山幽谷を自らの世界として生きる一族。外界との接触を避け、血族結婚を繰り返したため、精神的肉体的な退化現象が生じ、猿人に近い身体つきになっている。人体を先史時代へ退化させたような肉体は、その草色の縄と同じ色と光沢を放つ胴当てや手甲脚絆に守られ、防具に塗った山獣の脂肪と山の砂が敵の攻撃を弾きとばす。武骨な鉈や鎌を手にしており、千手足のサイファンが胴を輪斬りにされた。草色の縄はDの刀でさえ切断不能。

やみ-すい-ぐん【闇水軍】（堕天使） ヴラド・バラージュ卿が持つ特殊水軍。ガリルをリーダーに、合成人間＝カエル男軍団で構成されている。

やみ-ずまい【闇住い】（双影の騎士） 貴族の休息所の一種。万にひとつ、身ひとつで陽光にさらされてしまう場合を考えて、貴族の道に数十キロ置きに設けられた緊急避難用の休息所がある。サイズは最低二名から、大は百人収容可能な大型までさまざま。闇住いと呼ばれるタイプは十人から二十人が収容できる中規模のもの。その多くは風化し、破棄され、あるいは人間の手で破壊されているが、生き残りの貴族や旅人に束の間の憩を提供することがある。その外観は灰色のドームだが、その内部は外観を裏切るほどの広さを誇る。中には大理石の階段や、自然の温泉を利用した貴族用の風呂などを有するものもある。出入口は長方形の穴で、拡大縮小は自由。出入口には内部の三次元見取り図がある。地下三階＝最下層の一室には瞑想室がある。縦横高さがいずれも五メートルの立方体の部屋。ドーム内部には自走路とエレベーターも設置されている。貴族以外の生命体が近づくと防御機構が働き、幻覚を発生させる。

やみ-の-いでんし【■の遺伝子】（風立ちて） 貴族を貴族たらしめていると想定される遺伝子。逆に人間には光の遺伝子があると想定されている。

ヤライ-の-みせ【ヤライの店】（ダーク） 辺境で幅広く商売を行なっている雑貨屋のチェーン店。

ヤン（死街譚） 治安官助手亡きあと、移動街区でハットン治安官とともに行動する。移動街区に墜落した略奪船を略奪しようとして、航行管制室でビートとともに黒焦げ死体となって発見された。死因は一種の熱線銃（ヒート・ガン）によるものと思われる。

ヤン・ウェル（死街譚） ハットン治安官がミン町長の命令で誘拐した移動街区住民。その後、疑似吸血鬼となって町長のもとを脱走し、住宅区で暴れまわる。町長の一人娘ラウラを襲ったのはこいつか？

ヤン・ウェンリー（銀英伝） あれ？ 誰か勘違いしたな。

ユ

ゆう-しかく-ビップ【有■■VIP】（堕天使） ディームリ村北の外れの飛行体発着場の移動車が重要施設立ち入りのための認識カードを要求した時に、挿入スリットに置かれたDの手からDをこう認定した。

ゆう-てき【幽的】（想秋■） 早い話が〝幽霊〟のこと。『北海魔行』でスーインが逆しまのトトを指して泥棒と言うべきところを〝泥的〟と言ったのに等しく、一種の鉄火場言葉で、ライルはDのことを、ヘルガ婆さんの死んだ「ご亭主の幽霊じゃねえだろうな」と言ったのである。

Y. Amanoa

ゆ-けつ【輸血】（ダーク） 辺境の旅行者にとって輸血のための装備は必須アイテム。妖物の牙と爪が負わせる傷は、速やかな止血と解毒、血液の注入が必要なため。幼児でも使用可能な間に合わせのキットから、大規模な隊商、輸送隊等が常備する人工血液合成ユニットまで、『都』や辺境の企業や民間の医師の手になる作品は、優に数百を越える。

ゆ-けつ-マシン【輸血マシン】（ダーク） 小型の血液合成タンクと輸血装置が一体化しているマシン。台の端にあるスイッチを押すと、一見複雑なメカはたちまち折りたたまれ、プラスチックのバッグ・サイズにコンパクト化する。セルゲイがゴルドーの輸血のために、『都』軍の補給施設からみつけてきた。

ゆそう-たい-の-しょくじ【輸送隊の食事】（ダーク） 輸送隊の食事はまず栄養と時間が優先。それなりの満腹感と、充分過ぎる栄養やカロリーを按配し、出

発時間をできるだけ短縮できれば、味や見てくれは二の次三の次。そういう食事に慣れていたればこそ、辺境には珍しいロザリアの手料理の味は格別だったはず。ゴルドーも早くテーブルに着けばよかったものを。

ユッタ・カミュ（ダーク） クラクフ村を治めて尊敬を集める村長。五十年配の女性。髪は白いが、小さな青い瞳にはあふれんばかりの知性と意志がみなぎっている。隣り村からの帰路、グレートヘン博士に襲われて成り代わられてしまう。女村長は「助役は先に帰した」と言うが、おそらくともに殺されたのだろう。

ユニコーン【一角獣】（風立ちて） 一般には調教不可能といわれる人工獣。憑依する妖精を使うと広大な土地を開墾するといわれるので、普通の馬より強力なパワーを持っているのか？

ユマ（双影の騎士） 濃藍色の長衣をまとい、ぞっとするような神秘的な藍色の糸のような長髪が頭頂から腰のあたりまで覆って、顔さえ見えない。その髪は大地を貫き、岩を刺し、鉄甲車にさえ突き立つ。地下の墓場でミア・シモンを襲ったゾアや死体を、その髪の針を使って貫き、倒す。また、その髪は、飛来したDの白木の針に巻きつき、止める。髪自体に自律神経を備えているのだ。黒馬に乗ってミアの前に現われて以来、ムマの秘密、すなわち貴族と人間の血を融合する実験について知識を得たものをすべて抹殺せよとの指令を受けて行動している。腰から上が機械仕掛けのように一八〇度回転する。影の戦場でDの白木の針を受け、左眼を失う。Dたちがユマのでき損ないたちと戦っている間に、ユマの製造工場にある神祖の作った装置で強化処置を受けた。なぜかその髪の毛は、でき損ないと同じ黒になっている。

ユマ-の-できそこない【ユマのでき損い】（双影の騎士） ユマの製造工場で「にせD」を襲った。髪の毛はユマ本体と異なり黒。二号はユマ本体よりも背が低く、太りすぎの気味がある。動作も緩慢。最終的に二十五人も出現した。

ゆめ-なりし【夢なりし】（原典） 正式名称「夢なりし“D”」。シリーズ第五長篇。一九八六［昭和六十一］年十二月二十五日発行。夢の中からDを招き寄せた名もなき村の少女シヴィルの残虐な運命を描く作品。テーマ及び内容的姉妹篇として、同じ作者による『夢幻舞踏会』あり。

ユメミグサ（夢なりし） 甘美な香りの毒霧を出す。

ヨ

ようえい-ろ【揺曳炉】（双影の騎士） 神祖直属のエネルギー開発センターが五千年をかけて開発したエネルギー炉。完成までに貴族十万人近くが衰弱死したという。外見は上端まで百メートル以上もある円筒だが、全体が三次元の幾何学を無視して微妙に歪んでおり、ある種の歪みと振動から無限運動エネルギーを取り出すことが可能。その凄惨さに神祖自らが開発記録の破棄を命じたという。三基の建造を数えるのみで、設置場所は極秘。そのひとつがセドク村地下の大洞窟の大施設だった。防御装置は厳重を極め、いかなる物質をも瞬間的に消滅させてしまう十億度の熱線が黄金のシャワーとなって降り注ぎ、触れるものをことごとく消滅させる不可視のシールド＝反力場（アンチ・フォース・フィールド）を備える。防御の最後の砦は血の封印。神祖の血を引くもののみが通過を許される障壁が突破されると、揺曳炉の全エネルギーが千分の一秒で炉の底部にはめ込まれていた黒い函（ブラック・ボックス）に集中し、炉自体がムマに空間移動する。炉が暴走して爆発すると半径一千キロの大穴が空いて、その影響で辺境の半分は人も妖物も棲めなくなってしまう。

ようかい-こ-カプセル【溶解粉カプセル】（双影の騎士） ミアがモロボシ・ダンの「カプセル怪獣」よろしく、いつも持ち歩いている必殺武器のひとつ。溶解粉を空中に散布し、カプセル上端のライターで着火すれば、半径十メートルの物質は岩といえども熔け果ててしまう。殺虫剤の要領でボタンを押すと二秒間だけ噴射する。その燃える光景は虹色の光球といえる。

ようこう-しょう【陽光症】（妖殺行） ダンピール特有の症状。昼の陽射しによって体内に蓄積された「疲労」は凄まじい眠気と倦怠感を生じさせる。これは突如、急激な脱力感と疲労の奔騰となって外にあらわれてくる。ハンターたるダンピールはこの陽光症を恐れるが、当人も知らぬ間に「疲労」は蓄積されるため、打つ手はない。回復には疲労を吸い取り、新しいエネルギーを与えてくれる大地に身体を埋めて深い眠りをとることが必要。

ようさつ-こう【妖殺行】（原典） 正式名称『D—妖殺行』。シリーズ第三長篇。一九八五［昭和六十］年七月三十一日発行。マイエルリンク男爵の逃避行とDの追跡劇ということで、ロード・ノベルの傾向

が強いシリーズ中でもその典型を示す作品。川尻善昭監督によって第二劇場映画版『バンパイアハンターD』の原作に選ばれた。

ようし-ばくだん【陽子爆弾】（風立ちて） ツェペシュ村廃墟を爆破するために治安官たちが使おうとした爆弾。外見は銀色の円筒。

ようじゅう-の-りよう【■獣の利用】（夢なりし） 貴族の放った妖獣、妖魔の中には、ごくまれだが人間が■いならしうる小型の竜や、妖精も存在した。果樹園に雨を招き、冬に炎を喚(よ)び、機械に代わる安価強力な労働力を提供している。

ようせい【妖精】（一般） 吸血鬼の遺伝子工学と生物工学で作られた物もある。貴族たちが作り出した人工獣のなかでは例外的に友好的性格のものが多いが、邪悪なものも存在する。これを邪妖精と呼ぶ。憑依能力を有するものは少ないが、うまく使えば調教不可能といわれる一角獣(ユニコーン)で広大な土地を開墾させたり、グリム鶏(ヘン)の産卵を増量させられるため、貧しい辺境の村では危険を犯しても飼育することが多い。

ようせい-の-しいく-こうじょう-あと【妖精の飼育工■■】（風立ちて） ツェペシュ村にある。まだ危険な妖精が生き残っているらしい。内部には妖精を飼っていた鋼鉄の檻が数台ある。

よう-ひ-し【羊皮紙】（堕天使） シャバラ渓谷の広場でDと対決した紅はこべが、石像を操るために使用したもの。得体の知れぬ模様が刻んである。振るとパンという音がして、丸められた皮は掛軸のように広がると、表面に走っている葉脈のような筋の一つが青く輝き、石像を操る。

ヨガリソウ（■■■） シャンバラの森に生息する一種の薬草。森の木立が噴出するオゾンと土壌の特殊成分のおかげで、いくら採集しても尽きることがない。その生薬成分は医療用として『都』からの商人の垂涎の的となる。ヨガリソウの場合は、名前からして医療用というよりは媚薬あるいは精力剤の類として用いられるものと思われる。他にも若返りの妙薬モドリグサ、またヒマンタイジやタケノビルなどの薬草があり、それぞれ痩身剤や長身剤としての薬効があるものと考えられるが、詳細は不明。

よ-げん【予言】（風立ちて） 「あなた、きっと笑いながらこの土地を出ていくことになるわ」――ツェペシュ村のリナ・スーインがDに言ったこの予言はみごとに的中した。

ヨナ（堕天■） ヴラド・バラージュ卿の老忠臣。男爵バイロンがクラウハウゼンを去ってから二十年、フラゼッタとともにずっとヴラドの居城に留まっていた。バイロンの目の前で首を落とされ、灰となってしまう。

ヨハン・カイザー（■■姫） 八歳になるサクリ村の少年■カイザーの一家からは、幼い頃のエレナがよく牛乳をもらっていた。薔薇姫の〝花の祝福〟を受け落命■

ヨハン-きょう【ヨハン■】（堕天使） 男爵バイロン暗殺のため、ヴラド・バラージュ卿に雇われた七人の刺客のひとり。黒い燕尾服にシルクハットの長身の老人。村でも町でも『都』でも見られないとの口上で〝街道の魔術師(トレイル・マジシャン)〟と呼ばれる手妻師■鑑賞料金は一ダント。赤い宝石をアレンジした蝶タイに、胸もとまで垂れたところではねあがっているドジョウ髭が目立つ。薄い唇からのぞく歯は肉食獣のように尖っている。複葉飛行体の模型を使った墜落事故で軽業師姉弟のヒュウをおびきよせ、誘拐する。心理攻撃や鏡を使った陽光攻撃でDを襲うが、Dの反撃で片目を失い撃退される。さらにOSBの地上掃討機構に撃墜されて瀕死の重傷を負い、Dの刃で頭部から顎まで切り下ろされ一度は死ぬものの、対貴族戦士製造メカのために三時間後には甦っていた。死亡時と同じ姿ながら、髭からつま先まですべて鋼鉄製。男爵バイロンの円筒が放った光速粒子ビームを額に受けても、傷ひとつつかない。直径五十メートルにわたって大地を陥没させるプラズマ光球を発射できるらしい。甦った姿は光る球に包まれ、内側には虹色の光の帯が渦巻いている。その一筋が伸びて敵を襲う。対象に命中すれば素粒子レベルまで分解し、その威力は壁面であれば直径十メートルの大穴を穿つ。「破壊者」にとりつかれたミスカ・ドレイクが放った水泡に包まれ発狂する。卿の吐く痰は地面に落ちると人工の自然光＝太陽光を放つ。しかし、Dがコントロールした施設の人工の自然の闇に封じられ、頭部を縦に、さらに首と胴を切断されて死亡した■ 吸血鬼の犠牲者だったタキに催眠術をかけてその記憶を封印し、さらに（なぜか）ヒキガエルを背負わせて街道のど真ん中に横たわらせ、D一行に拾わせた。

よび-どう【予■道】（北海魔行） 中央街道に対するサブルート。妖物の危険が少ない代わりに、自然の障害が多く、強盗■山賊の類も多い。ウーリンがクローネンベルクまでのコースに選んだ。

ユ—ヨ

よび-の-かたな【予■の刀】（双影の騎士） 刃渡り四十センチばかりの分厚い刀というが、Dがそんなものを持っているとはついぞ知らなかった。

ヨブッツ（堕天使） 男爵バイロン暗殺のため、ヴラド・バラージュ卿に雇われた七人の刺客のひとりで吸血鬼ハンター。つるつるの頭に僧服という僧形の老人。村でバイロンと対峙して一瞬で首を切断されたが死亡せず。シャバラ渓谷で紅はこべが「道具」の探索に失敗したとみるや、虚無の精神状態に落とす術で殺そうとした。広場で紅はこべとDが対決している間に、バイロンたちを襲った。以前は密教の最高位まであと一歩にまで迫った男。身を空にする法術は、貴族の探知能力でも見破れないが、Dが用意した鎖を使った音波探知機で発見され、喉元を突かれて死亡した。

よる-の-かいどう-にて【■の街道にて】（原典） 正式名称『D―夜の街道にて』。本書のための書き下ろし掌篇。すべてのD物語のプロローグとも言うべき旅の夜の一景を描く。

よる-の-こ【夜の子】（堕天使） 英語で言うところの「チルドレン・オブ・ザ・ナイト」。貴族が造った人工獣のひとつで、特に『堕天使』では、一種の夜啼鳥を指す。夜の闇に包まれて雰囲気たっぷりの「タロスの武器庫」の遠い周辺で、よく鳴いていた。

ラ

ラーナ（想秋譜） 百年以上前にシャーリイズ・ドアにあった貴族の愛娘——緑の髪に白いドレスの娘に仕えていた、青いドレスの侍女。彼女を象った〝世界〟は、初めは娘のためだけのものであったが、やがて人間たちの〝世界〟に組み込まれ、独自の意志をもって——いや心さえ具えて〝生き〟始めたのであった。秋の村シャーリイズ・ドアの惨劇は、このラーナの〝世界〟の暴走ゆえであった。

ライ（夜想曲） 十七歳の少年。二歳の時にアニス村で聴いた〝歌〟の歌い手を求めて、腕の立つ靴職人だった父の死後、再びアニスの村へと向かう。

ライア（戦鬼伝） シュラト村の少女。ショートカットの赤毛に、粗末なブラウスと羽毛のコート、長いスカート姿の平凡な田舎娘で、二十歳過ぎに見えるが、実は十七歳。十年以上前に母親を亡くし、酒浸りの父親を健気に看病している。半月ほど前、縁もゆかりもない三人の男に訪ねられ、そのまま居座られてしまうが、彼らはライアの中のもう一人のライア——貴族の血を引いた〝隠されっ子〟＝シニストロの女戦士ライアの家来たちであった。

らい-じゅう【雷獣】（堕天使） 西部辺境に棲息。六本足。兜に似た頭部。空中放電をして相手を感電死させる。防電■能は持たない。

ライル（想秋譜） シャーリイズ・ドアの村長マートクの一人息子。村の孤児セシルとは恋仲。

ラウラ（死街譚） 移動街区町長ミンの娘で十八歳。Dが移動街区に乗る三週間前、公園近くの空き家のひとつに現われた吸血鬼によって血を吸われ、犠牲者第一号となった。

ラグーン-の-くるま【ラグーンの車】（堕天使） クラウハウゼン村西の外れの〝聖域〟にある犠牲者の小屋にラグーンが乗りつけた甲虫のようなずんぐりした乗り物。エンジン音がすることから、使用しているのは内燃機関か？ 油圧ブレーキやガル・ウィング・ドアなどを装備。

ラグーン-の-ぶき【ラグーンの武器】（堕天使） ラグーンが発射する光る玉に触れると、火花とともに弾け、霧状の物質を散布する。黒雲に包まれたシェーン・グリード公爵に苦鳴を上げさせるほどの威力を持つ。

ラッシュ（双影の騎士） セドク村に住む赤髪の村人。村広場でDの挑発につられて襲いかかったフロストを助けるべく、堂々と名乗り出た男。本格的な剣の訓練を受けたらしいが、無謀にもDに戦いを挑み、次の瞬間には大地に倒されていてもおかしくないところを、奇跡的に右腕を脱臼させられただけで済んだ強運の持ち主。

ラッパ-じゅう【ラッパ■】（聖魔遍■） パイパー婆さんの武器。楽器のように先端が広がった銃。軽く引き金を引けば、六十グラム近い鉛の玉を発射する。弾丸として、一発弾や散弾を選択して装塡する。

ラマルク（北海■行） ① 辺境に生息する鋼のように堅い木の名。鋼木として珍重される。② 転じて、ものに動じないさま。びくともしないようす。用例↓「ラマルクの鋼木に打ち込んだごとく微動だにしない」

ラミーカ・リイ（D） 伯爵マグナス・リイの娘。ドリスをひまわりと形容すればこちらは夕顔に譬えるしかあるまい。貴族であることへの誇りは父親も上回るほどである。人間の娘が自分の母親になることが我慢ならず、父を裏切ってドリスを殺そうとする。貴族の自分よりも勝るダンピールであるDに魅かれ、父マグナス・リイがDに倒された後、崩れ落ちる城と運命を共にする。最期にDに放った「Dは、ドラキュラのDですの？」の問いに対するDの答えは、崩壊の白い塵に隠され、読者には（公然の）謎のままに終わった。しかし三七二七歳のラミーカにとっ

て、自分より三七一〇歳年下の母を持つことなぞどうしてできようか。その屈辱のほどは、最初のDアニメーションのデコピン・ラミーカがよく物語っている。『ロッタちゃん』じゃないんだから。ねえ。

ラルーク（ダーク）仮称「虐殺の村」の住人。ジャドとともに雑貨屋「ヤライの店」のカウンター手前に倒れていた。唯一の生き残りロザリアが二人の悲鳴を聞いている。

ラングィア（ダーク）ハルドゥ村の北の森に立つ巨木。直径十メートルはあろうかというその巨木のかたわらで、メフメット大公の本体と分身――本物の大公と巨体の「まがい大公」はようやく顔を合わせ

K. Sakashita

たが、休む間もなく大将軍ギャスケルからロカンボール卿を「紹介」されてしまう。

ランシルバ（D）辺境第十地区(セクター)にある小村。ドリスとダンの農場がある。

ランシルバ-の-もり【ランシルバの森】（D）真昼にも夜が存在すると言われる光の当たらぬ森。ミチシルベと称されるキノコの燐光のみが森に光を与える。

ランス（[illegible]遍歴）北の辺境で植物の品種改良に携わっている農民グループの一人。現在二十五歳。両親は洪水のためすでに亡い。水のない寒冷地で実をつける新種が完成し、五年前に「帰らざる砂漠」に実験にやって来たものの、ランス以外は砂嵐と野盗に襲われ、野盗のアジトに連行されたまま五年間、仲間として襲撃に参加させられていた。ぼろぼろのシャツとズボンを身に着け、濃い藪のような髪と髯に覆われた顔は貧相だが、身体はそれなりにたくましい。タエを取り合って、クレイと素手の殴り合いをして勝つほどの腕っ節だったが、動く森の川の中に潜む怪生物の触手に胸を貫かれ、ついに海を見ることなく死亡してしまう。

ランド・サイレーン（ダーク）深夜に甘哀しい歌声を出す妖魔。その姿を見たものはいない。歌声に誘われたものは、翌朝やつれ切った死人として発見されるが、いずれも至福の笑みを浮かべている。防御には何の工夫もない耳栓だけで充分だが、クラクフの村を目指す途上の不寝番で輸送隊のゴルドーとDが聞いたと思ったその歌声は、料理の腕前を披露した直後のロザリアだった。

リ

リイ-はくしゃく-の-きょじょう【リイ伯爵の居城】（D）上空三万六千キロの静止軌道に浮かぶ監視衛星と、木の実や蜘蛛などに身をやつしたおびただしいTV・アイなどで監視を怠らず、侵入者に対しての電子の守りにより警戒をしている。

リカルド（北海魔行）フローレンス村の若者。クレムやハンナと夜光草を摘んでいる時、貴族と化した修業者グレンと思い出サモンに遭遇、下僕となりスーインを襲う。食料を得たDの左手にナイフで背中から心臓を貫かれ、死亡。

リゲル（聖魔遍歴）心理攻撃の強制度の単位。貴族定量との言葉も付随することから、貴族間で使われていた単位だろうか。ちなみに「帰らざる砂漠」でDを襲った心理攻撃の強制度は五千リゲルで、並の都市なら千分の一秒以内に全住民が発狂する強度に達する。

リサーチ-バード【リサーチ鳥】（堕天使）黒マスクの男が使用した鳥（?）。ヴラド・バラージュ卿が所有しているテレビ・アイを内蔵した偵察用のヤマバトと同類か？

リデル（堕天使）メイとヒュウの軽業師姉弟が両親と住んでいた西部辺境の街。ちっちゃな田舎の街だが、その付近ではずいぶんと安全で静かな街。街はずれにはきれいな滝や草原もある。特にアイダ湖はその湖水の青さで知られるとか。この街を舞台にした作品に『星の時計のリデル』がある。

リトル・ドラゴン【小竜】（複合）①貴族が放った「夜の子供たち(チルドレン・オブ・ザ・ナイト)」のひとつ。電磁障壁を修理中に、農場へ忍び込み牛を一頭殺したが、ドリスによって仕留められる。リイ伯爵の城の近くだったことから、ドリスは伯爵に襲われてしまう。このシリーズのきっかけともいえるモンスター。②移動家屋で野営

K. Sakashita

中のナイト一家を襲い、ローリイの両親を殺した。

リナ・スーイン（風立ちて） ツェペシュ村の少女。気丈だがあどけなさを残した顔立ちに、肩までかかる黒髪と黒い瞳の十七歳。少女と女の間の年齢らしい。十年前の失踪事件の当事者の四人の少年少女のうちのひとり。父は農夫ザーコフ・ペラン。事件のあと、両親は心労で相次いで死亡し、村長スーインの養女となる。十七歳の誕生日に村長に無理やり犯され、それ以来の不倫の関係は、村中に広まっている。また事件のあと、知能が驚くほど高まった。辺境地区から年にひとり優秀な生徒を抜擢して『都』で学ばせる者を決める選抜試験で一二〇〇ポイント中一二〇〇ポイントの満点を取得し、最後の口頭試問に受かれば五日後には『都』へ向かう予定。『都』では数学を学ぶことになっているが、実は貴族の歴史を学びたがっている。村外れの丘にある貴族の城の廃墟でDに会って以来、何かとまとわりつき、その快活な言動でDを慌てさせるという奇蹟を起こした。闇の因子が覚醒したあとでは、■の中でもものが見え、何も食べなくても体細胞がエネルギーを生産するいわば不死身ともいえる身体となったが、血を求める性質を消し去ることはできなかった。審査会ではリナ・ペランとして、『都』から来た三人の審査官の前で誇らしげに貴族の歴史を学ぶと宣言した直後に溶け崩れた。

リバース-システム【再生システム】（堕天使） 貴族の柩に備えられた不可欠のメカニズム。「Re-Birth System」の頭文字を取って「RBS」とも言う。たとえ首が落とされ、心臓を白木の杭が貫いても、吸血鬼の生命力が残っていれば、再びDNAを再構成、活性化し、復活させる装置。単なる衰弱ごときは一夜のうちに治療し得る。

リバー-てい【リバー亭】（堕天使） クラウハウゼン村にあるホテルの名前。男爵バイロン・バラージュがDに薦めた旅籠。一般に辺境の村の宿は粗末なところが多く、村の規模が大きくなるほど商人用や一般の旅人用などに分かれているが、リバー亭は強いて言えば長者用宿。一階は酒場兼レストラン兼賭博場で、駐車場に並ぶのは最新型の蒸気馬車やガソリン・カー、通常の馬車はすべて六頭立て以上で黄金や貴金属を使っている最高級品ばかり。使う者もない馬つなぎもある。

リビング・デッド【生ける死者】（ダーク） 不死身に近いが意志のない生物を、貴族は使い減りしない重宝な兵士として使用していた。血の気を失った顔に死魚のようによどんだ濁り切った眼。ホネダキカラスを思わせる痩身に戦闘用のヘルメットをかぶり、戦闘服に身を固めている。倉庫においては、塩にして白い壺に保管する。ひと壺に五十人を収めている。生ける死者の兵士は「死人兵」とも呼ぶ。

リベット・ガン（風立ちて） 親指くらいの太さの銃口。高エネルギー火薬（パウダー）で、三百グラムの鉄鋲を秒速六五〇メートルで撃ち出す。

りゃくだつ-せん【■奪船】（死街譚） Dが乗船した移動街区と同タイプの飛行都市。空の海賊である。船の中で殺し合いが起こり、無人になったあともコンピューターにプログラムされた指令通りに他の飛行都市を襲っていた。

りゅうし-センサー【粒子センサー】（ダーク） 分子変化まで測定・探知可能なセンサー。シューマ男爵が使用していた。ジェルキン村に現われたロザリアの幻影を捉え、結果的に男爵を「呪われた保管庫」へと導くことになる。

りゅうし-ビーム・ライフル【粒子ビーム・ライフル】（夢なりし） シヴィルが眠る「村」の病院の看護人が携帯している。病人相手に何を大袈裟な（違うって）。

りゅうし-ほう【粒子砲】（堕天使） フィッシャー・ラグーンの私設保安隊が不死身のフシアを攻撃するのに用いた武器。真紅の光条と見えるビームを発射する。レーザー・ビームと異なり、接触部以外の広範囲も灼き尽くす。

りゅうし-■う【粒子砲】（ダーク） 死人兵が手にしていた武器。加速された素粒子の灼熱によって敵を倒す。誤って死人兵を解放してしまったセルゲイは、

危うくその犠牲となるところだった。

りゅう-しゃ【竜車】(夢なりし) 貴族の放った妖獣・妖魔の中で、人間が飼い慣らしたものの一つ。鞭によって御者台から馬のように操るが、従わない時は電子槍などで尻を刺す。竜は赤銅色の肌をしている。衰えると瘤状突起でその肌を埋める。シヴィルが眠る「村」ではトコフが操っていた。

リューベック-いいん【リューベック医院】(堕天使) クラウハウゼン村の繁華街のど真ん中にそびえるビルの一室にある病院。院長はミレーユ・リューベック。重傷を負ったタキが連れて行かれた医院。

りょうし【■師】(北■行) 貴族出現の噂が立つと、それだけで獲った魚が売れなくなるため、この時代、漁師たち及びその村は他の村に比べて神経過敏である。最北辺境フローレンスの村もまた同様だが、Dはそこで漁師になれとか村長になれとか、いつになく魅力的な勧誘を受ける。

りょうし-へんかん-きこう【■子変■■構】(堕天使) OSB古戦場の対貴族用戦士製造メカの内部にあった装置。山のようなメカニズムで構成されているため、その詳細はほとんど分からない(おそらく作者にも)。

りんどう-ちょうじゅう【■銅長銃】(ダーク) 「Dを出せ」と詰め寄ったシューマ男爵におびえたジェルキン村の村人たちが、手にした鍬や鋤や鎌などの他に、旧式の気圧銃や火薬ガンと一緒に持っていた(おそらく)古典的な銃器。

ル

ルーカス(フランツ)・マイヤー(風立ちて) 一クラスで五十人に満たないツェペシュ村「学校(スクール)」高等教育部の教師。十年前に失踪した当時十歳なので、現在は二十歳。独身の独り暮し。リナ・スーインとともに失踪し、無事に戻った三人の子供の一人。父の跡を継ぎ、ツェペシュ村「学校」の高等教育部の教師を務める。村人から白い目で見られるリナを陰日なたなく援助する。生徒たちから信頼される若い教師だが、戻ってから十年目にいきなり吸血鬼として目覚め、しかし失敗作として溶けていった。目覚めたあとファーン父娘を襲う。

ルーク・ダルトン(D) ランシルバ村の若き治安官。歳の頃三十にも満たないが、誠実で有能であることはドリスの信頼からもうかがえる。たぶん心優しき人でもあるのだろう、リイ伯爵が村人に手を出し始めると、暴徒と化した村人たちによって一発かまされた上に、牢にぶちこまれてしまう。

ルナ・プリナ【■光草】(双影の騎士) ■月の光を浴びて白い花を咲かせる草。セドク村の病院の中庭に咲いていた。

レ

レーザー・アンテナ(堕天使) フィッシャー・ラグーンの館の屋上に設置されている。受信料もちゃんと払ってほしい。

レーザー・バーナー(堕天使) 山賊が馬車の解体に使用した。六千度のレーザーを発射するが、男爵バイロンの馬車はびくともしなかった。

れい-ぎん-せい【麗銀星】(D) 二十歳前後の黒髪の美少年にして、しかも怪魔団のリーダー。鉄製のブーメラン「飛鳥剣」を武器とする。旅籠の宿帳に「チャーリー陳」と書くあたり、意外とお茶目な一面も。Dにプライドを傷つけられたところに、リイ伯爵からD退治の話を持ちかけられ、ダンを人質にDに決闘を申し込む。仲間全員をDに倒させたのち、Dにリイ伯爵を倒して一緒に貴族になろうと持ち掛けるが交渉決裂。左肘を切り落とされるが、空間歪曲の特殊能力を使い、Dの剣を自らの身体に受けた瞬間Dの身体へ返した。グレコと手を組み一度はDの心臓に白木の杭を刺し死亡させる。その後、蘇生したDとの決闘では空間歪曲能力を逆手に取られて死亡。

レイジング・ラン(■天使) 三つ首イノシシなどの平原生物が火などに追われて起こす大暴走。巻き込まれれば火竜さえ圧死を免れないが、すべては大地を割って出現した地虫(アースウォーム)の舌に呑み込まれた。

れい-めい【黎明】(ダーク) 毒学者グレートヘン博士の秘技。その毒を吸った貴族は身体が太陽と化し、全身から発する陽光で骨まで灼けてしまう。この技にかかればどんな大貴族でも悲鳴を上げて自ら死を望むが、過去に一度だけ神祖が耐え抜いたという。

レイラ(妖殺行) マーカス兄妹の長女にして末娘。大きな丸い瞳に、二十歳を過ぎたばかりの年齢には過剰な妖艶さを持つ女戦士。メカを自在に操る素質に恵まれ、真紅のつなぎに身を包んで単座式戦闘(バトル)カーを乗りこなす。男まさりを絵に描いたようなレイラだが、Dに二度命を救われ、うわ言に母の名を呼ぶ優しさがにじみ出す。四人の兄たちとは兄妹どんぶりの絆で結ばれているが、最後に生き残ったのはレイラただ一人だった。幸せだとしたら、いまは北の町の肉屋のおかみさんのはずである。

れきし【■■】(一般) 一九九九年人類滅亡以降の貴族史年表を大まかに鳥瞰すると次のようになる。

一九九九年　全面熱核戦争勃発。人類文明ほぼ壊

滅。放射能や宇宙線によるミュータント生物の脅威。

三〇〇〇年頃　一千年が経過するうちに、諸文明は中世レベルまで後退。この頃より吸血鬼が歴史の表舞台に登場。

五〇〇〇年頃　吸血鬼登場から二〇〇〇年で超科学と魔法による文明を確立。

七〇〇〇年頃　リィ家が発生。

OSB来襲。

八〇〇〇年頃　貴族、OSBに反撃を開始。退魔者グーリッツ出現。

八〇〇〇年末　吸血鬼文明の凋落顕著化と人類の大反抗開始。数十回の和平条約が結ばれては破られる。貴族は数を減らしていく。

九〇〇〇年頃　地球大改造計画始まる。対OSB戦争、双方互角の膠着状態が始まり、以後一千年にわたって拮抗する。

一万年頃　OSB、突然撤退する。

一二〇九〇年　西部辺境でDとドリスが出会う。

レッド・キャップ（**風立ちて**）　核戦争以前の古代文明期に存在していた愛蘭土の邪妖精ボーキーの一種。生まれつき持っている斧で旅人の首を切り落とし、その帽子を赤く染める。瀕死の人間に取り憑く憑依能力を有する。取り憑かれた人間の影は芋虫のような胴と針金のように細い手足になる。手にはマサカリを握っていて、この見えないマサカリで犠牲者を切り刻む。影が本体であるらしく、影への攻撃が有効。

レディ・アン-せいきし【レディ・アン聖騎士】（**ダーク**）　ギャスケル大将軍の呼んだ「招きびと」のひとりにして員数外。ゼノン公ローランドの娘。八百年近くを生きてきたが、外見は十歳に手が届くかどうかという金髪おさげ髪の少女。澄んだ碧眼、少女にしか似合わぬピンクのドレス、膝丈のスカートからこぼれる足にはグレイのハイソックスと白い靴。グレイの花籠にはいっぱいの血綴草——以上、初登場の描写より。血のみならず森羅万象のあらゆるエネルギーを吸収する血綴草、髪針と変ずる金髪など子供ながら侮れぬ技を駆使するが、すべてはDに運命の大恋愛をしたことで矛先を変える。Dの左手人面疽を邪魔者扱いし、黄色い花を突き刺してミイラにしてしまう。Dを父親の攻撃から守るために花で埋めて「花とりで」を築く。口から花を出して武器とする。その中の一種、うす桃色の花「静夜香」は父に滅ぼされたアンの母アリスが好きだった花。他の花同様、敵に根を張り、血を吸い取ってうす桃色を濃くする。ロカンボール卿完全復活のための「四人目の生命」に狙われながら囚われのロザリアを救い、ロカンボール卿の左眼に花を打ち込むが、直後に卿の斬撃を首筋に受け、Dに看取られながら滅びる。その正体は神に愛された技巧者の手による木づくりの人形だった（アドルカの司祭に刺された時、すでにその伏線あり!）。

Y. Amanoa

レベル-すりい【レベル3】（**複合**）　①放射能汚染障害度指数。移動家屋の原子炉加熱器破損により漏れた放射能にさらされたローリイ・ナイトは、言語中枢汚染・聴覚汚染ともにレベル3で、プルート八世によれば治癒は不可能。せめてもの慰めは、ツルギ医師の尽力により肌に放射能障害の痕跡が残らなかったことであろう。②ジャック・フィニイの短篇小説及び同篇収録の短篇集のタイトル。特に放射能汚染と関係があるわけではない。

REN（**双影の騎士**）　奇怪な矮人族が住む台地。彼らが「神」と呼び崇める地震体が存在した場所でもある。ケンツがその地震体を破壊した。

ロ

ロープ-じゅう【ロープ銃】（**ダーク**）　鉤付きのロープを発射する銃。銃にはウィンチがついており、銃が射手を引っ張り上げることが可能。これで輸送隊の三人組は激戦のギャスケル城に侵入することができた。

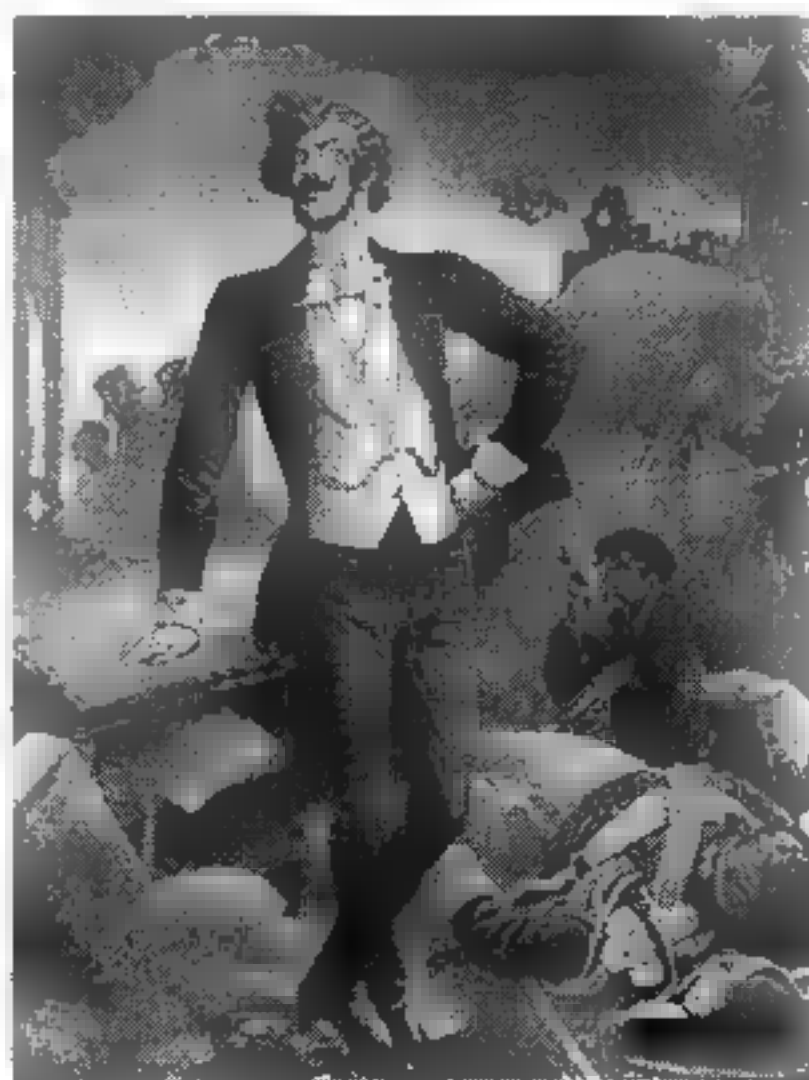
ローマン（**D**）　ランシルバ村の村長。一子グレコあり。年齢は六十歳ほど。子が子なら親も親という、いやらしい権力者の典型。

ローランサン-ふじん【ローランサン夫人】（**ダーク**）　ドレスにも負けぬ白い肌と典雅な美貌を持つ金髪の女貴族。三千年前、あまりの凶暴無残さから神祖の手で直々に裁判にかけられ、心臓を抉り出されて滅ぼされた過去を持つ。ためにギャスケル大将軍の「招きびと」の一員でありながら、将軍も畏怖す

る存在となる。白い長手袋に細い象牙のパイプでタバコをたしなむが、パイプから放たれた「死煙」に包まれた相手は微小な「恋針」の大群に刺され、体液を吸収されミイラと化す。自分で空を歩くのは『都』の夜会では田舎ものの行為とされていたが、夫人自身は好きだった。ギャスケル城の中庭でDの一刀を浴び灰色の塵と化すが、灰は風に舞いあがり銀色に輝く二つの薔薇となり、叩き落とされて地面にぶつかると、おびただしい銀の針と変じてDの両眼を襲った。左手の人面疽で毒は消えるものの、浄化炎でも視力回復までに三日かかるほどの痛手を負わせた。ゼノン公ローランドは「おばん」と評した。

ローランド-こうしゃく【ローランド公爵】（ダーク） ギャスケル大将軍に招かれた「招きびと」のひとり。ゼノン公ローランド。見てくれは三十四、五歳だが、実年齢は三千歳を越える。『都』の優雅さや「辺境」の精悍さとも縁遠い垢抜けなさが、たるみ加減の腹や大将軍との対応ぶりに表われている。ギャスケルに陽光下でも滅びぬ身体にされ、パンツ一丁で日光浴を楽しむ奇矯な性格。女遊びが過ぎて神祖のお気に入りまで手をつけ、その罰として貴族の資格を剥奪され、意識あるまま脳に細工されて二千年も柩の中に封じこめられた。レディ・アン聖騎士の父。アンを溺愛している。Gの反乱に際して『都』の兵としてギャスケルと戦って相打ちになった公爵が現在、なぜギャスケルの指揮下にいるのか、本人にもギャスケルにもわからない。戦闘に際しては装甲甲冑をまとい、浮遊分子やイオンの結合体の槍を使う。実体化すればデュープ鋼の五千倍の強度を持ち、全長は七メートルに及ぶ。その性質から出現と消失は思いのままで、数本を同時に出現させることも、標的の中から出現させることも可能。その妻アリスは十歳の姿で生き、ローランドに滅ぼされた。その妻の面影を求めるあまり、娘のレディ・アンを犯している。

ローリイ・ナイト（死街譚） 移動街区の住人だったが、両親の研究成果が町長の意見と折り合わず、一家三人で辺境の地に逃げ出したところを小竜（リトル・ドラゴン）に襲われ、両親を失う。一命は取り止めるが、言語中枢汚染・聴覚汚染ともにレベル3の放射能障害を負う。絶望のどん底から彼女を救ったのは、Dとドクター・ツルギであった。ラストでは、ツルギ医師とともに崩壊した街から降りた。

ロカンボール（一般） 十九世紀にフランスの作家ポンソン・デュ・トレイユが生み出した怪盗紳士。早い話がルパンやホームズの先駆者で、小説はもとより映画にラジオにTVにコミックに大活躍した。しかもロカンボールという名前は。あの「ニンニク」の全世界的に有名な品種のことでもあるんだな（そっちの方が一般的）。面白いですねえ。↓【怪盗ロカンボール】

ロカンボール（Rocambole）

ロカンボール-きょう【ロカンボール卿】（ダーク） 貴族の歴史が変わっても決して蘇らせてはならぬ大凶人にして凶神。生まれながらの大量殺人鬼。神祖の狂った落とし子との噂あり。貴族の誰もが貴族に生まれたことを悔いるとすら言われた究極のキャラクターだが、ギャスケル将軍は「招きびと」たちのあまりのふがいなさに、Dに対する最終刺客として招いてしまう。またの名をロード・ロカンボールとも。不恰好な骨董品のような鎧に身を固め、物騒な両刃の直刀長剣を振り回す「ぶった斬り剣法」の使い手だが、その中身は白いシャツにスカーフ、白い騎士用スラックスをまとった若くて端正な（しかし顔の青白い）伊達男。静かなる狂人といった体のロカンボールは「Dを確実に斃すには四人分の生命が要る」として、メフメット公、シューマ男爵、ギリス少将と次々に倒して自己の生命を増やし、悠然とDに挑む。自ら左手首を斬り飛ばしたDはギャスケルの城で卿と一対一の対決に臨むが、相手の技を瞬時に再現する「瞬間反射鏡の技」を持つ卿を斃したのは、D自身にも予測不能な（反射的な）一■であった。再現不能な攻撃を受けたロカンボールは、脳天から真っ向唐竹割りに斬り下ろされて滅びてしまう。

ロケット-ほう【ロケット砲】（夢なりし） シヴィルが眠る「村」の病院で看護人が携帯している。携帯タイプ。病人相手に何を大袈裟な（違うって）。

ロケット・ランチャーI（死街譚） 移動街区の治安官＝ベイリー・ハットンが愛用する銀色の闘争兵器。七本の銃身をそのまま一つに束ねたような七連装で、発射選択装置（セレクター）を一斉発射（フル・ショット）にセレクトしてトリガーボタンを押せば、七発のペンシルミサイルが標的を襲い、原型をとどめぬまでに爆砕する。大型獣どころ

Y. Amanoa

か小さなビルなら一撃で吹き飛ばすことも可能。

ロザリア（ダーク） 燃えるような赤毛の髪の長い十七、八の美少女。ヤライの店でバイトをしていた仮称「虐殺の村」の唯一の生き残り。貴族に咬まれた影響で、女子供のパンチ以上のスピードを発揮できる。辺境では滅多にお目にかかれない出来の料理を作り、素晴らしい歌い手でもある。貴族に連れ去られ、ギャスケル城の東の塔の最上階に幽閉される。拉致されて以降は眠ったままだが、ときおり二重存在として出現し、Dにさまざまなことを伝える。実は神祖の石像が持つ石版に記された刺客の最後のひとり。Dを油断させて斃すために、覚醒するまで本人にも自分の正体がわからなかった。神祖の残留意志から、自分たちがDに斃されるべく生まれたことを知っていた。全身から「気の塊」を噴出し、それが巨大な獣じみた形を取って相手を襲う「イドの怪物」攻撃を得意とするが、大将軍ギャスケルの攻撃さえ受け付けないはずの「怪物」もDの剣技はやすやすと斬り捨ててしまい、その傷はロザリア自身にも波及して倒されてしまう。

ロザリア-の-うた【ロザリアの歌】（ダーク） ロザリアが父親から教わった唯一の歌を指す。その歌声はランド・サイレーンと聞き違えるほどで、セルゲイは「料理以外にも武器を隠してたのか」と拍手を贈った。

何処かで光る風車（かざぐるま）
それに当たれば別の風
運ぶ香りは歌になり
春の里へと駆けつける
大事な人の耳にだけ

ロック【妖鳥】（D） 大巨獣（ジャイアント・ビヒモス）とならぶ伝説の大怪獣。

ロボット-けん【ロボット犬】（堕天使） フィッシャー・ラグーンの館で、立入禁止の場所を守っている。

ロング・ブーツ【[illegible]】（一般） Dの長靴は銀の拍車をつけた革製の長靴。

ワ

わいきょく-くうかん【歪曲空間】（死街譚） 貴族が自分のものと信ずる土地の周囲に設けたさまざまな防御・攻撃施設のひとつ。貴族同士の果てしない領土間抗争の産んだ狂気の遺物である。有限な空間に無限を包含し、侵入者すべてを吸収してしまう。麗銀星の能力を思い出しもするが、規模が違う規模が。

わいじん-ぞく【矮人族】（双影の騎士） RENと呼ばれる台地に住む一族。毒矢を使う。地震体を「神」と崇めているが、その「神」をケンツに粉砕されてしまう。

わたし-ぶね【渡し船】（堕天使） 大湿地帯の渡し船として使用される大型ホバークラフトのこと。速度は時速百キロ近く（もしくはそれ以上）出るらしい。人間なら百人、馬車なら二十五台は収容できる。運転席は船首にある。空気噴流を停止して底部から浮き（フロート）を出せば、ガソリン・エンジンによる微速航行もできる。高度一メートルと速度百二十キロが可能。

わたし-もり【渡し守】（堕天使） 大湿地帯の渡し船として使用される大型ホバークラフトのドライバーは白髪の老人でありました。

ワルド（ダーク） クラクフ村の住人。馬みたいに長い顔をした中年の男。村長のユッタ・カミュに指名されて、レディ・アンを殺せと騒ぐ村人たちの事情を説明する。

＊

＊☆◎■（風立ちて） サイラス・ファーンが護衛獣（ガード・ビースト）に発した攻撃命令。これでも言葉である。なんと発音するかは原作者のみぞ知る。

Y. Amanoa

特別書き下ろし

D―夜の街道にて

菊地秀行

闇よりも濃い木立ちの色も、いつの間にか同化していた。

夜鳴き鳥の声も、この街道には聞こえてこない。ガラスのように澄んだ虚無が張りつめているばかりだ。

「止まれ」

嗄れ声が喚いた。Dは馬を止めた。

「どうした？」

尋ねる声も、その美貌に等しく美しい。

月はない。しかし、近くにいれば、誰にもこの若者の美しさがわかるのだ。

「おかしな道じゃぞ。野宿の準備をせい」

「あと五キロで、依頼人の家だ」

サイボーグ馬は再び蹄にリズムを与えはじめた。

「わからんのか――この道は剣呑じゃ。予想もつかぬ何かが潜んでおる」

喚き散らす声を五分ほど聞いているうちに、前方に灯が見えた。木立ちの陰になっていたらしい。

Dの眼には、街道を横切る木製の遮断機と、小さな干し煉瓦造りの番小屋が見えていた。

遮断機の前まで行くと、小屋から長い顎鬚を膝まで垂らした老人が現われた。レーザー銃を肩付けしている。こんな人里離れた街道の番小屋にひとりでこもるには、最強の武器でも友にしなければ務まるまい。

「通れねえ」

と老人は言った。銃口はDの胸に狙いをつけている。
「何故だ?」
「ここから一キロ、この道は、夜の間だけ〝人食い街道〟に化ける。向うに行き着いたものはおらん」
「急ぐ」
Dは老人を見つめた。
「なんという眼だ。そんな眼でわしを見るな」
Dは鞍から身を乗り出し、遮断機に手をかけた。
老人の隣にもうひとつの影が並んだ。これも白髪の老婆であった。
けけけけけと歯のない口が笑った。声を聞くよりもその顔を見るだけで、狂っているのは一目瞭然だった。
「行っちまえ。街道に棲んでいる化物に、みいんな食われちまえ」
「おまえ――内部にお入り」
老人は銃を立てかけ、老婆をドアの方へ押しやったが、狂女の力は意外に強かった。
「誰も何処へも行けやしないんだ。みいんな化物に食われてしまう。おまえもそうなれ」
二つの影がもつれ合うようにして小屋の中に消える前に、Dは遮断機を押し上げ、前進を開始した。
老婆の笑い声が追ってきた。泣いているようだが、金切り声のせいかも知れない。
「息子が食われたんじゃ」
老人の叫び声が聞こえた。長いこと胸に収めていた秘密をさらけ出すのは、悲痛な行為なのかも知れない。
「やめろと言うたのに夜出かけ、自分で喉を掻き切って死んだ。みいんな、ここを抜ける前に、自殺してしまうんだ」
「わお」
と嗄れ声が洩らした。
二十分ほど進んだとき、背後から鉄蹄の轟きが追ってきた。
「ほう、死に物狂いの疾走じゃ。追われているか、生命懸けの用向きか」
ほどなく、髪ふり乱した男の乗った馬がかたわらを過ぎた。上衣が激しく風に鳴っていた。それを見送り、
「あの服装――賭博師じゃな」

と嗄れ声が言った。
「となると、じきに追手がやって来るだろうて」
声の予言は、三〇分ほどして現実になった。
五人の男たちとサイボーグ馬が、足を止めたばかりのDに追いつき、闇を蹴散らして取り囲んだのだ。
全員が腰や背の長剣に手をかけ、リーダーらしいひとりが、
「おまえが殺したのか？」
と訊いた。
Dの足下には、先刻の賭博師とサイボーグ馬とが黒々と転がっていた。
「いま、見つけたばかりだ。用があるのはそっちらしい」
手綱を引くDへ、
「動くな」
と全員が長剣を抜いたときには、リーダーが馬を下りて、死体に歩み寄った。
Dはすでに歩きはじめている。
「貴様！」
左右から二人が馬を寄せるや、風を切って一刀をふり下ろした。
ぼっ、と上がった血煙は墨のように見えた。
先にふり下ろした刃(やいば)はどうなったのか。思うさま斬り下ろした姿勢のまま、頭頂から顎まで裂かれて落馬する朋輩に、残る二人も突進しようとして、
「よせ！」
風刃(ふうじん)のようなリーダーの声であった。
「こいつは自殺だ。首を断ってる。持ち逃げした金もある——あんた、済まなかったな。去(い)ってくれ」
「け、けど、こいつは——」
と眼を剝く二人へ、
「おれたちの仕事は、金を取り戻すこった。それに、おまえらにどうこうできる相手かよ。あんな美しい男は——」

もう一〇メートルも向うを歩み去る黒衣の後ろ姿へ、
「貴族にだっていやしねえ」

「行き着いた奴はおらん、か」
とDの左手あたりで例の声がした。
「あいつら、途中で引き返せば、生き長らえるかも――ん？」
Dは左手を広げて後方へのばした。闇は厚く深い。
歩きながら訊いた。
「死んだか？」
「ああ。全員阿呆みたいに突っ立っておったが、いま、いきなり、手にした剣で首を掻き切ったわい。こら凄い街道じゃぞ」
左手を戻し、Dは無言で馬を進めた。何も見なかったと冷厳な眼差しが告げている。何も聞かなかったと、静かな美貌が言っている。
時間だけが過ぎていった。
「あと一〇分もすれば村じゃ」
嗄れ声にわずかな安堵が滲んだ。そのとき、
「Dよ」
と声がかかった。
Dの右側に、黒い人馬が並んでいた。
鍔広の旅人帽（トラベラーズ・ハット）を被り、背には長剣が優雅なカーブを描いている。
「Dよ――何処へ行く？　この街道の果ての村で、また貴族を殺（あや）めるのか？」
それは、Dの声であった。
「こう考えよ、生ける死人（しびと）にも、生きる権利はあるのだと。Dよ、人間が他の生きものの肉を食らって生きるように、貴族は血をすすって偽りの生を生きるのだ。これは正当な生き方ではないのか？」
Dは無言で馬にゆられている。月も星も見えず、闇はなお深い。

声はつづけた。
「なのに、おまえは彼らを滅ぼした。それは罪だぞ、Dよ。貴族も生きたかったであろう。滅ぼされた貴族には子もいよう、妻もいよう。彼らは泣くだろう。自分が単なる殺戮者だとは思わぬか、Dよ。ある生命体から金銭だけを受け取り、別の生命体を根こそぎ殺戮せんとする下劣なる殺し屋だと。それがおまえだ、Dよ」
その声には、聞く者が耳を覆わずにはいられぬ真摯で痛切な響きがあった。
Dの右手が柄にかかる。
「そうだ。楽になれ、Dよ。すべての罪から己れ自身を解放するには、死より他、道はない」
闇の中に刀身がきらめいた。
「――斬れ！」
鍔鳴りの音が鳴った。
二組の影は黙然と歩きつづける。
「おれすら斬るとは」
と影が言った。愉しげに。
「自分の所業にも耐え切れる。つくづく因果な奴――化物とは、おまえのことだ」
そして、人影と馬とは崩れ去った。路上に何も残さず消え去った光景を、Dはふり向きもせず歩きつづけた。
いま斬り捨てたのは、街道に巣食う妖物か、或いは夜そのものが持つ魔性か。
「化物か――成程のお」
嗄れ声に、ひとこと、
「悔いるなら、せぬことだ」
「全くじゃ。――おっ」
闇の彼方に、幾つもの灯がまたたいている。
Dに救いを求めるささやかな生命の証しだった。

ISBN4-257-03546-3
C0093 ¥1143E
定価：本体1143円＋税